gdgd東方鏡想曲

らっふぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｇｄｇｄ東方鏡想曲

【Ｎコード】
Ｎ１７７４Ｌ

【作者名】
らっふぃ

【あらすじ】
「男女間で友情は成立しないってアレ。アレって嘘だよな？」

「何？唐突に」

「いや、俺達の関係考えてみるとそう思ってな。恋愛感情は無いけど友人だろ？一応」

「一応、ね。まあ、確かに恋愛感情は無いわね」

「だろ?だからほら、な?あれって間違いなんじゃね?と思った次第だ」

「同時に友情も存在しない訳だけど」

「友情成立してなかった?!前言撤回、あれ本当だったんだな!」

こんな感じのお話。

オリジナルキャラ、設定の説明という名の言い訳（ネタバレ注意？）※6／1追加

6／1　八意　永琳　追加。

一番下辺りにマジもののネタバレ追加。
後悔するので見ないように。

オリジナルキャラ、設定の説明という名の言い訳（ネタバレ注意？）※6／1追記

・真経津　九十九　《まふつの　つくも》

キャラクターテーマは『堂々巡り』

本作の主人公。口が悪い。鏡の妖怪、あるいは神様。

一言で表すと『変態』

その変態性ゆえに過去イロエロとやらかし、変態と有名。
その変態っぷりは一時期見られるだけで逃げ出された程。

一番酷い時期はもう百年以上前らしく、覚えてるどころか生きている人間すらいないのでもう安心、とはならない。
だって妖怪は生きてるんだもの。しかも皆さん覚えていらっしゃる。
何やったかのヒントは　・ルパンダイブ
・ノンケ
・妖怪って美人さん多いよね

の三つ。ヒントというか答えじゃねーか。そしてノンケだが……という疑惑も。
以外と戦闘力は高いがそれが変態行為にしか生かされていない。残念。
見た目は某黒い神の兄。箱な方でも人外の方でもどちらもＯＫ。
というかイメージ的にはその二つのルックスと性格を足して割らなかった奴と認識してくれれば。
つまりは残念なイケメン。

動物マスターとして、その筋（動物達。八雲さんちの狐、猫含む）
では有名。
そのなでなでテクニック（通称なでテク。くそみそじゃないよ）は
強烈で、「マタタビより気持ちぃいッ」とは猫さん談。
その恐ろしさは初対面のうささんすら堕とす程。

ちなみに動物を撫でたりする時は一切邪念がない。えちぃ事なんて
していない。……嘘じゃないよ、ほんとだよ？

他人と他人のコミュニケーションを円滑に進ませる事の天才。故意
か天然なのかは解らないが、とにかく他人同士に、謎の連帯感を持
たせて距離を縮める。他人に不要な警戒心を持たれやすい紫が、良
く九十九を連れていた原因の一つ。

ちなみに好みのタイプは「女で美人なら下はさんから上はどこまで
も」

最近記憶が飛んだりする。主に再生が追いつかないほど連続で殺さ
れた時に。
それに比例して、力も弱くなってきた。あと若干まともになってき
た。

・ちょっとした裏設定
本人は気付いていないが、テンパると使い物にならない事でもそこ
そこ有名。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・白峰　顕冴　《しらみね　けさ》

キャラクターテーマは『空回り』

本作のオリキャラ2。割と普通。
一言で表すと『良い子』

外見年齢は二十代前半。
精神年齢は十代。計算力は幼稚園。

美人さん。「九十九が襲っていないのが奇跡」とはけーね先生談。
「どっかで見た顔…の面影が」とは九十九談。
髪は長い。そのまま延ばすと地面に余裕でつく。ので、普段は加工している。整えるのではなく、加工。ここ重要。
ちなみに髪の色は『色が抜け落ちた』白。でもサラサラ。

年頃な様で割と下の方に興味はある。ちなみにけーね先生が大好き。
人や妖怪をあだ名で呼ぶ事が多い。（慧音→けーね【先生】、幽香→ゆうかりん）など。

また、大変素直。人に言われた事は、あからさまなもの以外は基本的に聞く。なお、九十九の言う事は、あからさまなものでも、いかにアレな事でも迷わず聞く。従順すぎるわ。

炊事洗濯など家事は一通りできる。大体九十九のせい。

口調は九十九っぽく一人称は『俺』。だが心の中では自分。最近になって女言葉を使い始め、一人称も『私』になってきた。

九十九の子供。あ、これは皆には内緒な？

実は設定が『1、俺だけど女。2、現代出身3、能力持ち』とだけ考えられてて他は未定だった。
名前も投稿のために書いてる途中で考えられた（三分くらいで）という可愛そうな娘。

能力は『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』。
本編でやたら長く解り難く説明されたが、要するに某涼宮さんみたいな『思い込み、願望を実現させる』と考えてくれればＯＫ。
うん、だいたいあってる。

そして能力のせいでアホの子に。
知識はあるが計算（演算）が出来ない。
数学の公式（解き方）は解るが、実際に計算が出来ない。
解りやすくいうと『底辺2？、高さ3？の三角形の面積を求めよ』の問題に対し、

「えっと、三角形の面積は底辺×高さ÷2だから……2×3で……7…？で、それを2で割って……？2で割るってなんだっけ？半分？じゃあ4．5？」

という答えを出すくらいアホの子。

最近変態じみてきた。仕方ないといえば仕方ない。

・ちょっとした裏設定
頭の中がアレなので某妖怪にドン引きされている。

以下九十九との会話例

「なあ顕牙、ちょっと脱いでくれ」

「…………え？」

「まあ、そうだろうな。いや今時の若い娘って、どういう体付きしてるのか気になって」

「何その理由！？……まあ、良いけど…」

「良いんだ？！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・八神　鑑枷《やがみ　きょうか》

本作のオリキャラその３。女。

九十九の家の『開かずの間』に引き籠もっている人物。もうかれこれ五百年は外に出ていないとか。

引き籠もっている理由としては色々あるっぽいが、八割方が「人間と会いたくない」からという人間嫌い。

ちなみに物を食べなくても生きていける。排泄もない。『～はトイレなんかしない』を地でいく人（？）。

『開かずの間』というのも九十九独特の感性による呼び名で、一般的な呼称だと『地下室』または『隠し部屋』か。誰も開けないという意味では『開かずの間』なのだが。

新陳代謝が無い筈なのに髪だけは伸びる。垢は出ないのに伸びる。食わないのに伸びる。

しかも切らない。１００年以上伸ばしっぱなしなので凄い長さに。凄まじいの一言。どこからどこまでが前髪か判別不能。

前述の通り、新陳代謝は髪が伸びる事以外は起きないので、汚くはない。というか汚れない。

『開かずの間』はちょっと特殊な空間で、埃が全く無い。むしろ空気がない。

上記の通り変な生態なので、女だけど女の敵とよく言われる。

目を閉じている事や、仮面を着けている事が多い。理由は「他人と目を合わせたく無い」から。どんだけ人嫌いだ。お気に入りの仮面は般若の面。これは十中八九悪ふざけ。所謂ネタ。

道徳にうるさい。人間嫌いのくせに道徳を大切にする。価値観が古い。説教好き。慧音先生や閻魔様と話が合いそう。

口調は丁寧。だが他人を呼ぶ時は『貴様』。まあ、貴様も昔は丁寧な言葉だった様だが……

ただし九十九だけは名前で呼ぶ。他意は無いらしい。これは多分嘘だと思う。

名前は人の感情や性格など、人の事を指す『鑑』に、道徳という『

枷』に縛られているという意味。ちなみに造語で九十九命名。

仮面はまだ本編では着用していません。目を瞑った状態です。九十九と二人っきりの時のみ目を開けています。

・ちょっとした裏設定

「睨む」と九十九は表現しているが、実際は目を閉じていて睨んでなどいない場合がまれによくある。

以下九十九との会話例

「ところで九十九？あなた、今知り合いは何人くらいで？」

「傷口に塩塗る気か！？俺の交友関係知ってるだろ？！」

「私が九十九にそんな事する訳ありません。ありえません。私は、『知り合い』の数を聞いたのです。友人か否かは聞いておりません」

「…………それって、間接的にまぶしてねぇ？」

「………そうでしょうか？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・本作での八意永琳の設定

「オモイカネ」という名の神様。のモデルになった人物という設定。非公式設定。当然公式様は全然違います。あしからず。

本来（現実に存在する）は漢字で表すと思金神・常世思金神、思兼神、思金神・常世思金神・思兼神・八意思兼神・八意思金神など。

（引用・ｗｉｋｉ）

「オモイカネ」には「おもひ」は思慮、「かね」は兼ね備えるという意味で、多くの人々が持つ思慮を一人（正確には「一柱」、神は「柱」で数える）で兼ね備える神の意だとかなんとか。（引用・ｗｉｋｉ）

神様のいる高天原とよばれる所の知恵袋的存在で、起こった過去のあれやこれやを、その知識を存分に生かし、解決したという。

最も有名なエピソードは岩戸隠れの際、天の安原に集まった八百万の神にアマテラスを岩戸の外に出すための知恵を授けたこと。（引用・ｗｉｋｉ）

その時の話は八百万の神が天の安河の川原に集まり、どうすればいいか相談をした。オモイカネの案により、さまざまな儀式を行った。常世の長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かせた。天の安河の川上にある堅い岩を取り、鉱山の鉄を採り、鍛冶師のアマツマラを探し、イシコリドメに命じて八咫鏡（やたのかがみ）を作らせた。タマノオヤに命じて、八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠（八尺瓊勾玉・やさかにのまがたま）を作らせた、アメノコヤネとフトダマを呼び、雄鹿の肩の骨を抜き取り、ははかの木を取って占い（太占）をさせた。賢木（さかき）を根ごと掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八咫鏡と布帛をかけ、フトダマが御幣として奉げ持った。アメノコヤネが祝詞（のりと）を唱え、アメノタヂカラオが岩戸

の脇に隠れて立った。アメノウズメが岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りをして、胸をさらけ出し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。すると、高天原が鳴り轟くように八百万の神が一斉に笑った。

岩戸神楽ノ起顕（三代豊国）

この声を聴いたアマテラスは何事だろうと天岩戸の扉を少し開け、「自分が岩戸に篭って闇になっているというのに、なぜ、アメノウズメは楽しそうに舞い、八百万の神は笑っているのか」と問うた。アメノウズメが、「貴方様より貴い神が表れたので、それを喜んでいるのです」というと、アメノコヤネとフトダマがアマテラスの前に鏡を差し出した。鏡に写る自分の姿がその貴い神だと思ったアマテラスが、その姿をもっとよくみようと岩戸をさらに開けたとき、隠れていたアメノタヂカラオがその手を取って岩戸の外へ引きずり出した。すぐにフトダマが注連縄を岩戸の入口に張り、「もうこれより中に入らないで下さい」といった。こうしてアマテラスが岩戸の外に出てくると、高天原も葦原中国も明るくなった。（引用・wiki）とかなんとか。

で、その時に作られた八咫鏡（やたのかがみ）が………という話。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・原作キャラと九十九の関係

登場している原作のキャラクターと九十九の現在の関係、または今現在、原作キャラクターが九十九に抱いている印象、感情をば。

・上白沢　慧音

九十九との関係　　娘の先生。教え子の父親。友人。
九十九への印象、感情　　好意。多分初恋。
九十九からの印象、感情　　とても良い人。はじめてのともだち。

補足
幼少の頃、本人は憶えていないが九十九との面識あり。もしかしたら好意というのは刷り込みの可能性もある。

以下九十九との会話例

「なあ慧音。お前なんでまだ俺ん家に居んの？」

「それは……心配だからな。色々と」

「ああ……安心しろ、顕冴は立派に育っています」

「そういう意味じゃ無いんだが……いや顕冴の事も心配だが」

「いやぁ、すっかり立派になっちゃって……主に胸が」

「聞け！それと今心配な事が一つ増えた！」

・八雲　紫

九十九との関係　　腐れ縁。一応友人。
九十九への印象、感情　　変態。厄介だが便利。
九十九からの印象、感情　　胡散臭い。だがそこがいい。

補足
少し前まで基本的に九十九と行動を共にしていた。詳しい理由は不明。

以下九十九との会話例

「男女間で友情は成立しないってアレ。アレって嘘だよな？」

「何？唐突に」

「いや、俺達の関係考えてみるとそう思ってな。恋愛感情は無いけど友人だろ？一応」

「一応、ね。まあ、確かに恋愛感情は無いわね」

「だろ？だからほら、な？あれって間違いなんじゃね？と思った次第だ」

「同時に友情も存在しない訳だけど」

「友情成立してなかった？！前言撤回、あれ本当だったんだな！」

・伊吹　萃香

九十九との関係　　知り合い。
九十九への印象、感情　　変態。何かもうどうでもいい。
九十九からの印象、感情　　ちっこい。だがそこがいい。

補足
萃香は何か色々諦めた模様。そして染まってきた。

以下九十九との会話例

「よし萃香、相撲しよう相撲！」

「……腕相撲じゃなくて？」

「当たり前だろ？！萃香と本気で腕相撲したら勝てる訳無いからな！」

「だめだこいつ。……まあ、良いさ」

「うお！いきなり！？…って、その関節はそっちには曲がらな……ッ！？」

「えい」

ぼきり、と。

何かが折れる音が、俺の身体から響いた。主に下半身の辺り。

・射命丸　文

九十九との関係　　敵対。
九十九への印象、感情　　変態。死ねばいいのに。むしろ殺す。
九十九からの印象、感情　　どうしてこうなった。だがそれがいい。

補足
九十九には憎悪っぽい感情が。ちなみに『ぽい』というのは嫌悪の感情も含む為。今でこそこんな関係だが、昔はそうでなかったらしい。

以下九十九との会話例

九十九と遭遇すると会話無く戦闘に入る為、会話例は無し。

・博麗　霊夢

九十九との関係　　腐れ縁。（対外的に見ればある意味幼なじみ）
九十九への印象、感情　　変態。歩く面倒事。こっちくんな。
九十九からの印象、感情　　似てるなぁ先代に。嫌な所まで。だがそこがいい（ｒｙ

補足

霊夢が幼少の頃に九十九と遭遇。その際一度殺害。それからズルズルと先代の博麗の巫女通して関係が。

『主に空を飛ぶ程度の能力』を持つ霊夢と『腐れ縁』だという事、九十九は殺せる事等の詳細な事情は不明。

以下九十九との会話例

「おじゃましま？？？」

「死ね」

「うおげらっ！？な、何だいきなり！？またか！」

「ちっ、外したわ。……で、今日は何？何も無いとか言ったら殺すわよ？」

「いや、参拝事情はどんな感じかな？と。儲かりまっか？」

「……殺すわよ？」

・風見　幽香

九十九との関係　　知り合い。

九十九への印象、感情　　変態。中々良い暇つぶし。

九十九からの印象、感情　　俺のアレが潰される。だがそ（ｒｙ

補足

昔からの知り合い。あくまで知人程度で関わりはあまり無かった。
昔幽香のストレス発散に、周りに被害が及ばないように紫によって
サンドバックとして九十九が送られた事がある。

以下九十九との会話例

会話らしい会話が特に無い為ありません」

「何を言っているのかしら?」

「いえ、ただの現実逃避です」

「いけないわねぇ。現実とは闘わなきゃ」

「今まさに幽香さん（現実）との戦いの幕が上がろうとしている訳
ですが」

「まあ、一方的な事になりそうね」

「あまりにも大きな壁!やはり現実は超えられないのか?!」

・八意　永琳

九十九との関係　　設計者と作品…のようなもの
九十九への印象、感情　　私の為に死ね!

九十九からの印象、感情　　ちょっと待ってそんなの死んじゃ…！

補足
昔に永琳が設計した鏡の九十九神が九十九…らしい。
永琳本人は九十九の姿を見た事がないらしいが…。

以下九十九との会話例

「……」

「……」

「……何か、言う事は？」

「……や、優しくしてね…？」

「ごめんなさい。無理☆」

「そんなこったろうとは思って……！」

アッー！

以下ガチネタバレ。そういうのが嫌いな方はプラウザバック。

後悔したいんですね？ではもっとお下がり下さい。

・「むかしばなし」にでてくる人物について。
男は当然というかなんというか、真経津九十九。少女は上白沢慧音。

・金髪女性はラスボス。

Q. なんか今迄九十九の言ってた事と今言ってる事違くね？
A. 記憶障害だから仕方無い。

Q. 番外編の過去と今迄の九十九の記憶に差異が…
A. 記憶障害だから仕方無い。

Q. ルートによっては日付に矛盾があるんだけど…
A. その1日にラスボスが暗躍しているかしていないか。

Q. ラスボスってどの程度のラスボス？
A. 吐き気を催す邪悪。またはだいたいこいつのせい。

Q. もしかしなくても記憶障害の人何人もいるよね？
A. ラスボスと一部の人以外全員ね！

オリジナルキャラ、設定の説明という名の言い訳（ネタバレ注意？）※6／1追記

書いていない原作キャラとの関係は、また追々と随時更新致します。

えいぷりるふーる（前書き）

予定を変更しまして、今回はまたまた番外編をお送りします。

今回は閲覧注意です。色々な意味で。

お読みになるのなら、携帯は非推奨です。

えいぷりるふーる

【どうして】娘がファザコンすぎてヤバい【こうなった】（５８５）

１　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
スレタイ通りマジやばい。おまいらたすけれ

２　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
２げっと

３　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
クソスレたてんなｋｓ

４　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
で、娘のスペックは？

５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
二十歳過ぎ、親馬鹿抜きで美人
それとおっぱい

６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜５
ｋｗｓｋ

７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜５
ｋｗｓｋ

８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜７
それでいいのかｗ

＜＜５
ｋｗｓｋ。特に後者

９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
はいはい、釣り釣り

１０　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
十人が十人とも美人だと答えるだろうレベル
バストは確か１００は超えてたはず
カップは詳しくないからわからん

１１　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜１０
なん…だと…

１２　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
釣りだったか…

１３　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
画像みる？顔は流石にうつってないけど

１４　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
うｐ！うｐ！

１５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｔｅａｃｈｅｒ
うｐ！うｐ！

１６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
うｐ！うｐ！

１７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おまいらそんなに胸が好きかｗｗｗ

ｔｔｐ／／ｉｍｇｎ．＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊．ｊｐｇ

１８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜１７
なん…だと…

１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
＜＜１７
１の娘は化け物か…

２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
＜＜１７
なんと美味そうなめろん…

２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ
ふぅ…

＜＜１
娘さんを僕に下さい！

２２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜１７
この胸のサイズでこの腰の細さ…化け物か
＜＜９
可及的速やかに１に謝るべき
＜＜２１
おいｗｗｗ

＜＜１
娘さんを僕に下さい！

２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜１
正直スマンかった
娘さんの胸を僕に下さい！

２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜２３
貧乳乙

＜＜１
娘さんを僕に下さい！

２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｅｄｉｃｉｎｅ
１の娘の人気に嫉妬

＜＜１
娘さんの体を僕に貸して下さい！

２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
＜＜１
娘さんを僕に食べさせて下さい！

２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜２５

＜＜２６
え？

２８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜２５
＜＜２６
え？

２９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜２５
＜＜２６
え？

３０　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜２７ｌ２９
むしろおまいらがえ？

ここをどこだと思ってやがる。カニバリズムなんぞ当たり前

３１　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
それと俺のＩＤ設定したの誰だ

３２　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜３０
もこたんｉｎしたお！

３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜３０
もこたんｉｎしたお！

３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜３０
もこたんｉｎしたお！

３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
お前らそこを動くな

３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ
今更だけどＩＤで大体特定可能な件
意味あんのコレ？

３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
気にしたら負けじゃね？
そもそも限られた奴にしか端末支給されてないし

３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
気にしたら負けよ
そもそも特定の対象にしか端末渡していないし

３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
＜＜３７＜＜３８
息ぴったりですね＾＾

４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
どーでもいいけど娘の話しようぜ

４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
そもそもファザコンってどの程度のレベルで？

４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
そもそも娘さんって本当に人間？

４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
そもそも＜＜１って父なの？カーチャンなの？

４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜４１
俺の風呂を覗くどころか入ってこようとするレベル
＜＜４２
多分人間じゃない。
＜＜４３
一応父。ただ、娘って言っても養子。拾ったからな

４５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜４４
なにそれうらやましい。いろんな意味で

４６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜４４
キリキリ吐け。特に拾ったってくだり

４７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜１
どうして娘さんがそうなったのか心当たりは？
普段はどのように娘さんと接している？
ファザコンを治す為に何か実行したことは？
手は出していないだろうな

４８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜４７
いきなりどうした

４９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜４８
ひんと＝ＩＤ
職業柄許せないんじゃね？

５０　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
把握

５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
今北産業

５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜５１
５０レスぐらい戻ってみようぜ…

５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
＜＜５２
ＩＤだから仕方無い。
＜＜５１
１の美人な娘を
如何にして嫁に貰うか
皆で検討中↑今ここ

５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜５３
大体あってるｗ
＜＜５１は＜＜５３を見習おうか

＜＜５１
１の美人な娘を
如何にして嫁に貰うか

考える前にとりあえず雑談しようＺＥ☆

のほうが正しい希ガス

５５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
つーかそろそろ打開策を打ち出してくんねぇですか

５６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜５５
＜＜４７はスルーですかそうですか

５７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
えっとだな、今迄してきた事といえば……放置？

５８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ
＜＜５７
うわぁ…

５９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
＜＜５７
うわぁ…

６０　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜５７

放置プレイですね、わかります

６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜５７
なんでこんなのに懐いたんだ娘…

６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜６１
お前が言うな

６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜６２
ん？どゆこと？ｋｗｓｋ

６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜６３
つ文々。新聞

６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
お前が出すな

６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
お前が出すな

６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜６４
ｏｋ、把握。

あと屋上な

６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
屋上ってどこだよ…天界？

６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
それはない

７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
＜＜６８
それとＩＤ設定安直すぎです

７１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
え？じゃあＥｃｓｔａｓｙのがよかった？

７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜７１
おい、どうしてくれる。俺の息子が成長期になったぞ

いいぞ、もっとやれ

７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜７２
うわぁ…

７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
＜＜７２
校舎裏

７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
＜＜７２
女子トイレ

７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜７４
職員室じゃなくて？

＜＜７２
博麗神社でおｋ？

７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
＜＜７２

永遠亭まで来られたし

７８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
＜＜７２
図書館

７９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ
おい、なんか発情してるやつらいるぞｗｗｗ

＜＜７２
＜＜７７と同じく

８０　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｅｄｉｃｉｎｅ
＜＜７７
ＩＤヒデェｗｗｗ

＜＜７２
＜＜７７＜＜７９は任せた

８１　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
Ｓｕｐｐｏｓｉｔｏｒｙよりはましです…

８２　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜８０
ＩＤ設定したの私だｗｗｗ

……ん？誰だ、今いいとこなのｎうわなにするやめ

８３　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

＜＜８２

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔーーーっ！

＜＜８２は犠牲になったのだ……

つーか任せたってそう言う意味かｗ実行はええｗｗｗ

８４　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ

え？なに？どういうこと？

８５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ

＜＜８４

ヒント　発情

　　ＩＤ

　　百合の花

あとはもうわかるな？

８６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

最後のだけでいい希ガス

８７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

ＧＪだな＜＜８５

８８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
ねえ、これ通報とかないの？

８９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
というより運営って誰？いるの？

９０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜８９
＜＜１が運営
正確には＜＜１も運営。他にも何人か管理者権限持ってる

９１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
最悪だ…

９２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
道理でならずものばかりな訳だ…

９３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
失礼な

９４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｕｄｏｎ
＜＜９０
他の管理者権限で＜＜１アク禁できないの？

９５　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
３名以上の管理者が同意すれば……

よって無理

９６　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
＜＜１と＜＜＜９５が運営だとして……最低でもあと二人か
誰？あと＜＜＜８７だけでもアク禁してくれない？

９７　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜９６
ふざくんな

９８　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜９６
無理。本人が直接問題発言した訳ではないから

９９　：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ざまぁｗｗｗ

１００：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
＜＜９８
規定に抵触するような発言ってどんなの？
あと＜＜９９頼むから自重して

１０１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
そもそも規定はまだ設定されてないし
このスレで実験してるようなもの

一応目安として、大多数が不快に感じる発言は抵触する設定

１０２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ
なにその無理ゲ
常識人が異常なここではまず不可能

１０３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
だな。なんだかんだでノリいいし

１０４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
だからといってはっちゃけていい理由にはならんぞ？

１０５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
なんのための匿名だ！

１０６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
そうだそうだ！

１０７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
＜＜１０５
＜＜３６

１０８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
気にしたら負けだな、うん

１０９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
俺が言うのもなんだが良いのか？
１００超えたのに何一つ案がでてないぞ

１１０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔが抜けたのがなぁ…
なんだかんだで地味に痛い

１１１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
というか、ここで相談する内容じゃ無いな

１１２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ禿同
俺達基本親も子供もいないしな

１１３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

＜＜１１２

ＩＤｗｗｗ

１１４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

＜＜１１２

大体誰か解るｗ

的確だがそれでいいのかｗｗｗ

ていうか皆言葉遣い頑張ってんなぁ…

１１５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ

いや、口調で特定されないようにって、ＴＯＰに書いてあったし

１１６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

今更ｗｗｗ

＜＜１１０

ん～？どういう意味かなぁ～？ｗｗｗ

１１７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ

生きてたのか……

１１８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ

ニヤニヤ

１１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜１１６
他意は無いぞ？ただ、地味に欠かせないってだけでだな…

１２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
ツンデレ乙ｗｗｗ

「お前が必要なんだ、お前が欲しい！」

ぐらい言えよｗ

１２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ
＜＜１１６＜＜１１９
もう結婚しちゃえよおまいら…

１２２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
結婚式はいつですか？ｗ

１２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｅｄｉｃｉｎｅ
孫の顔はいつ見れるのかな？

１２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

＜＜１２３

１２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ

＜＜１２４

吹っ切れた

ってことじゃね？

１２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｗｈｉｔｅｒａｂｂｉｔ

こうはなりたくないな…

１２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｅｄｉｃｉｎｅ

＜＜１２６

表にでろ

１２８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｕｄｏｎ

吹っ切れてはいるってことでｓあｂｂｂｂｂｂｂ

１２９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

＜＜１２８？＜＜１２８ーーーーー！

１３０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
持っていかれたぁあああああ！

１３１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜１３０
おまいは無事なのなｗ

１３２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
さて、では本題だ

１３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
やだ、すごく強引だわこの子…！

１３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
だめ、そんなに強くしちゃ…！

１３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
悔しいっ！でも感じちゃう…！

１３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
ビクンビクン

１３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
＜＜１３３－１３６
なんという連携プレイｗｗｗ

そして沈黙を保つ＜＜７５…
何があった

１３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
お花摘みじゃね？本人も言ってたし

１３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
＜＜１
あなたは本当に問題を解決する気があるんですか…

１４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
おい、口調、口調！

１４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｌｉｂｒａｒｙ
今更だけど＜＜１３８と＜＜１３９のＩＤがそこはかとなく似てて
なんか腹立つ…

１４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
同じ英数字ですから仕方無いかと

１４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
＜＜１４１
ごめん、狙った
何人くらい居るのかちょっと炙り出してみたくて

１４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
まず＜＜１４１は確定…と

１４５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
あらあら、人気者ね～

１４６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜１４２
え…ちょっとまて。え…？

１４７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
何か？

１４８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
ああ、端末配ったの俺だ

事後報告でスマンけどｗｗｗ

１４９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

テメェ、＜＜１４３の件まだ根に持ってやがっただろ…！

１５０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
え？何？どういう事？

察するに、＜＜１４９は＜＜１４２に端末配る気なかったのに＜＜１４８が独断で配って
＜＜１４８が無断で配ったのは俺が原因の一端を担っている…？

どういうことなの…

１５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
発端は＜＜１なんじゃない？
ほら、＜＜１４８って＜＜１５０嫌いだし

＜＜１が＜＜１５０に無断で端末渡したから、それに怒って…みたいな

１５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
おまえ頭いいな

つか生きてたのか

１５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
端末渡す人物の基準がわからん…

１５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
ちょくちょくコイツ居てもいいんじゃね？って思う奴らがいないよな
人形使いとか＜＜１５３のとこの奴とか

１５５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
メイドは仕事で手一杯、門番は家に入れると思っているのか？
妹は……察しろ

１５６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
人形使いは？
＜＜１

１５７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
あそこ圏外

１５８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
天界や地獄にすら通じてるのにかｗｗｗ

１５９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
繋ぐの面倒なんだよ…
だから本来地獄を繋げる予定はなかった

１６０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

というか＜＜１５６とか＜＜１３２とかはどこから繋いでるの？
俺は自前のパソコンを改造されてそれから繋げてるけど

つーか端末ってなにさ

１６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
あ、それは俺も思った

１６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
そういう設備が持てそうにない連中には携帯端末を渡してる。電池式の
電池っていうか…魔力を溜め込むやつだけど

１６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
その理屈でいくと門番とかに配ってやればよかったんじゃね？

いじめかｗｗｗ

１６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
否定はしないｗｗ

１６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
じゃあ、命蓮寺の連中は？流石にあそこは圏外じゃないだろ

１６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｍｏｋｏｔａｎ
あと守矢の連中もいないな

１６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
守矢は巫女が普通のインターネッツに繋いで占領してるとおもわれ

＜＜１６５
誰それ？

１６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜１６５
誰それ？

１６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
えっ

１７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
えっ

１７１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
えっ

１７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
えっ

１７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
嘘だろ…

１７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
マジかよ…

１７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
信じられない…

１７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
じゃ、じゃあ博麗は？博麗の巫女は？

１７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
持っていったら

こわされた

その反応だと、その命蓮寺って有名なんだな

１７８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
有名も何も、お前の家から人里への直線上にあるじゃないか…

１７９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｒｅｖｅｎａｎｔ
相変わらず世間知らずな＜＜１…

＜＜１６８
何　故　知　ら　な　い

１８０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜１７９
それには色々複雑な事情があってだな…

１８１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
何故におまいが説明するし

１８２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
元々訳わかんないやつだろ？もういいって

じゃあののんだっくれが居ないのは博麗霊夢にぶち壊されたからで、地霊殿は魔法の森と同じく圏外…っていう認識でおｋ？

１８３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
まずそもそも地霊殿って何？

１８４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
えっ

１８５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
またか…

１８６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
それは流石にないわ…

１８７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
俺ですら伝わってくるのに…

１８８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜１８７
なん…だと…？

１８９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
＜＜１８８
ほら？あの娘じゃない？
白髪の運び屋

１９０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
ああ、納得
荷物だけじゃなくて色々運ぶもんな
氏ねという言葉が運ばれてきたのはいい思い出

１９１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
それ誰？
なんか今日俺の知らない事多いな…

１９２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
え？

１９３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｔｅａｃｈｅｒ
何回目ｄ……マジかよ…

１９４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
ご存じ…ないのですか！？

１９５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
彼女こそ、外の世界から迷い込み

１９６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐａｐａｒａｚｚｉ
運び屋の地位を築き上げている

１９７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
超銀河美少女！

１９８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

顕冴ちゃんです！

１９９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

＜＜１９４ｌ１９９

ナイス！…と言いたい所だが＜＜１９７！おしい！

２００：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

え？なに？誰なの？結局なんなの？

颯爽登場！しちゃうの？キラ☆！なの？

２０１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ

うん…まあ…そうだね…

２０２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

基本どこからともなく現れるよね…

２０３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

何気に人気あるしね…

２０４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ

俺っ娘だしね…

２０５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ

あ、言葉遣いは最近普通になったぞ

２０６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
おっぱいでかいしね…

２０７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
結局胸か！胸がええのんかおまいら！そんなにデカいのがええのんか！？

おっぱいでかい　しね！

＜＜２０６
あとおまえがいうな

２０８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
＜＜２０７
確かに＜＜２０６は着痩せするし大きいが運び屋まではないぞ

２０９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
あ、そういえば＜＜１の娘も、運び屋と同じぐらい胸が…ていうか似てね？

＜＜１本格的に誰だよ…

２１０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ

え？気付いてないの？

２１１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
時間の問題だな…

２１２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜２０９がアップを始めたようです

＜＜１逃げて！超逃げてぇえぇえええええ！

２１３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
必死ですね＾＾

２１４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
いや、周りに結構馬鹿にならない被害がでるからね？
他意は無いからね？

２１５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
娘で思い出したけど、２００超えたぞ…

解決策どころか話題にすら上らないこの事実…

２１６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
いや、話題になら上がっただろ

２１７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おい、余計なこと言うな

２１８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
いや、余計なことって…

２１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
みんなナチュラルにスルーしてるけど、＜＜２０９の意味をよく考えたか？

そうか…そうだったのか…羨ましい

２２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
今更だけど＜＜２１１のテンションがいきなり上がった理由がわかったわ…

納得いかないけど

２２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
つーかもう安価でよくね？解決策とかどうでもよくね？

つまりは＜＜１が顕ｓ…娘に嫌われればいいんだろ？じゃあ安価でよくね？

２２２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜２２１
おまえあたまいいな

じゃあ安価＜＜２３０

２２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
それでいいのか

２２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
安価って？

２２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
レスアンカーのこと

基本は指定されたレス数のところに書いてある内容を実行する

２２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
え？じゃあ書かれてた内容が滅茶苦茶なものだったら？

２２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
何が何でも実行する。あるいは実行できるように頑張る

２２８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
安価は絶対ってルールがあるしな…

２２９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
人としてとても実行できない事が書かれた安価を俗に鬼畜安価と言う

２３０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｔｅａｃｈｅｒ
そうなのか…

２３１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
＜＜２３０
おい

２３２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
あれ？じゃあこの場合は？
明らかに行動じゃないですよね？

２３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
やり直しじゃね？

２３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
基本はもう一回指定してやりなおしなんだが…

２３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
「そうなのか」……って事は……

ルーミアに会いに行けって事ですね、わかります！

２３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
こんな感じに無理矢理こじつける場合があるから注意な

っていうかやめとけ＜＜１

２３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
あとルーミアは「そーなのかー」な希ガス

どうでもいいけど

２３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
＜＜２３６
それもそうだな。いったら絶対ろくな事にならないからな
また今度にしとく

じゃあ再安価＜＜２４７

２３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
微妙なとこだな…

２４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｍｏｋｏｔａｎ
というか＜＜1今度って…行くつもりなのか

２４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
なんだかんだいってそろそろね

ああ、打つなら早めにしといた方が良いわよ？
狙ってるのは自分だけじゃないからね

２４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
その辺りの駆け引きも安価の醍醐味！

２４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
じゃあそろそろ書いとくか…

＜＜1
今度また会いましょう

２４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
娘を私に預けろ
悪いようにはしない

２４５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
私に跪け

２４６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
＜＜１の正体晒せ

２４７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
私のところに来て

２４８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
即合体

あ、ちなみに娘とな

２４９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
とりあえず娘と話す
話題は「正確な娘のスリーサイズについて」

２５０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
とりあえず皆さんちゃんと話しをしましょう。娘さんの将来の為に

２５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
白黒はっきりつける

２５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
うわ、危な…

２５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
皆私欲にはしりすぎｗ

２５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
とりあえず最高ｎ…ゲフンゲフン
最悪は回避したか…

２５５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
チッ

２５６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
よし、よくやった＜＜１４７
…っていや、違うな。いや違わないけど

ああもう！そうじゃない！納得いかない！

２５７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
安価は絶対…よね？

２５８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ

なにやってるんですか＜＜２４８…

２５９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
墓穴掘ってるぞ＜＜２５６

２６０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
安価は絶対！（キリッ

という訳で紅魔の図書館に来ているよ！

２６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
どこから入った…

２６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
なんか鏡から出て来た…

２６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
俺の幻想に常識は通用しねえ（キリッ

２６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
冷蔵庫ｗｗｗ

２６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ

サブカルネタは止めろよ。ついてけない

２６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
というか本当に行ったのか＜＜１…

２６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
行った。今＜＜２４７のとなりの椅子に座って書いてる

２６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
なんだ、膝の上に乗っけてたりはしないのか

２６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
……

２７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
なぜ黙り込む

２７１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
おいまさか

２７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
もしや…

２７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ
……／／／

２７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
おいィ？

２７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
ちょっと見てくる

２７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
マジか…

２７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
さあ次の安価だ何をしているさっさと始めよう始めるぞ始めろよハリーハリーハリー！

２７８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
必死だな…

２７９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
まあ、動機はともかく早く次を決めるという意見には賛成

２８０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いや、ね？俺は最初隣に座ろうとしたんだよ？

でも…ね？……察して下さい

２８１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
本当にやってるのか…？

２８２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
個人的には冗談だと思いたいです…

２８３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
でも＜＜1だしな……

２８４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
どういう意味？

２８５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
膝の上に他人（主に美少女型）を乗っけるのが好きなタラシ野郎

２８６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
人聞きの悪いこというな

２８７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｐｕｒｐｌｅ
事実でしょうが

２８８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
痴話喧嘩は他所でやれ。例えば私の眼前とか

２８９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
それ他所じゃないよね？何？ブロント語？

２９０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
＜＜２８９
なんですかそれ

２９１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
まあ一種のネットスラングという認識で大体あってる
色々パターンはあるけど今回のは矛盾している、二律背反な表現を使うパターン

稀によくあるとか

２９２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
俺の怒りが有頂天になった、とかもある

２９３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

＜＜２９２
有頂天とか陰陽鉄とかでやれ

２９４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
どういうこと？俺どこもおかしくないよな？

２９５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
ああいや、こっちの話。気にするな

２９６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
出た、電波

２９７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
てめぇ、事情知ってるだろうが

２９８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
ただいま…

２９９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
どうだった！？

３００：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
食いつくの早っ！

３０１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
本当に乗っけてた……
ただ、ｐｔ…＜＜２４７が不機嫌そうな顔してたのは印象に残ってる

３０２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
いや、止めさせろよ

３０３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
まあ、さっきまで話の流れについていけてなかったしね…
拗ねてんじゃね？

３０４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
なんか＜＜２４７に今度サブカルチャー方面を色々教える事になった…

じゃあ今度こそ娘をどうにかしてくれよ？
安価＜＜３１１

３０５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
今更だけど、→のって「以下、現実にかわりまして幻想がお送りします。」
の方が正しくない？

３０６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
仕様です。ていうかお前安価する気ないよな？

３０７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
いや、皆警戒してかれこれ五分以上全くレスがないとかもう…ね

３０８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
娘に好きな人を告白する。ただし対象は娘以外

３０９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅと結婚汁

３１０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
現住所を記す

３１１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
揉みしだく。何をかは言わなくてもわかるな？

お前の膝の上に乗ってる生物の胸部だ

３１２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
参加している者全員人里に集合。私も行きます

３１３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｔｅａｃｈｅｒ
私の家に来て色々教えてくれ

３１４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
＜＜３０２についてどう思ってるのか産業で白黒つけろ

３１５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
一生私の奴隷

３１６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
ああ、成る程。要はｋｓｋね

３１７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
…って一気にきたなｗｗ

３１８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
＜＜３１１

＜＜３１１

３１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
きた！俺の時代きた！…俺はなんにもしないけどね！

３２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｔｅａｃｈｅｒ
うわぁあああ！

３２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ
これは…

３２２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｍｏｋｏｔａｎ
俺はそっとスレを閉じた…

３２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
安価は絶対…か

ごくり…

３２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
このスレはいつからぱｔｙ…＜＜２７３スレになったんだ…

おい、誰か実況頼んだ

３２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
つ河童印のビデオカメラ

３２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
殺す。絶対に殺す。何が何でも殺してやる
貴様がここで死ぬ運命ではないとしても、殺してやる
許さない。絶対に許さない。絶対にだ

３２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
なにそれこわい

でも、安価は絶対だから

３２８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
ええいこの変態が！逃げろ、＜＜２７３逃げて！
見ているだろう？逃げなさい！そこを離れるのよ！

３２９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
必死ね…

３３０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
当たり前よ！誰が好きこのんで友人を差し出すか！
想像しなさいな！自分の大切な友人が変態の毒牙に掛かろうとする

瞬間を！

３３１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ

……？別にいいんじゃない？

３３２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ

貴方に問い掛けた私が馬鹿だったわ…

そうね。貴方は友人が友人だからいいんでしょうね…

３３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

で、誰も実況行かないの？

３３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ

今俺のところに某スキマ妖怪が機材を取りに来たけど

３３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

よし、これでしばらくは退屈しないぜ…

３３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｌｉｂｒａｒｙ

む……むきゅー

３３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

あ、終わった？

３３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
何ぃ！？ええい、実況は？実況は何をしている！？

３３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
こちら実況、すまない。撮影には失敗した
付いた時には

「んんぅ……～っ！」

という押し殺した嬌声みたいなものを上げながら
ぐったりと倒れ込んでいる＜＜２３７の姿しか…

３４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｏｂｌｅ
もういい、わかった

＜＜１、そこを動くな

３４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
なんだと…３分足らずでか

３４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
流石に戦慄した

３４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

ふぅ……体力ないなこのモｙ……文学少女

ん…？なんか凄いプレッシャーを感じるんだが

まあいいや。＜＜３２６、トイレ貸してくれ

３４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

人の家で何する気だこいつ

３４５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ

それと＜＜３２６は席を外しています。しばらくは戻ってこないかと

３４６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

そうか……まあいいや

ここですまそう

３４７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｆｏｕｒｓｅａｓｏｎｓ

ちょ…！

３４８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
おい、マジで下半身まさぐりだしたぞ

３４９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
それは＜＜１が＜＜２４７のという意味でか？
それとも＜＜１が自分のを、という意味か？

どちらかによってこの後の俺の対応が変わってくる

３５０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
実況しようか？

３５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
任せた！

３５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
よろしくお願いします！

３５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
あ、ごめん無理。

実況したら間違いなく１８禁だわこれ

３５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
いいじゃないか１８禁！この中に十八歳未満なんて居ないんだし！

３５５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
ここはそうでも向こう側がそうとは限らないのよ…ノクターンじゃないし

それと野郎のＧシーンなんて需要あると思えないし…誰得なの…

３５６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
……Ｇをしているのは、野郎だけかしら？

３５７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
……野郎のＧを目の前で見て触発されたのか、机に倒れ込んだままもう一人も…

おっと、これ以上は言えないな

３５８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐａｐａｒａｚｚｉ
＜＜１は野郎。っと…

３５９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
おい、＜＜３５８がなんか着々と真相に辿りついていってるぞ

つーか向こうとかノクターンだとか、おまいも大概電波なのなｗ

３６０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
というかまだ辿り着いてないのね…

それでいいのかブンヤさん

３６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜２４７のＧだけ抽出すればいいじゃない
…と思ったけどそれも誰得…

３６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
この中に百合っていたっけ？俺はいけるけど

というか人減ったな

３６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜３２２みたいにもう見てないか、トイレにいったか、ＲＯＭってるか

大穴で身動き取れないとか。理由は…言わせんなよ恥ずかしい

３６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
変態どもが…！

３６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｐｕｒｐｌｅ
我々の業界では…っと。進展があった

単純に＜＜３４０が辿り着いたってだけだがｗ

「パチュリー、ウッ！」ってなる前に「おまえ人のものを！」
って突っ込んできた＜＜３４０によってあんかけチャーハンは避けられた

いかん、危ない危ない危ない…

３６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
どういうことなの…

わかったけど

３６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
ここでガチムチネタとかｗｗ

だいたいわかった

３６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｎｔｅｅｎ
え？とりあえず最悪の事態には至らなかったと？よくわからないのだけど

３６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ

あ、実名だしちゃった

３７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
もう誰も気にして無いだろ

ぶっちゃけこんなＩＤつける時点で皆隠す気がないような…

３７１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
解説
…の前に、おまいらＧはわかるな？わからなくても続けるが

野郎のＧは、終わりに漏れる声が「うっ」とかが多いんだ
で、＜＜２４７の実名がパチュリーで、その目の前で野郎である＜＜１はＧを…
そうなる前に＜＜３４０が到着したって事は、十中八九吹き飛ばされたんだろ
あんかけチャーハンは、まあ、なんだ。

あんかけチャーハンの「餡」って、ドロドロしてるだろ？つまりはそういうことだ

３７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ナイス解説

補足すると、ガチムチネタというのは「ガチムチパンツレスリング」っていう
タイトルからまあなんとなくはわからなくもない代物の劇中に聞こ

える空耳の事

普通はその作品の事全般を指すけど、ここでは空耳ネタが出たから

「パチュリー、ウッ！」も「おまえ人のものを！」も
「いかん、危ない危ない危ない…」も「どういうことなの…」も
「あんかけチャーハン」も全部空耳

３７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いつからこのスレは解説スレになった

ああ、それとみんな勘違いしていないか？
＜＜２４７は確かに机に倒れ込んだ。ビクビク痙攣もしている

ああ、確かにそうなった理由の一端には、俺が胸を揉んだからということもあるだろう
見た目に反して随分と大きく…ついエキサイトしちゃいましたよ？
ええ、揉みました。揉みまくりました。揉みしだきましたともけれど＜＜２４７は絶頂を迎えた訳じゃ無い。俺はそこまで恐ろしくない

ただあっちに喘息の症状が出ただけだ

３７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おい？どうしたみんな
もう１０分は書き込みがないが

３７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜３６９…

３７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
本当の事を言っただけよ？

誰も絶頂したなんて言っていないわ

３７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
じゃあ「んんぅ～…っ！」ってなんだよ…

３７８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
咳き込んだ後、むせるじゃない？
それに時々いるのよね、仕草がいちいち色っぽい奴って

３７９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……じゃあ、下半身を…というか＜＜１がＧをした…というのは…
嘘…か？

３８０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
？本当よ？

３８１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ流石に引いた

３８２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
正直引いた

３８３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
軽蔑しました

３８４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
濡れた

３８５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
えっ

３８６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
えっ

３８７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
えっ

３８８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
えっ

３８９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ん？何か？

３９０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
いや、流石に喘息でこひゅこひゅなってる奴をネタにはできないわ…

３９１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
これ以上は言えないなって、そういう意味ですか…

３９２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
何をしているのかは言えないって事だったのか…

３９３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
喘息をネタにＧする＜＜１も大概変態だけど、
それで濡らす＜＜３８４も変態ね…

３９４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
ここはひどいインターネッツですねｗｗｗ

ちなみに＜＜３８４はＧする側を想像した？される側を想像した？

３９５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
される側ってーと、喘息おこした方って事か？

無論両方だが

３９６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
相手が苦しむ姿に愉悦を感じるし、
苦しんでいるのに相手が気持ちよさそうならば
それに屈辱と快感を感じもする…か…

なんというハイブリッド。俺と同じじゃないか

３９７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
天人ってのは、サドな気質があるからね、基本
私はいわく不良らしいから

３９８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
おい、なんか変態同士が意気投合してるぞ

３９９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
わかりましたけどわかりたくありませんでした…

４００：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
何このスレ超閉じたいんだけど。見なかった事にしたいんだけど

４０１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
ちなみに言わなくてもわかると思うけど、＜＜２４７は今介抱されてるわ

あ、ちなみに＜＜３４０にね？＜＜１はその様を地面に這いつくばりながら眺めてるわ

心持ち嬉しそうな表情で

４０２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おい、おまいは俺をどれだけ貶めようとしてるんだ

４０３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
私がなにも言わなくても、もう貴方の名は地に落ちてると思うのだけど？

４０４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
なんというか…伝え聞いた以上に変態だな、＜＜１…
正直甘く見ていた

４０５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
最近なりをひそめたと思っていたけど、見当違いだったわ

調教が足りなかったかしら…

４０６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
なんかさりげに変態一名追加されてる悪寒がするんだけど…

４０７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
＜＜４０５
調教の件ｋｗｓｋ

４０８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
知ってるかしら？＜＜１って元々はただのＳだったのよ

４０９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ああ、知ってる。出会った当初散々嬲られた

４１０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
正確にはＳではなかったのだけど…ね

４１１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
サディストというより、人間に興味がなかったみたいだし
人間というより、他者かしら。
扱いがぞんざいだった事は確かだけど、多分興味がない故の事だったんでしょう

４１２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おい、なんで俺の恥ずかしい昔話が繰り広げられてるんだ

４１３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
とにかく話を戻すけど、まあ当時は酷かったのよ
酷すぎて専門家の私のところにスキマ妖怪が相談しに来る程に

４１４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｅｎｎｉｇｈｔ
専門家ってなんのだよ。なんでだよ
ドＳ心か。サディストの心を熟知してるからか

４１５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
無視スンナ！＼（Д’）／

４１６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
で、相談された私は考えました。どうすればいいのかと
そして思いつきました。「徹底的に痛めつけてやればいいんじゃね
？」と

４１７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
Ｓだ…

４１８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
女王様だ…

気持ちはわからんでもない

４１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
だめだこいつらはやくなんとかしないと…

４２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
そうしてスキマ妖怪にその事を話すと、見事に通り
毎日と言っていい程送り込まれてくる＜＜１をサンドバッ…適度に
痛めつけてたら…

４２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
Ｍ爆誕！…と

４２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
成る程ね…道理で…

承諾した方も大概だと思ったけど

４２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
我ながら当時どうかしてたんじゃないかしら…

４２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
知りたくありませんでしたよそんな変態誕生秘話…

４２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
ちなみにその後、＜＜１がＭに目覚めてたとは露知らず、何時もの
ようにおしお…ゲフンゲフン

すこしからかってやろうと思って罵倒したら

「て、テメェ……！」

なんて言いながらも何もしてこないばかりか、若干興奮しだす始末
おかしく思いながらも
「あれ？なんかちょっと気持ち良い？」
とか、私もおかしくなっちゃって

その日を境に、なんか私が＜＜1を責める時間が設けられてしまい
年月を重ねる事に、全体の中で私が責める時間の割合はどんどん増えていって

おかしいな、とは自分も思っていたけれど
暇を持て余した私には、それはあまりに魅惑的な行為（ひまつぶし）で
止めることなんてできなかった

気が付けば私が責める時間と＜＜が責める時間は、丁度半々になっていて

気が付けば、私は人を扱き下ろすのが大好きなSになっていたんだ

４２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
だから知りたくないんですってそんな変態誕生秘話なんて！

４２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
…もしかして、私のせいかしら…？

４２８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……原因の一端は、私にもあるかもしれないわね…

４２９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
つーかおまいらなにやってんの

何時もの様にって……え？

４３０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
ちなみに＜＜４２５がＳになっていたと自覚した時は
まだ＜＜１はＭだと自覚してなかったのよね？

４３１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
まあ、ね
多分私には元々そういう才能でもあったんじゃない？

４３２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
本来人の性癖というものは、そんなに急激に芽生えたりするものでは
はないからな
元々結構なお偉いさんだった事とかが要因じゃね？

４３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
生まれつき立場が高かったことで、人の上に立っているのが当然と
考えて
怒られる事を知らず、他人を貶める事のみを知る…ですか

生粋のSですね。ある意味当然かと

…どうにかしなければならなかったのでしょうが

４３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
権力者ってのは、すべからくそういうもんだろ

４３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
あれ？じゃあなんで、最初はMだったのかしら？

４３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
それこそ権力者だったからだろ
正確には権力者の娘、だった訳だが、それなら尚更だ

汚いところだからな、上なんてものは

４３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
そういう時代は覚えていないけど、なんとなくわかるわ…

４３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
……嫌な事思い出しちゃった…

４３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ

同じく…

４４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ああもう止め止め！なんで途中からしんみりした空気になってんの？
ここはうわぁとか、変態だーとか、適当な事言ってりゃいいの！

４４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
だな。昔よりも今だ

思い出したって良い事なんてないものなんて気にするな
少なくとも、俺は気にしないね

つーかそれより娘の話をしないか

４４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
あ…

４４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
そういえば…

４４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
正直忘れてた…

４４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
同じく…

４４５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
おまいら薄情だなｗｗｗ

え？俺？ははは、やだなぁ。覚えてる訳ないじゃないっすかｗ

４４６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おまえらｗｗｗ

まあ、俺が言えた口じゃないけどな
ちなみに今何人居る？

４４７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
全部で７人
少なくとも書き込んでるのは７人だけ

４４８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
ちなみに上の二人は今どこにいんの？図書館？

４４９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いえす。今は喘息起こした奴とそれを介抱している奴から見えない所にいる
ちなみに＜＜４４７と合流してる

４５０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｒｅｖｅｎａｎｔ
見つからない様に二人身を寄せ合っている様が思い浮かぶ…

４５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
いや、寄せ合ってないから

４５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
７人…俺を外して６人か…まあなんとかなるか

で、どうしたらいいと思う？

４５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
やっとまともな話題に戻りました…

４５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
ファザコンの娘をどうにかするにはって事がまともな話題なら、ね

４５５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
どうにかするっていっても、まずどういう状況なのかまだわからん

＜＜１が放置プレイをかましてもなお懐いてくるとしか聞いてない

４５６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
放置プレイとかいうな

４５７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
それで？もっと詳しい状況は？
例えば娘が何歳頃の時に拾って、何歳頃のときから放置したのか、とか

４５８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
何歳頃…か。拾ったのは８年前、あいつが１５の時だな
放置したのもその時から。もう独り立ちする年頃だったからな

４５９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
アウト

４６０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
あちゃー…

４６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
やっちまったなぁ…

４６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
それは…貴方…

４６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
もう駄目ね、あなた

４６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
え？なんか駄目だった？

４６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
なんかも何も……ねぇ？

４６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
私ですらわかるわよこんな事…

４６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
＜＜１、正直に言いなさい。狙った？ねえ狙ったのかしら？

４６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
狙ってたのなら最低ですね
狙っていなかったのなら最悪ですけど

４６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
だからどういうことだってばよ？

４７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
相変わらず世間知らずな＜＜１…

ここは代表して＜＜４６１に説明して貰おうかしら

４７１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ｏｋ、任せろ

とりあえず＜＜１、一つだけ言わせて貰うわ

馬　鹿　野　郎　！！

４７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
お、おおう…？

４７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
いいか！？人間の十代ってのはな、人生の中で一番多感な時期なんだよ！
１５歳とか一番真っ直中だ！一番不安定な時期なんだ！

そんな時期に放置だと！？ふざけんなよお前…！
実の子にでもやっちゃいけねえぞそんな事！ましてや相手は拾った子供だぞ！？
いいか、「拾った」んだ！捨てられてたんだよ！
捨てられてたのか迷い込んだのかは知らねえけど、ひとりぼっちだったんだぞ！？
見知らぬ土地に不安定な次期の子供、しかも女だ！不安で不安で仕方ねえだろうが！
そんな時にお前に拾われたんだ！顕冴にはお前がどんな風に見えたんだろうな！？
お前みてくれは善人そのものだ！完璧に疑う余地無く絵に描いた様な良い奴なんだ！

ただでさえそれなのに、拾われた時の顕冴の心境考えてみろ！
顕冴にはさぞかし輝いて見えたんだろうな！神様にでも見えてたんじゃないか！？
「拾われて良かった」とすら考えたかもな！これからの生活に希望が持てたんだろうな！

そこにお前放置だと！？ふざけんなよお前！
真っ暗だったところにやっと光が差し込んだと思ったら消えちまった！
お前は希望を与えといて、それを奪ったんだよ！
お前は顕冴の将来を考えてやったのかも知らねえけどな、今を考えてやれよ！
不安で不安で仕方無いんだ！お前しか支えがいなかったんだよ！
お前は此所がどんな場所だか知ってるだろうけどな、あいつは知らなかったんだよ！
将来なんて考えても意味ねえんだよ！わかんねえんだから！
今がわからねえのに、将来なんてわかるわけねえだろ！
お前は将来を考える前に、今を作ってやるべきだったんだ！

４７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ああ、なんかちょっと冷静になってきた…
いかん、支離滅裂だ…

４７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
言わんとしている事はなんとなくわかる
かまわん、続けろ

４７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ａｎｇｅｌ
サンクス。じゃあ続けさせて貰うわ

あー…とにかくだ、俺が言いたい事はお前ぬか喜びさせたんだって事だ
持っていたから、無くした時にそれがどんなに大切な事かわかるんだ
希望を知らなかった時より、希望を知った後それを失った時の方が辛いんだよ
一旦希望与えといてそれを奪って、お前は顕冴を苦しめてしかいないんだよ
救ってねえんだよ。他でもないお前が苦しめてたんだよ

いいか、親ってのは大切なもんなんだよ。お前が思ってる以上にだ
親の役目はな、子供が死ぬまで続くんだよ
子供はな、親が死んでもその背中を見続けて生きていくんだよ
思い出の中の親の背中を追って成長していくんだよ
言い方を変えれば、親は子供が死ぬまで痕を残すんだよ

生半可な気持ちで拾うな。それは救いにはならねえ
拾うなら、そいつを一生面倒みるぐらいの覚悟で拾え
途中で巣立たせようとか考えるな
そんな事考えてる時点で、拾う資格なんてねえんだ

一度拾ったら、意地でも放すな
たとえ親離れしようが彼氏ができようが結婚しようが、絶対に放すな
徹底的につきまとえ。ウザがられるぐらいに徹底的に食らいつけ
お前が顕冴に嫌われようがだ。んなもん知ったこっちゃねえんだよ
自分の全てを捨てるつもりで食らいつけ
顕冴の目に醜く映ってもいい。意地汚く食らいつけ

４７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
駄目だ、全然落ち着いてない…
冷静になってない…

４７８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
大丈夫、間違ってないから

４７９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
じゃあ続きを

えー…っと
向こうがお前から離れたがっても放すなよ。絶対に放すな
お前が顕冴を放して良い時は、もうないんだ
どっちかが死んでも放すな

無理なら最初から拾うな。拾った時点でお前は人生捨てるんだ

なんだかんだ言ったけど、過去は変わらない
変えられるのかもしれないけど、お前がしてきたことは変わらない

だから、今からだ
今から、娘に精一杯のことをしてやれ

４８０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
まったくまとまりがない…やばい、死にたい

４８１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
あともう少し、もう少しだけ頑張れ

４８２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
頑張る

纏めると、だ
顕冴がファザコンなのは、もう二度と捨てられない為だ
お前に嫌われたくないからだ。それは前々から気付いていただろ？

４８３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
まあな。誰でもわかるだろ

４８４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うるさいだまれ。わかってねえからこんな事になってんだろうが

顕冴はお前に必死にしがみついてる。捨てられるかもしれないと思ってるから
だったら話は簡単だ。捨てるつもりなんてないって教えてやれ
背負ってやれよ。抱き締めてやれよ
つーかお前がしがみつけ。なんでてめえ上にいるんだよ
汗涙鼻水小便垂れ流しながらしがみついてけ

そうすりゃ自然と向こうが離れようとするだろ

でも放すなよ？絶対だ

４８５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
俺は今、何をすべきだと思う？

４８６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
知るか。自分で考えろ
…と言いたい所だが、考えてもわかんねえからここにいるんだろうなとりあえず今迄の事、土下座して謝って、捨てないでくれって言ってこい

４８７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
もうそれ親じゃねえよな…

４８８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
あたりまえだろ、お前親じゃねえんだから

４８９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
お前、言ってる事滅茶苦茶だぞ…

４９０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
知らんな。どっちつかずのお前にはぴったりじゃねえか

４９１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
それもそうか
……よし、今からちょっと謝ってくる

４９２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
ちょっとじゃねえよ
一生掛けて謝ってこい

４９３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
そうだったそうだったｗ

ありがとな。やっと助けられる

４９４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
かまわんよ。どうでもいいからはやくいってこい

４９５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
……今、いったわ
多分みっともなく土下座するんでしょうねえ…

４９６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
いや、でも＜＜１って、結構土下座綺麗よ？

４９７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ

そういう問題ではないと思います…

けど、まあ、そうですかね…

４９８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
言ってる事滅茶苦茶ｗ

…でもま、なんかスッキリしたわね

４９９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
いい話だったな……

いや、リアル上条さんも見れたし、満足満足

５００：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うわあああ！柄にもないことしちゃったぁぁあああああ！
やばい、死にたい！ていうか羞恥で死ねるわこれ！

…でも、説教ってなんか楽しいわね…

５０１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
目覚めたかｗｗｗ
恥ずかしいと思いながらもやってみたいと思う…

あれ？これただのＭじゃね？

５０２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
というかキャラ変わってなかった？
途中なんかもこたん入ってんじゃね？とか思ったし

５０３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
え？もこたんってこんな感じなの？

５０４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
うん、だいたいこんな感じ

５０５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
マジか…こんど会ってみよ

５０６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
にしても、なんか一気に解決しましたね…

５０７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｒｅｖｅｎａｎｔ
解決…ね

一旦収まった、と言うべきでしょうけど

５０８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
多分またそのうち問題抱えてくるわよ
親子って、一生問題抱えるもんだしね

５０９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
私、今この時程子供いなくてよかったって思った事はないわ…

５１０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
母親になれば？気持ち変わるわよ？

５１１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
まるで子供がいるみたいな言いぐさね

５１２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｐｕｒｐｌｅ
私にとって、幻想郷は子供みたいなものですもの

５１３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
ああはいはい、わかりました

５１４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
あ、一つ伝え忘れた

５１５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
え？あれだけ言ったのに？他にいうことあるの？

５１６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：
Ａｎｇｅｌ
ある意味一番大切な事っていうか…

あの説教、顕冴を娘として考えて、みた場合なのよね

５１７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
：と、言いますと？

５１８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うん、ぶっちゃけ娘としてではなくて、女として考えれば簡単なんだよね

５１９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……まさか

５２０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うん。自分の娘じゃなく、女とするなら、簡単なのよ

抱いて、自分の女にしちゃえばいいのよね

５２１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
うわぁ…

５２２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
だってそうでしょ？
拾ったってことは血のつながりないんだし
拾ったって事知ってる奴なんて多分いないんだろうし
傍から見たらただのカップルで済むじゃない？

５２３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
発想がオヤジ…ていうか最低です…

５２４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
というか、顕冴多分父親と思ってないし
ファザコンっていうより、一人の男として好きなんじゃない？

５２５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
……ありえる、というより多分それ正解ね…

５２６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
イイハナシダッタノニナー

５２７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
ま、どーでもいっか
どっちにしろ退屈しなさそうだし

５２８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
悪魔や…

５２９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
自分の暇潰しの為に他人の人生いじくる…Ｓだ…

５３０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
もはやＳってレベルじゃねーぞ…

こんなんでいいのか天人…

５３１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
いわく、「不良」らしいわよ？

５３２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
貴女、好きになれそうになかったけど……

仲良くしましょうか

５３３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
最悪の同盟が出来ようとしている…

強く生きろ、＜＜１…

５３４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
ちょっと待ったその同盟

私もいいかしら

５３５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
強く生きろ、＜＜１……っ！

５３６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
よう…お前ら…

５３７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
あれ？＜＜１？

どったの？はやくも次の相談？

５３８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
ああ。その通りだ…

実はな、さっき言われた通り土下座して謝ってきたんだけど…

５３９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
実行したんですか…

５４０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
で、どうしたの？誰かに見られでもした？ざまあｗｗｗ

５４１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いや、そうじゃない…

５４２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ

じゃあなんでそんなローテンションなの？
「今更…？」とか言われて蔑まれたとか？

５４３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
いや、それだと目的達成＋Ｍな＜＜１にはご褒美でしかないだろ

５４４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
じゃあなんでだよ…
なんでお前ここにいんだよ…

５４５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いや…な

簡潔に言うと、「じゃあ、抱いて」って言われた…

５４６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
えっと、誰に…？

５４７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
娘にだよ…

５４８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
…抱き締めて、とかそういった意味合いではなくて…？

５４９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
頬を紅く染めながら、帯に手を掛けながら、俺ににじり寄ってきたけど
それでも健全な目的だといえるか…？

５５０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……無理、ね

５５１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
だろ？
だからとっさに宥めて、ちょっと待って貰ってる
なあ、俺はどうしたらいい…？

５５２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
……

５５３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
……

５５４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……

５５５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ

……

５５６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ

……

５５７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

……抱けば？

５５８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

……は？

５５９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

もういっそ抱いちゃいなさい

で、女にすればいいじゃん

そうすれば万事解決、めでたしめでたしよ

５６０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ

いやめでてえのはてめえの頭じゃねえか！？

なんで娘抱いてそれでよし、みたいになってんだ！？

５６１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ

あら、愛でたいなんて、嬉しい事言ってくれるわね

嬉しいから、ちょっとまぜなさい
大丈夫、顕冴の後で良いわ

５６２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おま…っ！馬鹿じゃねえの！？

５６３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うるさいわね。童貞じゃあるまいし
もう何回も経験してきたでしょうが

５６４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
……今、何か聞き捨てならない事を耳にした気がするわ…

５６５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
きっとあれよ、＜＜１がただ結構な経験者だってことであってね
＜＜５６３を何度も抱いたってことじゃないわよ、多分……

５６６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
……どっちみち、なんで＜＜５６３が＜＜１が結構な経験者だって知ってるんでしょうね…

５６７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
あ、頭が痛い……！

５６８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：

Ｓｈｉｎｅｎｉｇｈｔ
いきなり３Ｐとか…災難ね、顕冴…

５６９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
っていうか何やること前提なんだ＜＜５６８…！

おい、お前らなんか言ってやれ！

５７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｐｕｒｐｌｅ
抱けば？

５７０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｒｅｖｅｎａｎｔ
抱いてしまえばいいんじゃない？あ、今度妖夢もお願いしようかしら？

５７２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｓ
勝手に乳繰りあってれば？あ、私の庭ではヤらないでよね

５７３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｅｅｎ
……お父上への挨拶は考えておいた方がよろしいのでは？

５７４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おいィ？なんでてめえら全面賛成なんだコラ！
つーか＜＜５７３！止めろよ！俺を殺してでも止めろよ！

５７５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
……天人って、結婚とかできたかしら…

あーあ……勘当かぁ…
跡継ぎとかどうするのかな…あ、そっか。天人だからそんなのいいのか

５７６：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
おおい！？なんで乗り気なの！？

５７７：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
…天人って、暇なのよ

５７８：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
え！？そんな理由！？まさかそんな理由なの！？

５７９：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
え？そんなに嫌？
仕方無いわね、だったら私の他にも娶っていいわ

５８０：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いやいやいや、そういう問題じゃねえよ
あと俺はそんなに最低じゃねえ

５８１：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
…惚れられてる女を何人もほっといて一人幸せにするのと惚れられてる女に振り回されながらも全員を幸せにするのどっちが最低かしら

５８２：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
いやどう考えても後者が最低だろ！俺ハーレム嫌いなんだよ！
つーか人生ってそんなもんだろ？取捨選択だろうが！

５８３：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
うるさいだまれ。知ったこっちゃないわ
言ったわよね？
娘を拾った時に、あなたは人生捨ててるのよ

５８４：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ｎｉｎｅｔｙｎｉｎｅ
え？あれそういう意味だったの！？
ていうかねえ？嘘だろ！？え？嘘なんだろ！？

５８５：以下、現実にかわりまして幻想からお送りします。ＩＤ：Ａｎｇｅｌ
何を言っているの？
エイプリルフールは、もうとっくに過ぎてるわよ

えいぷりるふーる（後書き）

多くは語りません。
本当に申し訳ありませんでした…！色んな意味で…っ！

なんだ、どうしてこうなった…！

番外編　日記編その1（前書き）

さて、今私の目の前には、一冊の本がある。
といっても、それをはたして本と呼んでもいいものかどうかは微妙だけども。
それというのも、その『本』は、薄いのだ。
凄く薄い。どのくらい薄いかと言えば、よくある一般的な書物の三分の一くらい。

その『本』の表紙には、なんかアニメチックな絵と共に、こう書いてあった。

『じゃぱにか日記帳』

と。

……こんな現代チックな代物、なんでこんな所にあるんだろう？

番外編　日記編その1

私は部屋で一人、この、おそらく、十中八九日記だと思われるものをどうしようか悩んでいる。二分くらい。
何が書いてあるのか、誰が書いたのかは気になる。だが、日記だ。日記である。
プライバシーどころの騒ぎでは無い。その人の表面だけでなく、内面の事が書いてあるのだ。
それを読むのは、流石にどうかと思う。

だが、書いた人が書いた人だ。凄く気になる。

今私が居る部屋はお父さんの部屋だ。そこで『これ』を見つけた。
正確には、見つけたのはこの部屋では無いけど、どちらの部屋もお父さんの部屋という事に違いは無い。よって、これを書いた人はお父さんという事になる。
だって、お父さんの部屋に入るのは、お父さんしか居ないし。
ちなみに、何故お父さんの部屋に入ったのか、それはごく簡単な事だった。
鑑が、「少し家宅捜索しましょう」と言い出したのだ。
何でも久々なので（本人はついさっきだと思っているらしいが）、色々と家の内装が変わっているかもしれないから、という事らしい。

ちなみに、私の、というかお父さんの家の内装だが、一戸建てである。
この幻想郷において一戸建てではない家なんてものの方が珍しいが。
長屋、というものは無い。見てみたかったんだけど。残念。

で、広さだが、差程広くは無い、と思う。

部屋の数だけいうと４つ。寝室、お父さんの部屋、私の部屋、何だか良く解らなかった空き部屋だ。今になれば、その空き部屋は、鑑のものだったのだろうと思うけど。
ちなみにそれぞれの部屋の位置は、玄関から入ってすぐに寝室、そのまま奥に行くと空き部屋、左が私の部屋。寝室は元々は客間か何かだったのだろうとは思うけど。
お父さんの部屋は、空き部屋から左へ、私の部屋から上にいった所にある。
まあつまりは、四角形を四つに区切った家だと思ってくれればいい。

ここまで言って、改めて気付いたのだが、この家、元々生活を営む為のものなのかどうか怪しい。
何せ部屋だけだ。普通の部屋が四つ。台所は無し。生活の『せ』の字も見えない。
お父さんの生態を考えれば、ただ夜風を凌げるだけで良かったのだろうけど。それにしたって生活臭が無さすぎだ。
まあ、今は台所も、トイレも、お風呂もあるにはあるが。……外に。
これは私がお父さんと一緒に住み始める事になった直後に、お父さんが何時の間にか作っていた物だ。朝起きたらなんか出来てた。
ビックリした。ビックリした私の顔を見て、お父さんは笑いながら「僕はね、魔法使いなんだ」とか言ってた。
その時は純粋に「魔法って凄いなぁ」と思っていたけど、後々輝夜のところでとあるゲームをやったのだが、その中に「僕はね、魔法使いなんだ」という台詞があった。ネタだったのか。
……あれ？でもあのゲームって、確か発売されたのが６年前ぐらいだった筈……でもお父さんがあの台詞を言ったのは８年前……？
まあ、いいか。お父さんに謎があるのは今に始まったことでは無いし。いちいち気にしていたら負けだ。気にしていたら前に進めない。

ああ、それで家の事に話を戻すが、なんというか、滅茶苦茶だ。
外から見れば、ただの大きな小屋に見えるかもしれない。それぐらいにシンプルな作りだ。
というのも、それまた偏に生活臭の無さが原因だろうが。
……窓が無いのだ。家は。
しかしそのくせ空気が篭もるような事は無く、夏でも暑くなく、冬に寒くもない。
どういう作りをしてるんだ、と最初の頃は思っていたが、なんかもう慣れた。
慣れたら意外と結構心地良い。それにより気にならなくなった。
何だか丸め込まれたような、有耶無耶にされた感が否めないが、まあそんな事は何時もの事なので気にしない。

で、あ～……そうそう。鑑は、まず自分の部屋に入っていき、部屋に入ってすぐの所で立ち、暫く部屋の中を眺めてから、他の部屋に移動した。
空き部屋だったのだから、物が有るはずが無く。当然見るべき物も無かったからだと思うが。
……何も無い自分の部屋を眺めても、驚かないという事は、前からあの部屋には何も無かった、という事だろうか。
そうして次に九十九の部屋に、何の遠慮も無しに入っていった。
実は、私はお父さんの部屋に入るのはこれが初めてだ。
お父さんに入ってはいけないと言われていた訳では無いが、流石に色々と入り難かった。
ので、ちょっとワクワクしながら入ったのだが。

「……見事に何も無いな…」

「そうだね……」

先生の言葉通り、部屋の中には何も無かった。布団とかすらも。
今更だが、家宅捜索メンバーは私、鑑、先生の三人だ。
先生は止めるかな、と思ったが、何かノリノリだった。……何も言うまい。

しかし、鑑は何か気付いたらしく、部屋の真ん中に立って、

「えい」

短い掛け声と共に、床の畳を捲った。
まあ、それは別に驚く事では無いけれど。驚いたのは、畳の下に、下へ降りる事が出来る穴（はしご付き）があったからだ。……なんてベタな。
穴の大きさは大体縦横二メートルぐらいの正四角形。井戸みたいだ。

「私の知らない部屋ですね」

「……部屋って言う？地下って、部屋？むしろ井戸みたいだけど」

「しかし九十九、地下好きだな」

鑑枷が居た所然り、この穴然り。
確かに何か地下に思い入れでもあるのか、というぐらいに地下、というか穴が好きみたいだけど。

で、とりあえず入ってみた。この場合は潜ってみた？
深さはあまり無く、ほんの１０メート程で底に降りた。底に降りて正面には、西洋風の木製の扉。何故西洋風？

疑問に思ったが、好奇心の方が強く、この向こうには何があるんだろう、と、扉を開けたくなった。
まあ、私が開ける前に、鑑が何の迷いもなく、思いっきり開けてしまったのだが。正直、遠慮無さすぎだろうと思った。

とにかく。開かれた扉の向こうにあったのは、広い空間だった。
多分、地上にある家の2、3倍はあるのではないだろうかと思われる程広大な部屋。
その部屋には、びっしりと本棚が、整然と、余す所無く置かれていた。
本棚の中にも、びっしりと本が並べられていた。
種類は色々。とにかくそう言うしかないぐらいに節操が無い。
医学書だったり、漫画だったり。イラスト集なんかもあったし、何かやたら薄いなぁと思ったら、ゲームの説明書だったりと。とにかく何がしたいのかが解らなかった。
ゲームの説明書って。何の為に置いてるのさ。どこで拾ったのさ。

真っ暗だったので、近くの壁にあったランプに火を灯す。どうやって火をおこしたのかは、マッチが横にあったのでそれを使っただけ

だ。別に種も仕掛けもない。火種はあるけど。

ランプに火が灯る事で、部屋が照らされて明るくなった。……明らかに私が点けていないランプにまで火が灯っていたけど、気にしたら負けだ。

そうして明るみになった部屋の内装に、二人は絶句していた。まあ、無理もないだろうが。私だって驚いた。

そうそう、私は結構目が良い。どの位良いかと言われると、暗闇の中５００メートル先に居る人の顔がはっきり判別できる程度には良い。だからランプが点いていなくとも、部屋の中が見えたのだ。

私の目の良さをお父さんに話した事があるが、その時は「目が良いってれべるじゃねーぞ」って言われた。あと化け物か、とも。失礼な。

しばし固まっていた二人だったが、鑑が唐突に本棚の一つに向かって歩いて行き、多分適当に一冊、本を取った。

そしてそのまま読み始める。その様を見ていた私と先生は、鑑の後ろに回って本を覗き込んだ。

なお、その本だが、何故だか本そのものが直接置いてあった訳ではなく、本を保管しておく銀色のケースみたいなものに入っていた。

そのケースは、鑑がさっと床に捨て置いてしまったが。そのケースに、本の題名と、傘を持ってベンチに座っている女の子の絵がかいてあった。

その本を読んだ感想は、まあ、うん。衝撃的？

先生と二人揃って鑑の方をじっと見てしまったのはご愛敬。当の鑑は何だか小難しい顔をして考え事をしていた様なので気付いていなかったみたいだが。

そんな事もあり、私達はそれぞれ個別に捜索する事にした。
鑑は、さっきの本の続き、いやさっきのは下巻の様だったから、上巻を探し出して読みふけり、先生は歴史関係のものだと思われる本を、どこからか引っ張り出してきて読み始め。
私はといえば、この前上で見つけた文庫本の続きを探していた。
この前お父さんが、勝手に読んだ事を別に怒りはしないと言っていたし、ね。
で、探している時に、この日記と思われるものを見つけたのだ。偶然。

何となく気になって、見つけた事は二人には知らせずにいて。
とりあえず手に取って、文庫本の続きを見つけたのでそれを読み続けて。
そうしていると他の二人は、満足したのか飽きたのか、どちらかは解らないけど上にあがっていったので、急いでそれに付いて行って。
あ、ランプはちゃんと消したよ？
で、急いでいたものだから、文庫本と日記の両方を持ってきたままで。
どうしようかと悩んでいたら他の二人はさっさと何処かに行ってしまって。

で、今に、つまりは文庫本片手に日記をどうするか悩んでいる次第であります。
……さて、どうしようか。読むか。
そうだ、読もう。気になる事を放って置いても仕方無いし。放っておくだけ、気になって仕方がないと思うし。

うん。見つけてしまったのが悪い。そう私は何かに言い訳じみた事を心の中で言いながら、日記帳を開いた。

＝＝

『西暦２００２年……だと思う　何月何日か　曜日は憶えていない』

出だしからこれか。何か性格がそのまま表れている。如何にもお父さんらしいとは言えるけど、何かこう、がっくり来た。

『本日、道端で少女を拾った。結構ぼろぼろであったが、命に別状は無い模様。なお、美人さん。だけども何故だかもっこりしなかった。……漫画みたいに、実は俺の娘、とか言うんじゃ無いだろうな』

私の事だろうか？もっこり？あの漫画？何のことだか良く解らないが、すみません。娘です。

『まあ何はともあれお持ち帰り。こんなになってる人間を見捨てるのは、流石にどうかと思ったんだ。我ながら、らしくない、とは思うが』

そうだろうか？私のイメージでは、お父さんは困っている人を見かけたら迷わず助ける、そんなお人好しなのだが。

『少女は意識を失ってしまったので、俺が抱きかかえて家まで運んだ。あと汚れていたので綺麗にしておいた。服も体も』

……脱がせたのだろうか。ナチュラルに変態だと思う。見知らぬ少女を、綺麗にする為とはいえ何の躊躇も無く脱がせるとは。……まあ、邪念が無いだけまだ良いか。ちなみに私はお父さんに裸を見られて嫌な訳では無い。

『服は幻想郷では中々見ないもの。外の世界の炭坑で働く人の作業着みたいな下に、上が薄い布。まあぶっちゃけジーンズとTシャツな訳だが。外来人か。久々に見た。ここに来るまでに無事な者は。まあともかく、服は洗おうにも洗えないので、明日辺り川に行って洗おうと思う』

どうやら人里に辿り着けるのはごく少数らしい。洗えないって……ああ、まだ台所も洗面所も無かった時か。

『にしてもあれだな。脱がせる前から解っていたが、この娘、結構体付きが良い。性的な意味で。一昔前なら元服前程の年齢だろうに、中々に胸が大きい。オッパイオッパイ！と叫ばなかった俺を褒めてやりたい』

訂正。邪念がありまくりだった。むしろ邪念しか無いのではないだろうか。

『まあでも、そんな至高のブツを見た所で、興奮も何もしなかったんだが。何故だろう？病気？』

まあ、ある意味病気だろうけど。違う意味だけど。

『そんな事はおいといて、だ。体を綺麗にするのにも、服を洗うのにも、水場が無いというのは些か不便なものだと判明。この日記を書き終えたら作る事にした』

川に洗いに行くのでは無かったのか。というか動機が軽い。いや重

いけども。
生活する上で必要な事だから、結構重要な事項だけども。軽い。

『そういえば、この娘っ子、気配が希薄というか何というか、存在が薄い、とでもいうのだろうか。とにかく不安定だ。人間かどうかが、正直な所怪しい』

半分神様です。

『さて、一応この娘が意識を失う前に説明したとはいえ、状況が状況だった訳だし、明日起きたらこれからの事を説明しておこうか』

そこで、その日の分は終わっていた。まあ、日記と言えばこんなものなのだろうけど。
別に大したは書いていなかった。いつも通りのお父さんだった。
まだ続きがあるようなので、それも読んでみる。

『昨日の翌日　曜日とか正直どうでもいい』

日付が適当だ。そんなんで良いのか日記って。曜日がどうでもいいって。

『娘っ子が起きた。寝起き一番に俺の顔を見ても驚かなかった。肝が据わっているというか何というか。とりあえず大物っぽい』

ごめんなさい。驚きすぎて声が出なかっただけです。

『とりあえずこれからの事を説明。が、昨日の事はしっかり憶えているらしく、とりあえずは俺の名前は言える模様』

あれは記憶の有無の確認だったのか。

突然に「俺の名前を言ってみろ」とか真剣な表情して言うものだから、間違えたら、言えなかったら食われるんじゃないだろうかと、内心ビクビクしながら言ったのだが。

『俺の子供って事は皆には秘密。まあ、色々あるし。この娘には人里になるべく行って貰う事にしようか。丁度上白沢慧音の開く学校

の様なものがあるみたいだし、そこに連れて行くか。……あそこは結構幼い子供ばっかりだったとは思うが、まあ良いか』

あまり良くない。小さな子供に交じっての勉強って、結構精神的にくるんだよ。

私は内容は算数除いて解るものばかりだったから、補助の先生みたいな役回りになってしまっていたし。楽しいけど。

……お父さんこの頃から、けーね先生の存在は知っていたのか。

『人里に連れて行く前に、妖怪に出会った時の対処法を教えておく。といっても、難しい事は流石に憶えられないだろうから、弾幕ごっこの事などを説明する事にした』

この日一日だけ、お父さんからものを教わった気がする。何故だか次の日からは、私になるべく関わらない様にしていたみたいだけど。

……結構寂しかったのは内緒。

『教えた結果は、まあ、なんだ。この娘は所謂天才というやつのようだ。簡単な弾幕の張り方だけ教えたのに、弱いスペルカードれべるの弾幕張りやがった。こいつの才能に嫉妬』

子供か！何？私にものを教えなかったりしたのってそれが原因？！
子供か！？

『体術の方もなかなかにいけるらしい。本格的にこいつの才能に嫉妬。……まあ、この分ならば並の妖怪を、倒すとはいかないまでも死にはしないだろう。……そんなこいつがぼろぼろになるって、襲った妖怪って一体どんなだ。一応これから暫くは人里まで一緒に行動する事にした』

心配、してくれたのだろうか。……ちょっと嬉しくなってしまった。

『戦闘面においては、まあそこそこだったので、生活面について教えておく。台所はぶっちゃけ外の世界のものと同じだから、扱いは解るだろうが。材料は俺が調達する事も伝えておく。下手に森にでも入られてしまったら面倒だ』

確かに、台所は、現代のそれだった。ガスではないようで、電気でも無いみたいだったけど。あれどうやって動かしてるんだろう。
先生もこの前困ってた。どうすればいいか解らないって。ちょっと教えたらすぐに使いこなせるようになったけど。

『食材調達もかねて、久々に外の世界に行ってみようと思う』

……え？外の世界にって、何か特別な事でも無いと行けないんじゃ無かったっけ？

『問題は、どうやって金を稼ぐかだが……そこはまあ、路地裏で頑張ろうか』

何やる気だこの人。むしろヤる気だこの人！？

『今後の予定は一応決まったし、明日早速学校に連れて行こうと思う。問題は、娘っ子がちゃんと学校に入れるかどうかだが……まあ、頑張ろう』

……さっき書いてあった事の影響で、何か拙い方向で頑張りそうな気がしてならないんだけど。例えば先生を脅迫とか。

そんな不安を煽るような文章で、その日の日記は終わっていた。……続きが、続きが気になる！色々な意味で！

ので、早速読む。最早個人情報がどうのとかどうでも良い。ここは幻想郷だし、ある意味治外法権だから。正直それも良いかと考えてしまったのだ。

『昨日の次の日　曜日なんて不要です！偉い人にはそれがわからんのです！』

相変わらずふざけた日付だ。曜日の存在意義まで否定している。

『例の娘っ子、顕冴を学校に連れて行った。学校の先生は色々と驚いていたが、快く顕冴を迎え入れてくれた。その様は、俺からいたいけな女子を引き離そうとする様だった。まあ、意味的にもだいたいあってる』

意味って何だ。俺っていう字にどんな読み仮名が振られるのだろうか。

『さて、娘っ子を学校にやったら一気にやる事が無くなってしまった。むしろやる気が無くなってしまった。どうしよう。そうだ、博麗神社に行こう』

だめだこいつはやくなんとかしないと。
何その京都に行こうみたいな軽いノリ。京都行くのにだって結構手間と時間とお金が掛かるんだよ？

『……そう思っていた時期が、俺にもありました……』

……やたらと不安を煽るなぁ。それにしてもこの日記、お父さんノリノリで書いてるよね。

『博麗神社に着いた途端、巫女服着た女の子居たから話し掛けたら、いきなり攻撃された。というか死んだ。強い。てかなんでさ』

それは、流石にあれだからじゃないだろうか。不審者っぽかったからじゃないだろうか。

『ただ正面から近付いて、博麗の巫女は居るかい？と聞いただけなのに』

あれ？じゃあ何でいきなり攻撃したんだろう？

正直、お父さんはあの言動が無ければ、如何にも善人ですって感じがするのだ。

空気、とでもいうのだろうか。それが、何だかとても心地良い。

だから、お父さんは動物に好かれる。好かれ易い、のではなくて好かれる。

言葉の通じない動物達にとっては、雰囲気が何よりの判断材料みたいで。たとえお父さんがどんな事を言ってたりしても。

逆に言えば、言葉の通じる相手には中々好かれ難いって事でもあるんだけど。

『何故攻撃してきたんだい？と女の子に聞くと、何でも博麗の巫女に「真っ黒で、如何にも良い人だって解る人を見かけたら、《見敵必殺（みつけしだいぶちころしなさい）》よ」と言われているらしい。常々。どうやらこの子は博麗の巫女の娘の様だ。というかどんな教育方針だ』

……先代、何考えてたんだろう？それ程までに何か恨みがあったのだろうか。

『取り敢えず乗り込んだ。二秒で殺された。強いなぁ』

先代強いなぁ。お父さんを瞬殺か。相当なものだね。

『復活して早々文句を垂れる。俺が。だって、ねぇ？いくらなんでも酷すぎやしないかと。グチグチ文句を言い続けた。しかし、その文句に何やら禁句が入っていたらしく、相当怒った、というか嫌がった。博麗の巫女がそんなになるのって珍しかったから、つい本気で謝ってしまった。でも殺された』

何を言ったのだろうか？先代が本気で嫌がる、なんて事、あるのだろうか？

『その後散々謝り倒して、ようやく怒りを抑えてくれた。一安心。……この母娘を見ていうのも何だが、今後のあの娘っ子の教育方針、ちょっと考えてみた』

考えてたんだ、教育方針。放任主義というか、ほったらかし感があったんだけど。

『その事は明日書くとして、今日はもう終わろうと思う。久々に二回以上死んだし、本気で謝り倒したし。色々疲れた』

そのうちの八割が、お父さんの自業自得だと思うのは、私だけだろうか。

何時になく短い日記だったが、その日の分は、本当にそこで終わっていた。

私の教育方針、というのが気になったので、早速次のページにいこう。

『昨日の次の日　娘っ子拾ってから三日後　日記つけ始めてから四日目』

今日は比較的ましな日付だ。日付として正しいのかはおいといて。

『飽きた。』

その一言だけで、そのページは終わっていた。他は白紙だった。
……ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ?!嘘!?これで終わり?!
三日坊主を地で行ってる!文字通り三日で日記つけるの終わった!?
え、ちょっと!私の教育方針は!?

私は確認の為に、ページを急いで捲った。

『これを見て、え?これだけ?文字通り三日坊主じゃ無ぇか!とか思った俺。ヴァカめ!こんな所で終わる訳無いだろう!何ですか?自分が書いた事忘れたんですか?ぼけたんですか?ざまぁ』

うざっ!何なのこの人?おちょくる対象に自分まで含めてるの!?どんだけ変態?!
……前振り凝ってるなぁ。中々に。三日過ぎた所で飽きたの一言って。本気で三日坊主なのだと思ってしまった。

『いらっとした所で、早速だが顕冴の教育方針だ』

お!やっときた!

『基本はあれだ。放置でいこうと思う』

放置……やっぱりか。解っていたけど、やっぱりなんだか寂しい。

『見知らぬ土地にひとりぼっち、というものは誰でも結構精神的にくるので、一応俺との関係を持たせる為に家族という形を取った。父と娘という関係で』

結構考えてたんだ。私を子供という事にしたのも、私はてっきりあの時の言葉通りにお父さん色に染める為だと思っていたんだけど。

『だが、その繋がりは、強すぎればあの娘っ子が自立出来なくなる。依存してしまう、といっても良いか。幸い、情緒的には若干落ち着いてくる年齢みたいだし、ある程度放っておいても大丈夫、むしろその方が良いと判断。人里で友人でも作ればいいと思うし、そこは俺がでしゃばる所では無いだろう』

……結構考えたんだろうけど、残念ながら若干、いや結構お父さんに依存していると思います。

『そこの所はさりげなく上白沢慧音に頼んでおく。あの先生も、結構顕冴の事を気に掛けていた様だし。そこらは承諾してくれると思う。今後の予定についてだが、ある程度時間が経過し、顕冴がここの環境に、友人や食料や妖怪などその他諸々に慣れたら、俺はここを出て行こうと思う』

……え？出て……行く……？なんで……？
あれ？でも今もお父さんは家に居てくれてるよね、何で？

『それも顕冴の寝る時に誰かの腕を掴まないと眠れない、という癖を治してから、だが。今迄書いていなかったがあの娘っ子、どうやら一人では眠れないらしい。眠るまでは良いのだが、その後すぐに俺の腕を掴んでくる。しかも中々離れない。これ書いてる現在も掴まれている。むしろ抱き付かれてる。ちょっと役得』

……自覚してないから解らないけど、その癖、治りませんように。

『この癖は暫くしたら勝手に治るだろうが。おそらくは何らかの精神的なものだと思うし。ここに慣れて、知り合いや友人の一人や二人出来れば収まるだろう。それより今日は結構珍しいもの、という

か人物を発見した』

私の事をそれより、か。なんかちょっとイラっとした。誰の事だろう？

『前々からちょくちょく見かけていた、天人の癖に修行も何もせず、好き勝手やってる不良だった。天人は割と真面目な奴が多いので、このような性格の奴は珍しい。地上に降りてきてたから捕獲』

……もしかしなくても、天子の事じゃないだろうか。……捕獲って。

『暇だったから降りてきたらしい。そんな簡単な理由で天人が降りてくんな、面倒なんだよ色々と。腹いせに、ちょっとあれな事をした』

あれな事って何?!え?えぇぇぇぇぇ?!

『都合の良い事に、どうやら若干素質が有った模様。その素質を開花させる方向で行こうと思う』

開花!?素質?!嫌な想像しか出来ない!!

『といっても、俺には若干しか被虐癖は無いので旨く開花させられるのかどうかは微妙な所だが』

言っちゃった!そしてそういう趣味若干あるんだ!

『結果から言えば成功した。だが今まで以上に、天界での日常に耐えられなくなるかもしれないらしい。正直知った事では無いが、まあ、時々相手をするという約束を交わした。というか交わさせられた』

相手?!相手って何の?!

『そしてこれ読み返して興奮しているだろう俺。残念だったな、そ

うじゃない。普通に遊ぶ、という事だ。勘違いするな』

な、なんだ、良かった……そしてやっぱりお父さん、弄る対象に自分も入ってるんだね。

……普通に遊ぶ、だけだろうか？

『普通と言っても、俺がさんどばっくみたく殴られるみたいだが。ちなみに約束を交わさせたのは紫。天人相手になんて事してくれたのか！とか言われて強制的に。何時から見てたんだ』

サンドバックにされる事が、普通と言えるのだろうか。まあ、この幻想郷では良くある事だね。

紫が交渉したのか。まあ、天人相手って事は、なんだか色々あるんだろうから出てきたんだろうけど。

『快諾する不良天人。どうやら加虐趣味もあるらしい。俺はそこまで重度の被虐癖は持ってないので、できればお手柔らかにお願いしたい。提案したらじゃあ５　割くらいで、と全力は止めてくれた。だが天人全般がそうだが、筋力や皮膚の硬さが人間を軽く超えているので、痛い事には変わりない』

天子って硬いし、力が何気に強いしねぇ。殴られたら痛いに決まってるか。
これは、自分のやられた事の仕返し、だろうか。何故かにやりと影で嗤う天子が想像出来てしまった。

『ちなみに名前を聞いてみたら比那名居さんだそうな。名前を聞いて後悔。面倒な事になったなぁ。だがまあ、退屈はしなさそうだと考えれば俺ぐっじょぶ』

どこまで変態なんだ。後悔にすら喜びを見いだすとは。もしかしてお父さん、サンドバックにされるという事、忘れてないだろうか？

『まあ、教育方針も書いたし、この日記の必要性があまり無い気がするので、今回で日記を書くのは止めようと思う。正直めんどくさい』

三日坊主だった。冗談抜きで三日坊主根性丸出しだった。正確には四日目だけど。
そして事実、その日記はそのページ以降は全くの白紙だった。半分どころか十分の一使わないで止めるとか、正直どうかと思う。

……まあ、お父さんが昔構ってくれなかった理由が解っただけでも良しとする。………天子関係は、ちょっとあれだったけど。
それにしてもやっぱりお父さん、昔と今とじゃ性格とか考え方とかが若干違うような気がする。少しドライというか、自分基準で考えてる、みたいな。
何か考えが変わるような出来事があったという事だろうか。何がきっかけで、今のような性格になったのだろうか。
性格が違うといっても比較的ってだけで、昔から今の性格っぽい所はあったみたいだから、変わるにしてもそう大きな理由なんて無かったのかもしれないけど。

………っと、結構読みふけってしまった。先生達、どこに行ったのだろうか。
お父さんの部屋の隣の鑑の部屋で、先生、鑑、お父さんの三人で作業していたみたいで、お父さんは今は疲れてダウンしているらしい。
そこに居るのかな、と思って襖を開けてみたけど、寝ているお父さん以外に人は居なかった。
部屋の中央で燃え尽き、うつぶせで腰を上げた状態で寝ているお父さん。

…………これは、うん。
日記で、私結構蔑ろにされてたような気がするので、腹いせにほんのちょっと。…………ち…ちょっとだけなら、良いよね……？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

先生と鑑の二人は寝室で何やら話していた様で、私が部屋に入ってきたのを確認すると、話を一端中断した。

「随分長い間、本を読んでいたな。面白かったのか？」

「うぇ？！ああうん、まあ面白かったよ？」

「そうか。……九十九はまだ起きてこないのか？」

少し心苦しいが、私はもう帰ろうと思うという先生。
それに何やら思いついたのか、笑顔で両手を合わせた鑑が待ったを掛けた。

「そういえば、今日はありがとうございました」

「いや、それを言うならこちらこそ、だ。仕事まで手伝って貰って…」

「いいえ。私も結構楽しめましたし」

そこからしばらくは、何か二人の謝罪合戦というか、お礼合戦というか。

まああありがとうごめんなさいの言い合いが続いた。二人とも律儀というか硬いというか。

五分ほど経った所で、どうやら一段落した様だった。
そこで鑑が思い返したように、またもや両手を合わせて提案してきた。……狙ってたんじゃないの、これ。

「さて、もう時間も遅い事ですし、今日は泊まっていきませんか？」

番外編　日記編その1（後書き）

さて、今回のお話についてですが、『本編中に九十九が「部屋だと勘違いしやがった！」みたいな事言ってたよね？』とお思いの方もいらっしゃると思います。
しかしそれは問題有りません。何故なら発言したのが九十九だからです。
ただでさえ記憶がおかしな事になってるのに、魔法の森と迷いの竹林、ふたつ纏めていっぺんに『迷いの森』と言っている九十九ですよ？
信用出来ません。ええ、全く信用出来ませんとも。
どれほど信用出来ないのかは、ウサウサ言ってるやつくらいに信用出来ません。

一節目（前書き）

今迄のあらすじ。ゆうかりんこと風見幽香に追っかけられている、以上。

オッス、俺九十九！で、目の前の馬鹿が顕冴。読みは「つくも」に「けさ」だ。
ぼうっと突っ立ってたら巻き込まれていた。どうしてこうなった。
俺を巻き込むな、と声を大にして叫びたい。

ちなみに俺達が隠れているのはごく普通の小屋。ボロッちいが結構快適。

此所ならしばらくは大丈夫だろう。何分くらい？二時間くらいじゃね？という会話の後、一時間ちょっと前に入った。

二時間待つくらいなら逃げろや、とか言われそうだが、断言しよう、無理。
なんせ目の前の馬鹿が、あいつの大切な花を踏んじまったのだ。それも目の前で。
あの妖怪は何よりも花を大事にするのは周知の事実。それを踏んじまったのである。目の前で！
よってあいつは地獄まで追って来るだろう。まさしく文字通り。そうなれば何処に行こうが何処に隠れようがどう隠れようが、たとえ上手く隠れられても、周りの奴等がチクる。

風見幽香は間違いなく幻想郷最強クラスの力の持ち主だ。そんな奴が全力で人を捜そうとしているのだ。殺そうと、と言った方が正しいだろう。倫理的に正しくは無いと思うが。

そんなの知ったら普通は絶対チクる。俺だってそうする。なんせ庇ったらあんたも同罪、とか言われてしまう。ちなみにあいつにとっての有罪ってのは、すなわち死罪である。さすがにみんな死にたくねーのである。だからチクる。

そういう訳で、下手に誰か居る所にはいけず、隠れる↓見つかったら逃げて時間稼ぐ↓隠れる↓見つかったら…をあいつの怒りが収まるまで繰り返すしかなく、見つかるまで暇なので将棋でも、となった。ちなみに発案顕冴。随分と余裕だな、オイ。

つか俺は関係無いのだ。偶々こいつが花を踏んだ時、近くに居た、というだけなのだから。

「はあ…何で俺まで…。近くっつっても結構離れてただろ」

パチッ…スッ……

「ああ、それはあれだ。つい俺がお前の近くに行って、お前を引っ張って来たからだろう」

パチッ……

「……」

パチッ…スッ……

…あれ？じゃあそれって…

一節目

「テメェのせいじゃねぇか！」

「気にするな。俺は気にしない」

「気にするわッ！何で俺まで巻き添え喰わなきゃなんないんだ?!」

俺の訴えは、涼しい顔して流された。というよりは、将棋の方に集中した、と言うべきか。
どのみち俺は怒るが。

「つかお前、それからはどうやっても勝てねぇだろ、ｊｋ」

「いや、俺は勝ってみせるっ！」

「王と歩だけでか」

そう。こいつの駒は今や王と歩だけなのである。
ちなみに俺がとられた駒は歩三つ。それだけ。
……ちなみにこのゲーム、将棋である。
そう、自分が相手の駒を取れば、自分の駒としてつかえるアレである。

そのゲームで、顕冴の駒は王に歩のみ。歩は全部で2つ。
どうしてそうなったのか、どうしたらそう出来るのかさっぱり分からない、最早ミラクルである。

「ほれ、そんなもんいいから、見つかる前に言い訳考えなさい」

「嫌だ。勝負つくまで考えない」

いやもうお前の駒が王と歩だけの時点で勝負ついてるだろ、とは思うが、まあこいつは馬鹿な上に諦めが悪いので、仕方無いが付き合ってやることにする。

「じぁあほら、早く打ちなさい。待っててあげるから」

「お前はお母さんか」

そう言って、しばらくこいつは考えた。具体的には十分くらい。長ぇよ。何をどう考えたんだ。考えられたんだ。

そして考えた後の答えが

「お前、それ二歩な」

「あ」

しまった、という顔をした後、こちらを見て来た。……無しにはせんぞ？

つか本気だったのか。本気で打った結果が二歩か。

馬鹿だった。どうしようもない程に馬鹿だった。

「ま、待っ「待ったは無しな」…」

俯き沈黙する。なんか凄く悲しそうだ。だが止めない。

考え直す気なんて、無い！

「ほれ、もういいだろ？」

「…良くないっ」

もう涙目である。だめだこいつはやくなんとかしないと。

そう考えた時、突然、俺の後ろの襖が大きな音を立てて開かれた。
……まさか。恐る恐る振り向くと

「見ぃつけた…」

緑色の悪魔が、其所に居た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

「で？何か言い訳は？」
「殴った後に聞くか？普通…」
「何か言ったかしら」
「イイエ、ナニモ？」

見付かってしまい、尚かつ出入り口は塞がれてしまったので逃げようが無く、あのあとすぐさま捕縛→ジャーマンスープレックスという、何とも華麗な流れを見た。ちなみに発見から二秒で顕冴は沈んだ。

…プロレス技なんて、どこで覚えたのか。教えた奴がいたら何故教えたのか小一時間問い詰めたい。

ちなみに俺は回避した。土下座した。

「それで？なぜ私の大事な花を踏み滲ったのかしら？返答次第じゃあ、唯じゃ済まさないわよ」

「…九十九を追いかけてたら、気づかなくって、つい」

「うぉい！さりげに俺を巻き込むな！」

「煩い。こうなったらお前も道連れだ！」

「へぇ、ほぉ、ふぅん。そう、そうなの。良く解ったわ」

「幽香さん？俺は関係ないって解ってくれますよね？」

俺の土下座の意味が無くなってしまうじゃないか！

頼みますっ！神様！今度からは馬鹿にしないで信じますから！

流石のゆうかさんも、俺が無関係だと解ってくれたのか、傘を下げ

た。……そして俺の胸元辺りで固定する。

「お望み通り、二人仲良く吹っ飛ばしてあげるわ」

そして胸元に向けられた傘の先端からは、まばゆい光が集まっていく。

……え？これ、マスパ？

もしかしなくても、どう見てもマスタースパークです、本当にありがとうございました。

……神様の馬鹿ー！

「俺、もう神様信じない」

「元々信じて無いだろお前」

そして、俺達二人は閃光に包まれた。ちくしょー。

一節目（後書き）

やっちまったぜ…

前書いてたやつは間違って消しちまった、じゃあ書き直すかってノリで始まった、始まっちまった今作品。

暇潰しに見て頂けたら幸いです。ゆっくりしていってね！！！

二節目（前書き）

「ほら、起きろ。学校だぞ」

「…うぉう」

顕冴はもぞもぞと起きてすぐさま着替える。着替えると言っても着物から着物にだが。

そのまま出掛けようとしたので、おにぎりを持たせる。俺が握った。

さて、皆お気付きかとは思うが、顕冴は馬鹿である。

知識はあるが考えられないといったタイプの。

そして人間なので、人里の学校に通わせている。寺子屋、と言った方が正しいのかもしれないが。

五歳くらいから十代半ばまでの居る中で、一人だけ見た目はいい歳した大人が混じり、授業を受ける。

ものすごくシュールである。

本人もそう感じているのか、意識がはっきりしてると「行きたくない」とか言っているが、俺としては馬鹿を直して貰いたいわけで。

無理矢理に意識がはっきりとしない内に行かせている。俺が連れて行っている訳ではない。

それは何故か。答えは簡単、いい歳こいた大人が、これまたいい歳

こいたオッサンに無理矢理引き摺られて授業を受けさせられるのだ。
見られたら一生物の恥である。

さすがにそれは嫌らしく俺が「行かないのなら引き摺っていくぞ」
と言うと、その光景を想像し、その後に起こる事も思い浮かんだの
か、顔を紫色にして走って出て行った。

まあ、そんなこんなであいつは学校にいるのだが、如何せん俺は暇
なのである。何せ話し相手が学校にいるのだから。

じゃあ他の妖怪の所に行けばいいじゃないか、って事なんだが、結
論から言おう、無理だ。

過去俺は色々やらかしちまったのである。色々。詳細は省く。
で、そのせいで妖怪には多分嫌われてる。妖怪の友達なんていねぇ
のだ。人間には知り合い程度ならいるが。
ちなみに色々やらかしたのは俺『だけ』で、顕冴はやらかしてはな
く、普通に妖怪にも知り合いはいる。

で、そんな訳で暇つぶしには妖怪の所には行けないので。

俺は今、人里の学校の窓から中を覗いている最中なのです、まる。

二節目

さて、覗いてみたはいいが、うん。やっぱり覗きはいかんね。先生が睨んでいらっしゃる。
俺の立ち位置は先生から顕冴を見た所の真後ろなので、顕冴は自分が睨まれてると思って挙動不審になっている。面白いなこいつ。

俺としてはこのままこいつの面白動作を見ていたくはあるが、先生がガン見である。視線でどっかいけ、邪魔だ、とか言わんが如くなので。

残念だが、
大変残念だが、
残念すぎて後ろ髪どころか上半身持ってかれそうな気持ちなのだが、退散する事にする。…残念だなぁ。

肩を落とし、渋々博霊神社にでも行くか、とか考えてた所

「九十九。お前ちょっとこっちに来い」

先生に呼び止められた。なんでさ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

先生は俺に授業をしてほしい、との事で呼び止めたそうなのだ。
いや先生で十分だろ、知識的にも技術的にもと思ったが、

「いや、暇そうだったからな。それに何か羨ましそうだったし」

との事で。俺が顕冴の痴態を眺めているのが、先生には子供達に物を教えたそうにしていた、と映ったらしい。
それだけではなく、俺に社交性を身に付けさせるための練習にもなるだろうから、とのお言葉を賜った。嬉しすぎて涙が出てくるね。

しかし、教えると言っても、こちとら生憎人に教えられるだけの学がないのである。技術もだ。
んなもんあったら顕冴には自分で教えてる。
というわけで何を教えるか考えてるのだが……
うん、さっぱり思い浮かばん。
思い浮かばないのは仕方のないことなので

「えーそれでは、今から保健体育の実習編を始めたいと思います」

「九十九先生！一体何考えてるんですか！いいぞ、もっとやれ」

「ははは、このエロガキめ。というわけでどうやら賛成は顕冴の一票、反対はゼロ、後は何するのか良く解って無いようなので、実際に見て知識を深めて貰おうと思う。というわけで、実行は私九十九、お手伝いさんに慧音先生にしてもらう。じゃあ早速実技に移るが、まずは子供の作り方……」

そこまで言って先生の突っ込みが無いことに気付く。

いつもなら「保健体育の～」の辺りで突っ込みが入ると思ったんだが……あれ？

なんかおかしいなぁと思いつつ先生の方を見ると、

なぜだか泣いていらっしゃった。……あれれぇ？

泣くといっても涙だけ流し、表情は無い。無表情だ。

正直言って恐い。ガチでチビリそうである。泣いてるのに無表情って。

そんな先生の状況に俺と子供達が戦々恐々としていると

「九十九先生…ちょっっと此方へ」

そんな底冷えのする声で俺を呼んだかと思うと、俺の腕を掴み外に連れ出そうとする。
こいつはヤベェ。俺の第六感が目覚まし時計の十倍くらいの大きさで警報を鳴らしている。
あと掴まれた時睨まれた。すこしチビッた。

あ、俺これ死んだな。

それを悟り、部屋から連れ出される寸前。ちょうど出入り口の辺りで俺は子供達に

「おい、子供達」

『…？』

「真似、するなよ…？」

言いながら捕まれてない方の腕で敬礼する。大体は何の事だか分かってないようで困惑しているが顕冴は敬礼を返した。
まるでこれから死地へ赴く戦友へ送るかのように。
あるいは戦死した者へ手向けるように。まあ間違いじゃない。
顕冴のその姿を見て、多分面白半分だろう、周りの子供達も敬礼をし出した。

俺はそれを見届け、

（俺、生き残れたら、妖怪の友達作るんだ…）

なんて事を考えながら先生に引き摺られて教室から出て行った。

その後、里中に一人の男の叫び声が響き渡ったという。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

先生が九十九を連れ出して十分ぐらい立つと、先生一人だけ戻ってきた。

「あれ？けーね先生、九十九は？」

自分がそう聞くと先生は惚けた顔で

「九十九？誰だそれは？」

…触らぬ神に、祟りなし。自分は何も聴いてないし何も見てない。

九十九？誰だっけ？

自分がなんでもないです、というとけーね先生は変な物を見る目で

「まあ、何時もの事か」と呟き授業を再開するぞ、と仰った。なんですか、何時もの事って。

釈然としないながらも、仕方ないので授業を受ける。

といっても小学生くらいの勉強は解るのだ、自分は。なのにあいつは学校に行かせたがる。ん？あいつって誰だっけ？

まあ、わからない事はなく、何時も通りに授業は進み、特に問題も起きることはなく、今日の授業は終わった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「で、顕冴。お前、大丈夫なのか？」

今日の授業は終わり、みんな帰ろうとしたところ、先生に「顕冴、お前はちょっと残れ」と言われたので自分何かしたっけ？と思いつつ、他の子供達が帰るまで教室で待ち、最後の子供を送ってきたのか、けーね先生が教室に戻り、開口一番にそう聞かれた。

「大丈夫って、何がですか？」

「何って、ほら、九十九の事だ」

九十九？誰だっけ？そんな感じに自分が思い出そうとしていると、先生は気付いたのか

「……お前、もしかして忘れたのか？」

「はい」

先生は溜息を吐き、立ち上がって自分の頭を掴んで

「とりあえず……思い…出せっ！」

そう言いながら、思いっきり頭突きをしてきた。

痛い。
ものすごく痛い。
自分が頭を抱えていると

「どうだ?思い出したか?」

と、そう問いかけてきた。何をですか。
先生は九十九の事だ、と言ってきた。

「九十九?やですよ先生。自分が九十九の事忘れるわけないでしょう?」

そう答えると先生は何故か肩を落として「もういい…」と呟いた。
だからなんでですか。
そして先生は顔を上げて

「で、お前は大丈夫なのか、と聞いているんだ」

「何がですか？」

「九十九の事だ。あいつ、今日は子供達の前で『今日は保健体育を』とか言っていただろう？そんなんだから、な。お前があいつに何かされてないかって思ってな」

「九十九が、自分に？」

「そうだ」

そこまで聞いて、ようやく意味がわかってきた。

「……ぷっ…くくっ……」

「ど、どうした？」

「あはっ…あっはっはっはっは!!九十九が?ないない、無いですってそんな事!ぷっ…くくっ……」

何故そんな事を聞くのか!さっぱりですよ。ああ、お腹痛い。無いでしょ、普通は。何故そんな事になるのか、本ッ当にわからない。

「あいつは何もしませんよ。本当に」

「そ、そうか…。それはそれで駄目な気もするが。何も無いのならいいんだ。うん」

「そう…ですか…?」

「ああ、そうだ。さて、もう遅い。お前ももう帰っていいぞ。明日もちゃんと来いよ?」

「…はぁい。じゃ、先生さようなら」

「ああ、さようなら」

こうして、挨拶もそこそこに、自分の家に帰ることにした。学校のすぐそこに、なんかゴミが落ちてたけど、大きすぎて運べない。ま

あ先生が片付けるだろう。
そう考え、止まっていた足を動かすことを再開し、再び走り出した。
今日のご飯はなんにしよっかなー！

ちなみに家には誰もおらず、一人寂しく自分でご飯を作って食べました。いつもの事か。

＝＝＝

「…ん？九十九、なぜこんなところで寝ている？もう夜だぞ。さっさと帰って家で寝ろ」
「……はい。なんかもう、色々とすみません。」
「ん。気にするな。先生としての役目だ」
「いやそうじゃ…なんかもういいや。じゃ、先生さよなら～」

「ああ、さようなら。顕冴に悪いことしちゃだめだぞー！」

「いや、流石にそこまで変態じゃねぇ」

三節目（前書き）

俺は今絶賛後悔中である。

何が、と思うだろうが、まあ黙って聞いて欲しい。

どうしてこうなった、という気持ちで一杯だ。それというのも原因は俺。

正確には昨日の俺の発言なのだが。

三節目

さて、昨日『生き残れたら妖怪の友達作る』との発言をしたのを覚えているだろうか？
そう、生き残っちまった。やべぇ。妖怪の友達作んなきゃ。

なぜそんな事律儀に守ろうとするのか、それは一言で言っちまえば意地である。
自分で自分から言った事ぐらい守らなきゃぁ、人として駄目な気がするのである。
俺は人じゃぁないが。

まあともかく、昨日言っていたとは思うが、俺は妖怪に嫌われている。多分。
何せやった事がやった事なのだ。どうしてやっちまった感がありまくる。
反省している。後悔はしていない。

例えるならあれだ、朝チュンってやつだ。
勢いでヤッちまって、朝起きたら自分のやらかした事に気が付く。
そんな感じだ。
人間関係的に悪くなっちまうが、やった事はその、ナニなので、悪くはないのである。
だから後悔はしない。それは相手に失礼だからな。
ッつー訳で、反省はするが後悔はしない。俺はこれからも繰り返すのである。

……あれ？俺これ最低な人間の思考じゃね？

で、あー……、なんだっけ？

あぁ、そうそう、妖怪の友達だったな。
うん、それ無理。初めて自分の言った事に挫けそう。

いやいやいや、ここで諦めたら、アレだから。思考が危険な最低な奴って事になるから。
…あながち間違いじゃぁ、なくね？

やべぇ、もう此処で諦めてもいい気がしてきた。というか諦めなくても現在の皆の俺に対する評価が多分『思考が最低で残念で変態』だと思う。

もういいよその評価で。間違っちゃいないのだ。倫理的に間違ってはいるが。
や、この思考もその評価も全部俺が撒いた種なんだがな。よくここまで育ったな。

…いや、よく考えろ。
別に俺は良くてもだ。俺と一緒にいる顕冴はどうなるのだろう？
せっかく今いい人間関係を築けているのに、もしも『思考が最低で残念で変態』な俺と一緒に住んでるって事に気付かれたら、どうなる？
下手するとあいつまで変態扱い。あるいはその変態性の被害者か。

……一瞬、それも面白そうだと思った俺を誰か殴ってくれ。割と全力で。
それは流石に可哀想である。うん、可哀想だ。
だから一瞬でも『いいかも』と思った俺を（ｒｙ

……やれやれ、仕方ない。顕牙の為だ。友達作りますかな。

「ん？　あれ、九十九？　どこに行くんだ？」

「ちょっと妖怪の友達創ってくる。」

「…………は？」

惚けた顔した顕牙置いて、俺は

（まずは、博麗神社にでも行くかなぁ…）

そう行き先を考え、出発した。……なぜ妖怪の山じゃないかは聞くな。チキンって言うな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ん？どうした顕冴。なんだか元気がないな？」

「…九十九が、妖怪の友達を創るって言ってた……」

「…何？」

「だから！九十九が妖怪の友達を創るって言ってたんです！『作る』じゃなくて『創る』ですよ！
ああ、なんだこれ！天変地異の前触れ？！」

「落ち着け。別にいい事じゃないか、友達を作る事は。妖怪の、しかも『創る』っていうのは気にはなったが」

「これが落ち着いてられますか！いいですか？九十九は『人間なら知り合いくらいならいる』とか見栄張ってますが、それは人間の友達すらいないって事なんです！人間の友達がいないのに、どうして妖怪の友達が出来ましょうか！？…って、あれ？先生？なんで先生が落ち込んでるんですか？」

「…そうか、私は、友達ですらなかったのか……」

「先生？先生？」

まあ、上の事は事実だし、人間にすら友達がいないって事は。
それはつまり、友達を初めて作るって事。
ああ、だから『作る』じゃなく『創る』ね。九十九にとっては初め

ての事なのか。

…友達って、創るのではなく、いつの間にか出来てるものだと思うんだけど、そこのところどうだろう。

＝＝＝

何かとても失礼な事を言われてる気がする。

失敬な。俺も友達ぐらいいたさ！……ごめんなさい嘘付きました。

残念ながら友達なんて生まれてこの方いねぇのだ。多分。

他人が自分をどう思ってるかなんて俺には解らん。解る奴もいるが。

そんなもんは特例である。

まあともかく、さて、俺は博麗神社に着いた訳だが…

やっべ緊張してきた！そこ、今更ァ！？とか言わない。

なんせ友達なんて創んの初めてである。だから『創る』なのだが。

緊張するのは仕方ない。うん仕方ない。

その緊張を超えなきゃ、俺に明日は来ないんだ！社会的な意味で。

そしてなんとか緊張を抑え、境内の中に入る。

そうだ、ここで宣言でもしておくか。…俺が逃げ出さないように。

うん、それがいい。

「不肖『真経津九十九』《まふつのつくも》！友達を「帰れ」……」

そこに居た博麗の巫女に、止められました。あれ、おかしいな。目から汗が…

「さすがにそれはないんじゃないの？博麗の巫女さんよぉ。ちょっと泣いちまったじゃねえか」

「煩い黙れ。アンタが居るとロクな事がないのよ。さあ解ったらとっとと帰りなさい」

「酷い。取りつく島もねぇ。だったら作るまでよおとっつぁん！神社の中に入っちまえばこっちのモンよ！フフハハッッッ！！！」

「あ、こら！まちなっ…っさい！」

うお！弾幕撃ってきやがった！
だがそんな事で俺は止められんぜ！俺は絶対神社の中に入る！……
あれ、目的変わってね？

まあいい。とりあえずは中に入る！話はそれからだ！

「ああ…もうッ！止まりなさいッての！」

「止まれと言われて止まる奴が居たら、奉行はいらねぇんだぜ！」

「…ちょぉっとイラッときたわ。決めた。アンタぶっ飛ばす」

言いながら何かでかい弾が飛んで来る。流石にあんなの当たりたく無いので横に飛んで回避。そしてまた全速前進だ！

そしてもう一発飛んで来たのでそれも間一髪で飛び込んで回避。回避ついでに神社の中の部屋に侵入成功。ふう、危ねぇ危ねぇ。そうやって一息つき、さてとりあえず立つかと思って

「あら、御機嫌よう。真経津九十九？」

「や、やあ。ご、御機嫌よう八雲紫サン。ほ、本日はどのようなご用件で？」

幻想郷最強の一角、紫さんがいらっしゃった。うわぁい、嬉しいなぁ。

「いえ、ね？本当は只遊びに来ただけだったけど…そうね、予定変更しましょう」

「…で、ですからどのような…」

「大丈夫よ。あなたは何もしなくて結構よ。そう、何も、ね？」

「……そ、それは動くな、という事でせうか？抵抗も回避もするなと！？」

「あら、良く解ってるじゃない。あなたのそういう所、嫌いじゃないわよ？」

「その台詞はもっとドキドキする所で言って欲しいなぁ！嫌今もドキドキだけどね！悪い意味で！」

今も生きていられるかドキドキで一杯さ！

「そう、良かったわね。辞世の句はそれで終わり？何か言い残す事は？」

「ゴッド。俺何かしましたか？」

「色々ヤッてきたじゃない。色々と」

「ですよねー」

次の瞬間、俺は光に包まれた。なんか最近こんな事ばっかりな気がする。

＝＝＝

「で、何であなたが此所にいるのかしら？」

あのあと俺は奇跡的に助かり、現在博麗の巫女と紫さんに尋問されてます。正座させられて。

「何故って…友達造り？」

「寝言は寝てから言いなさい」

「そんな、酷い！」

さすがにあんまりだ！や、普段の俺が聞いたら俺も疑うけど。

「気持ち悪いから止めなさい。……で、それは本当？」

「おう、本当よ」

「…何で、今頃なのかしら？」

それは顕冴が変態扱いされないように、と言いたい所だが、言えば俺が顕冴と一緒に住んでる事まで話さないといけなくなる。それは絶対駄目だ。

俺が顕冴と一緒に住んでる事は秘密なのである。先生は別だ。一応顕冴を教えて貰ってるしな。色々あるのだ。先生って。

…さて、どう答えたものか…。仕方ない、また俺の変態伝説を一ページ加えるとしよう。

「ええ～。いいじゃん理由なんて。それより俺と友達になってよ～」

必殺、駄々を捏ねる！いい歳こいたおっさんがやると、ただの変態ッ！

「ええいっ！気持ち悪いわッ！」

「ねぇ～。いいじゃん。なってなってなって～！」

「ああ、駄々を捏ねるな！子供かアンタは！」

「なってくれなきゃ俺帰らない」

「ああもう鬱陶しい！紫！何とかしなさい！」

「なんとかって…私にどうしろと？」

「こいつが欲しいのは『妖怪の友達』！妖怪はあなたしかいないじゃない！」

「だからって「いいから、何とかしなさい」…もう。解ったわよ。ほら、私が友達になってあげるから、さっさと帰りなさい」

「それは本当か？！」

「ええ、本当」

「よっしゃ！初めての友達ができた！これで帰れるぜ！」

よし、友達も出来たことだし、そろそろ帰るか！

「あ、本当に帰った。いいの？紫。いいだした私が言うのもなんだけど、あんなこと安請け合いしちゃって」

「…悪くない、と思ってる自分が居るわ……」

「……え？」

＝＝

「ただいま～」

「おお、お帰り。で？どうだった？」

「おお！聞いてくれ！なんと一人出来ました！」

「…え？」

どうしたんだ?そんな鳩が鉄砲喰らったような顔して。まあつまりは死にそうなって事だが。

「…本当にか?」

「ああ、本当だ」

「教えてくれ!その友だちになったっていう奇特な奴の名前と方法を!」

「奇特って…まあ、友達になったのは八雲紫。方法は駄々を捏ねた」

「ああ、うん、まあ…その…なんだ。よ、良かったじゃないか」

「ああ、そうだな」

なんかあまり嬉しくなさそうだな。まあいいか。

「飯もう食ったか?」

「いや?九十九が帰ってくるの待ってた」

「律儀だねぇ、ホント。まあいいや。俺が作ろう」

そうして無難に料理をして、食って、風呂入って寝た。今日の俺の一日はこれで終わり。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……どうしましょう」

「どうしたんですか？　紫様」

「あんなのと友だちになんてなるんじゃなかったわ…死にたくなってきた」

「？？？」

一人後悔した人がいたそうな。

四節目（前書き）

今迄のあらすじ
紫さんが友達になった。キタ！これで勝つる！

初めての友達ゲット！生まれてから百年以上、やっと初めて友達できました！
何？少ない？何とでも言え！
ハハハッ！もう恐れる物はない！何せ紫さんと友達になれたからな！
『あの』紫さんとだ！幻想郷最強の紫さんを友達に出来たんだ。他に出来ない奴がおろうか。
否！いない！
俺を止められる者など、誰も、何も無いっ！

「じゃ、出掛けてくる！」

「おお。何処へだ？」

「それは秘密だ。見ていろ、俺は幽香と友達になってくる！」

「そうか、頑張れ」

「おうよ！」

これからは、俺の時代だぁ！

そう思っていた時期が、私にもありました……

四節目

「で？何で私にあんな事してきたのかしら？」

今俺は風見幽香さんに尋問されています。
何故かって？ハハハッ、解るだろブラザー。
調子に乗ってやっちまっただけさ。やっぱりあれだね、犯罪行為はダメ、絶体。
何やったかは想像にお任せする。ルパンダイブ、とだけ言っておこう。

そんな訳で俺は花畑のど真ん中で正座させられ尋問されてるんだ。
傘で突かれながら。
この傘が地味に痛い。何発くらっても死にはしないが死なない程度に痛い。
丁度良い痛さと言うべきだろうか。なんか長い間続けられてるからだんだん、心なしかフワフワしてきた。

「…ちょ、何その気持ち良さそうな顔。気持ち悪いわね」

「気持ち良いのか悪いのかどっちだ。後俺は気持ち良くなんかない。ただなんかフワフワしてきただけだ。」

「それを気持ち良くなったって言うのよ。というより何？本当に傘で突かれて気持ち良くなってるの？変態だとは思ってたれけど、ま

さか此処までとわね。死んだ方が良いんじゃない？というか死になさい」

そう言いながら傘の突く強さと速さを増して突いてくる。
何か無性に悔しい。でも何か気持ちいい！
だが流石に気持ちいいとはいえ、強くなった突きでこれ以上突かれると死んでしまうので、残念だが脱出する。

「フフフッ。残念だが風見幽香、これ以上突かれると流石に死んでしまう。今日の所は退散させて貰うよ」

つくもはにげだした！

「あら、まだ理由を聞いていないのだけど。それを話してから死になさい」

しかし、まわりこまれた！！

「そりゃないぜ幽香さん。それより何、理由が気になるの？もしかして私を好きでもない奴がそんな事するなって言いたいの？あらまぁ幽香さんったら意外と乙女…解った御免なさい話す話しますだからマスタースパークは止めて下さいお願いします」

「駄目よ。あなた信用ならないし、学習しなさそうだから。ありがたく思いなさい？」

「ありがたくないそんな気遣い！あ、待って！止めて、撃たないでー！」

そうして俺は、光に呑み込まれた。…此処んところ毎日なような気がする。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マスタースパークを何とかやり過ごした俺は、休む真もなく幽香さんに拷問されている。

尋問ではない。拷問だ。

関係無いけど拷問と肛門って似てるよね。

まあ閑話休題。

俺が友達を創っている事、初めの友達が紫さんな事、そして俺の変態性について正直に話した。
何？最後のはいらない？まあそう言うな。
で、危機終わった幽香さんは「あんたが友達を…ねぇ」とか、「紫をからかう種が…」とか言ってた気がするけど、僕は何も聞いてない。
強く生きてください紫さん。

で、理由も話した事だしそろそろ帰ろうかと考え、じゃ早速と帰ろうとして立ち上がろうとしたら、それに気付いた幽香さんに傘で足払いされました。

「あら、誰が帰っていいなんて言ったかしら？まだ一番大切な事聞いてないわよ？」

「さいですか。で？聞きたい事って？」

「…態度が悪いわね。まあいいでしょう、キリがないし。じゃあ聞かせて貰うけど、なぜまた私を襲おうとしたのかしら？」

「ムシャクシャしてやった。反省は「殺すわよ？」無理矢理から始まる関係もありかなと思ってました！マジ調子こいてました！っせんしたっ！」

言うのと同時、或いはそれより速く土下座を敢行する。うん、我ながらいい土下座だ。

しかしそこは流石幽香さん。下げた俺の頭を容赦なく踏みたくる。
そりゃもうグリグリと。地面にめり込む程に。き、気持ち良くなんかないんだからねっ！
…やばい、自分でやっといてなんだけど、男がやるとこの台詞やっぱ気持ち悪いわ。
しかも幽香さんは踏みたくるだけじゃ足りないらしく、

「あなた、今日から私の玩具ね」

「下僕ですらない？！」

そんな事を抜かしやがりました。
玩具って、人間扱いですら無いんですか幽香さん。
残念だが俺はそんな趣味はないので全然嬉しくない。しかも拒否権無しか。
理不尽、さすが幽香さん理不尽。

というか玩具って…俺弄ばれちゃう？…あれ？なんか別にいい気がしてきた。
…どうしよう。まあ、どんな事をされるのか聞いてから考えよう、うん。

「あの、つかぬことを伺いますが、『玩具』って一体何される物な

んで？」

「勿論遊ぶためよ。肉体的にも壊すのもいいし、精神的にも壊すのもいいわね」

マインドブレイクっすか！？流石にちょっとアレだが、まあ、耐えられない訳では無さそうだ。
別にいいかな、と思い返事を返そうとすると、それを遮るように

「一人で遊ぶのも何だし、そうね、紅魔館に時々くれてやろうかしら。妖怪の山に投げ入れるのも良いわね。あるいは幻想郷中で晒し者にしようかしら？」

アウトー！流石にそれは耐えられない！紅魔館の妹様とかメイド長とかに比喩なしで殺されるわ！
流石にそれは死ぬ。晒し者とか、精神的に死に絶えるわ。
だがそれ以上に危険なのは妖怪の山に入れられる事か。
美人美女にやられる分は構わん。だが野郎だけは御断りだ。
妖怪の山は野郎が多い。女もいるが、やっぱり野郎が圧倒的に多いのだ。
嫌である。中には　や　ら　な　い　か　な奴も居るかもしれん。ウホッな展開は断固拒否する。俺はノンケなんだ。

という訳で、

「だが断る。まあ幽香さんの玩具は悪くないかなと思っている。というかそれで勘弁して下さいお願いします」

「あら、飽きたし気が済んだから返す前の冗談だったのだけど。そう、本人がなりたいのなら仕方ないわね。あなたを私の玩具にしてあげる。ありがたく思いなさい。」

………なん…だと…？

つまりは墓穴を掘ったと。終わった。俺終了のお知らせ。

次回から新番組『顛冴の幻想郷日記』はじまります。

嘘だっ！

まだだ、まだ終わらんよ！こうなったら墓穴は地上に出るまで掘抜くまでよ！

玩具生活楽しんでやらぁ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝

「ただいまー」

「おう、どうだった？」

「幽香さんの玩具になりますた」

「………は？」

「これから俺、玩具生活楽しむんだ…」

「だめだこいつはやくなんとかしないと」

＝＝

「はぁい紫、貴女、九十九と友達になったんですって？」

「げっ…もう知られてるの？…そうよ。何？あなた、羨ましいの？」

「まさか。そんな訳無いじゃない。それにあいつは今日から私の玩具よ」

「……はい？」

「何？羨ましい？」

「そっ、そんな訳「今なら貴女にも遊ばせてあげるわよ」乗ったわ」

こんな協定が結ばれていたそうな。

五節目（前書き）

自分こと顕冴が九十九と一緒に暮らしている理由。
それは自分が幻想郷に迷い込んですぐにあった会話のせいだ。
ちょっと語弊があった。正確には九十九のせいだ。

あいつは当時から変態だった。まあ、詳しくは言わなくても解ると思うけど。

当時の会話を再現してみようと思う。残念だが全てではないし、当時の自分の心境とかも、場面の説明とかもない。
再現するのは会話だけ。

もう八年も前の事だから、仕方ないっていえば仕方ないが。

……面白くもなんともないから、期待するなよ？

五節目

「おや、始めて見る顔だね。元気かい？まあ倒れてるんだから元気じゃないんだろうけど。して、君の名前は？大丈夫、別に取って食おうって訳じゃないさ」

「…顕冴。白峰顕冴（しらみねけさ）」

「おや、存外素直だね。難しい歳頃だろうに。僕としては助かるんだが。さて、君はこれからどうする？おすすめは僕と一緒に暮らす事、だね。君のいた所に帰る、なんて事は残念だけどできないよ」

「…なんで…」

「それはね、此所は周りを結界に囲まれていてね、特別な事がない限り外に出る事も、外から入る事も出来ないんだよ。君は外に出ようとしてたから解るだろう？」

「……」

「それにね、此処には妖怪が出るんだよ。…その様子じゃ、もう遭ってるみたいだけど。よく生き延びたね。まあそんな訳で人間一人で過ごすのは危険なんだこの辺は。だから僕と一緒に住もうって言っているんだけど、どうだい？」

「……解った、それでいい。で、自分は何をすればいい？」

「何を、とは？はは…ぁ、君もやっぱり難しい歳頃のようだね。別にやましい事もやらしい事もするつもりはないよ。安心していい」

「じゃあ、なんで…」

「助けたかって？それは、一言で言ってしまえば趣味だね。僕は人と関わるのが大好きでね。そのくせ過去色々やってきてしまってね、色々な人に嫌われてると思うんだ。まあその殆どが妖怪なんだが。もう解るだろう？つまりは僕は何も知らない無垢な君を僕色に染め上げようって魂胆なのさ。こんなオッサンに見つかったのが運の尽き、犬に腕を噛み千切られたと思って諦めるんだね」

「そんなの、諦めきれるか…」

「ははははっ。まあ突っ込みが出来る分にはまだ大丈夫だろう。さて顕冴、君はこれから僕と一緒に住んでもらうんだけど、それに当たってまずは君に僕の子供になってもらおう」

「……は？」

「おお、良い顔良い顔。僕はね、同じ家に住むのなら家族じゃないとっていう古臭い考えを持ってるんだ。だから子供になってもらう。これ決定ね」

「なんだ、それ…だからってなんで子供なのさ…」

「子供以外に何かあるかい？」

「……ないな…」

「だろう？じゃあこれからよろしく顕冴。僕は真経津九十九。呼び方はなんでも良いよ？お父さんでも父様でも親父でもおじさんでも

九十九でも。名字は禁止ね」

「じゃあ九十九で」

「速いな。まあいいや。あ、そうそう。これから幻想郷に住むに当たってだけど、誰にも僕と君が一緒に住んでる事とか、ましてや君が僕の子供になった事とかは、誰にも言っちゃいけないよ？面倒くさい事になるからね」

「ん、解った」

「おお、素直素直。やっぱり君はいい子だ。じゃあ改めて。これからよろしく顕冴」

「ああ、よろしく九十九」

「おや、存外元気だね？もしかして拾われるの待ってたのかい？とんだ子猫だね。…解ったごめん冗談さ。睨むな睨むな」

＝＝＝

まあ、そんな感じで一緒に住み始めたんだが、九十九は猫被ってて本当はズボラで口汚い事が解ったり、自分が学校に通う事になって、

けーね先生と仲良くなったり、仲良くなって家庭の事を聞かれたから九十九と住んでる事を話したり（親子だという事は話していない。これは本当に自分と九十九だけの秘密だ）、それを聞いて先生が九十九に怒鳴り込んでいったり。まあ、他にも色々あった。
けど、今迄過ごしてきた中で、九十九が自分にしてくれた事なんて何もなかった。
ご飯だって自分で作ってたし、戦闘に関しても指導もしてくれなかった。
唯一してくれた事といえば軽い弾幕の張り方ぐらいか。それも自分には才能があったのか、簡単なものがすぐに張れたので指導もしてくれなくなった。

だからこの前自分にご飯を作ってくれた時は、実は嬉しかったのだ。
やっと、家族として認めてくれたのかと。そう思ったんだ。
気紛れなのかもしれない。だけど嬉しかったのだ。

やっと少しは親子らしく過ごせるのかもしれない。その時はそう思ったぐらいだ。

だがその認識も甘かったのかもしれない。

というかそう思った自分を殴り飛ばしたい。割と全力で。

皆このテンションの変化についていけないと思う。だが今の状況を見てくれればきっと自分と同じ事を思うはずだ。

まあ、口で言っても解らないと思うから、実際に見てもらうことにしよう。

「あら、なんでそんなに気持ち良さそうなのかしら？まさかとは思うけど踏まれるのが気持ちいいの？あなたは変態だと解っていたけど、度を超してるわね」

「ふぐぅ！うう！」

「あらあら、随分気持ち良さそう。縛られて踏まれて、何がいいのかしら。そんなに幽香に踏まれるのが気持ちいいの？この変態！」

「ううぅ…ふぐぅ…」

「？もしかして、まさかとは思うけど紫に変態って言われて感じてるのかしら？変態にも程があるわよ？死んだ方がいいんじゃない？」

「ううう…」

だめだこいつらはやくなんとかしないと。

＝＝

やあ、俺九十九。

突然の事で驚いてるだろうけど、俺も驚いてるんだ。

朝起きて飯食ってたらいきなり幽香さんがきて、俺を傘で殴り飛ばし、縛られた。
うん、この時点で訳が分からないよね。
しかもそのすぐ後に紫さんまで来て、幽香さんと一緒に俺を虐め出したんだ。
紫さんとは友達な筈なんだけど、なんでだろうね？

だから俺は全く持って嬉しく無い。嬉しくなんてないんだからねッ！…本当だよ？

だが人っていうのは慣れる生き物だ。慣れようとする、と言った方がいいのかもしれない。
人はちょっとの事で心が壊れる。持続して嫌な事を受け続けたりするだけでとかね。
だから嫌な事を良い事にしようとするんだ。皆もこんな経験はないだろうか。
嫌だ嫌だと思っていた習い事、習慣などを続ける内にそんなに悪く無いかな、と思ってしまった事とか。
始める時はあんなに嫌だったのに、今ではそうでもない、という事が。

何が言いたいのかというと、スマン。

ガチでだんだん　気　持　ち　よ　く　な　っ
て　き　た　！！

…うん、ごめん。変態だね☆

だが悪く無いと思ってる自分がいるんだ。
…うん、別にいいんじゃね？

……いやいやいやいや！！良く無い、良く無いぞ俺！
だが悲しいかな、自分の意志じゃ抜け出せない。
この気持ち良さから抜け出したく無いと体が思っているのだ。

…アレ？俺コレ末期症状じゃね？
……どうしよう…？

ああもうっ！こうなったらさっきからずっと突っ立ってる顕冴に頼むしかあるまいッ！

「顕冴！後生だ、助けてくれ！無理なら、せめて、せめて人をぉぉ！」

「え？責めて責めて人を？…そうか、そこまで変態だったのか…。

仕方ない、よな…。悲しいけど、それが九十九の望む事なら…ッ」

「違うわッ！」

馬鹿だったァァァッ！どうしようもない程馬鹿だった！
何が望むならだよ！望んでねえよんな事！
しかも何だ小声で「先生でも」って。あれか、慧音先生呼んでくる
気か！死ぬわ！

ん？いや待てよ？もしかして先生なら止められるんじゃね？これ。

……よしッ！顕牙グッジョブ！頼んだぞ！割と切実に。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

結論から言おう、助かりました。顕牙は宣言通り先生を連れてきて、
この惨状を見た先生が爆発。
各人に頭突きをかまし、説教もかますという先生ぶり。
普段なら紫や幽香さんがそれに従うとは思えないんだが、余程その
時の先生は恐かったらしく、以外に素直に説教されていた。

まあ、そこまでは良かったんだが、呼んで来る時に顕冴がどういう呼び方をしたのかよく解らんが、激しく俺のことを誤解してらっしゃった。
まあ、あれを見れば誤解も何もないが。

「顕冴は今日から家で預かる」とか「お前といると顕冴が危ない」とか言ってる先生をなんとか宥め誤解を解き

「それで？何か申し開きは？」

現在に至る。という訳だ。ちなみに紫も幽香さんも帰った。嵐の様だった。というか嵐そのものだった。

「申し開きも何も、何の事かさっぱりです」

「お前の変態性についてだ。お前は変態だという事は解っていた。だがまさか此処までとは思ってなかったぞ。顕冴も思ってなかったみたいでな、私を呼びに来たとき泣いていたぞ？」

初めて聞いたぞそんな事！え、マジ！？泣いてたの？
珍しい事もあったものだな。
って感心している場合じゃないな。

そうか…泣いてたか…。子供泣かす父親とか…

あ、ヤバい。ちょっと死にたくなってきた。

「…おい。どうしたんだ？いきなり泣き出したりして」

「いや…なんかもう…死なせて下さい…」

「待て、早まるな！」

「離して下さい！俺なんか人に虐められて感じちゃう変態なんです！構わず死なせて下さい！」

「お前がいなくなったら誰が顕冴の面倒を見るんだ！？」

「あいつも、もういい大人なんだし自分一人で生きていけます！それにいざとなったら先生が面倒みればいいじゃないですか！？」

「それもそうか。よし、逝っていいぞ」

「態度が百八十度変わった！？」

そんな、ひどい！

まあ、俺も思うが。

そうですか。変態は死ねと。ですよね。

「そんなに落ち込むな、冗談だ。あいつはいくら見てくれは大人でも、お前にかまって欲しいんだと思うぞ？この前学校にお前が来た事があったな。あの時の顕冴は楽しそうだっただろう？実はな、あいつは学校じゃ放課後ぐらいにしか笑わないんだ」

「……」

「いくらなんでも全く笑わないって訳じゃあない。子供達と笑って過ごす事も勿論ある。私と話す時とかもな。でもそれは慈しむようだったり、友達に向けるような笑みでしかないんだ。」

「……」

「私は、あんな子供みたいに嬉しそうに笑う顕冴を初めて見た。顕冴には必要なんだよお前が。だから、な？」

「……」

「お前の変態、なんとかしよう、な？」

「結局はそこか」

ちょっと感動した俺の気持ちを返せ。

というか治せるならそうしてるわ。

「治せるならそうしてます。治らないからこんなんです！」

「大丈夫だ。私も手伝うから。なんとかしよう、な？」

「……え？何で？」

「これも顕冴の為だ。いくら何でも一緒に住んでる奴が変態っていうのはあれだろう？」

「…まあ、そう思ったから友達を造り始めたんだけどな」

「そうなのか？じゃあなんで玩具扱いだったんだ？」

「…なんでだろうな」

本当に、なんでだろうな…

「…なあ、紫と友達って、本当か？」

「本当さ！だって本人に頼み込んだんだもの！」

そうさ！友達になってあげるって言ってたもの！

「…それは本当に友達、とは言わないぞ」

「え？マジで？」

そうだったのか！知らなかった！

「はあ…いいか？友達というのは頼み込んでなってもらうものじゃないんだ。明確な基準なんてない。それに、初めて友達が出来たと言っていたが、私はお前とは親しい、とまではいかないまでも、友人だとは思っていたんだがな」

「え？そうなのか？それにしては確認とか無かったし、あまりに普通だったじゃないか」

「普通は友達か？なんて確認しないさ。自然になってるものさ、友人なんて」

「そう…なのか…？」

「そうさ、そんなものさ」

そんなものか。流石先生。良く知っていらっしゃる。

「いや、それはお前が知らなさすぎるだけだと思うぞ？」

「そうなのか？」

いやぁ、今回は色々解ったなぁ。俺友達いないと思ってたし。

「…正直、お前と顕冴どちらの方が上か解らなくなってきたぞ…」

スマンね。本当に。

「さて、お前の変態性についてだが、まずは紫と幽香との関係をどうにかしようか」

「え？何かする必要あるのか？」

「…お前、このままだとずっと彼女達の玩具だ「よし、なんとかしよう」ぞ、って速いな」

いくらなんでもずっとは嫌だな。勘弁願いたい。……本当だよ？
決して、残念だなぁとは思っていない。思ってない！

まあそれはさておいて、紫との関係はどうにか出来ても幽香さんはどうにもできないんじゃないか？
止めてくれって言ったって、「本人から言ってきた事よ？」とか言われそうだ。
Sだもんなぁ幽香さん。

「…無理そうだ、とか考えていないか？」

「なんで解った！？」

「誰でも解るぞそんな事。「やっぱり無理」って顔してたぞ」

「マジでか！？俺、顔に出るのか…」

「ああ、解ったから落ち込むな。兎に角話しに行くぞ。そうしないと何も始まらない」

「……」

…やだ先生かっこいい。

「ん？どうした？」

「…やばい、惚れたかも。好きだ、先生」

「…それ、何回目だ？」

数えた事ねぇや。
そんな感じで道中馬鹿な会話をしながら、幽香さんのいるだろう花畑に話しに言った。

＝＝

「いいわよ、別に」

アッサリ解放された。
俺も先生も拍子抜けだ。
こんなに物分かり良かったっけ、幽香さんって。

「何か失礼な事考えているようだけど、あの時も言ってたでしょう？冗談だって。丁度暇だったからやってただけで、執着はないわ」

そういえば言ってたなそんな事。あれ本当だったのか。てっきり嘘かと。

「なんだ。そうだったのか幽香さん。それならそうと言ってくれればよかったのに。ああ、緊張した」

「…だからって、あの事を許した訳じゃないわよ？なんなら本当に玩具にしてあげましょうか？」

そう言いながら傘を突き出してくる。笑顔で。こえぇ。

「あの事？それはどんな事だ九十九？」

そして先生は食い付いてくるしっ！まあ自分で蒔いた種なんだけどね！

「え、遠慮しておくよ幽香サン。さ、次行こう、次」

「あ、おい九十九？あの事ってなんなんだ？おい、九十九っ！」

あーあー、聞こえなーい！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「別にいいわよ、なりたくてなった訳じゃないし」

紫さんもあっさりしてた。もう友達じゃないから呼び捨てしちゃいけないよね？

「そんな、酷い！俺の純情を弄んだな？！」

「どちらかと言えばそれはあなたの方じゃなくて？」

何の事だかさっぱり解らん。俺がいつ弄んだって言うんだ！

「だってあなた、初対面で美人なら誰彼構わず告白しながら抱き着いてくるじゃない。それを弄んだと言わずして何を弄ぶと言うのかしら？」

「仕方ないだろう？美人なのが悪い！」

「全面的にお前が悪いわ！」

ですよねー。

ちなみにこれが俺のやらかして来た事その１である。妖怪の殆んどに嫌われる最大の理由かもしれない。

だって妖怪って美人さん多いんだもの。

「…ん？美人なら誰彼構わず？私はされた事はないが？」

「流石に俺も弁えるわっ、と言いたい所だが、スマン。先生が子供の頃やっちゃった」

仕方ないじゃない。可愛かったんだもの。

「…冗談抜きで変態ね。このロリコン」

「…九十九、お前の友人止めていいか？」

「そんな！変態云々は甘んじて受けよう。自覚はある。だが先生の発言は却下する！あんなに悦んでいたじゃないか！」

「漢字が違わないか？！お前子供の私に何をした！？」

「何って…人前で言わせるなよ」

「お前本当に何をしたっ？！」

先生は涙目になって睨んでくる。…可愛いなぁ。

「ニヤニヤするなっ！」

「や、だって先生可愛いもの。仕方ない」

「かっ…ッ！もういい！」

そう言って先生は走って行ってしまった。残念。

「…本当に心底残念そうね。もしかして子供の頃にやったって、本当なのかしら？」

「まさか。遊んだりはしたけどな。本人は覚えていないだろうが」

当時十歳にもなっていなかったと思う。今から何年前だ？

「そう。で、昔遊んでた子供が初めての友達、と。随分寂しい友人関係ね」

「言うなよ。寂しい通り越して悲しくなる」

「…はあ、そんな調子じゃ、誰も貴方に近付かなくなるわよ？」

「いい、別に慣れてる」

こちとら百年以上一人だった事もある。慣れっこなのだ。

「それに、先生は冗談だって解ってるさ、きっと。頭良いからな」

俺がそう言うと、紫さんは何故だかこっちを向いて溜息を吐き、何事か小声で呟いてからこっちを向き

「…はあ。まあ、私にはどうでもいい事よね。ほら、貴方の用事は終わったのでしょう？なら速く行きなさい。此処にいても何にもならないわよ」

そう言って、追い出すように腕を振る。まるで速くどっか行けと言わんばかりに。というか言われたんだが、実際に。

「まあ、そう言うな。俺は楽しいぜ？ま、確かに意味はないか。じゃ、帰らせてもらうよ」

そう言って、俺は紫さんに背を向ける。家へ帰るために。

「あ、そうそう。紫さんや？もし良かったら、顕冴と仲良くしてくれんかね？何故だか知らんが、あんさんは顕冴には会った事ないんだろう？」

「…いいわよ、別に。
…あの子にはなるべく会いたくなかったけどね…」

かぶりを降り、紫さんはそう言った。
…会いたく無かった？珍しいな。どういう事だ？
紫さんの発言は気にはなったが、解らんものは解らん。
よって、帰ることにする。

「待ちなさい」

すると今度は紫さんにが呼び止めてきた。

「その変わり、と言ってはなんだけど。貴方、私の友人になりなさい。友人って少ないのよ、私」

そんな事を言ってきた。
…ああ、確かに少なそうだな。

「今失礼な事考えたわね？というか貴方だけには言われたくないわ」

「何故解ったし。まあそうだよね。言われたくないわな。」

まあ、俺は少ない何て物じゃない。一人だからな。

「まあ、そんな事なら構わんさ。むしろお願いしたいね。じゃあ、紫。今度こそさよならだ」

「ええ、さようなら」

そう言って今度こそ家に帰る。
…今日の晩御飯、どうするかね。

「…私は家に帰りなさい、とは言ってないのだけど。…苦労するわね、あの子。まあ今更か」

＝＝

「ただいま」

「…どうだった？」

「なんだ？機嫌悪いな？まあいいか。何とかなったよ。紫とは友達になれた。あ、向こうから言ってきた事だからな？」

「ふぅん。良かったじゃないか」

「おう。あ、飯一緒に作るか？一緒に作った事なかったろ？」

「…！おう！」

おーおー、嬉しそうにしてくれちゃって。言ったかいがあるね。

「で九十九、何作るんだ？」

「ハンバーグ」

「…材料は何処から」

「……聞きたいか？」

「……止めとく」

「そりゃ懸命だ」

そして俺は材料を取り出す。
先ずはミンチ。次に塩コショウ。以上。

作り方は簡単。
ミンチに塩コショウをかけて、よく揉む。そしてフライパンに…そおい！

「漢らしいなッ！？」

「へへっ。まあな」

「いや誉めてない。自分は何すれば良いんだ…」

「ご飯炊いてくれ」

「ご飯炊いてなかったの?!ビックリだよ!」

文句を垂れながらもちゃんと炊いてくれる。それに何か嬉しそうだし。良い子だねぇ。

「…突然こんな事するなんて、その紫って人の入れ知恵?」

「いんや慧音先生のだ。紫はそんなアドバイスくれない」

「ふぅん、先生が。なんて言ってた?」

「たまにはお前に構ってやれってさ。よく気が付くよな。嫁に欲しいくらいだ。可愛いし。」

「…お前、それ本人には言うなよ。あんまり慣れてないし、本気にするぞ」

「心配するな、もう言った「おいッ!」…大丈夫だろ、何せ俺だし。今更さ」

「それもそうか。なら安心だ」

「どういう意味だ」

＝＝

「か、可愛いって、は、初めて言われた…！そ、それに惚れたとも…。ど、どうしよう…！」

大丈夫じゃなかった。

六節目（前書き）

さて、俺の友達やら玩具やらの問題が解決した次の日。
まあ、昨日解決した事で昨日のうちに寝て朝に起きたから、次の日なのは当たり前っちゃ当たり前なんだが。
朝起きたら一年経ってました、なんて事あるわけ……あ、いやあったわ。
なんか泥の様に寝て、起きる気になれなくて、ずっとうたた寝状態で。
で、意識が覚醒して日付を見ると一年ちょっと経ってた。

いや、あの時は流石に驚いたね。一年ておま。そりゃねーよ。

まあ俺は飯を食わなくても生きていけるからいいんだが。
ちなみに食わなくていいのは飯で人とか植物は食べる、なんてオチもない。残念だったな。

まあそんなわけで腹の具合は心配せんでもよかったんだが、他に問題があった。

俺は寝ている間になんかやらかしちまったらしいのだ。

久々に外に行くと会う人会う人全員が、なんか俺を見る度、というか見るだけで走って去っていくのだ。

おい、俺何をした。

まあそれも百年以上前な訳で、覚えている人間なんかいないどころか生きていないのだから、どうでもいい事だ。

何てすむかと言えばそうは問屋が卸さない。

まあつまりは死んだのは人間だけで、妖怪とかは生きているって事なんだが。

しかも俺のやった事は余程の事らしく、会う妖怪全員が覚えてらっしゃった。

…真面目に俺は何をした。

これが過去の色々、妖怪に嫌われてる理由その二である。

まあ、何が言いたかったのかというと

俺は食わなくても生きていけるって事だ。

六節目

俺が何故そんな事を言い出したのかというと、それは先生の

「お前の変態性は、日頃の行動からきてるんじゃないか？」

「つまりは日頃から変態行為をしているんじゃないか？と。大体あってる」

「そうじゃないがお前はちょっと自重しようか」

「サーセンｗｗｗ」

「はあ…。つまりは日頃からこう、我慢している事はないか？あるのならそれが爆発する形で変態行為に及んでいるんじゃないかと」

「俺は何時だって我慢しているよ！美人さんを襲わないようにとか！」

「お前は本当に最低だな！？」

「何？我慢しているなら私が相手してやるって？是非ともお願いしたい！」

「誰がするか！」

とまあ昨日幽香さんの所に行くまでに繰り広げられた馬鹿な会話の一部である。
あくまで一部だ。何かもっと凄い事言ってた気がするけど気にするな、俺は気にしない。

そんな訳で俺は自分の変態性について考えてたら昨日の会話を思い出し、原因なんだろう、と考えたわけだ。

で、その事で思い付いた事が、俺は食事はしなくていい、というかあまりしてなかったという事だ。
しなくていいだけで、腹は減るし食べたいとも思う訳だが、昔は全く食べていなかった。面倒だし。
最近は顕冴がいて飯を作ってくれたり、食わせにゃならんので、殆ど毎日食べているが。

人の三大欲求は食欲、睡眠欲、性欲の三つ。
これは地球上の生き物にとってなくてはならない物で、どんな生き物でも最低でもどれか一つは持っている。

で、俺はそのうち食欲を当時全く満たしておらず、一年寝る前は暫く寝ていなかったような気がする。
そして三つの欲求のうち二つが満たされず、残る一つの性欲が爆発して『一年寝太郎事件』が起きたんじゃないか?と俺は考えた。

事実、飯食ってる最近は幾らかましになってるらしく、紫も「最近は随分大人しいわね」と言っていた。
…あれで随分大人しいとか、昔の俺はどんだけなんだ。

まあ、俺の変態の原因らしきものが見えたんで、取り敢えずは食お

う、食いまくろう。そう思いました。

＝＝＝

「あ、あの、な？九十九。昨日『ずっと我慢している』って言っていたな？あ、あれから考えたんだが…やっぱり我慢は良くない。それがお前の変態の原因かもしれないし。だから、な？」

「…………」

「わ、私で発散してくれて、い、良いんだぞ？」

「…………」

そう思った結果がこれだよ！

え、何？なんなのこの可愛い生き物？

頬を紅くしてちょっと涙目で見上げてくるとか。
しかも片腕を胸の辺りに当てて、片方は俺の袖を掴んでいるという狙っているとしか思えない反則っぷり。というか誘ってるよね？

……もう、食べても、いいよね？

食いまくる、と朝言ったし、自分の言葉を守らないのは良くない、よね？

本人が言ってるし、可愛いし。だから、ね？

……いただきます。

じゃあ先ずは唇から、と思い顔を寄せると

「先生に何をしとるかぁぁあああぁぁぁぁ！！」

「ダボッ！」

風の如く駆け付けた顕冴に思いっきり蹴っ飛ばされた。

「先生?!大丈夫ですか?!何かされていませんか!?」

「あ、あぁ。だ、大丈夫だ」

「本当ですか?!本当ですね?!何もされていませんよね?!」

「ああ、本当だ」

いてて……はっ!俺は何をしようとしていた?!
何か先生食べようとしていなかったか?!
いやいやいや!流石にダメだろそんな事!
初めての友達やら恩人やら色々あって大切な人なのに!

もしあのままだったら、俺は最低の奴になる所だった。
相手の善意に漬け込んでヤりたい放題とか。
先生は運動とか戦闘とか、そういう健全な意味での付き合ってやるから発散しろ、だったんだろう。
それを俺は……。マジ鬼畜すぎんだろ……死んだ方がいいんじゃね?

「いや助かったよ。有難う顕冴」

「……俺が助けたのは先生なんだが」

「それでもだ。あのままじゃ俺は人の善意に漬け込んで大切な恩人を襲ってしまう所だった。本当に有難う」

「…お前本当になんとかなんないの？」

「すまんな」

そこまでで先生が話に参加していないのに気がついた。おかしいな、流石に何か言われると思ったんだが。

「そうか…大切な人…か。そうか…フフッ」

何故だか嬉しそうにしてらした。…なんでさ。

「先生？どうしたんだ、先生？」

「…なんだか別にあのままでよかったような気がしてきた…」

「先生？先生ー？！」

＝＝

「そうか…食事か…。そうなのかもしれないな…。妖怪に人間の三大欲求が通用するのか解らんが」

あの後無事に先生を覚醒させて先生と顕牙を学校まで連れて行き、放課後また来ると言って放課後までブラブラして過ごし、もうそろそろかな、と学校へ行くともう既に顕牙含め子供は皆帰った後だったので、俺の変態の原因（と思われる事）を話してみた訳だ。

「多分通じるだろ。妖怪も食ったり寝たりするし」

まあ人を、だが。

「まあ、そうか。うん、じゃあしっかり物を食べる。これで取り敢えず行こう。駄目だったらまた考える、それでいいな？」

「勿論。いや先生には本当に世話になるな」

本当にだ。顕冴の事だけじゃなく俺の事まで世話になるとは。頭が上がらない。

「気にするな。私が好きでやっている事だ。それに友達、だろう？」

「…そんなものでいいのかね、友達って」

「いいんだと思うぞ？」

「そんなもんか？」

「そんなものさ」

そんな感じで友達について確認しつつ、顕冴との現状などを話し合った。

…やたらと先生が顕冴には何もないな？とか聞いてくるのが気になったが。そんなに信用ないか。ですよね。

で、俺達の普段の生活に話が移り。

「で、九十九と顕冴は普段どんな物を食べているんだ？」

「どんな物って…俺が採ってきた魚とか肉とか。野菜も食べるしご飯もだな」

「普通だな。八年も続けてれば食欲満たされないか？」

「毎日続けては無いし、それにやっぱ量かな？」

「量？」

「ああ。家は大体飯は顕冴が作るんだ。知ってるだろ？昔から俺は食べない事もあってな、食事は少なく作るみたいなんだ」

せっかく作っても俺が食べずに無駄になる事が多々あった。
それでもあいつは俺のいる前でしか食べない、何故か。
大体あいつ一人で食べてたなぁ、なんて事も呟く。
その事を聞いた先生は俯いて何か考えていたようだが突然顔を上げ

「…これからお前の家に行くぞ。ご飯を作りに行く。顕冴が可哀想だ」

「…は？先生？」

「何だ？言っておくがこれは決定事項だ、異論は認めない。それともう学校じゃない。お前は生徒ではないし友達だろう？私の事は慧音と呼べ」

テンパっていらっしゃる。もうこうなった先…慧音は止まらない。
よく知ってるさ。

「はいはい慧音さん。よろしくお願いしますね」
「ん、中々に物解りが良いな。よし、任せておけ。しっかり腕を振るってやろう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ただいまー」「邪魔するぞ」
「おかえり、ってあれ？ 先生？ なんで？」
「ご飯を作りに来た。安心しろ、もう大丈夫だ」
「………はい？」
「お前あまり飯食ってないだろ。それを先…慧音に言ったら作ってくれるそうだ。嬉しいだろ？」

「ああ！…というか元はと言えば九十九のせいだけど」

そう言ってくる。いやホントすまん。

だが自分以外と、それも友人ともいえる慧音と食事をするのは楽しみらしく、その顔には実に清々しい程笑顔がうかんでいる。

「……楽しいか？」

「もちろん。他人と食べるのは楽しいんだぞ？」

「そうかい、そりゃ良かった」

そんな事を話していると、慧音が手伝って欲しいと言ってきて、それを聞いた顕冴が嬉しそうに飛んで行った。

…これは楽しく、美味しくなりそうだ。

この日、俺の家の食卓は未だにかつてない程に、笑顔が溢れていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…最近、慧音に会って無いな。元気かな？」

森の中で慧音を案じる人がいたそうな。

六節目～補足～（前書き）

先に言っておく、俺は何もやってない。

昨日は楽しい晩御飯だった。顕冴も先…慧音も楽しそうだったし。
かくいう俺も楽しませて貰った。御飯が美味しかったです、まる。

まあ、そこまではいい。良かった。うん。

その後が問題だった。
慧音が今日は泊まる、とか言い出したんだ。

焦ったね。さすがにそれはどうかと。
しかも顕冴は反対しない。むしろ賛成していた。お前どんだけ慧音が好きなんだよ。

慧音は「明日の朝来るのが面倒だろう」とか「顕冴もいるんだ。何もしないって信じてるぞ？」とか言ってらした。
明日の朝も飯作るつもりだったの？とか学校は？とか色々言ったんだが、

「ああ、朝はお握り一つで済ましているそうじゃないか。駄目だぞそれじゃ。それに明日は日曜日だ、学校は無い」

だそうで。
……初めて何処ぞの神様を恨んだね。なんで一週間ずっと働かなかったのかと、何で1日休んだんだと。

というか幻想郷に日曜とかあったのか、初耳だよ。
そういえば顕冴が時々学校に行ったのにすぐ帰ってきた事があったな。休校日だと思っていたが。
何故そこで気付かない、と言われたって仕方ない。
何せ俺が顕冴を学校に送り出すのはあいつの意識のしっかりしていない起き抜け、だから今日は休みだという突っ込みもなく、しかもあいつは学校がなくても殆ど慧音と遊んでくるらしく、帰りが遅かった。
だから普通に学校に行っていたと思っていた。ちなみにそれは今慧音に聞いた。
だからどんだけ慧音好きなんだよお前は。
まあ俺も好きだが。

だがそんな事は所詮大した事じゃない。問題はもっと単純で、しかも恐ろしい。

慧音さん、貴女は顕冴がいるから何もしないだろう?と仰いましたね。
貴女無防備すぎます。その信頼が胸に痛いです。

だって私、人前で告白しながら抱き着くような奴ですよ?!顕冴がいるからって自重できるか……無理ですね、寧ろ興奮します。

変態嘗めちゃいけませんぜ。

つー訳で俺は慧音を襲わないという自信は無い。襲ってしまう自信ならあるが。

そんな訳で反対したのだが、悲しいかな此方は一人、彼方は二人と数と口で押しきられた。

流石先生なだけはあると思ったね。その説得できるだけの口を顕冴に向けて欲しかった。

で、仕方無くじゃあ俺は外にと思ったのだが顕冴が反対、猛烈に。

九十九とじゃないと眠れない、とか言い出したのだ。

顕冴は何故か一人で寝られない。それは一緒に暮らし始めた時からだ。

一人で寝かせようとすると酷く怯えだす。手を握ると安心出来るらしく、我ながら甘いなぁと思いつつも初日以来、手を繋いだまま寝ているのだ。

そんな事情があったりするのだが、言い方が悪かった。

ええ、お察しの通り慧音が誤解しました。

それを何とかするために要した時間は約二時間。

しかもその時に何故か一緒に寝ることに決まっていた。どうしてこうなった。

顕冴を挟んで川の字で寝る事になった。

なったんですが。

なった筈なんですが。

「…ん、うぅん……すー……」

「何ぞこれ」

俺の横には慧音の寝顔が。

……俺は何もやってない、と思う。多分。

六節目～補足～

ＯＫまずは落ち着いて素数を数えようか。
素数は１とその数字でしか割れない孤独な数……

……じゃあいくぞ…１……

ハイ、アウトー！

待て、落ち着け。ＣＯＯＬだ、ＣＯＯＬになるんだ俺。もういっそＫＯＯＬでもいい。
だから静まれ俺のコスモッ！

……ふうっ…。さて服は…着ているな、二人とも。
よし、俺がナニかした訳じゃないらしい。とりあえずは安心だ。
次は何故目の前に慧音の寝顔があるのか考えようか。
昨日は確かに顕冴を挟んで川の字だったはず。それで何故俺の目の前に慧音の顔がある？
俺が移動したのか？それとも慧音が？

そこまで考えて漸く気付く。俺の近くに顕冴がいない事に。

…どういう事だ？何故いない？手を握られる感覚はある、だが顕冴はいない。
じゃあ俺の掴んでいる物はなんだ？慧音の手か？
だが確認してみるとそうじゃない。慧音の手は俺の胸の辺りに両方あった。
じゃあ何を…？

恐る恐る俺の腕が何処にいっているか確認すると。

俺の腕は丁度慧音の腰の辺りに廻されており、どうやら慧音の向こう側の物を掴んでいるらしかった。

……。

……えぇえぇぇぇぇぇッ！何これどんな状況？！

え、何？まさか顕冴、慧音の向こう側にいんの？！どうやったのぉぉぉ！？

俺達川の字で寝てたよね？しかも手ェ繋いで！

それがどうすればこうなるんだぁぁぁぁあああぁぁぁ！

最早ミラクル以外の何物でもねぇよ！？なんだ、どうしてこうなった？！

起きずに向こうに行った顕冴も！

掴まれたまま移動させられたのに起きない俺も！！

股越されても腕廻されても全く起きる気配すらない慧音も！！！

すげぇよ奇跡だミラクルだよッ！？……本当に、どうして、こうなった……。

なんか突っ込みたい事のオンパレードでテンションが一回りして冷静になっちまった。

できれば叫んでしまいたかったが、それをしてしまえば俺は多分殺される。
目の前にの慧音に弁解する前に問答無用で殺される。
…なんで冷静になっちまったんだ俺は……。
そして慧音の顔を見た。見てしまった。
スッと整った顔立ち、少し長い睫毛、細い眉、ぷっくりした柔らかそうな唇。
そして安心仕切って子供のように笑っている寝顔。
（…やばい、主に理性が。ＳＡＮ値がガリガリ削れている…ッ！）
やべぇ可愛い襲いそうつか襲いたい。……いいよね？
（いやダメだろう倫理的に考えて！個人的には大正解花丸あげたいけどっ！）
まずい。このままじゃガチで襲っちまう！顕冴がいるのにっ！……
…あれ？おかしいな、すっげぇ興奮してきたっ！
テンションが再び上がってきた。もうだめかもしれん。

だが此処で慧音は恩人だという事を思い出す。

（そう…だよな…。恩人に手を出したらダメだ、最低だ。）

流石に慧音に最低だと言われるのは耐えられん。なんせ恩人にして初めての友達なのだ。……一瞬慧音に最低だなと言われるのを想像して興奮した俺は間違いなく変態。

とりあえずは離れよう、話はそれからだ。

そう考えてまずは手を離そうと考えた。
幸い掴んだ手は左手のみで、慧音の上に重ねられていた。
これが慧音の下に敷かれていたらアウトだった。不幸中の幸いか。

……ん？左手？うん、それはいいな。間違ってない。
俺達は上から見ると左俺、真ん中顕冴、右が慧音になる川の字で寝ていた筈だ。
だから左隣にいた顕冴の手を握る為に左手を使うのは間違いじゃない、というかそうじゃないと無理だ。

だが何故その左手が慧音の上にあって、慧音の顔がある？

顕冴が移動したならば、慧音の顔を見るには腕が下になってなくて

はならん。
逆に腕が慧音の上にあるなら慧音の顔は見えない筈なんだ。顕冴が移動した距離は置いといて。
だが実際は慧音の上に腕があり、慧音の顔も見れている。
これから導き出される答はただ一つ。

（あれ？これ…もしかして俺が移動してる…？）

汗が滝のように流れてくる。てっきり顕冴のせいと思っていた事がまさか自分が原因だったとは。
それなら納得出来なくはない。
顕冴は寝起きが悪い。寝惚けたままで学校に行けるくらいだ。手を掴まれたまま移動されたくらいじゃ起きなくても不思議でもなんでもない。
俺が起きなかったのも頷ける。何せ自分が寝惚けて移動したのだ。
起きる筈もない。
距離も俺が移動したのなら顕冴は寝返りを打つ程度ですむ。
慧音が起きなかったのはそれだけ安心していたという事だろうか。
多分そうだろう。
……心が、痛い……。

ものっそい痛い。死にそうってか死にたい。むしろ死ねばいいのに。

軽く鬱だ、死にたい。

とりあえずは移動しようか、死ぬのはそれからだ。

そして死ぬ覚悟と死ぬ前に謝っとこうと決め、移動するために立ち上がろうと腕を立てた時、

「…ん、……」

（うおっ！）

掴まれたままの腕がグッと強く引かれた。

よりによって慧音の顔が目の前にあり、しかも立とうとして力を片腕に込めた時にだ。

そして引いた頭冴は慧音の向こう側。

つまりはバランスが崩れる訳で。

前から引っ張られてるから前に倒れそうになるわけで。

目の前には慧音の顔があるわけで。

（うおっ…やばっ…！）

そして、俺の顔は慧音の顔に――――――――――――――――――――

＝＝

「お、御早う九十九。い、良い朝だなッ！」

「お、おう！そうだな！良い朝だ！」

翌朝。俺は起きてきた慧音に顔を向けられないでいた。

あの後俺の抵抗は……止めておこう。展開は想像に任せる。

…………柔らかかったし、美味しかった。御馳走様でした。とだけいっておこう。

……思い出したら申し訳なさと嬉しさと欲望で一杯になってきた。
……こんなときでも変態全開な思考を呪いたい。
……忘れよう。慧音は起きていなかったし、知っているのは俺だけだ。こんな事迷惑なだけだろうし。
昨日は何もなく、無事に朝を迎えた。これで良いじゃないか。
……ただ暫くは顔を合わせられん。唇の柔らかさを思い出して襲いそうだ。

「……そうだ、樹海にいこう」

呟いて家を飛び出す。目指すは樹海さ！今日は一日反省会だっ！

そして俺は制止の声を振り切って、迷いの森へ全力で走った。
あはははは。死にたい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

え、えっと、目が覚めたら何故か目の前に九十九の顔があって、訳が解らず混乱して、とりあえず目を瞑って、暫く経って何もなかったから安心して、す、すると「うおっ」て声がして、そ、そしてく、唇に何か当たって、それが多分九十九の唇でっ！あ、あぅ……あうあうあうあうあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？？！？

……取り敢えずは挨拶して、

それから聞こう、うん。

ばっちり起きてた。

六節目～補足～（後書き）

可愛い先生が書きたくて書いた。反省と後悔しかしていない。

休息～変態の選択～　※5／28ルート分岐追加（前書き）

俺は、この時の選択で全ての事が変わったんじゃないか、と思ってる。

実際にあの時別の答えを選らんでいたならば、少なからず現在とは違った『現在』があったのだろう。そう思う。

……なんだかこうして言ってみると、まるでゲームの様に思えてくる。

だが実際にここでの選択次第で未来は変わるのだろう。その確信がある。

しかしこれは現実。ロードして選択をやり直す、何て事は出来る訳はないし、やっちゃいけない事だ。……本来ならば。

俺の能力を使えば、その『もしも』をやり直すことが出来る。けど俺はそんな事はしない。俺は今が一番幸福だと思うから。

…でも変態な俺としてはちょっと見てみたくもあるわけで。

だから今からは俺じゃない『俺』に頑張って貰おうと思う。

…誰だ今セコい、ずるいって言ったの。どうだ、羨ましいだろう？

別に直接手を出す訳じゃないさ。ただ選択する課程と結果をみるだけ「お～い！九十九～？！」……すまん、俺は見れないようだ。

替わりに君達だけでも見られるようにしたから、俺の分も『俺』を見てくれ。

……面白くも何ともないから、期待はするなよ？

何？前も似たような事言ってたって？それは俺じゃないさ。

まあ、見るも見ないも君達次第。目安は置いといたから好きにしてくれ。

休息～変態の選択～　※5／28ルート分岐追加

走り出した俺は、しかし途中で足を止めた。
…何か凄く大切な事があるような気がしたのだ。

「…ってギャルゲじゃあるまいし、そんな事ある訳ないよな。……末期だ」

さて、取り敢えず走ってきたが、頭を冷やすのなら別に樹海じゃなくてもいい。
むしろ湖とかにいった方がいいんじゃないか？
或いは知り合いの所に転がり込むとか。

「つっても、転がり込むだけの知り合いが俺にはいないわけだが」

おっと口に出しちゃった。……相当テンパってんな。

……いっそ医者にでも行くか？

（さて……どうした物か……）

・当初の予定通り迷いの森に行く。…死のぅ。

・なんか考えてたら冷静になってきた。帰ろう。

・行きたくないけど博霊神社。たしか今日は宴会が。

・そういえば腕の良い医者がいるらしい。変態治して貰うか。

・ここは敢えて妖怪の山。修行だ修行。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・当初の予定通り迷いの森に行く。…死のぅ。

「迷う必要はないだろう。ここは迷わず死にに行こう。…あれ？目から汗が……」

おじさん頑張って死んじゃうぞ☆

↓先生ルート　トゥルーへ進みます（割とシリアス）

＝＝

・なんか考えてたら冷静になってきた。帰ろう。

なんだか色々考えてると、落ち着いてきた。
あれ？何で俺走りだしたんだっけ？
キスしたぐらいで恥ずかしがるような奴だっけ？俺。
俺という生き物はむしろそれを良い事に変態行為を強要するような奴だった筈……。
そうだ！今からでも遅くはない！めくるめく『素晴らしき世界（おとなのじかん）』へ！
そんな傍迷惑な決意を秘め、元来た道を戻ろうと後ろに振り返った俺の目の前に、『スキマ』が現れた。

「これは！紫の『スキマ』！何か重要な事件でも？！」

「強いて言うなら、今から起ころうとする凶悪犯罪を未然に防ぐ為に来たのだけれど」

「凶悪な事件だって!?この平和な幻想郷で、一体誰がそんな事を!」

「貴方よ。むしろ此処最近の事件と呼べる事件は、全て貴方が起こした事な件」

そうだっけ?
というか「~な件」って言うとか、なにやら紫さんも染まってきたなぁ。俺に。

「仕方ないじゃない。長く貴方と付き合ってるのよ?変わって当然。あと染まったのではないわ」

「そこは『染まってしまったわ』とか言って欲しかったなぁ。俺の興奮を助長させる為に」

「何で私が貴方の手伝いをしなきゃいけないのよ……」

頭に手を当てる紫。何だ?風邪か?
なんて事は置いといて。こいつが俺の前に、しかも『スキマ』を使って現れるなんて、よっぽどの事が起こる所だったんだろう。

しかも話を聞く限り犯人俺。十中八九九割九分変態的な事件である。
しかも大変な。
大変変態的な事件。しゃれっぽくなってしまったが、そりゃ止めるわな。

……あれ？何で俺、今止められても仕方ない、とか考えたんだろう。
普段ならば何故止める！？とか考える所だろうに。

……やはり最近の俺はどこかおかしい。昨日の夜の件しかりさっきからの思考しかり。
普段の俺ならば間違いなくとる行動、考えのほぼ正反対を選択している。
これは異常だ。や、世間的には正しいのかもしれんが。俺にとっては異常である。

ほら。さっきまであんなに元気だった息子が、虫の息になってしまっているじゃないか。
これが何よりの証拠である。決して紫を見たからとかでは断じて無い。

うさんくさくて強い、とか普通はそういう対象にはしないだろう、とか言われる事が多々あるが、残念。俺は普通ではない。皆の知っての通り変態だ。
なので問題ない。バッチこい！である。むしろ大好物です。

あ、やべ。想像したらまた元気になってきた。ニヤニヤが止まらない。

そんな俺を見て紫が「駄目だこいつもうなんとも出来ない」的な視線を送ってくるが無視。

俺はいつでも変態なのである。

「ありがとう紫。あなたのお陰で、今日も息子は元気です」

「下品ね。そして私は何もやっていないわ。誤解されるような事言わないで頂戴」

「何もしなくていいんだよ。存在そのものが興奮させる為の材料みたいなものだから」

「……相変わらず最低ね……」

「何でこんなのを手伝おうと思ったのかしら」とか「もうコレ手伝う必要無いんじゃ…」とか言ってる。というかやっぱり何か手伝いに来てたわけね。

まったくもう。素直じゃないんだから。

何はともあれ、このままだと話が進みそうにないので、俺から話題提供しようと思う。

提供できるだけの話題が無い訳だが。仕方ない。何しに来たか聞くか。あれ?これ話題提供?

「まあいいじゃない、変態だもの。で?何か話に来たんじゃないの?」

「あら？やっぱりお見通し？腐っても鯛ね」

いやあなたが自分で何かあるとか言ってたんですが。やっぱり染まってるよね？
むしろコレは……そうか、とうとうぼｋ「スキマ送りにするわよ？」
すみませんでした。

紫は、滅多に浮かべる事のない、真剣な表情で、心なしか深刻そうな面持ちをして、真っ直ぐに俺の目を見つめて、その口を開いた。

「貴方に伝えたい事が、いえ、伝えるべき事があって来たわ」

「伝えるべき事？」

「ええ。貴方の大切な、娘の事よ」

↓先生ルート　グッドへ進みます（シリアス？なにそれ？）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・行きたくないけど博麗神社。確か今日は宴会が。

そういえば今日は久々に博麗神社で宴会が開かれる、と慧音が言っていたな。

何故かは知らんがあそこで宴会が開かれる事が最近めっきり減っていたからな、多少楽しみである。

しかし、俺がそこにホイホイ行ける訳ではない。
何故なら妖怪がわんさか居るのである。
別に神社に住んでいる訳ではない。集まってくるのだ。

神社なのに妖怪が集まるって正直どうよ?
というか神社に来るのが基本人外ってどうなの?
巫女＋1～2人ぐらいしか人間の客が来ない神社ってマジどうなの?

そして集まってくる奴らが全員腕っ節強くて美人って本当マジなんなの?ばかなの?

そしてそんな地獄(パラダイス)にホイホイ行こうとしている俺は間違いなく馬鹿で変態。

だって美人さんだぜ?行くだろ常考。例えその先に体罰しか待っていないとしても!!
むしろ我々の業界では御褒美です。

なので当然行きますよ、博麗神社へ。

そして向かう道中、何だか服のコントラストがアレな人を見かけました。
凄く……美人です……。

「へーイ！初めましてお嬢さん。お名前を聞かせて貰ってもよろしいか！？」

「なにこれこわい」

引かれた。ドン引きだった。あるぇ～？おかしいなぁ。こうすれば大抵の人が……あれ？どうするんだっけ？どうなるんだっけ？

「スマン、今の無し。もう一回、もう一回だけ！？わんもあぷりーず！」

「何なのこれ……まあ、良いでしょう。一回だけよ？」

おお！なんとノリの良い美人さん！困惑しながらも「仕方無いわね…」的な視線も送ってくれるとは、おじさん感激です！
ならばもう一度だけ。さて、どうするべきか……此処はやはりオーソドックスに名乗り上げてから、か……。

「失礼、お嬢さん。私は真経津九十九と申す者ですが、宜しければ

お名前を聞かせて貰ってもよろしいでしょうか？」

「本当に何事も無かったように振る舞うわね……。……？真経津？」

「はい。真経津です。それが何か？」

「……そう。ちょっとした用事で出掛けて来ただけなのだけれど、良いモノを見つけたわ。私の名前が聞きたかったのよね」

……あれ？おかしいな、なんだかひやあせがでてきてとまらないぞ？

俺の名前を聞いて、こんな反応を示す人物なんて初めてだぞ？

そして俺の最早腐ってしまった第六感が告げている。逃げろ、と。

「私の名前は『八意永琳』よ。思兼、と言ったほうが解るかしら？」

『八意』……だと……？

思兼……？アッーーーー！まさか、え？嘘？え？

「え？嘘、え？何でこんな所に居るんですか？！」

「それはこちらの台詞。長く合わない内にすっかり立派になっちゃ

って……」

止めて！そんな冷たい目で見ないで！
いくら俺が変態だからと言っても限度があるんです！弁えてるんです！

「まあ、何はともあれ、お久し振りね？『八咫鏡』？」
「はい。お久し振りです、『設計者』殿……？」

死にたくなって来た………。

↓神社ルートへ進みます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・そういえば腕の良い医者がいるらしい。変態治して貰うか。

そういえば最近腕の良い医者がやってきたらしい。
どこからだ、とか思わなくもないが、まあそこは幻想郷クオリティ、色々ややこしい事情とかがあるんだろう。

噂では迷いの……あれ？どこだっけか。忘れちまった。
まあいいか。とにかく行こう。迷ったら人に聞けばいいだろ。

そんな感じで病院を目指して歩き出す。

それにしても腕の良い医者……胡散臭さがプンプンする。
具体的には紫と同等かそれ以上くらいの。

まあ他に手段が無いのだから。藁にも縋る思いってやつさ。

今日中には辿り着くだろう。常識的に考えて。

そう思ってた時期が、俺にもありました。

「そう思った結果がこれだよ！！」

見事に迷子になりますた。
元々目安も、大雑把な場所すら知らないのだから辿り漬ける筈ないんだよ！
道を聞こうにも人が居ないし！もうやだこんな自分……。

もうここに住んじまおうかな、とか考えた時、後ろの方からガサガ

サ、と音がした。

「！人?！よっしゃ！」

音のした方へ全力で駆け出す。……べ、別に恐かった訳じゃないんだからねっ！

……御免なさい嘘付きました。本当はものっそい恐かったです。

枝を掻き分けて音のした所へ行くと

「何だ、案外元気じゃないか。大声がしたから妖怪とかに襲われたのかと思ったけど、全然そうじゃなさそうだね」

某配管工のようなズボンと綺麗な白髪、頭のリボンが特徴的な、

目を見張る程の美少女が、そこにいた。

美少女だ、美少女。大切な事なので計三回言いました。

まあ、美少女自体は幻想郷では然程珍しい訳ではない。

むしろ実力者は何故か総じて美女美少女が多い。変態の俺歓喜。正に幻想、正に天国！

だがその中でも白髪長髪というのは……いや、それ程滅多にいない訳でもないな。
慧音も此処まで長くないとはいえ白髪長髪だし、顕冴は地面につくんじゃないか（というかついてるんだが）、というぐらいの長さの髪だ。しかも白髪。

まあ、慧音は銀っぽい白、この少女と顕冴は色が抜け落ちたような白と違いはあるんだが、綺麗な事には変わりない。

そんな事より。美少女がいる、これ重要。

当然俺は美少女にルパンダイブをかま……さなかった。あれ？

（おかしいな？食指も動かん）

これは由々しき事態である。この俺が、こんな美少女を見ても襲わなかった、だと……？
馬鹿な！？ありえん？！俺はとうとう死ぬのか……。
そんな事を考えるくらい、俺にとっては異常な事が起きたのだ。

「そうだ、やっぱり病院に行こう」

「アンタも病院に行こうとして迷った口かい？案内しようか？」

「いいのか？」

「構わないよ。今じゃこれが生き甲斐みたいなものだからね。で、何処が悪いんだい？頭？」

「うわ、ずっぱりと酷い事を言う。そうじゃない。今回はもっと大事な事だ」

「頭よりも？それって？」

「実はな、君みたいな美少女を見ても襲わなくなったんだよ。どうだい？おかしいだろ？」

「……はい？」

「だろ？やっぱりおかしいだろ。美少女見たら即ルパンダイブ。これは日本の……いや、世界の常識だというのに……」

「まて、そのじょうしきはおかしい。」

何か言っているが、頭に入ってこない。
自分の事で一杯だからだ。本格的に危機感感じてきた。

「本来ならば此所で君を押し倒している筈なんだが……」

「…決めた。あんたは『永遠亭』に連れて行く。嫌だと言っても連

れて行く。強制的に連れて行く。有無を言わさず連れて行く。そこでその変態を完膚無きまでに治して貰え。全世界の女性の、主に私の貞操の為にも」

「良く解ったな、狙ってる事」

「連れてく。うん。あ、ちなみに今から行くの『永遠亭』って所なんだけど、そこの医者は美人だよ？」

まるで自分から矛先を反らす為のように、美少女はそう言った。

美人の医者…だと…？
これは行くしかあるまいて！
俺の表情が変わった事に気が付いたのか、美少女は露骨に嫌そうな顔をして、「ごめん」と誰かに謝りながら、俺の襟を掴んで引き摺った。痛い痛い！首がぁ！

そうして俺は、美少女に引き摺られながら（ちょっと痛気持ちいい）、美人の医者が居るという『永遠亭』という所に向かう事になった。

==

↓病院ルートへ進みます。

・ここは敢えて妖怪の山。修行だ修行。

そうだ、妖怪の山に行こう。
そして修行してこよう。失敗したら（しなくても）アッーーーーー！な展開が……

……ムリムリムリ！絶対に無理！お断り！

……なんでこんな選択肢が出てきたのやら……変態か、俺は……
……

……変態でしたね、すみません……。

→選択場面に戻る。

休息～変態の選択～　※5／28ルート分岐追加（後書き）

これで一応分岐は終わりです。一応ね。

七節目　～先生ルート　トゥルーその1～（前書き）

さて皆さん御機嫌よう。皆の変態九十九おじさんだよ。

今日おじさんは樹海に来ています。ん？何故かって？
ははははっ。それはね、実はおじさんちょっと一人になりたかったんだよ。だからこうして迷いの森なんて呼ばれている所まで来たのさ。

何？理由になってない？
まあそう言わないでくれ。ちょっとした冗談さ。

さて、そろそろおじさんが此所に来た本当の理由を話そうか。
何、簡単な事さ。凄くね。

ただ、ちょっと真面目に俺は死んだ方が良いんじゃないかって思っただけだよ。

七節目　～先生ルート　トゥルーその1～

うおぉおおぉぉおおおおおおおおぉぉぉ！！！死にてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

慧音にキスしちまったとか凄く死にたいんですけどッ！
いや滅茶苦茶嬉しいんだけどね？！言葉では表せ切れないぐらいに！

問題は其処じゃ無ぇんだよ！
よりによって、
よりによってだ！

『恩人にして初めての友達』の慧音にってのが問題なんだよぉぉぉ！

普段から世話になっていて！俺を信頼してくれていたのに！

寝ている間に唇を奪うってどんだけ恩知らずなの？！

なんなの？ばかなのしぬの？！

罪悪感で死にそうだよ！死にたくなるわ！！というかもういっそ殺してぇぇ！！！

たが何より許せないのはだ！

慧音の唇を奪った事に優越感を感じている自分が許せない……。

それだけじゃ飽きたらず押し倒しそうになった俺って何なの？

涙目になりながら抵抗する慧音を想像してちょっとやってみたいって思う俺何なの？

寝ている間にキスした事が慧音にバレたり、返り討ちにされて「最低だな」と言われて冷たい目で見られる事を想像して興奮する俺って何なの？

今もちょっと想像して興奮する俺って何なのさ？

……十中八九九割九部疑う余地無しで変態ですねわかります。

……首吊ろう……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あいたっ！？」

落下した衝撃で目が覚めた。どうやら木の枝が体重を支えきれなかった様だ。

迷いの森にある木は割と枝が細かったので、その中でも一番折れにくそうな物を選んだんだが…。

やはり長時間支えるのは無理だったらしい。

…でも幾らなんでも人間一人を支えるだけで三十センチはある枝が折れるか？

此所では死なずにきちんと謝って、それから本人に殺されろという事だろうか。

…よし、謝りに行こう。

元々此所に来た理由は死にたくなったからでも、ましてや慧音に嫌われるのが恐かったからとかじゃない。恐かった、というのはある意味あってはいるが。

…俺は恐ろしかったんだ、怖かったんだ。

……慧音を襲いそうになる自分が、抑えられない自分が、恐ろしかったんだ。

朝あのまま慧音と話していたら、

話しているだけで、俺は間違いなく慧音を押し倒していただろう。

……慧音の心に傷を負わせるのが怖かったんだ。

別に俺が嫌われる分には一向に構わない。

嫌いになる事で慧音の心の傷が癒されるのなら喜んで嫌われよう。

殺されたっていい。

だけどそんな事じゃ傷は治るはずがないんだ。

信頼していたのに襲われて、好きでもないのに行為に及ばれて。

そんな事をされたら間違いなく肉体的にも精神的にも一生物の傷が、最悪心が壊れてしまう。

少なくとも今後男とは付き合えなくなるだろう。

……それを理解した上で尚襲おうとする自分を、可能なら殺したい。

…俺は死ねないが。

と、普通は考える筈なんだが。

……残念ながら俺は心の底から、体の芯から、骨の髄から、魂の一片まで変態らしい。

慧音に対する罪悪感や自分の欲望に対する恐怖よりも。
慧音を襲いたいという欲望。
慧音を犯したいという肉欲。
慧音を屈伏させ服従させたいという征服欲。
慧音を自分だけの『モノ』にしたいという独占欲。

慧音の全て、それこそ目も、髪も、鼻も、耳も、唇も、首も、体も胸も腕も腰も足も指も爪も皮も毛も肉も魂も垢も心ですらも俺の『モノ』したい。

慧音の視たもの、聴いたもの、食べたもの、嗅いだ匂い、感じたこと、それにより生じた感情すらも俺の、俺と慧音だけの『モノ』にしたい。

誰にも、何にも、世界にも、神様にだって渡さない。

…そんな自分勝手で迷惑で、寒気や嫌悪すら抱く欲望の方が遥かに勝っていたのだ。

……最早ヤンデレってレベルですらねぇ。

だから、俺は此所に来た。

………暫くは、慧音と会えそうにないな………。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

「…九十九、帰ってきませんね」

「……ああ、そうだな…」

夜になっても、まだ九十九は帰って来なかった。先生は凄く悲しそうだ。

（……九十九の、馬鹿……）

朝自分が起きた頃にはもう既に九十九は出掛けていて、先生は玄関の方を見て立っているだけだった。

自分が声をかけると先生は動き出したが、またすぐにぼうっとする、
という事が多々あった。
初めの頃はぼうっとしても嬉しそうな表情を浮かべていたので良か
ったが、時間が経つに連れて顔色は悪くなっていき、夕方を過ぎる
頃には真っ青になってしまっていた。

…朝から出掛けて、まだ帰ってない九十九が原因だって事は馬鹿で
も解る。

自分は何があったか何て知らないし、知りたくもない。
自分に解ることは一つだけ。今の九十九は九十九らしくないって事。

……自分は今の九十九なんて大ッ嫌いだ！
自分の知っている九十九は何時も余裕があって変態で、
美人の女の人が大好きな変態で、
初対面の人にでも告白して抱き着く変態で、
困った人を見ると助けずにはいられない変態で
何だかんだ言って自分のやった事にはケジメをつける変態で。

自分の、私の好きな九十九は、
女性を、ましてや恩人を傷付けたり、やりっぱなしで放っておく何
て事、絶対にしない。

だから私は、何があっても、何所にいても必ず九十九を見つけ出し
て殴ってでも元の九十九に戻すんだ。
私の好きな九十九に。

皆の好きな九十九に。
そして、先生の大好きな九十九に。

「先生。私、ちょっと九十九を連れ戻してくる」

「…どうしたんだ、顕冴？何だかおかしいぞ？口調も…」

「心配しないで先生。九十九を連れて帰って来るだけだから。…もう私は、偽るのを止める。だから先生も、ね？」

「……何の事だ？」

「私は知ってるよ？先生が九十九を大好きな事。何時も見てきたんだもん。私は先生と九十九の事、大好きだから。だから二人には幸せになって欲しいんだ。だけど、今の九十九は私たちの、先生の大好きな九十九じゃない。だから、ちょっと行って殴って、元に戻して連れて帰って来る」

「顕冴、お前…」

「だから先生、ね？自分に素直になろう？自分の心を偽るなんて、嘘をつくなんて止めよう？……先生は、ちょっとぐらい我が儘言っていいと思うんだ。大丈夫、きっと九十九も、先生の事大好きだから」

「……」

「解るんだ、私には。それに、これは私がやらなくちゃいけないこ

と。九十九と先生の事が大好きな私が。九十九と先生に育てられてきた私が。…私が、九十九と先生を支えなきゃ」

「…でも顕冴、お前だって「いいんだ、私は。元々かなわない想いだったんだよ。それに先生なら、私は諦められる。ううん、先生じゃないとダメなんだ」……すまない、顕冴」

「謝らないで、先生。これで良いんだ、私は。だって私は？？？？？

玄関に立って、顔だけ振り向く。……どうか、笑顔になれていますように。

？？？？？？？？？？？？？？？私は、大好きなお父さんの、娘なんだから」

？？？私は今、笑えているだろうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私は後を追おうとしたが、動けない。どうやらあの子の能力のせいらしい。

「……顕牙の馬鹿…。そんなに泣きそうな顔で言われても、嬉しくないぞ…ッ」

事実、九十九を探しに出て行く直前振り向いた時、あの子は笑おうとしていたみたいだが、失敗して歪な表情になっていたし、涙だって少し浮かべていた。

…あの子が、九十九の事を好きな事には気付いていた。
それも憧れなどの感情ではなく、確固とした恋愛感情の類の物を。
だからなるべく、私が九十九を好いている事は、秘密にしようとしていた。
……最近は、なんだか隠せていなかったが。
あの子は、九十九に助けられたらしい。
変な穴みたいなモノに飲み込まれて、気が付いたら山の中で。
幸い怪我は無く、人を探して歩いていたら突然傘を持ったやつに襲われ、命からがら逃げ出したは良いものの、襲われた時重症を負い、

力尽きて倒れ込んでいた所を九十九に助けてもらったらしい。

傘を持った妖怪の正体は解らないらしい。恐くて顔なんて見ていられなかったとか。

……おそらくは幽香だとは思うが、確証はない。どちらも覚えていないし。

私が九十九と本格的に付き合いを始めたのは、顕冴が学校に通う事になってからだった。

それまでも顔を見ることや話したりする事はあったが、あいつは昔から変態との噂で有名だったので近づきたくはなかったのだ。…実際に変態だったが。

それに、話といっても人里を守る為の打ち合わせが殆どだったし、何より大抵紫が一緒だったからな。話し掛けづらかった。

顕冴が学校に通うよりも一年余り前からはあまり紫は見かけなくなったが。

……今思えば、九十九と紫が別行動するようになったのは、もしかしたら顕冴が原因なのかもしれないな。

まずは顕冴と仲良くなった。家庭の事を聞くと九十九と住んでいる、と言うではないか。

『あの』九十九とだ。変態と名高い（変態が名高いのかどうかは置いておいて）。

そりゃあ焦った。何しろ顕冴は可愛い。今まで九十九が告白しなかったのが奇跡なぐらいに。私ですら子供の頃にやられたというのに。

……これは関係無いな、うん。

兎に角顕冴は可愛いので、九十九に何かされてないか心配だったんだ。

しかし怒鳴り込んでみると意外と保護者していた。…ご飯の件は置いといてだ。

それから私は九十九の事が気になりだしてな、『もしかしたら言うほどじゃないんじゃないか?』と。まあ言われてる以上に変態だったんだが。

気になりだしたら不思議でな、何時の間にか好きになっていた。

それは混乱したさ。何故?とな。

だが好きになってしまったのだからしょうがない。そう考えることにした。

好きになるのに、理由なんて必要ないんだ。

気付けば好きだった。それは良い事じゃないか。

まあ、私の持論はさておき。

顕冴と九十九は仲が良かった。それはもうまるで親子というよりは恋人のようだった。

夫婦の様でさえあった気もする。

少なくとも、特別な絆があったことは確かだ。

そのころはその絆が何か解らず、何時か本当にあいつらがそういう関係になるんじゃないかと思わされた。

それがまさか、

(親子の絆だったとはな…。私は何を焦っていたんだか)

だが、顕冴は九十九を異性として、男性として、自分の夫として好

いていた。
この事は間違いない。
私はそれを責めるつもりなんてない。

確かにいくら義理とはいえ親子なのだから、世間的には間違なのかもしれない。
けれど。あの子の九十九を思う気持ち。それはとても美しく、とても鮮やかで、とても魅力的なものだった。私はそれを見て、誰かを好きになろうと思えたぐらいだ。

だから、あの子は九十九が好きだった。その感情だけは、間違いなんかは無い。

だからといって私は諦めないぞ。何せ人を、妖怪を好きになるなんて事は初めてだし、これからは、もう二度と無いものだと思うから。

（私は、人里の守護者だからな…）

だから、恋はもうこれっきり。
もうしないし、出来ないし、してはいけない。

「……諦める、ものか……」

～先生ルート　トゥルーその2～へ

七節目　～先生ルート　トゥルーその1～（後書き）

後悔まみれ。だけど決して、間違いなんかじゃ、ないんだから……！

七節目　～先生ルート　トゥルーその2～　（前書き）

さて、あれから一夜が明けた。
…俺はまだ、家に帰っていない。まだ頭が冷え切っていないのだ。
困った事に。
このまま帰ったら確実に慧音を襲ってしまう。
俺としてはそんな展開大好物だが。
変態な俺としてはさらに顕冴が見ている前でやってしまいたい訳だが。

…いかん、またこうふ…混乱してきた。なんとかせねば。

……そうだ！あれがあるじゃないかっ！何故こんな事に気付かなかったんだ？！
人前でやるのは…むしろ興奮するが、いないのならしょうがない。

そして俺は今の処、廻りに誰も居ない事を確認し、最終手段を使った…。

七節目　～先生ルート　トゥルーその2～

さて、その最終手段。
それは…

まず服を脱ぐ。
上だけとか下だけとか、下着は脱がないとかそんな生温いのはダメだ。
脱ぐなら全部、これ常識。

全裸になったら次に自分の尻を叩く。割りと強くだ。

そして叩いた後に前に飛び、両腕を振り上げ左右に思いっきり揺さぶる。
締めにこのワードを叫べば完成だ！

「びっくりするほどユートピア！びっくりするほどユートピア！」

後は各自好きなポーズ、動きをとってくれて構わん！

本来ならベッドが望ましいが、無い物ねだりしても仕方ない！それに充分

「き…気持ちいい…ッ！」

ああ、この解放間、この開放間が堪らないッ！
こいつぁ癖になるぜ……！
さらに調子に乗って色々な技を繰り出す！

「まずは切り揉み大回転！」

ジャンプし、身体を三六〇度回転させるッ！フハハッ。

「お次に空中方向転換！」

そしてさらに高く飛び、空中で『弾幕ごっこ』の弾を一発発生させ、
それを足場にして更に上に飛び、また弾を出す。
そして今度は横に飛ぶ。

「ハハハハッ！そして最後にはその二つを合わせる！」

これはそのままの意味で、切り揉みしながら方向転換するだけだ。
ただし着地点を間違えると木の枝にブスリと逝ってしまう。
しかし、俺がやらねば誰がやる！

まずは切り揉みする為に足場を作り、切り揉み大回転！
続けて足場を作り、回転したまま勢いを殺さずに…着地点へ飛ぶ！

俺は凄い勢いで回りながら、凄い勢いでジャンプした地点へ突っ込み

「ふ、フハハッ…」

ドゴォン、と轟音を辺りに響かせ、地面にクレーターを創って、着地した。

「フハハハハハハッ！！！やれるッ！やれるじゃないか！！！！」

何処ぞの魔王の如く高笑いしながら、自分の行動に酔いしれた。…

…こいつは、癖になるぜ…。

さてもう一度、と飛ぶ為の準備をしようとすると

カランカランッ、と。

何かが連続して落ちる音が、背後から聞こえた。

「あ……」

と、驚いたような少女の声も、一拍置いて聞こえてきた。

俺は

（信じてもいない神様よ、生まれて何度目かにあなたに祈ります…

……どうか、どうか美少女でありますように！）

なんて願望を抱きながら、一気に後ろを振り向いた。

溜め？そんなもんあるわけなかろう！

はたして振り向いた先には

（…おおう。神様、今迄馬鹿にしてきたりして御免なさい。ありがとう…！）

某配管工のようなズボンと綺麗な白髪、頭のリボンが特徴的な、

目を見張る程の美少女が、そこにいた。

美少女だ、美少女。大切な事なので計三回言いました。

まあ、美少女自体は幻想郷では然程珍しい訳ではない。

むしろ実力者は何故か総じて美女美少女が多い。変態の俺歓喜。正に幻想、正に天国！

だがその中でも白髪長髪というのは……いや、それ程滅多にいない訳でもないな。

慧音も此処まで長くないとはいえ白髪長髪だし、頭冴は地面につくんじゃないか（というかついてるんだが）、というぐらいの長さの髪だ。しかも白髪。

まあ、慧音は銀っぽい白、この少女と頭冴は色が抜け落ちたような白と違いはあるんだが、綺麗な事には変わりない。

そんな事より。美少女がいる、これ重要。

しかもメッチャ見てる。凄い見てらっしゃる。

美少女にまじまじと見られると、俺じゃなくても興奮するだろう。
ましてや俺は変態。その興奮具合は半端じゃない。

「おうふっ。」

そして興奮した事でマイサンがおっきした。…おはよう、息子よ。
今日も元気だな。

そして今俺は裸である。全裸である。すっぽんぽんだ。まっぱだカーニバルである。
当然臨戦体制の我が愚息もむき出しで丸出しでモロ出しな訳で。

「き……」

それを見た美少女は顔を真っ赤にし更にそれを見た俺は興奮！

「そんな顔すんなよ……。興奮するじゃねぇかあぁぁぁ！」

言葉と共に我が息子は更に成長するッ！

「ひっ……」

「怯えなくていい…。大丈夫、直ぐにキモチよくなるから…」

じりじり、と滲み寄る俺に美少女は涙目。ああ、可愛いなぁ。

「ひっ…ッ！来るな変態ぃいいいぃ！」

「ハハハハッ！良い悲鳴だ！それにありがとう！変態は誉め言葉さぁ！」

なお一層興奮した俺は美少女に一気に駆け寄る！

「さあ御嬢さん？おじさんと気持ちいい事しようじゃないかぁぁ！」

「ひやぁ……！んのぉ、調子に……」

俺が美少女まで五メートルまで近づいた時
美少女はその掌に巨大な炎を作り出し、

「乗るなぁ！」

若干涙目ながらも、その炎を俺に投げ付けて来た。
辛うじて受け止めるが、この炎、以外と強い！

……幻想郷の美女美少女は大体実力者。皆も、覚えておけよ……？
九十九おじさんとの約束だぞ？変態する時は注意するように。
犯っていいのは、殺られる覚悟の有る奴だけだっ！！

「くっ…！こんな物で、こんなものでぇぇ…！」

抵抗虚しく、俺は何処ぞの帝王のような断末魔をあげながら炎に包まれた。

＝＝

「はあっ……はあっ…ッ」

勢いで飛び出して来たものの、私は九十九が何処に行ったのか、何処に行きたいのか、何処に良く行くのかを全く知らない。
九十九が私と一緒に出掛けるのは、大抵人里だったし。

……はあ…。父娘なのに休日一緒に遊んでいなかったツケが今回ってきたみたい。
というか休日に遊べなかったのは九十九のせいだ。
なんで日曜日まで学校に行かせたがるんだろう？
…まさかとは思うけど、日曜日、というものを知らないんじゃなかろうか。
ははっ、まさかね。大方私のお馬鹿を治して欲しかったからでしょうね。
はいはい、どうせ私は馬鹿ですよ。

まあ自虐は此処までにして、本当にどうしようか？
手当たり次第に探す？無理無理、範囲が広すぎる。
じゃあ帰ってくるのを待つ？論外だ。待てなくなったから探しているんだから。
でも実際には一人でこの広い幻想郷の中で一人を探し出すのは難し

い。
……どうしよう…？
と、私が九十九の探索方法と見付けたらぶん殴る事を考えていたら突然、
「……ッ！何…これ…？！」
目の前に、『ナニか』が現れた。
縦に二メートルくらいの穴。穴というより隙間、といった方がしっくりくる。
その『ナニか』の中から人影が出て来た。
「夜遅くまでご苦労様。お久し振りね、白峰顕冴？」
「…誰？私はあなたに会った事無いんだけど」
「会ってるわよ。貴女が此所に来た時、一番始めに会ったわ」
一番始め……？私が始めに会ったのは、九十九の筈…。
……まさか。

「……あなた、私を襲った妖怪？」

私がそう聞くと目の前のこいつは

「ええ、そうよ。私が貴女を襲った妖怪、八雲紫よ」

そんな事を、悪びれもせずに宣言してきた。

「…くっ…！」

体がガタガタと震えてきた。私にとってはあの出来事は、始めて、そして最後に恐怖を味わった、唯一の出来事なのだ。

…震えるな、自分。私は、九十九…お父さんを探し出して連れ帰らないといけないんだから。

そんな私に気付いたのか、紫と名乗った妖怪は

「そんなに震えなくても大丈夫よ。今日は貴女を殺しに来た訳ではないから」

なんて事を、胡散臭い笑みを浮かべながら言ってきた。

「……じゃあ、何か用？私は、あなたには会いたくなかったんだけど」

「あら奇遇ね、私もよ。でも私は貴女に伝えて置こうと思った事が有ったし、あの変態に貴女と仲良くしてやってくれと頼まれているからね。仕方なく会いに来た訳。」

「……こんなのと友達になるなんて、九十九は何考えているんだか…」

「……普通、私に『九十九の友達になるなんて…』とか言うのではなくて？」

その通りだ。普通はそう言うのだろう。が、何か…こう…ほら、ね？胡散臭さが凄いというか、値で表したら恐らく『お父さんの変態度』＝『紫の胡散臭さ』じゃなかろうか。

だから別に心配しなくていいっていうか、もう手遅れというか……」

「…貴女、途中から声に出してるわよ…」

おおう、つい本音が。

声に出してたって、どの辺りからなんだろう？」

「最初からね、今のは。前者は『胡散臭さが～』の下りから」

「そんなに？！殆どじゃん！」

なんという事でしょう？！私はどうやらこの紫の前では本音を出してしまうようです」

「……もう、いいわ……」

あ、落ち込んだ。…ちょっと可愛いと思ったのは内緒だ。

というか私何時の間にか打ち解けられてる。お父さんみたいな事しただけなのに……

うん、やっぱりお父さんは凄い。主に悪い意味で。

震えも止まっている。まあこれは紫があの時みたいな威圧感を放っていないのもあるんだろうけど。

「本当、そっくりね。あの変態お父様に」

「へへ…悪い気はしないなぁ」

「……もう駄目ね、貴女も。おめでとう。貴女も変態の仲間入りよ」

「へへ……って、流石に変態は嫌だ！幾らお父さんと同じだからって…。同じだからって……あれ？なんでかな、嬉しく思ってる私がいる……」

「はいはい、流石父娘ね。そんな所まで」

「父娘っていったって義理！そこまでは似ません。……あれ？なんで紫が私とお父さんの関係知ってるの？誰にも言ってないのに……」

「それよ。私が伝えに来たのはその事について。いいかしら？良く聞きなさい。これは『これから』の貴女とその周りにとって大事な、大切な貴女の『これまで』よ」

何故だろう、あまり良い予感はしない。聞きたいのに、聞きたく無い。

「先ずは貴女自身の事から。貴女と九十九は義理の親子ではなく、正真正銘の父娘よ。それも母親は上白沢慧音の。今はね」

＝＝

「で？何か申し開きは？」

丸焼きになった俺は、美少女の家で説教（尋問？）されている。
……お仕置き→説教は此処何日かのお決まりなような気がする。もうマンネリ化してんぞ。
まあ、幾らマンネリ化しているとはいえ、それは俺が知っている範囲でだ。
この美少女はそんな事知らないだろうし、聞かれた事には正直に答えんといかんだろう、うん。
というわけで、俺は何故あんな事に及んだのか、正直に、懇切丁寧に、隅から隅までしっかりばっちりくっきりはっきり教える事にした。

「申し開き?っはッ!そんかもの有る訳無かろう!ただ俺は頭を冷やしていたら君が来た。だから口封じを込めて襲った。それだけだ。ほら、何処に問題があろう?」

「全部!頭を冷やす方法が裸で踊るという事も、口封じの為に襲った事も!普通は謝ったり頼み込むものでしょうが!」

「君が美少女なのが悪い。怨むなら美少女に生まれた自分を怨め」

「美少女なら誰彼構わず襲うアンタを怨むわッ!」

「というか、自分が美少女なのは否定しないのな。随分自信家なんだな、君。そんな所も好きだ、襲わせてくれ」

「告白したら襲わせて貰えると思ってるアンタの自信には敵わないわよ!というか襲わせてって何?!普通そこは付き合ってくれ、とか結婚して下さい、とかじゃないの?!」

「フッ、甘いな。俺は変態だぞ?合意の上での行為など、最早変態行為ではない!だから無理矢理だ!それ以外なんて断じて認めんッ!」

「アンタが認めなくても世間が認めるわ!むしろアンタを世間が認めない!」

「何だと!くっ、やはり認められんか!だが間違っているのは俺じゃない、世間の方だ!」

「全面的にアンタが間違っているわよ!」

ああ、この反応、いいなぁ。
打てば響くというのか、痒いところに手が届くというか。
兎に角素晴らしい！

「その反応、気に入った！好きだ、結婚しよう！」

「黙れ変態！アンタ何様のつもりよ？！幾ら変態でもやって良い事と悪い事があるでしょうが！」

「甘い！俺を誰だと思っている！真経津九十九だぞ！俺を只の変態と一緒にしないで貰おうか！！」

「ああ、アンタが『あの』真経津九十九？なら仕方無いわね」

「納得されちゃった？！」

あれぇ～？何で納得しちゃうの？！
変態には駄目でも俺ではＯＫって……。
何ですか？俺は変態を超えた新しい何かですかそうですか。

……ひゃっほい！！
嬉しいじゃねえか。嬉しすぎて目から汁が……。

「ちょ、何でいきなり泣いてんのよ？」

「や、だって嬉しくて。やっと俺は変態を超えたんだなぁ、と」

「変態を超えた事を喜ぶなんて……流石阿求の『幻想郷縁起』にも『変態。以上』としか書かれていない男……」

「なん…だと…？」

幻想郷縁起とは、まあ簡単にいえば幻想郷の妖怪辞典である。
それの俺の項目は『変態。以上』しか書かれていないって……正直どうなの？
辞典としては失格じゃね？俺を表す意味ではこれ以上の表現は無いと思うが。
結論。別にかまわん、むしろ大正解。

「中々優秀じゃないか、稗田の。これ以上無いくらい的確だ」

「……永遠亭に送り込んだ方が良いんじゃないかしら……」

「ん？永遠亭？」

「知らないの？優秀な医者がいる所よ。何でも治せるんだって」

「俺は病気じゃない！ただ変態なだけだ！！」

「それが病気だっての！」

医者とか……行きたくねー。何が悲しくて野郎にベタベタ触られにゃあならんのか。

ん？優秀……？

「なあ、その永遠亭の医者って、女？」

「ええ、そうよ。何？襲うつもり？止めときなさい。あの医者、結構腕が立つから」

「よし！行くぞ、永遠亭！案内してくれ！」

「ちょ、聞いてる？！」

もちろん聞いているとも！優秀で女で腕が立つ！なら行くしかないじゃないか！！

何故なら幻想郷では実力者＝美女美少女だからな！

ふへへ…ふへへへ……

「ちょ、気持ち悪っ…何でいきなり笑い出す？……さっさと連れて行って押し付…面倒見てもらいましょう」

こうして俺は医者に行く事になった。美人の医者…。ふふふ…ははははは っ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「今、は……？」

何だろう、その今まではそうじゃなかったかのような言い草は。
それにけーね先生が母親…？どういう事？

「そう、『今は』よ。ちょっと前までは確定していなかったのだけ

ど…」

「ちょ、ちょっと待って！母親がけーね先生？どういう事？！」

「その通りの意味よ。貴女は真経津九十九と上白沢慧音の娘よ。ちゃんと血縁のある、ね」

「でも、お父さんと先生はそんな関係じゃ…」

「今の時代じゃないわ。『未来』のよ」

「『未来』……？」

え？どういう事？私は……え？

「まず一つ。貴女は未来からやって来た、真経津九十九と上白沢慧音の実の娘。それは最近決まった事」

「決まった？解ったじゃなくて？」

「そう、決まった。貴女が未来から此処に来た理由も、貴女が二人の娘だと決まった理由も、変態の様子が此処最近おかしい理由も、全て貴女の能力が関係しているわ」

「私の…能力？私のは『見惚れさせる程度の能力』じゃないの？」

「それは私が後付けしたものよ。貴女の本当の能力は『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』。神様みたいな能力」

「後付け？『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』？え？何？」

後付けって、そんな事できるの？何でそんな事する必要が…？
それになんでその能力がお父さんの様子がおかしい事に繋がるの？

「まあ最後まで聞きなさい。『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』は確定している以外の事柄を、起こりうる可能性として掴むものよ。例えば貴女は穴に落ちた。怪我をするかもしれないし、しないかもしれない。この場合は『穴に落ちる事』は確定事項、怪我の有無は可能性。どうなるかは他の事項に左右される。貴女が高い所から落ちても、上手く着地できる程運動能力が有れば怪我はしない。逆に無ければ怪我をする」

「穴に落ちないって事は？」

「あくまで例えよ。確定の事は変えられないし、それ以外の可能性は他の確定事項に左右されるっていうね。確定事項になる条件は証拠がある事。記憶でも記録でもなんでもいいわ。その事があったとあなたが認識できる事。例えそれが創られたものだとしても」

「……記憶も記録もなかったらどうなるの？」

「過去が変わるわ。証明出来る事が無いからね。怪我をしたけど何

故したのか、何処でどうやってしたのかを誰も覚えていないのなら、もしかしたら誰かに襲われて負った怪我かもしれないし、只こけた時に怪我をしただけかもしれない」

「でも、誰かに襲われた時、はどうなるの？その人の記憶が有るんじゃない？」

「そこが私が神様みたいな、と表した一番の理由よ。記録でも記憶でも、認識して確定するのは貴女が判断する事。いえ、貴女の能力が判断する事ね。他人の記憶は関係ないわ。そうだと確定したら、他人の記憶や感情を捩じ曲げても実現させる。それが貴女の能力」

他人の意思に関係なく、過去を変えられるかも知れない。おまけに未来も。
本当に、神様みたいな能力じゃないか。

「そして貴女には、今迄の記憶が無い」

そうだ。私は此処に来る迄の記憶が全くない。正確には紫に襲われるまでの記憶が。
名前だって紫が「白峰顕冴。貴女は此処で…」とか言ってきたから、私の名前は白峰顕冴なのだな、と判断しただけだ。本当の名前も、今迄私が何処にいたのか、そんな自分に関する記憶は全くない。
この事は話してはいないけど、お父さん辺りは気付いていたと思う。

なんだかんだで私の事に関しては良く気が付くのだ。

「だから記憶の無い貴女に偽りの名前と能力を与えて、今迄の貴女との境界を曖昧にしてしまおうとしたのだけれど……失敗したわね…」

「曖昧に？消してしまうのが一番良いんじゃないの？」

そんな能力、消してしまった方が良いに決まっている。他人の事まで巻き込むなんて…

「消せないからこうやって回りくどい事をしたのよ。貴女の能力は世界と繋がってる。消すのなら世界を消さなきゃいけなくなるわ。貴女を殺さないのもそのせい。殺せない、と言った方が正しいのかしら」

「殺せない？私はちゃんと怪我もするし再生とかしないよ？」

「貴女の能力が働くのよ。死なない可能性を引っ張り出して生かそうとするの。即死もしないわ」

……本格的に、神様染みた能力だ。殺せすら出来ないなんて。

…今さらっと凄い事言われなかった？世界と繋がっているとかなんとか。

……え？

「えええぇ！？世界と繋がっている？！何で、どうして？！」

「驚く所は其処なの？普通は死なない、とかに反応するんじゃない？」

「や、だって死なないのとか余り珍しくないし」

お父さんとか。あれは何故だか傷を負った傍から再生する。ゴキブリか。

「それってあの変態の事？あれは特別よ。貴女が世界と繋がっている事とも関係しているわ。あれはね、世界の端末みたいなものよ」

「端末？妖怪じゃなくて？」

「そうね、妖怪ではないわ。神様よ、一応。後端末っていうのも比喩。端末そのものではないわ。あくまでもみたいなもの」

「神様？！あんなのが？！」

世界が終わる！だから神様信じていなかったのかな？
なんせ自分が神様だし。

「あんなのって…酷い言いぐさね。全面的に同意だけれど。一応よ、一応。八百万の神みたいなものよ。神様は何柱もいるわ。あれは鏡の神様。正確にはちょっと違うのだけど、今はその事は問題ではないわ。あれは神様で、世界と繋がってる。だから死なないし、娘である貴女も世界と繋がっている。貴女は半分神様みたいなものよ」

「神様？私が？」

それなら、神様染みた能力も頷ける。

「だからみたいな。幾ら何でも神様じゃないわ。そのせいで、貴女はとても不安定。能力も存在も。能力も貴女が全て処理している訳ではないの。貴女で処理しきれない分は世界が勝手に処理するのよ。だから半分神様のようとはいえ、貴女個人であんな破格の能力を使えるの」

ちなみに『貴女が馬鹿なのも能力の処理で脳の大半を使っているから』だとか。
そんな能力いりません！もっと使い勝手良いの頂戴よ。

「我が儘ね。まあいいわ。…そして能力で生じた矛盾は世界が何とかしようとする。娘の貴女が存在するのに真経津九十九と上白沢慧音は夫婦関係ではない。だから夫婦にしようと、若干の思考操作を真経津九十九に施すのよ。世界とっては端末みたいなあいつは都合が良いからね。それが最近の変態の異変の原因よ」

「じゃあ、お父さんが変なのは私のせい？」

「少し違うわ。貴女を通して真経津九十九と上白沢慧音は関係を持った。それにより『真経津九十九と上白沢慧音は夫婦になるかもしれない』という可能性が出てきて、更にその事で『真経津九十九の娘である自分は、真経津九十九とその妻の上白沢慧音との子供かもしれない』という可能性も出てきたのよ。その可能性を確定させるべく、九十九に思考操作を施した」

「じゃあ、やっぱり私のせいじゃない！」

先生にあんな事言っておいて、原因は私でしたなんて笑えない。ああ、笑えない！

……もしかして、九十九の変態も私のせいとかじゃ…。

「だからそうじゃ…まあいいわ。問題は其処から。もし真経津九十九と上白沢慧音が夫婦になり、その間に子供が出来れば、『貴女』という存在が二人いる事になる。それは矛盾。だからどちらかを消そうとする。貴女が二人なら、どちらかがいなくなっても世界にとっては支障は無いからね。そして消されるのは『真経津九十九と上白沢慧音との間に生まれた』という確定事項が無い、証明出来ない貴女の方よ」

それはつまりは。

「私がこのまま行動してお父さんと先生をくっつけたら、私が消える……？」

「…そうよ。私はそれを伝えに来た」

……私は、目の前が暗くなって行くような、足下が崩れ去って行くような、そんな感覚を味わった。

「ちなみにあいつが変態なのは貴女のせいでは無いわ。これは記録に残っているから。いくら世界がある程度人の意志や記憶を改変で

きるといっても、物理的に存在している物までは変えられ無いからね」

「台無し！折角のシリアスモードが台無し！」

＝＝

～おまけ　その頃の慧音先生～

「……つい顕牙の気迫に呑まれてしまって真面目に答えたが、別にあそこまで真剣に話す事無かったんじゃないか？いや、顔色悪くした私も悪いと言えば悪いのだが。だがそれにしても……。いや、問題は其処ではない。顕牙が九十九の娘だったという事か。……うん、別に悪く無い。むしろ喜ばしい事だ。顕牙可愛いし。だが秘密にしていたのは少し悲しいな……話してくれたっていいじゃないか……其処まで信用されてないとか…いやいやいや。駄目だ、これ以上考えると落ち込む」

さて、何故私が誰も居ないのにじっと立って独り言を呟いているのかというと、

簡単だ。動けない。指一本すら動かせない。

……顕冴、動きを止めるのは良いが、もっとこう、制限時間とか付けられなかったのか？

動けないのに意識があるというのは、存外気持ちの悪いものだな。

というか寂しい。此所は九十九の家だから誰も来ないし。

理由は簡単だ。九十九は変態だと有名だからな。誰も寄り付きたがらないのさ。

顕冴が此所に九十九と住んでいる事を知っている者もいないし、誰も来る筈無いのだ。

……あ、そろそろ満月になる頃だな。明後日くらいか。

…帰って来たら頭突きしよう。

↓先生ルート　～トゥルー　おまけ～　へ進む

七節目　～先生ルート　トゥルーおまけ～（前書き）

「…た…ただいま～……」

言ってから、恐る恐る、家の玄関に手をかける。

張り切って、気張って宣言したのに何も出来なかったですーなんて……。

合わせる顔が無いのです。合わせられないのです。

もう何か落ち込む。申し訳なさで一杯です。

そんな感じなので気が済まないのです。というか本当にゴメンナサイ。

そして開けた扉の向こうに広がっていた光景は

「……何やってるの、先生？」

「……ああ、うん。お帰り、顕冴」

じっと固まって、微動だにせずに顔は笑って目も笑っているのに何か危険を感じる笑顔を浮かべる先生が、そこにいた。

……何かもう、本当にゴメンナサイ。

七節目　～先生ルート　トゥルーおまけ～

「さて顕冴お帰り。結構速かったな、関心だ。どんな事情が有ろうがやはり女の子一人で夜うろつくのは危ないからな。まったく、心配したんだぞ？いきなり飛び出して……」

「…え、あ…うん、ゴメンナサイ。どうしてもいてもたってもいられなくって」

「まあいい。こうして帰って来た訳だし」

……あれ？怒って…ない？

あんな壮絶な笑みを浮かべてたから、説教の小一時間くらいは覚悟してたんだけど。

まあ、何事も穏やかにがいいよね！

そう考えていると、先生が「ちょっとこっちに来い」と言ってきた。何で自分から動かないんだろうとは思いつつも、まあいいか。と思考を放棄した。考える事は得意ではないのだ。

私が先生の前まで行くと、先生は私の肩を掴み

「自分の能力ぐらいしっかり制御して使えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ

えぇぇえぇえええぇぇぇ！」

「にゃぁぁぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁぁ！」

物凄い勢いで先生の十八番、頭突きが飛んで来た！う、うぅぅぅうううぅうううぅ……！

痛い。ものっそい痛い。頭突きってこんなに痛いものだっけ！？というか先生頭固！物理的にも精神的にも！後者は今関係ないけど！

私があまりの痛さに床でゴロゴロのたうち回っていると「あ、動ける。」の言葉の後に

「全く。自分の能力ぐらい確り確認して使え。私はあのまま動けなくなるんじゃないかとヒヤヒヤしたぞ。というかお前能力あったんだな、初耳だ」

「ご、ごめんなさいぃぃいいいいぃぃぃ……！わ、私も知らなかったんです……。初めて使ったし……」

そうなのだ。実は初めてなのだ。私が能力を使った、というか使えたのは。

今まで使えそうに無かったことで、自分には能力無いのじゃないか、と考えていたぐらいだ。

……あれ？私能力使ったっけ？使ってたのなら何か申し訳ない。
私のは『見惚れさせる程度の能力』。ぶっちゃけて言えば相手の動きを止める能力だ。
正確には違うみたいだけど、よく解らないから説明はパス。私だって家を飛び出してから気が付いた事だから。

……うん。そこで気が付いたって事は家を出る直前に能力が目覚めた、或いは使ったって事なんだろうね。何故気が付かなかった、私……。

まあ、その気付いた能力ってのも、本当のものではなかったのだけど。

「初めて？なんだ、私はてっきり使いこなせているものだとばかり思っていたぞ。中々強力そうだったしな」

「そんなに？」

「ああ。瞬きすら出来ないとはな。お陰で目が痛い」

「……うぇ？」

なん…だと…？何か目が赤いなとは思ったけど、泣いたからだと考えてました。
そうですか、瞬きすら出来ませんでしたか。そうですか。

「ご、ごごごゴメンナサイイィィィイィイイイィイィィイィィイ——!!私なんかが先生の大切な目を傷つけてしまい！　もうあれですね！　死んでお詫びを！」

「そこまで？！　いや良いんだよ顕冴！　確かに目は痛いんだけども！」

「ですよね！？　やっぱり痛いですよね？！　だったら尚更です！　死なせて、死なせてぇぇぇ！」

その後、私は先生に頭突きされるまでお腹を切ろうとしていたらしい。テンションに合わない据わった目をしながら。……申し訳ない、死にたい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

「で？　九十九はどうしたんだ？　一緒ではないようだが」

「ああ…それは…まあ何て言うか…大丈夫だとだけ」

「………？」

「別に先生がどうこうって訳じゃないらしいよ?嫌いになった、とかじゃなくて顔が合わせられないんだって。何があったんだろ?」

といってもお父さん本人から聞いた訳では無く、紫から聞いたものだけど。

「アレは大丈夫よ。ただ顔が合わせられないだけだから。貴女がどうしたいのかを決めたら、博麗神社まで来なさい。アレの居場所は解っているもの。今の貴女では多分駄目だから。今日はもう帰りなさい」だそうで。

何でもかんでも知り過ぎではないか?と思ったがそこはゆかりんクオリティ。気にしない気にしてはいけない。

確かに今の私は何も出来そうに無い。何かしたら私が消えてしまうかもしれないのだから。

だからといってこのまま何もしなければ、先生とお父さんの仲は悪くなってしまいそうで。

どうすればいいのかが、私には解らない。

少し表情に出てしまって先生に気付かれはしないか、と思い先生の顔を見ると、何か嬉しそうでした。

「そうか、嫌いではないか…」とか「もしかして照れているのだろうか?だったら……」とか何とか。

……何があったんでしょうね。気になります。

まあそれは後で聞く事にして置いといて。どうやら私の事は気付いてないみたいだ。

良かったのか悪かったのか。少し寂しい、とだけ。

……うん、やっぱり先生は笑顔の方が良い。

「さ、先生？今日はもう寝ましょう」

「……ん？なんだ、もう眠るのか？九十九はいいのか？」

「いいのいいの。さあ、寝ましょう、同じ布団で！！」

「…別に構わないが…？」

「本当！？やっほい！！」

「……テンション高いな…」

先生と同じ布団で眠る！あれ、おかしいな。少し興奮してきた！！

……まあ、これくらいは、いいよね……？

「……顕冴、なんだか息が荒いが、大丈夫か？」

「え？大丈夫だよ！何言ってるんですか先生！ただちょっと興奮してるだけです！！」

「本当に大丈夫か！？」

「大丈夫ですよ～私『は』」

「……あれ？なんだろう。寒気が……」

↓病院ルートへ

七節目　～先生ルート　トゥルーおまけ～（後書き）

終わりません。ええ、あくまでフラグ建てるだけです。

七節目　～先生ルート　グッド～（前書き）

なんやかんやあって家を飛び出した俺！
そしてその先であったばば……スキマ妖怪紫！
彼女は、俺に話したい事があるという！
それは！……それは？

「テンション高いわね…」

「いや、こうした方が良いかな、と。で、話って何だっけ？」

「貴方の娘の事よ」

「ああ、そうそう。そうだったな」

「……」

七節目　～先生ルート　グッド～

そうそう、確か娘の事だって言ってたな。確か。
……娘の事、か。何だろうな。
ってかやっぱり知っていたのな。顕冴が娘だって事。どうせスキマから覗いていたとかなんだろうが。
汚い、さすがゆかりきたない。

プライバシー？なにそれ日本語？を地で行く行動である。まあそもそもプライバシーは日本語ではないんだが。

あいつも多分年頃だと思われるので勘弁してあげてくれないだろうか。
俺？勿論嬉しいに決まっているじゃないか。
常に見られている、しかも美女にだ。普通興奮しねぇ？しませんかそうですか。

「そうだ、娘の事といえば、スキマで覗くの止めてくれるか？あいつも歳頃だろうし」

「変わらず、あの娘には優しい……というより『お父さん』しているわね。ちなみに答えはＮＯよ」

「何故？！」

「これから話すわ。というより、やっぱり覗いてた事知っていたのね」

いやただの感ですけど。
などとは言わない。折角勘違いしてくれているのだから、勘違いのままでいさせてやろう。
むしろいさせてくださいおねがいします。

だってそうじゃなきゃ格好悪いじゃない。

俺が内心で誰にも向けない土下座をしていると、紫はそんな俺の様子を察知したのか、溜め息を吐いた。……何故解った!?

「土下座している時点で充分格好悪いわよ」

「だから何故解った?!」

「『スキマ妖怪』ですもの」

「理不尽すぎる!!」

だがこれ以上とない程、的確な表現かつ理由である。
この紫さんの理不尽は今に始まった事では無く、俺の変態と同じくらい、あるいはそれ以上に仕方がない事なのだ。

もう最早世界の真理レベルである。そのくらいのレベルで紫は理不

尽で胡散臭い。だがそこが良い。

むしろ男はそこに興奮するのだ。皆騙されたいのである。

……あれ？何でこんな話になってるんだっけ？

俺が何故？と首を捻っていると、紫は「またコイツは……」みたいな視線を向けてきた。

またってなんですかまたって。確かにしょっちゅうある事だがな！

「話が進まないわ。貴方これから一時黙っておきなさい」

「え～そん「黙れ」……はい……」

睨まれた。ものっそい怖い目で睨まれた。もうこれ魔眼レベルじゃね？ってぐらいの強制力を持つ目で睨まれた。怖い、でも感じｔ（ｒｙ

目の前で快感に打ち震える俺に汚物でも見るかのような視線を向けて、何事も無かったかのように「話というのは…」と続けた。

ほ……放置プレイだと…っ！これは悔しい！でも（ｒｙ

「まずは貴方の娘、白峰顕冴の出自から始めましょう。あの娘は貴方の本当の娘よ。『未来』の、だけれど」

意外な事実が判明。拾った子供は本当の娘でした。
何だそれ、何かのドラマですか？昼ドラですか？どんな展開だよ。
むしろそのパターンはラブコメ的展開に発展する可能性が大。エロゲ的に考えて。
あぶねえ、これで俺が顕冴を襲っていたらそれなんてエロゲ？である。もうすでにエロゲ展開だが。

というか未来って。流石幻想郷、俺達には出来ない事を平然とやってのける！そこに痺れも憧れもしないがな！

そしてそれ以上に気になる点が一つ。未来の俺の娘って事は……あれだよな？アレしてああなってこうなるんだよな。

……相手、誰？
自分でいっちゃあ何だが、こんな変態に付き合うなんて相当な物好きか同じく変態な奴だけ……俺の知り合いにそんな奴は……あれ？
結構いるぞ？俺と付き合う可能性があるのかどうかは置いといて、皆変態ばかりだ、うん。

……ああ、もしくは俺が無理矢理に、犯罪行為に手を染めて、ああなって……で、生まれた娘は母親の復讐を果たす為に来た……と。うん、こちらの方が説得力あるわ。

「成る程、母親の為に復讐しに来た、と。だが過去に行く、というのは流石に簡単にはいかなくて、記憶喪失になった、と」

俺が考えた事を自信満々に話す。
どう?あってる?あってるだろ?みたいな感じで。どや顔である。

「……何が?どうすればそんな考えに至るのよ。……だいたいあってる」

あってるんだ。適当に考えた事があってたりしたらびっくりするよね。
「復讐の為ではないみたいだけど」らしいが。だったら何なんですか。

悪いがそれ以外に思い浮かばねえのだ。それ以外に何があるよ?
そうでもなきゃ、あんな美人さんが……?あれ?そもそも何であいつ幻想郷に来たんだっけ?事故?故意?

何でだっけ?、と紫に聞くと「貴方、あてずっぽうだったの?てっきりあの娘が自分の所に来た、という事を知っていたからあんな思考をしたのだと思っていたのだけど」と言われた。買いかぶりすぎである。俺はそんなに偉大ではない。俺が普段どう思われているのか気になる台詞だな。

俺なんてもんは変態、この一言で充分である。

いやだがまあ、このまま勘違いさせておいた方が色々と都合が良いからこのままで……この考え、さっきもしたような気がする。

とにかく、あいつが幻想郷に来たのは俺に会いに来る為、らしい。
何が目的で、とか母親は？とか、疑問は残るが、これから紫が話してくれるだろう。と人任せの思考をしてみる。

何せ俺は理由を察そうにも、材料が無い。あるとしたらあいつがアホの子という事と素直な事、記憶が無いみたいだ、という事ぐらいである。

ちなみに記憶が無いのでは？と解ったのは結構最初の頃だ。
俺が顕冴、と名前を呼んでもなかなか反応しなかった。
俺に慣れていなかった、というのもあるだろうが、それよりも『顕冴』が自分の名前だということが解らなかったように見受けられた。
名前ではなく普通におい、とかちょっと、などと、名前で呼ばずに声をかけると普通に反応したからな。
おそらく、顕冴という名も本当のものでは無いのだろう。誰がつけたのか解らんが、特にこれといって悪い事はなかったのでそのまま使っているが。

記憶はどうやら未来から来る際に失った、であっているようだし。

我ながら中々の推理力だな。褒めてくれていいぞ？

「はいはい、凄い凄い。で、あの娘の目的だけれど、正直な話、解っていないわ。あの娘から聞こうにも、初めて会った時には記憶を失っていたし」

あっさり流された。気持ちいいぐらいの流されっぷりである。
もう文句すら出ない。いいぞもっとやれ。

「ん？あれ、初めて？お前さん、顕冴と会った事あるのか？」

「あら……？ああ、そう。そうだったわね。貴方には話していなかったかしら？あの娘がこの幻想郷で会った初めての人物っていうの、私よ」

「……ああ、そっか」

つまりは顕冴を襲った犯人って事でＯＫ？
……まあ、だからといって何かするつもりはさらさら無いが。
返り討ちにあいますしね、十中八九九割九分。
あっちはてっきり俺が攻撃してくるものと思っていたのか構えていたが、予想に反して俺が何もアクションを起こさない事に、相当驚いているらしい。珍しく目を見開いている。
……今の顔、しっかり記憶しました。何時の日か、使える時を待とうじゃないか。

何に使うのかって？ははは、解るだろうブラザー。
何、悪用するつもりも皆に知らせる事もしないよ。ただ自分が個人的に使わせて貰うだけさ。

「あら？何かしら、今悪寒が……」

「気のせいじゃね？で、あいつの目的は知らないんだな？」

勘付かれそうだったので話題転換。無理矢理だった気がしないでも無いが、やっぱりむりやりだったようだ。ほら、紫さん、釈然としないって顔してるし。

だが、話を進める方が先決なのか、紫は釈然としない表情のまま、話を再開した。

「ええ。……それよりも、あの娘を襲ったのが私という事を聞いて、貴方が何もしてこなかった、という事が驚きなのだけれど」

「ああ、それ。まあ、本当は襲いかかりたい訳だが。勿論性的な意味で。……ごめんなさい嘘です冗談ですからその振り上げた腕を引っ込めて下さい御願いします」

満面の笑顔で拳を振り上げ、今にも殴り掛かって来そうである。すげぇ怖い。

割と本気で驚いていて、割と本気で質問していたのか、はぐらかされた事が頭にきてるみたいだ。拳の力の入れ具合が間違い無く本気でした。

紫の本気パンチなぞ、喰らったら一発で死ねる。というか俺の体が

肉片一つ残さず消し飛ぶ。

皆さん忘れがちだが、この紫さん、間違い無く最強クラスの実力者なのだ。幻想郷内外問わず。

能力もデタラメで反則だが、素の腕っ節もなかなか。というか強いです。ものっそい強い。

その強さを解りやすく例えると、何処ぞの中国さんに勝てる。ガチで。

能力は反則、身体的な面も反則って。もうやだこのひと。絶対に戦いたく無いね！

俺が土下座で謝っても、そこは卑怯と定評のある紫さん。俺の頭を片足で踏みつけて、

「嫌よ。流石に今のはイラッと来たわ。だから、ね？」

だから？な、何ですか、何なんですか！

恐らくこの人、笑顔である。だって声が楽しそうだったんだもん！

そして恐らくこの人、拳を振り上げたままである。だって重心変だもの！殴る為にさっきより更に拳を振り上げているに違いない！

「少し、頭冷やしましょう？」

あ、悪魔が居たーーーー！

俺の意識は、『ドゴォォン』という、とても人の頭を殴ったとは思えない音と共に襲って来た衝撃と

（……あ、白……）

ちらっと見えた（というより執念で見た）『天国《スカートの中》』を最後に、薄れるを通り越して、吹き飛んだ。

＝＝

「……んぅ……あ………？」

俺、復活！

まあ、ただ気絶から目が覚めただけだが。

そしてこのテンションと裏腹に、実はあまり意識がハッキリしていない件。

フラフラします。目の前が霞んでいるよ、何だか周りが暗いよママン。

「おはよう、変態さん。じゃあ、早速話の続きだけれど……」

居たんですか紫さん。居たんなら起こして下さいよ。そして少しは労って下さい。

起き抜けにいきなりそんな難しそうな話を始めるなんて…いやまあ構わんが。

あなたが俺を殺したんでしょう？いやまあ俺が悪いんだが。でもだからって……放置は……

……ん？放置……？ハッ！これが本当の『放置プレイ』か！

成程、そうだったのか……。そうと解れば何だか興奮してきた！

「……クネクネするな、いいから話を聞きなさい」

「気にせず続けてくれ、俺は気にしない」

「私が気にするのよ。何とかならないの、それ」

「変態だから仕方無い」

俺の投げやりな答えに、紫は溜め息を吐く。そして何事も無かったかのように、本当に気にせずに話を再開し始めた。……なんだか…

ショックです。

あれだよ？変態は無視される事が辛……くは無いな。少なくとも俺にとっては御褒美です。

「で、どこまで話したのかしら？」

「紫が顕冴を襲った事が判明。目的は不明。で、どうやって過去に来たのかも不明、と」

ちなみに母親も不明。

あいつがどうやって過去に来たのか。それは不明だが、何となくは解らんでもない。

大方、あいつの能力か何かだとは思う。というより、それ以外に過去に行く、なんて事、そうそう出来はしないのだ。

出来るとしたら紫の能力くらいか。しかも出来る、とは言っても半ば事故で、だが。

「ああ、ちなみにあの娘が過去に来れたのは、あの娘の能力によるものよ」

「やっぱり原因、知ってたか。で？あいつの能力って？」

『時間を戻す程度の能力』とか『やりなおす程度の能力』とか、そんな反則級な能力もありえなくは無い。何せ『俺の娘』だ。
…本当に俺に子供が出来るのなら、だが。

「『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』よ。流石、反則じみているわね」

予想を上回る反則っぷりだった！
まあ、そのままでは反則っぷりが解らないと思うから、少し説明をば。
例えば、何かしらのスポーツがやたらと上手かったりする。『もしかしたら、将来とんでもない選手になるんじゃないか？』と考えるだろう。それが『可能性』だ。絵が上手に描けて『もしかしたら…』というのも『可能性』。事故に『もしかしたらあってしまうかも』というのも『可能性』だ。

『可能性』とは、その『もし』という、主に未来に向けてのことだ。
しかし、過去の事に対し『もしあの時～していたら』という思うのもまた、可能性である。
通常、過去は変えられない。それは時間という流れの中で生きて行く上で、変えられないことで、変えてはいえないこと。
が、『あらゆる可能性を掴み取る』とは、つまりはそういう事なのだろう。未来は疎か、過去ですらあったかもしれない『可能性』として、『変えてしまう《掴み取る》』のだろう。

過去に行く、というのは、おそらくは矛盾を無くす為の手段だろう。過去を変えれば自分は消えてしまうが、過去を変えたのが自分ならば、自分は消えないのだ。

『世界』はひどく矛盾を嫌う。起こらないようにする事は勿論だが、ひとたび起こってしまった矛盾は、原因となるものを消してでも無くそうとする。

だが消しても解決しない場合はどうするのか。それは放っておく、である。

どうにもできないものは容認する。厳しいのか適当なのか、よくわからんのだ、世界は。

だがせめて、それ以上矛盾を出さない為に過去に送り、記憶を消すなんて事をしたのだろう。

記憶は、いわば矛盾である事の証明。それが無くなってしまえば、誰も矛盾とは解らなくなる。

何せ過去のものには、未来の事など解りはしないのだから。世界ですらも。

顕冴は、そんな無茶としかいえない手段でしか解決できないような事をしでかしてしまったのだろう。

あるいは過去に行く為に、何かしらをしでかした、なんて事もありえるが。いくらなんでも顕冴はそこまでアホの子ではないと思いたい。

そうして過去に来たのなら、『顕冴』という存在は酷く不安定なものとなってしまう。

通常ある筈の『生まれた』という証拠が、未来から来た上に記憶まで無いのだから、証明できるものが存在しない。あるのかどうかすら怪しくなる。

しかし顕冴は存在する。のだからしょうがない、放っておこう、と

なるのか？

……もうやだ。考えたく無い。起き抜けにこれはきつい。
世界のことなんて、実は良く解らんのだ。単純なようで複雑で、でもやっぱり簡単な事でした、なんて訳の分からない答えしか出て来ない。マジどうなの世界。それでいいの世界。

「で、あの娘に名前を与えて、それに付随する形で能力も与えて、あの娘の存在を薄めて本来のあの娘の能力をなるべく矛盾無くどうにかしようと思ったのだけど……」

「名は体を表すって言うでしょう？」とも。なんでも『白峰顕冴』は、刀をイメージしてつけた名前だそうだ。
白い峰を持ち、冴え渡る刃が顕現したものという意味があるらしい。
無理あるだろ、と思う。

「仕方無いじゃない。急な事で考える時間が無かったんだもの」

「ちなみに考え出した時間は？」

「三分」

「短ッ！」

いくらなんでも可哀想すぎるだろ！名は体を表すってぐらい大切なものなんだよ？！
三分っておま、カップラーメン？！

「真経津九十九なんて、簡単で単純な名前の人に言われたくは無いわ」

「いいじゃないか、わかりやすくて。ドンピシャで表してるじゃないか」

しんぷるいずべすと！何事も簡単な方が良いよね！

「というか、紫があいつの名前付けたのな」

「何よ、悪い？」

多分、「意外？何？私が名前付けちゃいけないの？」みたいな感じで拗ねているんだろうが。こんな事で拗ねるとは、まだまだ紫も若いなぁ。

「いや全然。俺の娘に名前を付けたから、母親って事になるのかなぁと思って。って事であいつの母親は紫って事でＯＫ？」

「ＮＯよ。違う、違うわ。変な想像しない。私は母親じゃないわ、今迄も、これからもね。……多分」

未来の事は解らない、と。そういう事ですか？
でもそれは、将来俺の子を生む可能性があるって事？俺に気があるって事ですか？！
うはっ！興奮してきた！

「それは遠回しに誘っているんですか！？頂いちゃいますよ？！」

「だから変な想像しない！それは無い、無いわ！私が貴方の子供を生むなんて絶体に……無い、とは言い切れないわね…」

「マジで！？これはラブコメな予感っ！」

「いえ、無理矢理孕まされる可能性が…」

「鬼畜陵辱だった？！」

ですよねー。俺なんてもんは、所詮そんなもんですよねー。
無理矢理しないと子供が出来る可能性が無い自分に興奮を禁じ得ない。
むしろ無理矢理じゃないと興奮しない俺をなんとかしないと。
というか、顕冴が本当に俺の子供なら、確実に変態の血が流れてるよね？
流石にそれは……ん？…変態娘、か。……アリな気がする。

……娘にすら興奮する自分に嫌気がさしてきた。死にたい。

復讐の為に過去に来たって、間違いじゃ無い気がしてきた。…あれ？これ最初も考えてなかったっけ？

なんだかいい感じに混乱してきたが、何故俺が顕冴を襲わないのかが解った。
あんな美人さんを襲わないなんて、何だかおかしいな、とは思っていたのだ。
…何？義理とはいえ父娘って事になっていたんだから、流石に理性が働いたんじゃね？、だって？ははは…っ。俺に働くだけの理性があるとでも？
義理の父娘？ただ興奮するだけじゃないか。

が、そんな俺が、顕冴を襲っていない。これはあいつが俺の娘だからだろう。
考えてもみろ。襲った結果、子供が出来た、なんて事にでもなったら。
自分を生んだのは自分、なんて最大の矛盾が出来かねん。『自分』が二人、なんて矛盾だ。

それは世界的に喜ばしく無い。俺的には嬉しい事だが。

そんな訳で、俺は顕冴を襲えないようになっているんだろう。……残念だなぁ、もの凄い美人さんなのに。勿体無いなぁ。

「…ん？あれ…？もしかして、俺が子供を作ったら、あいつ消えんじゃね？」

「……そうね。多分、消えるわ」

やっぱりねー！え、じゃあ何？俺、迂闊に美人さんを襲えないって事？！

……俺が子供を作る、それは顕冴が生まれる事と同義だ。俺の子供は顕冴。これはあいつが存在している以上、決定している事項なのだろう。

だが、俺が顕冴が存在している今、子供を作ったらどうなるのか。……顕冴が消える、だ。それも恐らく、今存在している顕冴の方が。これから生まれる事になった『顕冴』は、親も、生まれたという事もはっきりと証明する事が出来る。

だが、今存在している『顕冴』は、親も、生まれた事もはっきりとしない、存在しているのに生まれたのかどうか解らない、なんて矛盾している存在だ。

今迄ならば、そんな矛盾している存在でも、消す事は出来なかった。……詳しくは省く。とにかくあいつは、俺の娘という事で、世界にとってなくてはならない存在だったのだろう。

だが、その娘が二人になってしまった。それは『同じ人物は二人と

いない』という大原則に反した事、矛盾である。
だから解決しようとする。どちらかの存在を消去する形で。
二人いれば、どちらかが消えても問題はない、という事なのだろう。

「お、オイオイオイオイ！お、襲えない！迂闊に襲えないじゃないか！俺はどうすればいいんだよぉぉおおおぉぉぉ！」

「そこまで嘆く事？良いじゃない。これで暫くは幻想郷の女子は安心できるわね」

あんたは他人事だからそんな事が言えるんだ！それがどんなに辛い事か解るか！
美人が目の前にいるのに、手が出せないんだぞ？！……うぅ、ふぐぅ…。

「……そういえば、貴方は何所へ向かう所だったのかしら？行かなくていいの？」

俺が泣いた事は、あっさりと、当然のようにスルーされた。寂しい。

「いいんだよ、元々行き先は決まって無かったし、目的という目的も……あ。」

「？何？とうとうボケでもした？良かったわね」

「良く無いわ。……忘れてた、先生の事」

朝、慧音を襲いそうになったんでそのまま逃げてきたまんまだ。……心配、してるんだろうなぁ。

……ああ、そっか。襲いそうになった理由、そういう事か。

顕冴の能力が働いたんだろう。早く顕冴の存在を安定させるため、生まれた、という証拠を作る為に。

……それ、顕冴が消える事になるのに。どうやら本人に限らず、能力までアホの子のようだ。

まあ、あれだ。そうと解れば、耐えれば良いだけだな。うん。

ん…？慧音…？……あ。

「なあ、満月の夜まで、後どのくらいだっけか？」

「唐突ね。…明後日じゃなかったかしら？」

「明後日……か」

明後日ね、まあ、何とかなるか。
うん、大丈夫だろ、きっと。

「じゃあ、俺そろそろ帰るわ」

「あら？いいの？貴方、上白沢慧音を襲いそうになってたじゃない」

「……いつから見てた？」

あれ？これもしかして、あの時の事見られてたんじゃね？
……きゃあぁぁぁ！は、恥ずかしいぃぃぃぃぃぃぃぃ！！
い、いや、違うよね！？今日の朝の事だよね？昨日の夜の事じゃないよね？！
内心ものっそいぱにっくになりながらも、なんでもないように聞いてみる。
…朝からだよね？と、言外に含めながら。

「いつから？そんなの決まっているじゃない。……ずっと、よ」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！恥ずかしいぃぃぃ！」

どうせそんな事だろうと思ってましたよ！思っていましたとも！

ずっとって何すか!?え?『ずっと』?!え?俺って常に監視をしないと安心できないくらいなの!?信用ゼロ?!……ですよねーー!

「やっぱり貴方、変よね?」

「何を今更!俺が変なのは昔からだろう!?あと変ってだけじゃない、俺は変態だ!!」

「そうじゃないわ。貴方昔なら、そこ、恥ずかしがるんじゃなくて、むしろ興奮する所でしょうに。昨日の夜だって、キスだけで済ませちゃうし……」

「……あなたは、あのまま慧音と致せ、と?そう言いたいのですか?」

「そうは言わないけれど……というか、そうなったら流石に止めるわよ」

「どうやって?」

「腕力にものをいわせて」

「お、襲わなくて良かったーッ!…俺コレもしかして、殴られるの解ってたから襲わなかったんじゃね?野生の勘って奴」

「貴方に野生なんてあったかしら?」

「ないですね」

おふざけの会話を中断して、寝そべった状態から起き上がる。
何時から寝ていたのかって?意識が戻ってからずっとこの体制さ、ブラザー。
ちなみに紫は立ったままである。ずっとそうだったのかどうかは知らんが、少なくとも俺が起きた時には立っていた。俺の頭のすぐ上の辺りに。
……もう言わなくても、解るよな……?ただ、良い白だった、とだけ言ってこく。
間違えた、言っておく。……よし、今晩のおかず決定。
ご飯のだよ?……そこ、そんなゴミを見るような目をするな。本当だから。…すみません嘘付きました。
……何か、紫さんの俺を見る視線も、冷たい気がする。気のせいだよね?

「ちなみに貴方、理性もないわよね」

「え?何?!あの会話続いてたの?!まあ否定はしないが」

「むしろ貴方、性と名の付く感情無いんじゃない?」

「いやあるだろ。俺にとって一番大切な、性の字が付く感情」

「何?惰性?」

「性欲」

「ああ……」

こらそこ、遠くを見るなこっちを見ろ。どこに目を向けている。

「じゃ、今晩はこれでお別れだ。またな」

「……本当に、大丈夫なのね？」

「なんとかなるとおもうよー？」

「じゃあこっちを見なさい」

「なんとかしてみせるぜ？」

「肩を掴まない顔が近い表情が気持ち悪い」

「そ、そんなに言わなくても……」

膝と手を地面に付く。うむ、我ながら見事な『ＯＴＬ』っぷり。ほれぼれするね。

そんなかんじで、俺がしょっくを、紫が快感を受けている時、遠くから、誰かの足音が聞こえて来た。

「ん？足音？誰だ？結構な速さで走ってるな」

「……貴方、異常に耳が良いわね。私は聞こえないわよ」

「あれじゃね？ただ紫がボケただぶらぁ！」

語尾がおかしい理由は顔を蹴られたからである。ちょっと気持ち良いのは、内緒だぞ？

そうこうしている間に、足音の主がやってきたようだ。

先ほども言ったが、相当な速さで走って来る。何か事件でありましょうか？

正直ね、普段なら顔が見える位置にはいると思うんだが、如何せん今は夜。顔なんぞ見えないのだ。よって表情も解らんので、危機感たっぷりなのか、嬉々感たっぷりなのか解らん。

誰かすら良く解らん。ちなみに俺は、あくまで一般人程度にしか鍛えてないので足音で誰か判別、なんて出来ません。他の強い妖怪や人間の方々なんかは解るんだろうが。

あ、居るじゃん。強い妖怪。

「なあ紫。今こっち来てるの誰？」

「ああ、それは……「あ、居た！」……」

紫の言葉を遮るようにして、すぐそこから聞こえてきた声。……え？すぐそこ？あれ？さっき２００めーとるくらい離れてなかったっけ？

というかこの声、どっかで聞いた事のある、なんてレベルではないぐらい聞き慣れた声だ。

具体的に言うと、一年三百六十五日毎朝毎晩欠かさずに、五年以上聞き続けた声である。

…解った。声の主は解ったが、形式上な。こう言っておかないと落ち着かない。

はたして、その声の主とは！？次回に続く！

「……なにやってるの？お父さん…」

……続くったら、続く！！

七節目　～神社ルート　グッドおまけ～（前書き）

俺が紫に踏まれているとき（べ、別に気持ち良くなんてないんだからねっ！）、暗闇の中もの凄い速さで走って来た人影。その人影の正体は、先程までしていた話の中心人物であり、俺の娘でもある（らしい）白峰顕冴だった。
俺の現在の様子（紫に顔を踏まれている）を見た顕冴は、開口一番にこう言った。

「……なにやってるの？お父さん…」

そら言いたくもなるわな。

七節目　～神社ルート　グッドおまけ～

我が娘顕冴は、なにやら勘違いをしているようですな。いやこの光景を見れば勘違いもクソもないが。

「まあ待て、落ち着け、落ち着くんだ。落ち着いて素数でも数えようか」

顕冴はアホの子。ならばこれで混乱するはず！その間になんとか此所（足の下）を抜け出して……あ、やべ。抜け出したくない俺がいる。なんだ、この安心感というか、落ち着くというか、興奮するような感じは…。

興奮と沈静が同時に体感するという、訳の解らないのに離れ難い感覚！

「2，3，5，7，11，13，17，19，23，29，31，37，41，43，47，53，59，61，67，71，73，79，83，89，97……」

そうこうしている間に、１００以内の素数全てを言い切っただとぅ

!?いくらなんでも早過ぎやしないか?しかも1を入れてない辺り、こいつ、出来る……!

顕冴はまさしく淡々と、と表すより他ないように素数を数えていく。…あ、アホの子じゃ無かったのか?!……いや違う!そうか、そういう事か!こいつ、確かにアホだが知識だけは有るんだ!忘れていた!

１００以上の素数も難なく言えている。計算できない顕冴は普通は躓く筈。

だがこいつは、恐らく計算して素数を割り出しているのではなく『覚えて』いるのだろう。

どの桁までの素数を覚えているのか解らんが、今２００の台に突入した。素数を２００台まで覚えているとは……顕冴、恐ろしい子!

「あれ?でも素数言えるってことは、相当落ち着いてるんじゃね?」

「というより、最初から混乱はしていなかったみたいよ、あの娘」

「じゃあ、なんで素数数えてるんだ?……あ、今３００台突破」

「そうね……貴方に言われたから、じゃない?…４００台通過したわね…」

「素直!びっくりする程素直!素直すぎるよ!そして５００台突破!なんかペーす早くなってないか!」

言われた事を何の疑いも無く実行する、本当に、俺の娘とは思えない程、人の言う事を良く聞く良い子だった。
そして、５００台に及んでなおペーすが下がるどころか更に上がっている程、頭良いんだか悪いんだか、良く解らない子だった。

しかし、一向に疑う素振りすらみせず淀み無く言い続けている。
それは、言われて数え出してから5分経ってもなお全く変わらない事だった。
いや、流石に疑うだろ、止めるだろ。つーか止まれよ。止まって下さいお願いします！
すげー勢いで素数を言っている。まあそこまではまだ良い。
だが無表情で淡々と、淀み無く噛む事も無く言い続けるのは止めて貰えないだろうか。
端的に言うとあれだ、怖い。
無表情で言い続ける事も、いつか噛むんじゃないか？と思う程早く言う事も。
端から見てると恐ろしいものがあるのだ。

「おお……噛みそうで噛まないこの何とも言い難い危うさ…！しかし何故だろう、こいつが噛む光景が浮かばない！」

「言っていいのかしら？とうとうこの娘、７００台までいったわよ？」

なん…だと…？もう、７００だって…！？
最早これは神の領域！だ、誰か！誰かこやつを止められるものはお

らんのか！
何かもう色々と心配になってきた俺の心を読み取ったのか、突然何の前触れも無く、顕冴は素数を延々と言い続けるという作業を停止した。……声が聞こえなくなった、というだけだが。

「おお……止まった。顕冴、落ち着いたか？」

「……」

「おーい？顕冴？」

「……」

へんじがない。ただの……って、それは駄目だろ！え、おぉい？！こちらがいくら呼びかけても、顕冴は全く反応を示さない。ずっと止まったままの姿勢、つまりは虚空を見つめたまま、瞼も閉じず、身じろぎ一つすらしない。
正直に言おう、もの凄い恐い。素数を延々と数えられていた方がまだマシだと思えるくらい恐い。
……あれ？これもしかしてアレなんじゃね？

…そろそろと、ビビりながらもゆっくりと顕冴に近づく俺。そして顔と顔の間の距離が１０せんちも無い程近づいて、顕冴の両頬を手で掴んで固定する。
べ、別にやましい事をしようって訳じゃないよ？本当だよ？
そして固定せずとも動かない顕冴の顔に、俺の顔を更に近づけ、そのままキス……はする筈も無く、俺の耳が丁度顕冴の鼻の前に行く

ようにした。

「呼吸をしていない…だと？」

え？ちょ、ちょー！？

何コレ、何なのコレ！？え、死んでる？！ねえ死んでるのコレ？！

息して無いけど、生きてるよね？生きてるよねコレ？！

……まあ、瞳孔動いてたから死んではいないんだろうが……どうしてこうなった。

あれか？もしかして素数言うのに夢中になりすぎて、呼吸を忘れた、とかそういうオチ？

……アホだ。アホの子だ。希代のアホの子だ。夢中になるにも限度があるだろ……。なんなの？アホじゃなくて、馬鹿なの？

というか、あの長ったらしい素数を言っている間呼吸をしていなかったなんて、どんな肺活量だよ。一番そこに驚いたわ。

俺が娘の非常に異常な能力に恐れおののいていた時、耳元に、微かに音が聞こえて来ているのに気が付いた。……顕冴の口の方から。

「ま、まさかね……」

流石にそれは無いだろうと思いながらも、一応、一応念の為に確認する為、今度は耳を口に近づけてみる。

「……」

何か言ってる！正直何を言っているのか、声が掠れていてかつとても小さかったので聞き取れなかったが、おそらくはまだ素数を言い続けていると思われる。

「人の執念、見せて貰った……」

なんて言っている場合では無く、こいつこのままだと本気で窒息しかねないのでなんとかして止めなければ。
だが、こちらの呼びかけにも答えず意識も無い。ただ根性というか、そういった念でのみ動いている奴を、どう止めろと？
悪いが俺には思いつかん。正確には一つ無くは無いのだが、流石に気が引ける。

よって、一縷の望みを賭けてさっきから笑い転げている紫に聞いてみる。ちなみに紫さん、俺が顕冴が呼吸していない事を発言した辺

りから、ゴロゴロと言葉通りに笑い転げている。
あっちへゴロゴロこっちへゴロゴロ。他人の目を気にしていない行動だ。子供か。…服の洗濯大変そうである。
……こんな下らない事で命の危機なんてアレだが、そこまで笑うのもどうかと思う。人の命掛ってるんだよ?

「なあ、コレどうしたら良い?つか笑い過ぎじゃね?」

「…ふッ……くっ……っ……。はあ…はあ……ん、こほん。…御免なさい、あまりに滑稽で……ぷっ……くくっ……っ」

「もういいよ!もう笑わないであげて!」

落ち着いたと思ったら、すぐさま再び笑いだす始末。もうやめて!顕冴の酸素量はゼロよ!あんたのもだけどな!

「……っ……ふうっ。で、何だったかしら?止める方法?そんなの簡単よ」

込み上げる笑いをこらえ、なんだかやたらと自信ありそうな態度で、胸張りながら紫はそう言った。
まあ、こいつが自信ありげなのは何時もの事だが。そしてこいつが自信満々な時程、大抵嫌な事しか起こらないのだが。…ほら、見て

みろよ、俺の腕。凄い鳥肌だろう？
実はこれ、腕だけじゃ、無いんだぜ…？

嫌な事になりそうな悪寒に耐える俺を知ってか知らずか、知ってやってるんだろうなぁとは思いつつもどうしようも無いので、紫の案を聞いてみる事にした。

「口が動きっぱなしで、そこから徹底的に空気が抜けていってる訳でしょう？なら簡単じゃない。口を塞ぎつつ、空気を送りこめば解決、でしょう？」

ほら簡単。なんて言ってはいるが、だからそれをやる方法を聞いているんだって。
いや、俺も思いつくよ？思いつきはするけど、これはいくらなんでも無いって。
そして、紫と俺の考えついている方法って多分同じ。だって鳥肌酷くなったもん。

そして紫は、なんの臆面も無く、その恐るべき案を、発表した。

「じゃあ人口呼吸しか無いわよね？当然マウストゥーマウスで」

やっぱりねー！ええ、どうせそんな事だろうと思いましたよ！
にやり、と笑いながらそんな事を言ってくる。あんた確実にこの状況楽しんでますよね？
だから駄目だって。いくらなんでもそれは……ねえ？鬼畜だろ、鬼畜過ぎんだろと思う訳ですよ。

…まあ、紫がやるってんなら話は別だがな！
正直同性愛ってのはあまり好かんが、キス程度なら大丈夫！
ねちょねちょしたのが駄目なのであって、そふとなものならバッチこいさ！

「まあ、それしかないわな。じゃ、そういう事で、一思いにやって下さい、紫さん！」

俺はにこりとしながらそう言った。そんな俺に、紫は

「え？」

「……え？」

ぽかん、と口を開けて惚けた顔をした。
…何？何なの、その「全く思ってもみなかった」って表情は！？

え?何コレ?俺?もしかして、俺がやるの?

「……え?何?もしかして、俺がやるの?」

「もしかしなくても、よ。貴方以外に誰がいるっていうのよ」

「あなたがいるでしょうが!何で?何で俺な訳!?ここは普通同性の紫がするだろ!」

「なんで私なのよ。それにあの娘は貴方の娘でしょう?拒む理由は無いじゃない。娘に欲情する親はいないだろうし」

「ここにいるよ!」

解ってるよね、確実に解ってて言ってるよね!?何がしたいのあんた!?

今迄の話聞いてた?ねえ、聞いてたよね?!ねぇ!

なんなのそのニヤニヤ顔!襲うぞこの野郎!

「ほら、気道の確保とか姿勢とかは私が準備するから、貴方は人工呼吸をしなさい」

「……え?マジで?ガチで俺がやるの?やる感じになってんの?」

「当然。私は、貴方がいの一番に『俺がやる！』とか言うと思っていたのだけれど。……やらないの？」

「是非ともやりますやりたいですやらせて下さい御願いします」

なんだかんだ言っても嫌ではないのだ。むしろ役得感がある。だって美少女だし。

それにここまで言われちゃあ、やらない訳には、いかないよね？

しかし本当に紫はゆっくりと顕冴を横たえ、頭を少し浮かせて気道を確保し、そのままの体制で待っている。…何でそこまでやれるのに最後までやらないの？何が目的なの？

何？今迄の俺のしてきた事への報復？

…あ、ヤバい。そろそろ本気で顕冴がヤバくなってきた。顔色が悪いってレベルではない。でも未だに掠れた声が聞こえる。だから恐いって。

「では。……いただきます」

人工呼吸の掛け声としては些か正しく無い発言をして、俺は顕冴に覆い被さり人口呼吸を開始した。

＝＝

「………ん…ぁ……あれ……？　おはよう……？」

目が覚めた。のでとりあえずおはようと言っておく。習慣だからね。
…あれ？　何時寝たんだっけ、私。
周りは暗い。じゃあこんばんは？　とかそんな感じで無駄な思考をしてみる。

よし、まずはちょっと落ち着こうか。まずは現状確認から。私が寝ているのは舗装も何もされていない道ばた。誰だ、こんな所に寝せたの。
最後に覚えているのは、傘持った女性に九十九が踏まれている図。
踏んでたのはこの前家にゆうかりんと共に来て、九十九を虐めていた女性。
踏まれていた九十九は笑顔。……やな光景思い出した。
……その女性とは仲直りしたんじゃなかったのか。何故に踏まれていたのか。
女性も女性で、何で踏んでいる時の顔が幸せそうなのか。理解に苦しみました、まる。
多分女性の名前は、九十九がこの前『紫』と言っていたので、紫なのだろうと思います。
今日は、九十九と紫の関係が色々気になる日でした。おわり。……
あれ？　日記？

そこまで思考して、そういえば九十九と紫は？と考えて身を起こし、辺りを見回した。私の視界に入って来たのは

「…あ、やべ。死にたくなってきた。一時のテンションに任せるんじゃなかった……」

「……ついでにキス……頂きます……っ…ぷっ……くっ……ふふふ……っ……！」

なんだか燃え尽きている九十九と、何故だか笑いを堪えながら笑い転げている紫が、すぐそこにいた。……なんだ、これ。

「なにこれこわい」

「「あ、起きた」」

さっきまでてんでバラバラの行動をとっていた二人だったが、私の発した声に気付いたのか、それまでやっていた事をピタッと止めてこれまたピタッと、全く同じときに、全く同じ言葉を発するという息の合った行動をした。…何故だか、イラッとした。

だけど表情には出さない。なんだか負けた気がするから。何に、と

聞かれても何かに、としか答えようが無いけど。

「で？なんで私はこんな所で寝てたの？」

「なんでって……それはあれよ、気絶したからね」

「だからなんで気絶したかを聞いたんだけど」

「それはあれね、大体変態のせい」

「え？俺？……大体俺のせいだな、うん」

「大体おと…九十九のせいなんだ……」

しきりに頷くお父さん。そして何かを思い出したのか頭を抱え始め、紫はお腹を抱えて笑い始めた。……本当に、何があったんでしょうね。

お父さん、と実際に声に出して呼ぶのは紫がいたので流石に止めた。一応秘密だし。だから心の中で呼ばせて貰う。

あと『大体』お父さんのせいって。それじゃ他の誰かにも責任があるみたいじゃないか。私か。私なのか。

「だからその『大体』が知りたいんだって。一応我が身に起こった

事だし、把握しておきたいじゃん」

「一応じゃなくて間違いなくお前の身に起こった事なんだが。まあ、言っておいてやろう」

「貴方、自分の口から言えるのかしら？」

「すまん、やっぱ無理」

「そう。自分の口では言えない事したんだ……」

「何か察せられた？！何故？！」

「そうね、確かに口では言えないわね。口を封じたもの」

「上手くないし、なんだか人聞きの悪い事を言うな！」

「口封じって……まさか九十九、私が寝ている間に紫と変な事を……！」

「ああ！また変な誤解が！確かに変な事には変わりないんだけれど！」

頭を抱え、地面を転がり回るお父さん。服の洗濯面倒だからあんまり転がらないで欲しい。

それと別に本当にお父さんと紫が何かやった、何て思った訳じゃない。ただ、さっきイラッとした事のささやかな仕返しだ。これぐらいは許して欲しい。

それにしても、何だろう？お父さんって、弄ると結構？？？

「面白い…？」

「……奇遇ね、私もそう思うわ」

「……何だろう、あなたとは、仲良く出来そうな気がする」

「本当に奇遇ね、私もよ」

相手になんとなく共感した私たちは、転がるお父さんを尻目に微笑みあい、堅く握手をかわした。
これからの自分に起こる事を察知したのか、お父さんは動きを止め、がくがく震えだした。
…お父さんにも、恐い事ってあるのだろうか？新発見だ。

「何だろう、何故か悪寒が……ああ！だが何故だろう！悪寒の向こうは天国のような気さえしてきた！」

訂正。ただ快感に打ち震えていただけだった。
……悪寒にすら快感を覚えるとは。お父さんの変態は本物か。本物

の変態か。
というか私達にいじめられる事を察知し、なおかつそれに興奮するのか。どんだけ変態だ。

ああ、でも何故だろう。そんなお父さんが、凄く『らしい』と思えてしまう。
うん。やっぱり私にとってのお父さんは、こんな感じだ。

「……貴女、何ニヤニヤしているのかしら」

「いや、お…九十九らしいなって思っただけ。そういう紫も笑ってるじゃん」

「あら、笑っているかしら？」

「うん。私に負けないくらいに」

ぺたぺたと自分の顔を触って確かめる紫。気付いてなかったんだ。
自分が笑っていたと指摘されて確かめる紫は、とても可愛らしかった。

ふと、お父さんは何かに気付いたようで、動きをぴたりと止め、こちらを向いた。……顔だけ。
周りが暗いし、服も黒いから、何だか首だけ浮かんでいるように見える。恐いよ、こっちみないで。せめて身体ごと向いて。

「なあ、お前って、そんな喋り方だっけ？一人称も『私』だし」

「……色々、あったの。何？変？」

そう、色々とあったのだ。お父さんが出掛けている間に。
その色々のせいかお陰か、私は九十九をお父さんと呼び、話し方も変えた。まあお父さん、とは人前では呼べないんだけども。
…話し方が変に思われたのだとしたら、それはちょっとショックな事だった。

「いや、別に。良いんじゃないか、女の子っぽくて。可愛いと思うぞ、うん」

「あ、ありがとう……」

ダメだ、多分今顔赤い。お父さんはこういう事平気で言える変態だから困る。
幸い今は夜なので、見られていないとは思うが。…恥ずかしいものは恥ずかしい。
まあでも色々、という所にもつっこまれなかったし。気にならないのか、気にしないのか。助かったけど。聞かれたら答え辛いのだ。

恥ずかしさにもの言えない私に気付いたのか、黙っていた紫は諦めたように溜息をつく。

「はいはい。父娘の微笑ましい会話をありがとう。それで？貴女、何か用事があって急いでいたのではなくて？」

言われてから思い出した。そうだった。私、お父さんの事探しに来たんだった。
あとそれと。

「九十九」

「ん？」

「歯、食いしばれ」

「なんぶろぉ！」

声をかけて、返事の無い内に、お父さんの顔面を思いっきり殴った。

「ふうっ。すっきり！」

倒れ込むお父さん。いやあ、気持ち良かった。うん、とりあえずは目的達成、と。

「すっきり！じゃねえよ！何、何で俺殴られた？！」

飛び起き、叫ぶお父さん。怒って……はいないみたいだ。ただ納得していない、という感じの声色。表情は……

「貴方、何だか嬉しそうね」

「当たり前だ！美人にされて嫌な事なんて、無いっ！」

紫の言う通り、嬉しそうだった。顔がにやけている。

美人って……私、今までそういう事言われた事無かったから、照れる。

「そしてこっちは父を殴って喜ぶ娘、と。変態ね、あなた達」

「喜んで無い！……あれ？何で紫は私と九十九父娘だって事を？」

さっきから父娘と呼ばれているのに気付き、話してもいないのに知られていた事実に疑問を持った。

お父さんが話す、という事は無い筈だ。…多分だけど。

「面倒な事になる」と言っていたのはお父さんの方だし、自分から喋りはしない…筈。

聞いた私に、紫は「よくぞ聞いてくれました」と言わんが如くに胸を張り、自身満々に

「覗いていたもの。ずっと」

「……何時から？どうやって？ず、ずっと？」

「私の能力で。ずっとというのは流石に誇張表現だけれど、あなた達が親子、という事は知っているわよ？あと貴女が夜に「わ、わーッ！わーッ！」」

全く誇れない方法で、全く誇れない行為をしていた事を、誇らしげに言い切られた！

どさくさで、私の何かが無くなってしまう台詞も言われる所だった。

危ない！
夜に…って、何て事を言おうとしていたんだこの人！でもばらされても別に恥ずかし…い、ね。これは。
とにかく、この事は秘密にしなければ。……そんな事まで知っているなんて、本当にどこからどこまで見ているんだろうか、この人。

「そうね…貴女がお風呂に入る所も見ているわね」

「心を読まれた！てゆうか私のプライバシーを返せ！」

幻想郷には変体しかいないのか！あるいは類は友を呼ぶとでもいうのだろうか。
どのみち変態だらけって事には変わりないんだけど。後者の場合、間違いなく主犯格はお父さん。
それとお父さん、「夜に～」のくだりに反応しないで。お願いだから。

「で、話が激しく脱線しているんだが。結局顕冴は何しに来たんだよ」

「ああ、そうだった。お父さん、いっしょに帰ろう。先生が待ってる」

「先生って、慧音が？待ってる……って、もしかして朝からずっと

？」

「うん」

お父さんはあちゃあ、と言って額に手を当てた。待ってたのか、とも。

何事かを考えていたお父さんは、しばらくするとすまなそうな顔をして

「すまん、今日はちょっと帰れない。ただ、慧音にはごめん、って伝えておいてくれ」

「ごめんって言わなきゃいけないって自覚はあるんだ。何で、帰れないの？」

「ああ、まあ……」

そう言って、お父さんははぐらかす。……もう一回殴ってやろうか？煮え切らない態度のお父さんについて詰め寄ろうとした時、紫が微笑み、

「まあ、ちょっと色々あってね。その変態にも事情があるのよ。許

してあげなさい。それに、その変態は変態のくせにただ照れてるだけだから」

そんな事を言ってきた。本当かどうか確かめる為にお父さんの方を向くと、「ああ、うん。だいたいあってる」と。

……色々言いたいけれど、今回はこれぐらいにしてあげよう。あっちも色々ある、というのは本当みたいだし。

溜息。連れて帰るっていっちゃったし、先生にどうやって話そうか。お父さんは照れてるだけだ、と言うのが一番良いのだろうか。本当に一番良いのはお父さんを連れ帰って直接説明させる事だけど、仕方ない、か。

「まあ、良いよ。先生には私から言っておくから……帰ってくる、よね？」

この時私はどんな表情を浮かべていたのだろうか。私の顔を見たお父さんは、私の頭をくしゃっと撫でて、笑顔で「明日には、な」と言ってくれた。

「じゃあよろしく、顕冴。おやすみ。早く寝ろよ？」

「…うん。おやすみ、おとうさん」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「行ったか……」

元気に走って帰る顕冴を見送って、ぽつりと呟く。
慧音が待っていた、ね。……お話でもするつもりだったのだろうか。あれ？でも何で待ってたんだろう？夜は慧音は寝てたから気付いてない筈。
それ以外に、何か話す事があったという事だろうか？
にしても…顕冴が女言葉、ねぇ……ああいや、別に嫌って訳ではない。むしろ可愛かったのでもっとやれと言っておきたい。
それに最後の泣きそうな顔をして、俺の服の袖を掴んで「帰ってくるか？」と聞いた顕冴は、とても可愛らしかった。
……あれ？顕冴ってあんなに可愛かったっけ？

「早速親馬鹿ね。頬、緩んでるわよ」

「おっといかん。だが可愛いものは可愛いんだからしょうがない」

「親馬鹿は否定しないのね」

今迄ならまだしも、今の俺はまさしく親馬鹿なので否定できん。
頬が緩んでるって……この暗闇の中、紫は俺の顔が見えるというのか。俺にはよくみえんのだ。
顕冴の顔だって、最後にすぐそこで近づいたから見えただけなのに。
そういや顕冴も見えてたみたいだったが。これは俺がおかしいのか、こいつらがおかしいのか。

まあそんなどうでも良い事は置いといて、どうしようか、と考える。
明日には帰ると言ってしまったし、遠くには行けない。帰れなくなるからな。
俺は基本自分で言った事は守るのだ。……なんだその以外そうな顔。

「貴方、さっきはなんとかしてみせるって言ってなかったかしら？」

「なんともできなくなった。このまま帰ったら顕冴まで襲ってしまいそうでした」

「……親にあるまじき発言ね。流石変態」

親、と言われても知ったばかりで自覚があまり感じられ無いのだ。
まあ、自覚があったとしても襲っている可能性大なんだが。……変

態でよかった。

「で？これからどうするのかしら？」

「さて、どうしようかねぇ……」

「……特にする事も決まって無かったの？じゃあ、見回りでもして頂戴」

「まあ、いいか。で？外来人見つけたら？」

「返して結構よ。引き入れる予定は無いし……ああ、妖怪は連れてきて」

「了解。さて、今日も楽しい見回りだぁ～っと」

背を向け紫と別れる。見回りというのは結界の外から来た人間『外来人』を見つける事。
紫が狙って連れてくる場合もあるが、大抵は偶然の事故でやってくる場合が多い。
ので、無用な騒ぎを無くすために発見次第意識がなければとりあえず元の世界に、意識があれば説得して元の世界に。
無用な騒ぎ、といってもたいがいはやってきた人間が妖怪に喰われる、とかなんだが。
何所の誰が喰われようが喰われまいが、正直どうでもいいのだが、ちょっと色々拙い事があるかもしれないので、見回りは続けている。

この見回りが、俺の幻想郷における仕事なのだ。ニートだとでも思っていたか、馬鹿め！

＝＝

見回りは特に誰かを見つける事も無く、つつがなく終了した。
まあ、何時もの事だが。誰かいるなんてのは基本昼間だ。
夜に見かけないのは、人里に行ったたか妖怪の腹の中に行ったたかのどちらかの可能性が高いのだ。
……さて、朝である。いやもう昼間に近いんだが。
どうしようか、と一考。本格的に何やるか決まっていない。

そういえば、ふと顕牙が「満月の夜に博麗神社で宴会があるらしい」と言っていた事を思い出す。
……暇だし、久々に酒を飲みたい。つーか呑まれたい。溺れたい。

見回りって結構神経使うのだ。警戒しなくちゃならんし。
以前発見した外来人がやたらと強く、追い返すのに苦労したのを思い出す。
所詮は人間と思ってたかをくくっていたいたのだが、思いの外強かった。どのくらい強かったかというと、子供の頃の博麗霊夢くらい強かった。
そんなもんか、と言われればそれまでだが、これは人間としては十分な快挙である。
ここの人間は、色々とおかしいのだ。俺の言えた口では無いがな。
まあ、今日は満月では無いとはいえ、もしかしたら早まって始まっているかもしれんから向かう事にする。あそこに集まる奴らは色々適当なのだ。あと美人が多いな、うん。

博麗神社に向かっていた俺は、丁度中間地点に位置するところまで来て、なんだか服のコントラストがあれな美人さんを発見した。凄く……美人です……。

「へーイ！初めましてお嬢さん。お名前を聞かせて貰ってもよろしいか！？」

「なにこれこわい」

引かれた。ドン引きだった。あるぇ～？おかしいなぁ。こうすれば大抵の人が……あれ？どうするんだっけ？どうなるんだっけ？喜ぶんだっけ、引かれるんだっけ？

「スマン、今の無し。もう一回、もう一回だけ！？わんもあぷりーず！」

「何なのこれ……まあ、良いでしょう。一回だけよ？」

おお！なんとノリの良い美人さん！困惑しながらも「仕方無いわね…」的な視線も送ってくれるとは、おじさん感激です！

ならばもう一度だけ。さて、どうするべきか……此処はやはりオー

ソドックスに名乗り上げてから、か……。

「失礼、お嬢さん。私は真経津九十九と申す者ですが、宜しければお名前を聞かせて貰ってもよろしいでしょうか？」

「本当に何事も無かったように振る舞うわね……。……？真経津？」

「はい。真経津です。それが何か？」

「……そう。ちょっとした用事で出掛けて来ただけなのだけれど、良いモノを見つけたわ。私の名前が聞きたかったのよね」

……あれ？おかしいな、なんだかひやあせがでてきてとまらないぞ？

俺の名前を聞いて、こんな反応を示す人物なんて初めてだぞ？

そして俺の最早腐ってしまった第六感が告げている。逃げろ、と。

「私の名前は『八意永琳』よ。思兼、と言ったほうが解るかしら？」

『八意』……だと……？

思兼……？アッーーーー！まさか、え？嘘？え？

「え？嘘、え？何でこんな所に居るんですか？！」

「それはこちらの台詞。長く合わない内にすっかり立派になっちゃって……」

止めて！そんな冷たい目で見ないで！
いくら俺が変態だからと言っても限度があるんです！弁えてるんです！

「まあ、何はともあれ、お久し振りね？『八咫鏡』？」

「はい。お久し振りです、『設計者』殿……？」

死にたくなって来た……。

↓神社ルートへ進みます。

七節目　～神社ルート　グッドおまけ～（後書き）

先生ルートおまけなのに先生がでていない件。
まあおまけだし、良いよね！

あと冒頭で顕冴が紫がいるのに「お父さん」発言しているのですが、その事を顕冴は覚えていません。というか気付いていません。

七節目　～病院ルート～（前書き）

前略、存在しない両親へ。

居もしないあなた達へ手紙を読み上げたい気分なので書きます。

私は今お医者様の所へ通うところです。

自分でも行った方が良いのでは？と思い、出発したはいいものの、物理的にも人生的にも迷っていた所に美少女に会い（美少女です、美少女。ここ重要）、なんやかんやあってその美少女にも病院に行った方が良いと言われ、その美少女に病院までの案内をしてもらっています。

良い歳したオッサンが迷い、年端も行かぬ美少女に案内されるというのもアレですが、まあそこは気にしないで下さい。私は気にしません。

それよりも、です。聞く所によると今から行く病院には凄く腕の良い医者が居るそうなのです。しかも腕っ節も強いとか。

そこまでならば私は行かないのですが、そのお医者さんはとても美人さんなそうで。

ええ、勿論行きますとも。行かなければなりませぬ！

美人のお医者様です。いや、これはただの推測ですけれども。直接『美人だ』と言われた訳では無いですけれども。

事この幻想郷においては強い＝美人だと決まっております。

何故かは解りませんがこれは最早真理。変えられない事であります。
ならば幾ら何でも反撃されるんじゃね？とお思いでしょうが、そこは私は変態ですので。
痛いのも美人に与えられるのならば御褒美です。むしろもっとやれ。
というわけで喜び勇んでやって参りました『永遠亭』。すごく…大きいです…。

「なあ、此処でいいの？此処って病院？」

「正確には住居兼病院。御屋敷にくっついてる形だから」

「御屋敷ねぇ……。何時の間に出来たのやら」

知っている限りでは俺は出来た事を聞いた事が無い。
まあ一時期ずっと、それこそ冬眠通り越して封印レベルまで眠ってた事があったんだけどね！
まあ気にしない。美人の医者！それ以外は正直どうでもいい。

「まあいいか！よっしゃ行くぞ待ってろ美人の医者ぁぁぁ！」

「うわぁ……。……うん、私は今日一日

森には入っていない。だからあんな変態知らないし案内なんてしていない。私は何も見なかったし見ていないし見るつもりも無い」

何か後ろで言ってるけど聞こえない！ふはははッ！

全速力で走り門を蹴り開ける。勿論壊さないように加減をして、だ。

そうして敷地内に入った俺は、素晴らしいものを見た。

「ここは天国か……！！」

七節目　～病院ルート～

外から見ると中々に大きい日本のお屋敷。ここは病院か？とも思ったが、成る程中は病院然として……いなかった。

どこからどう見ても金持ちのお屋敷だった。疑いようもない。

疑うべきは此所が病院だという事か。

いや、今は其処はどうでもいい。どうでもいいのだ。

此所に入ってすぐに、うさみみ着けた美少女がいた。

「う、うさみみぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

「！！！？！？！？！？」

ええ。勿論飛びましたとも。恐ろしきはうさみみ美少女の魔力！

これは飛ばずにはいられない。ライオンの気持ちが良く解るね。

うさみみ美少女は飛んできた俺を見て逃げだそうとしたが、甘い！

逃がすと思うてか！

当然の如く捕縛し、存分にその体を撫で回す！

「あぁ、この耳のモフモフ感！たまらんなぁ！ああ気持ちいい！モ

フモフモフモフモフモフ……」

尻尾も地味に気持ちが良いなぁ。まるで毛玉のようだ！
尻尾もじっくりと撫で回す。あ、後どさくさに紛れてお尻も。どさくさってなんだっけ？

耳と尻尾を撫でられ続けたうさみみ美少女（長いので以下うさこ）は、初めはそれこそ食われまいとする兎そのままの如く抵抗していたが、今となっては借りてきた猫のように大人しい。
心なしか頬は紅潮しているように見受けられる。

当然。俺のなでなでテクニック（通称なでテク。俺が今考えて付けた）は近所の猫さんに大絶賛だからな！
「マタタビより気持ちいいッ」とは猫さん談。八雲さんちの猫が言ってた。あと狐も。

動物ラブ！動物は良いね、心を癒してくれる。まあこの動物半分以上見た目人間な訳だが。
むしろ動物かどうか怪しいが。多分妖怪だけど気にしない。妖怪も好きだし。
というより美少女なら誰でも、なんでもいいや。と思っていた若き日々。今もだけどな！

そんな事言いながら閻魔様に飛び込み説教されたのは良い思い出。
比喩でもなんでもなく。
なんで美女美少女の説教ってあんなに気持ちいいんだろうね？先生とか閻魔様とか。
一度説教した後、二度としてくれなくなるのもなんでだろうね？気

持ちいいのに、残念。

まあ今はこのモフモフを堪能するまでよ！そらそらそら！

「ん……あっ……」

「ん～？此所か？此所がええのんか？」

「んぁ……ふぁあッ……」

うさこは気持ちよさそうに喘ぐ。目もとろん、と朦朧していて、表情は今にも蕩けてしまいそうだ。

ははははっ。俺も気持ちいいぜ！モフモフモフ！詳しく説明するとアレなので何やってるかは想像に任せるが。え、えちぃ事じゃないよ？本当だよ？

しかし気持ちいいなあコレ。お礼にもっと気持ちよくしてやろう。

そう思い撫でる箇所を増やす。具体的に言うなら脇とか背中とか喉とか。

胸には触っていない。目的はあくまでモフモフするだけだからな！

そんなえちぃ事は致しません！

もう既にえちぃとかさっきお尻撫でただろとか言われても困る。気のせいだろ。気のせい。

俺はアレだから。ただモフモフしてるだけだから。愛でてるだけだから。えちぃくない。全然。

相手も気持ちいいみたいだし、嫌がってないし良いじゃない。抵抗できないとも言うが。
個人的にはもっと嫌がって貰った方が嬉し…ゲフンゲフン。な、ナンデモナイヨ？

それにしても実に気持ちがいい。この撫で心地、今迄味わった事無い程に。癖になりそう。
ああ、ずっと撫でていたい……。

そんな俺のささやかな望みは

「病院内で何やっとるかぁぁぁ！」

「オプーナ！」

突然の後ろからの襲撃（蹴られたから蹴撃か。我ながら上手くね？）によって、虚しくも叶う事は無かった。
何しやがんだこんちくしょう！人を足蹴にしやがって、楽しみも奪ったな！？野郎だったら殺す、とか決意して振り向くと

「ちょ、ちょっとうどんげ？大丈夫？」

「んぁ…？…あー…おししょーさまだぁ…。あのねぇ、なでられる

とぉ…。すっごくきもちいいんですよぉ……？」

「ちょ、うどんげ？！しっかりしなさい！」

ぐったりしたうさこを介抱する、服のコントラストが凄い、美人さんがいらっしゃいました。

「来たぁぁぁぁあああぁぁぁ！美女医者キタコレ！」

「！？！？！？！！」

「ここは天国か！！　想像以上に美人さんでした！ありがとう！神様の野郎！」

どうみても美人さんです、本当にありがとうございました。

新たに現れた、恐らくこの病院の医者と思われる美人さんは、先にも挙げたように何というか、服のコントラストが、うん。独創的。幻想郷では良くある事だけども。むしろもっと凄いのいるけれど。昔の俺とか。

詳しくは黒歴史なので省く。というより全部省く。黒歴史ですから。

で、顔は勿論美人さんと形容するのが相応しい。それ以外にどう表現しろと？ってぐらい整っています。

これも幻想郷では良くある事。幻想郷パネェ。

そして銀髪。さして重要ではないけれどな。ちなみにうさこも銀髪である。二人とも髪は長い。

自分、銀髪（白髪）ロングの美人さんのエンカウント率高過ぎやしないだろうか。

この二人だけでなく慧音も顕冴もだし、さっきまで一緒だった美少女も白髪ロングだった。

まあいいけど。髪なんて飾り…な訳はない。興奮を増長させるスパイスみたいなものである。有った方が嬉しいね。

結論。美味しく頂く事にしました。異論は悔しかったら言ってみろ。

俺の襲いかかろうとする気配を察したのか、美人医者（面倒なので以下美人さん）はうさこを抱き上げ後ろに飛び、俺から離れた。

「気配を読んだか…成る程、いいセンスだ」

「貴方…この娘に何をしたの？」

「別に？ただモフモフしただけさ。特別な事は何もやってない」

「嘘おっしゃい。私の薬ですらこうまではならなかったのに……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……え？」

え？それって、あれですか？つまりはそういう事ですか？
ああ、そうですか……そうなんですか……。

「……？ちょっと、いきなりどうしたのよ。あんなにテンション高かったのに、元気無くしちゃって」

「いや、な…？本当は人様にとやかく言うのは好きじゃないんだが……同性愛は…な？流石にどうかと」

世の変態紳士の中には美少女×美少女？構わん、むしろバッチ来い！な方もいるらしいんだが……
残念ながら俺はその範疇ではないのである。
嘘！？とか言うな、俺を何だと思っていたんだ。…ああ、変態ですね。その通りです。
だが俺は健全な変態だと自負している。変態は健全だろ？

だから同性愛はちょっと……な。

別にいいじゃん、美少女×美少女。と宣言する男性諸君に問いたい。

貴様らは、アッーーーーーーーー！な展開に、興奮するか？性的な意味で。

中にはする、なんて勇者がいるだろうが、それはごく少数だと考える。そうであってくれ！

つまりはそういう事である。どういう事かは解るだろう？

解らなかったら……お察し下さい。

何かげんなりした。萎えた。このままだったら先生に賢者モードのままで会えそうな気がする。誤りに行くか。

俺はさっきから固まったままのお二人さんに

「……まあ、なんだ……お幸せに……」

そう言って、部屋を、屋敷を出るために振り返る。振り返りざまに『これから大変だろうけど、応援してるぞ』的なニュアンスを込めた視線を送りながら。

「待てぇぇぇえええぇぇえぇぇぇ！！！何勘違いしてるかぁぁぁ！！！！！！」

その叫びと共に、頭に衝撃が走る！

「ぐぉおぉ……！」

そして俺は、視界の端でうさこらしき顔が近く見える事に

（弟子を投げるとか……可愛そすぎる……）

うさこに同情と激動の感情を送り、俺の意識はログアウトした。

＝＝

「あ……」

ついカッとなってうどんげ投げちゃったわ。御免なさいね、うどんげ。

取り敢えずは誤解したまま帰らせる事は阻止したわ。あのまま帰らせていたらどうなっていた事か。想像すると恐ろしい。

まあ、それも含めてこの患者さんには役に立って貰う事にした。文句は終わってから聞きましょう。

丁度新薬が出来たのに実験だ……協力者がいなかったからね。

男を回収しようと近づく。……ちょっと強く投げ過ぎたみたいね。血がドロドロ出てるわ。後片付けが面倒ね…。

まあ何はともあれ先ず運んでからか……と思い男を抱えようとすると

「傷が…無い……？」

出血量からみて、頭を切ったという事を覗いても割と傷は大きい筈。だけど傷が全く無い。どんな再生力よ。

それにこの顔、何処かで見たような……

「まあ…、いいわ。同じような顔なんて割と良くある事だし」

きっと昔何処かで見た誰かの顔に似ているのだろう。長く生きてきたから、何も不思議ではない。

そんな事よりも、だ。

初めは面倒なだけだったけれど、これは……

「良い協力者（じっけんだい）を得られたわね……」

もの凄い再生力。これは丁度良いわ。いいもの手に入れちゃった。

我ながら、この時はあくどい顔をしていたと思う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

「…ん……うぉ……？」

目を覚ます。何かやけに眩しい。反射的に腕で覆おうとして、腕が動かない事に気が付く。
どういう事か確認しようと首を動かして体の方を見ようとしたが、動かない。
試しに足を動かそうとしたけれど、やっぱり動かない。

「な……なんじゃこりぁぁあぁぁぁあぁぁあああぁぁぁ！！！」

え？何これ？何で縛られてんの俺？アレですか？今から手術ですか？

「あら、起きたの？暫くは起きないと思ってたのだけれど」

「ちょ、医者さん！どういうこってすか！何ですか、手術ですか？！」

「まあ、ある意味手術ね、『改造手術』」

そ、それってどういう事ですか……？か、改造？な、なんという事を……。

「改造……だと…？いいぞ、もっとやれ！！むしろよろしく御願いします！実はアレなんだよ、改造とか憧れてたんだよ！」

仮面ライダーとか。憧れるよね。
関係ないけど、仮面ライダーって子供向けなイメージ有るけど、あれ結構ストーリーとか設定とか大人向けだよな。
結構人死ぬし。改造されちゃうし。設定も凝ってるし。

「そ……そこは普通『やめてくれ』とか言うんじゃないかしら？」

「いえ、僕は変態ですから。変態という名の変態ですから。普通とは違います！」

「ああ……今回はその変態を治して貰いに来たって事ね？」

「何を勘違いしているんですか！変態を治すんじゃなくて変態に治して貰いに来たんです！」

俺が変態じゃないだと？馬鹿な、あり得ん！

「もう貴方十分変態だったじゃない！うどんげに対してだとか！」

「何を言うか！あれはただ単に愛でてただけです！本来の俺ならこんな拘束抜け出してお医者さんに襲いかかるのに……どうしちまったんだ、俺！」

それが今となっては改造を心待ちにしている現状……。はあ、これからどうなるんだろうね？

「うわぁ……。何？じゃあ貴方動物に対していつもあんなセクハラ紛いどころか確実にセクハラな事やってたの？」

「セクハラとは何だい！？そんな低俗なものはしないよ！ただ愛でるだけだよ！お尻とか胸とか、そういう所は触ってないよ！あくまで背中とか喉とかだけだよ！」

「……貴方、さっきはお尻は勿論胸も揉んでたわよ。触るなんて生易しいものじゃなく、揉みしだいてたわよ？」

「なん……だと……？無意識の内に…だって？」

なんたる事か…！無意識のうちにそんな事をしていたなんて…！くそぅ！そんなことなら感触とか覚えていれば良かった！

「無意識って……。普段はああじゃないって事？あの娘の能力も利かなかったのも気になるわね……」

「能力？」

「ええ、利かないみたいだから隠しても仕方無いし言っておくわ。『狂気を操る程度の能力』なのだけど」

「『狂気を操る程度の能力』？精神操作系？なら俺には利かねえや。そういうメンタル面に対してはめっぽう強いからな」

『狂気を操る程度の能力』と言っても実際は感情を操るよりも何らかの波長とかを狂わせるとかそんなんだろう。幻想郷の『能力』って割と適当な呼び方してるしな。

どのみち俺には利かないが。まあそれは俺の元々の能力ではないのだが。

むしろ俺は『愛でる』のではなく『セクハラする』俺の行動に疑問を覚えるね。

「利かない？それは貴方の能力かしら？」

「違うさ。そっちも正直に言ってくれたし、隠す必要もないからな言うけどな。俺は世界の駒なんだ」

「……そういうこと。再生能力の高さも頷けるわ。じゃあ、最近何か変わった事は？」

「……変態っぷりに磨きが、って所か？」

さっきも言ってたように、普段の俺なら愛でるだけなのだ。セクハラはしない。

その愛でるのがセクハラだ、とか言うな。だったら俺は何を支えに生きて行けば良いんだよ。

そして一番は美人さんに反応しなかった事か。森であった美少女もそうだし、この医者にもとくに襲いかかろうとする気持ちが起こらない。間違いなく美人なのに。

「そう。なら説明できなくは無いわね。貴方がここに来たのはその元から異常だったものがさらに異常になったからでしょう？それは多分、世界が貴方に思考操作でもしているんでしょうね。襲わなかった、というのもそれでしょう。あれは思考というか理性というか、それを一定のレベルまで下げるものだから」

「最初から理性とか存在しない俺は、変に落ち着いて来るって事か」

１０を５までにするのなら意味はあるが、０を５にしてもむしろ邪魔になるだけだろ。

まったく、相変わらず融通が利かないというか、余計な事をしてくれたというか……

「で、思考操作を受けている時は他の精神操作系の能力とかの影響を受けやすいのよ。それでも普通の人が受ける影響よりはずっと少ないのだけれどね。それでうどんげ……あの娘の能力が中途半端に利いてしまって……」

「ああなった…と」

余計な事をしてくれたな世界コノヤロー。
まあ大体の事は解ったし、それならなんとかならんでもない。
問題は、何故世界が俺に思考操作なんてやらかしたか、だ。
何に対してかも解らん。何がしたいのやら。

「てか良く知ってるな、世界の事」

「まあね。これでも長く生きてきたから。八意の名は伊達じゃないわよ？」

そうかそうか。……ん？『八意』？

……あるぇ～？……うん、人違いだ人違い。むしろ神違い。本人な訳ないよね？

「あの～、つかぬ事をお伺いしますが、貴女様のお名前は？」

「八意永琳だけど？何、貴女私の名前を聞いて此処に来たのではないの？」

「……大変失礼ですが、お歳は幾つになりますか？」

「……本当に失礼ね。まあいいわ。万じゃあ済まない、と言っておくわね」

本人認定です有り難うございました！！

名前は違うけど歳とかから総合してどうみてもほんにんです本当にありがとうございました。

そうと解ったら即・退散！長く居ても特にこれ以上収穫は無さそうだしな！

「あら？何処に行くつもりなのかしら？こちらは名前だけではなく歳まで教えたのに、何も言わずに立ち去るなんて……。そちらも名前くらい教えるのが礼儀じゃなくて？」

駄目でしたー！後ろを向いた瞬間呼び止められました！おおう。

……どうする？どうする俺！？名前とか、今使っているのですらアウトだろ！？すぐにバレるわ！！

こうなったら何か名前を……何か…何かないか……？！

「ほら、早く言いなさい」

だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！急かさないでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

「じ…ジョン・スミスですッ！！」

ああぁあぁあああぁぁあぁぁぁ！！やっちまったぁぁぁ！

もっとマシなのなかったの？！ばかなのしぬの！？

「嘘おっしゃい。いいから、正直に話しなさい。それとも、何か言えない理由があるのかしら？」

もう。いいや……。どうにでもなーれ☆

「……真経津…九十九です……」

「真経津……？ああ、道理で。見覚えがあると思ってたけど、貴方だったのね。何から言うべきかしら。とりあえずお久し振りね、『八咫鏡』？」

「はい……お久し振りです、『設計者』殿……」

俺オワタ。

↓神社ルートへ

七節目　～神社ルート～（前書き）

前略、存在しない両親へ。

居もしないあなた達へ手紙を読み上げたい気分なので書きます。

親が……居ました……。

正確には親みたいな人物ですが。

設計した人で俺を創るように命じた人ですけれども。

そしてそんな人に見つかりました。見つかってしまいました。

……どうしよう、俺……むしろこれからどうなる……？

七節目　～神社ルート～

結論から言おう、特に何も無かった。

あの人は『永遠亭』という病院で医者をやっていて、今日は用事があるから構ってられないと、あの後すぐに解放されました。やあ、よかったよかった。

……全然良くないけど。全然良くないけどっ！大切な事なので二回言いました。

なんでも急用が出来たとかで。何故か俺の方を見ながら。
そして俺を見てすぐ後に「これならなんとか……」とか「もっと効果を強くしても……」とかボソッと言うの止めてくれませんか。
何するつもりですか。アレですか、投薬実験ですか。臨床実験ですか。

効果を強めるって何ですか。それは俺が頑丈だから多少何があっても大丈夫だよね？みたいな感じですか、そうですか。

……全然大丈夫じゃないよ！
あんたの作る薬って怖ぇんだよ！効果も副作用もどちらも致死性なんだよ！
しかも俺に打ってくる物だけ！イジメ？ねえコレイジメなの？イジメだよね？！

此処にあんたが居るってんなら来なかったよ！

誰だよ、腕の良い医者が居るって言ったの！まあ確かに腕は良いん

だけど！良いんだけど！

気まずっ！物凄く気まずっ！
例えるならアレだ、会計で働いていた時に知り合いがお子様お断りなモノを持って来た時並に気まずい！
むしろもっと気まずい！俺の性癖バレちゃったし！まあそれは別にいいんだけど。

兎に角もう会いたくない。決めた、絶対にもう『永遠亭』になんか行かない。

と、ここまでが大体のあらすじ。
今僕は、博麗神社に向かっております。

脈絡が無い？いつものことだろ？

なんかもう色々あってストレスが凄いのだ。もうお酒に溺れるしかない。
誰だ、今駄目野郎が、とか言ったの。全く持ってその通りです、弁解はしません。

＝＝＝

「もう終わったわよ？」

「は？」

心に傷を負い、それを癒す為にもズタボロで博麗神社に訪れた俺に、巫女はそうおっしゃりやがった。

「え？何で！？宴会って今日開かれるんじゃないの！？」

「何でって…。どこから嗅ぎ付けたのか知らないけど、残念だったわね。宴会は昨日の事よ」

なんたる事か。
せっかく此所まで来たというのに、もう終わっていたとは。
だが確かに、満月の夜に開かれると言っていた…筈！顕冴が！

「満月の夜に開くんじゃ無かったの？！」

「あんた、どこから聞きつけたのよ。そんなことまで知ってるなんて……。これから注意しましょう。萃香が煩かったのよ。『速く開こう！』って」

あのつるぺたロリ鬼がぁぁあぁぁあぁぁ！！

もう我慢出来ん！前々からあいつの事は気に入らなかったんだよ！

何なんだよあのちっこい癖に勝ち気で生意気な表情！
その体格に似合わない腕力！
体格通りに可愛らしい顔！
時折見せるしおらしい態度！
そしてあの幼女と少女の中間くらいの丁度良いボディ！
ちくしょう何だよ凄ぇ萌えるじゃねえかぁぁぁあああぁぁあああぁぁ！！！！

よし、行くか！

「萃香って、今何所にいる？」

「ちょ、何するつもりよ」

「何って。そりゃあ勿論憂さ晴らし。……にナニを」

「やっぱりか！誰が教えるかこの変態！」

「ＨＡＨＡＨＡ！変態？そんなに褒めるな照れるやい。で？何所に居る？」

俺の普段と違う威圧感に気圧されたのか、
若干、心なしか腰が引けている霊夢だが、それでも場所を割ろうとしない。

余程生け贄に差し出すのは嫌なのか、どうしても「教えるか」の一点張り。
そうか、ならば仕方ない。こうなったら最終手段だ。この手段は大す…嫌いだが、な。

「そうか。話したくはないか。なら仕方ないな」

「そ、そう。解ってくれ「その身体に直接聞くしかないなぁぁあああぁぁぁ！」解って無い！ちょっとでも見直した私が馬鹿だった！！」

「大丈夫さ、痛くはしないよ？すぐに気持ちよくなるから」

「ちょ、あんた……。ほ、本気？」

「俺が本気じゃなかった事なんて、あったか？」

俺が笑顔でそう告げると、俺のやってきた数々の『本気の行動』（ルパンダイブとかルパンダイブやルパンダイブなど）を思い浮かべでもしたのか、顔を真っ青にして後ずさる。どうやら俺の本気具合を解って貰えたようだ。

じりじりと後退る霊夢をじりじり追い詰めていく俺。
次第に壁が近づき物理的にも精神的にも追い詰められてきた霊夢は涙目。
涙目の少女を追い詰める俺はなんというか端から見ると（当人たち

が見ても）どうみてもへんたいですほんとうにありがとうございました。

そして下がりは追い下がりは追いを繰り返して、とうとう霊夢は賽銭箱の後ろの階段に蹲いてしまった。
階段に腰を掻ける形になった霊夢。その正面で見下ろす形の俺。
逃げるには立ち上がらなければいけないが、それよりも俺が襲う方が速いだろう。

（捕った……！）

確信し、いざ、と構える。
霊夢は逃げられない事を悟ったのか諦めの表情を浮かべる。その目には輝きが映っていない。
まあ、犬に腕を噛み千切られたと思って諦めてくれ。

そして飛び込もうとした時、

「霊夢～？なんだか騒がしいけど何かあった……の……？」

階段の奥、賽銭箱の前に立つと正面に見える襖が開き、そこからぴょこっ、と、

「やあ、久し振りだなロリ鬼」
「げっ……。鏡……」

探していたロリ鬼こと『伊吹　萃香』が、顔を出した。

＝＝

現在、俺は『伊吹　萃香』ことロリ鬼（普通は逆だがこいつはこんなんで十分である）に、八つ当たりを敢行していた。

「おおう。相変わらず良い抱き心地。すっぽりと腕に収まるこの大きさが気持ちいい……。でりしゃす。素晴らしいよロリ鬼」
「ロリ鬼言うな。……ったく。なんであたしがこんな目に……」
「お前が宴会早めたからだろーが。お陰で俺は傷付き壊れそうな心を癒す事が出来なかったんだ。責任とれ」

「アンタが傷心するなんてタマかい。それとどうせ自業自得だろ？我が儘言わずに自分でなんとかしな」

「そう言いながらも抱かせてくれる萃香さんってば優しい。流石のつるぺたくおりてぃ」

「つるぺた言うなっての。全く……」

「……あんた達、仲良いわね……」

膝の上に萃香を乗せて抱き、撫でたりして和んでいた俺に、霊夢がそう言ってきた。
それにしても仲が良い、と。ははっ、まさかね。

「仲が良い……だと…？どうやったらそう見えるんだ？」

「そうだよ。これの何所を見てそう思うんだい？永遠亭にでも行く事をオススメするよ」

「誰が何所をどうみても仲が良いとしか見えないわよ馬鹿ども！」

そんな、ひどい！馬鹿はないんじゃないか馬鹿は！？

「冗談はさておき、こんなの見たら誰だってそう思うよなぁ……」

「まあ、そうさね。あ、永遠亭で思い出したんだけど。鏡、アンタの変態（それ）、そこで治して貰ったらどうだい？」

「そう思って行こうとしたが、な。そこの医者が知り合いで」

「ああ～……。何というか、気まずいねぇ」

「そう。もの凄く気まずい。しかも何か目を付けられたみたいで、恐ろしくて行けない」

「恐ろしいって……。あの先生、確かにちょっとアレだとは思うけど、そこまでかい？あんたが恐がりそうな要素は見あたらなかったけど……」

「こっちをガン見しながら「こいつなら……」とか「もっと強くしても……」とか言われてもそう言えるか」

「そりゃ恐い」

そんな感じで俺達がくっちゃべっていると、霊夢は溜息を吐いて「駄目だこいつら……」な視線で見たきた。そんな目で見るな、興奮するだろうが。

ちなみに俺の姿勢は所謂あぐらで、その上に萃香を乗せて抱っこの形、腕は萃香の肩に掛けて胸の前で組む。ちなみに萃香は俺に背を

預ける感じに座っている。
つまりは始めと全く変わっていない訳だが。
そんな状態で俺が興奮すればナニがアレしてああなる訳で。

「……ちょっと鏡。何か当たってるんだけど。何かってかナニが」

「気にするな、俺は気にしない。というか萃香さん、女の子がナニとか下品な事言っちゃいけません。むしろ良く下ネタ出したな」

「アンタのせいだろうが。こうなっても仕方ない」

なんだか誤解されそうな物言いだが、だいたいあってるので反論はしない。
詳しくは語らないが。

「ま、そうか。仕方ない、か」

「そうさ、仕方ない。それにアンタ、いけないとか言いつつもあたしがネタ出したらおっきくしてるじゃないか。この変態め」

「当たり前だよ。萃香みたいな見た目の奴があんなネタ出すんだよ？おじさんおっきくなってもいいじゃない。そして『変態』の一言で更に成長している件」

「んっ……はぁ……。仕方ないねぇ……」

「そうさ、仕方ない」

「あんたら一体何があった!!?」

途中までは無視していたが、流石に後半の内容は聞き逃せなかったのか、霊夢は顔を真っ赤にしながら叫び突っ込んでくる。……突っ込みって、こうやって聞くとなんかえろいよね。

「何って……特に何も？なあ？」

「そうだねぇ…。特にこれといった事は……。んぁ…っ……ちょっと鏡、また何か変な事考えてないだろうね？」

「変な事？そんな事考えてる訳無いじゃないか。俺が何時も考えてるのは生命の神秘についてさ。ちなみに今は突っ込みって、なんかえろいよね、って考えてた」

「変な事じゃないか。まあ、確かにそうだねぇ。こうやって聞くとなんか……ね」

「だろ？」

同意を得られたようで何より。やっぱりね。そうだと思ったもの。
普段は何気ない事でも、状況や言い方で随分変わってくるもんだね。
日本語すげぇ。

「特にって……まさかあんた達、それが普通になる関係なんじゃ……」

「はあ……だから嫌だったんだよ。アンタに会うとすぐにこれだ。なんでこう、皆勘違いするのかねぇ……」

「アレじゃね？萃香さんが嫌がる素振りを見せないからじゃね？」

「だって嫌がって見せてもアンタが喜ぶだけじゃないか。なら最初から何もしなければいいんだよ。捕まっちまえば逃げられないんだ。じっとしてるさ。そうすればアンタも早く満足するだろ？で、それだけあたしも早く解放される、と」

「そんな事言うけど捕まえられるまで逃げようとしていないように思うのは俺だけ？実は抱っこそのものは嫌じゃないんだろ？」

「……まあ、ね……」

ああ、可愛えぇなぁ。なんだかんだで正直な萃香さん。癒される。

「………鏡。何時になったら解放されるんだい？」

「ん～………。後三十分くらい？」

「はあ………」

「あんたらもう帰れ」

実際の予定より長く告げ、何か別に良さそうなのでじゃあ遠慮無く、と思っていたらもの凄く冷たい目をした、今までにない顔をした霊夢さんに、そう静かに言われた。

「え～「帰れ」……はい…」

少しの反論も許されなかった。「嫌だ」の三文字すら言わせて貰えなかった。
静かなのに、迫力がある。恐い。萃香も震えてるじゃないか。
素直に俺は退散する事にした。というか萃香巻き添え。カワイソス。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

閉め出された俺達二人。仕方ないので移動開始。どこに行くか決めてないが。

「待て。流石に抱っこのまま移動は如何なものかと」

「じゃああれだ。お持ち帰り」

「じゃあってなにさ。全然代償になってないよ。むしろ酷くなってるじゃないか」

「じゃあ、手を繋いでお持ち帰り。の後に抱っこさせろ」

「お持ち帰りは変わらないのかい……。妖怪の山で、だ。それで手を打とうじゃないか」

なんと。それは俺があそこに行きたく無いという事を知っての言葉か！でしょうね。

だがこれしきの事で諦めると思うてか！甘い、甘いよ伊吹萃香！

「げっ…。あそこあんまり行きたくねぇんだよなぁ……。まあ、背に腹は代えられん。了承した、構わんさ」

「へぇ……アンタが山に行こうとするとはね……。なにがあったんだい？」

「萃香との至福の時間」

「あっはっはっは！そうかい。ま、いいさ」

「なんだ、機嫌が良いな。……あれ？萃香、酒臭くないな。や、酒の臭いはするけど何時もよりはそんなにしないって事なんだが」

「ああ、それね。あれだからね、昨日は偶には普通の酒でも、と思ってね。で、思いの外人間製の酒が旨い旨い」

「で、気が付いたら酔いつぶれていた、と？」

「そう。あれだね、度は強くないけど、気分の問題だろうね。酔い潰れる時は酔い潰れるのさ。起きたのも今さっきだし」

つまりは今日は酒を飲んでいないと。それでいいのか。
この時間まで寝ていた事もそうだが、こいつの場合は酒を飲む事が半ば義務みたいな感じになっていたからな。
というより本人が言っていたんだが。それでいいのか！？

「駄目鬼、と言わざるをえない。というか鬼を良い潰す人間の酒って……」

「『鬼殺し』」

「なんという」

『鬼殺し』って……。本当に鬼を良い潰すとか、最早ちょっとした伝説になってんじゃねーか。

……本当にそれでいいのか、伊吹萃香さんや。

そんな感じでしゃべくりながら、妖怪の山を目指した。…行きたくないなぁ。

まあ良いか！鬼さんお一人お持ち帰りぃ！家に帰る訳では無いんだけどね！

七節目～おまけ～（前書き）

さてはて。なんやかんやで妖怪の山に行く事になった俺。
大丈夫だ、別にアッーーーー！されに行く訳じゃない。むしろその反対である。
ロリ鬼とキャッキャウフフな事……にはならんだろうが、まあとにかく。

何故俺はあんなにも恐れていた妖怪の山に行くのか。それはとても簡単な理由がある。
…だって、そこでじゃないと、だっこさせてくれないって、萃香がいうんだもん……。

……うんごめん。気持ち悪いな、コレ。

にしても妖怪の山か……やべ、帰りたくなって来た。
いやだがしかし……。ねえ…？

や、でも……ああもう！

（よし、帰ろう）

そう決意した俺は、せめて最後に一目見ようと、前を歩いている萃香をガン見する。
そうした事で思い浮かんでくるのは、あのなんとも言い難い、抱っ

こする事による幸福感！
いやでも、ああしかし抱っこしたい！だが……
そんな感じで悶々とする俺は、突然神のお告げを聞いた。

（ほら、よく言うじゃない。やらないで後悔するよりも、やってから後悔しなさいって）

（神様それ原作違…）

だが、もっともだった。もっともな事だった。
そうだ。俺は、後先考えないで行動する変態の筈！俺がやらねば誰がやる！

（神様！ありがとうございました！）

本当の俺を思い出させてくれた神様に、心の中で礼をして、相変わらずマイペースに前を歩く萃香の横に並ぶ。
よし、神様もああ言ってたし、行くか！妖怪の山！

「……どうしたんだい？やたらと元気そうじゃないか」

「当然！何せ萃香を抱っこ出来るからな！」

「ああ、はいはい…」

まあ、神様って俺もだがな！

七節目～おまけ～

今現在、俺は妖怪の山に向かっています。
理由？そこに天国があるからさ！それ以外に理由なんていらないね！
たとえ妖怪の山（そこ）に何が待っていようとも！俺は行くと決めたんだ！

何故にそんなに妖怪の山を恐れているのか。それはまあ、簡単なようで複雑で、かといって難しい訳ではない、広くて浅い理由があり。
つまり一言で言ってしまえば「俺の馬鹿」ってな訳である。
そんな訳で、妖怪の山恐いよ妖怪の山。だが行かねばなるまい！

そんな俺の決意に水を差すように、傍らの萃香は

「そういえば、良いのかい？本当に来ちまって」

「ん？どゆこと？」

「や、ね。妖怪の山にゃアンタの事、良くも悪くも話している奴が沢山居るからねぇ。それを知ってて今迄来なかったんじゃないのかい？」

やっぱりか。妖怪さんはあの事件、通称『一年寝太郎事件』（俺が付けた）の事を覚えているらしい。百年も経てばほとぼりも冷めると思ったんだが……皆さんまだまだ御熱いようで。

『一年寝太郎事件』。その名の通り俺は一年中寝通した事があった。
そして目を覚まし町に繰り出した俺を待っていたのは、人々の汚物
でも見るような視線と、妖怪達の親の敵にでも対するような熱烈な
暴行だった。

一体何があった。何をしたんだ俺は。

そんな事があったので『良くも悪くも』という所に驚いた。てっき
り悪い事ばかり言われているものだと。
で、そりゃ俺も人並みには好奇心は存在する訳で。自分がどんな感
じで話されているのか気にはなるのだ。
気になるので聞いてみた。我慢は良く無いよね、うん。

「良くも悪くも、ってどんな事？悪い方を先に言ってくれるとあり
がたい」

「何で？まあ良いさ。悪くっていうのは、まあ『今度あったらヤる』
とかかねぇ」

「まあ、そうか。で？良い方ってのは？正直あるとは思えないんだ
が」

「それがあるんだよ。『抱いて！』とか」

「なん…だと…？」

世界の神秘を見た。何をどうすればそんな思考に至るのやら。
他多数の意見とその人達の意見のギャップが凄い。正に天と地程の差があるよ。

「まあ、全部男が言ってたんだけど」

「男!?嘘だ!嘘だと言ってよバーニィ!」

俺はノンケなんだぞ!全く嬉しく無い!しかも『殆ど』じゃなくて『全部』ときやがった!夢も希望も御座いません!

「嘘だよ。バーニィって誰さ」

顔を青くした俺を見て、なんだか楽しそうにけらけらあっけからんと笑いながら言う萃香さん。多分仕返しとかの意味が籠った発言だったのだろう。実に楽しそうである。

だがこちとら全然楽しく無いのである。むしろその正反対で貞操の危機どころか生命の危機すら感じたのだ!

「嘘!?嘘と仰ったかロリ鬼めが!世の中には付いて良い嘘と悪い嘘があるんだよ!?おじさん、本気で掘られるかと思ったんだよ!?」

「アンタは嘘と言って欲しいのか欲しくないのかどっちなんだよ!?……わ、悪かったよ。でもアンタが何時もやってきた事もやってきた事だろ?」

俺のあまりの本気の怯えぶりに、流石に罪悪感がでてきたのか、萃香は俺から目を逸らし、そう言った。

「俺は何時でも、どんな時でも真剣だよ!萃香だって、それは知っているだろ!?」

知っている筈なのだ。萃香との付き合いは長い方だし、前にも同じような会話をした覚えがある。
だから知っている筈なのに!

「だからだよ!アンタが本当に、心の底から真剣に、好きでやってる事は知ってる、でも!アンタの『好き』は広すぎるんだよ!」

逸らしていた顔を俺に向け、真っ直ぐに俺の目をみつめて、叫ぶというよりは、不思議と訴えかけるように感じる声量と調子でそう言ってくる。

好きが広すぎる、というのはどういった事だろうか。
今迄に「節操無し」や「変態」とは呼ばれ慣れているが、そんな事を言われたのははじめての事である。

「アンタは美人さんにすぐに告白する。それは確かに軽率な行動で、軽薄な言動だけど、何時もアンタは真剣だって事は知ってる。他の奴がどう思おうが、アンタは確かに、本気なんだ。本気で好きなんだろうさ」

だからタチが悪い、とも。
まあ、言われて改めて思うけど、俺って何やっているんだろうか。
しかし止まらない止められない。止めるつもりも無い！

「解っているんなら、何で今更」

「悪化してきてるんだよ、明らかに。前のアンタなら、抱っこだけしたんだろうけど、今のアンタは、というよりさっきのアンタは色々やったんだよ。胸とか撫でたり揉んだり」

「なん……だと……？」

無意識…だって？感触を保存出来ていないじゃないか！
いやいやいや、今気にすべきは其処じゃないだろう俺！その感触とかは後でじっくり思いだそうじゃないか！

今考えるべき事。それは俺に訪れた異常。
昔の俺なら、純粋に抱っこだけしていた筈。
動物とかを愛でるのと同じで、そこに邪念は無いからな。……嘘じゃ無いよ！ホントだよ？！

「邪念は無くても純粋な性欲はあるんだけどね」

しゃらっぷロリ鬼！ややこしくするでないわ！
……ご…ゴホンッ！まあとにかく今回は俺の普段の行動とはかけ離れた行動をとっていた事は解って貰えた事だろう。
ちなみに、普段の俺の『純粋に愛でるだけ』ってのは本当である。
信用していい。
どのくらい信用できるかと言うと、　普段の紫並みに信用できる。
あ、今のナシ。緊急時の紫並みに信用できる。
……あれ？自分で言っておいてなんだが、どちらにしろあまり信用できないぞ？おかしいな……？

……まあ、いいか。で……？何の話だっけか。

そうそう、俺の変態が悪化してきてる、ね。ＯＫ思い出した。
で？それが何か問題でも？止めないよ？
止められるわけないじゃない、変態だもの。
え？襲ってしまう事になっても良いのかって？勿論さ！むしろもっとやれ！

結論。元々異常な俺に異常な事態が起こっても問題ない。

「それで？何か問題でも？」

「悪化してきている……だって…？開き直るとか、流石に予想外だよ。まあ、アンタが何所で誰を襲おうが知ったこっちゃないが、アンタこのままだと……」

「このままだと？」

「野郎まで、襲っちまうんじゃないかい？」

「……」

ははははっ。何をおっしゃるやらロリ鬼さん。
俺が野郎を？ハハッ、ないない。それは無いよ。
俺はノンケであるからして。男を喰っちまう事は神に誓って無いと言えるわ！

「俺が？はは、突然何を言い出すやら。そんな事、たとえお天道様が西から昇ろうとあるわけないよ！」

「証拠は？」

「……はい？」

「だから証拠さ。アンタが野郎を襲わない絶対の証拠」

だから俺はノンケであって、今までも……
言おうとして、俺は気付いた。気付いてしまった。

『一年寝太郎』事件の後に出会った男達のことごとくが、後ろに手を回して、何かから守るようにしていた事に。

……。

……。

……。

イヤイヤイヤイヤッ！！無いっ！それは無いッ！
いくら何でも、ねぇ？無いって、うん。それはない。
ウホッ、な展開が俺の手によって起こされたとか、無い！

そして俺に『一年寝太郎事件』の間の記憶も無いッ！

……あせが、汗が止まらねえ。しかもヌルヌルした冷や汗だ。
何故こんな事になっているのか、一言で解りやすく説明してやろう。

「妖怪の山には、野郎がいっぱい！」あれ？二言だ。おかしいな。

良い感じにパニックに陥っている。ぴんちである。らいぶで寿命がまっはである。

……行くの、止めようかな……

「おや、どこに行くつもりだい？妖怪の山はそっちじゃないよ」

そうだった！萃香との抱っこたいむが待っているんだった！

いやしかし、どうするよ！いくらなんでも……しかし……。

そんな俺に、神様は三つの選択肢（らいふかーど？なにそれ？）を与えて下さった。

神様って、俺だがな！

《行く》《萃香との抱っこたいむ満喫》《欲望のままに行く》

俺の……馬鹿……ッ！

八節目（前書き）

目の前には妖怪の山。
そこは地獄であり、天国でもある。
……どうする、俺？

八節目

来た、来てしまった。妖怪の山へ。
この恐ろしくも美しい山で、一体何が俺を待っているのやら。
鬼が出るか蛇がでるか。あ、いや、鬼はあまりいないなから出て来る確率は低いな。どっちかってーと天狗か。

鬼達は今は殆ど妖怪の山にはいない。なんか色々あったらしい。
最近段々と戻ってきてはいるみたいだが、それでも昔に比べると圧倒的に少ないらしい。
すまん、実はそこらへんの事情はよく解らないんだ。寝ていたからな。把握できていない。
鬼がいなくなった、というのも此処に来るまでに萃香と話をした時に知った事なのだから。

……ちょっと思ったのは、鬼がいないって事はこれ、ちゃんすじゃね？って事。
妖怪の山に来たく無かった理由の一つに、鬼の野郎がいた事である。
ただの野郎なら、まあ良かった。耐えられた。
しかし鬼の、は無理だ。何せでかい。それにいちいち勝負を挑んで来る。正直に言うと面倒なのだ。
鬼は好戦的といういめーじがある。実際にその通りで全然間違っちゃいない。いないが、そうでもない鬼も結構いるのだ。
だが何故か、何故か俺の周りに集まってくる鬼達は皆好戦的、というか戦闘狂（バトルジャンキー）ばっかりなのだ。
しかも負けても負けても「これだ！この熱い勝負！これを待っていたぁぁ！」とか言いながら何度も何度も勝負をしかけてくる。熱いのはお前らのてんしょんだ。

まあぶっちゃけてしまえば、そういう所を抜けば皆気のいい奴らばかりなので嫌いではない、というか好きな部類に入ってはいたが。
ちなみに好きというのは仲間とか英語でいう所の『らいく』であって『らぶ』ではないので勘違いしないように。何度も言うが俺はノンケだ。

「ちなみに辞書引いたら『ｌｉｋｅ』と『ｌｏｖｅ』は日本語での意味的には大差が無いんだけどね」

「嫌な補足しないで欲しいな！というかさらっと心を読まれた！？」

皆俺の心を読みすぎである。幻想郷の美人は化け物か！？……ああ、戦闘力的にいえば皆化け物でしたね。そして大多数が『人間』ではなく『化け物（ようかい）』でしたね。
化け物、という暴言が何らだめーじにならないって、正直どうかと思う。小さい子供の妖怪とかにはだめーじとして通じちゃうから言わないが。

で、話を戻すが鬼の野郎共（野郎だけじゃなく女も）がいなくなってしまったのは、残念であるがそれ以上にちょっと気が楽になった。勝負を挑まれるのにはうんざりしていたのだ。俺戦闘好きじゃないし。
そんな事している時間があったらそこらの美人さんになんぱしてるね。

という訳で、今日は思ったより悪い事にはならなさそうと思うと同

時に、今の妖怪の山は誰が治めているのか気になった。
以前治めていた鬼はどっかに行ってしまったのだから替わりに誰か、何かが治めないといけない。
妖怪の山は、その名の通りに様々な妖怪が生息する。中には神様も少数だがいる。統一性なんぞ無い。誰かが纏めないと人里に侵攻しかねん。
で、力も強く、そこそこに知恵もあった鬼が纏める役としては適任だったのだが……

「萃香、今妖怪の山を治めているのって誰だ？」

「天狗だよ。ぶっちゃけあたしら鬼が治めていた時よりも、何だか良くなった感があるから、天職だったのかもしれないねぇ」

まあ、戦闘好きな鬼よりも、そこそこ人間的な天狗の方が、纏めるという人間臭い事をするのに向いていたのかもしれない。人間的、といってもあくまで鬼よりは、だが。

「じゃあ、見回りとかしてないのか？天狗って空飛べんじゃん」

「ガンガンしてるよ。むしろそれが専門の気がするねぇ」

……不味い事になったかもしれない。実は俺、鬼よりも天狗の方に圧倒的に嫌われているのだ。
割とおおらかな性格をしている鬼は、比較的早期に俺の過去の遺恨を流してくれた。主に酒で。
だが、天狗はそうではない。さっきも言ったように鬼よりは人間的で、比較的に根に持つたいぷが多く、未だに俺を恨んでる奴らが多い。
天狗は固い奴が多いからな。というのも原因を作った俺が一番悪いんだが。
「次に会ったらヤる」という言葉の大多数も、おそらくは天狗達のものなんだろう。
真面目にこの確執をなんとかしたいと思うが、理由がわからないのではどうしようもない。
むしろ酒で流してくれた鬼の方が異常なのだろう。ありがたいが。
なるべく見付からないように、と木が比較的多く、空が見えない所を歩こうと決めた。天狗は飛んで見回りをしているようだし、見えないようにすれば大丈夫だろう。
そして俺が移動しようとした矢先、

「そこの人間、止まりなさい」

空を飛ぶ、何か羽の生えた犬、いや狼に近い外見の、おそらくは見回りと思われる天狗に見付かってしまった。……ごっど、俺なにかしましたか。
天狗は空から降りて来て、地面を歩きながらこちらに近づいて来る。

いちいちこちらに合わせるとは、なんか律儀だな。

「ここから先は妖怪の山。人間がそうやすやすと……あら？伊吹様？」

「おお、椛じゃないかい。哨戒ごくろうさま」

萃香の事を「伊吹様」、か。よっぽど生真面目なのだろうか。
ああ、でも鬼って事は天狗にとっては元上司なのだから、様付けでも別におかしくはないか。
そういうのを抜きにしても、この天狗は真面目そうなので様付けしそうだが。

「いえ、それほどでも。仕事ですから。……ではなくて。その人間、伊吹様のお知り合いで？」

「ああ、うん、まあ知り合いだね。……離れてた方が良いよ」

「……？何でですか？」

「妊娠する」

「俺を何だと思ってやがる！？」

「変態」

「ですよねー」

俺が変態と認める発言をした瞬間、天狗（名前は萃香が椛と呼んでいたからおそらく椛と思う）は、凄い勢いで後ろに下がった。失敬な。近づいただけで妊娠なぞせんわ。

というか顔赤い。どうやら俺みたいなのに会うのは初めてのようである。初々しくて、実にいい。

「ひっ…こ、こっちに来ないでください！」

「いやまだ近づいてないんだが」

「『まだ』？！じゃあいつかは近づくつもりだったんですね！？」

「……」

なんなのこの子。初々しい、というかうぶ過ぎて扱いに困る。よっぽど俺みたいなの、というよりは男全般？に免疫がないんだろうなぁ。

顔を青くしてふるふる震えている様は、正直犬耳な事も含めて正直たまりません。

だがここまで怯えられると襲う気にならない。俺は基本嫌がっても

襲いはするが、怖がられたら襲わないのだ。……なんだその意外そうな顔は。俺だってそういう気遣いはするさ。

……気遣いになってないし、最初から襲うな？俺に死ねと申すか。

……襲う気はないが、愛でたくなってきた。だって動物っぽいし。俺動物好きだし。

そんな俺の友好度まっくすの気を感じ取ったのだろうか、何故かびくっとした後、いきなり空に飛んで逃げた。……好意的な気配の筈、なんだけどなぁ。

「ん？もう行っちまうのかい？」

「ええ、まあ」

どうやら椛とやらは何処かに行ってしまうらしい。ああ、もふりたかったなぁ。

一応、声かけとくか。

「何所に行くつもりだよ」

俺が聞くと、心底嫌そうな顔をして、本当に嫌々口を開いた。ものすごい嫌われようだ。ちょっと悲しい。

「……私には手に負えなさそうなので、ちょっと上司に任せます」

そう言い終わるのと同時、あるいは言い終わる前に猛すぴーどで飛んでいった。

……手に負えないって、強さ的な事でだろうか、変態的な事でだろうか。まあ間違いなく後者だろうが。

「あれ?萃香がいるんだから、別に上司呼んでくる必要無くね?」

仕事は、不審人物の取り締まりなので、萃香の知り合いの俺が萃香といれば、別に山に入っても良さそうなんだが。

「多分、手に負えない輩に会ったら上司に報告っていうのが染み付いているんだろうねぇ」

「なんだ、その忠犬根性」

骨の髄まで下っ端というか、忠犬な天狗だった。

呼びに行かせてよかったのかとは思ったが、まあ萃香がいるから何とかなるだろう、と楽観的な思考をした瞬間、前方2めーとる程の所にいきなり何かが落ちてきた。

「うおっ?!な、なんじゃ…いて、いててててて!」

衝撃。体が吹き飛ばされそうな程強い風圧と、激しい轟音、巻き上がる砂埃が俺と萃香を襲う。

砂埃で前が、というか周りが見えず、状況が把握出来ない。あと時々デカイ塊が飛んでくる。おそらく衝撃で地面が削れ、その破片が飛んで来ているのだろう。

何が落ちてきたのか、そもそもが落ちてきたのは人なのか物なのかその事すら解らず、解るのはおそらく地面には穴が空いているだろうという事だけ。

遅れて、上空から風切り音が聞こえてきた。……どうやらこの落下物は、音速を超えた速度で落ちてきたようだ。当たっていたら即死である。

ソニックブームと呼べる程強くはないが、それでも十分な衝撃。

どういう事なのか解らんが、この恐るべき衝撃を出せる程の速度で飛べる奴を、俺は一人だけ知っている。

そいつは幻想郷最速といわれ、文屋ともパパラッチともいわれている。
そしておそらくは――――

「本当に居たんですね、驚きです。よくもまあ抜け抜けと顔を出せたものですね。ああいや、理由なんてどうでもいいですが」

突如風が吹き、砂埃が払われる。そして使い物になった視界に写ったのは、地面に空いた穴の中心に立ち、こちらを殺意すら篭った視線で睨んでくる天狗。その天狗は俺『だけ』を真っ直ぐに睨み付け、今にも攻撃を加えてきそうな気配だ。

一応話し掛けてはきたが、言葉の通り理由はどうでもよく、ただの確認であって返答を求めていない独り言のようなものなのだろう。

事実、一旦言葉を区切りはしたが、またすぐにその口を開いた。

「では、あなたには恨みしかありませんので……死んでください、この変態」

――――俺をよく知り、天狗の中でも一番俺を嫌っている、射命丸文だろう。

長い事見ていなかった顔には、『怒り』。それのみが浮かんでいる。

「おいおい、久々に会っての第一声がそれ……うぉ！っと」

「ちっ……避けないで下さい。面倒なんで」

言葉を聞かずに攻撃してきて、随分な物言いである。というか攻撃として放ったきた風、俺が避けたので後ろにあった木に当たったのだが、十本くらい纏めて両断されている。間違い無く本気で殺す気だ。

「お、おーけー解った。解ったから話し合おうじゃないか。な？」

両手を上げ、降参の意思を示す。こうすればいくらなんでも攻撃してこない筈？？？

「却下です。潔く死になさい」

容赦が無かった！というか話し合いの余地すら無かった。
すっとその表情は無くなり、風を放ってきた。あ、やべ。油断してたから避けれな……っ！

「……ぎっ……くっ……！……！！」

腕に直撃。風は腕に当たっても止まらず、後ろの方の木を一本だけだが両断した。勢いありすぎである。

腕に当たっても後ろの木が切れたって事は、まあつまりは腕が両断されてしまった。両方とも。
痛い。ものっそい痛い。俺ってば変態といってもそふとなので、これほどの痛みは快感にはならないのだ。

傷口は、奇麗だ。奇麗に真っ平らになっている。……あ、骨見えた。ぐろいな。

傷口を眺めていると、どくどくと静かに、しかし止めどなく流れていた血はすぐに止まり、瞬間、腕が生えてきた。
煙のように、ではなく徐々に、しかし一瞬で生えてくるので、見える人には相当ぐろてすくな光景が見れたと思う。

俺の腕が生える光景を見て、射命丸はあからさまに顔をしかめた。

「そうでしたね。あなたは殺せないんでした。私とした事が、忘れていました」

そこか。腕の生えてくる光景にではなく、俺を殺せない事に不快になったのか。

歪めていた顔をすぐにまた無表情に戻し、「では、これならどうでしょう？」と、竜巻を放……って、竜巻!?

「切ってもすぐにまた生えてくるのなら、切り刻み続ければ良いだけです！」

「それは流石に洒落にならん!!」

一直線に飛んできた竜巻を、ぎりぎり回避する。こんなに遅いのだから、追尾性能が当たり前にあるのだろう。ここから避け続けるのか、面倒だなぁ。遅いといっても俺基準、というか射命丸の攻撃の最高速に比べてなので、充分速いのだ。

そうして、俺は横目で竜巻を確認した。

……？

「追って……こない……？」

竜巻は俺を追尾せず、そのまま後ろに進行していった。
追尾してこないという事は多分、本当に持続性だけを追求したからだろう。
半永久的に続くかわりに、速さや追尾性などを削る、本当に俺を『殺す』為だけの攻撃。当たっていたらどうなっていたことか。

ふう、と一息つき、竜巻から目を離し、射命丸の方を……！
竜巻から視線をそらす途中に、木にもたれ掛かり、ぐったりしている萃香を見つけた。
萃香はどうやら気絶しているらしい。おそらくは射命丸が落ちてきた時の風圧で吹き飛ばされ、木に頭を打ち付けてしまったのだろう。

そして萃香がいるのは、さっきまで俺がいた所の真後ろ。つまりは竜巻の進行方向？？？！
拙い、竜巻がもう萃香の目前にあり、今から全速力で走っても間に合うかどうか解らん！
俺は空が飛べない。走っていくしかないし、抱き上げようとして足を止めてしまったら間違い無く竜巻に呑まれる。引っ張って行こうにも、俺が走り通してぎりぎりで通過できるぐらい。萃香は巻き込まれてしまう。だったら残された選択肢は……！

「く…っそ！間に合えぇぇぇえええぇぇぇぇぇ！！」

俺は自分の出来る限りの速さで萃香の所まで走る。そして、萃香を突き飛ばした。

突き飛ばす、というのは案外と結構力のいる作業で、しかも俺が全力で突くと洒落にならん威力なので、ちょっと加減しなければいけない。

といっても此処で使う力は勢い。なので寸前に走る速さを緩める。

俺が全力で『走り通して』ぎりぎりな訳で、速度が遅くなった俺は当然といってはなんだが、竜巻に巻き込まれる訳で。

もがいても抜け出せそうにない竜巻が近づいた時、少なくとも萃香は救えたのだから

（まあ、いっか……）

俺は、吹き荒れ猛然とこちらに近づいてきた竜巻に呑み込まれ、切り刻まれた。

＝＝＝

私は報告を受けた時、目の前が真っ暗、というか、その事以外が見えなくなった。

その報告とは「変態がいた」というもの。そこまではさほど珍しくはないので、まあ冷静でいられた。なぜなら妖怪の山に侵入してく

る物好きなど、変態と呼んでも差し支えないからだ。
椛が報告してくるという事は、割と力はあるんだろう。
まあ、最近新聞に載せるネタが無くて困っていた所だ。多少は役に立つか。
そうして、じゃあカメラを準備しようと思い、腰を上げた所で、大した事じゃないと思われた、とでも考えたのか、椛はその変態について付け加えてきた。

「ほ、本当に大変なんですよ!?男なのに髪が長いし、服も真っ黒だし???」

そこまで聞いて、私は飛び出した。話の途中に、商売道具のカメラも持たずに。

男で、髪が長い。服は真っ黒。そして変態。
そんな輩は、幻想郷広しとはいえども、私は一人しか知らない。

「真経津…九十九……!」

ぎりっ、と音がした。どうやら唇を噛んでしまったらしい。口の中で鉄の味がする。
ああ、あの男の事を思い出しただけで腑が煮えくり返ってくる。

あの変態だけは、生かしておかない。絶対に殺す。

私は、私の出せる限りの速さまで速度を出した。音の壁を超えたような気がしたが、気にしない。それよりも速く、速くあの変態を…！

視界に、真っ黒なシルエットが入った。そのシルエットの目前程の所に着地するように角度を変え、地面に当たる瞬間に風を打ち、勢いを少なくする。

砂埃が撒き上がったが、風を使って払う。そうして鮮明になった私の目には

「本当に居たんですね、驚きです。よくもまあ抜け抜けと顔を出せたものですね。ああいや、理由なんてどうでもいいですが」

紛う事無き、真経津九十九その人が立っていた。

視界に確認してからの事は、よく覚えていない。何かを話したのかもしれないが、頭に血が上っていた。我ながらあの時は私らしくなかったと思う。

私の意識がはっきりした時には、目の前に竜巻が出来ていた。体が気怠いので、この竜巻はおそらくは私が作ったのだろうと推測。しかし雑だ。速度も全然だし、性能もイマイチ。持続性だけが飛び抜けているのは、おそらくは殺せない変態を『殺す』為なのだろう。悪くはないが、こんなのじゃ避けられてしまう。ああ、ほら。避け

られた。もっと構成をしっかりして、速度を上げなければ。冷静さを失うなんて、本当に私らしく……！？

次の攻撃の構成をしようとしていた時、竜巻の進行方向の先で倒れている萃香さんを見つけた。

どうして此処に？何で？などと考えている場合じゃない。とにかく止めなければ。

だが、止まらない。消そうとしても消えない。

多分、あの変態対策に『止まらない』ように細工したのだろう。冷静になるべき所を間違ってしまっている。

私が飛んで抱えようにも、距離が離れすぎている。いかに幻想郷最速と自負している私の速度といえど、流石に間に合わない。

どうしようもなくなり、この後起こる最悪を想像してしまった時、あの男が走って、萃香さんを突き飛ばした。

「……っ……？！」

突き飛ばしたはいいものの走る勢いが無くなり、竜巻に呑まれた。竜巻は巻き込んだ後も進み、木々を薙ぎ倒して行く。通過した所には何も残ってはいない。

……おかしい。以前の変態なら、迷わず放っておいてこちらに向かってくる筈。それが他人を助けるなんて。何か心変わりでもあった

のか？

暫く思考し、まあ別にそのままでいいか、とも考えたが

「……私にも非はありますし、萃香さんの事に免じて」

竜巻の真正面に、同じくらいの威力を持つ竜巻を作り、二つの竜巻をぶつける。

ぶつかった竜巻は斥候し、互いを打ち消した。

「まあ、先ほども言ったように今回貴方は萃香さんを助けましたし、私にも非はありました。だから、今回は見逃してあげましょう」

ただし、次に来た時には必ず殺します。と内心で決め、意識の無い変態にそう言い放って、私はその場を後にした。

ちょっとした細工も忘れずに。これはせめてもの遊び心で。

＝＝

意識が戻ってきた。まだ体中が痛いし、何か今にもバラバラになりそうな錯覚を受けた。錯覚なので気にしないようにしたが。

「……あ～……死んだぁ～……」

いやもう完膚なきまでに殺された。竜巻って体がバラバラに切り刻まれるものだっけ？

「あ、起きたのかい？」

にゅっ、と萃香の顔が見えた。そしてなんか頭の下が柔らかい事に気が付いた。

布の感触だが、なんとなく気持ち良い。ああ、ふにふにだぁ…。

……ん？これってもしかしなくても……

ちょっと頭をぐりぐりしてみる。おお、気持ち良い。惜しむらくは直接肌ではない、という事か。

「ちょ……そっちに顔向けるな！」

「うごあっ！」

首を強制的に捻られ、顔を向こうに向かされた。何かぼきって音がしたような気がするが、気のせい気のせい。

「全く。油断するとすぐこれだ。せっかく膝枕してやってるのに」

そう。俺は全国の男子の憧れ、伝説の膝枕を萃香にして貰っていた。

「すまんすまん。でも、やってみたくなるだろ？横抱きの膝枕されると」

「ならないよ。例えなったとしても、やらないよ」

「そうか。……ところで、何で俺膝枕されてんの？」

「さあねぇ。目が覚めたらアンタが寝てたから、としか。何となくやりたくなった、それだけさ。理由なんてどうでもいいじゃないか」

気絶していた萃香が目を覚ますと、嵐の後のような惨状だったらしく、俺は辺りが吹き飛ばされた、いわば爆心地みたいな所に転がっていたらしい。
で、何を考えたか知らんが、萃香さんは膝枕しようと思ったらしく、今に至る、と。

今気付いた事なんだが、空はオレンジ色。加えて萃香さんが膝枕できる時間しか経っていないという事は、どうやら射命丸は竜巻を収めてくれたらしい。
何でかは解らん。本人に聞いてみなければな。俺は射命丸ではない。

ふと膝に頭を乗せたまま、地面を見てみると

『次に会ったら殺す』

と、木の枝が組まれて文字ができていた。……どうやら、理由は聞けそうに無いらしい。

苦笑し、膝枕を満喫する事にした。どうやら萃香は膝枕は悪くないと思っているらしく、俺の頭を撫でたりなんかしていたりする。
そんなまったりとした時間を暫し過ごした所で、思い出したように萃香が質問してきた。

「そういえば、良いのかい?私を撫でないで。その為に今日はここ

までき たんだろう？」

本当に、約束事には律儀な妖怪である。種族としての特性もあるんだろうが、この鬼は一度決めたら絶対に守ろうとする傾向があるからなぁ。

「んー………。良いよ。これで満足だ」

というか満足しなければいけない気がする。何故か。
そうかい、と萃香は呟き、頭を撫でる事を再開する。
そんな感じでのんびりと、一時間程経った所で、俺達はそれぞれの帰路についた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ただいまー」

家に到着。挨拶すると『とととっ』と駆けてくる音がして

「お帰りっ！お父さん！」

「うおっ」

だきっ、と顕冴が俺の胸の辺りに飛び込んできて、顔を見上げてきた。その顔は、少し赤く、なんだか嬉しそうである。犬の尻尾が付いているならぶんぶん振っている事だろう。

……こんなテンションな子だっけ？こいつ。

「あ、ああ。ただいま。一人か？」

「うん。先生、帰っちゃった」

そのテンションに戸惑いつつ、そういえば、と先生の事を聞くと、がっかりした声音で答え、俺の腹の辺りに顔を埋める。まあ、二日近く経てば流石に帰るか。明日からまた学校が始まるし。

というかそれよりもこいつの行動とか口調とか激しく気になるんだが。

「なあ、顕冴ってそんな感じの口調だっけ？」

「何言ってるのお父さん。色々あったから口調とか変えたって言ったじゃん。……わすれちゃった？」

ちょっと怒ったように言ったかと思えば、悲しそうな顔をして話しかける。……なんだ、この可愛い生き物。撫でたい。愛でたい。

というかそんな事言われたっけ？正直ね、竜巻に巻き込まれ《ミキサーされ》た事で、記憶が曖昧になっている。正直、昨日今日の事あまり覚えていない。

だが、正直に「忘れた」なんて言ってしまえば、こいつ確実に泣く。絶対泣く。

それは何故だか戸惑われたので、適当に答えておく事にする。

「ああ、そういえばそんな事言ってたっけか。いや、想像以上に可愛かったからちょっと記憶飛んだ」

「っ……そ、そう。なら、良いんだ。うん」

なんとかごまかせた。でも記憶がちょっとでも飛んだとか言われると、普通は少しは心配するものだと思う。

…何か顕冴の顔が赤いが、風邪だろうか。だったらいかんな。明日は学校なのだ。休ませる訳にはいかんだろう。

そう決めて、布団をさっさと敷く。風邪を悪化させない為にも早く寝るに限る。
敷いた布団に潜り込んだ俺を見て、顕冴は疑問符を浮かべて、少し残念そうな顔をして聞いてきた。

「……？もう寝るのお父さん？お風呂は？」

「いい。明日の朝入れば。さあ」

とんとん、と少し空けたスペース、俺の隣を叩く。何をしているのか解らなかったのか、顕冴はさっきと変わらず疑問顔だったが、何でだか真っ赤になった。

「ま、まさかっ……いっ、一緒に…！？」

「…？他に何がある？」

そう言うと、顕冴は俯いた後「いや……でも……」「べ、別に良いよね？」とか小声で聞こえてきたかと思うと顔を上げ、なにかを決意したような表情を浮かべて

「し、失礼します…」

そう言って、おずおずと遠慮しがちに布団に入ってくる。……端の方に。

嫌なのかと思ったが、そうではないらしく、何やら嬉しそうである。だが、だったら何故布団の端に行くのか。恥ずかしいのか？……無いか。

頭と腰を持ちぐっと引き寄せ、顕冴の顔を俺の胸に当てる。家の布団はあまり厚くないのでくっつかないと暖まらないのだ。冷えて風邪が悪化したらかなわんからな。

「う…うわわっ…！」

「暴れるな。明日は早いんだ、とっとと寝ろ」

顕冴はバタバタしたが、頭を撫でながら言うと、すぐに大人しくなった。

少しすぺーすが欲しかったのか、両腕を俺と自分の体の間に挟んだが。

「そう……だね。おやすみ、お父さん」

「ああ、お休み、顕冴」

ちょっと寝辛いかな？と思い胸から少し頭を離してやる。……何故に少し残念そうなんだ。

さて、おやすみとは言ったが俺は眠れないので、顕冴が眠るまで頭を撫でる事にする。暇だしな。

顕冴が眠ったので、今日の俺の一日は終了した。

八節目（後書き）

シリアスぶってはみたものの、シリアス書けない。

なんとか１３日にあげたかったので、おまけが書けませんでした。

また後日加筆しようと思います。……未熟ですいません。

九節目（前書き）

眠りから覚めたばかりの、薄ぼんやりとした意識の中、まだ寝ていたいという欲求には敵わずに、もう一度意識をまどろみの中に沈めようとして、何か寂しいな、と思った。
そして心地よい暖かさが、確かにあった筈の感触が、隣に無い事に気付いて飛び起きた。

寝る前までには確かにあったお父さんの体が、そこには無かった。

昨日の事は夢だったのか、と悲しい想像をしてしまって、悲しさが込み上げてきた。
悲しみが許容量を越えて泣きそうになってしまった時、家の外から物音がする事に気が付いた。
込み上げていた寂しさが沈んでいき、もしかしたらという可能性と、喜びが沸き上がってきた。

夢ではありませんようにと願いながら、壁にぶつかる事を考えずに勢い良く走り、玄関の扉を思いっきり引いて外に飛び出すと

「おお、おはよう顕冴。……どうした?そんなに急いで」

庭でドラム缶に水を注ぎ、何やらお風呂の準備をしているらしいお父さんを見つけた。
ほっと一息。安心したら力が抜けて地面に座り込んでしまった。

どうやら昨夜の出来事は夢ではなかったらしく、思い出したら嬉しさやら恥ずかしさやらがぶり返してきた。
あ、ダメだ泣きそう。でも我慢だ、我慢。
幸いお父さんはお風呂の準備に忙しいらしく、こちらの様子には気が付いていないようなので、さっと立ち上がり、目元にちょっと浮かんでいた涙を拭う。

ふと疑問。何でお風呂の準備をしているんだろう。普段は朝風呂なんてしないのに。
……あ、そういえば昨日、寝る前に「朝入る」と言ってたっけ。納得。
でも、お父さんの着替えはそこには無く、あるのは……あれ？あれって、私の服？

「……何で、私の服があるの？」

「……？何でって、そりゃお前、その服は着替えなきゃいけないだろう。今から風呂に入るんだから、準備しておいた方が良いかなと思って」

着替えるって、私の服にか。と一瞬思ったが、「その服は」と言っていた事に気が付いた。

「……え？もしかしてお風呂に入るのって……私？」

「当たり前だろう。他に誰が入るんだ?」

当然だろう?という、自然の摂理でも語るかのように答え、ついでに何言ってんだこいつ、みたいな視線を受けた。

あ~……そう。私がお風呂に入るんだ。だから私の服があるんだね。じゃあ不思議でもなんでもないか。

……。

……。

はいぃぃぃぃぃ!?え?わ、私ぃぃ!?何で?!何で私!?考えてもいなかった!

ああいやでも別に入る事はやぶさかでは無いっていうかむしろお風呂好きだし嬉しいんだけど周りが明るいから入りにくいっていうか普段入る時は夜だから外でも周りの目は気にならないっていうかでもだからといってお父さんに見られる事が嫌な訳じゃないっていうかああ何言ってるんだろう私何考えてんの私何するんだっけ私どうなるんだっけ私?!

ぼしゅん、となんか空気が抜ける音がした。気がする。

……なんかもう、いいや……。

思考が出来なくなって、なんかもうどーでもよくなって。

とりあえずお風呂に入る為に服を脱ぐ。お父さんが何か言ってるが、

どうせ喜んでいるんだろう。悪い気はしない。むしろ嬉しい。

そして目の前のドラム缶に飛び込む。ドラム缶とは言ったものの、それは改造されていて縦長ではなくどちらかというと奇麗な円形、温泉とかにある普通の檜の湯船みたいなものだ。

どうやって作ったのか知らないが、飛び込めるだけの広さと深さはある。

で、体洗ったり髪洗ったり洗われたりしたような気がしないでもないが、覚えていない。

はっきりと意識が戻って気が付いたのは、服を着て出掛ける為に靴を履き、玄関を出てお父さんと手を繋いでいる辺りだった。

……こんな感じで私、白峰顕冴の一日は始まった。

九節目

さて、顕冴を風呂に入れる時にちょっとしたアクシデントがあったが、後は特に何事もなく学校に行く準備が整ったと思ったら、なんか顕冴と手を繋いでた。何でだろう？
ちなみにお風呂のちょっとしたアクシデントとは、本当にちょっとした事なので気にしないように。……いや目の保養になった。眼福でした。

そしてふと疑問。自分の記憶に自信が無いので、顕冴に聞いてみる事にした。

「なあ、今日の月って何だっけ？十四夜？」

この前幻想郷にも一週間、日から月曜日までが存在すると知った時に、じゃあ次の月曜日は調度満月の日か……先生大変そうだな。と思った事を思い出した。
記憶が正しければ今日は満月だった筈なのだ。まあ、今の俺の記憶程信用できないものも無いだろうが。
なので今日は満月ではなく、学校もやっていないのかもしれないのだ。顕冴を学校に連れて行く気だったのに、学校はありません何て事になったら目も当てられない。
しかしそんな俺の危惧は杞憂らしく、俺の記憶は正しかったようで聞かれた顕冴は何言ってんだコイツ的な視線を俺に向けながら

「今日は満月だよね？え、何？違うの？私が間違ってる？」

最初は自信満々に言っていた顕冴も、俺の言っている事の方が本当なんじゃないかと思ったらしく、自分の記憶を疑いだした。……俺を信じてくれるのは嬉しいが、そこまで盲目的に全幅の信頼を寄せられると流石に重いっていうか、お前の将来が心配になってくるっていうか……。

少しは俺を疑うって事を覚えようか。

「ああいや、そうだな。今日は満月で月曜だったな。だから顕冴の記憶通りで間違い無いさ」

俺がそう言うと、顕冴は胸を撫で下ろした。流石にこの歳でぼけたんじゃないかと自分を疑うのは嫌だったらしい。

今日が月曜日と確信できたし、これで安心して顕冴を学校に送り出せる。まあ、送り出すといっても既に人里内に入っているんだが。これで学校が無かった場合はどうするのか全く考えていなかった自分の無計画っぷりに驚いた。

そしてここまで来てようやく、顕冴が髪を特に加工せずにポニーテールにしているだけな事に気が付いた。……そんな事にすら気付か

なかった自分が、思いの外鈍い事にも気が付いた。

顕冴の髪は長い。何もせずに流しておくと地面についてしまう程に。
そこまで長いと普段の髪型のせいもあってか手入れも大変らしく、
夜に結構な時間髪を弄っているのを毎日と言っていい程に高い頻度
でよく見かける。
それでも何故かまだ切るつもりはないらしく、これからも髪の長さ
はまだまだ長くなるのだろうと思われる。

今現在でもポニーテールにしたぐらいでは、まだまだ地面について
しまうのでは？と思わせられるぐらいにすれすれの位置に髪の先端
がある。
それは顕冴も解っているらしく、普段は絶対にポニーテールやツイ
ンテールなどの簡単な髪型にはしないのだが……今日はどういう
訳だかポニーテールなのだ。
別にポニーテールが嫌いな訳ではない。むしろ大好物である。
だが俺の意志で顕冴の髪型を決める訳にもいかず、顕冴の好きにさ
せていたので、
今迄こいつのポニーテールを見た事が無かったからとても新鮮なの
だ。
……あ、何か新鮮で見慣れてないから、興奮してきてしまった。
おはよう息子よ。お前なぞもげてしまえばいいのに。ごめん嘘付い
た。これからも一緒だぜ？
突然繋いでいた手を離し、前屈みになって止まった俺を心配した顕
冴は、その長い髪をふわりとなびかせながら振り向き、上目使いで
見詰めながら聞いてきた。

「どうしたのお父さん。大丈夫？私に何か出来る事、ない？」

……静まれ俺のパトスッッッ！！まだお前はお寝んねの時間だッ！

いくらなんでも「何か出来る事は？」という善意に「じゃあコレを静めて貰おうか」という流れを妄想するなど駄目だろ！

いくらなんでも娘に興奮するなどっ……やべぇえええぇぇぇ！対象が娘って事に更に興奮してきちまったじゃねぇかぁぁあああぁぁ！！！

「いや……大丈夫。大丈夫だから先に行っててくれ……」

「……そう？本当に？」

「ああ、本当だから…だから先に行ってくださいお願いします」

「そ、そこまで言うなら信じるよ。……先、行くね？」

溢れんばかりの欲望をなんとか抑えながら、先に行くように土下座で催促する。

俺の思いが伝わったのか、顕冴は踵を返し、学校に向かってくれた。

……振り向き様に首のうなじが見えた事で、また興奮した俺は間違い無く変態であり最低。でもそんな自分が大好きです！

そんな自分に呆れつつ興奮が収まるまで、うずくまっていた。

「おかあさーん。あのおにーちゃん、なにしてるのー？」

「しっ！見ちゃいけません…！」

………人々の奇異の視線を受けながら。

だって此所人里のど真ん中だし。

俺は、興奮をなんとか抑えようと、地面にうずくまっていた。

……あ、見られてると思うと、また興奮してきた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

俺はなんとか興奮を抑える事が出来たので、学校に行く事にした。

ふう。結構時間掛かったな。でも、見られてたんだから、二時間掛かっても仕方ないよね？

そうしてやっと辿り着いた学校。もう授業が始まっていると思うので、なるべく音を立てずに教室の方に行く。皆の邪魔にならないように、まなーは守ろうね！

そして教室の近くに来て、何だか騒がしい事に気が付いた。

ここに来る子供達は大体１０を越えるかどうかなので、騒がしいのはむしろ当たり前だ。

だが、今回のはそういう集団での騒がしさではなく、何やら争い事の騒がしさだ。
といっても喧嘩れべるでの、だが。それも口喧嘩のである。

だが、普通そんな喧嘩なんて慧音が止めてしまうのだが、今回は止まる気配がない。
……あと、喧嘩しているのはどうやら二人のようで、声で判断するに一方は顕冴らしかった。

頭痛くなってきた。あいつは子供相手に何をやっているんだか。
流石にちょっと止めよう。そう思った。
本当は子供の喧嘩に先生でもない大人が割って入るのは頂けんが、今回ばかりはそうも言っていられない。

喧嘩を止めようと教室の扉を開けた俺の目に飛び込んできたのは？？？

「バカって言うな！知らないの？バカって言った方がバカなのよバ～カ！」

「何だって？！私のどこがバカだっていうの？！」

「アンタ、九九の二の段できないんだって？バッカじゃない？あたいは五の段までできるんだから！」

「ぐっ……じ、じゃあ、朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。この生き物は何でしょうか？」

「バッ、バカにしないで！天才のあたいにかかれば、こんなの、簡単に解けるんだから！…え、え～っと……？」

「時間切れ！正解は『人』でしたー！何？謎々も出来ないの？」

「何よ！アンタだって二の段すらできないじゃないバーカ！」

「お、お前には言われたくないね！このバカ！」

「バカって言ったわね？！アンタの方がバカじゃないバーカ！」

「またバカって言った？！バーカバーカ！」

「うっさいわね！バーカバーカ！」

「バーカバーカバーカ！」

「バーカバーカバーカバーカバーカ！」

「……お前達…」

――――なんだかちっこい妖精と小学生れべるの口喧嘩を繰り広げる我が愛娘顕冴と、その喧嘩を止めようとしているが止められずに頭を抱えている慧音と、二人の喧嘩を呆然と見ている子供達の姿だった。

「……なんぞ、これ……」

呟き、思わず頭を押さえてしまった。
頭痛が痛い。なんだこの光景。子供達ですらついていけずに置いてけぼりじゃないか。
いい歳した奴が妖精というめるへんちっくな生物と罵り合うという、妙に現実味のある不可思議な光景が、そこにはあった。

「九十九か！頼む、なんとかしてくれ！」

俺に気付いた慧音が人に頼るという、大変珍しい事態に遭遇した。
普段はなんでも一人で抱え込む癖がある慧音が、人を頼った。この事で慧音の人と成りを知るものにとって、この喧嘩がどれ程凄まじいのか解って貰えただろう。

凄まじい、とはいったが、特段激しい訳ではない。
弾幕が飛び交う訳ではないし、物が飛び交う訳でもない。
殺気などあるわけは無く、能力などによる対決でもない。妖精の方からは冷気が漏れているが。

ただ双方聞く耳を持たず、二人の世界に没頭している。こちらの言葉は届かず、喧嘩相手の言葉のみが二人の耳に入っているようで、実は微妙に入っていない。
こみゅにけーしょんが出来てるようで出来てなく、言葉が耳に入っ

ているようで入っていない。
右から左へ聞き流し、流したものに付け加えて相手へ返す。そんな何時終わるとも知れないこの不毛な争いは

「あんたなんか……凍っちゃえ！！」

癇癪を起こした妖精から発せられる強烈な冷気により、顕冴どころか周りの人々すら氷漬けになる事で、強制的に終了した。

一瞬で教室全体が凍り付く程の冷気。とても妖精一人の力とは思えない。
通常『妖精』というのは力が弱く、できる事といったらせいぜい悪戯程度が関の山。
しかしこの妖精（恐らく氷の妖精）は、広範囲を一瞬で凍り漬かせるという妖精離れした事をやってのけた。これはおそらく幻想郷内でも相当高位の力が無ければ出来ない芸当だ。

しかし、その芸当をやってのけた本人は困惑している。「な、なんで？こんなつもりじゃ……」と聞こえる事から、どうやら意図してやった訳では無いらしい。
全力を出したつもりでは無かったのか、元々ここまで力が強くは無かったのかは良く解らん。
だが、凍ってしまった子供達や慧音、顕冴を見て泣きながら心配している事から、根は素直なのだろう。多分だが。

「おい、そこの妖精」

「ごっ、ごめんなさい！ちょっと手を凍らせて驚かすだけのつもりだったのに……ごめんなさい！」

ちょっと話かけるとびくりと大げさに反応し、ただひたすらに謝ってしまった。

顕冴の口喧嘩の内容から察するに、本来なら素直に謝罪などする性格には思えなかったが、自身の想像以上の結果に罪悪感を覚えているらしかった。

対象のいない謝罪を繰り返す妖精の頭を撫でる。いや、特に理由は無いが。

撫でられる事で多少は落ち着いて来たらしく、うつむいていた顔をあげた。

「なあ、ちょっと手伝って欲しい事があるんだが、いいか？」

「……冷たく、ないの？」

「……は？」

「あたい、冷気が出てるから冷たい筈なのに……」

どうやらこの妖精は、自分の周りには常に冷気を発している為、他人が触ると冷下手すると凍傷にもなったりするのに、どうして触れるのかと聞きたいらしかった。
説明してやってもいいが今は時間が勿体ないし、何より妖精に理解できるかどうか解らないので適当に説明する事にした。

「実は俺、下っ端なんだ……」

「……？」

はしょり過ぎて自分でも何言ってるのか解らなかった。
だがこの妖精は「下っ端ならしょうがないか……」と何やら哀れみの篭もった視線を向けながら、嫌な方向に納得してしまったらしかった。
……馬鹿すぎてなんだか頭良い様に見えてきてしまった。

「で？手伝って欲しい事って？」

「ちょっと水をぶち撒けるのを手伝ってくれ」

「……なんで？」

「いいからいいから」

「あ、ちょっと！今あたいの事バカにしたでしょ！？」

「気のせい気のせい」

喧しい妖精はするーして、さっさと準備する。
まずは掌に火をおこす。方法は秘密だ。別に何かを燃やすわけではない。
次に妖精を説得。……適当に煽てりゃいいか。

「なあ妖精、ちょっと部屋の中の冷気を集めてくれないか？」

「妖精じゃなくてチルノ！なんでやらなくちゃいけないのよ？！」

「だってチルノって強いじゃん？俺には出来ないからさ、ここはチルノの力が必要なんだよ、頼む！」

「……ふ、ふん！そ、そこまでいうのならやってあげるわ！」

よし。こいつがアレで助かった。ちなみに馬鹿とは考えない。だって幻想郷の人ってなんだか当たり前のように心を読んでくるんだもん。気付かれてしまったら面倒だ。
強い、と言われてあがったチルノは、部屋の中の冷気を自分の周りに集めた。

何故集めるのか。それは今からする事が無駄になってしまわないようにだ。
強い冷気があるままだと、すぐにまた凍ってしまうからな。

俺はおこした炎を強めて、氷漬けになった皆を暖める。急激に溶かすと壊れてしまうかもしれないから、ゆっくりと。
しかし、教室そのものや、比較的遠くにいた子供達の氷は溶けたものの、中心近くにいた顕冴や慧音の氷は溶けていない。
結構熱いぞこれ。これで溶けないってどんだけ強い冷気……というよりは能力か。

ぶっちゃけ此所幻想郷では、中でもとりわけ『能力』と呼ばれるものに関しては、物理法則が働かない場合が多いのだ。溶けない氷というのもそのせいだろう。
一部とはいえ溶けているのは、恐らく能力が制御出来ていなかった為だと思う。
しかし溶けたとは言っても、さっきまで氷漬けだったのだ。色々と心配な面はあるし、溶けない氷についてもなんとかしないと。
そして唐突に俺は、何故だか解らんが『永遠亭』という名前と、大まかな場所を思い出した。
永遠亭、というのが正直何の名前だか良く解らんが、こんなたいみんぐで思い出したんだ。きっと何か意味があるんだろう。というか意味が無かったら自分の記憶がそこまで使い物にならなくなっているという事。そんな事になっているとは思いたくない。

都合良く溶けた氷で教室は自分の姿が映る程水浸し。条件は整っている。
一か八か。自分ではどうしようも無い。だったら賭けるまで！

……流石に直接は恐いので、手前の迷いの森辺りで。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

生い茂った竹群の中、私は一人歩いていた。
最早日課というか、生き甲斐となった竹林での見回り。
間違って入り込んだり、永遠亭に行こうとしてこの竹林、通称『迷いの竹林』に迷い込んだ人を見つけ、案内する為だ。
今日も何時も通りに見回りをして、迷った人間が見つからず、その事に喜んで良いのやら案内出来ない事に悲しんでいいのやら。
そして『永遠亭』に客がいないという事と同義だという事に、何時もながら平和だなぁと思う今日この頃。ちなみに一ヶ月前ぐらいにも同じような事言っていたような気がするのは、気のせいだろう。うん。

暇なので、とりあえず竹林の入り口に立っておく事にする。これから入ろうとする人がいるならば探す手間が省けるし。

そうして入り口の方へ歩き出すと、後ろから何やら物音がする事に気が付いた。
気になり、誰かいるのか？という疑問と何がいるんだろう？という好奇心が湧いてた。
湧き上がる好奇心を抑えられずに、見てみる事にした。長く生きていると、どんな事でもいいので暇つぶしが欲しくなるのだ。
音のした方向を覗こうとすると、にゅっ、と首が出てきた。

「お、美少女発見。襲ってもよろしいか？」

……首を出したのは、変態だった。………この時程、自分の好奇心を恨んだ事は無い。

よりにもよってこいつの顔を間近で見る事になろうとは。

＝＝＝

場所を移して迷いの森。ちなみに幻想郷にはよく人が迷う場所として森が一つと竹林が一つの計二つが代表的だ。

前者は『魔法の森』、後者は『迷いの竹林』として呼び親しまれている。嘘である。普通そんな危険な場所に人々は親しみなぞ持たん。

まあ、親しまれているかどうかは謎だが、そう呼ばれている事は事実である。

ちなみに俺の言う『迷いの森』とは、時と場合によって変わる。どっちも迷う事には変わりないし、木が沢山あるので森と言っても差し支えないと思うんだ、うん。

今回は後者の『迷いの竹林』である。この竹林の中に『永遠亭』という場所がある……らしい。

らしい、というのは無くしていた自分の記憶を思い出したからである。（ちなみに無くした理由は十中八九九割九分竜巻に巻き込まれたせいだと思う）

そして思い出したはいいが『永遠亭』とはどんなものなのか、誰がいるのか、何故俺が知っているのかがさっぱり解らないんだが、あのたいみんぐで思い出したって事は、この氷漬けの二人と解凍したばかりの子供達をなんとか出来る場所、という事だろうと思う。都合良すぎだろとは思うが、自分の頭の都合の良さと第六感を信じたいのだよ。

で、『永遠亭』とやらを目指す事に決まったのはいいが、何所にあるのか詳しい所は解らん。解っているのは『竹』『迷った』『美少女』の三つだけ。

ちなみに俺は当然ながら三つ目の情報を頼りにしている。普通こんな時に『美少女』という単語が出てくるのは流石におかしいと思うし、出てくるのならば『永遠亭』に何かしら関係のあるんだろうと当たりを付けているのだ。

いくらなんでも『美少女だから』という理由で探している訳では無い。断じて、だ。

というかその美少女が『永遠亭』について知っていなくても別に良いかなと考えてたりする。……あれ？これって美少女だから探しているって事になるんじゃね？

そんな事はどうでもいいと、美少女を探す作業を再開する。

鬱陶しい程鬱蒼としている竹を掻き分けながら探索する。何か冒険している気分がしてきて楽しい。

ちょっと気分が乗ってきて、ついつい大きな音を立ててしまった。

いかん、失敗した。

ここは『迷いの竹林』、下手すると猛獣（妖怪、妖精含む）と遭遇しかねん。

……あ、違った。それ『魔法の森』の方だわ。

あっちが妖精の悪戯で迷わされる、人工と言ってもいいのに対し、こちらは目印となるものも無く、緩やかな傾斜が連続していたりする結果迷う、自然的なものだ。
後者はそのせいで人間どころか妖怪ですら迷う事は珍しく無いらしい。

つまりは、『迷いの竹林』では、猛獣と遭遇する危険は無いのだ。
基本的に。
この前落とし穴に引っかかったりしたが、偶然だろう。

よって危険は無い。無いと言ったら無い。誰が何と言おうと無い！
なのでガンガン音立てて探す作戦に変更。そうすれば美少女の方から出てきてくれるかもしれん。
適当に、無意味に竹を揺らしながら歩く。そして道なりに行くと真正面は竹で塞がれていた。当然掻き分ける。道は用意されるものでは無く、自分で作って行くものなのだよ！
竹を掻き分けた先には

「お、美少女発見。襲ってもよろしいか？」

白い髪にぼーいっしゅな服着た美少女が、そこにいた。
いかん、つい反射で変な事言ってしまった。反省せねば。だが後悔はしていない。

「襲ってもよろしいか？」と聞かれた美少女は、当然嫌そうな顔をした。ですよね。

そしていきなり炎を打ち出してきた。避けると周りの竹に引火するかしれないんで当たる事にする。
顔面に直撃。熱いし痛い。痛いが美少女にやられたと思えばあら不思議！気持ちよくなちゃう！
俺が避けると思っていたのか、美少女は焦ったような表情になったが、俺が喜んでる事に気が付くと一瞬で汚物でも見るかのような目と表情になった。そんな、ひどい！
だがそんな表情も、俺の傷が再生していく光景を目撃する事によって、驚愕へと変わった。

まあ、燃える→火傷する→ぐちゃぐちゃ→再生中（ぐちゃぐちゃ）→再生完了（今ここ）
だしなぁ……気持ち悪いか。

「あんたも……不死なの……？」

どうやら驚いている理由はそこではないらしい。この美少女は俺が再生する事……というよりは死なない事に驚いているようだ。
『も』、という事はこの少女本人、もしくは知り合いにそういった類の人物がいるのだろうか。と、まあそんな事はどうでもいい。

「そんな事よりも、だ。『永遠亭』って場所、知っているか？」

「不死をそんな事って……知ってるけど、何？」

「急患だ。氷漬けの人間二人と、凍傷の子供数人」

「っ！解った。で？その患者さんは？」

「すぐそこだ」

「案内して」

急患がいる事を報せると、聞きたい事もあるだろうに患者を優先させた。

大人というか、こなれているというか。まあ、不死だからいつかは聞けるだろうとも思っているのかもしれないが。

で、顕冴達を置いて来た場所へ連れていく。といっても本当にすぐの場所なのだが。

着いた途端、何故だか美少女は目を見張った。まぁ、氷漬けの人間なんて見れば普通そうなるか。

「顕冴！慧音！？ど、どうしたのこれ？！」

「ん？知り合い？」

「そうだけど！……これ、溶けないの？」

「残念ながら。炎でも駄目だった」

溶けないの？と聞いて来た時に、掌に炎が見えたので一応炎でも駄目だった事を言っておく。案の定直接燃やすつもりだったらしく、舌打ちして炎を消した。
場所を考えて欲しい。ここ竹林の中だぜ？燃え移るだろうが。というか氷が溶けて本人燃えたらどうする。せめて間接的に、暖めるとかして欲しい。

ちょっと冷静になったらしい美少女は、とりあえず運ぶ事を提案してきた。
子供達の方はどうしようも無いらしい。良い意味で。
一般的に凍傷というものは暖かい場所で暖めるのがいいらしく、４０～４２度くらいのお湯に漬けるか、それが無理なら凍傷では無い人の肌で暖めるのもいいらしい。
幸いな事に、何故かしもやけになった子供は一人もいないので、もう何も出来る事はないんだと。
そもそも、氷漬け＝凍傷ではないらしい。前提が間違っているって言われた。
知らなかった。何せそんな事態になった事ないからな。
ちなみにこの美少女がその対処法やらを知っている理由は

「よく妖精の悪戯で凍り漬けになった人が来るからね。あまりに多すぎるし、あたしでも何とか出来るらしいから、『永遠亭』の医者に教えて貰ったんだ」

らしい。……その妖精にめっちゃ心当たりがあるんだが。むしろ今回の当事者っていうか……。
連れてこなくて正解だったな。居れば面倒な事になっている所だった。

「でも慧音が氷漬け……ねぇ……油断したのか、相当な事があったのか……」

両方です、というのは隠しておこう。何故だかそうする事が一番だと思ったからな。
自分の感は、なるべく信じた方が良いとここ最近で思った。……ような気がする。

「まあ、とにかく運ぼうか。私は慧音を、あんたは顕冴を頼む。……変な事するなよ？」

「氷漬けの相手に何をしろと？何が出来ると？」

「いや、あんた変態だから一応、ね？」

酷い言われ様だ。だがその認識で間違いない。
とにかく、美少女の言ったように俺は顕冴を、美少女は慧音を永遠

亭まで運ぶ事にした。

＝＝＝

結論からいうと、二人とも何とか無事でした。

『永遠亭』についた俺達を迎えたのは、うさ耳にブレザーと、何やら誘っているとしか思えない格好をした美少女だった。

普段ならもふもふする所だが、今回は事情が事情だったので断念。

何もせずに案内を頼むと、何やら不満そうな顔で見られた。……なんで？

そのうさ耳に案内して貰った先に居たのは、これまた美人さんだった。服のこんとらすとが目に痛いが、幻想郷ではよくある事。

むしろ昔の俺の格好は心が痛くなるような格好だったから、まだマシというか、全然いけます。

その恐らくは先生と思える美人さんは、抱えた二人の様態を見て、すぐに処置に取りかかった。

といっても、二人をお湯を張った浴槽にぶち込むだけという荒っぽいものだったが。

確かにその処置方法には驚いたが、もっと驚いた事がある。それは

「風呂でけぇ……しかもしゃわーまで完備…だと？」

これだけの湯船暖めるのにどれだけ時間と労力がかかるのやら。と

いうかしゃわーって。
幻想郷って、科学力って何世紀か前の日本ぐらいじゃ無かったっけ？

「なあ、これだけのお湯、どうやって暖めてんの？しかもしゃわーって……」

「ああ、核融合炉が出来たのは知らないのかしら？シャワーも、仕掛けそのものは簡単だから昔からあったわよ？」

「核……融合炉…だと……？」

外の世界より進んでんじゃねーか。という事は電気とかもあるのか？……幻想って、なんだっけ……
俺が幻想という言葉の意味と意義について考えていた時、お医者さんはちょんちょん、と俺の肩をつついた。

「で、お支払いは？」

「……は？」

「だから診察料。というより、施設運営費かしらね？」

「え？金がかかんの？！聞いてないよ！？」

とっても良い先生だっていろんな人が言ってたから、てっきり無償なのかと思ってたよ！

「かかるに決まっているじゃない。いくらなんでもタダで済ませたら経営できないでしょう？安心しなさい、格安だから」

いや、格安かどうかはこの際置いといていい。
大事なのは、現在金を持っていない事だ。正確には持ってきていない、だ。
だって突然の出来事だったんだもの。財布なんて持ち歩かねぇだろ普通。……普通は持ち歩くか、普通は。
よって幾ら安かろうが、たとえ一円だと言われても今の俺には払えねえのだ。

「ツケとか、利きませんか…？」

「……あなた、病院を何だと思っているのかしら？」

「ですよね。無理ですよね」

ええ。解ってました。解っていましたとも！
だが足掻いたら何か変わるかもしれないだろ！？やってもねえのに諦めんじゃねえよ！
……現実逃避してました。すみません。

俺が払えない事に気が付いたのか、はたまた最初からそのつもりだったのか、お医者さんは顔をニヤリ、と医者としては宜しくない表情で取引を持ちかけてきた。

「何？払えないの？……払えないのなら、身体で返して貰うしか無いわよねぇ…？」

「悪徳金貸し？！やの付く人ですかあんた！？」

でもなんかえろい！「身体で」ってとこにえろすを感じる！ちょっとドキドキしてきた！

「大丈夫よ。あなたはベッドの上で寝ているだけで良いわ」

「それはあれですか！？動くのはあなただけって事ですか？！」

騎乗位ってやつか！興奮してきたぁぁぁ！

「ええ。あなたは本当に何もしなくていいの。ただ、ちょっと痛いかもしれないけど」

「…痛いの？でも良いか！美人さんだし！」

痛いって、何だろうか？まさかケツに何か突っ込むつもりじゃなかろうか？
だがそれも良い！美人にやられると思うと後ろの貞操なぞくれてやるわ！むしろ奪ってくれ！

「そう、良かったわ。じゃあ、この書類にサインしてくれる？」

「……？何これ？」

「『私は、今日ここで何があっても責任を追及しません』って書いてある書類」

……雲行きが怪しくなってきたんだが。
というかそれは要するに「死んでも文句は言わせねぇ」って事じゃね？
……脱走！！

「あら、どこに行くつもりなのかしら？」

服を掴まれた！！こいつ……出来る！

「いや、ちょっとといれに……」

「ああ、大丈夫よ。今からそんな些細な事気にならなくなるから」

「いやぁぁぁあああぁぁぁ！ちょ、何それ？！何が俺を待ってるの！？」

「めくるめく『誰にも使った事の無い特別な薬（はじめてのたいけん）』かしら？おめでとう、あなたが一番乗りよ」

「それは『安全性の確認されていない実験（さいしょでさいご）』って事でしょう？！」

「良いじゃない。後世に名を残せるわよ？」

「現世で名を残したかったよ！つか死ぬこと前提？！医者がそんな気持ちで良いと思ってるの？！」

「そうね…じゃあ……んっ……あなたには、後世の為の礎になって貰います。安心して下さい。あなたの命、無駄にはしません」

「医者っぽく格好良く言えって事じゃねぇ！しかもやっぱり犠牲になってる！」

「人生には、犠牲はつきものなのよ…？」

「病院で医者がそんな残酷な現実を語るな！」

「……飽きたわね……」

「飽きた？！飽きたって言ったよこのいし……」

首筋に何か打たれた。多分注射、それも中身がアレなジュース注射だろう。

俺に薬が効かないって知ってるのか……？……あ、思い出した。

そういや居たなぁ。俺をこんな風にぞんざいに扱って、ぼろ雑巾の様にした挙げ句、ポイッと捨てる様な人……つーか神……。

しかし今思い出しても後の祭り。後悔先に立たずってやつだ。

意識が朦朧としてきた俺が最後に見たのは、なんだか同情するような視線で、引き摺られていく俺を見るうさ耳少女だった。

九節目（後書き）

なんかいろいろ、すみませんでした……。
今回は、フラグも特には無かったですよね？ね？

ちなみに炎で溶けなかった氷が何で溶けているのか、というは簡単な事です。別に普通に溶けます。
あのままずっと炎で暖めてたら溶けてました。九十九は、あれで結構テンパってましたから、冷静な判断が出来ていません。氷漬けの顕冴や慧音を放置して探索してましたし。

十節目（前書き）

目が覚めると、けーね先生が横に寝ていた。
ああ、ちなみに『横のベッド』に、だ。いくら私が先生大好き人間だったとしても、そういう事はしないのです。
その証拠にほら、私も先生も病人が着るような白いんだか青いんだかの中間の、あの何ともいえない色した服をちゃんと着てるし。……病人？

改めて周りを見回してみる。個室。自分の服はここには無い。この部屋にはベッドは二つと鏡が一つあるだけで、ベッドの一つは私が、もう一つは先生が使っている。それ以外には特にこれといった物は置いていない。なんだか寂しいと思ってしまった私。普通は病院って、テレビくらい置いてあるものじゃない？……あ、ここ幻想郷だった。テレビなんてある訳……あ、いやあるかも。

何せ幻想郷だし。何があってもおかしくない。というかパソコンは見た事あるし。ネットにも繋がっていたし。
正直それって『幻想』っていうの？どうなの？と思わなくもないが、それを言ったら何かが終わる気がする。何故か。

……何でしょうね。何でかは解らないけど、どっ、と疲れが出てきた。のでベッドに寝転がる。折角ベッドがあるんだし、今迄寝てたみたいだし、使っても良いよね。

天井を見てみる。寝転がったので天井が見えるのは当たり前なんだけど。
……こういう時、何か言わなきゃいけない気がするんだけど……

「……知らない天井だ……」

言っちゃった。抗い難い感覚に任せたら言っちゃってた。

……実はこの天井、知らない訳では無いんだけど。何で言っちゃったんだろう？

この天井、多分は『永遠亭』のものだ。やけに近代的だし。木じゃなくてコンクリートっぽいし。そんな造りをしている建物は、幻想郷ではここだけだと思う。

ちなみにさっき言ったパソコンを見たのもこの『永遠亭』。聞く所によると他にも様々な近代的な技術を使った機材があるんだとか。

……うん、そうだね。幻想って感じしないね。ものすごく身近に感じるね。

っと、そうだった。何で私寝ているのか聞こうと思ったんだった。

え？違ったっけ？

じゃあ今から誰かに聞きに行きます。とりあえずはこの部屋から出よう。

『永遠亭』だし、危険は無いだろうから先生は置いて行っても構わないと思うし。

ベッドからそっと降りて、足音を立てないようにそろそろと歩く。

なんか他人の家に忍び込んでいるみたいでドキドキしてきた。まあ、此所に来るのは初めてじゃないけど、気分的な問題だ。

普段は正面から入っているし、今回は気付いたら中に居たし。

あ、じゃあこの場合は脱出か。誘拐犯の隠れ家から脱出しろ！みた

いな。

よし、そうと決まればまずはそういう潜入系のゲームの醍醐味、『無断で家宅捜索』をしよう！

あれって殆どの人達がやってるけど、犯罪だよね？不法侵入に窃盗とか色々。

世界を救うべく旅をしているのに、その行く先々で不幸を撒き散らすのって、どうなんだろう。世界を救う為には犠牲が必要なんだよって事？

……制作者もなかなかに子供に対して厳しい現実を教えようとしているんだね。

っと、そんな場合では無かった。まずは武器を見つけないと。

こちらは格闘に関しては素人だ。伝説の『蛇』みたいにＣＱＣなんて使えない。

丸腰の現在、敵に見付かったら抵抗できない。それは困るし。最低でもナイフくらいは欲しいね。

……何でサバゲーみたいな思考しているんだろう私。敵なんて居る訳無いのに。

ここは現実です。ゲームと混同してはいけないよ私。ここは現実です！『幻想』郷だけどね！

そんな考え事してたらさっきから全く動いていなかった。立ち止まっていた。

どうやら無意識で何かを起こさないレベルには私の無意識は頼りになるらしい。気が付いたら他の部屋に居ました、とかになったら洒落にならないから。だってえーりん恐いもん。

勝手に他の部屋に入ったら確実に説教である。良くて。最悪実験動物だ。

家宅捜索は諦めるしかないなぁと思い、ベッドまで戻ろうとすると、何やらキィ……キィ……、と金属の擦れる音が前から聞こえてきた。……どうしよう。もの凄く恐い。

ここだけの話、私、実は幽霊とか……ああいや、そういうのが恐い。名前を出したくない程度には。ゆうれいこわい。

音がだんだん近づいてくる。

キィ……キィ…キィキィと感覚も短くなってるし。まるで追い詰めるのを楽しむかのようにゆっくりと、しかし確実にその速さを増して近付いてくる。だから恐いって！もう止めて！私のＳＵＮ値はゼロよッ！！……ところでＳＵＮ値って、何だろうね。時々お父さんが言ってるから真似しちゃったけど。

何か恐怖に直面した時とかに言ってた。ゆうかりんに追いかけられ追い詰められた時とか。

あと私が熱でぼうっとしてた時に、中身の入っていない鍋を掻き混ぜてた所を見た時も言ってた。

精神力のゲージか何かだろうか？だったら普通はＭＰとかＳＰとかじゃないの？

そんなこんなで考え事していると、あの音は止んでいた。……目の前に気配、というか車椅子があるんだけれども。

恐る恐る、車椅子の主の顔を伺ってみる。ホラーでは良くある事じゃない。生きている人かと思って話かけたら……ってやつ。ああっ！想像しただけで鳥肌がッ！

鳥肌を抑えつつ、泣きそうになる心も沈めつつ、ゆっくりと座っている人の顔を確認した。

そこに居たのは

「……う……ぁ……あ……ぅう……あ……ぁあ……
…」

「……お父さん……？」

車椅子に力無く座り、目に光の宿っていない、まるで抜け殻のようなお父さんだった。
その余りの光景に絶句していると、九十九の後ろの方、部屋の出入り口からえーりん、つまりは此所『永遠亭』の医者が入ってきた。

「あら？起きたのね」

「ちょ、えーりん、これ、どういう事！？」

「これ…？ああ、その変態ね。……残念だけど彼、重度の薬物中毒よ」

ちょ、薬物中毒って。それどう考えたってあなたの仕業……

「全く。一体何をしたらここまでになるのよ。薬物のお風呂にでも

入った？」

「……え？えーりんの仕業じゃないの？」

私がそう聞くと、えーりんは「何言っちゃってんのコイツ」みたいな視線を向けながら

「違うわよ。私だって医者よ？そんな事しないわ」

「ああ、そっか」

そうだった。普段の態度とか行動とかがあまりにもアレだったから、つい。

「そっか……って……まあ、いいわ。で、この変態の話だけれども……彼、もう正気に戻らないかもしれないわ」

「そんな……！」

かなり深刻な事を、あっさりと言われた。

……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！そんな事、そんな事……！

十節目

「まあ、嘘なんだがな！」

「……は？」

動けない筈の、正気では無い筈のお父さんが、両腕を挙げながら車椅子から飛び降りた。しかも何だかイラッとする顔で。

嘘って。いや嘘なのは良かったと思うけれども。思うけれども！何なのコレ！？

いやでも正直、えーりんとお父さんの組み合わせだったら普通にありそうで恐い。しかもえーりんが薬漬けにするパターン。そしてそれを喜んで受けるお父さんの図。

安易に想像できてしまうあたり、私がおかしいのか、その二人がおかしいのかは、明白だろう。勿論後者です。

そのおかしい二人は、なにやら「イェ～イ！成功！」とか「ないす演技！」とか言いながらハイタッチなぞかましてくれちゃっている。ドッキリか。ドッキリか何かか。

正直洒落にならなかったんだよ！？お父さんがもうずっとこのままだと思った事も、キコキコ音を立てながら近付いてくるとかのホラーじみた事とかも！

……もうやだかえりたい……。

「……帰る……」

「おお？あ、じゃああれだ。先生頼んだ」

「……おと…九十九は？」

「ちょっとこの人と話があるから。すまんな」

そう言って、お父さんは所謂サムズアップの形の手で後ろのえーりんを指した。

指されたえーりんも「そういう事だから」と言っている。どうやら本当に何か話があるみたい。

今の私には止めないのか、というツッコミも入れる気力も無い。

「……うん。解った……」

私は、ベッドに寝ている先生を担ぐ。……どうやって帰ろう？

幾ら先生が重くないといっても、人間一人背負っているのだ。歩き辛いのには変わりない。

ここから私の家、それでなくとも人里でさえ人を担いで行くには大変な距離がある。

さて、どうしようかと考えていると、お父さんが「ああ、そうだ」と言って、部屋にあった鏡の方に歩いて行き、目を閉じて鏡に手を

当てた。

「……何やってるの？」

「ん？歩いて帰るのは大変だろうと思うし、ちょっと家と繋げてるんだよ」

「……鏡で？」

「鏡で」

そんな事出来るんだ。初めて知った。……そういえば私、お父さんの事余り知らないな……

お父さんはしばらく唸っていたかと思うと、ふっ、と息を吐いた。

「よし、完了」

「え？もう？特に変わりは無いみたいだけど……」

鏡には何の変化も無いように見受けられた。光っている訳でもないし、私達の家の中が見えている、という訳でもない。ただの何の変

哲も無い、ごく普通の鏡だ。

「心配するな。ちゃんと繋がっているさ」

笑いながら、お父さんは鏡に手を突っ込んだ。……突っ込んだ!?
お父さんの手は、音も立てずに鏡の中に入っていった。
よくある漫画的表現の波紋も無く、そこに何も無いかの様に通り抜けた。
「な?」と言いながら腕を引き抜いた。その腕にも変化は見られない。

「……信じられない……」

「じゃあ、顕冴もやってみろよ。まずは腕、それから顔を入れてみると良い」

家の中の光景が見えるから、とお父さんは言った。
……じゃあ、ちょっと試してみようか。正直、ちょっと興味がある。
お父さんに担いでいた先生を渡し、鏡に手を入れてみる事にする。
……先生を支えるの、何で肩で支えるんじゃなくてお姫様抱っこなの?……正直、羨ま……
いや、やっぱり何でもないです、はい。うん、何でもない。

恐る恐る、鏡に手を伸ばす。やっぱ無理でしょうこれ、と思いながら。
ゆっくりな理由は勢いよく手を出して繋がってなかったら大惨事になるからだ。
鏡の表面近くまで手が届き、いよいよ鏡に手が接触する、と思っていたら、何の抵抗も違和感もなく、鏡の中に手が入っていった。

「おおう?!」

凄い。ちょっと面白い。
そこに手がある感覚はするのに、見た目では手が鏡に埋まっていてすっぽりと消えていた。
引き抜いてみると、ちゃんと元通りの腕がある。……うわ、ちょっと面白い。
今度は顔を入れてみる事にする。さっきよりは幾分速度は速めにして。
安全だとは一応解ったので、一刻も早く知的好奇心を満たしたかったのだ。
簡単に言うと、我慢できなかった。
そうして鏡に顔を入れて見る事のできた光景は、どう見ても私達の家だった。

「おおぉ〜!本当に繋がってるよ!」

感心し、調子に乗って両腕も入れて、上半身全てを鏡の中に入る形にしてみた。特に意味はない。
そうして、子供の様にじたばたと腕を振り回し、顔を動かしあちこち家の様子を眺めて遊んでいると

「……今このままで接続切ったら、ざっくり胴体チョンパだよな？所謂輪切り」

慌てて上半身を引っ込めた。な、なんて事言い出すんだこの人！？私には再生能力は無い！お父さんみたいに生えてくる訳無い！ずっぱり胴体持って行かれたら死ぬよ！

「し、信じられない！人を輪切りにしようとするなんて！それでも人間か！？」

「神様だな、うん」

「だからといって輪切りにして良い訳無い！」

「解ってる解ってる。冗談だ。もっと戦慄しろ」

「『気にするな』じゃ無い！？」

気遣いが欠片も無い！？それどころか責めている！Ｓか？！この男Ｓなのか！？

変態のベクトルが嫌な方向にバージョンアップしている！？色んな意味で戦慄するよ！？

……まあでも、お父さんにだったら……いいかな……？

「喜んでいる……だと？家の娘は変態か！？」

「お父さんには言われたく無いなぁ。……あ、でも、変態って言われた時ゾクゾクした」

「変態街道まっしぐら！？どうしよう八意さん！家の娘が変態になっちゃった！」

「あなたの元で育てられたんだから、仕方の無い事なんじゃないかしら？」

「ですよねー」

そう。変態のお父さんと過ごしてきたから、私が変態になってしまうのは仕方の無い事だったのだよ。ほら、誰かだって言っていたじ

ゃない。「変態は伝染する」って。

だから私が変態になるのも、最早自然の摂理と言っても差し支えないのだよ！！

「じゃ！変態の私は変態らしくさっさと家に帰って先生にあれこれする事にするよ！！」

「え？ちょ……おまっ！いや、流石に認めませんよお父さん！？同姓でちょめちょめなんてッ！」

「止めないでお父さん！私はもう、決めたんだ！」

「そんな格好いい台詞をこんな格好悪い時に使わないで！？」

私は即座にけーね先生をお父さんから奪還し、叫ぶお父さんを無視しして、鏡の中に飛び込んだ。

＝＝

「……すげぇ心配なんだけど、最後の台詞……」

鏡の中に飛び込んでいく顕冴を眺め、そう漏らしてしまった。
だって、ねぇ？心配するだろ普通。
「私はもう、決めた」って、何をですか？ナニをするって事ですか？
……慧音と顕冴の貞操がまとめてぴんち！恩人と娘の関係がぴんち！主に娘のせいで！慧音逃げてぇぇえぇぇぇ！
意識の無い人物に願うという、果てしなく無駄なような気がする行動をとってみる。
俺はこれが無駄になんかならないと思うから。だってあれじゃん？念が通じて慧音覚醒、何て事になるかもしれないじゃん？……なりませんね、すいません……。

「……で？実際の所、どうだったのかしら？」

俺達のやり取りを黙って見ていた八意さんが聞いてくる。ちなみに何故八意『さん』なのかは気にするな。本当は様付けで呼びたいぐらいなんだ。
だって恐いし。そう呼んだ方が良いかなって。そう思っているんだ。呼び捨てなんて恐れ多くて出来る訳がない。

それにしても、どう、とは、一体何の事だろうか？娘が変態になっちゃった事？……うん、泣きたい。

「……正直、泣きたいです……娘が変態になったとか……」

「……あのねぇ、そういう事ではなくてね……わざと？わざとなの？薬漬けにするわよ？」

「全然本気でありますッ！まむっ！」

「はあ……。あなた、薬漬けで精神崩壊ってあれ、本当だったのでしょう？」

というかその為に改良したんだもの。そうじゃなきゃ納得出来ないわ、とも。

もう最早それ、目的変わっちゃってるじゃないですか。治療目的じゃ無いじゃない。

先生なら、仮にも病院の先生なら、俺を精神崩壊までに追い込むその知識と技術、役に立つ事に使いましょうぜ。

……言ってて気付いたのだが、いくらこの人が優れていようと、俺にそんな事態を引き起こす何て事、出来はしないのだ。

この人は優秀といってもそこまでじゃない、とかそういう次元の話ではない。

根本的に違う。俺は精神崩壊なんて事、しないのだ。崩壊なんてしすてむ、組み込まれていない。

精神崩壊が起こるのは、脳が色々な負担、悩みや苦痛とか、『すとれす』と呼ばれるものが処理出来なくなる状態まで溜まる事が原因だ。

その点、俺はそもそも『すとれす』が溜まらない。そういう風に脳の構造が出来ていない。

そもそも脳があるのかすら怪しい。そういったれべるでの話。

だが、俺はさっきまで実際に精神崩壊を起こしていた。……のだと思う。

そこらへんは覚えていない。まあ、精神がイっちまってたんだから覚えて無くて当たり前だわな。

俺の意識がはっきりしたのは、顕冴が車椅子の前で若干涙目になってた時、つまりは俺が「嘘だ」と発言する直前だ。

あの時は、何故だか「嘘だ」と言わなければいけなかった様な気がしたのだ。

まあ、何が言いたいのかというと、つまりは『何故さっきまで精神が壊れてたのに回復したのか、そもそも何故壊れたのか』という事だ。おそらく八意さんが聞いているのもそういう事なのだろう。

この人はさっきは「そうなるように改良したのだから～」とか言っていたが、本当にそうなるとは本人も思っていなかったんだろう。

さして落胆した様子も、憤慨した様子もみられないし。

……と聞かれても、俺にもさっぱり解らんのだが。

理由も原因も思い浮かばん。いくら顕冴の能力が『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』だとしても、流石に他人の精神にまで影響を及ぼすとは思えないし……あれ？何で俺、あいつの能力知ってんだ？

そういえば、気になる事は他にもあったな。俺の記憶が飛び飛びになっているのもそうだし、妖精の件もだ。

俺の記憶は、脳がだめーじを負った程度では消えない。というか消えるようには出来ていない。先ほども言ったが、物理的に脳があるのかすら怪しいのだ。そんな古典的な物理が今更通じるとは……。

妖精の件にしたって、そうだ。いきなり妖精の力が強くなる、なんて事は普通無いのだ。

あったとしても、それは本人に自覚があるもの。しかし今回のチルノとやらは、自覚は無かったようだし。

元来妖精とは、この世界の『自然』と呼ばれるものの結晶、『自然そのもの』と呼べるものだ。

その力は『自然』に比例する。『自然』が多く、強くなれば、それだけ対応している妖精も強大な力を持つし、逆に妖精の力が弱まれば、『自然』が弱くなったという事なのだ。

勿論例外はあるが、あくまで例外だ。普通は前述の通りの存在である。

ちなみに、近代になってからは、あまり強くはなかった妖精の力は、更に弱まっている傾向にあるのだが、それは割愛。妖精の力が弱いのは、人間の意識のせい、何て話もあるくらいだから、話せば長くなる。そんなに長く語るつもりは無い。

……ああもう！気になる出来事が多すぎである。顕冴の能力の事、俺の事、妖精の事！

頭痛くなってきた。もうやだ。働きたくないでござる。と俺の頭は言っている。

「……頭抱えてないで、何か言ってごらんなさい。元々あなたの頭では解るとは思って無いのだから、せめて私に材料ぐらいは渡しなさい」

「ひでぇ！いやまあ確かにそうなんだけど！解る訳無いんだけど！？」

凄く釈然としない！なんだこの気持ち！？
……まあ、いってもどうこうなる訳もないので、俺の気になる事を話す事にする。
俺の事、妖精の事、顕冴の事。顕冴の事はこの際だから『俺の娘』という事も話しておいた。なんか薄々感づいてはいたみたいだけど、流石に未来の娘だとは思っていなかったらしく、せいぜいが一緒に住んでいる程度だと思ってたらしい。

「それにしても未来の娘……ねえ。侮れないわね幻想郷。私はてっきりあなたが無理矢理こさえたものだとばかり」

「ちょっと待とうかお医者さん。それは俺が相手の意志を無視してって言ってるのと同じ事だよな？」

「違うの？」

「全然違うよ！俺は相手の意志を無視はしないよ！真摯に受け止めて、その上で変態行為に及ぶんだよ！あの相手の意志を踏みにじる感覚が堪らないッ！」

「最低ね……」

以上が顕冴が俺の娘だとかみんぐあうとした際に繰り広げられた会話の一部である。
……うん、まあ、なんていうか……正直、スマンかった。

暫くは手を組み、片手を顎に当てるという、いかにもなぽーずで考えていた八意さんだったが、その手を顎から外し、俺の方を見て来た。ガン見である。

「……なんですか、そんなガン見して」

「……あなた、自分の身体の事でおかしいと思ったのはそれだけ？他に何か異常を感じなかった？」

「……どういう事？」

「たとえば、普段なら出来る筈の事が出来なかったとか、力とかそういう類の事よ」

言われて、そういえばと思い出した事がある。てっきり調子が悪いだけだと思って放っておいたのだが。

「……鏡無しだと、『門』を開けなかったな……」

「『門』？」

「さっきの鏡のあれですよ。空間を繋ぐってものです。本来なら鏡を使わなくても、生身のままでも行ける筈なのに……」

ここに来る時だって、いざ開こうと思ったら何も起こらず、仕方なしに水鏡を使って繋げたのだ。
幸い、どちらかに鏡があれば、もう片方は必要無いみたいだったから良かったのだが。
本来ならば、鏡など使わずに空間と空間を直接繋げられるのだが、今回はそう出来なかった。鏡を使わなければならなかったのだ。
鏡とは、ものを映すだけではなく、別の空間と繋ぐという特性もあるのだ。
よく漫画とかで、鏡に吸い込まれて別の世界に、なんて事が起こる様に、昔は鏡は他の世界に繋がっていると考えられてきた。
最近ではそうでも無くなってしまったが、今でもその名残、というか色々な形で『鏡』というものは『信仰』されている。その信仰も、殆ど無くなってしまったのだが。
まあそこは省略。つまりは鏡というのは、空間と空間を繋げる際のお助けあいてむなのだ。
有るのと無いのでは、繋げる難易度がかなり違う。まあ、俺は無くても繋げられるが。どうだ、凄いだろう？
……まあ、やった事ないと凄さは解らんと思うが。ちょっとぐらい自慢させてくれ。

そんなこんなで、どうやら俺の力は弱体化しているようだった。この場合は力だけではなく、全体的に、『存在』そのものが弱体化していると言った方が正しいか。
俺の力が弱くなっているらしい事を八意さんに話すと、やっぱり、といった表情をした。

「……恐らく、あなたの力が漏れ出しているんでしょう。あなたの力は、『世界』のものと言えるのだから。そして『自然』は、『世界』の一部とも言えるし」

「俺から漏れ出した力が『世界』を伝って、『自然』に渡った、と。それが俺の弱体化と妖精の強化の理由？」

「そして顕冴の能力の強化もね。聞いた限りじゃ、あの子も『世界』と繋がっているみたいだから。正確には『あの子の能力』が、だけど」

「漏れ出すとか……俺の力はガソリンか何かか……？」

まあ、あながち『ガソリン』という例えも間違いではない。
ここにおける、『世界』と『自然』の間でやり取りされている『力』というのは、そういうものなのだ。
質が違う、とかそういうものじゃなく、只単なるえねるぎー。
要は純水である。そして『世界』や『自然』、俺や妖精は純水を原動力に動く機械。
純水には、質も何も無いのだから。
ちなみにあくまでコレは物理に詳しくない俺の意見である。純水について間違ってても責任は取れん。あしからず。

だが、『理由』は解っても、肝心の『原因』が解っていない。
自転車を漕いでも漕いでも進まないのは、ちぇーんが外れているから。という理由が解っても、何故ちぇーんが外れているのか、という原因が解らないのと同じである。
端的に言うと、気持ち悪い。めっちゃ気持ち悪い。

そこのところも、どうやら八意さんは当たりを付けているらしい。
だが、聞いても「まだ教えられない」との事。何でも医者なのだから、確定できない事は話せない、そんな無責任な事はできない、だと。変な所で律儀というか、そんな事で律儀になるのなら俺に対する対応とかどうにかして欲しいと思わなくもない。
そんな俺の様子を察したのか、八意さんは笑顔で

「心配しなくても良いわよ。大丈夫」

「八意さん……！」

「放っておいても、特に不都合は無いと思うし」

「ありまくるよ！俺どころか世界規模で危機だよ！」

「そうかしら？別にそこまでじゃ無いと思うわよ？」

だって！このまま行くと妖精に俺の力が全て行き渡ってさあ大変……あれ？別にそんな事ない気がしてきたぞ？
俺の力の総量はそれなりに大きいとはいえ、紫に及ぶかどうか、恐らく及ばない程度のものだ。
それだけでも圧倒的では無いというのに、『世界』は恐らく、一点集中するのではなく、ほぼ全ての『自然』に振り分けるのだと思うし、総合的に見れば確かに強くはなっているのだとしても、『個』という面で見れば大したことじゃないのだろう。紫や幽香さん、八意さんなどの強大な力を持つ者達にとっては。

だが。だがしかしだ。それって、全ての力が『世界』に渡ったら、俺消滅。じゃねえか？

「それでもだよ！それじゃ俺消えちゃうじゃん！」

「良いじゃない。世間にとっては。こんな変態居てもねぇ……何？嫌なの？」

「嫌に決まってるよ！というかさっきから酷い言いぐさですね！？」

「だって、特に役に立たないのは事実じゃない？」

「俺だって役には立ってる……と、思いたい。……役に立ってると良いなぁ」

後半だんだん自信無くなってきた。だって俺だもん。むしろ邪魔というか害悪と言われる方が納得できてしまう。

そんな俺を見て、八意さんは溜息を吐いた。……いかん、泣きそう。

「そんなに言うのなら、役に立つと証明してみなさい。……そんなに、言えてなかった気もするけど」

そう言って、ついてきなさい、と、部屋の外に出て行った。……これって、絶対に厄介事押し付けられるとしか思えないんだが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そうして俺が連れてこられたのは襖の前。どうやら個室。
この中にいる人物を外に出してみなさい、との事。……やっぱり厄介事じゃねえか。
しかも引き籠もりの説得って。絶対にお手上げ状態だから押し付けただけだよねえ？家庭の事情に俺を巻き込まないでくれる？！

「さあ、八咫鏡よ！『姫様（あまてらす）』を『部屋の中（あまのいわと）』から連れ出しなさい！あなたはその為に創られた！！」

てんしょん高ぇ。すげぇ。こんなてんぱっている八意さん初めて見た。
よっぽど姫様とやらに手を焼いているらしい。日頃溜まっているすとれすやら何やらが放出しているような気さえする。
変な『るび』まで振る始末。この人にそこまで言わせる姫様ってどんな人物か興味が湧いた。
俺の知り合いにも引き籠もりはいるが、あれは何というかまあ、仕方ないというか、放っておいても死なないので、害は無いというか。

そんな事は置いといて、だ。まあ、こんな楽しそうな、やっと部屋から出せると嬉しそうになっている人の気を削ぐ事になると思うと若干アレだが、言わなければなるまい。

「なあなあ八意さんや？」

「何よ」

むすっと頬を膨らませ、如何にも不機嫌ですと言っているような表情だ。どうやら自分の世界に入っている事を邪魔されたからご機嫌斜めらしい。……子供？

「天の岩戸から出すには、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）も、太鼓も、裸の踊り子も、神々もいないんだが。俺一人では無理なんだが」

「あ……」

その言葉を聞き、ずーん、と床に沈み込む八意さん。…変なところで抜けている。天然？

というか、本気で俺を使って姫様とやらを部屋から出すつもりだったのか。なんだかお茶目さんである。

子供っぽいとか若干天然とか、今後この人の印象について若干補正する必要がある様だ。

というか、流石に忍びなくなってきた。いや、俺は悪くないんだけれども。こんなに落ち込まれちゃあ、ねえ？
落ち込んでいる八意さんの前に立ち、大きな声で尋ねる。

「方法は、なんでも良いんだな？」

「……？はい？」

「だから、部屋から出せれば、どんな方法を使っても良いのか、と聞いている」

「……え、ええ。ある程度は」

「じゃあ、あんな事やこんな事でも？」

これには流石に怒りそうになった八意さんだが、俺がおどけてうぃんくなぞすると、どうやら意図に気付いたらしく、にやり、と意地の悪い顔をして

「ええ。構わないわ。そろそろお灸を据えなければと思っていた所ですし」

と、部屋の中にも聞こえる様な大声で、宣言した。
部屋の中から何やらどたどたと物音がする。まさか許可されるとは思っていなかったんだろう。相当焦っているようである。

「聞こえたか～？姫様とやら！今から十秒以内に部屋から出てこないと、あんな事やこんな事しちゃうぞ～！じゃあじゅーーーう、きゅーーーう」

いきなり数を数えられて動揺したのか、物音が更に大きくなり、すぐさま止んだ。
どうやら部屋を出て八意さんに説教される事に心の準備をしている様である。だが！

「はーーーち、なな！ろく！ご！４！３！２！１！０！はい終了！！」

かうんとの感覚を縮め、心の準備など出来ないぐらいの速さで０にする。これにも驚いたのか、これまでよりも更に大きな物音を立てている。

そして俺は返事など待たず、聞かずに襖を開ける。そうして見えた光景は、

あたりに散らばったお菓子の袋、そしてその中身、そのほか乱雑に置かれた漫画や服、そしてげーむのぱっけーじ。もうこの時点でとてもじゃないが女性の部屋だとは思えない。まるで独身男性のそれだ。

そして最も気になったのは、どうみても電気で動く炬燵に、相当な大きさの薄型てれび、そして何台ものぱそこん。……何だこの現代人顔負けの設備の充実っぷり。ここは本当に幻想郷か。

電気がある、とは聞いたけれど、此所まで浪費できるとは。照明もつけっぱなしだし。しかもどうやら『えあこん』まで効いてるし。

この部屋の惨状を見て、そのありさまを一言で表すのならば

「これはひどい」

どうみてもヒッキーです。ほんとうにありがとうございました。

そしてそのヒッキー当人はというと、部屋の中心でこちらに背を向け何やら踊っていた。

……まあ、ただ単純に慌ててしまい、てんやわんやになっただけだと思うが。決してウマウマしていた訳では……無い……？あ、いや。そうかもれん。ぱそこんの画面の一つに、何やらぬるぬる動く動画がある。両腕は頭に、腰を振っているものが。

静寂。まるで空気が質量を持ち、固まったかの様に静かである。

そして件のヒッキー改め姫様は、気まずさからか顔を中々見せられないようで、しかしろぼっとのようにぎぎぎっ、と聞こえる様なぎ

こちなさながらも、ゆっくりと振り向いた。

「……見た？」

振り向いたその女性は、驚くほどの美人だった。おそらくは長い時を生きた俺が見て来た、様々な美人の中でも、一、二を争う程の美人さんだった。

絶世の、やら傾国の、などという言葉は、この人の為にあるのだと確信が持てるくらい、美人なんて言葉が生温く感じる程だった。

だが。何故か俺は興奮しなかった。

余りの美しさに、そういう邪念を超越した、とは思えない。俺はそんな素晴らしい価値観というか、そんな感じに収まる男じゃない。ならば格好が滑稽で、とてもじゃないが興奮できない、という訳でも無い。

元々俺は格好など気分によって左右などされないし、そういう俺の性癖を抜いても、この女性は誰でも興奮するのだろうと思わせる、それほど凄まじい美人だった。それこそ興奮しなければあっち系の奴だというぐらいに。

「……ねえ、私は『見たのか？』、と聞いている訳だけど」

俺が自分の事に戸惑っていると、無視されたのかと考えた目の前の女性は、少し怒ったような口調で再び問いかけてきた。
……いかんな、戸惑い過ぎて女性の事すっかり忘れてしまっていた。
こんな美人さんの事を一瞬とはいえ意識から締め出してしまうなど……どうしたんだ?俺。

というか何やら怒られてしまいそうだったので、何か答える事にする。
しかし「見たのか?」とは、何をだろう?
踊っている所、といえば、ある意味では見たのだが、ウマウマ的な意味では見れていない。
俺が見たのは只慌てふためいて『踊っている様な』姿だったし。ウマウマの原型は無かった。
それ以外にも、別にやましいものも見なかったし。えろげの画面を見る訳でもなく。ぎゃるげ、乙女げーの類も見ていない。
……これは、客観的に見なくても、『何も見ていない』、という事だろうか?

「いや?残念ながらこれといった事は見ていないな。残念ながら」

「嘘よ!絶対見た!」

「だから見てないと……」

「見た!絶ッッッッ体見た!!」

いやだから見てないっちゅーに。何？見て欲しかったの？
それとも何？「見た」とでも言って欲しかったの？言ったとしても
何なの？そういういいべんと待ち？
謝罪が欲しいの？何なの？何がしたいの？何がされたいの？
混乱するような出来事が続いたせいで、なんだかイライラする。普
段なら微笑ましいと思う美人さんの態度も、今は鬱陶しく感じてし
まう。

だが、だ。流石にそのイライラを女性にぶつけたらいかんと思うわ
けですよおじさんは。
なので笑顔でいこう。笑顔が一番である。合い言葉はらぶあんどぴ
ーす。

「お嬢ちゃん」

「ッ！……何？」

突然笑顔になり、向けられる言葉も意に介さずに語りかける俺に、
多少怯みながらも睨み付けてくる。ああもう。何で睨むかなぁ。

「痛いのと気持ち良いの、どっちが良い？」

「は？そんなの勿論、気持ち良いのに決まって……っ！」

どうやら俺が部屋に入る前に言っていた「あんな事やこんな事」というのを思い出したらしい。まあ、今となっては何故だか気分では無いのでする気は更々無いのだが、この女性は本気でやられる、と思ったらしく、いきなり弾を撃ってきた。弾と言っても銃のではなく『弾幕ごっこ』のものだが。

顔面に直撃。頭が吹き飛ぶ程の威力で、実際に跡形もなく吹き飛んだ。女性は危機が去った事に安堵した様子だったが、すぐさま驚愕の表情を浮かべた。まあ、吹き飛んだ頭が再生されたらそうなるか。知っての通り俺には無意味である。死なないからな。……再生の速度も、幾分か遅くなっているようだが、これも弱体化した影響だろうか？それでも十分早いのだが。

「ひどいなぁ。いきなりこんな事するなんて」

「……あなたも、不死？驚いた、妹紅意外にも不死の人間が居たなんて……」

『も』？それはその妹紅という人物が不死だからだろうか、それとも自身も不死だという事だろうか？

まあどちらでもいいのである。要はこの女性を外に出せばいいのだから。適当に脅しでもかけるか。

「さあお嬢ちゃん？これで無駄だって解っただろう？だったら大人しく……おじさんと良い事しようかぁぁあぁぁあぁぁぁ！」

言いながら襲いかかる。あくまで飛びかかりはしない。それだと女性が逃げられなくなるからな。

女性は、攻撃しても無駄、この部屋の中に居れば逃げ場がないと考えたのか、俺をいなして部屋の外へ出た。成る程、馬鹿ではないらしい。が。

女性は俺を見て走って飛び出したので、前あった『もの』にぶつかった。「きゃっ」とまあ随分と可愛らしい声を上げながら、俺から目を離し、自分がぶつかった『もの』を確認しようとして前を向くと

「……お久し振りですね、姫様」

何やら凄い笑顔の八意さんが、そこに居た。

女性がだらだらと汗をかいている。顔は見えないが、多分凄い事になっているんだろう。

「え、ええ、そうね……久し振りね、永琳？」

辛うじて引き出したその声は、震えていた。

「ええ。では……」

そう言って、八意さんはその笑顔を更に笑顔になった。何を言っているのか解らないと思うが、そうとしか言えない。笑顔なのに恐い。良く解らない矛盾した表情だ。

遠くから第三者の目で見ても恐いのに、間近で、更に直接その笑顔を見る女性は、そうとう恐怖を感じているだろう。俺だったら気絶してる。

そして八意さんは、その美しい唇で、さながら死刑宣告のように、無慈悲で無感動な言葉を紡いだ。

「少し頭を、冷やしましょう？」

「ひっ……」

あ、悪魔だ……！悪魔がここに居るよ！？

本家本元の白い悪魔と同等、或いはそれ以上に恐ろしい！笑顔なのに！

女性は服の襟を掴まれ、ずるずると引き摺られていく。なんか子牛が連れられていく歌が聞こえた気がするが、気にしない。
女性が縋るようにこちらに手を伸ばしているが、俺にどうしろと？
俺はまだ生きていたい。当然の如く顔を逸らす。裏切り者ぉぉ！とか聞こえてきたが、組んだ覚えはない。

「……生きてるって、素晴らしい……！」

俺は一人、生きる事の大切さを噛み締めていた。

女性は俺から見えない所まで引き摺られて行き、更に暫く時間が経っても、特に何も無かったので疑問に思い、引き摺られた方に向かって見ると、そこには二人の姿は無く、近くの部屋の扉が開いていた。

……見たい。
どう考えても悲劇しか無いと解っていても、見たいものは見たいのだ。
ああ！だが！この部屋の中には多分、恐らく、十中八九悲惨な光景しか無い！

「……ごくり」

唾を飲み込む。……見よう。幾ら何でも、あの八意さんといえども、姫様と呼んでいた人物にそう非道な事はしない筈だからな。大丈夫、うん。それにアレな光景が無いとは言い切れないし……。
はやる気持ちと恐怖、好奇心など、様々な感情が綯い交ぜになりながらも、恐る恐る部屋の中に顔だけ入れて覗いてみる。
そこに広がっていたのは？？？？？

＝＝

「俺は何も見ていない。何も見ていない………」
「ぅん……ふぁっ………あ………」
「そうだよ。あれはきっと幻だよ。或いは何かのもにたーてきな何かだよ………」
「ひぃあっ………ぁ…………ッ！」
「だから、うん。そう。そうだよ…………」
「やっ………ぁあ……んっ……！ふあぁぁ………っ！」
何やら部屋の片隅で、そこらを歩いていたうさ耳付いた妖怪ふん捕

まえ、膝の上に乗せて撫で回しながら、現実逃避している俺の姿が、
そこにはあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝

暫くして。
何とか復帰した俺の近くには、うさ耳美少女が息を荒くして蹲っていた。
……大丈夫か、これ……？
何で息荒いのかは知らないが、何やら辛そうではなく、嬉しさすら滲んでいるようなので放っておく。今日は、色々あった日だったなぁ。
妖精の件、顕牙の件、俺の能力の件、そして最後に引き籠もりの……っ！
駄目だ。思い出しただけで寒気がする。もう忘れたい。俺の記憶、ここだけ飛んでくれねぇかなぁ………。

引き籠もりで思い出した。実は俺の知っている奴にも引き籠もりが居るのだ。
そいつが居るのは、何を隠そう俺の家。
俺の家には、誰も開けない『開かずの間』があるのだ。まあ、住人が俺と顕牙の二人だけ、しかも来客は滅多に来ないので、開けないっちゃ開けない訳だが。
その『開かずの間』の中に、もうかれこれ五百年は外に出ていない奴が居る。
最後に顔見たのは………百年程前か？少なくとも何時見たのが最後か思い出せないくらい見ていないという事だ。
そろそろ久し振りに、会ってみるか……顕牙の事も教えなきゃなら

んし、俺の事も話しておかないとな。多分大丈夫だとは思うが、何かあったら困るし。
というか、今迄忘れてたって、どうなの？俺？
ああ、またとやかく言われたり、面倒な事になるのかなぁ、と憂鬱な気分になってきたので。

「よっ……っと」

「あっ……！ひ、ひゃぁぁ……！！」

うさ耳美少女を抱き上げる。とりあえずは撫で回して、元気だそうと思いました、まる。

十節目（後書き）

恐らく初めての本文解説になりまする。
今回の中で九十九が色々言っていましたが、嘘科学です。
実際の科学では御座いませんので、その辺りをご注意ください。
それと独自解釈、設定のオンパレード。このＳＳは、公式様の設定とは異なりますので、ご注意を。

今回は割とネタ多めでいきましたが、ネタになっていないという筆者の駄目っぷり。こんなものを見てくれている人々に感謝を。
前書きのあれは、おそらく殆どの人が知っていると思われる、超有名大作ＲＰＧの7作目のあれのパロディ。
後半の「少し……」のえーりんの台詞も、ご存じ魔砲…じゃなかった。リリカルな魔法少女の主人公のあれ。あれはテレビ版では衝撃でした。色々な意味で。

最後に撫で回されているうさ耳美少女とは誰か？それは皆様の自由な発想に任せます。筆者の想像ではブレザーの方。
あと、エロくはありません。ただ撫でてるだけです。動物的な感じで。
エロいと感じるのは、そう感じる人がエロいからです。
……本当に、エロくはないんですけどね？書けませんから。

十一節目（前書き）

※注意！今回の前書きは本編とは関係ありません。

さて、今俺は見張りをしている。
外から来た人間を発見するってアレだ。
いつもなら特に準備はいらないんだが、俺の力は弱体化している。
何も無い状態で、外へ返す為の『門』を開くのは難しい。というか今は開けない。
ので今回は、鏡を持参している。ちなみに手鏡だ。身鏡とかはデカ過ぎて運び辛いからな。
大きさはあまり関係ないのだ。あくまで鏡は繋げやすくする為のものだから。まあ、何も工夫しなければ鏡の大きさ分だけしか『門』も開かないんだが。
そこは変態くおりてぃ。その『門』は広げる事は出来ます。
だから今迄通りに仕事する分には問題ないので、手鏡片手に見回りしているのだ。
……端から見ると変な人物Aだが、仕方無い。平和の為である。

そうして森の中で、俺は珍しく倒れている人と思わしきものを発見した。
いや、妖怪の可能性も捨てきれないし。倒れているのが人間とは限らないのだ。
妖怪の中には、そうやって油断させて襲いかかる妖怪も居るんだからな。注意しろよ。

その件の人物だが、格好は白一色。所々金色の装飾があるものの、白を基調とした服である。

格好だけでは判別しにくいが、西洋の服なので、外来人の可能性が高い。
この幻想郷には、西洋、あるいはそれっぽい服を着ている人物はわりと少ないからな。
そして今ざっと調べたが、どうやら人間のようである。ちなみに少女。……調べたっていっても、あれだからな？ぼでぃちぇっくじゃ無いからな！？
ただ気配を探っただけだからな！？触ってないぞ！？本当だぞ！？
……ん？あれ？この少女、どっかで見たような……
いや、直接の面識がある訳じゃない。何か、こんな格好したきゃらを本で見たような……
確か……イン……イン……？イン何だっけ……？インペリアルドラモンさん？
そうそう、確かそんな感じの名前の。ラノベのきゃらだ。ああ、思い出したらスッキリした。
……おぉぉぉおおおぉぉお！！？？え？なんで？！
いやいやいやいや！？流石にふりーだむ過ぎるだろ幻想郷！！幾ら何でも想像上の人物引き込むとか？！

……これって、もしかして、顕冴の仕業？
実は、俺の家にあるんだ。「とある魔術」しりーず。
何であるのかは、あれだ。趣味だ。外の世界に行って買って来ているのだ。
いやだって面白いし。上条さんマジぱねぇっす。
……あれ？俺が外の世界に自由に行けるって、言って無かったっけ？あは、メンゴメンゴ。
まあ、この前のハンバーグの材料のミンチ、アレも外から買って来たものだ。別に人肉が材料って訳じゃないんだぜ？
で、何だっけ？ああ、そうそう。で、俺の家にそこらに普通に置い

てあるもんだから、顕冴が興味を持って読んでも不思議ではない。しかもあの娘は若干アホだから、『この本に書かれている事は、本当かもしれない』と思ってしまっても、不思議ではないのだ。顕冴の能力は『あらゆる可能性を掴み取る程度の能力』だ。言い換えれば、『思い込みを現実にしてしまう程度の能力』とも言えなくは無いのだ。

……これからは、そういう本は、隠しておこうと思いました。……何だ、この小さい子供が呑み込まないように小さいおもちゃは隠しておこう的な親の思考。

「とりあえずは、この子にはどこか遠い世界で幸せになって貰おう……」

そうして俺は『門』を開き範囲を広げ、そのインなんとかさんを元の世界と思われる所に送還した。

十一節目

翌日だ。翌日である。つまりは次の日。
そう、色々あって翌日になってしまった。いや、全然色々ではなく、むしろ単純な事しかやっていないのだが。
何をしていたのか、それは前話の最後の行動をずっと繰り返していた、だ。
その至福とも言える行動の途中、撫でているうさ耳美少女とは方向性が百八十度違うが、やっぱり美少女なうさ耳がのこのことやって来たので、そいつも巻き込み纏めて撫でておいた。
そして二人（？）を撫でるのに夢中になってて、気が付けば朝だった。
そして何やらつやつやした八意さんがきたから走って逃げて。
昨日のあの部屋であった出来事は、それ程までに凄まじかったのだ。
どれほど凄まじいのかは、もう思い出したく無いです……。って程に。

そんなこんなで、朝帰りになってしまった。「ゆうべはおたのしみでしたね」と言われても反論できん。楽しかった事には変わり無いのだし。
でもアレだよ？しつこく言ってるけど、撫でてるだけだからね？えちぃ事はしてないからね？

何かに言い訳しながら、俺は我が家の玄関の扉に手を掛ける。
ふと思い出す。……そういえば、顕冴達は結局どうなったのだろうか？慧音と顕冴の貞操、無事だろうか？いや、慧音が『初めて』なのかどうかは知らないが、少なくとも顕冴は『初めて』の筈。……
八年前より以前にあいつが経験していなければ、だが。

ちなみに慧音の貞操を心配している事に他意は無いから。娘に『初めて』が……ってな事になったら、どうやっても責任とれないから。いくら顕冴がいい歳だっていっても、俺の子供なのだから、子供の責任は親の俺がとらなければな。……何だ、この親馬鹿思考。こんな考えの親ばかりだから、子供が何時まで経っても子供のままなんだよ！

現実逃避終了。あ～……やべ、開けたけねぇ…。このまま知らない方が良い気がする。

だけど、これ開けなかったら、気が気でなくて、多分寝れなくなるなぁ。もう心配で心配で。俺は元々睡眠なんて取ってないんだけどな。

……娘によって、女性の貞操が奪われてしまうかもしれないって心配しなければいけないって、どうなの？

変態を家族に持つ故の悩み……か。……これからは、自重しようかな……。

まあ、当然の如く自重はしても、行動に移さないかどうかは別問題なんだけども。

とにかく、開けようか。開けない事には何も始まらない。…開けたくないが。

覚悟を決めて、思いっきり扉を引いた。俺の家は、玄関からすぐの所に寝室が見える造りだから、二人が寝室で寝ているなら、確認出来る筈。

そして実際に、寝室に二人は居た。肝心の二人の様子はというと……

「うぅ……お父さぁん……私、綺麗じゃ無くなっちゃったよぅ……
……」

「ふう……顕冴、なかなか良かったぞ？」

「まさかの逆ぱたーん？！」

娘の方が、枕を濡らしていました。……詳しい描写は省く。というか部屋の中は暗くて良く見えないから、描写のしようが無いんだが。アレな臭いはする。栗の花っぽい臭いが。
濡れているのは、娘の枕だけでは無いんだろうが……おっと失礼。それはそれとして。この場で言う事は、やはりアレしか無いだろう。

「ゆうべはおたのしみでしたね」

「おや、九十九。顕冴の具合だが、中々良かったぞ？」

「！？お、お父さん！？み、見ないでぇぇ……」

俺に顔を見られまいと伏せる顕冴。中々ガチで泣いているようである。
慧音は、何かやりきったような表情だ。
……これで服着てなかったり、慧音の顔が赤くなかったら百点なんだがなぁ……

「さて、これ誰発案？」

「……何の事だ？」

「このたちの悪い演技のだよ。女同士なら栗の花の臭いはしない」

「え？こういう事って、そういう臭いがするもんじゃないの？」

泣いていた筈の顕冴はけろっとした顔して聞いてくる。質問してくる辺りもう演技だと認めている様なものじゃないか。

ちなみに見抜けた理由は簡単。初すぎだ。

多分顕冴はどこからか「そういう行為の後の臭いは栗の花の臭いに似ている」という事を聞いたのだろう。わざわざ栗の花なんてもの持って来て、臭いを再現して。（ちなみに花は玄関の近くに置いてあった。隠さないとか、詰めが甘いと思う）

そこまでして俺に悪戯したいか。だが残念ながらそれは男がそういう行為をした場合である。女同士ではよっぽどの事では無いと栗の花の臭いはしない。

慧音、何故止めなかった。それくらいは知っているだろうに。そこからばれるとは思わなかったのだろうか。

……まさか、まさかとは思うが、知らなかった？だとしたらどんだけそっち方面に疎いんだ。

まったく、今は季節ではないというに、どこから栗の花なんぞ持って来たのやら。

……なんか、激しく嫌な予感がする。具体的には幽香さんが絡んできそう。鬱だ生きよう。

だが実際、慧音の方は演技は中々、というか一瞬本当かと疑ってしまう程に完璧に様になっていた。……のだが、自分で言った言葉で真っ赤になるのはなぁ。残念。

「お前は本当に耳年増ですね。これから手取り足取り場合によっては腰を取ってみっちりじっくりねっとりと正しい保健体育を実習めいんで教えてやろう」

「お……お父さんが直接……？」

「そりゃお前当たり前だろう？何？嫌なら後腐れないようにどっか別の野郎紹介するけど？」

「い、嫌だ！お父さんが良い！」

「そうか、では……」

「そ、それは認められないぞ！先生として！いや人間として！！」

つまり話半分ってことですね、わかります。

「ちなみに特別講師として、みんな大好き慧音先生の参加も予定し

ています」

「聞け！というか私まで組み込まれた？！」

「先生には、週二回の授業の内の二回とも参加して貰う事に決定しました～！」

「回数が妙に具体的だ！？それに定員？！しかも何時の間にか決定事項に？！」

「毎週金・土曜日の二日間、場所は俺の家の地下室で～す」

「二日間寝かせない気か！日曜に休ませる所がまた生々しいぞ！」

「しかも地下室？！逃がす積もりも無い！？そもそも家に地下室なんてあったっけ？！」

「というかお前ら、参加する事前提なのな」

「「う……いや……」」

二人揃って初である。何だこの絶滅危惧種。今時珍しい通り越してちょっとあれだぞ？

ちなみに授業云々は勿論嘘である。そんな事出来る訳無い。人間関係とか顕冴の事情的な意味で。……顕冴の事情って、何だ……？

あとへたれとか言うな。

で？何で二人とも俺が「冗談だ」って言ったらちょっと残念そうな

の？そういうの、勘違いさせるから止めなさい。

さて、とりあえずは悪戯の仕返しも出来たし、そろそろ……「あ、ちょっと待った」……何さ？

俺が次の予定に移ろうとした時、顕冴が何か思い出したようにいきなり俺を呼び止めた。

「忘れてた。ゆうべはおたのしみでしたね。で、何してたの？」

ちっ。覚えていやがったか。せっかく有耶無耶にしようと思ったのに……。

まあ、話してしまうと拙い事、というのは無いんだが……面倒だなぁ。

「お前が言うな」

とりあえずは、話題を逸らす事にした。……もう失敗した気がするが。

案の定、顕冴は「ふふん。」と胸を張って鼻で笑う。そんな格好、胸が強調されてはしたないから止めなさ……いや、いいぞ！もっとやれ！

「はぐらかそうと思ってもそうはいかないよ！まあ、楽しかったのは否定しないけどね！」

「……何やったの、お前ら」

「一緒にお風呂入ったり、体洗いっこしたり。あとは布団に入って恋ばな」

「修学旅行か」

まんま修学旅行のお約束のソレである。まあ、洗いっこは珍しいか……。少なくとも、野郎はそんな事しない。

恋ばなについては、お父さん激しく気になりますが、今更感もする。やっとか、という思いの方が強い。

というか恋って慧音もか。それは友人Ａとしては複雑だが、そちらもやっとか、と思ってしまった。

二人ともういい歳なんだし、そろそろ浮ついた話の一つや二つ…

…あれ？おかしいな、何だか寒気が……？

「で？お父さんは？」

「企業秘密だ。ってか、お前慧音の前なのに、俺の事『お父さん』って呼んで良いの？」

「……何言ってるのお父さん。もう話したって言ったじゃない」

眉間にしわ寄せて、顕冴はそう言ってくる。話されてたのか。
こちとら記憶が若干無くなっているのである。その無くなっている記憶の期間のうちに、その『話した』という事が話されたのであろう。迂闊。適当に流せば良かった。

「ああ、いやすまん。すっかり忘れてしまってた」

「……また？お父さん、もしかしてボケたんじゃないの？」

「まだそんなことは無い！……と思う。多分」

「自信無さげだね。心当たりがあるとか？」

「まあ、無くは無い事も無い」

「どっちなのさ」

「さて？どっちだったか」

適当にはぐらかす。『ぼけ』だったら大変だが、記憶喪失だとばれる方が大変…というか面倒な事になる気がする。特に慧音のおせっかいが発動しそうです。

有り難いんだが、ねぇ……？
そして何とか昨晩の事もはぐらかす事に成功？？？

「で？昨日の夜は何してたの？」

？？してなかった。というかどんだけ気になってんの？

「だから企業秘密だって言ってるだろ？」

「企業って、どこの何なのさ」

「『動植物を保護する会（株）』」

「全然秘密でも何でも無くなってる？！というか会なのに（株）！？」

「ちなみにこれは世を忍ぶ為の仮の姿。本当の名前は『全世界を征服する為の秘密組織（株）』だ！！」

「やっぱり秘密じゃ無くなってるし株だ！！でもなんかカッコイイ！！」

なん……だと…？かっこいい…だと？
前々から思っていたが、こいつ、精神年齢低いんじゃないか？
というか普通は低くても、悪の組織には憧れないだろう。

「お前……ちなみに世の中には『震天烈空斬光旋〇滅砕神罰割殺撃』なんて技もあるんだが……」

「何そのカッコイイ技名！？習得したい！！」

こいつの感性が、激しく気になった。
いやまあこれは格好良いとは思うけど。いくらなんでも習得まではなぁ？
ちなみに秘奥義なので、習得は出来ないと思う。

「あ、というかお前禁書目録読んだだろ」

「さ、さあ？ナンノコトヤラ～」

嘘が下手である。口笛吹きやがって。というか口笛上手ぇ。何故口笛で連弾が再現できる。
口笛上達させる暇があったら嘘をもっと練習しようぜ。世の中、本当の事だけでは生き抜いていけないよ？俺は自分に嘘はつかないけ

ど。

「で、あれ誰だっけ？イン……イン……イントロダクションさん？」

「インデックスさん！」

「読んでるじゃねえか」

「はっ！しまった！誘導尋問なんて卑怯だよ！」

「引っかかるお前に驚いたわ。まあ、特に怒るつもりは無いから安心しろ」

「……じゃあ、何で？」

「いや、ただあれはふぃくしょんだからな？実際には存在しないからな？」

「わ、解ってるよ！……ちょっと、現実にあったら面白そうだなぁとは思ったけど」

「……お前、間違っても『幻想殺し』の事は考えるんじゃないぞ」

「……なんで？」

「この『幻想郷』がぶち壊される」

「……お父さん、フィクションだよね？」

「幻想が現実になる。それが幻想郷くおりてぃ」

「……それと私に何の関係が？」

「まあ、心に留めておいてくれ」

ようし！これで流石にはぐらかせたろう！安心安心。
俺がはぐらかせられたと思い油断していると、今迄黙って聞いていた慧音が俺の胸倉を掴んで

「さて、もう良いかな？良いよな？駄目だと言ってもやるが」

「一体なにおぷァ！！」

思いっきり頭突きをかまされた。すげぇ痛ぇ！思わず鼻を押さえうずくまる。涙が出てきそう！……あ、鼻血が出て来た。
涙は流れないけど血が流れた。勿論血はすぐに止まったが。
そして頭突きかました慧音は笑顔。凄ぇ気持ち良さそうである。まるで会心の一撃が決まったみたいな清々しさだ。
そしてその笑顔のまま、鼻を押さえている俺に質問を投げかけてくる。

「で？昨晩は何をやってたんだ？正直に話せ、今なら怒らないから」

「いやもう頭突きかま「ん？何か言ったか？」……いえ、何でもありません」

恐いよ。何でそんなにカリカリしてんのさ。カリカリするのは梅だけで十分である。

怒らないって、もう怒ってんじゃん。笑顔だけど。

でも隠せてないよむしろ恐いよ。おーらが滲み出てるよ。

……解った解りました！だからそんなに睨まないでおくれゾクゾクするから。

「動物愛（つぱいの）でてました！」

「それだけか？」

「気が付けば夜が明けていた……恐るべしうさぎの魔力」

「そうか……」

「（うさぎ……あれ？それって……）」

正直に話すと納得してくれた模様。怒らないって、本当だったんだね。

まあ、それだけに本当の事を言って無い事が気に病まれるが。

だっていくら俺にその気が無いって言っても、第三者の目で見ればアレは犯罪以外のなにものでもないからなぁ……誤解は確実である。

だが、慧音は気付いていないようだが、顕冴は何かに気付いたようだ。

俺が『永遠亭』に居た、という事は知っているのだし、もしかしたらうさ耳美少女の事も知っているのかもしれない。あとで口止めしておこう。

そしてなんとか納得出来たらしい慧音は、

「ああ、そうそう九十九？」

「ん？まだ何か？」

「人間、怒らずとも殴れはするよな？」

そう言って、俺が突っ込みを入れる前にまたしても頭突きをかましてくれやがった。

今度はなんかごきっ、と音がしたが、慧音の方ではなく俺の身体から聞こえたので、問題は特に無いと思われる。

倒れ込む俺。そして笑顔の慧音。それで良いのか教師。それで良いのか人里の守護者。

そのりくつはおかしい。しかも「殴れはするよな」と聞いておきながらまさかの間髪入れずの頭突き。これは酷い。
非道と言っても良いだろう。ほら、見てご覧よ、慧音大好きの顕冴でさえ「え～～……」って顔して……いない！？
「いいぞ、もっとやれ！」という感じに満面の笑みでしゃどーぼくしんぐなぞしてやがる。何故にしゃどー？

……今更だけど、『頭突き』って結構危なくね？顔の位置的な意味で。
そのままキス出来そうなぐらい近付くんだぜ？女性としては良いのかそれ？
……普通は、キスする前に頭突きで気絶しますね。だが、何とかして出来ないものか……。自分の顔の位置をずらす、とか？でもそれだと勢いがあって痛いか……。
そう考えてみると、漫画とかで良くあるらっきーすけべのキス、あれって結構痛いし危ないんじゃないか？

……ちなみに俺のこの思考、常人で言う所の『走馬燈』に位置するものである。故に結構な速さで考え事が出来るのだ。……俺の身体って、脳味噌無いんじゃなかったっけ？
『走馬燈』って、一種のふらっしゅばっくじゃないの？それって脳が無くても起こるの？
だが答えは返ってこない。何故なら普通は脳が無ければ生きていないから。

ちなみに『走馬燈』、という言葉で気付いたかと思うが、俺、何気に死にそうである。
というか死ぬ直前。マジで殺される五秒前だ。略してＭＫ５。
まあ、死にはしないから、せいぜい気絶五秒前ってとこか。

そうして宣言通りにきっちり五秒後、俺の意識は薄れて、闇に沈んだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あ、お父さんが死んだ。いや気絶しただけだけど。
不死のお父さんが気絶する、それはつまりは常人なら死に至る傷を負ったか、衝撃を受けたかのどちらかという事だ。
人を殺せる頭突きを放てるけーね先生に軽く恐怖を覚えた。だが、今更である。
この幻想郷では、恐怖を抱かない事の方が珍しいのだ。
そういう意味では、お父さんは一番親しみやすいのかもしれない。
お父さんの場合は恐怖よりも羞恥とか怒りとか、とにかく『恐い』とは無縁の感情しか浮かばないのだ。
一番浮かぶ感情は『殺意』らしいけど。十人中八人がそう答えた。
人間、『わからないもの』に、一番恐怖を抱きやすいらしい。具体例が『八雲　紫』か。あの何を考えてるのかさっぱりわからない笑みといい、何かこう、根源的にくるものがあった。……お父さんの行動に、笑い転げるという事を紫がやった時、その感想も吹き飛んでしまったが。
『わからないもの』に恐怖を覚えるのだとしたら、恐怖をまったく感じないお父さんは『わかりやすい』という事だろうか？欲望に忠実って意味で。
力は強い筈なのに、恐怖を覚えられない事は、はたして良いのか悪いのか。ちなみに『殺意を覚えた』八人が、『殺意』の次に浮かびやすい感情は『気持ち悪い』。

真っ黒な格好と、そのしぶとさから『黒光りするアレ』を思い浮かべるから、らしい。八人全員がそう答えた。……まあ、気持ちは解らない事も無い。

そんな事を考えているせいか、何か、背筋にくるというか、中に何か入り込んでくる感覚が……ひいぃぃぃぃぃ！！

「うひゃぁぁぁああ！」

「ど、どうした顕冴？」

「な、なんかこう……こう……！う、うひぃぃぃぃぃぃぃ！」

床を転げ回る。ああ！早くなんとかならないかなこの感覚！都合約十回ぐらい回転したところで、「う……きいたぁ～～……」というお父さんの呻きが聞こえるのと同時、あのなんとも言えない感覚が引いていった。た、助かった……。

「気付いたか九十九。……心なしか、復活までに掛かる時間が長かったような……」

「ん～～？ん～～……。そうか？ぶっちゃけてしまえば、気絶って、体感的にはすぐ目を覚ましているから、よく解らんなぁ」

「そうか……いや、多分気のせいだろう。すまない」

「いや、何で謝るのか解らないんだが？むしろ俺としては頭突きした事についてだな……」

「ん？何か問題でも？」

私は悪くない、とばかりに胸を張り、その状態からお父さんを見下ろす先生。

そのあまりの態度に、お父さんは「えー……」という顔をして、助けを求めるように私を見るが、残念。

「全面的に同意」

「まさかの裏切り。これは酷い」

「組んだ憶えは無いよ？それと酷いのはお父さんの方だと思う」

「追撃！？心身共に疲労した父親に追撃？！」

「で？昨日は何をしてたんだ？」

「スルー？！今度は話を流された！そしてまた掘り返された！？天丼は三回までって知らないの？！」

「ん～？知らんなぁ？ほらほら吐いちまいなよおとっつぁん。ゲロ

ッちまった方が楽になるぜぇ？」

「……流石に娘にこの口調を教えた人物には怒りを覚えるんだが。誰だ、教えたの」

「私じゃ無いぞ、幽香だ。『人を説得する時には、こういう言い方をすると良いわ』と教えられたらしい」

「うわ、りあるに想像出来てしまうあたり、流石幽香さんくおりてぃ」

そこに痺れも憧れもしないがなっ！とも。

教えられたものを使っている私が言うのも何だけど、あの人のド外道っぷりは見ていて清々しくなるね。そこに痺れも憧れもしないけど。……ごめん、嘘付いた。ちょっと憧れた。だから先生に「その言葉遣いは止めろ」と言われても使いました。

というかまたしてもはぐらかされた気がするんだけど。もう、何でこんなに隠したがるかなぁ。

「もう！そんなの良いから、ホラ！吐き出しちゃってよお父さん！」

「嫌だ！誰が吐き出すもんか！」

「ほら？私と先生は、もうちゃんと準備できてるよ……？」

「そっち?!いきなりはにーとらっぷだとぅ!?こいつ……出来る!」

「ほら……私のここ、もうこんなに……先生のも……ね?」

「くっ……何という抗い難い誘惑!だが、だが甘い!俺がこんな露骨な罠に釣られ「つ、九十九……その、あ、あの……や…優しくして、くれないか……?」クマーーッ!」

飛び込んできたお父さんの身体をがっちりホールド。そして腰を持ち、そのまま立って……

「幽香さん直伝!!ジャァァマンスープ……レックス!!」

「うごほぁ!!」

クリティカルヒット!!よっし決まったぁぁ!

頭から激突したお父さんは、ぴくりと痙攣してから布団に沈んだ。

完膚無きまでにKO勝ちだ。ガッツポーズをする。ああ、ゴングが聞こえる……!

幸い死に至るほどのダメージでは無いようだ。布団を敷いてて良かったね!

ちなみにあれだから、上の台詞は先生に抱き付いて服をはだけさせただけだから。

まだ本格的な事は準備出来ないから。肉体的にも精神的にも。

「……私が言うのも何だが、それは流石に駄目じゃないか？」

「大丈夫、ちゃんと加減はしたから。死なない死なない」

「そうか、なら大丈夫だな」

「どこが？！今のどこに大丈夫な要素が？！」

「？だってお前、頑丈じゃないか」

「要素俺？！結局あの会話の中には理由は無いんだな！！？」

「何を言っているんだ。そんなの当たり前じゃないか。あんな凶悪な技、常人だと死んでしまう」

「ねえ、解ってる？解っててやってる？」

「安心してお父さん。他の誰にもやらないから。これをやるのはお父さんにだけ、だよ？」

「未だかつてこれ程までに嫌な独占権があったろうか？！」

「で？昨日は何を？」

笑顔の先生が凄む。お父さんタジタジ。……これは将来が心配だ。色々な意味で。

「解りました。正直に話します」

「うん。最初からそうやって素直でいれば良いんだ。素直な奴は好きだぞ？」

「はい……すいませんでした……では。実は昨日は、かくかくしかじかで……」

「……九十九？そこで本当にかくかくしかじかと言ったら伝わる訳が「ウッウーウマウマって事ですね、わかりました」伝わった？！どういうコミュニケーション能力だお前ら！？」

「当然。何故なら私はお父さんの娘だからね！」

「我が娘ながら相変わらず意味不明な理論を……」

「ああ、成る程。解った、理解した」

「納得されちゃった？！俺って一体どういう免罪符？！」

そうして詳しい内容をけーね先生に話す。伝える途中、「マジで伝わってんのか。恐ろしいぜ」とか言ってきた。え？お父さんが何かしたんじゃないの？

頭の中に、どうやら昨日お父さんの見た光景らしきものが映ったのだ。全て。
そう、全てだ。その中には、どうみても犯罪現場そのものの光景もあった訳で。
ええ、当然話しましたとも。包み隠さずに。お父さんの顔色は悪くなり、先生の額には怒筋が。まあ、当然ですよね。
裏切り者ぉぉ！とか言ってた気がするけど、気にしない。

「で、お父さん。『地下室』って、本当にあるの？」

先生にマウントされて殴られ続けるお父さんに質問する。鬼？ははは。何を言うかと思えば。先生は鬼じゃないよ、半白澤だよ？……え？私の事？

「今聞くか、普通……」

「今聞かない？普通」

「……お前、のっ、普通っ、て、何、なの……？まあ、良い、や。『地下室』な、ら、ある、ぞっ」

ちなみにお父さんの息が不自然に切れているのは、先生に殴られて

いるからである、念の為。

「……もう、何で、そん、なに、きぶっ、っん悪、いんだ慧っ音ぇっ…！何？や、っぱり満、月の日っ、寝過ごぉっ、した、から？」

ぴたり、と、先生の動きが止まった。そしてしばらくしてから小さく揺れ出す。
がく、がくがく、がくがくがくっ！と激しくなっていき、そしてとうとう

「あぁぁぁあああぁぁぁ！！そうだ！そうだった！！一ヶ月分ッ！う、うわぁああぁぁぁあぁ！！」

一気に爆発した。
さっきよりも強く、そして速く！お父さんを殴る、殴る。殴る！殴るッッ！！
凄まじい光景である。あっ、という間にお父さんの顔の原型が無くなった。
ぐちゃぐちゃだ。粗挽きミンチだ。

ちなみに、何故先生がこうも取り乱すのか。それは先生のもう一つの仕事が関係する。

先生は知っての通りに『先生』という仕事をしているが、それ以外にも『歴史書』を纏める、という作業もおこなっている。

先ほどチラリと挙げたが、先生は半白澤、『ワーハクタク』と呼ばれる半人半獣の妖怪だ。

先生は先天的な妖怪ではなく、後天的なものだとか、他にも様々な深い事情があるが、今はそこは大切な事では無いので省略。今回大切なのは先生の『能力』だ。

先生の能力は通常時は『歴史を食べる程度の能力』。

これも色々面倒な事情が、例えば「そもそも『歴史』の定義とは？」とかあるが、長くなるし面倒なので、詳しい事はまたの機会に。

簡単に言えば、「あるはずのものを隠す」、だ。……少々簡単に言いすぎた感があるが、そこはご愛敬。

解りやすく説明する。まず先生の能力によって「お父さんという『歴史』」を隠す。

するとお父さんは消えてしまう。認識できなくなってしまう。

娘の私は「お父さんが居た」という事を知っているし、その存在の証明として『お父さんの家』も残ったままだが、お父さんを見つける事は出来ないといった事態になるのだ。

つまりは「お父さん」が居なくなった、しかし憶えているし『消滅』した訳では無い。

……我ながら今のはわかりにくかったので、もっと解りやすく実話を交えて説明しよう。

今からちょっと前、色々あって『人里の歴史』が隠される、といった事態が起きた。

起こしたのは先生。まあ、色々あったから仕方がなかったのだが。

で、その際には、人里は見えなくなってしまった。ある事件の調査をしていた博霊の巫女達は「人里があったという事は知っているけ

ど、見つからない」といった風になっていた。かくいう私もその一人。

あくまで『隠す』のであって『消滅』させるのでは無く、『無かった事にする』訳でも無いのだ。

で、それに加え、先生にはもう一つ能力がある。それは『歴史を創る程度の能力』。

こちらは一ヶ月に一日だけ、満月の日の夜に使う事ができる。

それというのも、さきほども言ったが、先生が『ワーハクタク』だからだ。

先生は、満月を見ると妖怪になるのだ。と言っても、見た目は角が生え、若干髪の色が変わる程度にしか違いはないのだが。この辺は、『半妖』ではよくある事らしい。

その妖怪になっている時だけに、後者の能力は行使できる。

この能力についても、またしても難しくややこしい事情があったりするのだが、こちらはごく簡単に、簡略化して単純化して、無理矢理に二言で表現するならば『歴史を発掘』、だろうか。

『創る』とはいっても、本当に0から創るのではなくて、隠されていたものを見つけ出すのだ。『隠された』というのも、本当の意味で『闇に葬られた』ものだが。

この『隠された』歴史というのも、普通は見つけられるものではなくて、見つけるものでもなくて。

中には文字通り「歴史的発見！」なものもあるんだろうが、それはごく少数に限り、大多数は「知らなかった方が良かった」歴史が多い。

しかしまた面倒な事に、そういう「清濁併せ持った、ありのままの歴史の姿」を、人間に伝える為に、先生は満月になる度に歴史を発掘している。

ただ、如何せんその量は膨大で、とても一日で終わる作業ではない。

しかもその作業が行えるのは大体月に一回。作業出来ない間にも『隠された歴史』は増えていく。
だから先生は一晩ほぼ全てを費やして、一ヶ月掛かるであろう量を書き留めるのだ。
なので先生は満月の日は恐い。常にカリカリしている。普段温厚な先生とは百八十度態度が違う。
何時もなら軽く怒るで済ませるであろうお父さんの

「何イライラしてんの？あの日？」

という冗談にも

「すまない。死んでくれ」

という言葉と共に頭突き。だがその速度と威力は普段と比べると桁違いで、具体的に言うとお父さんの顔どころか上半身が吹き飛んだ。
（ちなみにこれは全力だったようで、頭突きした後の先生はスッキリしたのか、多少は機嫌が良くなったようだった）

とまあこんな具合に、あまり近付きたくは無いのだ。満月の日の先生。

ただでさえ作業が忙しくてカリカリしてたのに、今回はその作業そのものが行えなかった。これがこの

「うわぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「まるで暴走初号機！目にも止まらぬラッシュの嵐！これは痛い！」

お父さんが喋る事が出来ないほどの速度で殴り続けるという、先生の行動の理由と原因だ。ちなみに実況、解説は共に私。流石に先生は噛み付き食す、なんて事はしていない。

……さて、どうしよう？これ？

初号機ならエネルギー切れを待てばいいが、こちとら人間、しかも妖怪寄りだ。

何時になったら止まる事やら。え？私が止める？うん、それ無理。

そうやって何をするでも無く、ただお父さんに乗っかって殴る先生、という光景を眺め続け、返り血を浴びる先生の姿と体勢に若干のエロスを感じてきた所で、床がみしっ、と軋む音がして。

先生が再度思いっきり床に拳を打ち付けると、轟音と共に床が砕け、ぽっかりと大きな穴が空いた。

「……え？」

……二メートル離れた私の所まで。
当然私は反応出来ずに、穴の中を落ちていった。

＝＝＝

「……う……うぅん………」

「おう、気が付いたか」

「……お父さん？」

「そうだな。お父さんだな」

意識が戻った私に声をかけてきたのはお父さんだった。
どうやら穴は差程深くはないようで、上を見れば落ちてきたところが見えた。……１０メートルくらい上に、だが。
四角形の穴で周りは壁。壁は普通に土だけど、床は何故か木製で、所々に『崩れた床』の破片が散らばっている。
穴の底は、大体縦横それぞれ５メートルくらいと結構広い。

「………どうするのこれ。むしろどうなるのこれ。というかどこなのここ」

「落ち着け。別にどうにもならん。はしごはあるから上れるし」

言われて辺りを見渡すと、確かに壁にはしごが貼り付けてあった。

……何故に金属製？

「……ところで先生は？まだ起きていないとか？」

「いんや？起きてるぞ。そこにほら」

お父さんが指さす方向、要は私の後方に向き直ると

「ああ……私は駄目だな、本当に。寝過ごすだけではなく八つ当たりまで……駄目な奴だな、私は……本当に……ああ……」

座り込み頭を抱え、縮こまって反省というか自分を追い詰めている先生が、そこには居た。

台詞がループしそうな悪寒である。予感じゃない、悪寒。

「ってな訳で、慧音の事はしばらくするー推奨だ」

「え？流すの？この状態の先生、流しちゃって良いの？」

「大変心苦しいが、多分何言っても駄目だろう。というか駄目だった」

諦めたというか、呆れたように溜息を吐くお父さん。

……さて、流してどうするのだろうか。自然に解決するのを待ってるのだろうか。

というか、ここって本格的に何なのだろうか。はしごが掛かってる方とは反対の壁には、鏡が幾つか、というか幾つも置いてあるし。それぞれの上に木の板で『山』『川』『池』『森』『マヨヒガ』『天界』『海』等々……他にも色々ある。ありすぎて数えられないくらい。

『海』、『天界』以外は幻想郷にある土地、場所だ。『川』と『池』を分けているのは、河童が住んでいる所と三途の川との区別を付けたかったからだろうか？

後、『守矢神社』が無いのは、最近こちらに現れたからだろうか？『博麗神社』があるから、神社などは除く、という訳でも無さそうだし。

しかしこの鏡、古めかしい。今の鏡のように殆どそのままを反射するのではなく、銅鏡のように若干見え辛い。……銅鏡なんじゃないか？これ。

「ここって、何？あの鏡って？」

「ここが『地下室』。あの鏡は、まあこれから話す」

「……地下室って。いやまあ確かに地下だけど。部屋じゃない気が……」

私の言葉を無視して、お父さんは左の壁に手をつく。ちなみにもう一度、この穴の構造を説明しておこう。

はしごがある壁を後方とすると、鏡が並べられてるのが前方の壁。見た所何も無いのが左右の壁だ。ちなみに先生が蹲ってるのは左斜め後ろの端っこ。

お父さんは当てた手で何度も壁を擦る。そうして何かが解ったらしく、「よし。」と呟き、

「そぉい！」

壁に思いっきり、拳を打ち付けた。ピシリ、という音がした。……ピシリ？

お父さんは2、3回壁を殴りつけた後、踵を返して走り、先生を抱えてはしごを登っていった。……何？何なのコレ？

突然抱えられた先生は暴れたが、お父さんに耳元で何やら言われると大人しくなった。

そしてお父さんが上まで登り切った後、上から顔だけひょっこり出

して

「溺れないようにな〜〜〜」

「……は？　溺れ……？」

どういう事か聞こうとする前に、ピシリ、という音を立てて、壁が崩れ去った。
そうして崩れたのと同時に、壁のあった所から

「み、水〜〜〜？！」

大量の水が、流れ込んできた。それも物凄い勢いで。
どうにか逃げようとするが、ここは穴の底。四方が壁で、今からはしごを使って登っても、登り切れそうにない。……お父さんめ、恨んでやる。

＝＝

穴を眺める。流れ込んだ水は、穴を殆ど満たしてしまう程の量があった。あと二十りっとるもあれば穴から溢れる程に。しかも相当な勢いで流れ込んできた。
全く、あれに巻き込まれていたら、と思うとぞっとするね。

戦々恐々としていると、突然水面から白い腕が伸びてきた。何これホラー？
その腕は端を掴んで

「おお父ぉおさぁぁんんん……？」

本体の顕冴が水から上がってきた。自ら。……すまん、ちょっと言ってみたくなっただけなんだ。
顕冴は、水浸しになりながら、その長い髪を垂れ流しながら、俺を睨んでくる。その姿はさながら伝説の三番目のようである。
ちなみに三番目とは、つまりはトイレの三番目にいるあの国民的妖怪である。
え？違う？髪が長くて這い出てくるのは違う奴？あれ？そうだっけ？

「もう！こうなるならこうなるって言ってよね！」

「こうなる」

「遅い！今言ってどうする！それにそういう事じゃ無い！」

「あは☆ごめんごめん」

「誠意が欠片も無い！？もっとこう、真剣に謝ってよ！危うく死ぬ所だったんだよ？！」

「いや、溺れたぐらいじゃ死なないだろう」

「死ぬよ！溺れただけで私は死ぬよ！！」

いや本当にすまん。何せ壁を殴った後に気が付いたのだ。「あれ？これまずいんじゃね？」と。

いざとなったら顕冴抱えて行けばいいや、と思っていたら、唐突に慧音の事思い出したのだ。

思い出した。そう、俺、あの時まで慧音の事すっかり忘れてた。だってするーするって言ったもの。仕方ないじゃない。

流すのにも程があるとは我ながら思うが、それよりも、だ。壁が崩れそうだったのである。

先生はぼーっとしてたから、下手すると溺れてしまう。だから抱えて登ったのだ。

顕冴の方は、まあ何とかあるだろ、と考えて放置。両手に花っていうのは憧れるが、とても現実的とは思えない訳だ。両手が塞がるからはしごを登れないって意味で。

ちなみに慧音は今もぼーっと惚けている。何だか考え事をしているようだ。

顕冴の文句を流しながら、もう一人が水面から上がって来るのを待つ。……もうそろそろか？

ざばっ！、と音を立てて、水面からまたもや白い腕が飛び出してくる。その音に驚いて、顕冴は文句を言うのを中断し、水面を見る。そこに居たのは一人の髪の長い女。服は真っ白、白一色。これは……着物？……というか、白無垢？いや違うな、死者が身に纏うあれだ。あの白いやつ。まだ水中にいるので顔は見えない。……何で描写してんだ？俺。こいつの事、知らない訳じゃ無いのに。

ちなみに顕冴はさっきから「そう、これは夢だよ。決して幽霊じゃない。葬式で仏様が着ているものを着た女性が水面から上がってくるなんて事、夢に決まってるよ」とかなんとか呟いている。目の『はいらいと』が消えて、死んだ魚のような目になってる。残念だが夢ではなく現実である。幽霊ではないが。その件の女は、何故か地面に手をかけたまま上がってこない。……どうしたんだ？気になってしゃがみ込み、水面を覗くと、女は顔だけをぞぷりと出してきて

「か、髪が重くて……上がれま……っせん！」

「「……」」

俺と顕冴の二人で引き上げました。

＝＝＝

「さて、引き上げてくれた事はありがたく思いますが……その女性はどちら様でしょうか？」

引き上げた後、まあ立ち話も何だし、寝室の床には穴空いてるし、って訳で、先生含めた全員で居間に移動し、とりあえずはちゃぶ台を囲んで座った。位置は俺の左側に顕牙、右側に慧音、そして正面に…………

「どちら様って、むしろあなたがどちら様? 私は白峰顕牙」

「ああ、名乗り忘れておりました。私は『八神(やがみ)　鑑枷(きょうか)』と申します。よろしくお願い致します」

「よ、よろしくお願いします……」

ぺこり、と自己紹介の後に頭を下げる鑑枷。それにあわせて頭を下げる顕牙。相変わらず、礼儀正しいというか、硬っ苦しいというか……

「あなた様は？」

「あ、ああ。私は上白沢慧音。教師を務めさせて貰っている。よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ。先生でいらっしゃいますか。それは立派ですね」

「いや、先生とは言っても、私はまだ若輩の身だ。まだまだ立派と呼ぶには程遠い」

「いえいえ。そう謙遜なさらずとも、とても立派だと私は思います。例え立派では無くとも、立派な先生になろうというその意志は、素晴らしき事と思いますよ？」

「そうか。そう言って貰えると嬉しい」

硬い。二人とも物凄く硬い！

がっちがちである。驚き硬さ。まるで岩のようだ。

二人の性格は、どこか共通する所があるのか、自己紹介が終わると二人は意気投合し、話し込んでしまった。

話といっても雑談程度だが、その雑談も硬い。人間がどうとか、歴史がどうとか。果ては「理想の正しい人間像とは？」みたいな人間の教育というか、変な方向に向かってしまった。誰か！止められる者はおらんのか？！

「で?!八神鑑枷さん、結局あなた何であそこにいたんですか!?」

堪えきれず、顕冴がうがーと吠える。しかし鑑枷は動じず、冷静に慧音との会話を「ごめんなさいね」と言って打ち切り、顕冴の方に向き直って、「それはですね……」と説明し始めた。

「実は私、『封印』、というものに憧れていたのです。ですが、私は『封印』は出来ないそうなので、仕方無しに部屋を水で満たして、擬似的に封印状態を再現していました」

「……はい?」

呆気に取られる顕冴。まあ、いきなり「封印に憧れてた」だからなぁ。そりゃ訳解らんわな。しかも「水で満たして擬似的に再現」って。どういう思考してやがる。

まあ、かく言う俺が、地下に穴掘ったんですけどね!

「……えっと……え?きょ、鑑枷さんって、あの水が吹き出てきた壁の中に居たの?!」

「ええ。『あの』、というのがどの壁なのかは存じませんが、私は

壁で塞いだ水浸しの部屋の中におりました」

「……呼吸とか、しなくて良かったの？」

「……？呼吸をしてしまえば、封印状態とは呼べないのでは？」

小首を傾げて、心底不思議そうに言う鑑枷。顕冴は「ああ……天然さんだ……」と、肩を落とす。……気持ちは解るぞ、うん。

こいつは若干、というか「封印に憧れていた」や「水で満たして～」の発言から伺えるとおり、若干思考回路がおかしい。要は天然さんだ。

「妖怪は、食べると美味しいのでしょうか？」とか「河童は、きゅうりの味なのでしょうか？」とか、昔から言ってるもの。例えが味に関する事だけなのは気にしないでくれ。印象に残っていたのがそれだったんだ。

そもそも「呼吸をしたら封印じゃない」って、どういう理論だ。

「はぁ……それで結局鑑枷さん？何で、九十九の家の地下に封印されてたんですか？」

「鑑（かがみ）で良いですよ。『か』を強調して下さいね？」

「はあ……じゃあ鑑」

「解っています。何故私が九十九の家の地下に封印されているのか、でしたよね？」

聞かなくても解るだろうに、鑑枷は質問を確認する。それに顕冴が答える前に、言葉を続けた。

「私は、そこの真経津九十九の、妻ですもの」

「「……ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ「冗談です」っ、えほっ！ごほッ？！げほっ？！」」

鑑枷の冗談に慧音と顕冴は二人揃って叫び、二人揃って咳き込んだ。何故叫んでいる中「冗談」という言葉が聞こえたのかは、俺にも解らん。
相も変わらず冗談がたち悪すぎだ。

「本当は、まあ、何と言いましょうか。兄妹……と言いましょうか、何でしょうか……どうなんでしょうね？九十九？」

「俺に振らないでほしい。まあ、兄妹で良いんじゃね？」

「では兄妹だからです。これで宜しいでしょうか？」

「……何か、凄く釈然としないんだけど」

いましがた決まった、という様な答えに納得出来てない、という感じが表情からありありと伺える顕冴。俺だって今の答えだったら納得出来ない。
だが、実際に俺と鑑枷の関係は、何と言っていいのかが良く解らないのだ。上手く言い表せないというか、ややこしくなるから言いたくないというか。
正直に言ってしまうと「二人は一体共同体」だ。な？訳解らんだろ？

「まあ、とりあえずは家族って事で納得してくれ」

「……解った。そうする」

文句を言いたげな顔だが、言わずに納得すると言う顕冴。……こいつは、従順過ぎやしないだろうか？お父さん将来が心配である。

そして今度はふと気が付いた事があるらしく、「そういえば」と今度は鑑枷が質問しだした。

「お二人は、何故九十九の家にいらっしゃるのでしょうか？」

「今更？！引き上げられて、質問を散々されてから今迄気付いて無

かったの？！」

「ええ、まあ。何だか、当たり前の様に過ごしていらっしゃいましたから、違和感を感じず、気付きませんせした」

「……うわ、天然ってレベルじゃないよこの人」

「人ではありません。神です」

「いやまあ九十九と兄妹っていうんなら、そうなんだろうけど。そういう事じゃなくて……」

何と言っていいか……と頭を抱える顕冴。ちなみに無駄だと思う。こいつとは５００年は一緒に過ごしてきたが、最初から最後までこうだった。もう治る治らないの問題じゃ無いのだと思う。そんな顕冴の苦悩を知ってか知らずか、多分知らねぇんだろうなぁとは思うが、鑑枷は答えを催促してくる。それを聞いて、頭を抱えていた顕冴は「まあいいや」と、考える事を放棄した。妥当な判断である。

「私は、お父さん…九十九の娘だからね。一緒に住んでるんだ。ちなみにけーね先生は私の愛人」

「……冗談ですよね？」

「ごめん。先生が愛人っていうのは嘘。娘っていうのは本当だけど」

鑑枷の眉がぴくっ、と震える。震えているのは眉だけではなく体もだけれども。

体の震えが突然止まったかと思うと、今度は俯き「娘？でも別姓…どういう事でしょうか……」とか「相手は？白峰、なんて姓の方なんて、幻想郷に居ましたっけ？」と、小さい声で言っている。俺は耳が良いから聞こえているが、顕冴達は聞こえていないようである。

しばらく何事か呟いていたかと思うと、いきなり顔を上げ、俺の顔を見て、次に顕冴を見、その次に慧音の顔、その次に顕冴と、ここに居る全員の顔を見比べて、ぽん、と手を打って、納得したように

「ああ、慧音さんとの娘さんですね。変態との子供というのは色々と体面が悪いでしょうし。それで別姓なのですね。納得致しました」

「ですがそれだと何故『白峰』なのですか？『白』は解りますが、『峰』？山のでしょうか、それとも刀のでしょうか……？」と今度は名前に付いて疑問を持ち始める。

慧音は、言われた事が理解するのに時間が掛かったようで、一拍おいて、顔が見る見る赤くなってきた。

「ち、違うぞ！？私と九十九の子供ではない？！顕冴は拾われてきた娘だし、私は九十九とはまだそういった事は行っていない！！そもそも私はそのような行為をした事が……」

慧音は途中でいらん事まで言ってしまったと気付いたらしく、元々赤かった顔を更に赤くして、俯いてしまった。……そうか、慧音、まだなのか。おじさん、ちょっと心配である。

「そうなのですか？それにしては、三人とも似ていると言いますか、こう、雰囲気が……ねえ？」

「だから俺に振るなって。お前の感性なぞ解らんし、そう言うんならお前と顕冴だって似てるだろうが」

「……というか鑑って、見えるの？」

最初から気になってたんだけど。と顕冴は言う。
どういう事か解らないと思うから言っておく。実は鑑枷、目を閉じているのだ。
その状態をずっと、それこそ水面から顔を出した時から続けている。目を閉じたままで話し相手の方を正確に向き、今もまるで見えている様な言い方だったので、顕冴は疑問に思ったのだろう。
ちなみに鑑枷は目が悪い、とかそういった事情は全く無く、目を開かない理由はもっと単純だ。ある意味では複雑なのかもしれないが、

動機そのものは至って簡単な事である。

「見えると言いますか、感じ取っているのです。先程も『雰囲気』と言いました通り、そういうのが何となく解るのです」

こういうのを長く続けていると、と付け加えて。
いや、まあ確かに続けるとそんな芸当出来るようになる、とは割と良く聞くが、一体それ程までにどれ程の時間が掛かるのやら。

「まあそう言う訳で、私はてっきりそういう関係なのだと。それに、皆さんの雰囲気は、とても暖かいですから」

「暖かい？」

「ええ。そういう『暖かい』雰囲気というものは、お互いがお互いを想い合っていなければ、感じとれはしないのですよ？」

「想いっ……！……まあ、そうだな。私は、二人の事は好きだぞ？」

「私も。という事は、お父さんも」

「そうさな。嫌いでは無いな、うん」

「照れてますね。そう照れなくとも良いのですよ？」

「しゃいで悪かったな！？」

こら、お前ら三人とも暖かい目で見るんじゃない。せ、背中がむず痒い！

「そうですか、拾われた娘なのですね……九十九？誰かを孕ませた訳ではありませんよね？」

「断じて違う！細心の注意は払ってきた！！」

「という事は、そういう事は経験した、と。しかも言い方からして複数人ですね？」

「言い方が悪かった。５００年はしていない！というか何でそんな思考になった？！」

「いえ、九十九は変態ですから、誰かを襲ってしまって。そして襲われた方はどうする事も出来ず、産んだ子供に愛情なんて抱ける訳は無く、捨てたのではないか？と」

「生々しい！！発想が生々しくて恐ろしいよ！」

「人間とは、そういうものでしょう？」

「もっと人間を信じようよ！」

そんなこんなで暫くは言い争いが繰り広げられたが、十分もすれば落ち着いた。
落ち着いた俺と鑑栂に、顕冴と慧音は、手を差し出してきた。
俺達二人は訳が解らずに向き合って首を傾げたが、慧音が差し出した理由を言ってくる。

「改めて『これからよろしく』の挨拶だ。九十九と兄妹なら、ここに住むのだろう？なら、これからも付き合いが良くあると思うからな」

「私も。お父さんと兄妹なら、鑑はおば……何でもないです、はい」

慧音の言葉に、ぽかん、と情けなく口を開いていた鑑栂だが、顕冴の発言の途中で雰囲気が刺々しくなった。目を開けているのなら、相当睨んでいるだろう。そのせいで顕冴は怯む。

が、鑑栂が雰囲気を弛め、笑顔で手を出し、二人と同時に握手をすると、顕冴は嬉しそうに笑みを浮かべ、慧音も表情が柔らかくなった。

「はい。それでは改めまして。これから、よろしくお願いしますね、貴様達」

「「……『貴様』？」」

笑顔のまま固まる二人。まあ、そうなるわな。

「……ねえ、これもしかして喧嘩売られてる？これ喧嘩売られてるよね！？」

「そんな事はありません。『貴様』という言葉は、丁寧な言い方なのですよ？」

そこで慧音は何かをふと思いつき、「もしかして、今現在、『貴様』がどういう意味で使われているのか、知らないんじゃないか？」と疑問を述べた。

まあ、かれこれ５００年は水の中だったのだから、その可能性は否定できないな。

それを聞いて顕冴は、なら仕方ないか。と表情その他を弛める。が、

「今現在『貴様』がどういった使い方をされているのかは存じ上げ

ております。主に他人に対する侮蔑を込めた呼び方、所謂蔑称ですね」

「……ねえ、意味解って言ってるの？本当に解ってるの？」

「勿論です」

「ごめんちょっと殴らせて」

殴りかかろうとする顕冴を後ろから羽交い締めして止める。

「ＯＫすとっぷ落ち着こうか。これは仕方ないんだ。鑑枷が個人の事を呼ぶ時に『貴様』っていうのは、仕方ない事だから」

「仕方ない？！どこが仕方ない！？」

「だって仕方ないじゃない。紫に対してもそうだもの」

まあ本当は時々、だが。

『あの』紫に対してもそうだと言われて納得しかかった顕冴だが、

「あれ？」と声を上げる。

「でも、お父さんに対しては名前で呼んでるよね？何で？」

「いえ？特に他意はありませんよ？」

「……絶対他意あるよねコレ。あるよねコレ。私の感がそう言ってる」

「……私は、何か解ったような気がするぞ……解りたくはなかったが……」

顕冴は疑問を抱き、慧音は何かしらが解ったらしい。一体、何が解ったのだろうか？

そんな全く解っていない俺の様子を見て、三人は顔を合わせて、溜息を吐いた。……なんだってんだ？

「ああ、そうだ鑑枷。ちょっと慧音を妖怪形態にしてくれないか？」

「別によろしいですけど、何故なのですか？」

「慧音は『歴史』の編纂してるんだが、妖怪形態じゃないと出来ないんだ」

「……ああ、白澤の方ですか。だから白沢なのですね。ええ、解りました。ですが、成功するかどうか解りませんよ？」

「それでもOよりはマシだろう。頼む、やってくれ」

「……さっきから聞いていても解らなかったが、どういう事だ？そんな事出来るのか？」

鑑枷が慧音を妖怪の形態にする為に目を閉じ、集中している時に、こそっと俺に慧音は聞いてきた。
満月じゃないと慧音は妖怪にはなれないのが普通だが、今から妖怪にするというのだ。それも満月でもない日に。
信じられないのは解る。だが鑑枷の能力は信じられない事が出来るのだ。

「ああ。鑑枷の能力は『不可能を可能にする程度の能力』っていう、何処ぞの戦闘機乗りの口癖みたいな能力でな。事柄が起きる可能性を七割程度まで引き上げるんだ」

「何処ぞの戦闘機乗り、というのが何なのか解らないが、凄いな、それは」

「ただ、七割程度までだから、失敗する時は失敗するんだが。そうなったらすまんな」

「いや、良いさ。元々出来なかった事なんだから、出来るかもしれないというだけでありがたい」

そう言って、慧音は微笑む。そりゃ助かる。
だが、失敗するかも、という心配は杞憂だったようで、慧音には角が生え、髪の色も変色した。どうやら成功のようだ。
慧音は妖怪になった事で仕事ができるようになったと喜び、早速帰って作業に移ろうとしたが、それを鑑枷は止める。

「待って下さい。今日は此所でしてしまいましょう。私達も手伝いますし」

「……どういう事だ？出来るのか？」

「ええ。何となくで私達も『歴史』を纏める作業を手伝う事は出来ないものかと、『私達にも歴史を創れる』という事も引き起こしてみましたら」

「出来るようになってしまった？」

「ええ。ですから、折角ですので私達も手伝います。紙と筆はあるようですし」

「ちょっと待て。『私達』って、俺と顕冴もか？」

「顕冴さんは違いますが、九十九は出来ますよ？さあ、逝きましょうか」

「ねえ、何で俺だけ？しかも何か『行く』の字が違わない？！というか何で紙と筆があるって知ってんの？！」

「ちゃぶ台の上に文字が書いてある紙が置いてあるなら、解りますよ。それに、大変でしょうし、字は間違ってないと思いますが」

「まあ、大変だな。一晩掛けても終わらない程度には。手伝ってくれるなら早く終われそうだ、さあ、逝こうか」

鑑枷と慧音の二人に、片腕ずつ掴まれて引き摺られていく俺。助けを求めて視線を顕冴に寄越してみれば、ぷいっと目を逸らしやがった。裏切りものめぇぇぇ！

結局そんなこんなで、地獄の様な作業は俺含めて三人で行われ、慧音監修の元、夜には何とか終わりましたとさ。………もう文字を読みたく無い。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「さて、もう時間も遅い事ですし、今日は泊まっていきません？」

「良いのか？しかし、子供達に授業をしなければ………」

「朝早く帰ったら大丈夫じゃない？というか、2、3日くらいなら別に休んでも良いと思うよ？子供達も嬉しいと思うし」

「………何だか、ショックだぞ、それ……。顕冴、明日は頭突きだ

な」

「ええ!?何で?!」

「まあ、気を取り直して下さい。さて、そうなりますと、お風呂ですが……」

「それなら大丈夫じゃない?お父さんが用意するし」

「それはそれで大丈夫じゃない気がするが……?」

「大きいのですか?」

「大体5人ぐらいまで入るんじゃないかな?あとお父さんは覗かないと思うよ?」

「そうですか。なら着替えは取り敢えずは良いとして、次は寝る場所ですね。私は当然、九十九と同じ布団の中で……」

「待て、どこの常識だそれは。流石にそれは許されんぞ」

「ですが、昔はずっとこうでしたよ?」

「九十九……」

「でもちょっと待った。お父さんは、最近はずっと私と一緒に寝てるんだよ?」

「……九十九、まさか娘に……光源氏計画でしょうか?」

「違うよ！まだそういうのは……んんっ！と、とにかく、お父さんと同じ布団で寝るのは私！」

「顕冴も駄目だ！というか、別々の布団で寝るという思考は無いのか！？」

「「無い（ですね）」」

「お前達……」

「そうです！いっそ皆で一緒に寝てしまうというのはどうでしょう？丁度良い所にほら、特別製の大きな布団が……」

「どうしてそうなる？！というかその布団どこから出した？！一体何故作った！？」

「鑑……それは……」

「顕冴も駄目だと思うよな！？何とか言ってやれ！」

「とても良い案だね！よし採用！」

「ありがとうございます」

「顕冴……」

「まあまあそう落ち込まずに。……嬉しく、無いのですか？」

「うっ！嬉しいわけっ……まあ、悪くはないな、うん」

「でしたら皆で寝ましょう。ええ、そうしましょう」

こんな感じの会話が、俺がだうんしている隣の部屋で繰り広げられていたとか。

……実際に叩き起こされ、風呂と着替えの準備をさせられ、飯食って眠ろうとしてたら、何時の間にか三人とも布団の中に入ってきてたんだがな。

いや、なんか布団が大きいな、とは思ったが、疲れてるんだろと考えたんだよ。思ったんだよ。

それに俺だって反対しました！でも止められませんでした！三人の結束の前には為す術有りませんでした！！以上！！！

「……流石に、三人というのは無理がありましたね……。少しはみ出してしまいます。……ちょっとよろしいでしょうか？」

「おま、そんなにくっつくな、暑苦しい。ただでさえ顕冴上に乗っけて暑苦しいのに……」

「えい」

「顕冴もしがみつくな！暑苦し「むぅ……えい」慧音まで？！何で君達そんな仲良いの？！」

「まあ、良いんじゃない？お父さんだって嫌じゃないでしょ？」

「そうなんだが……辛いなぁ。これ辛いなぁ……」

そんな感じで、夜は更けていった。

十一節目（後書き）

こんなの慧音先生じゃない？何を今更。
自分の書く東方キャラは、原作とは全く異なりますよ。主に変態のせいで。
あと、鑑枷の言葉は似非敬語です。真似をして使うととんでもない事になりますから、真似しないように。

十二節目（前書き）

※注意！今回の前書きは本編とは関係ありません。……多分。

さて、翌日だ。
あの後、俺は一睡も出来なかった。まあ、元々睡眠なんて取って無い訳だが。
ちなみに何かしていたから寝てないって訳じゃないから。むしろ何もしてないから寝れなかっただけだから。
あれだから。何かしたいのに何も出来ないのが辛かっただけだから。
別に足腰立たないくらいに何かして立ってるのが辛い訳じゃないから。
俺は！５００年前からそういう事は！一切やってないから！！……
言ってて悲しくなってきた。

まあ、とにかくである。昨晩は何も無かった。以上！

そうして皆が寝静まるまで待って、というか皆眠らなかったから寝かせて！
そうして今俺は、またもや見回りに出掛けているのである。こんな朝早く。
具体的には太陽がまだ昇ってない。こんな早くから働くなんて、俺って何て働き者なんでしょう！！……うん、ごめんね、現実逃避がしたいだけなんだ。

え？ていうか何なの？ああいうのが毎日続くの？
流石に慧音は毎日では無いだろうけど、残りの二人、あれ毎晩やってくるの……？

……夜逃げって、良い響きがするよね……。

まあ俺の今後の予定は置いておいてだ。またもや倒れている人物Ａを発見した。二日続けて、というのは今迄に無かった事だ。結界担当弛んでんじゃないの？

だって前までは一ヶ月に一人いるかいないかだったもの。ちなみにいない場合は十中八九妖怪に食われている。

そういう迷い込んだ人間は、食べる機会が少ない妖怪にとっては、格好の餌なのだ。

なので人間を見かけない、それはイコール食われてるって事である。時たま、人里に辿りつける人間がいたりするけど、それは本当に時々しかない。

最後に辿り着いた人間は……あ～っと……そう、２００年程前に一人だけ居たな。

何かその時、「あれ？！人里だよなここ！慧音先生は？！」とか言ってた気がする。

あの時はそういう知り合いがいたのかなぁ、程度にしか思ってなかったのだが、今になって思い返してみると、あの言葉の意味が解るような気がする。

あの人間はおそらく、未来から迷い込んだ人間だったのだろう。あの時存在していなかった慧音の事を知っていた事と、人里に辿り着けた事と。

未来から来たのなら、人里への道くらい、覚えていてもおかしくは無いからな。

まあ、知っていても妖怪に襲われたら『あうと』なんだが、そこは純粋に運が良かったのだろう。多分。

その迷い込んだ人間が、その後どうなったのかは俺は詳しくは知らん。噂では地獄で今も働いてる、とかなんとか。あくまで噂である。多分本当の事では無いと思われる。

何故なら普通は地獄で働こう！なんて思う人間は居ないからだ。『地獄』とは恐れられるものであり、憧れるものでは無いからな。地獄には行きたくないと思う人間が居ても、地獄に行きたいと思う人間は居ない。

普通は皆、天国やら天界やらに行きたがるものだ。前者はともかく後者は行くのは難しいと言わざるを得ないがな。

ちなみに前者は存在しない。前者はともかく、と言ったが、それは絶対に行けないという意味だ。

あそこは罪を犯していない人間が行ける所だが、人間というものは皆すべからく、大なり小なり罪を犯しているものなのだから、行ける人間なんて存在しないのである。

行けるとするならば、それこそ神様くらいのものである。聖人君主と呼ばれる人間だって、罪を犯していない、なんて事はありはしないのだ。

よく漫画とかで聞く言葉だが、人間生きてるだけで他人に迷惑をかけていて、それだけで罪になるものだ。

……あれ？何で俺こんな思考してんだろ？……はっ！まさか、これが『厨二』！？

うひゃっほう！やっと来たぜ厨二病！キタ！これでかつる！！……

ごめん嘘。『厨二』はとっくの昔に訪れてました。大体何に勝つつもりなんだか。

さて、長い長い現実逃避の時間はおしまいだぜ、こんちくしょうめ。

何故俺が悪態付いてるか、それは倒れている人物見れば解ると思う。

その人物は、全体的に赤かった。そして黒かった。

仰向けで倒れているから顔は見えんが、とてもガタイが良い。身長も１９０に届こうかという程高い。あと足長い。脱いだら絶対ムキムキである。

服は深紅のマントにベルトだらけのズボン。あと黒のぼでぃあーまー。

極めつけに真っ白な髪ときた。……もうこの時点で、この人物が誰だか解るよな？

……どうみてもアーチャーさんです。ほんとうにありがとうございましたっ！！

何？何で居るのこの人？アレじゃなかったっけ？フィクションの世界の人物じゃなかったっけこの人っ！？

俺、げーむは持ってないたいぷの人だから、顕冴が俺のげーむを勝手に見て、やって、「かっこいいなぁ」と感想を抱いたとは思えない。格好いいんだけどね！

でも他にこの幻想郷において、外の世界の文化を伝えられる奴なんて、紫か香琳くら……アッーー！思い出した！居た！もう一人居た！外の世界の文化知ってて、尚かつげーむやってそうな人！

『姫様』だ！本名知らんからこう言う他ないけど、『永遠亭』で引き蘢ってた『姫様』だ！！

絶対そうだよ！だってあの人の部屋、ぱそこんあったもの！しかも大量に！

ぱそこんは、外の文化だから、普通は幻想郷に存在している筈が無い。しかしそれがある、という事は、どうやって手に入れたかは置いといて、確実にげーむは持ってる！

というか他にもげーむ機本体もあったもの！絶対ぱそこんげーむくらいある！

それにどうやら顕冴は、あそこに行った事がある様子だったし。この前の病院に行った時だって「ここはどこ？」とは聞いてこなかったし、何より八意さんが話してたもの。「あなたの元で育てられた

のだから」って！
それを知っているという事は、顕冴と知り合いで、尚かつ俺との関係を話しても良いと判断出来る程親しい人物という事だ！
八意さんとそこまでの関係だとしたら、あの『姫様』ともそこそこな関係だとしてもおかしくない！そうなればあの人の部屋でげーむくらいやってたって不思議ではない！
そう考えれば納得がいく。顕冴にそういう事教えた覚えは無いのに、あいつ俺のネタ的な会話についてこれてたもの。「ウッウーウマウマ」とか言ってたもの！
げーむだけじゃなくねっとにも繋いでいるに違いない！にこにこの会員に違いない！きっとそうだ！

あの引き蘢りめ、人の娘になんて事教えてやがる！いいぞ、もっとやれ！
……ではなくて。
今回ばかりは、流石に洒落になんねぇよ。
今後、どういうげーむをやっているか、逐一確認する必要性がありそうだ。
まあ、一番手っ取り早いのはげーむをさせない事なんだけど、それは酷、というものである。きっと。
まあ何にせよ、近々あの『姫様』には会いに行かんとならんな。そこでゆっくりとお話しようじゃないか。高町式で。

……にしても、アーチャーさんねぇ……これは、何かの皮肉だろうか。
丁度鑑枷が目を覚ました時にこれだ。何か運命的なものを感じる。
厳密に言えばこの人の言葉では無いが「偽物が本物に敵わない、なんて道理は無い」か……あの作品の中にもあったと思うが、偽物に劣る本物は、果たして本当に『本物』と呼べるのかねぇ……

歴史なんてものは、勝った方が正義、負ければ悪。それと同じで、勝った方が本物、負ければ偽物、そういうものだ。少なくとも、今残っている『本物』は、すべからく勝者だ。敗者はそれこそ『歴史の闇』の中。

本物に勝った偽物が本物に成り代わり、偽物に負けた本物は、偽物に成り下がるのだろう。

『本物』故に勝ったのか、勝ったからこそ『本物』なのか。その問いは、堂々巡りの終わらない問答、まるで合わせ鏡の果てを見ようとする事のように、無意味で無駄な事。

だが、その問答の果てに、意味が見いだせたなら、もしかしたら、あるいは……

おっと、また変な思考をしてしまった。なんか本格的に発症してきたな、大丈夫か、俺。

……まあ、結局の所は、負けたらそこで終わり……って事か。

取り敢えずはお引き取り願おう。此所は、答えを見つけられる所では無いから。

十二節目

さて、昼である。今回は、お昼の時間帯から御送り致します。
何故いきなりこの時間帯から始まるのかというと、別に俺が昼まで寝ていたから、何て訳じゃない。
むしろ俺は早起きだ。というよりは、まずそもそも寝ていない。
では何故、昼からの活動開始かというと、それはとても単純な事である。

……朝早いうちに、逃げました。

よって昼だ。何がよってなのか俺にも解らないが、とにかく今回は昼からの開始である。
開始、とはいっても自分の家に帰ってきただけなのだが。
もう昼だし、顕冴も慧音も学校に行ってるからもーまんたいさ！とか思って嬉々として帰ってみれば……

「それで九十九？朝は何処に行っていたのか、説明して頂けますよね？」

笑顔で、正座で、三つ指ついて玄関に佇んでいました。悪魔が。

にこやかに、あくまで俺の自由意志を尊重しているようだが、実際は全然だ。
言葉の端々からも、「えぇから話さんかいボケ」という意志がそのまんま伝わってくる。
滲み出る、何てれべるでは無く、そのまま出ている。というか隠す

気なんて最初から無いのだ。
これは要は脅しである。反抗の意志を抱けば即潰される、意志を尊重している様で実際には全くそんな事はなく、むしろその意志を踏み躙ろうとする、質の悪い『や』の付く方々の交渉のようなものである。
何とか蟻地獄から逃れようと足掻く様を見て楽しむ為、蟻（俺）を蟻地獄に興味本位でぶち込んだ子供（鑑枷）、みたいな構図だ。

つまりは何が言いたいのかというと、逃げられない。
結局この一言に落ち着くのだ。……ああ、死にたい。

何故俺はこいつの事を忘れていたのか。数分前の自分に会ったら殺したい。
というか殺しに行こうか。そうだ、行こう。
自分を殺したって、他人に迷惑掛ける訳じゃ無いから、良いよね？

「……何故、覚悟を決めたような表情をしているのですか？私は別に、怒ってなどいませんよ？」

「嘘だッ！そんな事言って、俺を油断させようとしてるんだろ！『怒ってなくとも殴れる』とか言って頭突いてくるんだろ！騙されないからな！」

「なんですか、その理解しがたい思考は……九十九、一体どんな人間関係築いてきたのですか……」

「そんな心配した振りして、裏では怒り狂っているんだろ！？俺には解るぞ！？」

「軽く人間不信じゃないですか……人間大好きなあなたが、なんでそんな事になっているのです？」

立ったまま怒鳴る俺の頬を、鑑枷は優しく撫でる。優しく、愛おしそうに。

あ、やばい。しばらくこんな風に優しくされた事無かったから、泣きそうだ。

「……何故、泣くのです？」

「いや……こんな風に優しくされた事、あまり無かったなぁ……って。ぐすっ……」

「本格的に、あなたがどのような関係を築いているのか気になってきましたよ……」

言いながら、鑑枷は俺の頭を胸に抱き、頭を撫でる。

母親が我が子をあやすように。先程よりもいくらか優しく。……やばい。惚れそう。

「関係って言われてもなぁ……。特にこれといった事は……あ、最

近友人が出来た。二人」

「そうですか。では、今友人は、合わせて何人くらいなのでしょうか？」

「二人」

「……はい？」

ぴたり、と、鑑枷の手が止まった。

「だから二人だって。一週間ぐらい前にな、『気付いたら友達になってた』って事に気付いたのが一人と、新しく友達になったのが一人」

「……本当に、それだけですか？」

「それだけだぞ？後は皆嫌ってるんじゃないかなぁ」

「……何をやってくれば、そのようになるのですか……。紫さんは？」

「さっき言った『新しく友達になった』方」

「……不憫っ……！」

あまりにアレな俺の交友関係を聞き、何でか知らんが鑑枷は俺に抱き付いてくる。……何？何なのこれ？
というか、不憫って。いや別に俺は特に思う所はないし、一人でもいれば万々歳だっていうか、何ていうか……なあ？

別にそこまでやらなくても……って、こ、こいつ…泣いていやがる！
俺の背中に腕を回して、肩に顔乗せてすすり泣いてる……だとぅ！
俺何かしましたか！？

「そうですか……それは悲しかったでしょうね……」

「いや別に悲しく無いんだけど。友達なんていなかったから、別にいなくても悲しい、とかは思わなかったんだけど？」

「ああ……こんなになるまで……ごめんなさい。私が眠っていたばかりに……！」

「お前はお母さんか」

涙を流しながら、しかし笑顔を浮かべて、俺の背中に手を回したまま、つまりは抱き付いたまま頭を撫でてくる。だからお前は俺のお母さんかと。
まるで友達がいない事に「辛くない」とやせ我慢をしている子供を慰めるお母さんそのものだ。だから本当に悲しく無いんだって。あ

と俺は子供じゃない。

「念の為に聞きますけど、何故友達が出来ないのか解ります？大丈夫です。それを何とか出来れば、きっと友達はできます！」

「だからお前はお母さんかと。それに友達が欲しい訳じゃ無いって言ってるじゃん。あと理由は俺が変態行為をしてきたからだな」

「……それは……」

俺の言葉を聞き、流石にそれは同情の余地無しと思ったのか、俺から離れて手を胸の前でぎゅっと握りしめる。……ああ、これは説教か肉体言語なぱたーんですね、わかりま「羨ましいです……」……はい？

「……え？ごめん、聞き取れなかったんだけど？」

「ですから、羨ましいと言ったのです。私にはかまってくれない癖に、他の方々にはそんな事をしてたのですね……羨ましいです」

おｋ、もう何も言うな。要はアレだろ？お前も一緒に美人さんに変態行為をして楽しみたかった、と。

ははは、全く、一家揃って変態だな、この家は。……頼む、そうであってくれ！

「…それは、変態行為をしたかった、って事だよな？だったら今からやりに行こうぜ！」

「そうでは無く、九十九にそのような行為をされている方々が羨ましい、と」

違ったー！残念な予想の方が当たってしまった！そこは普通怒るとこだろ常識的に考えて！

変態行為をされるのを嫌がるのは解るが、羨ましがるって……俺が言うのも何だが、大丈夫なのだろうかこいつ。ちょっと感性がおかしいのではないだろうか。

一応形式上の兄としては、とてつもなく心配である。俺が言えた口ではないが。

「よし解った。病院行こうか」

「……九十九、どこか悪いのですか？だったら私に言ってくれれば、そんなの気にならない程に気持ち良くして差し上げますのに……」

「悪いのはお前の頭だ。そこは治す、とかいう所だろ。気にならない程ってなんだよ。『痛いのが足なら腕を壊せば良いじゃない』の

理論？」

「そうではなく、私が……いえ、私を使って気持ちよ「いいよ言わなくても解ったよ！べくとるが違うだけで気を紛らわすって点で同じだろうが！」…そう、ですか……」

だから何でそこでしゅん、とするの？！俺が何か悪い事したみたいじゃない！

というか勘違いするから止めなさい！過保護すぎます！俺に対して過保護というか献身的過ぎます！お兄さんお前の将来が心配です！

……だめだこいつはやくなんとかしないと……

これが、変態を家族に持つ故の苦悩なのか！？……よし、これからは自重しよう。

「じゃあ適当にどこか行こう」

「……？病院に行くのではなかったのですか？」

「良いんだよ。多分病院では治せない類の病気だから」

「……恋の病……というものですか？……羨ましい」

「本格的にお前を病院に行かせたくなったよ！」

今時聞かねぇぞ恋の病なんて！良く知ってたなそんな言葉！
「私はどこも悪くなんてありませんよ？」って、気付いて無い事が問題なんだって！
……こいつの相手するのって、昔から疲れたが、こんなに疲れるもんだっけか……？

「では、紫さんの所に行きましょうか。５００年振りですし、顔見せに行きませんと」

「話の切り替え速ッ！散々羨ましいとか言ってた割には、結構あっさりしてるな！」

「だって、これから幾らでも構って貰えるではないですか。羨ましい、とは思いましたけど、私はそれ以上の事をして頂くつもりですから」

ふふっ、と、まるで子供のように純粋な笑みを浮かべる鑑枷。
だが話の内容が真っ黒である。悪い意味で純粋ではあるんだが。
いや、こいつが黒い、とかじゃなくて、道徳的にあうとって意味だ。
俺の記憶では、こいつは人よりも『道徳』を大切にしていたような……

「なあ、良いのそれ？お前のお得意の『道徳』的には良いのそれ？」

「……九十九？『道徳』、というものは、人間が人間らしく生きる為に必要な事です。が、私と九十九は人間ではないでしょう？ならば、何の問題も無いではないですか」

「それ言っちゃ色々お終いだろ！？お前そんな奴だっけ？」

「ええ。私は態度には出しこそしませんでしたが、昔から……？」

言葉を途絶えさせ、額に手を当てて考え込む鑑枷。小さく「昔？私の昔は……」とか「いえ、昔から態度には出してた筈……」とか、自分の昔の事を思いだそうとしている様である。

思い出そうとする、という事は、忘れている、という事だろうか。

まあ、それならば、もう５００前の話だから、不思議では無いだろう。

「何？忘れたのか？だとしても不思議じゃ無いだろう。５００年も昔なんだし」

「いえ、５００年前とは言っても、私は擬似的な封印、眠っていたのと同じですから、体感的にはまだ一日前なのです。ですから、思い出せる筈なのです。いえ、思い出せてはいるのですが、こう、食い違いがみられるというか……」

「食い違い？」

「ええ。先程も言いました通り、私は昔から態度には出していた筈なのです。……記憶の中では」

「でも、俺はそんな事知らない、と。だから食い違い？」

「ええ。私にも『態度に出していない記憶』もありますし」

「……どういう事？」

「私には、記憶が二つある、という事です」

「そりゃ何というか……どちらかが偽物って事だろ？どっちが偽物だと思う？」

「……強いて言うならどちらも、です。どちらも現実味が薄く、どちらかが本物の筈なのですが……判断し辛いですね」

「そうか……」

はあ……面倒な事が一つ増えたなぁ。しかもまた記憶関係。ただでさえ俺の記憶喪失の件があるってのに、今度はこいつの記憶の混乱？全く、訳が解らん。俺にどうしろと？

悪いが記憶なんて曖昧なもの、俺に解る訳ないだろうが。多分よっぽどの天才でも無理だろ。それこそ八意さんでも、だ。

……でもまあ、記憶なんて無くったって、良いんじゃね？と俺は思うんだが。

正直ね、大切なのは昔じゃなくて今だと思うんだ。
今迄、では無くてこれから。人間過去は変えられないが、未来はどうとでも出来るのだ。
……うん、これは基本永く生きる妖怪、ひいては神様特有の思考だな。人間、とかいったけど、やはりこの考え方は人間には向かないと思う。

「……やはり、紫さんの所に行きましょう。あの人なら、何か知っているでしょうから」

「正直、俺は記憶なんてどうでも良いと思うが。というか、もの凄く紫の事信用してるけど、何でだ？」

「親友、ですもの」

「……初耳だ……」

そんな事聞いた憶えないんですけど。え？何？俺だけ仲間外れ？それって酷くねぇ？何だこの疎外感。激しく不安になるんだけど。
もしかしたらこいつ、俺より友達多いんじゃね？って不安になるんだけど！
５００年眠っていたこいつに、俺が友人の数負けてたら、しょっくなんだが！……いや、別に悲しくなんて無いよ？ただ、色々と衝撃を受けるなぁと思っただけだよ？

「あら？言っていませんでしたか？他にも、幽々子さん、文さんぐらいでしょうか、親友と呼べそうなのは」

「負けてた！５００年前の人物に友人関係で負けてた！しかも数と親密度共に！」

流石にこれは衝撃的だ！いや、悲しくなんか無いけどね！嘘じゃ無ぇぞ！？

たった一人の差だが、これは悲しい！あ、いや、悲しく無い！悲しくなんて無いんだからな！本当だからな！

「友人程度なら、風見さん、稗田さん、伊吹さん、ぐらいでしょうか……意外と少ないのですね、私のご友人」

「もう止めて！俺のらいふは０よッ！」

更に友達追加してきやがった！しかも「少ない」とか言いやがった！だったらそれより少ない、しかも親友いない俺は何だってんだ！何？あんた俺に恨みでもあんの？……うわぁぁあぁぁん！

「お前なんて、お前なんて……嫌いだぁ！」

「!!?……そう、ですか。……嫌い……ですか……死にましょう」

「そこまで!?俺に嫌われたぐらいで死にたくなるの?!」

俺の「嫌い」発言を聞き、鑑枷に衝撃が走った!……ような気がした。

実際に衝撃的な発言かましたのだから、気のせいでは無いのかもしれないが。

というか、その表情は止めて欲しい。まるで『生きる意味を見失った人の目』だ。

解りやすく例えると、大切な人を死なせた岡崎さんみたいな。

要は死んだ魚、とかではなく、生ける屍、と言った方がしっくりくる表情だ。

「……あなたに好かれなくとも良いですが、嫌いになられては、死ぬしか無いじゃないですか……」

「だから何なのその理論!もっと命を大切にしようよ!『ガンガンいこうぜ!』だけじゃなく、時には『いのちだいじに』だって必要だよ?!」

というか何気に酷くないか、好かれなくても良いって。それって結

局、俺の事どうでも良いって言ってるようなもんじゃね？

「ですから！あなたに嫌われた命など、大事にした所で何の役にもっ……！」

鑑枷にしては珍しく強く、涙さえ浮かべて何かを主張しようとしていたみたいだが、先程と同じように、突如として言葉を切り、頭を抱え始めた。

暫くは、まるで自分の記憶を絞りだそうとするかの様に頭を押さえていたが、ぽつり、と俺にも聞き取りづらい程小さな声で一言呟き、それからすっ、と頭を上げた。

「九十九、やはり紫さんの所へ向かいましょう。色々と、気になる事がありますし」

「……そうか。まあ良いが……」

こいつが行きたいというのなら、俺は止めんがね。だがせめて、だ。行くのならば。

「せめて、その髪はどうにかしようか。長すぎて邪魔なんだが」

５００年伸びっぱなしの髪は、長さが軽く5めーとるは超えていた。出掛けるにしても結ぶにしても、流石にこれは長過ぎだろう。常識的に考えなくとも。

というかこれのせいで水から上がってこれなかったんだろうが。自ら。……すまん、言ってみたくなっただけだ。忘れてくれ。

とにかく、だ。何故こいつはこんなにも髪を伸ばすのだろうか？何か理由でもあるのだろうか？いや、理由そのものは聞いた事はあるが。たしか「好きな人が髪の長い方が好きだから」だったか。流石に５００年も経ってれば、その「好きな人」も、死んでるだろうに。……そういえば、顕冴も切ろうとしなかったな。今度聞いてみるか。

「なあ、何で髪切らないの？好きな人の為って言っても、５００年以上前の事だろ？流石に……その、何だ。死んじまってるだろうし、やたら長ければ良いってもんじゃないだろ？」

「……邪魔、ですか？」

「ん？いや邪魔っていうか……うん、お前が歩く時とかに、邪魔じゃないか？」

俺に問いかけ、その答えを聞いて、「なら切って下さい。というか切ります」と、いきなり刀で……って、どっから出したその日本刀！ちょ、危ねぇって！

「待った！切るから、俺が切るからそんな危険な事するな！自分で切れる訳無いだろ！怪我したらどうする！？」

「……すみません…」

「まったく。いきなり自分で切ろうとする奴があるか。しかも日本刀で」

「ですが、本の中では『きーほるだー』なる物で髪を切る人が居ましたが？」

「……その本、どこから出した？」

「私の知らない部屋があったものですから、捜索していたら見つけまして」

「……お前一人で読んだのか？」

「いえ？慧音さんと顕冴さんの三人で拝見しましたが？」

おま、それ顕冴が見ないようにって隠してた本！
しかも隠してたの俺の部屋の下！わざわざ掘って作ったのに！こい

つ、隠し場所が部屋だと思い込んで捜索しやがった！
しかもそれで見つけられたのが、よりによって『偽』の方、しかも『下』……だと？俺ぴんち！
あの趣味全開どころか天元突破しちゃってる『偽』の、さらにアレな事が書いてある『下』の方を見られたとか……お父さん恥ずかしくて仕方ない…！
ああ、俺の性癖誤解され……ん？あれは妹だった。娘ではなかったか。良かった、なら問題は無……！

俺の趣向が何か誤解されていないかと思いを馳せ、特に問題はなさそうだ、と思った瞬間、目の前の顔を見て、思い出した。

（そういや鑑枷（こいつ）、俺の妹って事になってるんだったー！）

あうとー！俺オワタ！人間関係的な意味で！
今度からあの二人に蔑むような目で見られると思うと悲し……あれ？おかしいな……想像するだけで気持ち良くなってきたぞ……？
俺のこれからの事など知る由もなく、目の前のこいつは可愛らしく首を傾げてやがった。何だろう、俺が悪いのに、イラッとした。

「……はあ……よし、切ろう。長さは？」

結局、俺は現実から逃げる事にした。現実とは、常に残酷なもので、敵う相手では無いんだよ。そんなものは相手にせずに、逃げるのが一番だと思うんだ。
逃げても何も始まらない、とは良く言うけど、逃げるしかない時はどうすればいいんだろうね？

（九十九よ、逃げてはなりません）

逃げようとしていた俺の脳裏に、突然神様の声が響いた。

（そんな事言ったって、俺、このまま逃げなかったら殺される）

（大丈夫です。あなたは死にません）

（いやそうだけど！死にはしないけどね！このままだと俺、鑑枷に八つ当たりで、酷い事をしてしまいそうで……）

（……やっておしまいなさい）

（……神様、聞き間違いかな？今なんか物騒な事言われた気が……）

神様としては、えらく物騒な言葉を頂戴したような気がした。
我が耳を疑い、神経も疑い。いやいやそんな事言う訳無いよねー神様。とか思いながら、確認の為に問いかけてみる。

（やっておしまいなさい、と言ったのです。その者は嫌がりはしないでしょうし、むしろ望ん……まあ、とにかく。問題はありません）

（いや問題しか無いでしょ神様。……こんなのが俺の隠された意志だとか、信じたくないわー……）

神様の声、それはすなわち俺の心の声。心の奥底で俺が思った事を実行に移させようとする声なのだ。
今迄だってそうだったし、今回のもおそらくそうなのだろう。口調が丁寧なのが気になるが。
いやでも幾ら俺の心の奥底って言っても、これは流石にいかんだろう。というか俺って実はこんな事考えてたのな。死にたい。

（さあ！速く襲ってしまいなさい！めくるめく快楽の世界に行きましょう！）

さっきからひっきりなしに神様がせかしてくる。これ、襲ったら止

まらないだろうか。
……いやいやいや！だから駄目だって！……でも、これ結構うるさいしなぁ…。

そんな感じに俺が悩んでいる事を知る訳もなく、これから俺に襲われようかという鑑枷は、小声で何事かを呟いていた。
何故だかイラッとして、何を言っているのか確かめたくなったので、耳を近づけてみる。

（他に誰もいない今が好機です。さあ、今です！がばっと行っちゃいなさい！）
「……です。さあ、今です！がばっと行っちゃいなさい！」

「お前か！」

今もなお脳内で流れ続けている神様の台詞と、鑑枷の呟く台詞が一致していた。全く同じ時に、全く同じ台詞が脳内と耳の両方で聞けた。すてれおって、ちょっと気持ち良い。
というかお前が犯人か。何？襲わせて何がしたいの？

「何って……所謂まぐわいというものを」

「下品だから言わない！というか恥ずかしくないの？！」

怒鳴られても全く悪びれた顔をせず、女性が言うのには憚られるであろう言葉を、さらりと言いやがった。
しかも普通に心を読みやがった。恐ろしいなこいつ。

そして恥ずかしくないのか？という俺の問いに、「何が恥ずかしい事がありましょうか」と、胸を張って宣言した。まるで「間違っているのは私じゃ無い！世界の方だ！」と言わんが如く。……全面的にお前が間違っていると思う。
その堂々たる態度は凄いと思うが、話の内容がアレなので、素直に感嘆できない。というかしたくない。なんでそんなに誇らしげなの？

これ以上突っ込むと、蛇どころか龍が出てきそうなので、流して、無かった事にする。

「で？どのくらいの長さが良いんだ？背中ぐらい？」

「はぁ……。膝の辺りでお願いします。自分でも長い髪というのは好きなので」

「それでも長過ぎだと思うが……まあ、良いか」

俺も好きだし、と小さく聞こえないように呟いて、鋏を取ってさっと切り始める。

……鑑枷が小さく笑った気がしたが、気のせいだと思う。思いたい。

俺はさっきから、結構無遠慮に、大雑把に切っているが、これは鑑枷だからである。他の人の髪を切る時はもっと丁寧である。ちなみにどこから鋏を出したのかは企業秘密だ。

何故鑑枷の場合のみ大雑把なのかと言えば、偏にこいつの体質が原因だ。

こいつの体質、それは髪が伸びる以外の新陳代謝が存在しない、というものだ。

物を食わずとも髪は伸びるが、物を食っても体重は増えず。

更に言えば物を食っても髪は伸びるが、物を食わずとも体重は減らない。

眠れはするし、物も食べられる。が、そのどちらもせずとも生きていける。

どちらもせずとも髪は伸びるし、髪質はとても良いまま。あと幾ら食べても太らない。

垢もでないし、汗も掻かない。埃は付くが洗えば落ちる。

とまあ、なんとも羨ましいというか、物理法則何処行った、人類涙目、な体質である。

そんな訳で代謝が無い、という事は、トイレも無い、という事だ。

まさしく『～はトイレなんかしない！』を地で行く奴だ。

なので、なのかどうかは解らないが、大雑把に切っても、取り敢えず切り揃えれば何とかなってしまうのだ。髪のだめージを気にする必要もないし。……日本刀で切った方が早いような気がする。この場合だと。

そうして大体切り揃えた後、俺達は紫の所を目指して出発した。

「で、紫って何所に居るんだ？」

「……え？」

「…………え？って……知ってたんじゃないの？」

「いえ、私はてっきり九十九が知っているものだと。５００年眠っていた私が知る訳ありません」

「そりゃそうか。……んー……じゃあ、とりあえず博麗神社に行こう。多分居る」

「居なかった場合はどうするのです？」

「とりあえず居座る。来るまで待つ」

「……先に謝っておきましょう。博麗神社の方、申し訳有りません」

直接言おうとしない所が、こいつらしいっちゃ、らしい…か。
………？こいつらしい、って、何がこいつらしいんだ？
悪いと思いはしても、直接謝ろうとしない、変な気位の高さ、だろうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「知らないわよ、そんな個人的な現象」

博麗神社に歩いて行き、案の定というか何というか、結局紫は博麗神社でくつろいでた。
鑑枷の姿を見て、一瞬だけ驚きの表情を浮かべ、次いで嬉しそうな顔をしたと思ったら、俺の方を見て何か嫌そうな顔しやがった。失礼な。
そうして再会の挨拶もそこそこに、今回の気になる事、鑑加の記憶の異常の事について聞いた結果が？？？

「全く、皆私の事を辞書か何かと勘違いしているんじゃないかしら。私にだって知らない物くらい有るわよ。何でもかんでも私の所に聞きに来て。面倒ったらないわ」

「まあ、それはすみませんでした。……そうですか、存じませんか。まあ、積もる話もある事ですし、そちらに話を移しましょう。して、皆聞きに来る、というのは？」

「ありがと。そうねぇ……最近の話になると……」

？？？これである。
机の上に顔どころか上半身を乗せて、というより寝そべって対面に

座っている鑑枷に愚痴る紫の姿が、そこにはあった。
普段の余裕そうな笑みは消え、変わりに不満顔で不平を垂らすその姿は、良くも悪くも『幻想郷の賢者』のいめーじをぶち壊している。珍しい事もあったものだ。『あの』紫が愚痴を洩らすなんて。そこの博麗の巫女も驚いている。かくいう俺も相当だ。
しかし、本人と鑑枷は驚いておらず、当たり前の様に愚痴る紫と、笑顔で聞き続ける鑑枷。
慣れている、という事だろうか。慣れる程に、愚痴を零す程に、この二人の仲は良いという事だろうか。
親友、という言葉は、間違いでは無いのかもしれない。

「……ちょっと、あの女性、誰よ？人間じゃないみたいだけど、妖怪でもなさそうだし」

紫が余裕の笑みを崩し、人に愚痴を零すという、『世界征服を完遂する』という夢の方がまだ頻繁に見る事の出来る光景に、しばし呆然としていた博麗の巫女だったが、頬を叩いて気付けをして、この場で唯一暇そうにこの事態を眺め、かつ件の鑑枷と共にやって来たので、事情を知ってそうな俺に説明を求めてきた、という事だろうか。
期待を裏切る様だが、俺に聞かれてもなぁ。俺だって目の前の光景は信じ難いのだ。

「誰って……俺の妹。なんでも、紫の親友らしい。本人曰く」

「妹!?あんたの妹!?あれが?!嘘おっしゃい!全然普通でしょうが!」

「それは俺が普通では無いという事か?まあ、そうなんだけど。安心しろ、あいつも普通じゃない。何せ紫の親友やってるみたいだし」

「……その親友っての、嘘……じゃ、無いみたいね……。驚いたわ、紫に幽々子意外の親しい友人が居たなんて」

「その西行寺さんも、あいつの親友の一人らしいぞ?」

「……嘘……」

「だと思いたいなぁ」

この分だとまず本当の事だろうが。世界って、不思議で満ち溢れているんですね。

俺達が暫くの間呆然としていても、紫の愚痴は終わりそうに無い。ので、俺も隣の博麗の巫女とくっちゃべって時間を潰す事にした。

「なあ博麗の。次の宴会っていつやんの?」

「暫くは家の神社では開かないんじゃない?最近は別の場所で開催する事が多いし。この前の宴会が、3ヶ月振りにここで開いたやつ

だったし」

「ふーん。他の場所って？」

「妖怪の山とか、紅魔館の敷地の一部を借りてたりしてるわね」

「うわ、何だそのぴんぽいんとでの俺の行きたく無い土地狙い撃ち」

「選考基準が『広くて、周りに迷惑掛からなくて、何より変態が来ないような所』だからね。必然的にそうなるわよ」

「それっていじめじゃね？俺ってもしかしなくてもハブられてるよね？」

「あんたが居ると面倒事しか起こらないのよ！」

「失敬な！何故そんな事が言える！俺は酔わないし、迷惑は掛けてないぞ！」

「酔わなくても存在そのものが面倒なのよ！『類は友を呼ぶ』って知ってる！？あんたの周り、一癖も二癖もある奴らばっかり集まるのよ！」

「おおう。俺ってもしかして大人気？はは、いやスマンね」

「何なのその恐ろしいくらいの自意識過剰さ！？確かに大人気だけどね！『殺したい』って皆集まってるけどね！」

「人気の方向が思っていたのと違った！え？何？俺の周りに集まってくる人達って、みんな俺のタマ狙ってるの？！」

納得。今迄宴会ではやたらと物が飛んできていたのだ。酒瓶とか弾幕とか妖怪とか弾幕とか中国とか弾幕とか弾幕とか。
酔った勢いでかな?と思って特に何も言わなかったんだが、俺狙われてた訳ね。道理で物がばんばん飛んでるのに、他の奴らに被害が出ない訳だ。
今迄ちょっと疑問に思っていた事が解決してすっきりした。……釈然としないが。
すっきりしたのに釈然としないとはこれ如何に。

「そうか……そうだったのか……俺、狙われてたのか……」

「今迄気付いて無かったの?!まあ、そんな訳であんたが居ると落ち着いてお酒が飲めないのよ。宴会だけど。解ったでしょ?じゃあこれからの宴会には「参加するぞ?」話聞いてた?!ねえ、聞いてた!?」

「勿論。俺が狙われてるって事だろ?生命的な意味で。だったら行くしか無いじゃないか」

俺がそうあっけからんと答えると、さっきまで興奮していた様子だった博麗の巫女は、溜息を吐いて頭に手を当て、如何にも呆れたという雰囲気になった。……何故呆れられた?

「今の何処に行きたくなるような要素があるのよ……」

「俺だからな、仕方無い」

「いやそうじゃなくて。確かにあんたは変態だけど、流石に命狙われてるんだったら、行かないわよ？少なくとも私は行かない」

「殺意程度じゃ、俺は考えを変えようと思わんぞ。だって不死だし」

「だからそういう事じゃなくて……こう……嫌にならないの？人から殺意を受けるのって」

博麗の巫女は、言葉にならないものを何とか言葉に出そうとして、というより無理矢理言葉に表そうとして、途中で諦めたのか、ごくありきたりな事を聞いてきた。……博麗の巫女っていちいち言うの面倒だな。長いし、以下は巫女で良いか。

「嫌になんてならないさ。俺は人から向けられるものは、どんなものだって受け取るって決めてるんだ。というか、受け取りたいんだな。例えそれが憎悪でも」

「……理解し難いわね。やっぱあんた変態だわ」

「褒め言葉をありがとう。俺は人より懐が深いって思ってくれてた

らいいさ」

「不快の間違いじゃない？」

「おま、人が折角纏めようとしたのに！」

巫女は俺の文句を受け流し、渋い顔を幾分か和らげた。
というか心なしか笑ったような気がする。微笑んだ、とも言う。まあ、気がするだけだから、本当に笑ったのかどうかは解らん。少なくとも今は何時もの仏頂面である。

「纏められて無いわよ。……あんたが変態だって事は十二分に解ったけど、やっぱり宴会には参加させられないわ。面倒事が起こると片付けも面倒になるのよ」

「そうか。参加出来んか。残念」

「…えらくアッサリしてるわね。もっと食い下がるのかと思ったけど」

「俺は子供か？俺は人に嫌われる様な事はするが、人に嫌な事はしないんだ」

「どの口が言うか。あんたは人の嫌がる事してばっかりでしょ」

「まあそうだけど。これでも引き際は心得ているんでね。そんなに

嫌なら無理に参加しようと思わんさ」

俺の言葉を聞いて、巫女は意外そうに目を見張り、口元を手で隠した。何だその解りやすい驚愕の表現の仕方。気分を害す通り越して呆れるわ。

「意外。あんたは人の嫌がる顔見て、快感を覚える最低な奴だと思ってたけど」

「俺って本当にどんな風に思われてるんでしょうね。まあ否定はしないが、俺は相手が本気で心の底から嫌がる事はしないぞ」

「……あんたこの前、本気で私の事襲おうとしてたわよね？」

……この前、というのがいまいち思い出せないんだが。はて、俺が巫女に襲いかかろうとする、というより巫女を見かけるのって、そうそう無い筈。何故なら基本俺は博麗神社に近付かないから。最期に見たのは……友達創りに来た時か。

そのときはそんな事した憶えは無いから、記憶がないここ最近の事、だろうか。

記憶がある、始まっているのが……そうだ、射命丸が突っ込んできた前後だ。

で、記憶の無くなってる直前までで、一番新しい時系列の記憶は……慧音が家に料理をしに来た日の、布団に入る辺りか。そこからは

うまく思い出せん。
で、その憶えている記憶の合間、空白の二、三日間の出来事、と。
うん、成る程。さっぱり解らん。

「俺は何時だって本気だぜ？」

「そういう次元の話じゃなくて、あの時萃香が顔出してなかったら、あんた本気で襲っちゃう所だったでしょ！止まる気配が無かったもの！」

萃香が顔を出す？……あ～…あれか。おｋ。思い出した。
そうそう、あれね。あれは確かに邪魔が入らなかったら頂く所だった。
でも、あれ？あの時って、巫女は確か……

「あれ？確かあの時って、お前さん、嫌がって無かったよな？」

「……あの時は、気が動転してたのよ。男にあんなに顔近付けられたのって初めてだったし……頭の中真っ白だったの。今思い出したら嫌で仕方無いわ」

ああ、成る程ね。嫌がる気配が無いとは思っていたけど、要は何も

考えられてなかったって事ね。そりゃ気配も何も無い筈だ。

……つー事は、あれ？俺って最低？

「大変申し訳御座いませんでした。どうぞ煮るなり焼くなり好きにして下さい」

「いきなり土下座！？」

「だってお前、本気で嫌だったんだろ？当時はともかく今現在は。なら謝るのが筋ってもんだろ」

「……あんた、そんなにまともな奴だっけ？私の記憶では、人に謝ってた所なんて見た事無いんだけど…」

「失敬な！俺だって謝った事ぐらい有るぞ！」

「本当に？心の底から？」

「そんなのお前、勿論決まって……あれ？おかしいな。本気で謝った事、ここ最近無い気がする……」

謝ったとしても、精々が「サーセンｗｗｗ」れべるだった記憶しかない。

……俺って、もしかしなくても最低な奴じゃね？

自分の非を非と認めず、謝罪の時すら人をおちょくる様な態度。

どうみてもさいていやろうです。ほんとうにありがとうございました。

「どうせそんな事だろうと思ったわよ。……あれ？それじゃあ私、結構希稀少な部類？」

「そうだなぁ……結構稀少だなぁ。最期に本気で謝ったのが、１０年近く前の先代の博麗の巫女にだし、その前も先代の……あれ？本気で謝ってるの、博麗の巫女だけだわ」

「……稀少？」

「……博麗の巫女にだけ本気で謝るって意味では。逆に言えば博麗の巫女にとっては当たり前の事？」

「そんな当たり前、聞いた事無いわよ」

「俺もだ」

むすっとぶすくれる巫女に、快活に笑う俺。すごく対照的だった。ちなみに何で俺が笑っていられるのかというのは、昔にこんな感じの会話をしていたなぁ、と、ふと思い出したからだ。というか思い出してしまったからだ。

『すいませんでした！マジすいませんでした！！』

『まじ？なにそれ日本語？』

『くっ！これだから幻想郷の人は！かるちゃーしょっくとはこの事か！』

『どうでも良いけど、もう燃やしても構わないわよね？』

『良くないよ！こうして必死にしっかり謝ってるじゃないか！温情をくれ！』

『それが人に物を頼む時の態度？』

『この度は、誠に申し訳御座いませんでした。どうかこの哀れで下賤な変態を、あなた様の寛大な心で許してやっては下さらぬか？！』

『後半口調が変。却下』

『にべもない！？そこを何とか！此度は誠に申し訳なかった！！』

『……はぁ、まあ、あんたがこんなにも謝ってくる事何て無かったし、今回は本当に悪いと思っているみたいだし。良いわ、今回は特別』

『マジで？！ああいや、本当に？！ありがとう？！大好き！』

『殺すわよ？』

『正直、スマンかった』

『すまん？なにそれおいしいの？』

『これだから幻想郷は！あ、ちょっと待って、止めて、御免なさい、謝りますからっ！……アッーーーーーーーー！』

しばらくしてから、倒れ込み痙攣している俺に、博麗のが話し掛けてくる。

『今回は本当にどうしたの？あんたが本気で謝るなんて、私は一度も見た事無いんだけど』

『どうしたの……って。いや俺でも謝る時は謝るぞ？ただ、そういう機会が無いだけであってだな……』

『あんたは一生謝り倒しても足りないくらいの事やってきてんでしょうが。……でも、それなら私は結構珍しい例なのかしら？』

『ん～……俺が最近本気で謝った事は……あれ？おかしいな、思い出せないぞ……』

『……結局、私みたいなのは、そうは居ないって事ね』

『そうだなぁ……そういう意味では特別だなぁ……。あ。べ、別にアンタの事が好きって訳じゃ無いんだからねッ！』

『別に良いわよ、好きじゃなくて。……その話し方、気持ち悪いから止めなさい』

『すまん。そして嘘だ。めっちゃ好き。大好き。愛してる』

『子持ち人妻に掛ける言葉？……未亡人だけど』

そんな感じの会話を、先代の博麗の巫女と繰り広げたのを思い出す。どうやら博麗の巫女には、俺に本気で謝罪される事と、腐れ縁になるという呪いみたいなものがあるらしい。

その事を今現在の博麗の巫女、目の前の博麗霊夢に伝えると、失礼にも露骨に嫌そうな顔をして、次いで何やら諦めたように、何かを流すかのように溜息を吐いた。

「確かに腐れ縁でしょうけど、それ以上にあんたの性根が腐ってない？」

だれうま。いやむしろ俺の性根が腐ってたばかりに縁が出来てしまっているような。これぞ正しく『腐れ縁』、ってか？

＝＝

結局。あの後も延々と紫の愚痴は続き、それに伴い俺達の会話も延々と続いて。
話題が特に無い会話って、結構苦痛、というか難しいのだ。俺は話しているだけで楽しいからそんな事は無いが。

で、丁度話す事も本格的に無くなってきた所で、紫の「じゃあ、今回はこのぐらいで」という言葉と共に、あの長い愚痴はようやく終わりを迎えた。
……今回は、って。このぐらいは、って。
またこれからよろしくね。というにゅあんすと、まだまだ足りないが今回はこれぐらいで勘弁してやろうみたいなにゅあんすが篭もっているが、あんたどんだけ話したと思っているんだ。
二時間だ、二時間。愚痴だけで二時間で、更にそのうえまだ足りない、と？

もう勘弁して下さい。俺と巫女は、割と切実にそう願った。
が、どうやら鑑枷はそうではないらしく、むしろ嬉しそうに、笑顔で承諾、いや快諾していた。ドＭか。
まあ、本人は久々の『親友』との会話が楽しいからだろうとは思うが。…………あれ？でも「体感的にはつい先日」みたいな事言ってなかったっけ？
…………深く考えたら負けな気がする。精神的な意味で。
まあ、あれだ。結局乙女心は解んねぇって事だ。…………乙女って言えるのかどう「九十九？」なんでもありませんっ！

で、俺達二人は博麗神社から退散する事にした。去り際に巫女が「やっぱあんたって、面倒事しか運んでこないわ……」とか、酷く疲れた様子で呟いてたのが印象的だった。安心しろ、俺も疲れてる。そうやって、鳥居を潜った所でさあ疲れたし帰るかって時に。

「さあ九十九。これから人里に行きましょう。稗田さんにも会っておきたいですし。……稗田さんって、今人里に居ます？」

「居るけど……え？何？今から？」

「？今はまだお昼ですよ？何か問題でも？」

いや無いけど。問題は無いけど。会ったとしたらじゃあ何時行けば良いんだってくらいに無いけども。

こちとら疲れてんだよ精神的に。終わりの無い物事を待ち続けるって結構くるんだよ？……直接聞いてたのに、全く疲れが見えない鑑枷は、すごいなぁと思いました。

そして『本当にこいつ変態なんじゃないか？』とも思いました。

近々顕冴の教育も含めて、『永遠亭』に行こうと思いました、まる。

……はい現実逃避終了ー！もうやだ行きたくない。だが行かない訳にもいかない。……笑っていいぞ？

どうやら俺の一日は、まだ終わりそうにない。鬱だ生きよう。

十二節目（後書き）

はい、相も変わらずな原作ブレイクっぷりですこと。
皆様お久し振りです。今回は大変遅くなりました。まあ待ってる人なんてものは居ないのでしょうが。
それはともかく、今回は「先代博麗の巫女」に登場して貰いました。
回想の会話の中だけですが。
未亡人云々は独自設定。原作では先代が霊夢の肉親かどうかすら不明であります。ご注意を。

変な所で切っていますが、すみません。今回はこれで勘弁してやって下さい。
更新しないとまずいなぁと思ったんです。まだ続くんです。
前半と後半、同じぐらいかそれ以上の長さで続くと思うんです。
……ええ、そうです。諦めました。
今回このぐらいのものを書くのに二週間近く。その上これ以上の長さを書いたらどうなることやら、と思った次第です。

言い訳に過ぎませんね。誠に申し訳ない。

十三節目（前書き）

今迄のあらすじ

なんか髪切って、愚痴聞いて話して、疲れました。
面倒だったけど、楽しかった気がします、まる。

……作文?!

十三節目

さて、今俺達は前回の話にあった通り、稗田のに挨拶する為に人里に入っている。
時間帯はまだ昼間と呼べるであろう。二十四時間で表せば十五時程だ。

ちなみに『稗田』の、というのは代々幻想郷に存在する妖怪の辞典の様なもの、ぶっちゃけてしまえば妖怪大百科の『幻想郷縁起』を代々書き記している稗田一族の少女『稗田阿求』の事を指すが、何故に個人名では無いのかといえば、それは稗田一族の事情に由来する。
これもまたややこしい事情であり、説明が面倒だ。一言でいえば『同一人物』。二言で表すと『転生した同一人物』だ。
稗田一族は『稗田阿礼』から始まった家系で、もう１２００年は続いている由緒正しい通り越して絶滅危惧種の家である。『稗田阿礼』は色々と特別な存在で、その特別さを一例挙げるとするならば、『稗田阿礼は能力と記憶の一部を持ったまま転生する』、という事か。『稗田阿礼』の子孫、稗田一族の中には何百年かに一人、『稗田阿礼』の転生体、つまりは生まれ変わりの子供が生まれる。その子供は『御阿礼(みあれのこ)の子』と呼ばれていて、『稗田阿求』は『御阿礼の子』の九代目だ。
ちなみに、あくまで『御阿礼の子』が九代目なのであり、稗田一族そのものは百代を超えて続いている。

『御阿礼の子』が生まれるのは何故数百年に一人だけなのか、まずそもそも何故『稗田阿礼』は能力と一部とはいえ記憶まで保持したままの転生を許されているのか、それもまた話すと面倒なので各自調べてくれ。具体的には直接本人に聞くか慧音に教わるとかどうか

して。

とにかく。何故俺が『稗田阿求』の事を『稗田の』、と呼んでいたかが大体解ったと思う。要は『御阿礼の子』に限っては区別する必要は無いのだ。

またもや補足だが、鑑枷の友人の『御阿礼の子』は、六代目に当たる『稗田阿夢』という人物らしい。俺は『阿夢』には面識が無いから、らしい、としか言えない。

それと俺は、俺達は『稗田阿礼』にも面識は無い。少なくとも俺が幻想郷、またはその前身となった土地に辿り着いたのが、多く見積もっても精々１０００年程前の事だ。１２００年以上前の人物に面識が有ろう筈が無い。鑑枷が何時幻想郷に来たのか、正確な年月は知らないが、少なくとも俺より後に訪れているので、鑑枷も『阿礼』には面識が無い。

そんなこんなの本人にとっては正に死活問題、だが他人にとっては「ふぅん。大変だね」程度のお話はお終い。話している間にその『稗田阿求』の家の前に到着である。

……さて、着いた早々あれなんだが…俺って来る必要、無くね？

鑑枷は『居るのかどうか』を聞いた。それって要は家の場所は知ってるけど、今『御阿礼の子』が居るのかどうか解らない、って事だと思うんだ。『御阿礼の子』が生まれるのには大体百年弱の周期がある訳だから、運悪く『御阿礼の子』が居ない時期かもしれないと思った故の言葉だろう。

今回は運良く『御阿礼の子』が居る時期だったんだが、これは本当に運が良かったと思う。普通の人間なら一生の中で『御阿礼の子』に会えない場合もある、むしろそっちの可能性の方が高い訳だ。長い時間眠っていて、起きたのが丁度『御阿礼の子』が居る時期だっ

たってのは本当に幸運だったといえるだろう。

幸運だったのは良い。『御阿礼の子』が居るのも解った。なら、俺必要無くね？

いや正直面倒だし、相手も迷惑だろうし……ほら、塩盛られてるし、壁に『変態退散』って張り紙あるし。……この場合は普通、悪霊じゃね？

つか俺は悪霊か。失礼だぞ、悪霊に。

鑑枷が扉、というより門を開ける。挨拶も無しにいきなり。……流石にそれは、どうかと思います。幾ら知り合いだからって、挨拶せずに勝手に開けるというのは、ねぇ？親しき仲にも礼儀あり、って言葉があるじゃないか。……まあ、こいつのこれは、今に始まった事じゃ無いから矯正するのは諦めたんだけれども。

ちなみに稗田の家は割と大きい御屋敷だ。門があり、庭があり、離れがあり、そして人が生活している家屋がある。使用人は居るかどうか解らないし、家族構成は知らん。いくら俺でも他人の家の事情、しかも御屋敷を持つほど巨大な家のなんて知りようが無い。まあ、知ろうとしなかったってのも少なからずあるんだがな。

開かれた門をくぐり、庭を通過し、玄関の扉を開け…ないで離れの方に行く。『御阿礼の子』はその仕事の内容上、資料を多く納められる場所があると都合が良いらしく、稗田家は倉庫の代わりに離れに本などを収納し、そこでもっぱら『御阿礼の子』は生活している。

離れの扉を開くと、中には何やら書物を閲覧している紫と、それを緊張した面持ちで見守る少女が居た。逃げた。

「どこに行くつもりですか？九十九」

おしいー！九十九選手、人里を出るまであと５０ヤードの所で潰されたぁー！全然惜しくないとか、なんでヤード？とかいう質問は黙殺する！

何故逃げようとしたかだって？いやだって面倒な気がしたもん！紫居たんだぜ？間違いなく愚痴大会決行、それから手持ち無沙汰な俺は碌に話した事のない美少女と会話って流れになるだろ！前回の事をふまえたら！

……ん？今迄話した事無い人と会話って、仲良くなる為に必要な、必然的な事じゃないか？…って違う！今はそこは問題じゃない！

話す事は俺は別に構わんが美少女、稗田のが可愛そうだろ？常識的に考えて！

そう思ったので逃げようとしたのに！ごめん嘘付いた！ぶっちゃけ愚痴はもう懲り懲りだ！

つか何でここに紫居んの？！さっきまで博麗神社に居たじゃない！散々愚痴言ってたじゃない！移動早ぇよ出会い過ぎだよ偶然にも程があるよ！

チクショー！こんな事になるんならとっとと帰ってれば良かったー！

そんな事より早く逃げ……

「あら、変態さんじゃない」

「え……？うわぁ……」

見つかったー！つか失礼だな稗田の！うわぁって何だうわぁって！

「珍しいわね。変態さんが何の用かしら？」

「お前こそ何の用だよ。つーか移動早いな！さっきまで博麗神社に居たのにもう寛いでいるとか！」

紫は、床に寝そべって本を読んでいた。良いのか、それ。他人の家だろここ。

稗田のは注意したいのとは思っているのだろうが、生憎とそれを実行しろと言うのは酷だろう。

何せ紫相手である。苦言を呈したらそれだけで殺される可能性がある。稗田のならば殺される事は無いだろうが、少なくとも俺は殺された。過去に経験済みだ。

「私の能力を忘れたのかしら？『スキマ』で移動すれば一秒も掛からないわよ」

「流石紫さん。無駄な所に力を入れる。そこに痺れも憧れもしないがな！」

でしょうね、と何やらりあくしょんが薄い。反応を、反応をおくれ！悲しくなっちゃう！

……というより、何だ？何だか違和感が……。

「お久し振りですね。いえ、初めまして、でしょうか」

「あ～……。すみません。初めまして、です」

俺と紫を無視して稗田のと挨拶をする鑑枷。初めまして、と聞くのは記憶の有無の確認だろう。稗田の返答は『はい』、つまりは鑑枷の事は忘れてしまっている、という事だ。

返答を聞き、少し残念そうな表情を浮かべる鑑枷だったが、すぐに笑顔になる。

「では自己紹介からですね。私は八神鑑枷と言います。六代目『御阿礼の子』、稗田阿夢さんのご友人をさせて貰っていました」

「そう……ですか。……すみません、憶えていなくて」

「いえいえ、構いません。またやり直せば良いだけです」

「ありがとうございます、鑑栂さん」

なんだか感極まったように涙浮かべながら笑う稗田の。色々悩みとかが有るんだろう。

そうして『やり直し』の一環だろうか、鑑栂が稗田のに今迄の自分達の思い出を話し出す。一緒に調べに行った妖怪にボコボコにされた件とか、色々。話を聞いた稗田のはそんな事が、とか無謀だったんですね、とか、過去の自分の行動に呆れながらも笑っていた。

……終わりそうにねぇ。愚痴大会では無かったが、思い出話大会か。さっきは鑑栂が一方的に話されていた側で、今度は鑑栂が一方的に話す側だが。

愚痴大会にしろこれにしろ、俺ともう一人が凄く暇なのは変わりない。ほら見て紫さんの表情。最初は微笑ましそうに見てたのに今は呆れ顔。いや、始まって２　分くらいでそんな顔するってのもどうかと思いますがね。今から呆れてたら、これが終わる頃には死んだ魚のような目通り越して死んだ魚みたいになるんじゃなかろうか。こう、全く動かないみたいな。動物は死んだらすべからく動かなくなるから魚の必要無いけど。

「なあ紫。これ何時終わると思う？賭けようぜ。三時間後に３００ペリカ」

「……何よその単位。何所の国のお金？」

「夢の国」

「論外ね。せめて円にしてから出直しなさい」

「最低らいんが円?!お前どんだけ自信あるの?」

といっても、１ペリカは十分の一円な訳だから、円に換算すると３０円なのだが。まあそこは言う必要はないか。

「その気になれば何時でも終わらせられるわよ?」

「卑怯だ!そんな事、賭け事でやっていいと思ってんの?!」

「あら、賭け事には不正は付き物でしょう?そもそも貴方は、ただでさえ存在そのものが原則破りなうえ、提示した単位もインチキじゃない。このぐらい妥当でしょうに」

「単位は円に変更になったんだからその件は無効だろ普通!」

「じゃあ貸し１ね」

「だぁーもうちくしょー!ノリ悪いなー!」

…違和感の正体が何となく解った。今の紫さん何かノリ悪い。最初の方の俺の微妙なボケにも何か反応薄かったし。

これはおかしい。まず最初に投げ掛けた質問の答えが普通すぎる。
最近の紫なら「私を誰だと思っているのかしら？」とか、どこぞのアニキっぽい台詞で返す所を、「私の能力を忘れたのかしら？」だ。
あまりにも普通である。
それになんとなく、感覚的なものでしか無いが、どこか『よそよそしさ』がある。一歩外に居るというか、踏み込んでこないというか。
心理的な距離が、先程博麗神社で会った時より大きく感じる。
その心理的な距離は、一応とはいえ俺と友人関係を築く前のようで
――――

「で、変態さん？何で、彼女が此処に居るのかしら？」

機会を窺っていたのかどうかは知らないが唐突に質問してきた。彼女、というのは鑑枷の事だろう。

「何故、って……そりゃお前、思い出したからな」

「…言い方が悪かったわね。じゃあ何で、彼女の事を思い出したのかしら？今迄ずっと忘れていたのに、何故今頃？」

…そうだ。何で俺、あいつの事思い出した、いや、思い出せたんだろう。

今迄ずっと、時間にして３００年程前に忘れてしまっていた事なのに。
そして解らないのは、『何故思い出せたのか』だけじゃない。『どうしてあそこから出したのか』が解らない。
今現在詳しい事は思い出せないが、とりあえず鑑枷自称で『封印』だ。何か理由が有る筈。
ただ封印気分を味わいたかったから、何て理由では無い、語らなかった本当の理由が。
わざわざどうこうするまでもなく、封印気分なんてものはもうとっくに、散々味わっている筈なのだから。
という事は『封印』しておく理由はありこそすれど、出す理由が無い。まあ、あの時は慧音の月一の仕事が絡んでいたので、理由はあるにはあったんだが。
…別に、そうまでして慧音に仕事させようとは思わないんだけどなぁ……。

「そうだな…なんでだろうか？」

「自覚は無し、ね。…無意識下に働きかけられた結果かしら……でも……」

「ん？何だ、何て言ったんだ？」

「ああ、気にしないで。それより貴方、最近自分の周りで変わった事はないかしら？貴方の思考でも、あの娘の事でも、何でも良いわ。何か変化した事はない？」

変わった事、ねぇ……変わりすぎて元のまま、なものの方が珍しいぐらいに変わっているな。うん。
俺の思考と身体の事、顕冴の態度とかの事とか。ここ最近で色々と変わった。

「そうだな……顕冴の態度が色々変わった事と、俺の身体の事だなぁ…」

「貴方の周り、全て変化してるじゃない…。具体的に話して頂戴。特に貴方の身体の事については」

「そんなに俺の事が気になるのか？まさかお前俺に気が……解った話す。茶化さないで話すから」

このクソ真面目な空気を和らげようとしたら、どこからか取り出した傘を突きつけられた。
どこから取り出した、とかはもう解ってる。流石紫さん、反則っぷり凄いです。正にりあるドラ〇もん。
そして素手で何かしらしてこない辺りに、やっぱり距離を感じる。
あれか、直接触りたく無いってか。
やっぱりノリ悪い。普段の紫なら俺がしりあすな空気を壊そうとしたら怒らな……いや、普通に殴るか蹴るかしてくるな。…そこまで変わった訳じゃ無い…のか？

「あ～……顕冴は、何かやたらとくっついてくるようになったな。俺の身体は、再生速度が微妙に遅くなったのと、記憶が一部飛んでたり、力が弱くなってたりするな」

「殆ど一大事じゃない！何で言わなかったの？！」

「だって、言う必要性を感じなかったし…それにお前、俺達の事ずっと見てる訳だろ？言わなくても知ってるんだろうと思って」

紫は、顔をしかめて舌打ちを一つ。……ふむ。

「なあ紫、ちょっと外に出ようか。話がある」

「…人が居る場所で話しづらいのなら、外の方がよっぽどじゃない？」

「鑑枷が居る方が話しづらい」

「…解ったわ」

同意を得たので、話し込んでる鑑枷に一言投げ掛けて離れを出る。反応は聞いてるのかどうか曖昧なものだったが、まあ良いか。そっちの方が都合が良い。

庭に出て、離れからも母屋からもある程度離れた所まで移動する。
紫は黙って付いてきている模様。…ちょっと思ったんだが、内緒話をする場所が庭のど真ん中ってのは、正直どうなんだろう？御屋敷出た方が良くね？

だがもうなんか色々面倒なので此処で良いか、と思い直す。歩くのが面倒、とか後ろから「さっさと話せやボケ」的な視線を感じるからとか、主にそういった事情で。

「なあ紫。暫く前に、お前に顕冴の事について聞かされた事があったよな？…確か」

「…ええ、そうね」

良かった。俺の記憶違いではなさそうだ。記憶があやふやで、俺の妄想だったらどうしようかとか考えていたからな。本当に病院行った方が良いんじゃないか？とか。

「あの時…あの日お前……」

「…あの日？」

少し溜めてから、俺は聞く事にした。いやだって、流石に憚られるし。下手したら俺死ぬし。痛いのは嫌なのだ。溜めたのだって勿体ぶってとかじゃ無く、純粋に言うか言うまいか悩んだからだしな。

「あの日お前……履いてたパンツ、何色だった？」

「……ちょっと待って、良いかしら」

額に手を当て、「まさかこれほどとは……」とか「え？いや？……え？」とか言ってる。まあそうなるわな。

聞いた途端に殴り飛ばされると思って戦々恐々としてたんだが。いや安心安心。何に安心しているのか解らんが。

「御免なさい。もう一回良いかしら」

「あの日のお前のパンツ、何色だった？」

「……パードゥン？」

「あの日のお嬢ちゃんの下着、何色だったの？ぐひひ。」

変態風にアレンジしてみた。いかんな、後半棒読みになってしまった。もっと誠意込めて言わなければ。

「すまん間違えた。もう一回やっていいか？」

「え、ええ。……そうよね、幾ら何でも間違いよね…」

「フヒヒヒ、お、お嬢ちゃぁん。あ、あの時のパンツの色、何色だったのかなぁ……？ハァハァ……」

よっし完璧！惚れ惚れするぐらいの変態さ！…いや、この場合は気持ち悪いぐらいの変態さか？まあとにかく会心の出来！これで紫も文句は言わな――――

「気持ち悪いわー！」

「そ、そうだったぁぁあああぁぁあああ！」

そもそも根本的に文句しか言われない言動だったのを、すっかり忘れていた！

紫は俺を手にした傘を両手持ちで殴る、殴る、殴る、殴る！先っぽがときどき刺さる！

頭では無くぼでぃを狙ってくる辺り、簡単には楽にさせないという

心構えがひしひしと伝わってくる。響く効果音はピシピシ、なんて生易しいもんじゃなくてグチャ！グチャ！だけどな！

「言い直した結果がそれか！言い方変えただけか！信じた私が馬鹿だった！」

「待て！ごふっ！…お前口調変わってなごふぉあ！」

こちらの言葉は一切聞かず、唯ひたすらに打ち続ける！傘を両手で持ってひたすら叩き付け続け、俺の身体が欠けても気にせず、傘がひしゃげたら即座に放棄、またもや傘をどこからともなく取り出して叩き付ける！その様はまるでどこぞの英雄王！

「口調なんて変わるわよ！二次創作なんだから！」

「本編始まって以来のメタ発言！しかも紫が！二次創作の歪みを見た！」

「その歪み、この私が断ち切る！」

「本格的に色々待て！」

ちなみに何故俺がどもらずに言葉を言えているのか。理由は簡単、なんか慣れた。痛みに耐性が出来たのか、殴られていても喋れるようになった。衝撃でどもるだろ、とは思うだろうがそこは俺にも良く解らん。何故だか喋れた。これが人体の神秘ってやつか。俺は人では無いがな！……こんな感じの思考、最近したような気が……気のせいか！

おおぅ、話が逸れた。何故俺がパンツの色なんて聞いたのか、解らないだろうとは思う。解ったら怖い。あと単純に興味本意で聞いた訳じゃないから。あの日の紫のパンツの色は把握しているから。だったら何故聞いたのかと言われれば、把握済みだからこそ、だ。あの日の紫のパンツの色を知っているからこそ、紫に聞いているのだ。

…とは言ったものの、聞き方が悪かったな、と思わなくも無いでもないでもないが、別にそんな事は無かったぜ！結局無いって事だ！故ならふざけた態度と言葉で聞いたからな！悪い聞き方で聞こうと思ってそれを実行した訳だから、悪かったと思っている筈が無い。が、流石に話を進めないと痛い。色々と。だから俺はさっきから傘で俺を叩き続けている紫の腕を掴み、振り払おうと殴りかかってきた、もう片方の腕も掴んで、じたばた暴れる紫の顔に俺の顔を近付ける。

…やってる事だけ見たら、喧嘩した彼女を宥めようとキスする彼氏の図、だな。実際にはキスなんてしないし、そんな甘酸っぱい空気でも無い。そんなのとは百八十度逆の、生臭い血の臭いしかしないのだが。

傘を直接掴まず腕を掴んだのは、単純に掴みやすいからだ。ベタベタ体に触りたかったからじゃない。嘘だ、触りまくりたい。まあ、肘まで手袋で覆われているから、肌に直接触れてはいないんだが、

これはこれで気持ちよさそ……なんでもないです。別にしごいて欲しいと思った訳じゃないですよ？

と、顔近付けたままであれこれ考えてたから、紫さん顔真っ赤。照れたんだろう。

意外と免疫無いからなぁこいつ。普通は紫に近付く前に大抵潰されるからな。弾幕やら式神やらで。

近付ける奴も居るが、大抵、というより今のところ俺除いて全員女だからなぁ…。他人の顔が近くにあるって事はあまり無かったのじゃなかろうか。

…流石に女にここまで顔を近付けられたことは無いだろ。近付けた事はあるかもしれんが。

だから、というべきか、男の顔を間近で見ることは少ないんだろう。

…多分。

こいつの過去を全て知っている訳では無いから、断言はできないけども。…あれ？じゃあこいつもしかして、意外と初なんじゃね？

「まあ待て落ち着け話を聞け。そしてパンツの色を教えろ。あの日のだけではなく出来れば今現在のも」

「注文が多い上に勝手ね。…話は聞いてあげるから放しなさい。離れなさい」

「だが、断る。顔は離すが放しはせんぞ。放した途端に殴られるからな」

「断言？聞いてあげると言ってるじゃない。信用無いわね」

「信じてはいるさ。本音を言えば顔を近くで見たいのと感触が惜しいからだ」

「……勝手になさい」

傘を何処かへとしまい、ぷいっと顔を背けてしまった。いやだから近くで顔見たいっちゅーに、背けてどうするよ。こっちみろ。にしても意外だな。てっきり顔色変えて「黙れ変態！」とか言って蹴られるもんだと思っていたんだが、顔を更に赤くして背けはしたが、許可が貰えるとは。

まあ何はともあれ顔を離す。間近では無いが十分近いしまあいいか。

「さて、じゃあ聞くが、あの日パンツ何色だった？」

「話をなさい。さっきといってる事が違うわよ」

「いいから言え。話は色で変わってくるんだから。話はパンツの色を言ってからだ」

文句を言いたげだったが、諦めたのか、溜め息を吐いてから、なんか照れくさそうにそっぽを向き直して、

「……黒、よ」

ぼそり、と蚊がなくような小さな声で呟いた。……黒、か…。

「本当か？あの日あの時、お前が俺に顕冴についての話をした時だ。本当に黒か？」

「嘘ついてどうするのよ。あの時確かに、私は黒だったわ。……今更だけど恥ずかしいわね、これ」

「本当に今更だな」

冗談めかして言ったが、穿いてたパンツの色を宣言させられるとか、軽く拷問だろ。

いやでも最初は小さな、か細い声で呟いた事を考えると、最初から羞恥そのものは感じてたって事じゃね？何で今更宣言し直すの？とは思うが、そこはまあ何て言うか、乙女心ってやつだろう。え？全然違う？

羞恥以前に、大の男が見た目少女を拘束し、何日か前の下着の色を聞き出しているっていう構図、色々と駄目な気がする。止めないが。

「あ、そうそう。今更と言えば、お久し振り、八雲さん。何日振りだっけ？」

「……なんの事かしら？」

「惚けても無駄だぜ八雲さん。お前が別だって事は解ってるんだ。あの日紫のパンツの色は、白だったからな」

「……何故貴方が下着の色を知っているのか追求したい所だけど……まあ良いわ。バレてしまったものは仕方無い、か。お久し振りね、真経津九十九」

……俺達が何を言っているか解らないだろうが、今から説明するから安心してくれ。

まずはパンツの色を聞いた理由だ。今目の前に居る『八雲さん』との会話に違和感を感じた俺は、ある考えに思い至った。

それは『八雲紫は、複数人存在しているのでは？』という、なんともまあ普通ならぶっ飛んだ考えだ、と鼻で笑われそうな憶測だった。

それを確かめる為、偶然知っていた、思い出した紫のパンツの色とそれを履いていた日を聞いた訳だ。

結果は黒。白黒はっきりついた訳だ。懐疑的な意味にもパンツの色的にも。

俺の記憶ではあの時に紫が履いていたパンツの色は白だ。が、こいつが履いていたと発言した色は黒。記憶違いというのはあり得ない

し、わざわざ嘘をつく必要は無いだろう。
そして俺の知っている紫のパンツの色と、こいつが履いていたパンツの色は違う、つまりはあの日あの時俺と会話した『紫』と、今俺の目の前に居る『八雲さん』は別人だ、という事だ。

別人、とは言ったが偽者だとか成り済ました、とかではない。こいつは歴とした『八雲紫』であり、かと言ってあの日俺に顕冴について話した人物も、『八雲紫』だ。
どちらの『八雲紫』も本物であり本人だが、別人だ。どちらか片方が何らかの術による分身という訳でも無い。ちなみに先程博麗神社で会った、鑑枷に愚痴を溢していたのは『紫』、現在目の前に居て、俺と会話しているのが『八雲さん』。もっと言うなら俺が友達になろうと直接言った、ここ最近に会ったのも、俺と顕冴を見ていたのも、全て『紫』だろう。

二人の本物の『八雲紫』が存在する事が解った理由と、二人を区別する出来た理由は大まかに二つ。一つは先程のパンツの事。もう一つは『八雲さん』と『紫』の言動だ。

稗田の家で会話した時から感じている違和感。それは気のせいでは無く、紫は本当によそよそしい態度で話をしていた。
向こうにとっちゃ、正直あまり親しく無いからな。何せこの『八雲さん』とは、俺は直接友人になろうという会話はまだしていないからだ。
こいつにとって俺は、良いとこ知人程度なんだろう。悲しい事に。

そのせいで言動がよそよそしかったり、ノリが悪かったり。そこに気付いたのと、さらに『紫』は知り過ぎていた、ということも理由の一つ。

俺が知らない顕冴の事を知っていた。それは顕冴が普通の人間の捨て子なら、あり得るだろう。
捨て子の時点で普通、ではないが、それでも十分現実的だ。
しかし、顕冴の過去を紫が知っている。それは本来ならばあり得ないのだ。知っての通り、顕冴は未来から来た、非現実的な出来事の身の上の人物なのだから。

いくら賢者と呼ばれる『八雲紫』といえど、未来の事は知っている筈が無い。知り得る術がない。
知っている、知り得る術を挙げるとすれば、それは『全て』の現在、過去、未来の『記憶』を『記録』として記しているとされる所謂『アカシックレコード』が代表的。後は賢者の石くらいか。

他にも、未来の事柄を知り得る方法はある。それは未来から自分が訪れる、というもの。
『八雲紫』の『スキマ』を以てすれば、時を越える事すら不可能では無い。『スキマ』によって紫が未来から来ているのだとすれば、顕冴について知っていても何らおかしくはない。

正直『アカシックレコード』なんて有るか無いか解らないモノを手に入れた、もしくはそれと繋がったとは考え辛い。なのでもう一つの可能性である、未来から来た、というのが、『紫』が顕冴の事を知っていた理由なのだろう。

以上が、『紫』と『八雲さん』と、別々の『本人』が存在すると解った理由と、区別の仕方である。まあぶっちゃけた話、解ったからって八雲さんや紫をどうこうしよう、とは思っては無いんだが。

と、まあこんな感じの事を目の前の『八雲さん』にも説明した訳だが、「下着の色で判別ってどうなの？」というありがたい御言葉を

頂戴した。変態名利に尽きると開き直ってみた。呆れられた。ですよね。

「で、そんな事を私に話してどうするつもり？」

「勿論、バラす。言い振らす。幻想郷で知らない奴はいないってぐらいになるまで広める」

「……何が勿論なの？全然全く限りなく話に脈絡が無いのだけれど。そこは普通、私達に何かを要求する所ではないかしら？」

「俺に普通を求められても困る。何せ変態だからな。ちなみに俺は直接お前らをどうこうしようとか、何かを要求するつもりとかは一切無い」

あくまで俺『は』二人に『直接的には』何もしないって事であって、俺がこの話を言い振らした結果、他の奴らが二人に何しようが関知しないって事だ。
何？ズルくないかって？馬鹿野郎。世の中なぁ、正直なだけでは生きていけないんだよ。
それに俺は基本、変態で悪人なんだぜ…？
ま、今の話の四割くらいは嘘なんだが。

「相変わらず変態的ね…。自分は直接関与せず、事を傍観する。ま

るっきり愉快犯じゃない」

「愉快犯じゃねえよ。だってお前、そうなって欲しいって一瞬願ったろ？というか今の口上、お前にだけは言われたくない」

否定はしないわ、と涼しい顔で笑みすら浮かべて即答する八雲さん。やっぱりか。

どうするつもり？と聞いてきた時の八雲さんは、笑みは浮かべて無かったものの、どこか楽しそうな雰囲気だった。

隠していた事がバレたら、普通は焦りとかを浮かべる筈なのに、何故か。

そして『事』が広まる事を願ったかという問いに「否定はしない」という答え。

隠していた以上、周りに知られれば何か不都合がある、ということだ。少なくとも八雲さんか紫かのどちらか一方には。

広まる事を願うという事は、八雲さんは周りに知られても特には支障が無い、どころか何か利点があるのだろう。

だが、もう一人の、未来のとはいえ『自分』の行動を阻害して、果たして何か利点があるのだろうか？自分が先に目的を達成する…？いや、『自分』の、紫の行動を阻害する事そのものが利点…？

……。

……？

……え～っと、つまりは……ドM？

「『自分』の邪魔をするのが目的とか……なんというドM。変態の俺もビックリだ」

「私はMじゃないわ。ただ『アレ』の邪魔が出来れば良いだけよ」

「うわ、台詞が小物くさい…。というか未来の自分を『アレ』呼ばわりとか。何か恨みでもあんの？」

「あるわ。物凄くあるわ。それに『アレ』はもう『私』では無いわよ。私とは違う経験をしてきたのだから、『アレ』はもう別人よ」

「まあそんな自己についての哲学的な話は置いといて……恨みって？」

先程までの笑顔から一転、何か忌々しいものでも思い出しているかのように、苦虫を噛み潰したような表情になり、苦々しげに口を開く八雲さん。…本当になにがあった。

「その哲学的な思考だけど、流石に『元』私だけあって、考えてる事はあっちも同じらしくてね……。遠慮がないのよ」

「…例えば？」

「『私が経験していない事を経験しているのなら、もう私じゃない

わね』とか言ってきて、私が経験していない事の件でからかってきたり、私を閉じ込めたり……」

「……すまん、最後のもう一回」

「『アレ』は私を閉じ込めたのよ。『スキマ』の中にね。ああ、ずっと、って訳じゃないわよ？時々何かやむを得ない時だけ出されて、事情を説明されて手伝わされたわ。で、終わったら『スキマ』の中に強制送還。悔しい事に、能力に関してはあっちが上手でね。出るのに時間が掛かったわ」

「……参考までに聞くけど、何年ぐらい前から閉じ込められてたんだ？」

「断続的になら八年くらい前からね。継続的での最長時間は……二年くらいじゃないかしら？」

可愛らしく小首を傾げて軽く言っているが、内容が全然可愛くないし重い。本格的にこいつが可哀想になってきたんだが。

八年って。二年連続してって。もうそれ確実に拷問か何かだろ。『紫』は『八雲さん』に何か恨みでもあんの？

「……八雲さん。いや、紫」

「…何？深刻そうな顔して。それと名前を呼ぶ事を許した覚えは無いわよ」

「愚痴ぐらいなら、聞いてやるぞ?話し相手も俺がなるし、嫌なら鑑枷でも連れて来るから」

「……貴方に気を使われると、調子が狂うわ……」

肩を落とし、そこまで重傷なのかしら、私……と何やら落ち込んでいる八雲さ…紫。いや、充分重傷でしょうよ。外の世界で訴えたら確実に勝てるぞ。訴えたらな。

…でもそうなると、また色々と解らない事がでてくる。例えば顕冴を襲ったのはどちらなのかとか。

……いや、こうなると最早本当に『八雲紫』が顕冴を襲ったのかどうかすら怪しい。何故未来から来たという事を隠さないといけないのか、何が目的なのか。

解っている事は、顕冴などの未来関連の事は、目的含めて少なくとも目の前の紫は知らないという事か。話を聞く限りでは、一方的に手伝わされただけで、その時々に必要な事だけ説明されていた様だし。

もし目的を話されていたのならば、その目的達成の邪魔になるだろう事は絶対に起こさないだろうからな。

『八雲紫』は普段は全く動かないが、逆を言えば必要な事、時だけに動いているという事。

『八雲紫』が動いた時は、何か重大な事が起こっているという事だ。

それは紫も解っている筈。何せ他ならぬ『自分』なのだから。

自分に話さないという事は、さして重要な事では無いと判断したか、

最早自分では無い自分など信ずるに値しないという事か。
…もしくは、ただ単純に気に食わないからだという考えからか。

俺の考え、というか直感では一番最後の様な気がするが、考えた所で、聞いた所で解りはしないし答えてはくれないだろう。『八雲紫』は徹底した秘密主義者で胡散臭いからな。だがそこがいい！

「ところでさ、お前達の事、どう呼んだら良い？二人居るんだから違う呼び方しないといけないだろうけど、片方を『八雲さん』って呼ぶのはどうも他人行儀っぽくてなぁ…」

「実際他人なのだから、それで良いと思うのだけど」

「いや他人じゃねえよ。一応とはいえ友人だよ？」

「『アレ』の事じゃないわ。私の事よ。特にそういう関係になったとは記憶していないし、これからもなるつもりは無いわ」

「つれない事言うなよ、知らない仲じゃないんだしさ。今日だってほら、お前のパンツの色を知った訳だし」

「人聞きの悪い事言わないで頂戴。知らないわよ、貴方の事なんて」

「いや知ってるだろ。もうかれこれ……何年前だ？とにかく何時からか解らなくなるくらい前からの付き合いなんだし」

「そういう意味じゃ……はあ…もう良いわ。…とにかく、私の事はさっきまでと同じ様に八雲、或いは八雲さん、もしくは八雲様と呼

びなさい」

「最後の選択肢にちょっとだけ引かれている俺が居る。全く、本当につれないなぁ…。一度とはいえ、一緒にね」

言い切る前に、腕を振り解かれ、取り出した傘を叩き付けられ、地面にめり込まされた。

今の一撃は、俺が知る限りでの紫史上最速かつ最高の一撃ではなかろうか。

「何を言おうとしたのかは知らないけれど……あれはそう、若さよ。若さ故の過ちよ！」

「１０００歳おーばーを『若い』と言うか…「何？」いーえ何も？」

視線が質量を持ったら、跡形も無く吹き飛ばされているのではないかと思う程に、強烈な視線を浴びせてくるゆか…八雲さん。

そんな目で睨まないでおくれゾクゾクするから。…あれ？これも前に言った気がするなぁ…。ま、気のせいか！

というか今の台詞ってネタ…ああ、そういや前に教えたっけ。

…あ、いかん。若さ故の過ちってふれーずで、俺の『若さ故の過ち』がっっっ！！！

「…何よ、いきなり喉掻き毟りながらのたうちまわって。気持ち悪いわね」

「いや、俺の『若さ故の過ち』が込み上げてきて……！」

「……？…ああ、あれね。あれはそうね、確かに認めたくないものよね」

思い出したのか覚えていたのかは知らないが、いらん事を言い出しそうな八雲さん。
だって見てご覧よ今の八雲さんの表情。あんなに生き生きとした表情なんて見るの久し振りだぜ…！悪寒がしてきやがった……！！

「あれは女の私から見ても完璧だったわ…。それも完全に変化していたから当然と言ったら当然なんでしょうけど」

「おい待て…！それ以上は……！」

「完璧過ぎて認めたくないわね…。知った時は皆驚いていたわよねぇ…」

「だから待てって…！すみません八雲さん、いや八雲さん！頼むから…後生だから、後生だから堪忍してぇぇ！」

「貴方が言う後生なんて言葉程、信用ならないものは無いわね」

八雲さんは、俺の静止の声を無視どころかしっかり聞き届け、嘲笑う様に俺の『若さ故の過ち』を、段々と曝け出していく。も、もうやめてぇぇぇ！

だが俺の抵抗も虚しく、とうとう紫は最後の核心の言葉であり俺の心臓を深く抉り取る言葉でもあり。
俺の人生の、恐らく唯一にして最大の汚点であろう一つの歴史。

「それにしても奇麗だったわよねぇ……貴方の『女装』」

俺の黒歴史を象徴する言葉を、底意地の悪い笑みを浮かべながら言い放ちやがってくださりました。……慧音にでも頼んで、無かった事にして貰おうかな…。

十三節目（後書き）

本編別バージョン～もしくはあったかもしれないお話～

「で、そんな事を私に話してどうするつもり？」

「いや別にどうもしないが」

先程も言ったが、別にどうこうするつもりは全く無い。
本人達は隠しているようだが、別に皆に知られても知られなくても大した影響は無いだろうからな。

元々が反則の権化の様な『八雲紫』だ。今更二人居るって事を皆が知っても、驚きはするだろうが仕方無い、の一言で受け止められ、認められ、受け入れられるだろうさ。
そのぐらい勝手で自由な場所であり、なんだかんだで優しい人達ばかりなのだ、この幻想郷という土地は。
…まあ、中にはどうでも良いとか思ってたり、興味が無かったりする奴等も居るんだろうが。むしろ大多数がそんなんだろうが。そこも全部ひっくるめて良い奴等だからな。…多分。

「…だったら尚更よ。何故、私にこの事を話したのかしら？何かをするつもりが無いのなら、話をする必要なんて無かったじゃない」

心底解らない、と思っているだろうという事が、言葉の端々と若干憤慨していたりする事からひしひしと伝わってくる。何故、と聞かれてもなぁ…。なんとなく、としか言いようが無い。

ほら、普通はちょっと疑問に思った事は聞いてみたり、突き詰めたくなったりするじゃん？

そんな感じで、違和感と少しばかりの好奇心等が折り重なって、こんな話になった訳だ。

……スマン、嘘ついた。いや、大体はさっき言った通りなんだが、話した理由は別にある。

…ただ、正直に言うのは照れ臭いだけだ。内容も臭いし。

青春真っ盛りのガキじゃあるまいし、素面で本人に熱弁するのは、流石の俺でも憚られるのだ。

だから、あれだぞ？一回しか言わないぞ？心の中で考えるだけで悶えそうなんだ。今後は思考すらしない。したくない。

話すのも今回だけだ。生半可な理由じゃ、八雲さん納得しそうにないし、何されるか解らないし。だから仕方無く話すんだ。

「…何かを隠しながら過ごすのは大変だろ？だから、俺や鑑枷に愚痴ったりして、少しでもお前達が楽になれれば、と。思った…次第で……あります……はい……」

「……」

ああっ！恥ずかしい！恥ずかし過ぎて後半変になっちまった！
内容も恥ずかしい！ほら、八雲さんも唖然としちゃってるし！ああ、
穴があったら入りたい！

「…意外だわ…。てっきりこれをネタに、何か性的な事を強要されるものだと思っていたのだけど」

「だから俺をどんなふうに思っているんだと小一時間…問い詰めるまでもなく解るが。そんなつもりは無いぞ。俺は人の弱味に漬け込むのは嫌いだし、そもそもネタに出来る程の弱味じゃない、つーか弱味じゃないだろ」

何故隠すのか解らない程、今更というか大した問題ではないというか、言い方は悪いがどうでも良い事というか。
『八雲紫』はそのぐらい不思議というか謎があるというか胡散臭いというか。
子供が居る、と言われても誰も驚かないだろうと思う。あ、いや、驚きはするだろうけど。
驚きはするだろうけど、すぐ後に「まあ紫だし」とか言って受け入れられそうだ。

「…貴方……いえ、貴方達、私を一体何だと思っているのかしら

？」

「スキマ妖怪。胡散臭い賢者。美人。サボりがちな結界担当その二。初恋の相手。黒幕。ドS。女王様的な何か。罵って下さい。結婚してくれ」

「…凄く気になるものが幾つかあったけれど、概ね理解したわ…」

八雲紫を知る者が抱くであろう印象その他を少し並べたら、疲れ、落ち込んだ様子で納得された。つっこむ気力も無いようだ。ちなみに挙げたものの一部は俺主観である。

というか落ち込むとか。自覚してなかったのか？

「まあこんな感じな訳だから、別に隠さなくても良くね？と提案してみる。それとも何か話せない事情持ち？」

なら強制はしない、と付け加えておく。

まあ、事情が特に無かったら俺がバラすってーか、言い振らす気満々なんだけどね！

そして事情があっても週一ぐらいの頻度で顔出しに行く気も満々なんだが。勿論俺が、八雲さんの所に、何の断りもなく、だ。

そのぐらいしないと碌に話せな……一人で背負い込みそうだからな。

決して俺の溢れ出る欲望の赴くまま、思考した結果だとかではない。
断じて。

「…知られてはいけない事では無いけれど、知られていない方が色々と都合が良いわね。……と、この前『私』が言っていたわね」

「……何だ？その何か面白い事見付けた、みたいな表情」

責任転換した後、今迄の小難しい表情から一転、なにやらイイ笑顔になる八雲さん。
うん、まあ、あれだ。…強く生きてください、紫さん。
バレない方が良いと言っておきながらもこの笑顔。あれか、バラせってか。

「なんでそんなに楽しそうなの？何か恨みでもあんの？自分だろ、一応」

「『未来の』、ね。今の私とは違う経験を持っている時点で厳密には私ではないし、向こうもそう考えているらしくてね」

今の私が経験した事を経験していないのなら、それはもう別人だ、とか言ってくるらしい。

しかもその経験していない『経験』の内容でからかってもくるらしい。日常的に。
言い返そうにも相手は自分、しかも自分よりも場数を踏んでいるのだ。勝てる訳がない。
なので基本は一方的な口撃を受けていて、鬱憤が溜まっているのだとか。
たまに言い返せる事もあるらしいが、そんなのはここ八年の間で片手で数えられるぐらいの回数しかなかったらしい。ちなみに一番最近に言い返せた、というよりはからかえたのは俺の友達騒動の件。
あのときはスッキリしたわ、ありがとう。と、何故だか礼まで送られた。相当、だったんですね紫さん……。
過去の自分をそこまでからかえる紫は、変態なんじゃないか？と思いました、まる。

「で、その腹いせにこの件をバラして、紫を動き難くさせようと？な、なんという小物……！」

「あら？『私は』バラすとは言ってないわよ？ただ、この事が知られるともう一人の『私』が困った事になると、どこかの誰かさんに話しただけであってね……」

「つまりは俺にバラせと。言い振らしてしまえ、と？良いのそれ？お前の行動に支障をきたさないの？」

「私は良いのよ。あの娘、顕冴といったかしら？彼女に関しては、私はノータッチですもの。よって未来の事についても、同じく不干渉よ」

どこまでも愉快犯の思考をしていらっしゃる八雲さん。心なしか、なんか荒んでいるような気がする。多分、気のせいではないのだろう。

それほどまでにか。未来のとはいえ、自分の行動を邪魔して、苦悩している様子を嘲笑いたいぐらいに『自分』と確執があるのか。

……愚痴ぐらいなら、付き合ってやろう。そう思った。

というか本気で周りにバラしてしまった方が、『紫』はともかく『八雲さん』の為になるんじゃないだろうか。主に精神面での負担軽減とか。

こんなになるまで溜め込むのは、二人いるのがバレないように片方はなるべく外部との接触を絶ち、もう片方が事に当たる。そんな事を最低交代で、最悪片方軟禁状態交代無しでやってきたからではないだろうか。後者の場合ならば間違いなく軟禁されていたのは『八雲さん』の方だろう。

他人と碌に接触できず、すとれすを発散しようにも接触できるのは使い魔と未来の自分のみ……。

最悪、使い魔ですら接触は出来ないのかもしれないから、残るはすとれすの原因になっている『自分』だけ…か…。過酷だな…。

いかん、思わず込み上げてきた。

「…何を思っているのかは知らないけど、別に完全に他人との接触を絶っていた訳では無いわよ？」

「嘘つけ」

「嘘じゃないわよ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ここでおしまいです。実はこれ、最初本編にしようと思っていたものでした。
しかし何やら八雲さんフラグが立ちそうだったので取りやめ。自分はそんな恋愛ごっこが書きたいのではないのです！いや書きたいですけど！
なのでなんか消すのも勿体ないと思ってこういう形になりました。
未完成で途中ですが。
もしかしたら、手直しして、番外編にでもなるかもしれません。

そんなことは置いといて、皆様お久し振りです。前回の投稿から一ヶ月以上。最早忘れられただろう時に投稿とあいなりました。
災害は、忘れた頃にやってくる。

ここまで遅れた言い訳をば。実は諸事情により、しばらくパソコンが使えなくなりまして。仕方なしに携帯で打ってたんですが、モチベーションが上がらない維持できない。
そんな感じでgdgd打ってたら、もう夏休みも終わり、という所までになってしまいました。
そこでついにパソコン解禁。いやぁ、やっぱりパソコンはいいですねぇ。モチベーションが上がる上がる。
上がりすぎて内容がなんだか色々とおかしな事になってますが、まあ波紋は呼ばないでしょう。見ている人が居ない的な意味で。

ちなみにおわかりでしょうが、またもや本編が途中です。まだこの一日続きます。なんかもう色々とすみません。

そして例によって例のごとく、またもや次回更新は未定です。完成したら即投稿なものですから、誤字脱字は当たり前のようにもっさりとあるくせに、書き溜めなんてものはありませんし、ぷろっと、とかいうのもありません。
ノープロットです。正しくは脳プロット。

そんなこんなで駄目な自分と作品ですが、ご覧になっている皆様、どうかなにとぞ、生暖かい目で見守ってくださいませ。

十四節目（前書き）

今迄のあらすじ

とうとう明かされた九十九の黒歴史！九十九のダメージは深刻だ！
そして更に暴かれだす黒歴史の詳細！どうなる九十九！

次回に続く！

「……あれ？次回予告？！まだ始まったばっかりだよこれからだよ？！」

マジで！？

十四節目

俺はここで終わるのか。
そんな事を考えてしまう程、状況は最悪だった。

「…どうするつもりだ…？」

「さあ？どうするんでしょうねぇ？」

先程の仕返しなのか、ニタリ、と底意地の悪い笑みを浮かべ、思わせ振りな言葉を発する。
どうするつもりなのかと内心凄く緊張しながらも、下手にこちらから話しかけると薮蛇になりそうなので黙っておこう。つついた結果出てくるのが鬼だろうがドラゴンだろうがハブだろうがニシキヘビだろうが、どれも面倒な事には変わりない。ちなみにそれ以外は多分出てこない。出るとしたら悪魔か。それも公爵級のやつ。なのでスルーするぜ！…するーする、別に駄洒落じゃないよ？
まあ、突つこうが突つくのを止めようが、結局は出てくるんだがな。

あれ？でもなんだろう。何かムラムラしてきた。あ、間違えたドキドキしてきた。
何言われるのか、何を要求されるのか考えただけで僕はもう…ッ！
辛抱溜まりません！
何を要求されようが、俺は成し遂げてみせるっ！！例え内容が「全裸で人里一周」だろうが「全裸で幻想郷一周」だろうが「裸装備で

黒龍突貫」だろうが「女装したままで妖怪の山に突貫」だろうが何だろうがなぁ！……ごめん、最後のはやっぱ無理！

でもよっぽどの事じゃない限りは、喜んでやらせていただこう！……あれ？こんな感じの趣旨だっけ？こんな感じで喜ぶようなもんだっけ？まあ良いか！俺変態だし！変態ならしょうがない！

さあ、一体どんな無理難題を言われるのか…。

……楽しみだぜ…間違えた恐ろしいぜ……あ、いけね。ヨダレが……ジュルリ。

「まあ、別にどうもしないのだけど」

「……は…？」

そんな俺の密かな期待を裏切り、八雲さんは先程までの笑顔を消して呆れ顔で溜め息一つ。……は？

「そんな事はどうでもいいのよ。それより「お前……」……何よ？」

話に割り込まれたのが気に食わないのか、眉間に皺を寄せて睨んで

くる八雲さん。だが今はそんなこたぁどうでもいい……！

「お前……俺を裏切ったなぁぁあああ！！」

「は……？」

ぽかん、と口を開ける八雲さん。だがそんな事はどうでも以下略。
俺の魂の叫びを聞け！

「期待させるような口振りでものを言いやがって！散々こっちに気を持たせた挙げ句何も無したぁどういう了見だ！」

「ちょ……！いきなり何よ！？」

「いきなりはそっちだろうが！アレか？！上げて落として何する気だ！？落ちゲーか？落ちゲーですかコノヤロー！」

「お、落ちゲー？何を言ってるのよ？！…痛っ！……って近…顔近い…！」

先程までは甘んじて地面に縫い付けられていたが、流石に我慢できなかったので身を起こし、八雲さんの両腕を掴んで捻り上げる。勿

論力加減はしている。
で、当然の如く顔を近付ける。え?やらしい気持ちなんてこれっぽっちもありませんよ?今はただ、怒りだけです。ええ。

「あぁ?!諦めろ!こちとら期待を持たされるだけ持たされた挙げ句にお預けくらってんだ。ただでさえ最近はそういう機会が無くて欲求不満だってのに……」

「全部貴方の自業自得でしょう!いいから放しなさ「うるせぇよ」……!」

「良いから黙ってろ。大丈夫だ、空の雲十立方メートルの質量を暗算で計算してたら終わる」

「今日は快晴よ!雲一つ無いわ!よって0!以上!それと雲があった場合はどれだけ長く致すつもりだったのよ!」

「ああすまん。なんかもう面倒だ。ツッコむの面倒だわ」

「そっちから始めたくせに本気で面倒臭そうね!?……え?嘘……ちょっと……本気……?」

「俺は何時も本気……だが、今回は何時もより本気だ」

狼狽える紫に構わず、俺は手始めとして唇でも奪おうか、と考えて。
考えた瞬間実行に移す事にした。俺は我慢弱いたいぷなんでね。

そして俺の顔があと少しで紫の顔に？？？ってところで、目の前を『何か』が通過した、気がした。
正確には、視界の上から下にかけて、『何か』が落ちていった、というのが正しいか。

「ん？」

行動を中断し、『何か』が通過していった方向、つまりは俺の腕があるあたりを見た。見ちゃった。
見てしまったのです。ええ。だって気になったんだもの。

で、そこにあったのは……ぶっちゃけ何も無かった。何も無かったのだ。大切な事なので二回言いました。
いいか？何も無かったのだ。…俺の腕があったであろう空間に、何も存在していなかったのだ。
つまりは

「…あ、腕斬られた。……はッ！？う、うぎゃぁぁぁあああ！お、俺の！俺の腕がぁぁあああぁぁあ？！」

「何でわざわざ噛ませ犬っぽく言い直したのよ」

「いや、絵になるかな、と」

「いや、腕を斬られた時点でもう、絵面的には駄目でしょうよ。色々と」

「ですよねー」

そもそもが噛ませ犬って絵になるのか？という疑問は無視します。俺はノリと勢いだけで生きている様なものだからな。発言の意味が滅茶苦茶でも仕方無いんだ。うん。

ちなみにさっきのは、典型的な噛ませ犬の図を、解りやすく絵にしたものだったんだよ！ふふふ、大成功だね！……スマンかった。なんか色々スマンかった。今思い付いたんだ。すまない。

で、何故俺の腕が斬られたか、そもそも何故腕が視界から消えた事だけで『腕が斬られた』と判断出来たのか。答えは簡単です、俺と紫の間くらいの位置に犯人が居るからさ！

その犯人は俯いていて、というよりは刀を振り下ろした姿勢のまま固まっている、と言った方がいいか。まあ、とにかくしゃがんでいる。

その腕にはさっきもチラッと言ったが、日本刀が握られている。抜き身で。

……うん。犯人確定だね。

俺が紫の腕を掴んでいると、俺の腕が肘の辺りから消失、それとさっきまで居なかった人物が何時の間にかそこにいる。更にその人物は刀を持っていて、振り下ろした体勢のまま動いていません。

さて。俺、紫、謎の人物。俺の腕を消失させた犯人は誰でしょう？

考えるのもアホらしくなってくる程に単純明快だ。答えは謎の人物Aである。

……まあ、『謎の』とは言ったものの、これまた正体が誰なのかも単純明快なのだが。

答えは鑑枷である。

ここは稗田の御屋敷。警備ぐらいは居るのだろうから、本当に不審人物がいきなり入って来て、俺の腕をざっくんちょ、なんてことはありえないのだ。多分。きっと。

で、屋敷の人間がいきなり斬り掛かってくる、っていうのも無し。だって理由が無いもの。

……ああいや。俺の過去のなんやらかんやらが原因って可能性も無くはないが、それを言ったらきりがないので無しって事で。

で、御屋敷以外の人間で、尚且つこの屋敷に居る事が認められていて。更に日本刀を所持、その上俺と紫が気付かない様な速度と、斬られた、という感覚が全く無い程に技術が有る者。それ即ち鑑枷以外にありえないのである。

まあこんなにつらつらと理由等を並べたが、実際はそんな事考えるまでも無く鑑枷だっていうのは解っていたんだが。だからこそ斬られた時も動揺しなかったんだが。だってそこに居る人物の気配がモロに鑑枷のそれだもの。

……だから俺が腕を斬られても平然としていたのはそういう理由があったからであって。

決してこういう事が日常茶飯事ですっかり慣れちまってる、なんて訳じゃないんだ。

気付かなかった割には紫も冷静だったよな、普通は驚くだろうに。

っていうのも、ただ単純に紫の肝が据わっているだけであってだな……。

……ごめん、嘘付いた。割と日常茶飯事です。腕が斬り落とされる、なんて事良くある事です。紫もただ慣れているだけです。多分「ああ、またか」って思っているのです。多分。きっと。おそらく。

……はい、現実逃避終了～。皆さんお疲れさまでした！

「……さて。九十九、紫？貴様ら昼間から、しかも人様の家の庭で。一体……何をやっているのですか……？」

あ、やべえ。本気でキレてる。俺含めて呼称が貴様だ。

鑑枷は未だに俯いていて、表情を確認する事が出来ない。声色は何時もと変わらず平坦だ。……だけれども雰囲気が、雰囲気が全然、何時もと全然違うのです。

例えるのならアレだ。ニュータイプが居ない戦場と居る戦場とぐらいの感じるぷれっしゃーが違う。

我ながら解り辛い例えだとは思うが、これが一番近い…と思うので仕方無い。

え？もっと解りやすく？……じゃああれだ。無双シリーズで全く鍛えていないキャラ操作している時に、呂布と遭遇した時の感覚だ。すなわち圧倒的な絶望である。

（（……あ。これ死んだわ））

対面の紫とあいこんたくと。うん、詰んだね。
可哀想に、紫さんの顔は真っ青だ。まあ俺も似た様な顔してるんだろうがな。

……さて。流石に今回のは全面的に俺が悪いし、なんとかしましょうかね。このまま紫までおしおきってのは、酷だろう。どう考えても。
今回は本当に、紫には何の非も無いのだ。珍しく。なんで仲良くおしおき受けそうになっているのか解らない位に、紫に非は無いのだ。
珍しく！
…なんか心無しか責任転換っぽい言い方になってしまったが、そこはご愛嬌って事にしといてくれや。結構テンパってるんだ。

「ムラムラしてヤッた。後悔も反省もしていない。今は再生してる」

紫の方から鑑枷の方へと向き直り、開き直ったような言い訳をしてみる。
鑑枷は俯いたまま、俺では無く紫に話しかける。

「……紫。九十九の腕、没収して下さい」

口調はそこそこ丁寧だが、底冷えする様な声で言ってくる。断れる筈も無く、紫は無言で俺の腕をボッシュート。

「アッー！俺の腕ー！」

哀れ、俺の腕はスキマ送りにされてしまいましたとさ。これで再生不可能になりました。

俺の『再生』は破壊された部分から分解されて、本体の方に移動させる、いわば物質転送だ。解りやすく言うと某錬金術の分解と再構成みたいなものだ。

そしてソレは三次元内限定で……あー……この空間内だけで行なわれるから、紫の『スキマ』等の何処とも知れない空間などに一部を持ってかれてしまうと再生できない。分解したはいいものの、どこに行けば良いのか解らなくなる一種の迷子さんになってしまうのだ。

あ、今俺『迷子になる腕……ちょっとクルものがあるな』と思ってしまった。ホラー的な意味なのか萌え的な意味なのかは想像に御任せする。

「二人とも、そこに正座なさい」

「硬い地面に正座させられる紫……ありかもしれん…」

「紫は立って下さい」

俺は言われるがまま正座しながらポツリと洩らす。いやだって、正座ってやる場所が悪いと結構痛いよな?今俺達は稗田の家の庭に居る訳だから、下は石だ。正座には到底向いていない。
その状態で正座。勿論痛い。めっさ痛い。どのくらい痛いかって言うと、目に涙浮かべてしまうかもしれないぐらいに痛い。
…ほら、もう解るだろう?想像してみるんだ、涙目になりながら地面にちょこんと座っている紫の姿を……。……グッとくるだろう?
俺的には、表情を少し申し訳無さそうにして、更に崩した正座だとなお良しだと思う。

そんな事をつい考えてしまって、不覚にも呟いてしまった。俺の呟きを聞いた鑑枷は即座に指令を変更し、紫には立ったままでいるように指示した。あー……勿体無い。見たかったのになぁ……涙目の紫。

「色々と言いたい事はありますが、まず一つ。ここは、何所ですか?」

なんか若干冷静に聞いてくる鑑枷。だから尚更怖いんだが。怒り狂っているのならまだやりようがあるが、一見冷静だと手の打ちようがない。
何考えてるのか判り辛いから、下手な事を言えない。というか指定

された事以外発言出来ない。どんな言葉が『下手な事』に繋がるかわかったものではない。

「稗田の家の庭」

「そこで、何をしようとしていましたか？」

「ナニを」

「合意の上で？」

「十割方無理矢理。ちなみに俺がな」

「何故？」

「だからムラムラしたからだって……「正直に答えて下さい」……若干苛つ……いや、やっぱりムラムラしたからだな、うん」

つい反射で少し本音が洩れそうになったが、何とか軌道修正。俺の本音＝『下手な事』ってのはわかっているので、適当な事言ってごまかす。

まあ、ムラムラしたってのも本当なんだが。

ちなみに言い忘れていたが、本音が洩れそうになったのは首筋に刀を突き付けられたからだ。刀の切れ味は相当なものらしく、触れただけなのに首が斬れた。

そんな訳だから、本音が洩れそうになったのは仕方無い事なんだ。

下半身から液体が漏れそうになったのも、仕方の無い事なのだ。
ちなみに、漏れそうになった液体が、さらさらした汚い液体なのか、ぬるぬるした汚い透明な液体なのかは、お察し下さい。どっちだろうが結局汚いんだよ！察せ！

俺の返答を聞いた鑑枷は、溜息を吐く。お決まりの頭に手を当てるぽーずで。なんか俺と話したやつらって、大体こんな感じのぽーすをとるんだが、何故だろう。さっぱりわからん。

「少しは周りの事も考えて下さい。外で、というだけではなく、人の家の敷地内でなど常識外れにも程があります」

「だがそれがいい」

「黙りなさい。更に本人の意志を無視するなんて……少しは相手を労りなさい」

「だが断「黙りなさい、と言ったのです」すいませんでした！」

一端は離した刀を、先程よりも強く押し付けられた。ちょ、動脈が。動脈が結構やばい感じになってるんですけど。俺は特に困りはしないが、絵面的に……って誰も見てないか。
と思ったら離れから顔だけ出して稗田のが見ているのがちらっと見えた。顔が青い。

「紫もです。何故もっと強く抵抗しなかったのですか」

「したわよ。掴まれたら終わりなのは解ってるでしょう？」

「実は結構、期待してたんじゃありません？」

「誰が！」

俺は反応しようとしたが、刀を更に押し付けられて反応できなかった。そんな、ひどい！

関係ないが、いや関係はあるが本筋には関係ないって意味での関係ないだ。今の絵面、相当ぐろい事になっている事だろう。多分。あ、稗田のが気絶した。

「良いですか二人とも。やるのなら自分達の家でやりなさい。ただ、どうしてもこういう、外でだとか人様の家でだとか、そういうのは止めて下さい」

「「……（あれ？）」」

なんだろう、何か違和感。ちらっと横目で紫とあいこんたくとをするが、やはりあちらも何かおかしいと思っているようだった。

何がおかしいのかは詳しくは解らないが、言い回しに何か違和感が。

なんかこう、なんというか……何故？って感じの違和感。

「別にそういう事をしてはいけないと言っている訳ではないのです。お二人はそういう関係なのでしょうし、そういう事を止めろ、と言う事は無理でしょう。私にもそのような事を言う権利などありませんし。ただ、今度からは周りの事を考えてから行動なさい。良いですね？」

「「は……？」」

まるで思春期の若いカップルに説教するお母さん、みたいな内容と話し方で説教してくる鑑枷。うん、至極当たり前且つまっとうな意見ですな。

二人揃って反射的に「はい」と答えそうになってしまったが、決定的に違和感があったので、なんだか言う事が憚られ、言葉を途中で中断。その結果返事が変な事になってしまった。

その返事を、意味がわからないという意味だと受け取ってしまった鑑枷が、むっとした表情になる。

「ですから、人様に迷惑掛けてはいけません、ということです。我々は人々の存在ありきで成り立っている存在なのですから、他人を意識した節度有る行動でですね……」

「ご高説の所すみませんが鑑枷さん。ちょっとよろしいでしょうか

？」

「……なんですか？」

妖怪に節度有る行動を促すってどうなんだとは思いつつ、まあそれは今に始まった事ではないのでするーする事にして、手を挙げて意見をしようとする俺。

話を遮られた鑑枷は不服そうだが、その前に一つ確認しなければいけないことがあるんだ。

「今、何て言いました？」

「ですから、他人の事を考えた慎みのある……」

「もうちょっと前」

「別にそういう事をしてはいけないと……」

「その少し後」

「お二人ともそのような関係なのですし……」

「「……」」

何なのですかと憤慨している鑑枷はさておいて。紫と黙って横目であいこんたくと。

（なあ紫さんや。俺達ゃ何時からそんな関係になったんでしょうかね？）

（知らないわよそんな事。むしろそんな関係になった憶えはないわ）

（だよなぁ……俺も無いわ）

（（……））

二人揃ってしばし沈黙。思いの外その沈黙していた時間とあいこんたくとは長かったようで、鑑枷が何かおかしいのかと疑問を持ち始めた様子。

で。

「「はぁぁぁぁぁあああああああ！？」」

爆☆発！俺と紫は大声で叫んだ。叫んでしまった。いや叫ぶだろうよ。

「え？何？そういう関係？俺と紫が、そういう関係……？」

「いやいやいやいやいや！無い！それは無いわ！」

「え？そうなのですか？」

「そうだったのですよ！？というか何故その結論に至った？！」

「え？いや、だって……ねぇ？」

「私にふっても解らないわよ！」

「つかお前、慧音の事も俺とそういう関係だって認識してなかったっけ！？なんでその思考があったのに紫ともそういう関係だって思ったの？！」

何か知らんが紫が反応したが無視！鑑枷は俺の質問の意味が心底解らないといった風に首を傾げていた。

「え？なんでって……逆に、何故そう思わないのでしょうか？」

「いや何故って！そんなもん常識で考えたらそうなるでしょうよ！俺達に常識を求める事が間違っている気がしてならないけども！」

「常識？」

「え？何？なんで常識ってところで疑問を持ってるのこの子。なにこれこわい」

「……九十九。私、思い至った事があるのだけど…」

俺達の会話から抜け出し、なにやら考えていた紫が、手を挙げる。
思い至った事？
紫は、なんだか疲れきった様子で、鑑枷に質問をし始めた。

「鑑枷。貴女、私の事を、九十九の何だと思っているのかしら？」

「友達のような恋人のような。少なくとも妻では無い。そんな関係ですね」

決して怒っているという訳では無く、珍しく笑顔で、それもゆっくりとした印象を与える優しい笑顔で問いかける紫。それに即答する鑑枷。なんぞそれ。
友達以上恋人ぐらい、すくなくとも夫婦ではないってか。残念ながらこっちの紫とは友達ですら無いわ。

「……じゃあ、九十九にはそういう様な関係の人が、何人ぐらい居ると思っているのかしら？」

おいおい、と言いたくなった。具体的には鑑枷が俺達の関係を変な感じで勘違いしていると解った辺りから。

そういう様な関係の人とは、つまりは付き合っている人が何人ぐらい居る、という事か？

真実はどうかとかは置いといて、１人だ、と思うのが現代での常識だ。ちなみに俺は勿論０である。あれ、おかしいな。目から汗が……。

まあそれは置いといて、だ。

時代は移り変わっていく。今は昔の殿様みたいに側室やら何やらで、沢山女囲って良い世の中じゃないのだ。そんなもの誰でも知ってる常識である。

……ん？……あれ、なんだ。なんか違和感……

……あ。

解った。何か色々。でも……あれ？

「え？…そうですね……。４人……くらいでしょうか」

「ちなみに、何人まで結婚……婚姻を結んで良いのだったかしら？」

「制限なんてありましたっけ？」

一人葛藤している間に、二人の会話は続いていた。
つまりは。鑑枷が俺と慧音がそういう関係だと誤解していたにも関わらず（下手すると今も疑っているかもしれない）、紫ともそういう関係だと考えていた理由。
俺達の『今』の常識では、そんな事はありえないが、鑑枷の常識で考えると、別に何の不思議も無い。

ぶっちゃけた話が時代に追いついていないのだ。所謂『じぇねれーしょんぎゃっぷ』って奴だ。
５００年程世の中を見ていないのだから、当時の常識を持ったまま、というのは当たり前と言えば当たり前な訳で。

だからといって俺が何人も女を囲っていると思うのはどうなんだろうか。
俺は昔から、どう考えても裕福ではないし、偉くも無い。至って普通の小市民なのだ。こらそこ、どこが普通だ、とか言わない。今言っているのは家柄とかであって、そういう事じゃないんだよ。性格とか性癖とかも今は関係ない……と思う。
側室やら何やらの、一夫多妻性が認められていたのは昔の話で、その昔でさえ一部の人間達、御偉いさんの様な格式張ったと言えばアレだが、少々御固い家で多くみられた制度である。

当時は女性からは基本的に拒否権なんぞ無かったということやらなんやらの上で成り立っていたし、戦が多かったから致し方無しという事情があったとかなんやらかんやら。
詳しい事は面倒なので省くが、それ以上に決定的なのが裕福な家で

行なわれていたという事だ。

俺の場合は家が裕福どころか根無し草なのだ。んなもんある訳ゃ無い。

ついでに言うと俺には何の魅力も無い。そこは自覚している。

金もねえ。家もねえ。かりすまもねえし何もねえ。あると言ったら溢れんばかりの情熱（性的な意味で）ばかり。

ほら、常識やら過去やら考えるまでも無く、俺が殿様……ああ、現代風に言えばはーれむか。そんなはーれむの主みたいな事になっていると考える余地なんて、全く全然これっぽっちも、塵芥程もありはしないのだ。……すまん、目にゴミが入ったみたいだ。液体が止まらねぇ……。

そして違和感を感じた原因。こいつの記憶やら常識やら、なんかちぐはぐじゃないか？

貴様という言葉が今現在はどのように使われているのかは知っていて、言葉遣いも今風だ。だが、備わっている常識は昔のままである。常識、といってもいいのかは解らないが。

今を知っている事と、昔から変わっていない事、どちらがおかしいのかは浦島太郎を思い浮かべてくれたら解りやすいかもしれない。つまりは、今現在の知識が多少なりとも備わっている事がおかしいのだ。

今迄外の世界から隔絶されていたのだから、外の事など何一つとして知らなくてもおかしくない、というかそれが普通なのだ。

が、何故だか知らないが鑑枷は今現在の外の常識を知っている。

考えられる原因は、『何か』を経由して、外の情報を得ているか、実は外に出ていて、情報を集めていたか、だ。

……まあ、考えても詮無き事か。今は放っておこう。

…つーかそもそも、だ。鑑枷、何で俺と紫の関係を勘違いした？なんか理由、あったっけ？
さっきの光景だって、どうみても性犯罪者に襲われる美人さんだっただろうが。絵的に。

「そもそもだ。何で俺と紫が男女な仲だと思った訳よ。方や何の魅力も無い根無し草ぷらすの貧乏人の小市民。しかも変態。方や圧倒的な力とカリスマを持って幻想郷に色々な意味で君臨していて、尚かつ引く手あまたな凄い美人さんな訳だ」

俺は如何にも軽い奴ですよー、みたいなおちゃらけた様子でおちゃらけた事を言う。両腕が無いので絵的にも違和感というか変でしかないのだが。でも言ってる事は正しいだろう？
何か2人から感じる視線が痛いが無視。発言もイタイと思われてるんだろうが無視！もうここまで来たら止められない止まらない！

「それに前の慧音の事にしたってだ。あっちは相当な人格者かつ学校の先生であり、人里の守護者なんだ。俺を嫌いこそすれ、そんな関係になる程の好意を持つ訳無いんだよ。持っちゃいけないんだよ」

「……彼女達は「知ってる。けど、まだ戻れる所に居る」……」

「まだ大丈夫。今なら引き返せる。まだ誰も、何も起こしちゃいな

いんだ。何かがあってからじゃ駄目なんだよ。……解るだろう？」

今なら。まだ何も起こっていない今のうちならば、元通りになる。
人里の守護者。その肩書きは、とてつもなく重いものだ。
幻想の境界。その名は、途方も無く尊いものだ。

彼女達だけじゃない。他のどの名も、この幻想郷において重要な意味がある。
意味の無いものなんて無い。意味があるからそこにいる。
まあ、俺は残念ながらそこにはいないが。

「……っと、何か変な話をしたな。悪い、てんしょんが駄目な方向に暴走した。なんでだろ？眠いから？」

「……」

大きな欠伸を1つ。さて、そろそろ家にでも帰りましょうかね。用事は……まあ、案内はしたし、いいだろ。
俺は俯いている鑑枷を尻目に、我が家、というか小屋を目指して歩き始めた。
少し気が病まれるが、まあ、何時ものことだ。

……それと、一応当事者の一人の紫は、むしろ嬉しそうにしていた事が気になった事と言えば気になった事か。

…ああ、そうだ。これも言っておこう。物はついでってな。

「紫、『もう一人』に言っておいてくれ。そっちの俺がどうだかは知らないが、少なくとも俺は、良い父親だった事なんて無いってな」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……結局、私の事については触れませんでしたね……」

「もう手遅れって事なんじゃない？」

「それに、随分と『人間らしさ』が増していました。思考の仕方も人間のそれに近い様ですし……」

「そうね。……余計な気遣いなんて、昔なら到底考えられないわよね…」

「……話の内容が内容でしたから、落ち込んでいるのかと思いましたが……嬉しそうですね、紫？いえ、一安心している様に見受けられますよ？」

「そうかしら？……まあ、そうなんでしょうね」

「…まあ、あなたが何を考え、どの様な行動を起こしたのかは存じませんが……感謝します」

「……どうして？」

「解っているでしょう？」

「まあ……ね」

「……それでは、また」

「追わないのかしら？」

「まだ思い出話は終わっていませんから。貴様こそ、九十九に用事があったのではありませんか？」

「……あ、しまった……。…って、あら？実は結構、怒ってない？」

「……さあ？」

「あ、ちょっと……はぁ。まあ、良いでしょう。経過はそこそこ順調、と。……ただ、やっぱりあの娘。気になるわね……。いけない、用事用事」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、俺が二人と別れて、歩き出してから数分。俺は人里の外に出ていた。

家に帰っているのだから、当たり前っちゃ当たり前なんだがな。

しばらく道をてくてくと歩いていると、なにやら駆け寄ってくる足音が……聞こえてきたりはしなかったが、目の前が割れた。

正確には、目の前の空間に『スキマ』ができて、そこからにゅっ、

と紫が出てきた。
ん～……どうやらさっき別れた紫の方のようだ。意外だな、追ってくるとは思っていなかった。

「うっす紫さん。お久し振りッス」

「突っ込まないわよ、時間が無いの。いいから来なさい」

俺の発言を華麗にするーし、俺の襟首を引っ掴んでスキマの中に引きずり込もうとする紫……って、ちょ、おま！

「おーけー解った！何が何だか解らないけど解った！解ったから落ち着こう！話せ！話せば解る！というか放せ！話をする前に放して下さいお願いします！！」

「詳しい事は向こうで話すわ。……大丈夫よ」

俺の襟首を掴んだまま、紫は笑みを浮かべてこちらを向いた。…あれー？悪い予感しかしないぞー？

「中にある目の数でも数えている内に、向こうに着くから」

「……すっ……すいませんでしたぁぁあああああ！」

俺の悲鳴は、『スキマ』に呑まれて消えていった、まる。…因果応報とはこのことか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、皆さんこんにちは、こんばんわ、おはようございます。白玉楼の2代目庭師兼幽々子様の警護役の魂魄妖夢です。よろしく御願いします。

……はて？私は一体、何に挨拶をしているのでしょう？というか何故挨拶をしているのでしょうか？

……ま、まあ。些細な疑問は捨て置いて。……いいから捨て置かせて下さい。私はまだ、惚ける様な歳ではないんです！決して！

……んんっ！……今私は、人を待っている。正確には、人ではなく妖怪なのだけど。

今朝方、幽々子様に異変が起こった。異変といっても、幻想郷全土を揺るがす大惨事…という類の異変ではなかったし、前々から兆候らしきものは見られていたのだ。

もう何年前のことだろうか。何の前触れも無く、幽々子様が苦しみだしたのだ。お腹が空いた、お腹が空いた、と呻きながら。

……こらそこ、何時も通りと言わない。……確かに幽々子様がお腹

を空かせているのは何時ものことだけど、その時の様子は、いつも通りではなかった。
幾ら食べさせても満たされる様子は一向に無く、屋敷にある食料を一通りしても収まる気配は無く。
しかし、しばらくすると、何故か飢えは収まったようで、何時もの幽々子様に御戻りになられた。
それからの半年間はそのような異変は全くなく、私も忘れかけていたのだが、最初の異変から半年と少しが立った頃、またしても幽々子様が苦しみ出した。

流石にこれはおかしいと思い、幽々子様に一番詳しいだろう幻想郷の賢者、八雲紫様に話をしたのだが、「何時ものことじゃない？…冗談よ、悪いけれど、解らないわ」と、本当に申し訳無さそうな顔で謝ってくるという、なんとも珍しい光景に出くわした。
もっとも、その後すぐに、私はあの胡散臭い笑みを浮かべた彼女に色々と弄られたのだが。

それはともかく。幽々子様を一番知っているであろう八雲紫ですら、今回の事は初めてで、原因は解らないそうだ。
ならば、と、二番目によく知っている先代庭師であり、私の御爺様であり、師匠でもある魂魄妖忌に聞こう、とは思ったが、あいにくと行方知れず。
これといった対処法が見付からず、幽々子様が苦しんでも何も出来ない。そんな色々と落ち込みそうな事は、あの時から今まで、ずっと続いている。
救いは、時間経過で収まるというのと、本当にただ食欲が満たされない『飢え』だけであり、深刻なレベルの苦痛では無いらしい事、それ以外には幽々子様に変化は見られないといったところか。

最初の異変から随分と時間が経った今日、八雲紫が顔を出した。

そうして何時も通りに幽々子様と八雲紫が談笑している時に、例の異変が訪れた。
苦しみだす幽々子様に、珍しく慌てふためく八雲紫。
ふと、そういえば、八雲紫は話はしたけれど直接見るのは今回が初めてか。と思い至った。そうか、あの八雲紫でも、慌てる事はあるのか。
私はと言えば、もう何年も続いてしまっているので、本来はあってはならないことなのだろうが、苦しむ主人を前に、動揺はしなくなっていた。

主人が苦しんでいるのに落ち着いている私に疑問を覚えたのか、八雲紫が詰め寄ってくる。
何か違和感を覚えたが、私は「ほら、例の異変ですよ。あの原因不明の」と言うと、何故か異変の事を詳しく教えろと聞いてきた。
先程よりも強く違和感を覚えたが、まあそれも何時もの事かと捨て置いた。
数年前から約半年周期で続いている事、収める方法は見付かっていない事、時間経過で自然と収まる事を話すと、八雲紫は何事かを考え始めた。

しばらく、という程の間も置かずに、「真経津九十九は最後に何時来たか？」と聞いてきた。
真経津九十九というと……あの変態か。そういえばここ数年見ていない。最後に此所に来たのは……十年程前だっただろうか？
ふと思い出したが、幽々子様の身に異変が起こり出したのも、丁度その辺りか。
今までは全く関係無いと考えていたが、思い返してみればあの変態は、幽々子様ともある程度は親しかったような……。
そんな事をつらつらと考えていた私に焦れたのか、少し威圧するよ

うに八雲紫が「最後に来たのは？」と聞いて来た。
少し恐かったので、つい「あやつは近頃はめっきり来ていません！サー！」と、変なことを口走ってしまった。
そこは普通、マムだろうに。

私の返答を聞いた八雲紫は、どこか納得した様に頷いた。
「ついでだからね。……そうね、2時間後に連れてくるわ」という、よく意味のわからない事を言って、『スキマ』の中に入っていった。
連れてくるって、誰を？まさか変態？ついで？といった私の疑問に答えは帰ってはこなかった。
そして1時間55分経った今、私は門の前に立っている。

「……暇です」

何もしないで待つのは暇だ。剣の素振りでもしようかと考えたその時、チリンチリンと、鈴の音が響いた。

「これは…！『対変態用センサー』！」

対変態用センサー。文字通り変態が邸内に侵入した際に鈴の音が鳴

り響くようになっている、妖術の一種だ。先代庭師の御爺様が仕掛けたらしい。

それが鳴ったという事は、もうすでにあの変態は屋敷の中に居るという事か。おそらくは変態の能力か、八雲紫の『スキマ』で勝手に侵入したのだろう。

まったく、連れてくるってそういうことか。毎度毎度思うが、せめて普通に門から入れないのかあの不法侵入コンビは、と悪態をつきつつ屋敷内に急いで戻り、幽々子様と親しい方々を御通しする、所謂客間に向かう。何故だか知らないが、あの二人は大抵あそこから侵入するのだ。

少なくとも、二人が侵入してからまず行くのは、客間である。

幽々子様の部屋や、白玉楼名物の美しい庭などを差し置いて、何故だか解らないが、8畳ばかりの机以外には特になにもない、殺風景とすら言えるだろう客間で、大抵あの二人は目撃される。

あれか。菓子か。お客様用の菓子が目当てなのか。

色気より食い気、花より団子を地で行く、流石幽々子様の御友人＋アルファというかなんというか……。

そんな馬鹿らしい事を考える余裕を持ちながらも、結構広い屋敷内を走って移動し、お客様を通す例の部屋に辿り着く。

予想通りに二人は居た。ただ――

「情けないわねぇ……まだ治ってないの？その酔い癖。……折角返してあげた腕、汚さないでね？」

「おま、消えかけた奴に向かって、しかも自分から奪った腕を放り投げておいてその言い草……！あとこれは酔った訳じゃ…！……

……あ、やべ。大きな声出したら吐き気が……」

「きゃー！？洗面器！洗面器ー！」

「あら。こんにちは。お邪魔しているわ」

「見ればわかります！ああ、耐えて！もうちょっと耐えて下さい！」

まずはなにより、容器が必要な様である。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あ〜…………。すっきりした」

「どう？気持ち良かったでしょう？」

「そんなどや顔で言うな！お前のせいで気持ち悪くなったんだろ！……はあ、もう『スキマ』なんて入らない……」

「どうやって帰るつもりなのかしら？」

「……………………そうだ、ここに住もう」

「それは止めて下さい」

ちょっとしたあくしでんとがあってから暫く。俺は客間で紫と、こ

の白玉楼の庭師兼幽ｙ（ｒｙの魂魄妖夢と、向き合いながらお茶を飲んでいた。
ちなみに、別に暇だから、という訳では無い。紫が俺をここに連れてきた理由を話す、と言ったからここに居るのであって、断じて菓子が食いたいだとかお茶が飲みたかったからだとか、そういう理由では無い。…少なくとも俺は。隣のヤツは知らん。

で、俺が黙って話すのを待っていたら、何だか知らんが「お茶を頂けるかしら？」とか隣のが言いやがったり、庭師が溜息吐きつつもてきぱきと俺の分まで用意してしまっていたり。
用意されたら断る事はできんな、うん。ってな訳で、只今絶賛休憩中である。……あれ？

「……あれ？なんで俺、まったりとお茶なんか飲んでんだ？」

「ああ、忘れていたわ。そうね、貴方が居たわね」

「そこから？！俺に事情を話す事を忘れてたんじゃなくて、もっと根本的な事から忘れてた？！」

「まあとりあえず、貴方には色々と言いたい事があるのだけど……」

色々って、……さっきの事とかか？
紫は、何かを考えるというか、何から言ったらいいのかと考えているようであったが、「面倒だから止めたわ」という一言で思考を放

棄した。おいコラ、待てや色々と。

「とりあえず、貴方は幽々子と会ってきなさい。貴方、あの子とどのくらい会っていないのかしら？」

「……あ。やべー……すっかり忘れてた」

あうち。色々有ったから忘れてたぜ……というのは建前で。ぶっちゃけ白玉楼って来たくなかったんだよね。交通手段が一つしかないし、その交通手段が問題の塊だからな。

「やべーよどうしよう……なあ、西行寺さん、消えてたり弱ってたりしないよな？」

「そういう様な事はありませんけど、時々満たされない空腹感に苛まれたりはしてますね」

「まんま中毒者じゃねえか……」

おおう。そんな事になっていようとは……全く知らなんだ。満たされない空腹感って……よくある怪物への変異の経過段階じゃね？

まあ、西行寺さんは幽霊だけど。亡霊だっけ？

そんな事を考えながらお茶を飲み、これからどうするかを考えていると、廊下の方から大きな足音が聞こえてきた。
どたどたどた、と結構大きな音である。どうやら行儀とかそういうのを気にする事が出来ない程に焦っている……のかは知らんが、とにかく余裕が無い様子。
この足音の正体が西行寺さんだったら笑えるよなぁ。いやいや、あの西行寺さんだぜ？あのおっとり系代表の。忙しなく動いてる図なんて想像出来ないって。
ああいや、でも、わたわたと涙目で一生懸命動いている西行寺さん……ありだな。

まあ無いな。とは思いつつもそこは変態、というか男ですから、想像した『涙目の西行寺さん』を、更に妄想して涙目な理由とか、細かい設定を付けていく。
むう……涙目な理由は……ご飯抜きにされたから……いや、それだと何か普通にありそうだな。もうちょっとこう、……んー……。
じゃああれだ。普段俺の西行寺さんに持っている印象とは真逆の事を考えてみよう。要は西行寺さんなら絶対に無さそうな理由とか言動とか、そういったものだ。これが妄想の有るべき姿と本来の意義なのかもしれないが。

そうだな……男に捨てられそうになっている……ってのはどうだ？西行寺さんなら男を作る事なんて無いだろうし（ちなみにこれは西行寺さんがそういった事に興味がないからであって、決して西行寺さん本人に魅力が無いという事では無い）、例え作ったとしても西行寺さんの方から捨てそうだ。
ん～…でも西行寺さんの方から捨てるってのも無さそうだな……。
くっついたらそれこそ死んでも添い遂げてそうだ。

あ、そっか。西行寺さんがしなさそうな事を考えればいいんだっけか。じゃあ男に捨てられそうになるって設定で。……あれ？おかしいな。相手役の男に殺意が湧いてきたぞ…？

そんな事を考えていると、駆けてくる人物が部屋の前に到着。その次の瞬間には、凄い勢いで部屋の襖は開かれた。

「九十九様っ！！」

口に含んでいたお茶を吹きそうになったのは仕方無いことだと思うんだ。

いや様って。普段はさん付けなのに様って。

ほら見てご覧。紫も庭師もお茶を飲む姿勢のまま固まっているよ？

そんな事態を巻き起こした張本人の西行寺さんは、二人の様子には気付いていないのか目もくれず、なんか目に涙溜めながらまっすぐに俺の所まで歩いてきて。

「鈴の音が聞こえたので、もしやと思い、いてもたってもいられず駆けつけました。ああ…！会いたかったです九十九様……！」

「ぅえほッ！！ごほっっ！？」

感極まった様子で、俺にぴとっと引っ付いてきやがって下さいました。
それを固まったまま見ていた庭師がお茶を吹き出す。紫はぎりぎり吹き出さずに済んだようだ。が、かく言う俺は思わず思いっきり呑み込んでしまった。

なんて事言ってんすか西行寺さん。つーかその言葉遣い何？なんで若干敬語なの？
なんで久々に会った夫に対する様な態度なの？とか色々突っ込みたかったが、それ以上に口に含んだお茶をどうにかするのに精一杯だった。

「あのー…西行寺さん？何故にそんな言葉遣い？何故引っ付くの？」

「西行寺さんだなんて、そんなよそよそしい。何時もの様に幽々子と呼んで下さいませ」

「一度も呼んだ事無いわ！」

下の名前をさん付けでならともかく、生憎と呼び捨てで呼んだ事なんて、今まで一度も無かった。

「九十九様、何故来てくださらなかったのか、などとは聞きません。私は、あなた様が来て下さっただけで幸せです…！」

「聞けよ、おい」

俺のつっこみどころか先程の事は無かったかのように話していく西行寺さん。聞けよ。聞いて下さいよ。頼むから聞きやがって下さいよイヤほんと。もうヤダこの人。

「行かないでとは言いません。愛してくれとは言いません。ですが私はもう、あなた様無しでは生きられないのです。どうか、どうかお情けを……」

「ぶはッッ！！」

紫、陥落。見事な緑色の噴水だこと。

さっきから暴走している西行寺さんは、先程よりも体を密着させ、下から涙目でこちらを伺う。いや、俺無しでって。それって要は食欲的な意味でだろ？あんまり嬉しくないわ。

……うん、『あんまり』って言った通り、実はちょっと嬉しい。いや、だって美人さんにあなた無しでは生きられないって言われて嫌な奴なんて居るのか？ああ、一部に居るか。

「そうだね、言い方が悪いよね。もっとこう、すとれーとに言って

くださいな。というかまじ勘弁して下さい。俺が悪かったですから」

「……そう？本当に、そう思ってる？」

「ええ。そりゃもう海より深く反省してますとも。長い間、ほったらかしにしてすいませんでした」

「解ればいいのよ。じゃあ、普通に話をしましょう？……二人とも、御免なさいね？」

どうやら幽々子さんの一連の行動は、俺に対する報復のようなものらしい。

だからなんか駄目亭主に対する言動とかだったんですね。納得。

ちなみに二人とは勿論紫と庭師の事である。いきなりの言動に驚かせた事を謝ってるんだろう。

だがなんかもう遅い気がする。そしていちいち発言が洒落にならん。

ほら見てご覧よ、紫さんと庭師が疑う目で俺を見てるじゃないか。

お、俺は悪くないぞ！悪いのは西行寺さんだ！西行寺さんが全部やったんだ！俺は悪くねぇ！……うん、ごめん。元はと言えば俺が全部悪いよな。

そんな発言を聞いているのかいないのか、とにかくお茶を吹き出した後、二人は固まったままで俺に視線を固定している。なんだか言葉の意味が重複している気がするが気にするな。

…さて、これからどうしたものか……というか西行寺さん何がしたかったの？本当に俺（と紫とか庭師とか）をからかいたかっただけなのか？つーか元気そうだなオイ。

西行寺さんの様態の事とかこれからどうするべきか、むしろ固まっている二人はどうするべきかなんて事を、とりあえず落ち着く為という意味も込めてにもお茶を飲みながら考える。
知ってるかい？お茶等に含まれているカフェインって、頭痛を抑える効果があるらしいぜ？

お茶を含み、ゆっくり飲もうとしていると、この空気を作り出した張本人の西行寺さんが

「ねえ九十九さん？そろそろ……いいでしょう？逞しい九十九さんを、私に食べさせてくださいな？」

「ぶふぉ！！」

俺の足の親指と親指の間をさすり、さすりと撫でて、紛らわしいこと言ってきた。いや、間違ってない。間違ってないんだけども。言い方が間違っている！茶ぁ吹いたわ！
つーかまだ怒ってる？もしかしなくても怒ってますよねこれ！そんなに俺をおちょくって楽しいか！それともこの後俺の顛末を期待してるのか！そーですかそりゃご要望に御答え出来そうでなによりですよえぇ！

「……少し、『お話し』をしましょう…？」

「貴様……」

固まっていた二人がゆらぁ…ってな感じに立ち上がってくる。
漫画的表現みたいであれなんだが、心なしか目が赤く光っているような気がするよ！
き、斬り捨てる！？斬り捨てるって何を！？ナニをか！ナニがばっさりいかれちゃうのか！？やべえ、俺の息子の寿命がまっは！！

「おーけー待て少し待て。君達の想像は間違っている。誤解だ」

「5回も…ですって……？」

「違うよね！？俺の言った事とお前が理解した事、間違いなく違うよね！？」

変な感じにすれ違いが！日本語って難しいね！いやそうじゃなくて！なんとかして誤解を解かなければ、俺は息子とおさらばしてしまう！紫が若干本気なだけに冗談とは言い切れないどうしよう！？

「流石に洒落にならん！西行寺さん！どうにかしてくれ！」

「え？……そうね。ソーセージって、美味しいわよね？」

「関係無ぇ！この土壇場で全く関係無い事を最悪のたいみんぐで言いやがった！」

頼むから俺の話を聞いて下さい！発言には責任を持って下さい！関係無いけど関係あるって、どんな不思議だ！尚更誤解されるだろうが！

「舐めただけで結構濃い味のするモノも多いし、歯ごたえも十分にあって。意味は無いけど皮を剥いて食べる事ってない？そのままでも食べれるのに、なぜか剥いちゃうのよねぇ……」

「続けた？！俺の言う事聞いてた？！ねえ、聞いてた！？」

「噛まずに飲み込んだり、とりあえず舐めて味を楽しんでみたり。ひと思いに噛んだりしても良いけど、時々熱い汁が顔にかかっちゃうし……やっぱり口に入れて、少し冷ましてから、良く噛んで味を堪能するのが一番よね」

「もう止めて！二人の怒りげーじは天元突破よ！？話も二人も止めて下さい御願いします！」

ああっ！二人の表情が阿修羅の如くに！？

ただソーセージの食べ方うんぬんを語っているだけ（だと思う。思いたい）なんだが、なんか所々えろい！つーか紛らわしい！なにこのたいみんぐ最悪な食欲魔神っぷり！空気嫁！

「九十九。何か申し開きは？」

「勿論あるよありまくるよ！」

「じゃあ、これから私がする質問に、正直に答えなさい。返答次第では、大目に見てあげても良いわ」

「まじでか！」

なんでだろう？紫が女神に見えるよ！女神なんて見た事ないから俺が普段紫に抱いてる感情を言っただけだがな！

とりあえず正座を強要され、大人しく座る俺。本日2度目の正座あんど尋問である。

しかも2回とも人の家で、かつ紫が関係している。間違いなく今日は厄日である。あ、いや。そうでも無いかもしれない。うん。今日は幸せな1日だな、うん。

尋問が始まるのを正座しながら今か今かと待ち構える俺。……あれ？何で俺、こんな所でこんな事してるんだ……？ま、いっか！

ふと顔を上げれば割と近くに紫の顔が。うわぁい近いな嬉しいな。

でも尋問するに当たってその姿勢はどうにかならんのでしょうか。
どうみてもその筋の方としか思えません。
まあ、似合ってるっちゃあ似合ってるから良いんだけども。女の子としてすかーとでその姿勢ってどうなの？恥じらいは疾うの昔に置いて来ちゃいましたかそうですか。

「まず一つ」

「ごくり……」

「貴方、私に幽々子関連で、何か隠し事してるでしょう？」

いえすである。ただ、多分お前の思っている事とは違う。……と、言いたいのだが…「はい」か「いいえ」以外の言葉を許されている空気ではないな。これは。

「……はい」

「……次。貴方が食べるの？貴方が食べられるの？」

「俺が食われる」

文字通りの意味で。性的な意味で、とかそういった事はなく、文字通りの意味で食われる。
色気なんぞ全くありません。

「ふ～ん……。次、他にも、そういう事をしていたりされている関係って、あるかしら？」

「ああ、もう一人いるな」

ルーミアも時々食べてるからな。ごっどいーたー的な意味で。
あれ？なんだろう。一端は緩くなった紫さんの圧力が強くなったぞ？おかしいな。

「……これで最後よ。その二人の、貴方に対する感想は？」

「『極上』らしいぞ？腐っても神ってことなんじゃね？」

「そう……」

肉の締まりも良く、味も今迄に食べた事無いぐらい美味しいらしい。
俺を食べるって、正直神喰らい的な意味でも不味いと思うんだが、
今のところは西行寺さんには影響は無い様子。死んでいるから当た

り前なのかもしれないが。
ルーミアの方？ははは……聞くなよ。俺が悪かったです。

と、俺の前でヤンキー座りして質問していた紫がふらっと立ち上がる。表情は顔が影になっていてよく見えない。悪い悪寒がびんびんするぜ…。
判決は……

「腹を斬って死になさい。むしろ死ぬべきよ。世の為人の為、何より全ての女性達の為」

「やっぱダメだったか！？」

どこで仕入れたそのネタ。…ああ、そういや前に教えたな。そんな感じの台詞を幾つか。

親指を立ててクイッと動かす紫。なんかの合図だったのか、横に控えていた庭師が、刀を抜いていきなり飛びかかってきた。…あ、これ死んだわ。つーか介錯じゃないの？腹斬る前に斬り掛かってくんなや。まあ最近はどこもそんな感じなんだけど。
切腹を命じたのに首を斬られるって、なんなんだろう。

そうして俺の首と本体は、離ればなれになったとさ。めでたしめでた……めでたくねぇよ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「全く、あの変態は！いつの間にそんないかがわしい事を……！」

斬り捨てた後、後片付けやらなんやらを幽々子様に言い渡されたので、とりあえず布やらを持ってくる事にした。まずは血痕をなんとかしないと。

それにしても、私の知らないところで、八雲紫にも知られずに、言葉にするのも憚られるような行為をしていたとは……！

信じられません……あの幽々子様が……そういった事に興味を持たれているとは思っていませんでした……。

……はっ！まさか、幽々子様はあの変態に嫌々させられていたのでは？！

きっとそうです！そうに違いありません！あの幽々子様がそんな事を自分から望む筈がある訳有りませんし！

許すまじ、真経津九十九！幽々子様をよくも………！やはり幽々子様に会わせず斬って外に捨て置くべきでした…！

いや、今からでも遅くはありません！斬り捨てましょう！今ならまだ身動き出来ない筈ですし、やるなら今が好機！

持っていたものを放り、変態を放置していた部屋。つまるところは先程の、今は幽々子様達も居るであろう客間の襖を開ける。

幽々子様の目の前で斬る事になるのでしょうが、まあ、問題ないでしょう。

さあ、いざ討伐！

心を決めて、襖を一気に引く！そうした事で視界に入ってきた光景は？？？

「…………見なかった。私は何も見なかった…………」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そうですよ。私は何も見ていませんでした。
私は初めて人の首を斬るという中々にショッキングな体験をした後、気分を悪くして、しばらくの間トイレの妖精になっていたんです。だから決して客間の中なんて見ていません。襖？開ける訳無いじゃないですか。開けられる訳無いでしょう？何を言っているんです？
ええ。決して何も何一つ何にしろ何でさえ、とにかく何も見ていなかったら見ていないんです。
首がない変態の身体に幽々子様が食いついていたとか、血の臭いがしたとか、むしゃむしゃいってたとか、変態の首を大切そうにスキマ妖怪が抱き締めていたとか、なんか近かったとか、あれ？今なんか唇が………とか、目が合ったとか、そういった事は全然全くこれっぽっちも一片たりとも塵芥すらもありはしないんです、ええ！
……ああ、いけません。また気分が悪くなってきました。これもあの部屋であんなものを見………変態の首を斬ったからですね。…少しトイレに隠………篭もっていましょう。催したら大変ですし。
そうして私は、なんか誰かから呼ばれている様な、見られている様

な嫌な感覚を身に受けながらも、トイレに向かいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……ぷはっ。…やっぱり美味しいわぁ……。あら？何をやっているの紫？……へえ、ふぅん……そう…」

「……何か、壮大な誤解が巻き起こっている様だけど、違うわよ？」

「……じゃあ、何？死姦の趣味が無いのなら、それは何？」

「死姦！？もっとこう、マイルドな言い方無いの！？…ってそうじゃなくて、なんで死姦になるのよ！」

「いや、だって……ねぇ？」

「本人に振らないでくれるかしら！？」

「で、何？」

「……見なかった事にして頂戴」

「無かった事にはしたくない、と。……紫ったら乙女～」

「幽々子！」

「……まあ、良いでしょう。何かしら事情があるのでしょうし。九十九さんが此所に顔を出さなかった事も関係しているのでしょう？」

「……残念だけど、私は変態じゃないからその辺りの事情は知らないわ。…急に話題を換えないでくれる？」

「私、空気読めないし読まないし読むつもりも無いわよ？文脈も」

「本当にね……」

「……ああ、誰かに似てると思ったら、九十九さんだったのね」

「……誰の話？それと少しは話の流れを汲んでくれないかしら」

「うん、それ無理。ほら、あの子よ、長い白髪で活発な美味しそ…奇麗な子」

「…聞かなかった事にしてあげるわ。……白峰顕冴のことかしら？」

「そう、顕冴ちゃん。あの子、初めて見たときから誰かに似てるわね、とは思ってたんだけど…ようやく合点がいったわ。九十九さんに似てるのよ。あと鑑枷ちゃんにも」

「性格は……結構違う…と思うのだけど」

「顔が、よ。性格も結構似てるし、他にも色々似てるわね。思うがまま感じるがままに行動する所とか、何故か殺せない所とか」

「……最後は聞かなかった事にしてあげるわ。……そうね、確かに言われてみれば、似ていない事も無いわね……」

「……鑑栂ちゃん、元気かしら……」

「アレには元気も何もないでしょうに。……昼間、人里で見掛けたわよ。元気そうだったわ」

「……少し早くないかしら？」

「大丈夫みたいよ？……今の所は、ね」

「そう……。ところで九十九さん、どうやって連れて来たの？中々捕まらないと思うんだけど……」

「本当に文脈読まないわね貴女……。……端的に言えば待ち伏せよ」

「……ストーカー…」

「亡霊（あなた）に言われたくはないわね」

「……それにしても、中々再生しないわねぇ、九十九さん……」

「だから少しは脈絡を……はあ、もう良いわ。それにも色々あるんでしょうよ」

「色々……ねぇ…」

「そう、色々」

「……妖夢、まだ来ないのかしら…？」

「今頃トイレにでも籠ってるんじゃない？」

「何で？」

「……催したんじゃないかしら？」

「……何で？」

「色々あるんでしょうよ」

「色々……ねぇ……」

「そう、色々」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（ふむ……これは、寝たふりを続けてた方が良いかな……良いよな……うん、寝たふりしておこう）

自分でも驚いた事その1。首だけでも意識ってあるんだな。
まあその昔、ギロチンで首を断った後、意識があったら瞬きをさせるって実験があって、実際に生首が瞬きをした、という事があったらしいが。
そんな事は置いといて、だ。
……どうしよう？どうするべきなのだろうか…？
生首の状態で紫に抱きかかえられたまま、俺はこれからどのように

するべきなのか迷っていた。割と切実に。
え？何時から意識が戻ったのかって？……おーけー俺は敢えて詳しくは言わないぜ。
ひんとはギロチンの実験結果だ。……もう解ったな？

（さて……どうしよう。眠るに眠れん。というか何故意識がある俺！）

そろそろくっつけてくれても良いじゃないか。そんな事を考え、そして自分の体の頑丈さを呪いながら、俺は眠れぬ夜を過ごしましたとさ。
……っていうか、本当に俺と紫、此所に泊まるんですね。俺生首だけど。身体は食われてるけどっ！
美女美少女ばかりの屋敷に男が一人。そんな絶好のしちゅえーしょんなのに、興奮すら出来ない事が恨めしかった。本日の俺、終了！

十四節目（後書き）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今回のボツネタ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

持っていたものを放り、変態を放置していた部屋。つまるところは先程の、今は幽々子様達も居るであろう客間の襖を開ける。

幽々子様の目の前で斬る事になるのでしょうが、まあ、問題ないでしょう。

さあ、いざ討伐！

心を決めて、襖を一気に引く！　そうした事で視界に入ってきた光景は？？？

「……って、あれ？誰もいませんね……？」

部屋の中には、変態はおろか幽々子様も八雲紫も居なかった。もぬけの殻だ。

部屋の中は私が言いつけられて部屋から出たときと同じ……ああいや、変態の死体（気絶しているだけだが、便宜上こう呼称する）が無くなっている。あと湯飲みが１つ消えている。

他は全く変わっていない。私たちが吹き出したお茶もそのままだ。

……掃除が面倒です。

ああ、掃除といえば血痕も……あれ？血痕がありませんね……。斬

り落としたアレも見あたりません。血痕はまあ、変態の特徴といえば特徴ですから放っておくとして。
お二人と変態、どこに行ったのでしょうか……。

とりあえず入ってきた方の向かい側、部屋を挟んで反対側の廊下に出る。もしかしたらだが、幽々子様の部屋に居るのかもしれない。
幽々子様、なんだかやたらと食べたがっていた……ああ、そういえば。
八雲紫達が来る前までは、例の症状がでていたのに、客間に入ってくる時には健康そのものでしたね……むしろはっちゃけていた気がしますけど。
普通は、症状が出たら半日は収まらないのが常な筈。症状が早く収まるに越した事はありませんけれど、少し気になります。

幽々子様の部屋に向かって廊下を歩いていると、丁度幽々子様の部屋の前に、座ってお茶を飲んでいる八雲紫の姿を見つけた。……何やってるんでしょうか。

「……何を、やっているんですか？」

「…あら。もう済んだのかしら？ああ。お茶、美味しいわよ。ありがとう」

「ああいえ、どういたしまして……って、そういう事は今は良いんです。何をやっているのでしょうか。まるで見張りみたいですよ」

襖の前に……ああ、こちら側は障子でした。障子に背を向け正座で座り込んでいる姿は、部屋に誰も入れないようにしている、見張りにしか見えない。

「まあ、見張りよね。貴女、事が済むまでここに入っちゃ駄目よ？」

「何故ですか？事ってなんですか？」

「それが貴女の為になるからよ。幾分ショッキングな光景だからね。ああ、『事』っていうのは食事よ」

「食事？」

「ええ、食事。……全く、九十九ときたら、私に秘密で幽々子に食べさせてるんですもの。御陰で変な事想像しちゃったじゃない……」

ぷりぷりと年甲斐もなく憤慨している八雲紫。…ごめんなさい、まだお若いですよね。謝りますから睨まないで下さい。結構怖いです。

部屋に入らせない事が私の為になるって、どういう事でしょうか？

ショッキング……。

……まさか。

「食事……。……幽々子様、本当に頂いてしまっているのでは…

……？むしろ頂かれてしまっているのでは！？」

「耳年増。変な事ばっかり覚えるわね。そうじゃないわ、文字通りよ」

「耳年増とか言わないで下さい！」

「あら？年増って言葉が引っかかるのかしら？」

「……何を言っているんでしょうか？私などまだまだ若輩の身です。そういうあなたの方こそどうなんですか、大妖怪様？」

「……よくぞ私に対してそれだけの大口を利けたわね。よろしい、ならば戦争よ」

湯飲みを置き、立ち上がって傘を持つ八雲紫。それに呼応して刀を抜く私……って、何をやっているんでしょうか、私。なんでこうなったんでしょうか。

「いやいやいや。何かはぐらかされそうになりましたけど、結局中はどうなってるんですか」

話を元に戻す事にする。有耶無耶にしてしまうのは八雲紫と変態の専売特許ですからね。今回も危うく本筋から外れて戦争になるとこ

ろでした。

「そんな事はどうでも良いのよ。構えなさい。……私を年増呼ばわりした事、後悔させてあげるわ」

「何の意図も無い？！狙ってやった訳じゃないんですか！？」

割と本気で怒っている八雲紫。お、大人気ない！それでも年長組か？！

はぐらかす為に私に言わせて戦闘しようとしたんじゃなくて、あくまで自然な流れですか！

自然に縺れ込んだんですか！自然に年増呼ばわりされて怒ったんですか！大人気無いにも程がありますよ！

もっと思慮深くといいますか、老獪な方かと思っていましたが、今後この人に対する評価を改めなければなりませんね……無論マイナス方面に。

「……今何か、知恵深いとか狡いとか、そういう意味での言葉に、わざと『老い』を彷彿させる様な言葉を選んだでしょう？」

「本当に大人気無いですねあなた！思考を読むとか勘弁してもらえないですか！」

指摘が細かいですし！子供っぽいにも程があります！…って、何私が子供っぽいって思考した途端嬉しそうな表情してやがんですかー！少し若いと思われた、とでも思っているんですか！？若いと幼いは違いますよ！？
気にする所や言動全てが、本当に細かくて幼いです！アンタ今何歳だ！？

「……いいでしょう。私に思考を読まれていると知って尚その言動。しかと受け止めたわ」

「しまった、怒らせた！」

興奮のあまり思考を読まれている事を忘れてしまいました！
あわや戦闘に突入か、というところで、八雲紫の背後にある障子が開く。

「終わったわよ。ありがとう紫……って、あら？」

部屋の中から姿を表した幽々子様。少し離れたこちらの方まで臭いが漂ってくる。
強い強い、猛烈な臭い。

あまりに濃密な臭気に、思わず鼻を覆う。この臭いは？？

「何をしているのかしら。……お邪魔した？」

「……別に。それよりも貴女、その格好どうするつもり？だいぶ汚れちゃってるじゃない」

「そうなのよねぇ。我慢出来ずに、後先考えないでこの格好のまま食べちゃったから、服にべっとり付いちゃったわ」

「それ、早く脱いじゃいなさい。時間が経つとなかなか取れなくて大変なのよ？……自分で洗わない私が言うのもなんだけど」

「？？血の、臭い……？」

部屋から出て来た幽々子様の姿は、赤かった。服には首回りの襟刳を中心に赤く染まっていて、顔にも幾らか付着していた。赤いものは、間違い無く人間の血液だ。

幽々子様が出てくるのと同時に辺りに広がったのは、想像していたものとは異なり、強い鉄の様な、独特の生臭いにおい。

嗅いだ事が無い訳では無い。だが、あまり嗅ぎたい、と思う様な臭いではない。

その強すぎる臭いと、幽々子様の服に付着した大量の血、さきほどの八雲紫の「食事」という言葉で、部屋の中で何が行なわれていた

のか。大体の想像はついた。…想像したくは無かったが。
察せられる答えは、断じて甘ったるい空気が漂う行為などではなく。
むしろその逆、血腥い『食事』。
肉を噛み契り、咀嚼し、呑み込む。私たちが生きる為に必ず行なっている行動。
私たちが行なっている『食事』と異なるのは、生きる為に行なっているのでは無いという事。もう1つが??

「……食したのですか、あの変態???人間を…！」

「ええ。妖夢もどうかしら?一度食べると病みつきになるわよ?」

「～～～～っ！」

幾らあの変態が不死とはいえ、幽々子様がなんでも、妖怪ですら食べてしまいかねないとはいえ。
人を何の嫌悪もなく、嬉々として食べてしまっては、本当に、それでは本当に??

「それでは本当に、『化け物（ようかい）』の様ではないですか???！」

幾ら私達『霊』という、人では無い存在とはいえ、元を辿れば間違

い無く人間だったもの。
その私達『霊』が、人を食べ、あまつさえ喜びを覚える。そうなってしまっては本当に、人間を止めて、本当に妖怪になってしまう！

「失礼ながらも言わせて貰います！もうこのような事は御止め下さい！……これでは、これでは本当に「……やはり貴女は若いわね……」……っ！」

私の言葉を遮り、八雲紫が、どこか哀れむ様にこちらを見る。
その視線と言動に、斬り掛かってしまいそうになりながらも、思い返す。
若い……か。確かに私は、妖怪から言わせてみれば、まだ小娘なのだろう。
ほんの五十年ばかりしか生きていない、ただの小娘。

「覚えておきなさい。今でこそ妖怪と幽霊とは区別されているけれど、どちらも人ならざる化け物という点で同じよ。どこも、何も変わらないわ」

「……」

それは、解っている。

人の形をした、人を止め、人に仇成す化け物。
それは妖怪と呼ばれ、怪異と呼ばれ、幽霊と呼ばれ、神と呼ばれる。
そのどれもが人には持ち得ない超常の力を持ち、そのどれもが人では無い。
人の形をとっていない事や、必ずしも人に害を与える訳で無いといった細やかな違いはあるが、人では無いというところで共通だ。
だけれども。

「貴女は半分人で、半分が幽霊だから、今迄意識したことは無かったかもしれないわね。人を食べる必要も無かったのでしょう」

「……」

「亡霊とも怨霊とも違って、人に害を与える事もなかったでしょう。人と違うのはただ、寿命と回りを漂う貴女の姿」

「……」

「でもね、人じゃないのよ。どうあっても違うの。人から外れる事は出来ても、人のように生きる事は出来ないわ」

「……それでも私は、それでも私は…！「認めなさい。貴女は、人にはなれないのよ」……っ！」

……心のどこかで、私は考えていたのだろう。人間になりたい、と。
仕方が無いではないか。姿形は人間と変わらない。食べる物も変わ

らない。
感情だってあるし、恐いものだってある。ちゃんと生きているのだ。
人間と殆ど変わらない。……でも、人間ではないのだ。
こんなにも違わないのに、こんなにも違う。それは、とても、とても……悲しい。

ただ、今迄そんな事は、考えた事もなかった。自分が半分幽霊で半分人間な事には特に感慨も湧かなかったし、意識した事すらあまりなかった。勿論、完全な人間になりたいとも、完全な幽霊になりたいとも思う事はなかった。

でも、あの長い白髪の娘を。
何にでも楽しそうに笑う、生きている事が、人間である事があんなにも幸せそうな人間を見ると、ついつい人間というものを考えてしまって。

今を精一杯生きている彼女を見ていると、素直に楽しそうだと思えた。
だから。
人間に憧れても、仕方が無いじゃないか……！

「……解った？幽霊といっても、所詮は化け物なのよ。だから？？
「はいはいこの野郎。ただ俺を食う事を正当化したいだけだろ、お前さん」…っ痛いわね！叩かないで頂戴！」

「……はい？」

私に語りかけていた八雲紫の頭を、後ろから誰かがパシンと、咎めるように叩く。
幽々子様は少し離れた所、幽々子様の部屋の前に立っているから、叩くなんて事はできない。私も当然、正面にいるのに背後から叩くなんて芸当は出来はしない。
ということは……

「まったく。お前あれだろ。血の臭いに食指が刺激されたけど、とても「じゃあ自分も頂こうかしら」とは言い出せない様な空気だったから、何とかして俺を食べようと空気を変える為に言っただろ、絶対」

「……悪かったわね。ええ、そうですよ！私は自分の食欲の為に人の召使い潰そうとしましたよ！」

「……人の家の庭師、勝手に潰そうとしないでくれるかしら？」

和気藹々と、先程の問い掛けなんてなかったかの様な雰囲気で話し出す三人。
……どういうことなんですか？え？……ぇえ？

「ああほら、怒るなって。後で食べさせてあげるから、な？」

「露骨な子供扱いしないでくれるかしら？」

「なぁに紫？危うく人の家の大切な人材を潰しかけておいて謝罪も無し？流石に怒るわよ？」

「…ごめんなさい。悪かったわ。反省しているから力を抑えてくれないかしら。色々と洩れ出してるわよ」

「洩れ出す……なんか、えろすを感じるよな……」

「貴方はもう黙ってて」

私が事態を把握出来ずにいても全くその事を意識した様子はなく、楽しげな雰囲気のまま会話が続く。……っていうかあれ？これ私、もしかして忘れられてないですか？
もしかしなくても忘れられてますよねこれ。

「ところで九十九さん？この後どうするつもりですか？」

「どうするって？」

「もう陽も落ちてますし、泊まっていってはいかがです？」

「……ちょっと、私には何も無いのかしら？その変態にはあっても私に無いってどういう事なのかしら？」

「え？泊まるんじゃないの？」

「貴女の中では、私が泊まる事は確定事項なのね……」

「そしてそんな女だらけの屋敷に俺を泊めようとする、西行寺さんが俺は少し怖い」

「え？いや、特に困る事はないでしょう？」

「……なあ、紫さんや？」

「……何かしら」

「なんだろう、この……。なんとも言えない残念な気分。……鑑枷が一人増えたみたいな感覚があるんだが」

「奇遇ね。実は私、この子こんな子だったかしら？と内心首を傾げているわ」

「本人を前にして内心語る？」

「天然の気は前々からあったけど、なんかひどくなってないか？心無しか」

「天然、暴食暴飲、おまけに能力に使命と存在理由……はあ、面倒ね」

「…これもしかして私虐められてるんじゃない？」

「ふむ。……面倒臭いな本当に。面倒臭い女だな本当に」

「本当。面倒な事情ばっかり抱えてるわね。本当に面倒」

「……くすん。妖夢～！この二人がいぢめるの～～！」

「「でも……だがそれがいい！」」

「……ふぇ？」

「いや、なんつーんだろ、馬鹿な子程可愛く見えるっつーの？これも所謂萌え要素の一つって奴だな！」

「そうね、流石私の親友。一筋縄ではいかないわね。でもそこがいいのよ。なんか癒されるわ」

「……これは、どうするべきなのかしら……？怒ればいいのか、喜べばいいのか……」

「というわけで、だ……」

「そうね、そろそろ……」

「…何？何なの？」

「「……なんか後ろの庭師が怖いんで、お暇させて貰っても、良いですか？」」

怖い？はて、ここにお二人程の方が恐怖を覚える様な素敵な庭師な

んて、居ましたっけ？
……はいはいはい！ええ！そうですよ！怒ってますよ私！
大体何なんですか！いきなり説教じみた事始めたと思ったら、何時の間にかそれが終わったかの様に談笑して！
しかもその談笑が段々漫才じみてきてましたし！何が面白いんですかあんなの！
ただ泣いただけじゃないですか！幽々子様泣いただけじゃないですか！
途中本気で私の事忘れてたでしょう！？最初は意図的に気付かないふりしてて、話込んでる途中に無意識に私の事意識するの止めましたよね！？
イライラします！なんかもうイライラします！！なんでイライラするのか解らない程イライラします！！
ああ～！なんかもう……にゃぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

「お、落ち着けー……落ち着くんだにゃんこちゃん。ほら、あれだ。別にあれだから、忘れてた訳じゃないからっ」

「そうよ、別に本気で忘れてた訳じゃないのよ？ただ、幽々子をからかうのが想像以上に楽しかったというか、なんか周りが見えなくなるくらい熱中しちゃったっていうか……」

「……ごめんなさい。私ちょっと意識から外しちゃってた」

「「西行寺幽々子ーーーーーーー！」」

その後どうなったのかは、私の記憶が定かではないので解らない。
ただ、記憶が途切れる直前。私は刀を抜く事もせずに飛び掛かっていて。
気が付いたら、何かやたらとボロボロな二人と、無傷の幽々子様が、私の前に正座していた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

色々と何かもう、何かもうすいません。……生きててごめんなさい。
これもまた微妙な所で区切っていますが、理由はお察しください。

ちなみに「催す」という言葉には、パーティー等を開催する、吐き気が込み上げる等の意味の他に、掻き立てられる（性的な意味で）という意味もあるそうです。

良い夫婦の日番外編　前編

うい～～っす香霖ー！新しい品物見に来ましたー！」

一軒の普通……とは少し言い難い店の扉を開きながら、この店の店主に挨拶をする。
まあ、ここを訪れた理由は本当は他にあるんだがな。

俺が香霖と呼んだ人物？？本名は森近霖之助（自称）で、この店『香霖堂』の経営者だ。
この『香霖堂』、何屋と問われれば、何と答えて良いか迷った挙げ句に、「強いて言うなら『何でも屋』」という事を言わざるを得ない程の店である。

ちなみにこの『何でも屋』というのは、頼まれれば何でもやるという、所謂『万屋』という意味ではなく、多分探せば何でも売ってる雑貨屋さんという意味なのであしからず。
まあ、物作りに関しては『万屋』っぽい事もしているらしいのだが。

ちなみにこの『何でも屋』さん、品物はそこらに痛まない程度に放置してあり、ぶっちゃけ店というより倉庫といった方が正しい様な気がしてくる。
そんな感じの滅茶苦茶な内装のせいで、そこらにある物の中から自分が欲しいなぁと思ったやつを見付け、あるいは目に入った物の中で欲しい物があったら買う、みたいな変な仕組みが自然と出来上がってしまっている。
そして品物を選ぶに当たって注意点が１つ。その品物が非売品では

ないかをしっかり確認しよう。
店頭に置いてあるのに時々、店主がこれは売らないと決めた品物が放置されている事がある。なのでいざ買おうと思ってわくわくしてたら非売品でした、なんて事があってとらぶるが起きたり起きなかったり。
なので気分的に損したくないのであれば、しっかりと店主に確認する事をお勧めする。ただし、その時はくれぐれもその品物の価値を熱く語らない様に。

「……ふむ。居ないな……。奥か……？」

へんじがない。いまはむじんのようだ。
さてと、では早速捜索開始！……といきたい所だが、店主から「自分が居ない時に勝手に見て回らないで下さい」とのお達しがあるのでそうもいかない。
ちなみにこのお達し、店主が物を盗まれない様に店の表に張り紙で知らせ、訪れた全ての客に口頭でも知らせている事なので、俺のやらかした事への罰則ではないので、勘違いしないように。

俺はさっさと探索したいが為、店の奥の生活すぺーすの方へ歩いて行く。
間取りは……めんどくせぇ。とりあえず店があって、その奥に普通に人が生活する家がある。以上。
解らなかったら駄菓子屋とか米屋とか想像してみてくれ。あるいは二階建てのこんびにとか。

さてと……なんかげーむそふと入ってるといいなぁ……。とか考えながら、店から家への扉に手を掛ける。

幻想郷の店なのに何故にげーむそふとを望んでいるのか。それはひとえにこの店の品物の入手るーとに関係している。詳しい事はアレなので省くが、ぶっちゃけ店の品物の殆どが外の世界から流れ着いた落とし物なのだ。

だから稀にぱそこんとかがあったり、漫画とかが並んでいる時がある。

幻想郷の人が外の世界の物の価値が解るのか？という疑問には店主の能力を暴露する形で答えようと思う。

店主の能力は……これまた詳しい事はアレなので簡潔に言うが、物の名前とそれで何が出来るかが解るのだ。まあ、解るのはそれだけなのだが。

例としては『げーむそふと』にこの能力を働かせると、『げーむそふと』という物の名称が解り、『娯楽その他』に使えるという事だけが解る。

勿論解るのはそれだけなので、実際に使用するには『はーど』が必要な事とか、電気を使用する事とかも解らないのだ。

なんともまあ、微妙な能力ではあるが、それはそれで結構役に立つと本人は気にしていない。……というよりは気にしない様にしている、と言った方が正しいか。

現に指摘されるとなんか怒ってた様な気がするし。気がするだけだけど。

……割とここの店主、繊細なのかもしれない。大雑把な能力に反して意外と。能力が大雑把だから繊細なのかもしれないが。

そんなこんなで変な事を考えながらどあを開けると、そこには。

なにやら椅子に腰掛けてる香霖と、その膝の上に笑顔で座っている普通の魔法使いが居た。

……。

……。

……。

……あー……。

「……おめでとう？」

誰に恋しているのか解らないが、自称『恋する普通の魔法使い』の、まあなんというか、その……まあ、アレだ。……すきんしっぷ？ともかく、恋する乙女を応援している俺にとっては嬉しい事なので、とりあえず賛辞を述べておこうか。

……さて。出歯亀、出歯亀っと。

……ふ、うおぉおお……なんという……これは……。

「……むう……動きが少ない……だがそれがいい！」

当たり前と言っちゃ当たり前だが、二人には全くと言って良い程動きがなかった。

膝の上に魔法使いを乗せて抱きしめたまま動かない店主と、店主に抱きしめられて頬を紅く染めながらも、抜け出そうとはしない魔法

使い。
まったくもって健全かつ微笑ましい睦事である。……あ、今店主が魔法使いの耳元で何か囁いた。うわ、顔が更に紅くなってら……。
なんだこれ。甘い。甘いよ。健全…なのか？どっちみち甘い！
あ、魔法使い突っぱねた。流石にあれは駄目だったか……。それを見て苦笑しながら謝る店主。拗ねながらも許す魔法使い。そしてまたいちゃいちゃいちゃいちゃ。
…うっは！なんだこれ甘酸っぺぇ！甘酸っぱい通り越して砂糖吐きそう！こいつはたまらんぜぇ……！あ、いけね。つい涎が……。

「霖之助さーん。居るかしらー？」

（うおっ！？ちょ、マジで！？）

清く正しいとも言えるだろう一場面をじっくり出歯亀していると、背後の方、店の入り口から店の店主を呼ぶ声が聞こえてきた。博麗の巫女の声である。何やら用事があって来た様だ。相変わらず可愛らしい声である。
だが。だが、だ。だが今は駄目だ。ダメダメだ！
この恋人達（推定）の時間を邪魔させる訳にはいかないんだよ！
というか邪魔されたくないんだよ！

幸い二人には、先程の声は聞こえなかった様だが、もうこれ以上不安要素は残しておけん！

「…げ、あんた。なんでここに居むぐぅ！」

「よ～し確保！さあさあ少～し静かにしようか博麗のー！」

奥から出てきた俺を見るなり、嫌そうな顔をする博麗の。まあ、今は目を瞑ろう。

それより何事かを叫びそうな雰囲気だったので、全力で走って口を塞ぐ。勿論掌で、だ。そうして口を封じられた博麗のを小脇に抱え、そのまま店の外に全速前進ＤＡ！

「む～！む、むむむむ～！」

「…ふむぅ…何を言ってるかさっぱり解らんな。……嫌がる少女の口を封じて、更にどこかへと拉致っていく……うっはヤベェ！自分でやっといてなんだがみなぎってきたー！」

「むー！？む、むむむー！？むむむむむむー！むむむー！？」

お、今の解ったぞ。「だ、誰かー！？誰か助けてー！お母さーん！

？」って言った。
にしても普段ならば先代の事はお母様とか呼んでるのにお母さーん、とは……。
あえて自分から『ま行』の言葉しか発していない事といい、母親の呼称といい、何気にこの巫女、ノリノリである。や、良く解らんから多分だけど。

とりあえずは店の外へ出て、大声出しても大丈夫なように防音効果も兼ねた結界を張る。
ん？お前結界なんて展開できたのか？だって？…おーけーだぶらざー。面倒だから一度しか言わないぞ。よく聞いて刻み込めよ？
変態に不可能は無いんじゃなくて、不可能な事が無いから変態なんだぜ…？
昔紫に言われたから間違いない。うん、これ絶対間違いないね。

おっと、流石に博麗のが苦しそうなので解放する。
咳き込みながらも、こちらを睨み付けてくるその姿に、おじさん更に興奮しちゃった。

「……はっ……はぁ……な、なんであんたが此所に居るのよ！」

「いや、普通に買い物に来ただけだが」

「嘘おっしゃい！」

「買い物に来ただけだという事すら信じて貰えないって……」

正直、軽くへこんだ。俺って一体なんだと思われてるんだろう。
ここが白玉楼だとか、そういう美人さんがいる所ならまあ、解らんでもない。美人さん目当てで来てるんだろと思われても仕方無い。
大体本当の事だしな。
だがここは『香霖堂』である。美人さんなんて一人も居ねえ。今回の魔法使いはあくまで例外、というか魔法使いは客である。普段ここに居る従業員って訳じゃ無い。
そんなことはこの店を知っているなら誰でも知っている常識であり、そんな所に買い物以外で訪れたと疑われているって……。どういうことなの…。

「で？何？なんで私を担ぎ出したのよ。何かやましい事でもあったのかしら？」

「おおう、なんと話の切り替えの早い事。そんな所が好きですよ俺は。……実はな、奥に普通の魔法使いも居るんだが……」

「…魔理沙がどうしたの？」

「ここの店主と、今結構良い雰囲気なんだ…だから「ＯＫ解ったわ。行くわよ」ねえ、俺の話を聞いて！」

魔法使いと店主の現状を伝えた途端、嬉々として店の奥に行こうとする博麗の。ねえ、俺の言いたい事、解ってますよね！？
何？邪魔したいの？……っは！まさか、博麗の、お前も……！

「…何を考えているのかは知らないけど、邪魔するつもりは無いわよ？」

「じゃあ何しに行くんだよ。出歯亀？」

「まあ、ね」

「何故？やっぱりそういうのが気になるお年頃？」

「違うわよ。これを機に二人を脅そ…からかおうと思ってね」

「お前本当に人間か！？」

やる事が明らかに人間とは思えなかった。見方によってはまあ、嫉妬した結果とも思えなくはないが…。

それにしたって脅すって…。本音が洩れてんぞ。言い直しても無駄だと思う。

というかここは普通、嘘でも「そういう事に興味があるから」とか言っとけよ…。年頃の女子とは思えない言動である。

脅迫って……片方幼馴染み、片方恩人じゃなかったっけ？良いのそれ？人道的に良いのそれ？

からかうのなら……まあ、まだましだろう。脅すにしてもからかうにしても、『香霖堂』でのツケを清算しようという魂胆が見え見えなんだが。汚い、さすが博麗の巫女きたない。

「……ふむ、まあ…なんだ。ここに『かめら』があるんだが……」

「なんであんたがそんな物持ってるのよ」

「いや、知り合いが香霖の写真を欲しがっててな」

「ふぅん。……貸しなさい」

「お前は本当に何するつもりだ！人間とは思えないぞ！」

「あんたにだけは言われたくは無いわねそれ。大丈夫よ、一枚、決定的な一枚だけだから！」

「全然大丈夫じゃない！主に二人が全然大丈夫じゃない！」

これが何所ぞのブン屋にでも知れ渡ってしまったら、それこそ幻想郷中に広まって……うん？待てよ……？

「なあ博麗の。お前どうせここでのツケとか無かった事にしようとか思ってんだろうが…」

「なんであんたが私のツケの事知ってんのよ」

「まあそれは変態故にって事で流してくれ。……鴉天狗の新聞記者

に売った方が高くね？」

「……一理あるわね……」

真面目に考え出した博麗の巫女さん血も涙もねえっす！まさに外道。…残念だが、ここにかめらの貸し出しの機会は無くなってしまいました。

流石にあのブン屋に写真が渡る事だけは避けねば。俺は変態ではあるが外道では……若干あるけれども。

恋する乙女の味方を自称している俺は、今回ばかりは貸し出す訳には……。

「……けどま、それは止めておくわ。そんな事しでかしたら幻想郷全土に発信されちゃうし」

おおう、意外にも博麗の巫女には良心があった様だ。うむ。これならばかめらの貸し出しを許してやっても良いかな……。

というか本当に意外だな。割とがめつい博麗のだから、金になると言われれば、例えあいてがあの射命丸さんでも迷い無く売り込みに行くと、割と本気で思っていたのだが…。いやはや、如何に博麗の巫女といえど、やはり人の子という事か……。

……いや、でも先代の事考えると……まあ、良いか。良きかな良きかな。

そして俺が博麗の巫女にかめらを渡そうとすると、博麗の巫女は「それに…」と呟いた。
……なんだろう。この差し出したかめら、引っ込めたくなってきたぞ……？

「『弱み』ってのは、少数が知っているからこその『弱み』だしね……」

にやりと顔を歪ませて笑う博麗の巫女マジ外道。

結局、かめらは渡しました。まあ、良いかなって。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ところで博麗の巫女よ」

「うん？」

暫く後の事である。
結局あの後、二人に気付かれずに、無事に二人の写真を撮った博麗の巫女は、ホクホクした顔で戻って来た。……あのかめら、ふらっしゅおふ機能なんてあったっけか…？
細かい事気にしたら恐ろしくなりそうなので、思考中断。俺は写真

の現像の約束をし、かめらを返して貰うついでに、少し気になってた事を聞いてみた。

「香霖って、モテんの？それと何か用事があったんじゃね？」

「霖之助さん？……そうね……割と……って、なんであんたがそんな事聞くの？それと用事は今度でいいわ。そこまで急ぎって訳じゃ無いし」

「ふーん。…いや、あれの後だし、他にも香霖が好きな奴いたら面倒な事になったなぁ…と思ってな」

「…あんたの言ってた、『恋する乙女の味方』ってやつ？…本当だったのね…」

「おーけー聞きたい事出来たけど流そうじゃないか。で、お前は？好きなのか？香霖の事」

「私？」

自分を指さしながら目をぱちくりさせて、思ってもいませんでしたってな感がバリバリな博麗の。いや、そんなに意外な事聞いたか？別に話の流れから考えても、普通だと思うが。
普段も結構仲良さそうだし。俺としては気になるんでさぁ。

「そうねぇ……割と好きだし、悪くは無いとも思ってるけど、どっちかと言うとお兄さんへの好きって感じだし……兄妹居ないからよく解らないけど」

「ふぅん……そんなもんなのかねぇ…」

「何が？」

「いや、別に。で、お前さん、それ本当に脅しに使うつもりか？いや別に止めはしないけど」

「脅し？…ああ、あれは冗談よ」

「嘘付け。割と本気だったろ絶対」

「…まあそれは良いとして。どっちみち脅しには使えなさそうだしねぇ……精々使えたとしても、からかうネタ程度でしょう」

博麗のは俺の持っているかめらを横目で見ながら、そうぼやく。使えない…？

「使えないって、どういう事だ？結構良い具合に撮れてると思うんだが。写真見てないけど」

「そういう事じゃ無くて、よ。別に周りにばれても、あの二人全然

困りそうも無いし、羞恥心を煽る程度で使えれば良い方でしょ。下手すると目の前で惚気られる事もありうるわ」

「……ああ…」

写真見せられても、なんだ、ばれちゃったならしょうがないな。みたいな感じで笑顔で咎めもせず、それを切っ掛けに周りに言いふらしそうだ。特に魔法使いの方が。

ありうる。現に今簡単に想像できた。まあそれなら、ほんの悪戯程度が精々だな。

「まずそもそもとして、あの二人が本当に本物の恋愛感情を持ってるのか、っていう段階で怪しいし」

「うぇ？」

「魔理沙も霖之助さんも、兄妹愛の結果、あんな事してたんじゃないかって事よ。見たなら解るでしょ？」

「いや、全く」

てっきりマジの恋物語なのかと。いや、そういう可能性もあるのか。

……ふーん…。

「……あんた、まさかとは思うけど、全然解らなかったとか言うんじゃないでしょうね」

「そのまさかよ。さっぱり解らなんだ」

「…どの口で『恋する乙女の味方』だなんて言ったのかしら……」

「いや、だってなあ……」

「……ところでそれ、本当なの？」

「嘘付いてどうなるよ？」

「……」

えー……。って顔して黙り込む博麗の。何だか知らんが、悪かったな。

「もしかして、恋愛初心者？」

「違うぞ。割と違うぞ？」

「……童貞？」

「どっ、どどっ、どどどど童貞ちゃうわっ！つーか女の子がそんな童貞とか言っちゃいけません！」

「あんたは私のお母さんか」

「お母さんじゃなくても注意するわ！」

何をいきなり言い出すんでしょうかこの子はっ！まったく、親の顔が……ああ、そっか。先代か。

うん、先代ならしょうがないな。うん、しょうがない。

なにせ十にも満たない我が子、しかも女子に『見付け次第ブチ殺しなさい』とか定着させちゃう奴なんだし。

「じゃあ、なんで解らなかったのよ。いや、私から見ても結構ギリギリだったけど」

「……ふむう。ばれてしまっては仕方がないな。お前にだけは話しておこう。感謝しろ？紫ですら知らない事だぞ？」

「誰が感謝なんてするもんですか。あんたの事なんて知った所で全然嬉しくないわ……」

「ですよねー」

「……話すんならさっさと話なさいよ」

「おおう。それじゃあ……なんか、あれだな、ドキドキするな。告白みたいで」

「ある意味告白だけれど、気持ち悪く言わないで」

「すまんすまん。……あ～……実はな……やっぱあれだな、照れくさいな……」

「……帰るわよ？」

「待った！待って下さい！話します！」

これでも結構緊張するのだ。本当に誰にも話した事ないし。

……あれ？なんだろう。やたらと『博麗の巫女』だけが俺の特別な事情知っていってる様な気がする……。ま、気のせいだと願いたい。

「あ、ついでに一つ聞きたいんだが」

「あんたの事話すんじゃなかったの？」

「まあそうだが、それに関係するんだよ。で、聞いても良いか？」

「質問にも寄るわね。…良いから話しなさい」

「じゃあさっそく。なあ、お前ってさ、『家族愛』と『異性間での

一般的な愛』って、区別付くか？付くのなら、どうやって区別してる？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あの後なんやかんやあったが、無事に博麗のと別れて。
俺は我が家に無事帰り着き、そのまままっすぐに俺の部屋へ行く。
今は学校の時間帯だし、鑑枷も朝からどっか行ってるし、ただいまはいらないだろ。
で、俺の部屋の畳をひっくり返して、畳の下にある梯子を下っていく。
自分で掘った穴だが、なんか結構深いな……。なんでこんな作りにしたんだろう。
…そういえば、顕冴達がこの穴見付けて、下に降りたって言ってたような……結構まずいな。バレてなければいいんだが……。
結構長かった梯子を下りた先にある、我ながら変な作りをしているな、と思わなくは無い門を開け、部屋の中に入る。気分は秘密基地に入る少年そのもの！少してんしょんあがってきた！
…ってうわ！臭っ！埃臭っ！
部屋の中に入った瞬間に、何故だか知らないがやたらと埃が俟っている事に気が付いた。
あるぇ〜？おかしいなぁ。今朝方入った時にはこんなんじゃなかったから、如何に掃除してないって言っても、半日も経たずにこんなに埃が積もる訳は……。だったら……。
思い至って部屋の奥の方へ歩いていくと、やっぱりというかなんと

いうか、幾つか本棚が倒れていて、本やら何やらが散乱していた。
あ～あ～あ～。掃除が大変だー。
しばらく面相だなぁと思いつつ本の山を眺めていると、その山の中から人の腕がずぼっと生えてきた。
正確には本と本棚の下敷きになった奴が、腕を突き出したのだろうが、なんか土から竹の子が生えてくる様子が脳裏に浮かんだので、つい生えてきたなんて言ってしまった。

「あ～ビックリしたわ。軽く一発殴っただけで倒れてくるんだもん。まったく、物理法則どうなってんのよ……」

「お前の軽いは全然軽く無えんだよ！あと本棚がそっちに倒れてきたのはごむで支えてるからだって何回言ったら解る！？もう殴るな頼むから！？」

「あ？誰のせいだと思ってるのよ。あんたが遅いから私がイライラしたんでしょうが！大体その『ごむ』って何なのよ！」

「人に盗撮頼んでおいて1時間で帰ってこいってのが無理あんだよ！ごむっつーのは…ああもう面倒だな！説明が面倒だ！俺には説明無理！」

「そんなのあんたなら出来るでしょうが！盗撮然り説明然り！甘えんな！」

「クソこの我が儘娘めッ！！」

この無茶苦茶な理論で怒りムシャクシャして本棚殴りつけ、部屋をぐしゃぐしゃにした奴は、別に忍び込んだ誰かって訳じゃ無い。むしろ最初からここに居たというか、ここに住んでいるというか。こいつの為にこの部屋作ったっていうか。まあなんというか、色々言いたい事があるが、とりあえず喉のあたりで留めておく。

…まあ、なんだかんだ言って、責任の一端は俺にあるようなもんだし、言う事を聞いてやろうとは思ってきた。うん。今も言いたい事堪えた。うん。何回もぱしりみたいな事もした、うん。本棚作った。うん。本を持ってきた、うん！

……ねえ俺偉いよね？浴びせられる罵詈雑言に文句も言わず、黙々と我が儘な命令に従ってきた俺って、偉いよね？ねえ、偉いよね？！ついさっきとうとう文句ぶち撒けちゃったけど！

だから俺は、一発ぐらいなら、こいつ殴ってもいいと思うんだ。うん。

…よし決めた。殴る。さあ殴るぞ殴ろう殴りましょうぞ殴らせろよこの野郎！

殴ると決めた俺は、拳をぐっと握り、目の前のアンダーウェア巫女服女を見る。
俺のやろうとした事に気付いたのか、相手も獰猛と表するのがぴったりな笑顔を浮かべ、拳を腰溜めに構える。
なんだやる気なんですかこの野郎。いくらそっちにぶらんくがあるとはいえ、構えちゃったら手加減しないぞこのヤロー。

まあ、手加減しないのと本気なのはまた別のお話なんですけどね。

「おーけーあれだ。こっちに非はあるとはいえ、流石にもうあれだ。とりあえず一発殴らせろ！」

「あれとかおーけーとか、さっきから変な事言い過ぎなのよこの西洋被れめが！殴れるものなら殴ってみなさい！博麗の巫女は伊達じゃないって事を、その身に刻んであげるわ…！」

「はっ！全盛期ならともかく、何年まともに動いてないか考えたか？人間二日さぼっただけで結構衰えるもんだぜ！」

「こちとらこんな狭い本だらけの所に閉じ込められたら、鬱屈としてきて嫌になるのよ！心配されずとも、気分転換にそこそこ鍛えてきてるわよ！衰えなんてないわ！」

「衰えてなければ勝てると？甘いわ小童！格の違い、見せてくれる！」

「どの口がほざくか！……行くわよ、泣いて謝っても、許さないから！」

「上等！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あんた、今迄の私との戦績、覚えてる？」

「１１２１戦２０勝１１００敗１引き分け」

「細かい所まで無駄に覚えてるわね……」

「いや、最初の方は結構さくっと勝てたんだけどなぁ……まさかあんなに成長するとは」

「博麗の巫女は伊達じゃないわ。で、これで１１２２戦１１０１敗ね。……語呂が悪いわね、あと十回やりましょう」

「勘弁して下さいマジで！」

数分後、割とあっさりと敗北し、地面に倒れ伏し、清々しい顔している勝者を上に乗っけている敗者の姿があった。

ぶっちゃけ勿論俺だった。勝てる訳ねえだろ常識的に考えて。

いや流石博麗の巫女といった所か。衰えてないどころか何か強くなってる気がする。

マジ化け物だろもう。人間軽く超越しちゃってね？

毎日鍛えてたんだろうなぁどうせ。気分転換とか言ってたけど、毎日が気分転換だったんだろうなぁどうせ。

……この無駄に有り余るやる気を、今の博麗の巫女に分けてやって欲しいね。

「……ああそうだ。ほいコレ」

「何これ……って、あー！やっぱ可愛い！可愛いわ霖之助さん！」

俺の渡した香霖の写った写真を見た途端、飛び上がり地面をごろごろ転がる謎の生き物。…もうこいつ、生物（ナマモノ）で良くね？

というか人気者だな香霖。……強く生きろ。

ああ、そうだ。なんだかんだで紹介していなかった気がする。まあ、みんな気付いているだろうが。

今地面でごろごろ悶えているのは、余りに職務に忠実すぎたばかりに、本当の名前を覚えられなくなってしまったという残念な逸話を持つ巫女である。今はなんかもう色々と残念なものに成り下がってしまっているが。

そう、現『博麗の巫女』の博麗霊夢の母であり、先代の『博麗の巫女』を勤めていた、みんなの名無し、先代博麗の巫女さんじゅうななさいである。

「そんなに歳くってないわよ」

…訂正。先代巫女さんじゅうさんさいである。

良い夫婦の日番外編　前編（後書き）

……あれ？良い夫婦の日関係無いな…。

良い夫婦の日番外編　後編（前書き）

前編のあらすじ。
写真を見たら盛ったネコのようにごろごろしだした。以上。

……意味が解らんな、うん。

良い夫婦の日番外編　後編

さて、この目の前でゴロゴロ転がって興奮している奴について、何から説明しようか。
素性は先程語った通り、先代の博麗の巫女さんじゅうさんさい。何故ここに居るのかというと……そうだな、何故こいつがここに居るのかという事から語ろうか。

発端はまあ、前々からあったんだろうが、景気となったのは、ほんの４年前の事である。
ごくごく簡単に言ってしまうと、世代交代しても構わない時期になったので、こいつは行方をくらませようとしたのだ。
世代交代しても構わない時期と言っても、現『博麗の巫女』である博麗霊夢の力量は、その当時はギリギリ次第点というところであったし、こいつもまだまだ現役だった。
力量に関しては、博麗霊夢の年齢を考えると充分驚嘆に値するが、まだまだ先代の方が一枚も二枚も上手だ。そんなに急いで博麗の巫女を継がせなくても良かったのでは？とは誰もが思ったが。
それはまあともかくとして。こいつは博麗霊夢に博麗の巫女を継がせようと、失踪しようとしたのだ。
更に正確に言えば、死のうとした。自殺するところだったのだ。

理由はまあ、解らんでもない。きっと疲れたのだろうと思う。忘れた男を忘れられず、想いを抱えて生きていく事に。
忘れた事を忘れられない。端から聞くと訳の解らない事だが、そこは今から解説しよう。
先代の博麗の巫女、目の前の名無しには、多分夫が居たのだ。
いや、『先代巫女の隣には、誰かが居た』という事は覚えているが、それが誰なのか、どんな人物なのか、果ては男なのか女なのかも良

く覚えていない。
だから、多分夫が居た。もしかしたら女だったのかもしれない。
俺はこれだけしか解っていないが、先代巫女を除いた他の全ての幻想郷中に住む人々は、おそらく、その人物が居た、ということすら覚えていないのかもしれない。
博麗霊夢ですら、その人物が居たという事を忘れてしまっているのだから。

なぜ、その人物を誰もが忘れてしまったのか。俺も詳しくは忘れてしまったので推測でしかないが、当たりはつく。多分その人物が、忘れさせてしまったのだろう。
能力なのか術なのかは不明だが、その人物は何らかの手段でもって、人々の記憶から姿を消した。先代巫女の『名前』と共に。
自殺なのか何かしら死に瀕したのか、そんな事も解らないが、死ぬ直前に、自信の記憶と先代の名前を奪って逝ったのだろう。
理由もこれまた推測でしかないが、独占欲の強い人物だったのではないかと考えている。自分の死後も先代巫女から自分が消えない様に、先代巫女が他の男を愛さない様に、愛されない様に、自分の事と先代の名前を持っていった。
勿論、自分の全てを忘れられては困るだろうから、ある程度は、先代にだけは残したのだろうが。

失念していたのは、俺の事ぐらいだろうか。俺はまあ、理由は話すと長いので省くが、誰かが居た事は忘れないのだ。誰かが居なくなってしまった事に気付く事が出来る、と言った方が正しいか。
だから、誰かが俺の記憶からいなくなったとしても、その人物が本当に居たのかすら忘れてしまったのだとしても、居なくなった事だけは解るのだ。
それに、形跡はあったのだ。誰かが居なくなった事に気付いたしばらく後に博麗神社に行くと、何故だか知らないが先代に茶を出され

た。
普段は茶が出される所か、門前払いも珍しくはなかったのに。
聞けば「誰のか解らない湯飲みが1つあったから、あんた辺りのだと思ってた」そうな。
勿論そんな事はなく、その湯飲みは俺のでは無かった。残念ながら、俺に茶を飲むなんて人間臭い趣味はない。
そんな訳で、『居なくなった誰か』が、博麗に深く関係していた事には気付いたのだ。少なくとも、神社に専用の茶飲みが置ける程に関係のある人物だったのだという事も。

その時はまあ、深くは気にしなかった。
折角茶を出されたのなら飲まねばと普通に飲み、普段通りに先代からかってボコボコにされて。
楽しかったのでお礼代わりに賽銭入れると凄い変な目で見られて。
そんなこんなでその日は終わったのだ。

それから何回か遊びに行ったりもしたが、特に変わった事は無かった。皆は誰かが居なくなった事を覚えていないし、相変わらず博麗神社を訪れる客足は少なかった。
そしてあの日、顕冴を拾ってから初めて博麗神社を訪れ、初めて博麗霊夢に遭遇して消し炭になったあの日。先代は子持ちで人妻、でも今は未亡人だと言ったのだ。
その時に俺は『居なくなった誰か』が先代の夫だという事と、先代がその人物の事を覚えているという事に初めて気が付いた。

辛くはないのか、そう聞いた事を覚えている。「皆忘れてしまった中、自分だけが覚えている事が辛くはないのか」と。
先代は驚いた様に目を見開き、その後に「まあ、あまりその人の事を覚えていないし、さほど辛くはないわ」と言った。
嘘だろうと思った。あまり覚えていないのなら尚更辛いだろうに。

どの程度覚えているのかと聞くと、最初はなかなか話そうとしなかったが、なんとか「私は誰かを愛していた事」「その誰かも私を愛していた事」だけは覚えているだろうという事が解った。はっきり言いはしなかったが、それぐらいは解った。
そして、まだ愛しているだろうという事も、その人物の事を語る時の表情で解った。

辛いだろうに。誰かを愛していた事は覚えていても、誰を愛していたのかを覚えておらず。
その人物のどんな所が愛しかったのかを覚えていなくとも、今もまだ愛している。
忘れようにも、もう既に忘れてしまっている事を忘れること等出来る筈も無く、ただこの先、一生その人物を愛していくのだろう。

ただ、辛いだろうにとは思っても、何故だか可愛そうだとか、残酷だ、等とは思わなかった。思えなかった。
記憶と名を持って行った人物に関しての記憶が無いから判断できない、とかそういう事ではない。何故だか解らないが、そういった感情は浮かばなかった。
先代がどう思っているのか、本当のところは解らないが、見る限りでは不幸だとは思っていなさそうだった。
それに、なんとなく。そう、ただ漠然と、理由は自分でもよく解らないが、こう思ったのだ。
「あいつは、良い奴だった」と。

ただまあ、如何に本人が悪くは思っていなくとも、まだまだ先代は若いし、色々勿体無い気がして。
そんな訳で、他の男と付き合う事も考えたらどうか?と進めたのだ。

「……は？」

「いや、だからな？誰かと付き合ってみればいいんじゃね？そうすれば忘れられずとも上書きはできるかもしれんだろ？」

「……だから、あんたと付き合えって？…馬鹿じゃないの？」

「…何を考えているのか大体解るが、俺以外だ。俺以外の誰かと付き合え」

「……はぁ、なんだ。……あんた以外の、ねぇ……。お役目一辺倒だったし、前の誰かと結ばれた事が奇跡みたいなものだし……」

「…寂しい女だな。もっと仕事以外に生き甲斐見つけろよ」

「うるさいわね、余計なお世話よ。……やっぱり、誰も居ないわ」

「気になっている奴とかも？」

「全く全然これっぽっちも」

「……本当に寂しい女だな……。勿体無い」

「勿体無いって……あんた今私が幾つなのか忘れたのかしら？２５よ２５。もうおばさんの域よ」

「いや実年齢はそうでも見た目が釣り合ってないだろうが。お前まだ十代中盤に見えるぞ」

「世辞はいらないわよ」

「世辞とかまったくないんだが。……お前、八雲さんに殺されんじゃね？」

「いやあんたもでしょ」

そんなこんなでなんやかんやがあり、だったら香霖はどうかと進めたのだ。

幸いと言えば良いのか、香霖のことは辛うじて知っていた先代はとりあえず了承。

後日実際に会ってみればあら不思議、先代に何か火がついてしまったとさ。

それからも二人はちょくちょく会っていたようで、まあ、なんだ。

結構良い感じだったと思う。

先代の情熱は会えなくなった今でも続いているようで、さっき俺が香霖堂に赴いたのも、こいつに「霖之助さんの写真を寄越せ、無いなら撮ってこい」と言われたからで。

まあ、これはこれで良いかな？と思っていたので、とりあえず写真を渡したんだ。

写真くらいでどうこうなる訳ないだろ。写ってるのが、別に香霖だけじゃなくても良いよね。と思ってたんだ。

「ああ～……。やっぱ可愛いわ霖之助さん。人形抱えてるなんてもう最高！」

「先代、それ人形ちゃう。霧雨さんところの魔理沙さんや」

そう思った結果がコレだよ!!今では見ての通りこのザマである。
……自分からやったことだからアレなんだが、旦那さん（推定）カワイソス。
香霖と一緒に普通の魔法使いが写っている事に対して憤慨する様子はなく、むしろ喜んでしまった。
写っている普通の魔法使いが人形だと思っているらしいが、それでも、だ。
…等身大の人形抱えた人物を可愛いって、正直どうよ?俺はどうかと思う。

「え?これ魔理沙ちゃん?あらら～、すっかり立派になっちゃって～」

「お前は親戚のおばさんか」

「立ち位置的には、近所のおばさんよね」

「むしろ近所のお姉さんな件。…お前今何歳だよ……若々しいにも程があるぞ…」

女に歳の話をするな、と昔誰かに言われた気がするが、こいつに限

っては良いと思う。自分からおばさんとか言ってるし、見た目が凄く若い。
確か３０は超えてたと思うんだが、外見は全然若々しい。十代に見えるぐらいだ。
娘より若く見えるって事は流石にないが、娘のちょっと上くらいに見える。それでも十分若けーよ。
具体的に言うと、俺の娘くらい若い。…そういやあいつ、もう２…３？ぐらいか？
拾った時１５だとしたら、八年経過しているから２３歳だと思うんだが……全然見えんな。
この先代といい我が娘といい、幻想郷での人間の実力者な奴は、何歳になっても十代に見える呪いでも患っているのだろうか。

「世辞はいらないわよ。…あんたも結構若いじゃない。……初めて会った時から見た目変わってないわよね？」

「全然これっぽっちも世辞なんてないんだが。いや、俺は例外ってーかお前も十年以上見た目変わってないってーか……あれ？俺お前に話してなかったっけ？」

「何の事だか解らないけど、あんたが私に何か自分の事を話した事ってあったかしら？」

「ん？言ってなかったっけ？…まあいいや、今話す。俺人間じゃないぜ？」

「…嘘。え？でもまるっきり、気配は人間のそれじゃない！」

「いや気配で判断すんなや。年取らない所とか、他にも色々あったろ、『あ、こいつ人間じゃない』って思う事」

「……いや、でも……えぇー……。引退して良かったわ。こんな奴の正体気が付かなかったなんて……」

「随分な言いぐさだなオイ」

なんかえらく落ち込む先代。さっきまでの興奮が嘘の様だ。
そんなに俺の事を人間だと思っていた事がしょっくなのか。むしろ俺はあんだけのことをやったのに人間だと思ってた事にしょっくを受けたぞ。気付いていたけど放置、ではなくて、本当に気付いていなかったのか。

「何かやらかしても『変態だから』で片付けてたし……」

「ああ、何だ。お前もそんなクチか。ええまあ、どうせそんなこったろうとは思ってましたよ！」

みんな俺を『変態だから』で片付けるんだが、それってどうなの？
…全くもって正しいから、またなんとも言えない気持ちになる。

「てか香霖の膝の上に霧雨の娘が乗っかってても、なんとも思わないのか？」

「え？……これはこれで有りね。微笑ましいわ」

「え？何で？お前香霖のこと好きじゃねーの？」

「好きだけど…何が？どういう事？」

「いやだから、嫉妬とか、そういうの無いのかって事だよ」

「…何を勘違いしているのか解らないけれど、私は確かに霖之助さんの事は好きよ？でもそれはお兄さんに対しての好きと言うか、今は弟に対しての好きというか…」

「……親子揃ってそれか。まったく、人間の『好き』ってのは良く解らんね」

なんだそれ。なんか激しく疲れたんだが。なんだよ、結局それかよ。激しく損したっつーかなんつーか……もうなんだ？結局旦那さんの事は忘れられない訳？

「あんたが何考えてるのか解らないけど、御生憎様。私の中の一位と二位は永久欠番よ」

「……一位旦那さん、二位娘ってか。いやはや、なんとも微笑まし

い家族だことでなによりだ。羨ましいね」

前言撤回、旦那さんウラヤマシス。全然可愛そうじゃねえ。超愛されてんじゃん。

はあ、じゃあもうあれだな。…もう良いよな？もう寝っ転がってもいいよね？

なんだこの虚脱感。ああ、なんかもういいや。

身体の力が抜けていくが、それに逆らわずそのまま地面に倒れる俺。

「「はぁ……」」

お、何故だか溜息が同時に出た。顔下げてるから先代の表情は見えないが、何か疲れたのだろうか。出来る事なら、香霖の写真を見て溜息吐く、恋煩いみたいなものだと嬉しいが……ある訳ねーよなー……。

でも納得だ。香霖と良い感じだと思ってたのに、死のうとしたのってそれが理由なのか。上書きされる程じゃなかった訳か。成る程ね。まあ、解ったところで、俺にはもうどうする事もできんのだが。

「……あんた、恋愛初心者？」

「……わりとな。ぶっちゃけ経験無し」

「……童貞？」

「どっ、どど、どどどど童貞ちゃうわっ！？親子そろってそれか！」

「…あんた、霊夢に何したの？」

「待て待て落ち着け。確かにうら若き少女が童貞なんて発する光景は中々無いが、特にそういう事をした訳では無い！会話の流れも含めてお前ら親子似た様なもんだ！つーか殆ど同じだ！」

「……それはそれで気になるけど、まあ、良いわ」

「おおぅ……助かった……」

危うく死ぬ所だった……。ふう、危ない危ない。こいつ、娘の事になると割と見境無いからな。少しでもそういう話を娘にふっかけるとこいつの拳と娘のすぺるかーどが飛んでくる。

……あ、やば。

…今思い出したんだが、俺、こいつの娘、襲わなかったっけ？性的な意味で。

……ま、まああれだよな！当分こいつは娘と会う事はないだろうし、俺が話題に出さなければばれないよな！

あ、そういえば肝心の、こいつがここに居る理由がまだだったな。まあさっきも言った通り、世代交代のついでに自殺しようとした…

むしろ逆か。自殺ついでに博霊の巫女継がせようとしたこいつを止めたら、何故だかこうなったって話なだけなんだが。

何故こうなったのかはまあ、なんだ。…なんでだろう？
詳しい経緯は覚えていないが、止める時に俺が死ななくても行方不明でも世代交代しねぇ？と言うと、どこに行けと？と先代が。俺ん家来る？って俺が、みたいな感じになって。
で、言ってからやべぇ今俺の家って顕冴居るじゃん、どうしようか。
他の家は今はもうないし……って事で急遽地下を作りそこにこいつを押し込めた。

以上、終わり。……え？もっと詳しく話せ？いやだから覚えてないんだって。
もしかしたら、覚えたくない程こっぱずかしい事を俺が言って、記憶から消したのかもしれないが、まあそれは多分ないだろう。俺にそんなことは当時出来なかったし。

さて、一応こいつがここに居る経緯は思い出したし、もうなんか色々疲れたし、話す事も無くなってきたし。上に戻るか。
こいつを押し込めとくのは可愛そうだとは思うが、仕方無……
…あ。
そうだ。ここは一つ、押し込められ仲間として、紫にでも相談してみようか。

…そうだな、なんとかなるかもしれんな。少なくとも話し相手ぐらいにはなってくれるかもしれん。
あいつ、閉じ込められてたから、こいつの事情を知らないだろうし、知ってたら知ってたでも別にいいと思うし。
うむ、我ながら良い考えだ。よし、そうと決まればとりあえず……

「なあ先代。お前、外に出たいか？」

「私が外に出る訳にはいかない事、解っているでしょう？…まあ、ここって狭いし暇だし、外に出られるに越した事はないけど」

「……もうそろそろ良いと思うんだがなぁ……。まあ、それはともかくとして。お前、話し相手とか欲しいか？」

「…あんたが居るでしょうに。何？どういう事？」

「まあまあ話は最後まで聞いてくんなまし。で、欲しいか？ちなみにいいえと言っても結局は連れてくる訳だが」

「誰をよ？……良いわよ。別に私が困る事はないし、あんたが連れてくるって言ってるんなら、別に私の事を知ってもいい人物か、口を割らない人物かって事でしょう？……別に、今のままでもいいんだけど……」

「ん？最後の方何て言ったんだ？」

「独り言よ、気にしないで」

「そうか。…よし、今度来る時はそいつと一緒に来るぞ」

さて……紫に何と言ったものか……。馬鹿正直に「話し相手になってくれ」か？

いや、意味解らんな。
「会って欲しい奴が居るんだ」か？
…これも何か違うな。
「少し相手をしてやって欲しい人間が居るんだ」だろうか？
…さっきよりも何か悪意を感じる言い方だな…。
「ちょっと閉じ込められてくれ」か？
…どんな誘い方だよ。監禁してもいいですかって聞いてる様なモンじゃねーか。
「ええいじれったい！良いから来い！」とかだろうか。
どう考えても誘拐犯です。本当にありがとうございました。
「やらないか」
もはや意味がわからん。

「で、誰なのよ。その『そいつ』って」

「ん？紫だが」

「なんで紫？わたしに会っちゃいけない人物じゃない。…それよりあんた、紫の事名前で呼んでたっけ？」

「詳しい事はまた今度本人を交えてな。知られても良いかどうかってのは、色々あって、あいつはいいんだよ」

「……なるべく早く来なさいよ？結構暇なのよ」

でしょうね。何せ本棚ぶん殴っちゃうぐらいですからね。色々持て

余しちゃうんでしょうね。

「なんなら明日連れてくるぞ？あ、今日は勘弁な」

「そう……ところであんた最近、ご飯持ってくる事少なくなってない？」

「忘れていた訳じゃないぞ？まあ、その……なんだ。色々あってな」

「……今度私と勝負しなさい。それで勘弁してあげる」

「おおう、なんと寛容な……ん？あれ？でも結局俺殴られんじゃね？」

怒りをぶつける鉄拳制裁な事には変わりなかった。巫女が肉弾戦って、正直どうなの？

術より格闘戦が得意って、巫女としてどうなの？まあ、博麗の巫女としては合格どころか模範解答例その1だったんだが。……今考えてみると無茶苦茶だな博麗の巫女。確か霊験あらたかな人間かつ女だったら誰でも良いんだっけか？

それってあれですか？霊が見えるなら近代兵器をガンガン使っても問題ないって事ですか？…無茶苦茶だな博麗の巫女。

「殴られないように本気でやればいいじゃない」

「俺はいつも本気なんだが……まあいいか。今度勝負、それで勘弁して下さい」

「ん。……今晩は、肉が食べたいわ」

「おう、了解だ。……でも、持って来れなかったらすまん」

顕冴と鑑枷の目を盗んで食事を持ってくる事って、結構難儀なんだぜ？

なんかずっと俺の方を見てるし。見ていない時って言ったら風呂の時ぐらいか。無論あいつらが入る時だ。

眠る時は同じ部屋……つーか同じ布団の中だし。…あれ？俺、ずっと見られてね？むしろ見張られてね？

考えてみると常にれっどあらーむじょうたいである。その状態で二人に見付からずに地下まで潜れと？それなんてみっしょんいんぽっしぶる？だんぼーるが有っても無理な気がする。

「…貸し1、ね」

「……今俺、貸しって幾つくらい溜まってる……？」

「そうね……前のと最近ので……２００くらい？」

「一生掛けても返し切れなさそうな量だなオイ！むしろ増えていきそうな気がする！」

不穏な気配を感じたので確認してみたら、案の定だったよ！
２００っておま…！どうしてそこまで溜まった！？こいつ相手に貸しなんて作った覚え無いぞ！
……いや、もしかして…あれか？それともあれか？いやあっちの方かもしれん…。
前言撤回、身に覚えがありすぎて困る。…どうしてこうなった……。
オルツりたい…。

「そうね。減る事なんて多分ないでしょうよ。……だからあんたは、私が死ぬまで償いなさい」

「あれ！？貸しな筈なのに何か重い罪を負ったみたいになってる！？」

「罪よ。この私に貸しなんて」

「お前何様だよ！……まあいいさ。貸しでも罪でもなんでも。お前が死にたくなくなるまで、付き合ってやるよ」

「…あんた、何か思い違いしてない？今は死のう、なんて考えて無いわよ」

「え？そうなの？」

「死ぬつもりなら何時でも死んでるでしょうが。舌を噛み切るなり

なんなりして」

「それもそうか……」

別に猿轡したり縛ったりしている訳ではないので、死のうと思えば何時でも死ねる訳だ。
それに何所へなりとも行ける。別に居なくなるな、とは言ってないし。
…あれ？じゃあ何で、こいつ今ここに居るんだろう？

「…死んでどうこうなるとも思えないしね…」

「自殺未遂の奴が言う台詞じゃないよな、それ」

「あれは…あれよ。魔が差したのよ」

「魔が差したぐらいで死なれてたまるか。色々重くなったから、じゃないのか？」

「……別に、愛した男を忘れられないなんて、珍しい事じゃないわよ。世間一般にもね。第一、男だったのかどうかすら覚えていない奴の事よ？そこまで重く考えてないわ」

じゃあ何で、と聞きたい所だが、つつくと藪蛇な予感がしたので適

当に流す。俺の最近のカンは結構当たるから、無視は出来ないのだ。

「そうなのか……ふぅん、そういうもんなのか。でも忘れられないんだろ？」

「…聞いた事ない？女は初めての男は忘れないって」

「聞いた事ないなぁ……そんなもんかねぇ……」

「そんなものよ。……やっぱりあんた、恋愛には疎いのね」

「恋愛っつーか、『愛』全般な。俺には良く解らん」

「…それなのにあんた、愛してる、なんて散々言ってきた訳？」

「良いじゃん別に。誰かに迷惑掛ける訳でも無いし。それに最近お前には言ってないだろ？」

「そういう事じゃ無いわ。迷惑掛けてないって思ってる時点で問題なのよ」

「え？迷惑掛けてる？」

「結構いい迷惑よ…」

「ふぅん……まあだからと言って自重しないんだけどね！」

俺は誰にも止められん！ふはははははは！
迷惑が掛かる？んなもん知った事か！それ如きで止まるなら変態は名乗れん！
むしろ迷惑被った奴に殴られるのもまた良し！蔑む様な目で見られるのも乙な物だ！
ああ……想像したらなんか実際に体験したくなってきた…！早速紫にでも言ってくるかな！
そうだ！さっきはああ言ったけど、こいつの話し相手の件の事も言いに行こう！むしろそれを言い訳に愛してるって叫びに行こう！
さて……蔑む様に見てくるのか、烈火の如く怒って殴るなりなんなりしてくるのか……どちらにしてもご褒美だね！楽しみで仕方がない！

「みなぎってきた！！よし！早速行ってくるぜ！むしろ言ってくるぜ！」

「はぁ……。もう勝手にしなさい！」

「言われずともさ！」

それじゃ、幻想郷の中心で愛を叫ぶとしますか！

俺は怒り出した先代に気付かないふりして、八雲さんちの紫さんに会いに行った。

ちなみにその結果だが、場所を選ばず人目も憚らず叫んだ結果、紫は予想と違って固まってしまい。
代わりに近くに居た八雲さん家の式神の狐さんにぶん殴られました。
尻尾で。もふもふしてて気持ち良かったです、まる。

良い夫婦の日番外編　後編（後書き）

どうみても良い夫婦の日関係無いです、ほんとうにありがとうございました。

新月だったのでムラムラして書いた。後悔と反省しかしていない。
色々捏造でごめんなさい。

番外　節分編　前　～正直、すまんかった～（前書き）

さて、今回の話の内容は、本筋とはあまり関係のない無駄話だ。
…何？ここの所続けてそんなのばっかりだって？知らんがな。俺のせいじゃない。
俺は今回は割と酷い目に…人によっては、いや、普通は嬉しい事に、か。
まあ、色々な事になったんだ。少しばかりやさぐれたって良いと思う。

そんなこんなで番外編、始まるぞ。
……そうだ、先に言っておく。……正直、すまんかった。色々と。

番外　節分編　前　～正直、すまんかった～

「今日は節分です」

唐突に顕冴がそう言った。確かに今日は二月三日、世間一般では節分と言われる日だ。

「だな。で、それで？」

だが、それが何だと言うのだろう。我が家では節分の豆まきは行っていない。だってめんどくさいし。歳の数だけ豆を食わなきゃならんのなら、俺は一体幾つ食えばいいのやら。

つーかもう2～3時間で三日が終わる。今更なんだというのだ。

そもそもの話、あれは家の中にいる鬼？？つまりは『邪気』を払い福を呼び込む行事だからな。色々な事情で参加できん。

つーか節分なんて言葉、こいつと住み始めてから八年間一度も言われた事なかったんだが。

そんなこんなで、俺は今更今日が節分だ、と言われてもこう返すしか無い訳で。

「……萃香の事なんだけど……」

「ああ、あのロリ鬼な」

あいつは鬼だから、毎年この季節になると人々から豆を投げつけられる立場だ。…見た目幼女に豆を投げつける人間マジ鬼畜。まあ、あのロリ鬼も人間も、色々あるんだろうから仕方無いんだろうが。むしろ鬼にとっては色々都合が良い…とか昔聞いたな。だから基本、鬼側はこの行事に大賛成なんだとか。

「なんか色々言いたい事が今できたけど、まあそれはまたの機会にするとして。…可愛そうじゃない？」

「なんで？あいつら鬼って、それが生き甲斐みたいな面があるじゃないか。まあ、覚悟しているとは言え知らない人間からいきなり物を投げつけられるってのはちったぁ堪えるかもしれんが、毎年博麗神社で慰めるっつーかなんつーか…まあ所謂祝賀会みたいなやつ毎年開かれてんじゃん」

この前…1年前の節分だって、珍しく人里に向かうロリ鬼見かけたから何だろうと思って声かけてみたら「営業」って言ってたし。人里から出る時にはなんかシンドそうな顔してたけど。なんで人里から出てきた時の表情知ってるのかって？いや、見てたから。あいつが村人に豆投げつけられる光景を影ながら。ついでに言うと爆笑しながら。…あれ？なんだろう、この胸に込み上げてくる気持ち。

そんな俺の内心と過去の行いを知ってか知らずか、顕冴は心なしか沈痛な面持ちになり、悲しそうに口を開いた。

「…それがね、今年は宴会は無い…どころか霊夢も豆まくみたいなんだよね、割と本気で」

「…何故に？」

傷心の鬼の心を癒す憩いの場である博麗神社まで豆まきをする…だと…？いや、本来はそれで正しいのかもしれないが。今迄一度も行ってこなかったじゃないか。

神社なのに鬼達の憩いの場だというのは、今更過ぎてもう何も言う気はないが、正直どうなんだろうとは毎度の如く思う。

「なんでも、『鬼がうちに居たせいで酷い目にあったから』とかなんとか……」

「……」

おおぅ。なんだこの途轍もない罪悪感。押し潰されそうだよママン。

多分あの件が原因だよ。具体的に話数で言う所の七節目の神社るーとの辺り。

あれは十中八九俺のせいであり、あのロリ鬼は完全にとばっちりな訳だ。…なんだろう、死にたくなってきたぞ…？

「……その表情だと、何か知ってる…というより元凶なんだね、お父さん」

「正直、すまんかったと思っている」

いやホントマジで。いやー悪い事したなぁ。お詫びに明日にでも落ち込んでるロリ鬼をからか…おっと間違えた、慰めにでも行こうかなぁ。

「やっぱりね…。そういう訳だろうとは思ったので、そのお詫びというかなんというか、家で宴会を開くと言う事を鬼の方々に伝えてきました」

「……なんですと？」

なに「いやー、よかったよかった。お父さんが元凶で」って清々しい顔しながらとんでもねぇ事言ってやがりますかこの娘は。鬼の方々に言っといた…だと…？

その口振りじゃ、呼びかけたのロリ鬼だけじゃないな!?美少女だけじゃなくて野郎も呼んだな!?なんつー事を…！

「てめこのっ！誰だ、誰呼んだ!?ロリ鬼の他に誰に呼びかけた!？」

「他？いや、なんか節分に向けての決起集会みたいなのがあってたから、そこで今回の事提案したんだけど？」

「全員!?節分に参加する鬼の面々全員呼んだかこんちくしょうめっ！」

「え？何？駄目だった？」

「いいわけねぇだろ！？」

「…じゃ、じゃあ、おしおきっ！？おしおきとか何かしてくれるのっ！？」

「おいなんでそんなに楽しそうなんだよ！？なんで目がキラキラしてんだよ！？」

ちぃ！この変態めが！変態って本当に厄介だなオイ！
だぁもうこいつはとりあえずほっといてどうするか考え…つーか宴会っていうからには料理とか色々準備が必要な筈……。
あ、そういえば昼間っから鑑枷がなにやらあれこれせわしなく動いてたな…。まさかアレか？あれが料理とかその他の準備なのか？
あいつなんで準備してんだよ！？俺と鬼達の関係知って……そういや知らせてなかったぞこんちくしょー！
じゃああれか！？あいつは今も昔と変わらず俺と鬼の仲は良いって思ってるから宴会の準備してたのか！？なんで他の事とか色々把握してんのに俺の交友関係は把握できてないの！？なにその都合の良い記憶！？俺にとっては都合が悪過ぎないか！？
ああもう今はそんな事どうでもいい！急いで逃亡しよう！れっつえすけぇぇえっぷ！

「おい、その宴会、何時頃開くって伝えた！？」

「え？……そうだね、丁度今くらいの時間帯からって言っといたよ？」

ごっど。この仕打ちはあまりにあんまりじゃないでしょうか。もうそれじゃ間に合わねぇじゃねえか……逃亡失敗しますた。

俺が地に崩れ落ちると同時に、外から複数人がこちらに歩いてくることを示す足音が聞こえてきた。……オワタ。

「顕冴ー！宴会開くのってここで……あんた、なんでここにいんのさ」

俺、まだやりたいこととかあったんだがなぁ…。

のっくもせずに我が家の扉を開いたのは、今回の話の中心だと思われる、ロリ鬼こと伊吹萃香…いや、もうロリ鬼でいいや。紹介とかどうでもいいや。

その礼儀がなってないロリ鬼は、俺の姿を見た途端にそう呟き、動きを止めた。

「……」

「……」

「……おーい？二人ともー…？」

ざ・わーるど。時は止まっている。主に俺とロリ鬼の時間だけ。
しばし俺とロリ鬼は硬直し、顕冴は何故俺達が固まったのかを理解していないのか小首を傾げていると。

ロリ鬼の後ろの方から、なんか野次というか疑問の声が上がっているのが聞こえてきた。
おそらく、宴会に参加する他の鬼もこのロリ鬼と一緒にやってきていて、会場である家の入口で先頭を歩くロリ鬼が固まったもんだから「もしかして場所、間違えたんじゃね？」とか色々思ったりしているんだろう。
安心しろ、大変不本意だが、ここが今回の会場であってるよ。

その鬼達の喧騒を聞いたからかなのか、固まってたロリ鬼は「やばっ」とか呟き、顔色変えて俺に向かって駆け出してき…ぐおぇ！

「な、投げたー！？おと…え、えぇー！？」

「顕冴、あんたは男共あげといて！」

「え？ああ、うん」

おい、なんで家主をぶん投げた奴の言う事を聞いてるんだ。
そんな俺の文句は顕冴には様々な要因で届かず、俺の身体は暫く宙を舞い、寝室通り過ぎて鑑枷の部屋に突入した。

幸いというか、襖は開けられていたので器物の破損とかはなく。
俺を投げた傍若無人のロリ鬼は部屋に入って、他の鬼達から視線を避ける様に襖を凄まじい速度で閉めた。

「……で、なんであんたがここにいんのさ」

…さて、状況を整理しようか。

宴会が開かれると聞いてホイホイ来てしまったロリ鬼…と屈強なぼでーの持ち主の鬼の面々は、この広いとは言えない小屋みたいな我が家に押し入ってきて。

打ちひしがれてる俺を萃香は皆から隔離する様に違う部屋に運び込んで。

今、俺は尋問されている。投げられて首を下にした、無様な格好のまま。

…あれ？なんだこの既視感。最近尋問されすぎじゃね？俺。

ふむ…この「何故」というのは「顕冴っつー女の家に招かれたはずなのに、なんでテメェみたいな変なおっさんがいるんだぁぁん？」って事だろうか。そりゃ俺みたいな変態が知り合いの女の家にいれば気になりもするか。納得納得。…納得はできたが、さて何と言い訳をしようか……なちゅらるに「俺は変態だ。…つまりはそういう事だ」って感じの事を言って、不信感を持たせて勝手に勘違いをさせて、それからおしおきくらって家から追い出されるぱたーんで行くか。よし行こう。

「おｒ「なーんか顕冴とも親しげだったし、ここにいるのが当たり前って空気だったんだよね…」……」

早くも目論見潰されました。なんだその空気の読み方。あの時はど

っちかってーと緊迫つーか、諦め入ってたっつーか…どっちみちそんな緩い空気では無かったとおじさん思うんだが。

むう…だがしかしそんな変な疑問を持たれてしまうとは…どうしようか。いや本当にどうしよう。

いっそぶっちゃけるか…？いや、ダメ……な理由は特に無いな。うん、ぶっちゃけよう。

「ああ、そいつはあれだな。俺があいつの保護者だからな」

「……はい？」

「俺がここにいるのは、あいつの父親だからだ。まあ父親っつっても義理だし、面倒を見ているとは言い難いけどな」

おっと、自虐入っちまった。

さて、このかみんぐあうとに、どんなふうに反応するのか…？おじさん楽しみ。

ロリ鬼は俯いているので、表情は解らないが、さて。鬼が出るか蛇が出るか…鬼相手にこの常套句はどうかと思うんだが、まあそこは今はどうでもいい。

俯いていたロリ鬼は顔を上げ…ん？なんだその表情。嬉しそう…？

いや、安心したって感じか…？

いや、どっちみちおかしくないか？おかしいだろ。

だって俺だぜ？変態だということは羞恥の…じゃない周知のダメおじさん、真経津九十九だぜ？そんな俺に美人の娘、しかも義理がい

ると判明したら、その娘の身を案じるか、もしくは俺に対して攻撃するかのどっちかだと思うんだが。

だがそんな疑問も、次の萃香の一言で解消された。

「なんだ、義理の娘か。いや、安心したよ。私はあの娘に手を出してるんじゃないかと心配してたんだが、義理の娘ってんなら安心だ」

…なるほど、な。そういう事か。

説明ついでに、少し話をしよう。

元来、人々の間で鬼というものは、凶暴で手がつけられない絶対的な悪、といったような印象の、妖怪という枠の代表格だ。

確かにそのいめーじはあってはいる。が、それは一面であって全てではない。

当然、鬼にも温厚な奴はごくごく限りなくいないに等しい数だがいるし、それよりなにより、もう1つ、意外と忘れられがちな鬼の特徴がある。

それは約束は守る、という事だ。つまりは義理堅い。

鬼は力が強く、またぷらいども高い。自分が決めた制限、決まり事は必ず守る。それこそ死んでも、だ。

ぷらいどが高いのもあるが、力が強い者の余裕、というのだろうか。

鬼は勝負が好きで、特に賭けをする勝負や決まりを作ってやる、所謂ハンデ付きの勝負が好きなのだ。

大概は自分からそういう事を持ち込むくらいだし、相手から持ちかけられたら喜んで乗っかる奴等だ。

自分から決めた事だろうが相手から決められた事だろうが、一度決

めた事に納得したら、死んでも守るし、破ったら死んでも仕方ないと考えるし、破られたら死んでも許さないという、なんとも馬鹿正直な連中なのだ、鬼という種族は。

まあ中には約束は踏みにじるもの、なんて考え方する奴もいるが、大多数は命にかえても約束は守る、それぐらい義理堅いのだ。だから鬼に遭遇した場合の対処法として、自分が絶対に勝てる賭けをしろというものがあるくらいなのだ。…負けたら、確実に命はないが。まあ、真っ向から立ち向かうよりは確実に生存率は高いだろう。

話を戻す。先程言った通り、鬼は凄ぇ義理堅い。義理堅いのだ。義理、という言葉を聞くと『何かしらの恩を受けたからそれを返すこと』、みたいな事を思い浮かべると思うが、鬼も大体その考えで通っている。萃香もその例に漏れずに…な。

つまりは。
このロリ鬼は、『義理の娘』という言葉を聞き、顕冴の事を俺にとって『何かしらの恩を受けた人物の忘れ形見』的な感じに受け取ったのだろう。

鬼にとって『恩』とは、仇以外の何かで必ず返すものというもの…なのだろう。だから『義理の娘』とは、死んでも守るべき対象であり、手を出すなんて論外であり、守れなかったら死ぬべきである。そんな考えを持っていて、持っている事は当たり前というぐらいの種族であり。
そんな奴等にとっては『義理の娘』に手を出すのは考えもしない、とても思い付かない馬鹿馬鹿しい考えなのだ。

だから俺が顕冴の事を『義理の娘』と言うと安心したのだ。

…なんだろう、この感覚。まだ本当の父娘だと言った方がまだ不信感を持たれそうな…いや、どっちみち父娘という絆も『義理』みたいな考えだろうから、義理だろうが本当のだろうが父娘だと言った時点で、こいつが安心するのは決まっていたのだろう。
まだ、あいつのヒモだとか、あいつの男だと言った方が良かったか…？

目の前の安心しきったロリ鬼は、俺に「さて、戻ろうか」と声をかけてきた。
…だが、なんか癪だ。何もないというのが何故だか癪だ。気に入らない。
鬼が義理を破るのが大嫌いだという事が安心の原因なら、もう1つの鬼が大嫌いなもので不安に…いや、心んなかを引っ掻き回してやろうじゃないか…！……あれ？なんで俺こんな事考えてるんだ…？
ま、いっか！
さて、肝心の内容だが…顕冴関係は無しだな。一度言ったことに関してあれこれ言うのは好きじゃない。
なら…ふむ。やはりあれか。
先代やら紫やらに色々言われたが、これが一番手っ取り早いし効果的だし、なにより都合がいいからな。これ以外の事もこれ以上の事もない…か。

「ロリお…いや、萃香」

「な、何さ？いきなり……ちょ、肩を掴むなっ」

真剣な表情を作りながら、ロリ鬼の肩に手を掛け、こちらから顔を

逸らせないようにして。
そのまま暫くロリ鬼の顔をみつめ続ける…っ！よし、なんか知らんが赤面しだした！今が好機！

さあいざ……って時に、ロリ鬼の向こう側？？部屋を隔てる襖に隙間ができていて。
そこから顕冴と？？沢山の鬼の野郎どもがこっちの様子を覗き見している事に気が付いた。…まいがっ！

「……あ、やば、気付かれた」

「オイオイ嬢ちゃん、何やってんだよ」

「いや、おめぇのその馬鹿でかい図体で気付かれたんじゃねぇのか？」

「てめぇだって同じぐらいのタツバじゃねえか」

「どうでもいいがなんで覗いてやがるんだテメェら！」

「「「「いや、なんか良い雰囲気だったから」」」」

「中学生かっ！」

ちぃ！萃香個人だけに言うならば、後でどうなっても俺にとってはご褒美でしかないが、野郎共まで見聞きしてるってんなら言えない！だって後が怖いもん！

「ああもう！ほら散った散った！宴会するんだろ？ほらやるぞ宴会、飲むぞ野郎ども！」

「それもそうだな。……じゃあ酒のつまみとして…だ。いっちょ続きを一つ！」

「よし来た！今日は良い酒が飲めそうだ！」

「おら、早く続きやれよー！」

「もうガッといけガッと！」

「う…うらやまけしからん！いいぞ、もっとやれ！」

「オッサンか！？お前ら中学生かつオッサンなのか！？」

そして最後の奴誰だ！？どういった意図だ！俺の立場に立った場合なのか！？色々問題だろそれ？！

…え？俺？俺はいいんだよ変態だから。

何だか知らんが、元々そんな事してなかったにも関わらず、「さっさと続きをやれ」という催促コールが一斉に響く。…おい顕冴、なんでお前も混じってるんだ。

なんだこれ。なんだこの「近所の集まりで酒入った勢いで告白しようとする男子学生と、それをヤジ飛ばしながらも見守る中年ども」みたいな雰囲気。まだ酒入ってないよなお前ら。

なんだこのてんしょん。ほら、あまりの出来事にロリ鬼だって……

…なんで目を瞑ってやりますかこの野郎。なんでちょっと頬が桜色になってるんですか。

あれですよね、もう酔ってるんですよね？普段から酔っていない時は無いと言われている伊吹さんの事だから、きっと酔っているんで

すよね？酔った勢いの洒落みたいなもんですよね！？そうだといってよばーにぃ！

なんだこれ。なんなんだこれ。
目の前には何か目を瞑って待ち構えている幼女と、その後ろから聞こえる「意気地なし」とか「それでも男かぁ？玉付いてんだろ！」等々様々なヤジ。

…え？何コレ。なんでこんな今から俺が告白…っつーかキスするみたいになってんの？
いや、普段なら全然構わんよ？相手萃香だし。普段なら喜んで頂くよ？
でも後ろに複数人の鬼が居る、しかもバッチリこっち見てるって状況じゃ無理！外堀埋められるどころか外堀の底から引き摺り込まれるわ！

……え？やらなきゃ駄目？
ははは、まさかね。俺にそんなはっぴーだかあんはっぴーだか良く解らないキスいべんとなんて回ってくる訳無いですよねー。

……。

……だ、誰かぁあ！？誰か救いの手を差し伸べてくれる女神はおらんのかぁあああ！？

やべえよこのままじゃ俺妖怪の山に永住する事になるかもしれんぞ！？嫌だよそんな事！？だってあそこ野郎ばっかりだもん！楽しみが少なくなっちまうじゃないか！？

……あれ？でもそうなったら……。別に良くね？周り野郎共ばっかりでも萃香いるんなら……。いやいやいや。せめて王様ぐらいの……駄目だ、『普通に有り』だという思考しか思い浮かばなくなってきた……。

あれれー？なぁーんでこんな事になっちまったのかなぁ？どこで萃香るーとに入って、えんどふらぐ建ったのかなー？

……思い返すに、どう考えても七節目か。あそこで神社るーと選んだからだな。

あれどうやって回避しろと？あれ回避できない進行だったよね？え？なに？最初から詰んでたの？

……まあ、仕方無い。こうなったら仕方無い…か。全部俺の責任だし。

そんなこんなで、なんかこういうｓｓの主人公が建てちゃいけないふらぐを建てた挙げ句、決めちゃいけない覚悟を決めかけた所で。

救いの女神は、出番待ちしてたかのようにたいみんぐ良く、都合良く現れた。

「皆様、料理ととっておきのお酒、準備できましたよ。……あら？皆様、何をしていらっしゃるんですか？」

「か、鑑！？」

「「「「あ、姐さんっ！！！？？」」」」

「きょ、鑑枷っ！？」

宴会の為のなんともまあ豪勢な料理と、多分俺のこれくしょんの秘蔵の酒をいくつか持ってきた鑑枷が、一瞬で先程の空気をぶち壊してくれました。

……ありがとう、神様！多分生み出されて初めて、貴方に本気で感謝します！！

…ところでなんで、鬼の面々はそんなに激しく驚いてるんでしょうかね。

番外　節分編　前　～正直、すまんかった～（後書き）

Q．ねえ、なんで今回も番外編なの？
A．節分…だからさ…。

皆様お久し振りです。今回も色々すみません。
すみませんじゃすまないくらいすみません。
今回も前後編になりました。節分に間に合いそうになかったんだもの。

しかも内容もありきたりというかもういいよ、ってな内容ですが。
考え無しに行動するとろくな事になりませんね。反省。…流石に一日じゃ無理がありました…。

色々と駄目な筆者と番外編ですが、もうしばらくだけ、お付き合いくださいませ。

番外　節分編　後　～正直、すまんかった～（前書き）

俺を救ってくれたのは、誰であろう、俺の妹という事になっている八神鑑枷さんだった。マジありがとうございます！今度から女神様って呼んでもいいですか！？

「できれば御遠慮願います」

おおう、地の文にツッコミを入れるとは…やるな、鑑枷…！

お褒めに預かり光栄です。

地の文で返してきた！？くそう、まさか俺の精神の内部まで浸食されようとは…っ！くやしいっ！でもｋ（ｒｙ

……ふぅ。

「……さて。皆さんすっかり固まってしまって、ツッコミが無いのが寂しいんだが……」

そう。俺が変な事…を口走ってはいないな。鑑枷がなにやら一人で訳の解らない事をぶつぶつと…あまり呟いてもいないな。言ったのは「できれば御遠慮願います」だけだな。

まあいいや。とにかく、独り言を大きな声で呟いたのに、それに対して誰もツッコまない。

皆さん、部屋に入ってきた鑑枷の声を聞き、姿を見た途端に動きを止めてしまった。
何？鑑枷さん、あんた石化の魔眼か何か手に入れたの？
元々それに近い物は所持していましたよ？
でしたよね。まあ、今回はそういう類の、何か特殊な術等によるものではなく、驚きによって動けないだけだろう。…それでもまあ、尋常ではないんだろうが。
話は変わるが、結構楽だな、地の文での会話。直接言葉を交わさないですむし。傍から見たらどうなっているのかは気になるが、まあその辺は問題無い。というよりは気にしない方向で。
ああ、ちなみにこの地の文での会話、この前書き限定ですからね？
えー！？ちょ、なんでさ！？勿体ない、つーかメンドクサ！一度楽を覚えたら人間は中々忘れられないんだよ！？もしかしたら俺はこの地の文での会話なしには生きていけなくなってしまったかもしれないじゃないか！？どうしてくれる！
人間じゃありませんので、何の問題も無いと思いますけれど。
ですよねー。俺人間じゃないから、特に支障は残りませんよねー。むしろ例え俺が人間だとしても、別に大事になっていたとは思わないんだけども。
……さて、現実逃避は終わりにしようか。
今の状況を整理しよう。

鑑枷の部屋に俺とロリ鬼がいる。ちなみに俺の手はロリ鬼の肩に乗っかったままだ。

で、鑑枷の部屋と、玄関入ってすぐの部屋とを分ける襖の隙間から、鬼の野郎どもと顕冴がこちらの様子を覗いていた。今は襖は全開にされていて、さっきまで覗いていた奴らは堂々と「続きをやれ」という旨のヤジを俺達に飛ばしていた。

で、そこに玄関の扉を開いて現れた、我等が？？というよりは俺の救世主たる鑑枷。正直惚れそうになった。

鑑枷の手には、宴会用に昼間から作っていたであろう料理が抱えられていて、よくよく目を懲らさなくても解るが、胸部に存在する二つの大きな脂肪の塊、つまるところはオッパイだ、オッパイ。その二つの割と大きめなオッパイの間に、こっちは目を懲らす事で解るが、俺の秘蔵の酒が挟まっている。

……あー……固まった理由、多分それじゃね？いくらなんでも胸の谷間に酒瓶挟んで運ぶのは、けしからんと思う。いいぞ、もっとやれ。

だが落としたらどうするつもりだ。結構高いんだぞ、その酒。…まさかとは思うが、おしおき待ち…とかではないよな。

落としてもいいように、むしろ落ちやすいようにその運搬方法を選んで、落として壊したら俺におしおきしてもらおうとか、そんな変態じみた魂胆ではないよね？

……ぽっ。

……この世界に、神なんていない…っ！

番外　節分編　後　～正直、すまんかった～

おっと、今迄のはただの前書きだ。俺の脳内を駆け巡った電波の産物なので気にするな。
あそこで起こった出来事は、全て嘘だ。……ったら良いのになぁー。

流石に一部というか、俺達の会話というかやり取りというのは妄想であり実際には起こっていないが、それ以外の事、例えば位置関係やらは実際に起こった事実だ。

…つまりは、残念な事だが、鑑枷が胸に酒瓶挟んでやってきたのは事実であり、変えられない事なのである。……なんだろう、激しく首を吊りたい衝動に駆られるんだが。近くに良い大木、ないかなー…。

というかいい加減に誰か動いてくれないだろうか。ほら、鑑枷困ってるだろ。…ごめん、ちょっと嘘付いた。なんか鑑枷がこっちを凄い目で睨んでくるから、誰かあいつに話し掛けて下さいお願いします！

そんな俺の願いは届かず、一秒…二秒、と時間は経過していくが、状況に進展は無し。
良くも悪くも何も変わっていない。誰か早くどうにかしてくださいよ。

仕方無い、ここはやはり現実逃避をする事にしよう。
鑑枷、昼間っから準備したにしては料理の量、少なくないか？…ああ、料理が出来た事を知らせるついでに、外にまだ置いているから、

運んで下さいって言いに来たんだろう。言う前に家の中が異様な事になっていたから言えなかったんだろうが。

…あれ？逃避終わっちゃったぞ？いかんいかん、何か他の方法を…

…ああ、あったあった。

ロリ鬼やい、俺に肩を掴まれて姿勢を固定されたままで、首だけ後ろを向くってのは辛くないかい？辛いだろう？ははは、仕方がないなぁ。おじさんが姿勢を変えさせてあげよう。よっと。

という訳で。

「わひゃんっ！」

ロリ鬼の姿勢を変えてあげる為に、肩に置いていた手を脇の下に挟み込み。

「よっ…と」

一度抱き上げてからぐるっとロリ鬼の身体を回しつつ引き寄せつつ、さらに片方の腕を腰に回して、もう片方の腕を両脇の下に潜らせて支えて。

「……なるほど」

俺と立って向かい合っていたロリ鬼の姿勢を、俺に後ろから抱き竦められている体勢にしてから、俺はロリ鬼もろとも座り込み。

「……では？？？」

そうこうしていると、鑑枷は何時の間にか料理を長机に置いて、固まっている奴らの隣…つまりは襖の前に立っていて。

「？？？どうぞ？？？」

俺とロリ鬼と、あとついでに固まっていたはずの連中は、鑑枷の動きを顔を動かす事で追っていて。

「？？？ごゆっくり」

俺達がじっと鑑枷の行動を見詰めている中、その鑑枷本人は俺…と、何故だかロリ鬼に笑顔を向けそう言って。

ぴしゃん！

と。

部屋を隔てる襖を、一気に閉めてくださりやがりました。

……。

……はい？

「……どういうことなの…？」

あまりの出来事に、混乱して何も出来ない俺達二人。

「はい！では皆様、さっそく宴会を始めましょう！あちらのお二人は、なにやらお楽しみの様子。ですので、無視しちゃいましょう！」

「……オイオイオイ、ちょっとm「皆様…声、聞きたくありませんよね…？」さーて野郎どもぉ！飲むぞ！超飲むぞぉおお！隣から何も聞こえなくなるぐらい飲むぞぉおおお！」

「「「「オオオオォォオオオォオオオオオオ！！！」」」」

襖の向こうでは、何やら手を叩いた様な音と共に、宴会を開く事を無駄に元気よく提案する鑑枷の聞こえてきた。

鬼の一人が文句を言いかけたが、鑑枷の言葉を聞いた途端に態度を翻し、他の面々に号令を掛けやがった。

それに威勢良く答える鬼の面々。…悲しいかな、顕冴の声も聞こえた。

で、その後に向こうの様子は一気に騒がしくなり、「では、まだ外に料理がありますので、誰か来て下さい」「あ！じゃあ俺がいきやすぜ姐さん！」とか、「あ～うめぇ！」とか色々、宴会を行ってい

るんだなぁと解る歓声が聞こえてくる。

……つーか、え？俺達、どうすんの？どうなんの？どうすればいいの？

なんか思いっきり蚊帳の外なんだけど。本当にあいつら俺達の事無視して宴会おっぱじめやがったんだけど。

……え？なにこれ。俺達は、この一室で、どうすればいいの？

「……」

「……」

「……なあ、萃香」

「……な、なにさ？」

「……酒、持ってるか？」

「……生憎と。今は持ってないよ」

「そうか……」

「……」

「……」

「……」

……気まずっ！なにこれ超気まずいよ！おじさんどうしよう！？
どうしてこうなった、どうしてこうなった。どうしてこうなった！
えーと？確か鑑栁が入ってきた途端、告白むーどは完全に消え去って？
皆固まってるし鑑栁は睨んでくるもんだから、俺は現実逃避してロリ鬼をしっかりと鑑栁の方に向かせようとしていたら？
意外と落とさない様に姿勢変えるの難しいな、とか思いつつ集中していて、気付けば襖の前に鑑栁が立っていて？
何やるんだと思ってたら、襖が閉まって、向こうは宴会を開始した…と。

……どう考えても俺のせいですっ！本当にありがとうございましたっ！

姿勢を変えさせる為にロリ鬼を抱きかかえた事、いや、ひいては俺が現実逃避したからこうなったのは確定的に明らか！
鑑栁がなぜあんな行動をとったのかは、俺がロリ鬼を抱きかかえているのを見たからであって！
何故俺がロリ鬼を抱きかかえたのかは現実逃避の末の行動で！
つまりは俺が悪い！全部俺が悪い！最初っから最後まで徹頭徹尾俺が悪い！正直すまんかった！

「……萃香」

「……なにさ」

「……正直、すまんかった」

「……別に…」

ああ、可哀想！宴会に参加しそこねて俺の腕の中で落ち込んでいる萃香可哀想！

…ああ可愛い！俺のせいで宴会に参加出来ず、その元凶の腕の中にいる萃香可愛い！
心なしか肩が沈んでいるところがまた可愛い！なんだこれ抱き締めてぇ！もう抱き締めてるんだけどね！
あー可愛い、マジ可愛い！ぎゅってしたくなる程可愛いっ！可愛いって言葉がゲシュタルト崩壊しそうなぐらい可愛い！

…え？てんしょんの変わり具合がきめぇって？ああそう。だって仕方無いじゃない、変態だもの。可哀想と可愛いって言葉、語感が似てるんだもの。つい可哀想って言葉から可愛いって言葉が思い浮かんじゃったんだもの。実際に萃香超可愛いんだもの！

はぁ～……。いかん、欲望が止まらん。スリスリしたい。モフモフしたい。他にも色々したい。全部あわせて

「スリスリはふはふモフモフぺたぺたナデナデしたい……」

「ちょ……！？」

「あ、ぐにぐにも良いな。ムニムニもしたい。ああ後ぺろぺろしたい」

「だ、誰かー！？誰か助けてぇえ！？襲われる、変態に襲われる！？」

俺はついつい、萃香の耳元に顔をよせて、そこで呟いちゃったんだ。
それに反応して、逃げようとジタバタ藻掻きながら助けを呼ぶ萃香。
だがそんな悲痛な幼女の叫びは全く届かなかった。だって何故なら
お隣は宴会してるから。
更に言うならこちらの声がまったく聞こえない様に凄ぇ騒いでいる
から。
そう、あっちの喧噪に、こっちから聞こえる幼女の大声なんて、届
きはしないのだ。

「まあ、冗談だが」

言って、顔を萃香の耳元から遠ざける。ただし抱っこは継続したま
まだがな！
流石の俺にも、スリスリはふはふだとか、そんな趣味は無い。……
嘘じゃないよ、ホントだよ？
まあ、相手にもよるが。具体的に誰とは言わないが、あえて言うな
ら胸。

「さっきのは冗談だから。なのでしばらくこのまま抱っこさせとい
てくれ」

「何がどういう訳？……おかしいなー。私、ここに癒されに来た
筈なんだけどなー……」

「抱っこされたら癒されないか？」

「抱っこしてるあんたが癒されているのであって、抱っこされてる私は癒されるどころか色々磨り減っていってるよ…！」

「…胸とか？」

「つるぺた言うな」

何だかんだ言いつつ逃げようとしない萃香可愛い。ならば遠慮なく抱き締めさせて貰おう…！

…っと、なんか角、邪魔だなぁ……。でかいなぁ。この角……。

「なあ、萃香。…角、折って良い？」

「良い訳ないだろ？！なんで折ろうとすんのさ！なに折ろうとしてんのさ！」

「いや、抱き締める時に、耳元に顔寄せ辛いなぁ～って思って」

「そんな軽々しい理由で私のアイデンティティの一つを奪われてたまるか！？」

「軽々しくないぞ？割と深刻な問題だ。俺の満足度に関わる」

「どうでも良いよ！私にとっては全くもってどうでも良いよ！」

駄目ですかそうですか。残念。

はぁ～……。どうしようか。俺はこのままでも良いんだが、萃香がそうはいかないらしいしなぁ……。

ふむ、部屋で男女が二人っきり。双方暇を持て余している。男の方は性欲も持て余している。やる事もない。やれる事は…あるっちゃあるが。部屋には何も無い。

……あ、いや。何故か布団が敷いてある。枕が二つ並べられた状態で。

そう、布団だ。ＴＨＥ・布団。座布団ではなく、布団。

それが二枚ではなく一枚だけ。しかも枕は二個並べてある。…枕二つは夫婦の証ってな。まあ、俺が今考えた口上なんだが、間違いではないと思う。

……あれぇー？おかしいなー。さっきまで布団なんかなかったんだがなぁー。

誰もこの部屋に布団なんか持ってきてないし。そもそも襖開いてないし。でも入った時には布団なんかなかったし。どういう事だ…？

謎の出来事に悩んでいる俺の脳裏に、突如として、鑑枷がさむずあっぷしながらイイ笑顔を浮かべる映像が浮かんできた。あとついでに台詞も脳内で再生された。

（やっぱり私って、不可能を可能に……）

少佐ぁあああああ！

少佐は犠牲になったのだ…！って何のだよ！？

つーか何？犯人マジであいつなの？なんでこんな事したんだと小一時間問い詰めたい！

……おーけー解った。もう何も考えないでおこう。幸い萃香は気付いてないようだし、俺が心の奥底にしまっておけば大丈夫。…できれば、物理的に押し入れの中とかにしまっておきたかったが、残念ながらこの部屋に押し入れは無い。

…さてはて。本格的にどうしようか。一体何をどのようにして暇潰しをすれば…あ、そうだ。

「よし萃香、風呂に入ろう」

「…は？風呂？」

「そう、風呂」

「……風呂ってあの、裸になって身を清めるやつ？」

呆然としながらも、俺の思っている風呂と自分の思っている風呂に違いがないかを確かめようとする萃香。…どうでもいいが、なんか風呂の表現がアレじゃないか。

清める……ねぇ。むしろ色々あって身体を汚す場合もあるな。ごく一部の人々の話だが。

「人によっては、汚す事もあるな」

「……その言い方、何か悪意を感じる…」

「まあな」

「……一緒……に？」

「俺は別に構わんが。……何だ？入りたいのか？」

ニヤニヤと笑いながら聞く俺。え？趣味が悪い？だって面白いし。
さて、果たしてどのような反応を返してくれるのか…。俺的には烈火の如くってのを一番期待しているんだが……さて。

萃香は俺の言葉をすぐには理解出来なかったのか、一旦固まっていた。まあ、当たり前か。
そしてその後、顔を怒りで赤く染めてこちらに殴りかかって……は来なかった。
顔を赤くはしたものの、その後俯いてしまった。……あれれー？
なーんでそこで顔赤くして俯いちゃうかなぁー。おじさん勘違いしちゃうぞー？

「……ぃ…ょ……」

「……なんだって…？」

「だから、いいって言ってるの！一緒に風呂に入ってもいいよ！！」

萃香は顔を真っ赤にしながらも、しかしはっきりと俺の目を見て、そう言った。
……なん…だと…？許可がでた…だと……？

試しに頬を思いっきり抓ってみる。ぎゅーっと。

「い、いひゃいいひゃい！ふぁ、ふぁにひゅんのひゃ！！」

ただし萃香の頬を、だが。…ってそんな古典的なギャグをやっている場合ではなくて。

…え？なにこれ？夢？夢なのか？……ははぁ。そういうことね。

きっと俺は、萃香を抱っこしている時に、あまりの抱き心地の良さに眠ってしまったんだよ。気持ち良かったし、落ち着いたし。眠ってしまったとしても不思議ではないよな。

そうしてコレは、今この状況は、俺の妄想と願望と欲望が生み出した夢だ！夢なんだ！

ははは！なんだそうか夢か！そうだよなぁ！夢じゃなきゃこんな状況ありえないよなぁ！！

俺は萃香の頬から手を離す。いきなり頬を抓られた萃香が睨んできている様な気がするが、気のせいだろ！だって見えないし！

今俺は、この事実を発見した事による興奮を抑えきれないんだ。だから目元を手で覆ってる。なので萃香が睨んでる、とかそういう視覚情報は文字通り目に入ってこない訳だ。

さて、夢だと解ったんだ。さっさと目を醒まそうか。俺は現実で萃香を愛でなきゃいけないんだ。そう、現実では俺は、萃香をたっぷり愛でなきゃいけないんだ！！

「だからさっさと醒めろ俺！夢から目覚めろ俺ぇえええええ！」

床に頭を思いっきり叩き付ける！一回、二回、三回、四回ぃいいいい！

ねぇよ！あの萃香が俺と一緒に風呂に入ってもいいって言うとかねぇよ！俺個人としては有りだけど！正直ムラッときたけども！

可愛かったけれども！恥ずかしがりながらも一生懸命な所は可愛かったけれども！

無い！無い無い無い無い無い無い無い、無い！！断じて無い！

いいか、落ち着け俺！いや落ち着かなくていい！そのまま頭を打ち付け続けろ俺！

そしてさっさと醒めるんだ！この幸せな悪夢から目を醒ますんだよぉおおお！

…ああちくしょう！畳だからあんまり痛くねぇ！いや夢だから痛くないのは当たり前か！？ともかく一向に目覚められる気がしない！ええい！どうにかして夢から醒める方法……たしか夢の中で死んだら目が醒めるとかなんとかっていう話を聞いた事があるな！よし、それだ！！

「萃香ぁあ！！」

「…！な、何…？」

ビクッと震える萃香。まあ、いきなり目の前で男が床に頭をぶつけ始めたら普通恐怖するよな。しかもその男がいきなり自分に呼びかけてきたら誰でもビックリするよな。普通なら。

だがそれが、この現状が夢だという事の証明だ！だって萃香普通じゃないもの！普段なら冷めた目で見てるもの！冷静に冷徹な目で見つめてるもの！いや、見てすらないかもしれんな！

よってこれは夢！英語で言う所のどりぃいいいいむっ！だから一刻も早く醒めるべき！

「……脱げ」

「……な、なにを……？」

「服」

「……マジ……？」

「いいから」

本音としては、さっさと怒り狂って俺をぶん殴って欲しい。
今この場限りでは、決してM的な意味は全く無い。あるのはただ、この夢から醒まして欲しいという願いだけである。
いくらなんでもいきなり脱げ、と言われてホイホイ脱ぐ様な輩はいないだろう。性別が女なら尚更。普通は脱げとか言われたら殴る。普通じゃなかったら殺す。
夢から醒めるには死ぬのが一番てっとりばやい。そして今は一刻も早く夢から醒めたい。
……という訳で、わざと怒らせる様な言い方をした…んだけ…ど？
…何故に、服の裾に手を掛けてやがりますかこのロリ鬼は。

「…待て、何故に裾に手を掛ける？」

「…え？じゃあボタンから外した方がいい？」

「いや、その首に巻いてるものから……ってそうじゃねえ！」

なんなのこの子。なんで素直に脱ごうとしてんのさ。
ねぇ？なんなの？どういうことなの？

「じゃああれ？あーいうの？」

「どういうのだよ」

「所謂着たままってやつ」

「だからさっきから何を言ってるのかな萃香ちゃん！？」

「……風呂の事だけど」

「風呂に服着たままってのは無いだろ常識的に考えて！そして何なちゅらるに風呂に入る流れになってんの？！」

「入らないの？」

「だーかーらーねぇ！？」

なんでもう覚悟完了しちゃってるんですか萃香さんや。なんで躊躇いが無いんですか萃香さんやっ！
おじさん心配よ！？風呂に一緒に入ろうって野郎に言われてホイホイ入ろうとするとか、脱げって言われてホイホイ脱ごうとしたりす

るとか、将来の事が心配でなりませんっ！いや相手は見た目通りのロリっ娘って訳じゃないんだけれども！

「……はぁ。まあ落ち着けよ。服から手を離そうか」

「……入らないの？」

俺がひとまず話をする事を提案すると、何故か萃香は、風呂に一緒に入らないのかという事を混ぜっ返してきた。……心なしかその瞳には、具体的に『何』とは解らないが、何かしらの『決心』のようなものが見えた気がする。

……決心…ね。何の決心だか解らない、とか言うつもりはない。いくら見た目通りのロリっ娘じゃないとしても、いくら鬼という種族であって人間でなかったとしても、性別的には女性なのだ。野郎に一緒に風呂に入ろうと言われて、入る気になっていたという事は、まあ、決心した、という事なのだろう。

……なんで決心しちゃったのかなぁー…。

「そういうのはひとまず置いといて、だ。少し落ち着こう。落ち着いて話をしよう」

「…あんたとの会話は、何時もはぐらかされてる様な気がするから嫌いだ」

つん、とそっぽを向かれてしまった。そんなにはぐらかした憶えは

……あるなぁ。むしろはぐらかしたりしかしてない気がするなぁ。まあそれでも…だ。今はどうにかして説得を…違うな、目を醒まして貰わねば。

「…今迄の事をだされちゃ何も言えないが、少なくとも今回だけははぐらかさない。約束しよう」

「……解った。話そうじゃないか」

どかっと地面に腰掛ける萃香。よし、まずは話し合いの機会を作れた。次はいよいよ説得だ。

何を説得するのかは、言うまでもない。萃香のしちゃいけない決心についてである。……流されかけた俺が言うのもおかしな話だが、あの時は気が動転していたんだ。冷静に考えられる今なら問題無いだろうさ。

「…で、話って？何を話すのさ」

「色々とあるが、まあ最初に聞きたいのはさっきの行動についてだな」

勿論、服を脱ごうとした事、ひいては風呂に一緒に入る事を許可した事だ。

「さっきの？風呂に入るんなら、服を脱ぐのは当たり前だろ？」

「だから、何で風呂に一緒に入る事を承諾したのかって事だ。普通は拒否するだろう」

「……あんたなら、構わないと思ったから」

「俺なら尚更、だろう。俺だぞ？変態だぞ？風呂に入るだけじゃすまない可能性もあるぞ？その辺ちゃんと考えたか？」

「考えた。あんたの事を考慮した末に、大丈夫だって思ったんだ」

「大丈夫じゃないんだが。…はぁ。信頼してくれるのはまあ嬉しいんだが、もっと冷静になって考えてみろよな」

「…そうじゃない」

「……ん？」

「そういう、あんたの事を信頼してとかで大丈夫って言ったんじゃない。むしろあんたはそういった面では信用出来ない。何するかわかったもんじゃない。……けど、あんたになら」

「……」

「あんたにだったら、何されても大丈夫だって……そう思ったんだ」

「……」

これは…つまりはそういう事…なんだろう。

明確な好意を示されたってやつだ。いわば告白だ。
どう考えてもそれ以外の受け取り方を知らないし、多分向こうもそのつもりなんだろう。
しかも本気の。何一つ嘘偽りの無い正直な告白。――何せ鬼は、中でも萃香は特に、嘘が嫌いだからな。嘘、という事はないだろう。
…残念な事に。

はぁ……いったい何が切っ掛けで俺みたいな奴に引っ掛かったんだろうなぁ…。

「…あー…。どうして俺なら、とか思ったんだ?長い付き合いだ、俺がどんな奴か知らないなんて事はないだろ?」

「長い付き合いだからね。あんたがどんな奴なのか、なにをしてきたのか、どんな事が好きなのか。そんなのは殆ど解ってるよ」

「だったらなんでだ?知ってるんだろう?」

「――――私はね、嘘が嫌いだったんだ。嘘ってやつは、人を傷つけるだけで何の役にも立たないからね」

「…知ってるよ」

萃香は、今までの会話の流れを無視する形で嘘が嫌いな事とその理由を語り出す。
今更言われなくても知っているさ、そんな事ぐらい。…長い付き合いだからな。知らない事の方が少ないんじゃないかと思うぐらいに、互いに互いを知っている。

まあ、少し前まで付き合いがなかった時期があったんだが。それを入れて考えても、その時期の長さを考えても、昔と違う所があるとは思えんが。

…そうだ、思い出した。鬼って確か、どっかに引っ込んだんじゃなかったか？さっきまで鬼達は妖怪の山から降りてきたものとばかり思っていたんだが、確か妖怪の山には一人も鬼は居ない筈だ。あれか？やはり節分だからか？…やれやれ、熱心だねぇ。

…っと。今それは関係ないか。

今言いたいのは、萃香は俺の事を良く知ってるって事だ。俺が萃香の知らない事が殆どないのと同じく、萃香も俺の事を殆どしっている。…向こうが知ってるのはどういう趣味趣向なのか、どういう性格してるのか、どんな奴なのかに限るが。

まあ、それだけで好意的になるか否かは判断できる…んだろう。現に目の前に好意的に判断した例がいるんだ。

…なにをどうすれば好意的に取れるのかは解らんがね。

その辺りを聞いてみるか。なにをどうしてそうなったのか。

…まあ、それも萃香の話が終わってから、だな。

「だろうさ。…でも、さ…。さっきその認識を改めたよ」

「……これは、明日は雪…か？」

認識を改めた、言い換えれば嘘を認めたという事だ。…鬼の萃香が…だ。間違いなく明日は雪…いや、何かしら天変地異が起こる前触

れだ。…さて、荷物でも纏めるかな。

「勘違いしないように。私が改めたのはあんたに対しての認識であって、嘘を認めた訳じゃないよ。嘘は今でも嫌いだ」

「俺の認識…ねぇ。今更なにが変わったのやら」

「いや…。あんたは冗談をよく言うし、話もはぐらかすし、変態だし、最低だけどね」

「変わってねぇなー、認識。全然変わってねぇよ」

「その辺は今更変わらないよ。…でも、さ。あんた、真っ赤な嘘ってやつはつかないんだ。話をすり替えたりはしても、完全な嘘は言ったことがない…だろ？」

「…ただの詭弁だ。８割方本当で、残りのは嘘って事もあるし、それによく言うだろ？嘘はつき通せば本当になるんだぜ」

「それでもだよ。あんたが嘘つくときってのは、何か意味があるときなんだ。それも自分以外の誰かに意味のあるときだ」

「…はぁ。それも結局自分の為だよ。厄介事が嫌いだからそうならない様にしてるだけだ」

「それはあんたが嘘をつかなきゃ厄介事になるって事だろ？嘘ついて起こる厄介事よりも大きな厄介事が」

「……」

まったく。外面だけは本当に完璧に理解してやがるな。確かに言う通りだが。

「…そんな事に今更気付いたんだ。いや、思い出したっていった方がいいかな」

「…なるほど、さっぱりだ。何が言いたいのか全然解らん」

そんな俺の特徴みたいな事を並べ立てられたって…なあ…。

「……鑑栁の事だよ。あんたがついたあの嘘は、やっぱりまだ許せそうにない。けど、何か意味があったんだろ？」

…鑑栁の事でついた嘘？…解らん。見当もつかん。
いや本当に。全然さっぱり恐ろしい程心当たりがない。

というよりは、だ。正直な話、鑑栁に関しての思い出というのをあまり覚えていない。
確かに５００年という年月は長い。が、それよりも前の事は覚えているんだ。萃香の事とか…な。
だから、これは異常な事なんだろう。言われなければ気付かなかった事も含めて、普通ではありえない事だ。

けれどそれは今は問題ではない。今は鑑栁の事を何故か忘れていた

事ではなくて、鑑枷の何を忘れているのかが焦点だ。
しかもそれは、最低５００年経った今でも萃香が許せない程の嘘らしい。嘘…嘘……嘘ねぇ。
…なるほど、さっぱり解らん。
そんな時は素直に聞いてみよう。それが一番だろう。

「すまん、正直な話、なんの事だかさっぱりなんだが」

「……嘘…だよね？」

「真っ赤な嘘は嫌いだし、さっき言ったよな？冗談は言わないって」

「……まあ、忘れたくもなるか。私達との確執の主要因だしね…」

「……はい？」

え？萃香達との確執の主要因？それって俺の変態性じゃなかったのか？
萃香達って事は鬼達だけじゃなくて…天狗達ともって事なのか？

「いや、忘れたくもなるとかそういう訳じゃなくてだな……ああもう！ややこしいな！説明難しい！」

「…で？結局どういう事なのさ」

「あ、すまん。とにかく…もういいや。解らないって事で進めてくれ」

「…なんか事情があるのかないのか…。決心が揺らぎそうだよ…」

「…随分とまあ、深刻な嘘ついたみたいだな俺。どんな嘘なんだ?」

「簡単なことさ。…いや、簡単で済ませるのは憚られるけどね。でも説明しなくても解るし、確執が出来る理由も解るよ」

「勿体振らないで言ってくれませんか萃香さん」

「勿体振っちゃいないよ。…あまり言いたくないだけ」

「…頼む、教えてくれ」

「はぁ…。……500年ぐらい前に、鑑枷があんたと一緒に居なかった事があっただろ?常日頃からあんなにあんたにべったりで、本人だって離れるつもりはないって言ってたのに」

「……あー…そうだったなぁ…。べったりだったしそんな事も言ってたなぁ」

深刻な空気をぶち壊して悪いと思うが、あいつのべったり具合について説明させてくれ。
あいつのべったり具合は尋常じゃなかった。詳しく語るとただの犯罪どきゅめんとになるから詳しくは語らないが。
ただこれだけは言っておく。あの時のあいつの言動を外の世界でやると、間違いなく犯罪になると。

「だからあんたに『何故今日は鑑枷と一緒じゃないのか』って聞いたじゃないか。…聞いたのは私じゃないんだけどね」

「じゃあ誰が聞いたんだ?」

「…本当に忘れてるんだね…。文だよ。鴉天狗の射命丸文。あの子があんたに聞いたんだ。で、私はその事をあの子から聞いた」

「……どう考えても射命丸が俺を蛇蝎の如く嫌っている原因だな、それ」

俺が何と言ったのかは知らないが。まず間違いなくそれが原因で射命丸、ひいては天狗や鬼達との確執になったんだろう。…良く解らんが。

「そりゃあね。あの子は鑑枷と仲が良かったからね。しかもあんたの事を信じていたし」

「あー…そうだったなぁ。あの目は信頼の目だった」

「そういう事は覚えてるんだ?」

「一応…な。いや、そんな理由があったのか。俺があんなに嫌われてる理由。理由がよく解らなかったから、何時もみたいに俺が変態的な何かをやらかしたのかと」

「……もう何も言わないよ、私は。……あんたって本当に…」

「おっと。で?結局俺は射命丸に何て言ったんだ?」

「……『殺したから』、だよ」

「……すまん、もう一回頼む」

「『あいつはもう来ないよ。俺が殺したから』ってあんたが言ったらしい。それ聞いたら最初は意味が解らなかったって」

「……そりゃあ…な。俺だって正直意味解らん」

「でも、そこに居た紫が『本当よ?私はその場を見たもの』って言ったから、本当にあんたが殺したんだって思ったんだって」

「…なんで紫がそこに居たんだ?」

「何言ってるのさ。あんたら三人は、基本的に行動を共にしてたじゃないか。紫はお目付役、鑑枷は…まあ、言わずもがなで」

「……あ~……そういやそうか」

「……あんた、本当に大丈夫?色々忘れてるじゃない」

「そりゃ５００年も昔の話だから…って訳だけじゃないらしいんだな、これが。まあ、心配ないだろ」

にしても、俺が殺した、ね。確か鑑枷が言ってたな。「紫の他に親

友って呼べそうなのは、幽々子と文だけだ」って。
親友が自分の知り合いに殺された。そりゃあ確執も出来る訳だ。しかも俺の事信じてたらしいし、相当の衝撃だったんだろうなぁ。
天狗って人間じみてるし、鬼は義理堅いし。そんな奴らからしてみれば許せるはずがない、か。人間だって忌諱するか。
それと何気に紫の策士っぷり。「その場を見た」って、そこに最初から居たとも、全てが終わってからそこに来たとも受け取れるし。
何時もの様に胡散臭い笑み浮かべながら言ったのかなぁ…。いや、流石にそれはないか。

「私も、その事があったから、あんたの事、どこか信用出来なかったんだ」

「それで良いと思うぜ？間違いじゃない。俺は信用に値しないし信じちゃいけない類の存在だ」

「でも、さ。さっき鑑枷を見たから、やっとあれが嘘だって解ったんだ。それで、あんたがなんであんな嘘をつかなきゃいけなかったのかって考えた」

「……はぁ…」

嫌な予感がする。鬼の特性「義理堅い」を変な方向にこじらせて、更に俺を過大評価して考えてそうな気がするぞ？

「あんな嘘ついたって、良い事なんて一つもないのに…。けど言ったって事は、あんたの事、全部投げ出すよりももっと深刻な事にな

ってたかもしれないって事なんじゃないかって……」

「……」

知らんがな。正直どんな事情があったのか知らないんだが。……そういや最近、紫がやたらと鑑栂の事気にしてたな……今度聞いてみるか。

「そんな事も知らないで、あんたの気持ちも知らないで…さ。一方的に不信感を抱いてたって事が申し訳なく思えてきて……」

あかん！案の定ふぃるたーかかってる！謎の好意的に見えるふぃるたー越しになってる！
そうじゃないのよ違うのよ！？例えそうだったとしても俺には思い当たる事なくて謎の罪悪感覚えるんですけど！
上条さんとかこんな気持ちだったのかなぁ！？記憶無くした後ってこんな感じだったのかなぁ！？
ねえ、今どんな気持ち？ねえどんな気持ち？って聞かれたら俺は間違いなく罪悪感でいっぱいって答えるね！！

「だから、その罪滅ぼしというか、その……」

「ああもう、解ったから。とりあえずお前の気持ちは良く解った。だからもう良いよそういうの。いくらお前らが義理堅いって言っても、違うだろ？」

「わかってない！」

「……！？」

突然、萃香は大声を上げた。俺の言葉を遮る様に。俺の言葉に反発した様に。

いや、突然、というのは少し語弊があるか。今迄萃香の中に溜まっていたもの、それが一気に爆発した結果なのだろう。

「あんたはやっぱりわかってないんだ！いつもそうやって人の答えを決めつけて！いつも人の想いに気付かないふりして！！」

「……」

「わかってるんだろ！？あんたの事を好きな連中がいる事ぐらい！こっちだってわかってるんだよ！あんたがわざと幻滅されるような言動を選んでるって事ぐらい！」

「……」

「いい機会だから言うよ！？私はもう、あんたの庇護を受ける様な子供じゃないんだ！！」

「……そうか。もう子供じゃない…か」

確かに俺は、こいつの事を、心のどこかで守るべきもの、と思っていたんだろう。

少なくとも対等に見てはなかった。それは俺の行動からも解る。
萃香に対しては無意識に、まるで子供か動物に接する様な態度だった。…最近は、怪しかったような気がするが。

別に見た目が幼いから、という理由でそんな態度だったんじゃない。
それも少なからずあるんだろうが、もっと大きな理由が他にある。
付き合いが長いからだ。俺は萃香を、萃香が子供の頃から知っているからな。何時まで経っても子供のまま、と印象が強かったんだ。

…でも…そうか。もう子供じゃない…か。時の流れっていうのは早いなー…。

俺の事もよく解ってる、この前だって、なんか騒ぎ起こしたのに痛い目みてないらしいし。
まったく。博麗の巫女を出し抜いた大物を、よくもまあ子供だなんて思ってたなぁ、俺。

「…解ったよ、今度こそ本当に良く解った。降参だ。確かにもう、お前は子供じゃないな。…やっと気付いた」

「……気付くのが遅すぎるよ、ばか…」

「そうだな…」

「そうだよ…」

俺と萃香は、なんだかおかしくなって笑ってしまった。
そうだな、確かに気付くのが遅すぎた。

暫くの間、俺達は静かに笑っていた。
そして笑いが収まると、萃香は真剣な表情になる。

「……じゃあ、もう解るよね？解らない、なんて言わせないよ？」

「……ああ」

もう子供じゃない。それに風呂に一緒に入ろうとした。それは義理だけが理由じゃない。
これだけ言われてしまえば、萃香がどんなつもりか、どんな気持ちか、なんてのは、流石に解らないなんて言えないな。
…まったく。本当に可愛いな、萃香は。

俺は、決心した。
多分、今迄にしたこともするつもりもなかった決心を。

萃香に、黙って頷く。萃香も、黙って頷きを返した。
そうして俺は、目を瞑っている萃香に――

「……あたっ！」

「ははは。甘いわ、ロリ鬼めが」

――デコピンを、ぷれぜんとした。

「…っ!?な、なななっ……!」

「おっと。勘違いするなよ?別にお前の事が好きじゃない、とかそういう訳じゃないぞ?」

頭を抑えて、色々な理由で涙目になっているだろう萃香に、誤解されないように言葉を付け足す。

俺は萃香が嫌いだ?何を馬鹿な事を言ってるのやら。

「俺は萃香が好きだ!大好きだ!!愛してると言ってもいい!!」

「だ、だったらなんで…!」

「まあ、そこには俺の個人的な理由がな。心配しなくても、折角お前が俺にまがりなりにも告白なんぞかましてくれたんだ。ちゃんとはぐらかさずに話すよ」

俺が萃香を受け入れなかったのは、人に言えば「なんだそれ」と言われるかもしれない、超個人的な理由だ。

何時もなら適当に煙に巻くんだが、今回は正直に、包み隠さず俺も告白しよう。

「俺はさ、知っての通り人じゃないんだ。一応神様、なんてのをや

っている」

「知ってる。あんた程敬いたくない神様を私は知らないね」

「お前は基本神を敬わないじゃねーか。話を逸らさせるな。続けるぞ？だから、かどうかは知らないが、神様なんてもんをやってるからか、俺は人の心がよく解らん。とりわけ恋とか愛とかな」

「…冗談は嫌いだよ？」

「冗談じゃないんだ、残念ながら。勿論全く解らない訳じゃない。ただ、よく解らない。親類に向ける愛と配偶者に向ける愛の区別がつかないんだ」

「……」

「俺は真っ赤な嘘が嫌いだ。だからこんなあやふやな気持ちのまま、告白だとかを受け入れる訳にはいかないんだ」

もしかしたら、俺が好きだと思っているこの気持ちは、親しい相手に向けるべき『愛』なのかもしれないから。

そうだとしたら、それは嘘になるかもしれないだろ？だから俺は、告白だとかをなるべくされたくないんだ。

「…幻滅したか？それならいいんだがな」

「……はぁ…。するわけないでしょ？私を誰だと思ってんの？なにかと思ったら、そんなしょうもない理由だったの？」

「しょうもないはないだろ、しょうもないは！これでも真剣なんだぞ？」

「そんなに真剣に考えなくてもいいんだよ。私だって、そんな愛の違いなんて解んないんだし」

「……はい？」

「だから、そんな事真剣に考えるだけ無駄。私だけじゃない。誰も愛の違いなんて正しく理解してないのさ」

「…そうなのか？」

「そんなもんだよ、感情なんて。よく解らないもんだよ。だから大切なのは、どう思ったか、なんじゃないの？」

「どう…思ったか…」

「そ。深く考えるまでもない、ただなんとなくでいいんだ。感じたこと、思った事が大事なんだよ。きっと」

「……」

俺は人間ではない、だから人間の抱く感情なんて解りっこない、という意識が、根底にあったんだろう。
それがあったから、人間の感情とは何か？というのを馬鹿正直に、深刻に考えて。
人間ですら理解しきれていない感情を、俺が理解できる訳が無い。

それは正しいが、間違いだ。俺はそれを理由に、理解する事を諦めていたんだろう。
理解しようとする事と、理解しようとするふりをして諦めるのは、全然違う。諦めていたら、最初から解る訳はないのだ。

しかし、けれども。萃香が言うにはそんなもの理解する必要なんて無いらしい。無駄だ、とも。
成る程、俺よりもよっぽど心がある萃香が言うのだ。間違いじゃないのだろう。

「結局、その感情の理由は今迄の経験なんだ。どんな感情だろうと、経験に基づいて出来た感情に、間違いはないんだよ」

「その経験が、間違ったものだったとしたら？」

「例えその経験の段階で間違っていたとしても、抱いた感情に嘘はない」

そう言って萃香はおもいっきり俺に跳び込んできた。

「うおっ…！」

「私は嘘は嫌いだけど、間違いは嫌いじゃない。間違えなきゃ、誰も先には進めないんだ」

「……」

「それに、間違いかどうかは私が決める。他人が間違いだって言ったとしても、私が間違っていなかったと思えば、それは私にとっては正しかった事なんだよ」

受け止め損ねて萃香もろとも倒れこむ。幸い下は畳なのであまり痛くはない。

「私は、あんたの事を好きだと想った。この気持ちに嘘はないし、間違いだとも思っていない」

だから、と
仰向けの俺に馬乗りになった萃香はそう言って、

「んっ……」

「うむっ？！」

静かで、荒いキスをした。

時間そのものは長くなかったと思う。実際にキスしていたのは多分ほんの2、3秒だったんだろう。
それでも嘘みたいに、俺には長く感じられて。…別に、キスなんて初めてする訳でもないのにな。

そうして短くて長いキスは、萃香が口を離す事で終わり。

「…これが、私の気持ち。あんたは？」

なんか名残惜しいな、と思った矢先にこれだ。
少し濡れた唇が艶かしい。見た目にそぐわない色気を感じる。
…もう断るなんて、無理だろう？

「…いかんな、情けない。お前を子供だなんて思っていた自分も、今迄悩んでいた自分も。なにより告白させた事が情けない」

「ふふっ。なにそれ？」

「気にすんな。男のちっぽけなプライドだよ」

「……で？」

「せかすな、正直照れくさいんだ。……萃香」

「……うん？」

「今迄すまなかったな、色々と。…俺は、お前が好きだ。こんな俺で良ければ、付き合ってくれないか？」

「…なーにそれ？今更聞かなくたって解るよね？」

「気にすんな、男のちっぽけなプライドだよ。……で？」

「せかさないでよ、実は照れくさいんだ。……こちらこそ。私も、あんたの事が好きだよ」

俺と萃香は少しだけ笑い、その後どちらからというのもなく、今度は先程よりも長くて、少し優しいキスをした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……さて。晴れて二人は結ばれました、めでたしめでたし。な訳だが」

「…どうしたの？」

俺と萃香は、キスを終えて、座り直してぼーっとしていた。
ちなみに俺は胡座をかき、俺の膝の上に萃香が座る、まあさっきまでと変わらない体勢だな。

…キスの後、あんなことこんなことした、なんて事はないからな。
嘘じゃないぞ？

「もうお前は子供じゃないんだし、こういうのは止めようかと思って。正直嫌だろ？」

「…こういうのって？」

「この体勢だったり、撫でたりするのだよ。子供っぽいし、それに嫌がってたじゃねーか」

「……止めないでいい。それに嫌いじゃない。照れてただけ。これって気持ちいいし、落ち着くんだ」

「なら、別にいいか。俺も落ち着くし」

だが、そうなったら別の問題が浮上してくる。

「でもそうなったら、今迄とまったく変わらないよな……」

そうなのだ。

こんな抱っことか撫でたりするのとか、告白する前からやっていた。

折角告白してキスとかしたんだし、他にもなにか特別な事、したいじゃない？

「別に変わらなくていいんじゃない？キスはしたんだし」

「だがなぁ……。こう、なんか明確な何かがしたいんだよなぁ……。恋人になったっていう解りやすい何か」

「……恋人？」

「ん？なんだ？恋人は嫌か？」

「……正直なところ、嫌だ」

「ホントに正直に言ってくれるな……」

実は何気にしょっくなんだが。凄いな、たった一言で死にたくなったぞ。割と本気で。

「…私は、もう夫婦になったもんだと思ってるのに……」

「……今ので、か？」

「……そんなつもりじゃなかった、って…いうの…？」

「……かーわーいーいー！！」

心配して涙目になる萃香マジ可愛い！なんだこれ抱き締めてぇ！もう抱き締めてるんだけどね！…この文句さっきも言ったな…。

「安心しろ萃香！誰も結婚しないとは言っていない！むしろいつか必ず夫婦になるつもりだったぞ！嫌だと言ってももう逃がさんからな！！」

「…よかった……」

「かーわーいーいー！」

安心しきってはにかむ萃香マジかｗ（ｒｙ

「……でも、『いつか』って、いつなの？」

「そうだなぁ…多分そう遠くない未来に……って、なんか口調変わってないか？」

「…子供だって思われたくなかったから、少し口調を変えてたんだ。勇儀とか小町とかの口調を参考にしてた」

「かーわーいーいー！なにこれ超可愛い！」

照れ臭そうにする萃香マｚ（ｒｙ

……ふぅ。落ち着いたぜ…。

「……でもそうなんだ。まだ夫婦じゃないんだ…」

「少し価値観古くないか？まあ仕方ないんだろうけど、最近はキスだけじゃ駄目らしい」

「……じゃあ、なにすればいいのかな？」

「さあ？その辺はよく解らん。プロポーズすればいいんじゃね？」

「プロポーズ…」

「もしくは、夫婦じゃなくても出来るけど、恋人とかじゃないと出来ない特別な事とか」

「…特別な……っ！」

萃香は暫く考え込んでいたが、今更ながらに部屋に布団が敷いてあるのに気が付いたらしい。
布団を見て、顔を真っ赤にしてしまった。…可愛いな。

「…言っておくが、俺は夫婦になるまでお前に手を出すつもりはないぞ？」

「…あんたこそ価値観古くない？ていうか散々胸揉んでおいて何をいうか」

「揉む程の胸ではな「黙れ変態！つるぺたゆーなってば！」あいてっ！」

後頭部での頭突きをくらった。地味に痛い。萃香はちっこいので、胸までしか届かないが。

「……そっか…そういう事以外で特別な事ねぇ……」

「……あ、思い付いた」

「ほんと!?」

「でも、これをしたからってすぐさま結婚、て訳じゃないけどな」

「なんだ…」

期待していた程じゃなくて落ち込む萃香ｍ（ｒｙ

「まあまあ。『いつか』を早める為に必要なことだと思えば」

「……で、なにするつもり?」

「……お風呂に入ろう、一緒に」

「……はい?風呂」

「そう、風呂。一緒に風呂に入る事ぐらいは覚悟したんだろ?ちょうどいいじゃないか」

「う……で、でも……やっぱり恥ずかしい……。それに…」

「…それに?」

「……胸とか体とかちっさいし、がっかりしないかな…って」

「……俺を殺す気か。さっきから言動がいちいち可愛すぎるぞ。がっかりなんかするかよ。体つきなんてどうでもいいね。むしろその

体含めて、俺は萃香の全部が好きだね！」

「鏡……」

「…という訳で、風呂に入ろう。入りましょう。ていうか行くぞ」

「うわっ！きょ、拒否権は！？」

「あると思うてか」

「ですよね」

そんな訳で。

俺は萃香を抱き抱えて、風呂に向かった。

…とはいったものの。

風呂に行くには一旦外に出る必要がある。

そして外に出るには寝室を通る必要がある。…寝室は、ご存知宴会真っ只中だ。

そんな場所を通るのは御免被る。しかしかといって通らなければ…

…あ。

そうだ、あった。寝室通らずに直接風呂に行ける場所。

そんな訳で俺は、萃香を抱えて俺の部屋に行った。

「……どこ行くの？家の中に風呂なんてあったっけ？」

「まあ見てなさい」

萃香の質問も言葉少なめにして、俺は自室に入る。

物が少ない部屋。そこで萃香を立たせて、部屋の壁にを触って探る。

……と、あった。

見た目では解りにくい溝を見つける。そこに指を引っ掛けて壁を引っ張ると。

「…なんで隠し通路？忍者屋敷か何かか…」

萃香が思わずそう言うのも無理はない。

見た限り普通の壁にあったのは、１メートル四方もの穴。

ちなみにこの穴はどこにあるのかというと、家全体が大きな四角、詳しい間取りは番外の日記編とかを参考に。

四等分して左上が俺の部屋、そして俺の部屋の上の壁に穴はある。

風呂の場所は家のちょうど真裏、つまりは俺の部屋から壁を隔てた所。

つまりこの穴は、俺の部屋から直接風呂に行くための通路なのだ。

「……ちなみにこれを作ったのは俺じゃない」

「…じゃあ、誰？」

「知らん。顕冴か鑑枷だとは思う。なんで俺の部屋に……」

「……理由は…」

「……」

「……」

「……考えるのは止めよう」

「……そうだね…」

深く考えると駄目な気がしたので、思考を放棄して、とりあえず穴を潜ることにした。

穴を潜ると、すぐさま更衣室に出た。

…よかった。いきなり湯槽があるところとかにでたらどうしようかと……ええい！止めだ止め！深く考えるな！

さっそく風呂に入る為に服を脱ぐ。タオルは更衣室にある籠に入っているから心配ない。

ちなみに我が家の風呂は、一言でいえば温泉だ。広さも更衣室も温泉とあまり変わらない。だって作りやすいし。あ、ちなみに木製な。コンクリートとかではない。

「ちょ…！いきなり脱がないでよ！」

「ん？ああ、すまん。じゃあ後ろ向いてろ」

「ああもうっ！」

さっと後ろ向く萃香は無垢だと思う。

俺の着ているのは和装とはいえ、浴衣みたいな簡単なものなので脱ぐのに時間はかからない。

俺は先に準備があるので、必ず入ってこいよと声をかけて、湯槽がある所に向かう。

「…ってうわ、別けられてやがる…」

普段はでかい一つだけの寂しい湯槽だが、ちょうど真ん中ぐらいに木のついたてができてた。

…鑑枷の奴、風呂まで改装してやがった。だからあんなに時間かかったのか？

まあ、良いか。さて、問題の酒は……あったあった。

浴場のちょうどど真ん中の床板を外すと、中に大量の酒が入っていた。勿論全部俺の酒である。

酒なんて正直飲んでもどうにもならないが、まあその辺はただの趣味だ。

子供が白くて長い菓子を口にくわえて、煙草を吸う真似をする遊びなんかと同じだ。気分の問題である。

空気に酔うというか、酒を飲む自分に酔うというか…あ、後者はなし。なんかなるしすとっぽいから。

風呂に酒が置いてあるのはそういう理由だ。風呂に入りながら酒を飲めば、多少は空気に酔えるかな?という考えだ。
ちなみに置いてあるのであって、隠している訳では無い。鑑枷が持って来た酒だって、ここにあった酒だ。…無断で持っていった事は、今回は無かった事にしといてやろう。

酒と一緒に仕舞ってある盃も取り出す。二枚。言うまでもないが、特別な術を施しているので、汚くはない。清潔だ。ぴっかぴかだ。

萃香が来るまでやる事が無いから、先に風呂に入っておこう。手桶で2、3回お湯を身体にかけてから、湯船に入る。
……ふう、気持ち良い。気分的に。多少は肉体的にも心地よさはある…が……?あれ?なんで俺、肉体的に気持ち良いとか思ったんだろう?疲れが溜まる体質ではないのに。
まあ、これも気分の問題か、と思考を放棄。ああ気持ち良いなー。
でも萃香遅いなー。
更衣室から浴場に入って約3分、浴槽に入ってから約7分。未だに萃香は入ってこない。
と思っていたら後ろから戸を引く音が。期待しつつ振り返ってみると……ちぃっ!タオルを巻いてやがる!

「おい!せめてタオルは外せ!そして俺に裸体を見せろ!」

「うっさい変態!は、恥ずかしいんだよ…!」

「……どっちみち風呂につかる時には、それ取らないといけないの、おわかり?」

「……だめ？」

「駄目だ。それはまなー違反だ」

「……あっち向いてて」

「へいへい……」

どこまで恥ずかしがるのやら。お前本当に１０００歳越えの鬼か？
色々初々しすぎるぞ？いやまあ、恥じらってくれた方が俺的には楽しいんですけどね！
仕方無いので萃香とは反対の方を向く。後ろからは恐る恐るこっちに近付いてくる気配が。何を警戒しているのやら。
萃香は俺のすぐ横まで歩いて来て、そこでやっとタオルを解いた。

「…まだこっち向くなよ？」

「誰も見ねえよ」

「それは私の身体に魅力がないと？」

「水面に映ってるから振り向く必要がないだけだという罠」

「～っ！」

「はい、もう見ちゃったんだ。しゃがまないでさっさと入ってこい」

「……少しぐらい気遣ってくれたって…」

「早くしてくれよ。盃交わせないだろ？」

言って、俺は両手を高く上げる。右手に酒瓶、左手に二つの盃を持っているのを萃香に見せる。

「盃？なんでまた」

「お前とは交わした事無かっただろ？対等の立場になった証、だ」

「…そういう事。でもなんで風呂の中で？」

「気分の問題だ」

「…ま、いっか」

盃に釣られたのか、さっきまでの恥じらいはどこへやら。すっと立ち上がって迷い無く湯の中に入ってくる。…まなー云々は、もう面倒くさいから言わないぞ、うん。

「ほれ、盃」

「ありがと。…こういう事するのに、ただの酒瓶ってのは、ちょっと締まらないねぇ…」

「これしかないんだ。文句言うな」

「盃はあるのに？」

「ただの器だ。それと気分の問題だって言っただろ？これで飲むのが一番気分が良いんだよ」

「…そういやあんたって、酒飲んでも酔わないんだったっけ？」

「いえす。だから風呂に入りながらこんな強い酒を飲めるのです」

「…度数８５……」

「鬼のお前なら問題ないだろ？よし、じゃあ飲むぞ」

「なんか趣旨変わってない？」

「今日は元々宴会の予定だったんだ。飲みっぱぐれた事を考えれば何の問題もない」

「そんな軽い気持ちで交わしたくはないんだけどね…」

言うだけ言って諦めたのか、萃香は盃を突き出してくる。まあ、それが賢明だろうさ。

黙って酒を注ぐ。俺の盃にも酒を注ぐ。

本来こういう儀式めいた時には、１つの盃で回し飲みするんだろうが、その辺は深くは考えるな。どうせ気分の問題だ。

「……では」

「……うん」

黙ってぐいぐい飲み進める。言葉は不要。

「…ぷはっ。うわ、本当に強いねこれ。度数８５っての嘘なんじゃない？……おーい、鏡？」

「……」

「鏡ー？おーい？大丈夫？」

ぺちぺちぺち。萃香が俺の頬を叩く。

「……だ……」

「ん？」

「……大丈夫じゃない……」

「ええ！？ちょ、ちょっと！？酔わないんじゃなかったの！？」

その筈だったんだが…なぁ。

なんだろう、ふらふらする。それにとても気持ちいい。いい気分だー……。

あ、やべ。目の前が暗くなってきた。これが酒に酔うってやつか…
…初めて体験したな…。

「鏡!?ちょっと、鏡!?冗談は嫌いだよ!?鏡?!」

薄れていく意識の中、俺に必死に声をかける萃香の姿だけが、何故か最後の瞬間迄鮮明に見えていた。
…最初から最後まで、締まらない儀式だったなぁ…。
そんな事を最後に考えて、俺は意識を失った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……う、うぅん……む?」

あれ?お、おはよう?
どうやら自分は今、布団の中に居るらしい。
…何故だろう、嫌な予感がする。ただ布団の中にいるだけなのに…
…あれ?なんで俺、布団の中に居るんだ?

とりあえず現状を把握するために布団から出ようとして……右腕が、重いことに気が付いた。
ちょうど子供程の重さが右腕全体にかかっている。加えて言えば、柔らかいし、温かい。

「……まさか…な…」

恐る恐る、布団をめくる。
俺の右腕に引っ付いていたもの、それは…。

「う……うぅん……」

「……今この時程、お前が横に居るという事が信じたくない時はない…っ！」

ロリ鬼こと、伊吹萃香だった。通りで重みが子供ぐらいなんだなぁ…。納得。

……おーけいだ。まずは、無いとは思うが服とかを確認しようか。

これまた恐る恐る、隣の萃香の姿をよく見てみる。

気持ち良さそうに俺の腕にしがみついて眠っている萃香の姿は……裸だった。服を着ていなかった。ついでに俺も服を着ていなかった。
…どうりで、人肌の暖かさをやたらと感じる訳だ。

……いやいやいや、まだそうだと決まった訳じゃない。次は臭いだ、臭い。

すーっと、おもっいっきり空気を吸う。

「…っげほっ、ごほっ！……く、くせぇ…！」

文字通りむせ返るような強い臭いがした。
どんな臭いかと言うと、まあ…予想通りというかなんというか…。
独特の強い臭い。やらしい言い方をするなら、雄の臭いと雌の臭いが混じった様な臭い。
ぶっちゃけそういった行為をした後に匂う残り香、所謂精臭ってやつだった。

……あうとー！完全にあうとー！どう考えても致してます！

…もう完全に黒だが、一応記憶の確認をしてみようか。

確か…昨日は風呂で萃香と盃を交わして…。
今迄に無かったことなのに、何故か酒に酔って…。
そのあと……。駄目だ、それからが全く思い出せ……あ。

何故か、何故だか。

萃香の泣きそうな顔が大きく写っていて。
可愛いな、と思ったから。
キスしながら、こっちに引っ張り混んだ。

…っていう光景が、頭の中で再生された。

……完っ全に黒です！やっちまったなぁ！

「マジかよ……やっちまったのかよ……！」

頭を両手で抱えて天を仰ぐ。どうしよう。

そうすると、寝ていた萃香が起きる気配がした。…そういや萃香、さっきまで右腕に張り付いていたな……頭抱えた時に剥がれたか。

「……ん……う…うぅ……ん……。ふぁ…っ……くっ……んんっ！」

萃香はあくびをしながら長い伸びをする。

「……」

「……あ」

「……」

「……」

目があった。伸びきった萃香と、目がバッチリあった。

「……」

「……」

…気まずっ！超気まずい！
と、とりあえず挨拶しとこう、うん。

「あ～…おはよう？」

「…夫婦になるまで手を出さないって言ってなかったっけ？」

「……言ったな、確かに。しかも昨日」

恨みがましく、俺を見詰めながら言ってくる萃香に、俺は鸚鵡返しで返事するしかなかった。
だって気まずいんだもの。自分から手を出さないとか言っておいて、自分からそれを破るとか…死にたい。

「……手、出したね…」

「…出しちゃったな…」

「……」

「……」

「…正直、すまんかった」

「……」

…仕方ない。いや、仕方ないから今から言うんじゃないからな？先にそれだけは言っておくぞ？

「…知っての通り、俺は真っ赤な嘘が嫌いだ」

「…だから？」

「……夫婦になってくれないか？」

「……グダグダだねぇ…」

「…グダグダだな…」

我ながらｇｄｇｄかつ、情けないプロポーズだった。プロポーズ史上最も情けなく締まらないプロポーズなんじゃないだろうか。

「はぁ…。なんだいこれ。史上初めてなんじゃないの？こんなに締まらないプロポーズ。情けな…」

「…正直、すまんかった」

「……いいよ。なったろうじゃないか、夫婦に。元々覚悟は決めてたんだし、正直あんたにはあまり期待してなかったんだ。それに……」

「それに？」

「私の好きなやつが、嘘つきになるのは耐えられないからね」

「……そうかい」

…どうやら、俺に幻滅した、という様な事は無いみたいだった。いっそ嫌ってくれれば……止めよう。それは失礼だ。萃香の気持ちを無駄にする事になる。

まあ、結果的にはこれでよかったのかもな。こいつにとっても、俺にとっても。

「あ。結局昨日は聞きそびれたんだけどさ。鏡、あんたの今の名前ってなんていうの？」

「あれ？まだ言ってなかったっけか？あの時から変わってないよ。まだ真経津九十九だ」

「なんだ、変わってないのか。結構な頻度で名前変えてたから、もう変わってるものと思ってたんだけど。……じゃあさ、九十九」

「…うん？」

「これから、よろしく」

「…ああ、これからよろしく頼むよ、萃香」

そんなこんなで。

グダグダだが、プロポーズは成功し。…成功というか、元々用意された場所に飛び込んだ感じなので情けないけれども。

恋人になった翌日に、俺達は、夫婦になった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

節分。世間一般では、家の中の邪気――つまりは『鬼』を追い出す日。

その日起こった情けない出来事を切っ掛けに。

我が家に鬼（ふく）が、やってきた。

番外　節分編　後　～正直、すまんかった～（後書き）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……っていう夢を見たんだけど」

俺は起き抜けに、顕冴に長々と話を聞かされた。

「…って、夢オチ！？まさかの夢オチとかねぇよ！」

酷い夢だった。
酷すぎる夢の話だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……てな事があったんだ」

俺は、顕冴の酷い夢の内容を愚痴っていた、…誰に、だって？そりゃ紫だよ。意見を聞くためにな。
顕冴を一番知っているのは紫だ。今も昔も…な。

勿論ここでの紫は、未来から来た方の紫だ。…ちなみに、残念だが本人に直接確認をとった、とか、そんなヘマはしていない。一応秘密だからな。

で、紫は酒を飲みながら俺の愚痴を聞いていたんだが、その感想は

「…貴方、まるで物語の主人公ね」

だった。訳が解らん。

「どういう事だ？」

どうせ「自分で考えなさい」とか言われるんだろうがと思いつつもダメ元で聞いたら、意外にも返ってきた答えはそうではなかった。

「良いでしょう、ヒントをあげましょう。特別よ？」

紫は酒で酔ってるのか、機嫌が良い。だからひんとなんてものをくれるのだろう。…酒、か。あまりいい感情は持てんな。

「あの娘、白峰頸冴の能力は変質してるのよ。変質する前の能力の名は『歴史を見る程度の能力』。ちょうど母親と父親を足して割った感じね」

「…歴史を見る…ね。未来視か？」

「察しが良いわね。そうよ。正確には、平行世界で過去に起こった出来事を見てるの」

「だから歴史…か。……待てよ？なら…」

「そういう事。その能力は完全に消えた訳じゃない。強化されて名前を変えただけ。知ってるでしょう？」

「…前例が目の前にあるからな」

「そうね。だから今のあの娘は、夢として未来を見るんでしょう。…推測だけれど」

「だから主人公みたい…か。…それなんてギャルゲ？とか言われそうだな」

「…でもそれだけじゃないわよ？貴方が物語の主人公みたいだと思った理由」

「…どういう事だ？」

「こういう事…よっ」

「んむっ！？」

「……ん…ふ……ふぁ……んちゅ……」

「……ぷはっ！…おま、これっ……酒…！」

「ふふふっ。…お解りかしら？主人公さん？」

返答すら困難な程、意識が朦朧となる。ちくしょう、顕冴の夢の通りかよ。酒に酔うとは…！

「……一応とはいえ、あの娘の能力について、聞き出しておいて正解だったわね…」

紫が何を言ったのかは、意識が薄れていったせいで認識できなかったが。

――その意識が切れる寸前に。

俺は未来から来ていない方、昔からの知り合いである紫だけに送った、二人の紫を区別しやすくする為のイヤリング。

それを、目の前にいる紫がつけている事に気がついた。

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足（前書き）

さて。今回のお話は、前回の続きだ。
残念ながら後書きの事は無かった、という事になっているので、紫関係の話ではない。
我等がロリ鬼、萃香に関する方のお話しである。残念だったな。

…まあ、二人ともに共通の話題、というのはあるにはあるが。
二人とも見た目は若いがその実結構な年ｍ……おっと、誰か来たようだ。

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足

我が家に鬼がやってきた？？のはいいのだが。
…さて、我が素晴らしき家族達になんて言おう？

正直、あいつらの俺に対するべったり具合は深刻だ。このままいけばヤンデレになるんじゃないかと思うくらいに深刻なのだ。
つーか既に片方はヤンデレだ…ったような気がするが、そんな気はしないような…。

ともかく。そんな奴らに「嫁ができました」とか言ったらどうなるか。
答えは簡単、死人が出る。

顕冴の方はまだいい。あいつの場合、変態じみて…というより完全に変態の域だが、あれは行きすぎた家族のすきんしっぷの範囲内だ。恐らく、甘え方を知らないのだろう。どうやって甘えればいいのか解らない、どの程度まで甘えていいのか解らない。まずそもそも『甘える』とは？とかそういったれべるで。
これはまあ追々教育していけば治ると思われる。なので大した問題じゃ無い。

問題は鑑枷だ。あいつは正真正銘紛うことなく俺に依存している。どの程度依存しているのか、何故依存しているのかは、例によって記憶障害みたいなもので覚えていないが、深刻だった筈だ。
なんというかアレだ。こう……やっぱりヤンデレだ。うん、あれはヤンでる。
少なくとも、先日の萃香の話にも出ていたが、俺の傍から離れるつもりはないとまで言う程には依存していた。ていうかヤンでた。

顕冴でさえ、常日頃からべたべたしている訳では無いのに。
まあ、これは過去の事なので、現在は多少マシになったと思われる。
……そういえば、萃香はこのべったり具合を、まるで当たり前の様に話し、受け止めていたが、なんとも思わなかったのだろうか。普通はどう考えても忌諱するだろうに。
やはり妖怪の感性は人間とは異なるという事だろうか。…いや、そうでは無い筈だ。人間と妖怪の感性は全く異なっている筈はない。天狗とかが良い例だ。あんなにがっちがちな思考してるのは人間にだって中々いない。…あれ？これは人間とは違うって事なのか？
…まあ、妖怪は人間に比べて物騒な思考体系をしているが、その根幹は変わらない、という事で納得しておこう。

とにかく。そんなこんなな訳だ。…すまん、自分でも途中でどんな訳だか解らなくなっただけなんだ。
ただ、俺に対する感情が親愛の情だろうが恋愛の情だろうが、そこは大した問題ではない。
問題なのは、依存度が高い、という事なのだ。
普段は楽観的というかほのぼのしてるというかお花畑な顕冴だが、俺が絡むと俺の事しか勘定に入れない傾向にある。理由は解らん。
俺がそういう風に教育した訳では無い。
鑑枷の方は…最近まいるどになってきたとはいえ、今でもその暴力性は健在だ。
何でもとりあえず力で解決しようとする。それも正々堂々とは程遠い形で。
…俺の腕くらいなら、何の躊躇もなく斬り落とす。そういえば、どの程度なのかは解ってくれるだろうか。

つまりはそういう事だ。俺か萃香か鑑枷か。その中で誰かが死ぬかもしれん。少なくとも血が流れる。

え？お前の家族だろ？そんな事はさせないとか、男らしい事言えって？
うん、それ無理。

そんな誰も傷付かないとか傷付けさせないとか、そんな展開とか幻想だ。そんな事しか考えられないぐらいに、鑑枷ってアレなのだ。
アレの怖さは、実際に体験しないと解らない。
普通は解らないし解らなくていいし、解りたくなかったがな！

それだけじゃなくて、だ。この素晴らしきロリ鬼様は、妖怪らしいというか鬼らしいというか。
端的に言えば暴力的なのだ。端的にといっても、これだと少し語弊はあるが。
なんというか、なんでも力で解決しようとする、という訳ではないんだ。…幻想郷ではそれが最も代表的かつ人気があり、模範解答例その1だという事は置いといて。
喧嘩っぱやいとでも言うのか。力で解決しようとする傾向が強いのだ。
ただ単に気性が荒い、とも言うが。
どちらにしろ、売られた喧嘩は買う気質、という事で。

……。

「萃香」

「なぁに？」

「あぁっ！あの萃香が猫撫で声とか！」

頬っぺたすりすりしてくるとか！可愛いなぁもう！…角が地味に邪魔なんだけどね！

つーかなんだこれ。デレか。デレちゃったんですかそうですか。

…悪くないな…。

「あえて言っておこう。…死ぬなよ」

「……なんのこと？」

俺は抱き付いてくる萃香の頭を撫でながら、どこぞのフラッグ乗りみたいな事を言うしかなかった。

…あれ、これ死亡ふらg…いや、気にしたら駄目だな！

…未来への水先案内人は、のくだりの方が良かっただろうか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「それじゃあ改めまして、乾杯ー！」

「「「「乾杯ー！」」」」

何故か音頭を取った顕冴に合わせて、屈強な鬼どもの雄叫びが上がった。その中には萃香や鑑枷も含まれている。

あー…何が起こっているのか解らないと思うが、まあ落ち着いてく

れ。順を追って説明しよう。

血が流れる事は必至とか言ってたが、別にそんなことはなかったぜ！！

上記の通り、結果から言えば何事も無かったのだ。

まず始めに。

あの後どうなるんだと、恐る恐る部屋を出た俺と嬉しそうに出た萃香を待っていたのは、「ゆうべはおたのしみでしたね」的な笑いを持った我が家族達二人と、酔っぱらった末に沈んだ鬼の野郎共という、死屍累々のかおすな光景だった。

笑っている二人は、少なくとも顕冴の方はべろんべろんに酔っていた。鑑枷は見た目は普通だが、恐らく酔っていると思われる。

鬼の野郎共は、そこいらに転がっていた。酒に酔ってそのまま寝てしまったんだろうが、どうみても死体にしか見えない。

つーか家主に無断で雑魚寝しないで頂けますか。

女二人いるんだから男は外で寝ろっていう。…女と一緒に寝た俺が言える立場じゃないんだろうけどな。

以下、その現状の説明から現在までの回想である。

「うわあ……。これはひどい」

「正に死屍累々。まるで屍の様だ、だな」

「おー、お二人さん！どうだった？」

「御二人とも、おはようございます」

倒れている鬼達の中央、見方によってはこの惨状を作り出した様にも思える顕冴と鑑枷の二人が、軽く引いている俺と萃香に声をかけてくる。

顕冴は完璧に酔っぱらいのてんしょんで、鑑枷は御丁寧に挨拶をかましてきた。

「おう、おはようさん。あと顕冴、どうだったってどういう事だ？」

「んー？そんなの決まってるよぉー。お父さんだって解ってる癖にぃー」

「酔ってんなぁお前」

「酔ってないデスヨー。で！それよりどうだったのさーぁ？」

「だから何がだよ」

「何って…ナニの具合だよー？」

「おぉい酔っぱらい！てめぇそれで良いのか！？」

「酔っぱらいってのはねぇ…自分に酔ってるんだよ！」

「確かに自分に酔ってるみたいだな！ドヤ顔見る限り相当酔ってるなお前！」

別にうまくもなんともないからなお前。むしろ痛々しいからなお前。
あと間延びした舌っ足らずな話し方がイライラする。何故だろう。

「で、どうだったー？キモチよかったぁ？」

「……記憶にございません」

「記憶が飛ぶ程だったんだぁー。ひゅ～！」

「てめぇもう寝ちまえ！これ以上なんか言う前に眠っちまえ！」

ええいこの酔っぱらいめが！これだから酔っぱらいは嫌なんだ！
俺が憤っている間に、顕冴は俺に絡むのが飽きたのか、その矛先を
萃香に変えていた。

「で？実際どうだったのよいーちゃんよー？」

「その変な呼び方止めな」

「じゃー、すーちゃんで！」

「とりあえずちゃん付けを止めようか」

「止めて欲しかったらキリキリ吐くんだ」

「なんでそんなに無駄にハキハキと喋って無駄に凛々しい顔なんだ……」

「ふふん。酔っぱらいってのはね、吐くのと吐かせるのは得意なんだよ！」

「後者はともかく前者は誇れないだろ……今後少し自重しようかな…」

何故か萃香が酒を控える宣言してしまっていた。まあ、二日もすれば破るんだろうが。

「自重と自重って、漢字が一緒だよねっ！」

「寝てしまえ！これ以上なんか言う前にあんたもう寝てしまえ！」

「ふぇえええん！お父さーん！萃香がいじめるよぉ～！」

「ああもう面倒だな酔っぱらいってのは！そして何笑みを浮かべながらその娘撫でてるんだ九十九は！」

「いやあ、微笑ましいなぁって思って」

「なんでさっきと態度が反転してるんだよ！？」

「娘と妻が可愛いんで仕方が無い」

「ぁ……う……うん…」

キリッとか付きそうな表情で素直に言うと、萃香は照れてしまった。
どんだけ初なんだよ、それでいいのかよ鬼。
まあ、そんな反応も幻想郷ではさほど珍しい事ではないか。むしろ歳くってる奴ら程そういう傾向が強い希ガス。
どうでも良いか。そんなことはどうでもいいんだ。昔の人は言いました。「可愛いは正義！」
だから顔真っ赤にして照れている萃香が正しい。それでいいじゃないか。

「す～は～す～は～…。はぁ、お父さんのニオイ……興奮してきた…はぁはぁ……」

「「お前はもう寝てしまえっ！」」

「ふぎゅう！」

咄嗟に出た、俺と萃香の肘打ちで、顕冴は沈んだ。…これは、可愛いの範疇には入らないと思う。だから俺達は正しい。
皆もお酒は程々にな！飲み過ぎると親類に欲情しちゃうゾ！……ねーよ。

「はい萃香、今回の教訓。出来るだけ可愛らしく、語尾はカタカナで！」

「なにその唐突な振り！？……み、皆もお酒は程々にね！親父に欲

情しちゃうゾ！」

「あるけどねーよ。個人的にはありだけど普通はねーよそんな異常事態」

「あんたがやれって言ったんだろ！？」

「お酒は程々にってところだけでいいだろうが！なんで後半へんなのを付加しちまってんだ！俺が内心考えていた事そのままの台詞で、運命感じずにはいられんわ！」

「え～っと……つまりは？」

「好きだ、萃香」

「いや、このタイミングでその台詞は正直どうかと思う……」

「ですよねー」

「私も好きだけど」

「萃香ぁあああ！」

「もうお腹一杯なので、他所でやって下さいな」

「ぐぉおおお…！」

萃香が可愛かったんで抱きしめようとしたら、何時の間にかどっか行って、戻って来てた鑑枷にヤクザキックをかまされました。凄く

地味に痛いです…。
なによりも抱きしめられなかったという心理的だめーじが結構大きいです…。

「くそっ…俺の楽しみをあっさりと奪いやがって…！腹いせに胸揉ませろ畜生！」

「良いですよ、ほら」

「そんなあっさりと胸を差し出すんじゃありません！」

「し、仕方ありません……こ、これで……どうかご勘弁を…」

「心持ち出し渋れって訳じゃねぇ…！出すなっつってんだよ！」

「そんな…！私の胸は、見るに耐えないと言うのですか！」

「そうじゃねえよ！むしろ眼福だよありがたいよ！ただそうホイホイ男に胸を見せるんじゃないって言ってるんだ！」

「私は九十九以外の男に胸を見せた事はありませんし、見せるつもりもありません」

「キリッ、っとしてんじゃねえ！頼むから俺以外に胸を見せられる男を見つけてくれ…！」

俺と萃香の事で何も反応がなかったから安心してたらコレだよ！俺の家族には変態しかいないのか！

ああ、一人まともなのが入ってくれたな。ありがとう萃香。これで俺はまだ戦えるよ…。

「萃香、ありがとう。君のお陰で俺はまだ心を保つ事ができる」

「何いきなり畏まって変な事言ってるのさ。そんな事言わなくて良いよ。……夫婦、だろ？」

「萃香ぁあああああああ！」

「つっくもーっ！」

やばいなにこれカッコイイ！カッコイイし可愛い！俺の嫁は宇宙一いいい！

そう思いながら抱き付こうとすると、なんと向こうも抱き付いてきた。

うん、なんだろうね。幸せっていうよりかビックリしたね。あと萃香は鬼なので、思いの外抱き付いてくる力が強いという。…もう解るな？

「ちょ、痛っ！痛い痛い、もうちょっと手加減してぇいたたたた！」

「私はいつだって全力、愛情表現に手加減なんてしないよ！」

俺は幸せだと実感するより先に、腹部の鈍痛を感じずにはいられなかった。いくら不死だっつっても痛いものは痛いんだよ。

そして地味に背骨が、背骨がぁあああ！ミシって！今ミシっていった！俺の背後からミシって音が！

「背骨が、背骨が折れる！鯖折りされる！鬼の嫁に鯖折りされる！……ん？これがホントの鬼嫁…か？」

「も…もう……。そんなに嫁嫁連呼するな。流石に照れくさい」

「なんかなちゅらるに心を読まれてる！？…じゃあ、俺が今して欲しい事解るな？」

「……まあね」

そう言って萃香は、俺の胸辺りに押し付けていた頭を、俺の膝の上に体を乗せる事で、俺の頭と同じ高さに持ってきた。

「ほら。こうすれば、見下ろさないし見上げないよ？」

「……いやまあ、元々の目的は達成されたし嬉しいので文句はないんだけどね？」

同じ目線に立つという事が、なんかこんぷれっくすになっていないだろうか、このロリ鬼。

無理して物理的に目線を同じようにしようとするとか、そんな子供っぽいところも可愛いぞ！

と、いう訳で抱き締めた。いきなりだったんで「ふみゅっ」とかなんか可愛い鳴き声が耳元から聞こえた！

「……ああ、九十九。条件付きでは私、自重しますよ？」

「嬉しいんだがなんで条件付きなんだよ。なんでそんなに偉そうなんだよ。自重するのが屈辱的みたいな言い方だなオイ」

「当たり前です！九十九以外の男に、む、胸を晒すなど…っ！舌を噛みますよ！」

「そこまで嫌かこのヤンデレもどきが！なんだ、どうしてこうなった！」

「で、その条件なんですが……」

「話を無理矢理戻すだと！？」

「そこの妻を名乗る鬼をどうにかするなら、考えない事もありません」

「ヤンデレてた！内に溜めてただけでヤンデレてた！」

嫌な予感的中！一旦は大丈夫だと思っていたけど、別にそんなことはなかったぜ！

見事にヤンデレてました。ええ、綺麗にヤンでらっしゃいましたよ鑑枷さん。もどきじゃなくてヤンデレそのものだったよ。

典型的ともいえる台詞を吐いた鑑枷は、俺の腕の中にいる萃香を凄い目で睨んでいた。
アフレコするなら「この泥棒猫めっ！」だろうか。いや、違うな。
「死ね。市ねでも氏ねでもなくて死ね！」の方が正しいか。

萃香を睨むその眼には、殺意しか乗っていない。嫉妬とかが一切込もってない辺りがまた一層ヤンデレっぽさを醸し出している。

そんな死線（誤字に非ず）を一身に受けている萃香といえば、流石というべきか、けろりとしていた。

あ、少し訂正。デレデレしてた。俺に抱き締められているからか、気持ち良さそうに表情を緩ませていた。
でも顔見る為に引き剥がしたら切なそうな顔をした。可愛かったので撫でたらデレッとなった。
もうデレッデレだ。ドロドロと言えるかもしれん。今萃香が口を開いたならば、とてつもなく甘い声色でどうしようもないくらい幸せにまみれた様な馬鹿馬鹿しい事を、至極当然の様に発するのだろう。

「九十九？」

「ん？なんだ？」

「……だいすき」

「……」

なんだこの可愛い生き物。ある程度は予想していたが、予想以上の破壊力だぞこれ。

まあとにかく。どっちにしろ鑑枷の殺気をものともしていないという事には変わりない。

そんな殺気なんぞ慣れたわ！ということだろうか。

血の気の多い鬼だから、大いにありえるな、それは。

というか見せ付けてますよね。

解っていてあえて俺にそんな甘ったるい事を言いましたよね萃香さん。

見てごらんよ、鑑枷の目を。俺が睨まれている訳じゃないのに怖いよ。凄い怖い目をしているよ。

お前が何か言ったせいで更に眼光が鋭くなっているよ！

正直、もうね。

「おうふっ」

たまりません。興奮を押さえきれません。おにんにんおっきしちゃった。いいぞ、もっとやれ！

仕方ないじゃないか！ヤンデレだぜ？睨まれているんだぜ？ヤンデレとか大好物です！

原因が腕の中にいるんだぜ？可愛いんだぜ？抱きつかれてるんだぜ？役得ですありがとうございました！

総合的に考えて息子が成長期に入るのは最早当然だろう？むしろこ

れで大きくならなかったら不能だと思う。

「……何処をおっ立てているんですか。そんなものを立てている暇があったら、その鬼を引っ立てなさい」

ああ、ちなみに今の俺達の格好は、裸である。英語で言うところのねいきっどだ。

ちなみに座らせる位置が良かったのか、萃香は息子には触れていない。むしろ息子は萃香に触れていない。安心しろ。

おっと、勘違いするなよ?別に好きこのんで裸になっている訳ではない。

朝起きた後のあの出来事の後、流石に服は着ようという事になったから部屋を探したけど、見当たらなかったからじゃあ脱衣場かってな訳で脱衣場に行ったけれど何故か服は無くて。

鑑枷辺りが回収したんじゃね?でもそれって色々な意味でヤバくね?ってな事を考えながら、宴会開かれてた部屋に移動し、現在に至るのであった。全裸で。

…という訳だ。俺が裸が好きだから、俺達二人が全裸な訳ではないので、そこんところは誤解しないで欲しい。

断じて嫌がる萃香を無理やり部屋から連れ出して、羞恥の表情を浮かべながらモジモジしている様をニヤニヤしながら見詰める為だとか、そういう訳では決してない!

まあ、そうした慌てた様子の萃香が可愛いかったのは否定しないし、その様を俺はニヤニヤしながら見ていたことも否定はしないがな!

ああ、ちなみに萃香が抱き付いてきた時にはニヤニヤは止まった。

無論、俺の表情がニヤニヤから何かしらに進化して、結果ニヤニヤが止まっただけだが。
どんな表情に進化したのかは、想像におまかせする。

そういえば、萃香が抱き付いてきたのは、裸の体を誰かに見られたくないからという理由も、少なからずあるのかもしれないが。
…いや、無いか。こいつが誰かに裸を見られて照れるタマだとは思えんし。あれ？じゃあなんで部屋から出る時に顔真っ赤にしてたんだろう？
ていうか昨日も風呂で照れてたけど、こいつそんなタマだっけか？裸を見られるぐらいで照れるもんか…？いや、それ以前に本気で照れていたのか？

…まさか俺の変態性に合わせた、とかじゃないだろうな。そうした方が俺が悦ぶだろうからとかいう理由だったら、申し訳なく思いつつも凄い萌える。

あれだな。なんていうのかな。
こう、胸に込み上げてくる熱いこの思い。なんだろうなこれ。いや、なんなのかは解ってるんだけど。

よし、決めた。
さっきから大概のろけすぎだと自分でも解ってはいたが、もういいや。

今から、さっきまで以上に惚気ます。

「うわぁぁあああぁあああぁぁあああああぁぁあっげほっ！ごほっ！」

失敗した。
とりあえず大声で叫び、その後萃香を愛している的な宣言をしようとしたら、叫びの段階でむせてしまった。
そりゃもう盛大に。自分でもビックリするほどに。

自分でもビックリするほどという事は、当然萃香達もビックリする訳で。

皆はビックリした後、変なモノを見る目で見てくる。
やめて！そんな目で俺を見ないで！興奮しちゃうっ！ビクンビクン。

……ふぅ。

「…いきなり叫んだと思ったら、今度は黙りこんだけど……大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない。ただ単に精神的に絶頂を迎えただけだから」

「変態だー！精神的に絶頂って何！？どういうことなの！？」

「幸せって事だ。萃香、ありがとう。大好きだ、愛してる」

「あ……う、……うん。私も…」

萃香は照れながらも俺の目を見詰めたまま、その視線を反らさずに言った。

そのまま見詰め合った俺達は、当然の既決、あるいは流れでキスをする事にした。ちなみに俺の独断である。

独断ではあるが、萃香にあいこんたくとを試みると、萃香は頷いた。承認である。あいこんたくとはうまくいった様子だ。これで独断ではなくなった。つまりは大々的にいちゃこらできるって訳だな！

まさか疎通できるとは…なんか感激だ。ドキドキだ。嬉しさが込み上げてきた。

惚気だという事を自覚した上で言わせてもらえば、流石夫婦、ひいては流石俺の嫁だな。

そんな惚気もここまでにして。俺は目を瞑っている萃香の唇に、自分の唇を？？？危ねっ！

咄嗟に萃香ごと床に伏せる。第三者から見ると萃香を押し倒した様に見える。いや、実際に押し倒したんだけどね。

一寸遅れて、俺達の頭があった位置に刀が通った。太刀筋見えなかったけど。

見えなかったのに何故刀が通ったのかが解るのかというと……あれ？前にもこんな説明したような気が…まあ、いいか。

えっと、何故解ったのかというとだな、俺の髪が切れていて、真横に手に刀を持ち、それを振り抜いた姿勢で留めている鑑枷がいるからだ。

うむ、見事な残心だ。音も無く素早く刀を振り抜いた事といい、また腕を上げたな。おじさんは嬉しい。はなまるをあげよう。

……うん、ごめんね？正直ちょっと君の事忘れてた。ごめんね？

「……って危ないわ！おま、ちょ…おまっ！」

「……何故、避けたのですか？」

「普通避けるわ！俺だけならともかく萃香も狙っただろ！んなもん避けるわ！」

いくら萃香が鬼だからって、別に不死ではないのだ。首を斬られれば死ぬ。

人間は鬼を退治する方法を持たないとか言われているが、それは鬼が無敵で何らかの特殊な手段を用いなければ殺せないという訳ではなく、単純に普通の人間の身体能力では鬼に傷を負わせられないので、肉体的な力とは別の力が作用する方法を用いる事で、やっと鬼を打倒できるという事だ。…多分。

言い方を変えれば、鬼を退治できる方法を持つ者を鬼退治専門の退魔師と呼ぶことになるが。

鬼を倒すにはその専門の術を使わなければならないと言われているのは、そこらへんに起因している…と思う。

まあ、俺は人間じゃないし、そもそも人間以外の存在が鬼を退治する事をしようとしなかったから、はたして本当に鬼を退治するには特殊な方法を使わなければいけないのかという事は解らないが。俺含めて誰も試した事無いし。

だって鬼って滅茶苦茶強いし。少なくとも日本の妖怪の中では、種族的な観点からみた場合では最強だろう。

あくまで八岐大蛇とか、白面金毛九尾の狐とか、単体でバカみたいな強さの奴は例外として、その種族全体の平均の強さで、だ。

あ、勿論『スキマ妖怪』は例外な。その他俗に言う一人一種族ってのも例外だ。つーかさっき言った八岐大蛇とかも最早一人一種族だ。

大体なんで『スキマ妖怪』とか、まだ妖怪の範疇にいるんだ。アレ確実にそこらの神より上だろ。存在的に。

というか既に幻想郷において神といっても過言ではないわ。創造神だ創造神。幻想郷という世界創った神様だ。

…あれ？博麗神社って何奉ってんのかよく解んなかったが、もしかして紫奉ってんじゃねえのあそこ。

そうだよ、いくらなんでもそういう方面の信仰無しにあれだけの能力行使できるのって規格外すぎるだろ。博麗神社の信仰がそのまま紫に力を送ってるんじゃね？……ねーよ。いろんな意味でねーよ。

まず博麗神社を信仰してる奴がいねーよ。

例え本当に博麗神社が紫を奉っていたとしても、博麗神社を信仰している奴があんまし居ないから、紫に足される力なんて雀の涙程もねーよ。あそこただでさえ参拝客そのものが少ないってのに、どの神様がいるのかすら知られてないんだったら意味ねーよ。

幻想郷を創ったっていっても、本当に0から創った訳じゃないしな。

ああ、そう考えたら神様って程でもないか。

……おおっとぉ？話がずれたぞ？えっと？……そうだったな、鬼が種族として日本最強の妖怪って事だったな。

どのくらいの強さかというとだな……そうだ、ちょうど昨日が節分だったな。それが強さの目安だ。

節分は、今となっちゃ家の中の鬼を追い出し、鬼が家に入って来ないように豆を撒き、ついでに福を呼び込む行事だ。なんかこう言うと語弊がある気がするが、大体そんなもんだ。

ここで注目するのは、鬼を追い出すって所だ。鬼を追い出すとは言うが、家の中に本物の鬼が居る訳では勿論無い。

一家に一体鬼がいる。そんな事になってたら人類絶滅しとるわ。

ここで言う鬼とは、呼び込む『福』と対比のもの、つまりは『害』とか『魔』とか、所謂『悪』だ。

……そう、つまるところ鬼とは、『悪』と例えられる程の、強大な

種族なのだ。
だからといって、鬼全てが邪悪なものという事は勿論無い。それは偏見だ。
人にありがちな、「逸脱した存在がいると、その存在に近しいものまで一纏めに考える」という癖が表れた解りやすい例とも言える。
一部の邪悪すぎる鬼が存在したせいで、鬼という種族が一纏めに『悪』とされてしまったのだ。
一応の豆知識として挙げるが、邪悪な鬼の例としては、酒呑童子とか茨木童子とか……が……って。
……今更だけど、萃香ってもしかして……うん、突っ込むのはやめとこうか。俺は萃香がどんな存在だろうと受け止めるさ！
…だったらそこで逃げるなっていう突っ込みは聞こえない事にする。
大事なのは今までじゃない、今からなんだよ！

……とにかく。そんな『鬼』という強大な種族を退治しようと思う奴らなんていなかった。思っても出来なかった。出来る奴は思わなかった。
だから鬼を退治するのは人間しか存在せず、その退治の方法は失われてしまったので、現在人間は鬼を退治できないという訳だ。
人間は、殺せない。ただ、他の妖怪等の中には、もしかしたら鬼を倒せるモノもいるかもしれないという訳だ。

で、その倒せるかもしれないモノというのが、鑑枷なのである。正確には、鑑枷の持つ刀が、なのだが。
あの刀はそういうモノだ。鬼でも下手すると殺されるかもしれん。
だから避けた。
確証はないが、否定できないなら避けるべきだろう。というか単純に俺が痛いからってのもあるんだけども。
俺は斬られても問題はないが、痛い事には変わりない。普通避けるわ。

ちなみに、鬼が邪悪だから『悪』の代名詞とされたのか、元々『邪悪なもの』として鬼が生まれたのかという、中々おもしろい議論はまた今度どこか別の場所でしようじゃないか。所詮は鶏が先か、卵が先かである。

「……まあ、いいでしょう」

おっと、話しを現実に戻そう。
刀を振り切ったままの姿勢でそう言って、鑑枷は何かを断ち切る様に目を閉じ、刀をどこかへとしまった。
意外だ。もうちょっとヤンデレ的な言葉を吐くと思っていたんだが、思いの外すんなり引き下がったな。

「これが所詮八つ当たりでしかない事は自覚しています。けれども良いですか、九十九？」

「……」

「あなたは、伊吹さんを選んだのです。私でも紫でも文でも先生でも、他の誰でもない、伊吹萃香を選んだのです」

「……ああ」

「なら、もう解りますね？」

「勿論だ」

要は守り、裏切るなってことだろうな。選んだからには、そいつだけを見ろと。そいつ意外にかまけるなと。そういう事だろう。言われなくても、守るさ。もっとも?俺なんかが守らなくても萃香はどうって事ないんだろうが。

俺の返事を聞いて安心したのか、鑑枷は頬を緩める。
さっきまではなんだかんだ言ってたりやってたりしたんだが、やはり友人として萃香の事が心配だったんだろうな。
こんな変態に任せて大丈夫か?っていうか任せられるのか?みたいな感じで。

「では。???よろしくお願いしますね?」

そういって鑑枷は、身に付けていた着物を脱ぎ???いや、待て待て待て!

「なんで脱いでんのなにがよろしくなのなにをお願いしてるの!?」

「いやですね。女性にそんな事を尋ねるのは無粋ですよ?」

「お前は何をしようとしてるんだ!いや解ってるけど!何しようとしてるのかは解ってるけども!」

「では」

「では、じゃねえ！しないよ？いくらなんでもしないよ！？」

「解っているのではなかったのですか？」

「……よし、俺とお前とでは事態に対する認識に、決定的に齟齬があるようだ。まずはそこをキチンと把握しようか」

「……そうやって先延ばしして、有耶無耶にしようという何時もの手段なのでは…？」

「だまらっしゃい。えーっとじゃあまず、俺は萃香を選んだんだって言葉の意味は？」

「……そのままの意味ですが」

「じゃあ、次の解りますね？という言葉の真意は？」

「解っていなかったのですね……」

「解ってたらこんなになってない」

「……あなたは妻として伊吹…いえ、萃香さんを選びました。ですから、愛人として私達を愛してくれますよね？という意味で…」

「待った！はいすとっぷそこで止まれ！」

それだ！なんだその無茶苦茶な考え！
妻を決めたから愛人を？！妻を得てから一日足らずで浮気してんじゃねえか！

そんな考え想定してねえよ解る訳ねえよ！なんなのこの娘！？

「っていうか『達』って言った？ねえ今『私達』って言った！？」

「言いましたけど？」

「何故複数形？！なんでそんな事言うの！？なんで浮気しましょう宣言を嫁の眼前で堂々と言うかなぁ！」

「浮気？なぜ浮気になるのですか？」

「ああ、もう結婚してるから姦通とか不義密通って言うって事ですか！？」

「いえ、そうではなく。……別に、浮気だとかそういう…近頃の言葉では不倫？ですか。そのように言い表し、忌避する必要はないと思いますが。罪を犯す様な事ではないですし」

「いや罰せられるからね！？ちゃんとした犯罪だから！少なくとも鎌倉時代には決められてたから！お前が起きてた、９００年ぐらい前にはもう決められてたことだから！」

「…？あれは、夫が他に手を出す分には問題なかったと思いますが。それに九十九は武家のものではありませんし、特に罰は無かったかと」

「昔はそうでも今は違うんです！今は平民でも妻以外とそういう事したら罰せられるんです！」

「……誰に、でしょうか？幻想郷には、そういう機関は存在しないと記憶していますし、そもそも人間の法に従う必要性がありませんし」

「さっきまでの問答全否定？！お前昔っから散々人間の道徳云々語ってたじゃねえか！」

「…九十九？道徳と法は別物ですよ？」

「あーもう！とにかく無理！司法機関だとかそんなものが無くても、妻が許さんわ！」

「……と言っておりますが、どうですか？萃香さん」

俺ではなく、先程から何故か沈黙を保っていた萃香に尋ねる。
義理堅い鬼であり、お堅い萃香の事だから、答えは当然？？？

「ねえ、九十九？オープンマリッジとかポリアモリーとかって言葉、知ってる？」

「……ん？ああ、聞いた事はある」

？？？あれ？雲行きが妖しいぞ？

ちなみにそんな言葉をどこで聞いたのかと言うと、昔紫に言われた事があるのだ。
なんかある日突然、「オープンマリッジ、もしくはポリアモリーと

いう言葉を知っているかしら」とかなんとか言われた。
確かその言葉が出来たのは今から精々３０年前だった気がするし、紫に聞かれたのはそれよりもっと昔だったのはどうでもいい。
問題は、その言葉の意味についてだ。
意味は、簡単に言ってしまえば多夫多妻制だ。承諾さえあれば何人とでも関係を結んで良いよっていう婚姻制度。
婚姻制度というより取り決めだろうか。日本には馴染みの無い文化である。詳しくはググれ。

「私はさ、嘘とか嫌いなんだ。隠し事とかも」

「昔から知ってるし、昨日改めて聞かされたから解っているんだが」

なちゅらるにスルーですかそうですか。
ぺろっ…これは、説教の予感！

「そう、昨日言ったよね？他にも、あんたを好きだと思ってる奴は他にもいる、とも」

「言ってたな。だから、ケジメつけてこい……って訳じゃない、のか？」

「違うよ。？？？隠したり嘘吐かないって約束するなら、八人まで許す」

「あれ？割と膨大な人数を許可された！？」

あるぇー？おかしいなぁー？お堅い鬼の嫁から複数人との交際を許可されたぞー？
説教とかもなく、いきなり許可宣言を貰ったぞー？

「あれー？そんなに緩いの？最近の鬼ってそんに緩いの？」

「緩くないよ。というより昔から元々こんなのが当たり前だったんだし、何より複数人と関係を持つのは九十九だけだ。私は九十九以外と関係を持つつもりはないよ」

「なんなのその固いんだか柔らかいんだかよく解らない貞操観念！？」

「だから昔からこういうのは当たり前で……はぁ」

萃香は溜息を一つ吐き。呆れたと言わんばかりに頭を掻き。
すびしっ！と俺の顔に指を指してくる。

「いい？幸せってのは見えるものじゃない、感じるものなんだよ」

「目に見える幸せってのもあると思うんだが」

「そんなもの信用出来ないね。いいから少し黙って聞け。女ってのはね、自分の愛した男が他の女に愛されているのをみると、幸せに感じるんだよ」

んなもんごく少数だと思う。というつっこみは、黙っていろという命令を忠実に実行している俺には出来なかった。

「それは男を自慢に思う事でもあるし、その男を選んだ自分の事を誇りに思う事でもあるんだ。自分の好きなものが大多数の他人にも好かれていると、嬉しく思うだろ？」

同時にもの悲しさや嫉妬心なども沸き上がる思う。大多数の人が。というつっこみは、先程と同じ理由で俺の胸の中にしまっておいた。

「嫉妬とかを感じる事もね、それはそれだけ相手の事想ってるんだって気付いて、やっぱり幸せになる事なんだよ」

俺の心の中を読んだかの様に、嫉妬を感じる事、それも幸せだと感じる事の要因になると言う萃香。

そうだ。こいつ鬼だった。鬼は確かに義理堅いが、同時に豪快な性格でもあったな…。

にしても……ふうん。そういうもんかねぇ。

「こいつを好きなのは間違いじゃないって思えて、幸せになれるんだよ。九十九はそういう経験は？」

「無いな。まったくない。つーか嫉妬とかも本気で感じた事ない」

それと萃香の口調がなんか荒い。…まあ、幾らわざとこんな荒い口調をとっていたとしても、長年続けていたら体に染み付いて癖にもなるか。
今となっては、この口調の方が素になってるんじゃないか？
そんな事を考えながらも口にした俺の返答にも怯まず、むしろ「だと思った」とでも言わんばかりの表情を萃香は浮かべる。
いや見当ついてたんなら聞くなや。

「やっぱりね。あんた、人から愛されてるなぁって実感した事って、あんまし無いだろ？」

「ないな。どんなに何をされても、基本実感湧かない。解り辛いし」

正直、今でさえ萃香や鑑枷、顕冴に愛されているという実感があまり湧いてこない。
だから解りやすいヤンデレとか大好物なんだが。

「だろうね。だからだよ。あんたに愛を教えてやる。その為に許可を出したんだ」

「…どういう意味だ？」

「何人もの女に愛される事で流石に実感出来るだろうというのと、あんたを逃がさないようにする為だよ。あんた、追い詰めるとどっ

かいっちゃうし」

「……なんともまあ」

剛胆な事で。それと娘が傍にいる限りどこにもいかねーよ。娘が傍にいる限り、はな。
しかし…複数の…ねえ…。

それは流石に経験ないし、もしかしたら解るかもしれないな。

「ああ、まいったまいった。そこまで俺を解ってて、その上で言うんならもう文句はないよ」

「じゃあ、複数の女をとっかえひっかえするって事に賛成でいいね？」

「ああ。……言い方悪くないか？」

「事実じゃ無いか」

「そんな朗らかに言わないでくれ。罪悪感が湧いてくるんだが」

「罪悪感ぐらい抱きな。そうでもしないと割に合わないだろう？」

「まあ、それもそうか」

さて、これで俺は名実共に最低の変態クズヤローに成り下がった訳

だが……まあ、いいか。

「罪悪感を抱いてる暇があったらさっさと私を抱いて下さい」

「…ってやっと話に加わったと思ったら下ネタか！お前はそれでいいのか！」

「九十九以外の男に好かれても意味を見いだせませんし。九十九はこれぐらいで嫌いになるとは確信していますし」

「嫌な感じで確信を持たれている……」

「さて、という訳で記念すべき妾1号は鑑枷だ。さ、布団は準備したから」

「お前もそれでいいのか色々と！」

流石に鑑枷は無いわ！
複数人と交際する事容認させられたけど、流石にそれは無理だわ！

「いいんじゃないの？」

「良くない！お前はもっとこう…なんだ！慎みを持て慎みを！」

「つつしみ…？なにそれ、シミの一種？」

「だめだこいつはやくなんとかしないと…！」

ネタですよね？もちろんふざけて言っているのであって本気じゃないですよね萃香さん！？

「……あ、そっか。流石に鑑枷は不味いか」

「おおう、解ってくれてたんじゃないですか萃香さん！」

「じゃあまずは、最近確認出来た上白沢慧音でも…」

「うわぁい！ここでラスボス持ってくる萃香さん！俺にはできないことを平然とやってのけるッ！そこに痺れも憧れもしないがな！」

貞操観念的には最もこの話を持ちかけてはいけない先生を一番に据えようとするとは…萃香、おそろしい子っ！

「えー……。じゃあ、スキマ妖怪でも…」

「駄目だから！あの娘ああ見えて結構初だからっ！」

いきなりこれは辛すぎるだろ常識的に考えて！現状がすでに常識的ではないとは言うな！解ってるから！

「うぅむ…。なら、あの天人だ！最近異変起こした不良天人！」

「何故そこで天子が出てくる！」

「ふーん……珍しく名前で呼び捨てなんだ……。やっぱり親しかったんだぁ……」

「カマ掛けられた！？」

しまった！騙された！

…じゃなくて、これは約束破った訳じゃないよね？

隠してないし、嘘吐いてもいないよね？聞かれなかっただけだし、騙していないよね？

なんか萃香の台詞がヤンデレっぽくて興奮するっ！…はい、すいません。

「ごめんなさい。言わなかった俺が全面的に悪いです」

「うむ、解ればよろしい」

日本の誠意、土下座をして謝ったら、結構あっさり許してくれた。

…あれ？

「あれ？普通殴ったりするんじゃねえ？こういう時」

「……好きな奴に、誰が好きこのんで暴力ふるうもんか」

「いや好きこのんでっていうかこんな時以外に何時ふるうんだっていう。…じゃあ俺が約束破って、謝らなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「……泣いてた」

「俺が居るから！俺の胸の中に飛び込んでおいで！あと胸がキュンってなった！…はっ！まさか、これが恋！？」

俺が知りたいのは愛なのだが。
あと尚更今の状況に罪悪感が湧いた。やべえなにやってんだ俺。なにさせてんだ俺。

「…よし、もう俺愛とか解らなくていいや。だからお前一人だけでお願いします！」

「駄目」

「即答！？なんで断られたんだ今！確実に普通なら受け入れられて然るべきだったと思うんだが！」

「愛ってやつを知って欲しいからだよ。知った上で、私を愛して欲しいからだよ」

「萃香ぁあああああ！」

可愛い！何コレ可愛らしい！

でも言ってる事が全くもって可愛くない！ドロッドロだ！

「……あんたって、愛とか解らないとは言う癖に、可愛いとかは解るんだね」

「それは解るだろう。感情ってか形容詞だし」

「いや、可愛いと思う心があれば、愛する心も普通はあると思うんだけど…」

「俺普通じゃないしな」

「ですよねー……」

だったらこんな面倒臭い事にはなってないよねー…と萃香はぼやく。全くもってその通りです。もうなんかすいませんでした。

ああ、駄目だ。マジで罪悪感に押し潰されそうだ。何やってんだよ俺…！

「まあでも、あんたが何人もの女と関係を持つってのは、さっきの話以外にも私には利点があるし？」

「え？何々？」

「私も摘み食いできるし」

「何気に百合宣言!?」

衝撃の告白!嫁が百合…むしろ両刀だった!

「うわぁ……正直引くわぁ…。自分の事を棚に上げて言うけど正直引いたわぁ……」

無論、俺のは数々の変態行為であって、俺がガチでホモって訳じゃ無いんで誤解しないように。

「じょ、冗談だよ!?何マジでドン引きしてるのさ!」

「いや、俺愛とか解らないから…同性愛とか非生産的な理解出来ない何かでしかないから…」

「ああ、成る程…」

全くもって百合とか薔薇とか何が良いのか解らない。同性愛って何が生まれるの?
何か生まれるの?何になるの?愛とかそういうメルヘンな返答は、俺は愛が解らないので受け付けません。
あ、でもネタ的には有りだと思うぜ!森の妖精とかな!

「ネタ的には良いとは思うけどさ…ガチは正直どうかと思うわ…」

「……そうかなー…」

「あるぇー!?その『悪くは無いと思うな…』的な発言に俺は危機感を抱くよ!?」

「や、あれだよ?別にそこまで言う程じゃないんじゃないかなーって思っただけだよ?」

「それでも充分危ういわ!ものっそい怖い!」

みんなも想像してみるんだ…。自分の嫁、あるいは親友にそっちのケがある可能性が出て来た場合を…!
ましてや同姓の親友の場合…!恐怖!一歩間違えて踏み出せば終わる…!

??的な経験をしてみたいって話を。あくまでそのギリギリのすりるを楽しみたいだけだがな。
……の前に、俺…同姓の友人いないんだよね……。香霖は友人って言う程親しくないし…。

……あれ?俺もしかしなくても寂しい奴じゃね?同姓の友人一人もいないってもの凄く寂しくね?…おかしいなぁ。何だか目から汁が流れてきたぞ?

……ううっ…!べ、別にいいもん!俺には嫁がいるもんね!寂しいけど寂しくなんかないもんね!

「……なんでいきなり泣き出すのさ…」

「いやぁ……なんか悲しみと共に、俺幸せだなぁって実感してたら…」

「もう訳が解らないよ…」

いいんだ。こんな気持ちが解る奴なんて、俺だけでいいんだよ。お前は解らなくていい。

「……お二人とも？もしかしなくとも、私の事を忘れていませんか？」

「「あ」」

あの発言の後、布団に寝そべったままの鑑栂がぽつりと呟く。
それにより鑑栂の存在を思い出す俺と萃香。
…うん、ごめんね？二回目になるけど、正直君の事忘れていたよ。
ごめんね？

「はぁ……。こう、なんと言いますか……自信というか誇りといいますか…大切な何かを失ったような気がします…」

「うん…ごめんね？それとその調子で俺への愛情なんかも無くしてくれると嬉しい」

「ああ、それは無理ですね。私のあなたへの愛は永久に不滅です」

「そのどっかで聞いた事のあるような台詞は止めて欲しいなぁ！色々な意味で！」

出来ればさっさと俺への愛なんてくたばってしまえと思うわけだが。

「と、いうよりも。先程から聞いていましたが、見事に本題から話が逸れていっていますよね……流石九十九」

「あ……そういえば…。……相変わらず、話を逸らす事が上手いねぇ…おのれ九十九」

「あっれ？なんで俺が悪いみたいになってんだ？！」

「しらばっくれるな。正直に言え。狙ったろ？」

「はい！狙いました！あわよくば有耶無耶にしようと思いました！」

自分でいうのもなんだが、若干天然入ってる気がしないでもないけども！

普段から話を逸らす事ばかり言ってきたりやってきたりしてたから、そういう行為が癖になってしまっている事は否めないけども！

ちなみに俺が威勢よく答えたのは、萃香がチンピラ風に凄んできたのが怖かったからである。念の為。

「まったく……油断もなにもあったもんじゃない…危うく忘れそうになるところだったよ…」

「俺としてはそのまま一生忘却して欲しかった」

「私としては、あんたには逸らさず受け止めて学んで欲しかった」

「うわおい。いきなりしりあす展開持ち込んでくる萃香さんさっすが！」

「深刻にならざるを得ないだろ…それ程深刻だってのを自覚しようか」

「もう既に深刻な問題なのは身にしみているんだが」

具体的には言わないが、ヤンデレとかヤンデレとか爛れた関係とか。

「体感してるだけで解ってないだろう……」

「理解するだけの経験が無いしな」

「あれだけ長生きしてるのにかい……」

「どっかの誰かは言いました。『生きる事と学ぶ事は同じではない』、と」

「誰が言ったんだいそんな事…」

「無論俺だが」

「ああそうかい……」

心底疲れた、といった風に呟く萃香。よし、このまま有耶無耶になってしまえ！

「萃香さん。気をしっかり持って下さい。逸らされてますよ？」

「……はっ！？あ、危ない…！流石鏡…！」

「何が流石だ何が」

失敗。鑑枷の一声で萃香は自分を取り戻してしまった。…なんかこの言い方、犯罪臭を感じるな…。

「で、あ～……とにかく、だ！誰でも良い、抱け！」

「うわぉい！なんかもう滅茶苦茶だー！」

説明を端折りすぎて言ってる事が鬼畜極まりなかった。
種馬になれと。種馬になれと申すかこのロリ鬼めは。なんという鬼！
鬼の嫁に畜生（種馬的な意味で）の俺！文字通り鬼畜夫婦！
少し格好いいと思った俺を誰か殴れ！

「と、いうか。あんた私に遠慮しているみたいだけど、そういうのは気にしなくていいよ」

「遠慮っつーか……とりあえずは何故？と理由を先に聞いておこう」

「簡単な話さ。あんたが誰を抱こうとも、私が被害を受ける訳じゃないんだし。暇潰しにはもってこいなんだよ」

「暇潰し！？今人の対人関係暇潰しとおっしゃいましたか？！」

「ああごめん間違った。目的達成の上に、見てて飽きないだろうっていう少しばかりの打算があるからさ。私にはデメリットなんて無いに等しいんだよ」

「言いたい事は解ったけど、結局は暇潰しの意味もあると言う事は否定出来ないんだろうが…！」

「最初はそのぐらいの気構えで良いんだよ。暇潰しというよりは、騙されたと思ってやってみなって。その内『愛』だとかが解ってくる様になるって」

「……そんなもんか？」

「そんなもんさね。誰も正しい愛なんて知らないし解らないんだ。自分が愛だと思う事は、日頃の経験から出来上がるもんさ」

「それは常日頃から俺に淫行を働けと？」

「じゃなくてとりあえず愛し合え。ただし真剣に、さ」

「愛し合う…ねえ…」

「あんたが変態って聞いて思い浮かんだ像を実行するのと同じだよ。聞きかじった事でもなんでもいい。まずは形から始めな。形が決まってもないのに、中身が入る訳ないだろ？」

「形から…それなら自信はあるな。俺そのままだ」

言って、自分で苦笑い。なんというか…さ。

……ああ、萃香。その可哀想なものを見る目は止めて。自分でも痛い事言ったとは自覚してるんだ。

「……まあ、そんな訳さ。軽い感じで始めていいんだよ。けど、軽い気持ちで実行する事だけはするなよ？」

「言いたい事は何となく解るけど、言ってる事が解りづらいぞ…」

「ノリで始めるのは構わないけど、始めたからにはしっかりと責任を持て、という事」

「なんだかそれってドツボに嵌りそうな予感…」

具体的にいうなら『Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．』。或いは鮮血の結末、みたいな。

……よく考えるまでもなく、俺のやろうとしている事、もしくはや

らされようとしている事…ああ、後者の表現はなし。決めるのは俺だし、他人を方便にするのは嫌いだ。
まあ話を戻すとしよう。
俺の今からやろうとしている事は、つまりはそういう事なのだ。
他人に後ろ指指されても仕方がない、どころか普通は自分だって忌避し、後ろめたさを感じる行為。
おそらく人間関係？？こと異性関係においては、現代では最悪な関係。

それでも俺は、やるのだろう。萃香に進められたからだとか、愛を知る為だとかいうご立派な言い訳は抜きにして。自分の意志で、自分の為に。

これからの俺の言動で起こる事態は全て、俺の意志が伴っていて、俺に責任がいく。
それぐらいの覚悟はしないと、やってはいけない事。
……解りにくい決意表明だが、幻想郷で異変を起こすぐらいの覚悟と事態だと言う事だ。そう言えば解ってもらえるだろうか。

「ぶっちゃけ自殺するのと同じってことだ」

「なんだい藪から棒に」

「……いや、な。これから俺に降り懸かるだろう『幸せ』な出来事を想像するだけで、お腹いっぱいになっただけだ……」

「じゃ、私の考えに賛成って事で良いね？」

「ああ、良いぜ。ただ、お前の考えじゃなくて、俺の考えな」

「何言って？？？ああ、そういう事ね。…あくまであんたは……まあ、いいさ。これはあんたが考えて、あんたが決めた事」

「そうさ！いや、なんとも良い嫁を持ったものだな俺は！……クハハハハハハッ！」

しまった。嬉しさとか喜色方面の感情が溢れてつい笑いが出てしまった。割と飾らない本気の笑いでちゃった。

「……あー……。相変わらずな笑い方だねぇ…。久々に聞いたけど、アレだね」

「おい、どういう意味だコラ」

「悪役然としてるというか…三下っぽいというか……俗っぽいとか……なんて言うんだろ？」

「……噛ませ犬っぽい？」

「そう、そういう感じの！何て言うのかな、小物っぽさが沸き立ってくるよ！」

「おい、どういう意味だコラ！」

萃香といい、さっきまで沈黙していた鑑枷の噛ませ犬発言といい、なんともまあ歯に衣着せぬ言い方をする連中だった。もうちょっと

繊細な言い方をして欲しい。気にしてるんだ。
自分でも、「あ、俺の笑い方、中ボスっぽいな」とか思った事あるんだぜ？…どうでもいいですかそうですか。

「仕方無いだろ！本気で嬉しかったんだから！本気で笑ったらこうなるんだよ！」

「…それは、私達の発言を受けてからだと、自分は根が小物だという宣言になりかねないかと……」

「だまらっしゃい！」

「本気で嬉しかった、ね。……ふふっ」

「ああもう可愛いなぁ！」

「聞き方によっては、自分が小物だと思われているのを本気で嬉しがっているように錯覚できますよね。ねえ、小物？」

「ああもう可愛くねえなぁ！」

だからどうした、とお前には言ってやりたいよ！錯覚したからってなんだってんだ！つーかそれ第三者が途中から会話に加わって、聞きかじった事から現状を把握して失敗した、みたいなことじゃねーか！なんで最初からいたお前がそんなに錯覚してんだよ！

「あー疲れた！さっきから事態が推移していく様についてけない！」

「時代遅れ……」

「御老人ですか……」

「その通りですけど何か！？」

生まれた時から換算すれば、化石れべるでジジイな俺。だから流れには中々ついて行けん！

…うん、それとこれとは関係ないね。

「これが時代に取り残されたモノの末路か…」

「ああ、可哀想な九十九……」

「お前ら…！特に鑑枷！お前にだけは言われたく無いね！５００年は確実に遅れてるぞお前！」

「ハッ。横文字も満足に言えない貴様が、何を言う」

「前触れもなく何故か罵倒された！？さっきまでと態度が１８０度違う！」

「ああ、いけません。つい地が」

「地なの？！今の上から見下し口調が地なの！？」

「久々に聞いたなー。鑑枷のＳ発言」

「年数換算すれば５００年以上ですもんね！てーか聞き慣れてんの？！」

「そりゃもう。あんたが居る時の口調の方が正直違和感あるくらいに」

「俺が居ない時はこうなのか……。もしかして、俺の前以外の方が素の口調なのか…？」

「誰でも好きな人には好意的にみて貰いたいですし、好意的にみせたいものですよ？」

「そんなもんですか」

「そんなものです」

「…さて。じゃあそろそろ……」

「「……そろそろ？」」

「……えー……あー……んー？どうしよっか？」

「考えてなかったのか……」「考えてなかったのですか……」

話の流れをぶったぎった割には考えなしだった。そんな萃香も大好きさ！

「そりゃあ、さ。目の前で脱線していく様を眺めてたら、止めるしかないだろ？」

「……また、ですか」

「おいなんで『いい加減にしろよテメー』みたいな目で見るんだ。お前だって主要因だよ」

「先程の九十九の発言を鑑みるに、あなたは他人に責任を被せるのが嫌いなのでは？」

「お前は本当にああ言ったらこう言うな！」

「はいストップ！やめやめ！……こうやって脱線していくんだね…」

心底疲れたという風体な萃香だが、お前のその発言も地味に脱線しているからな。

…はい。原因の俺が言う事ではないですね。

「で、なんだっけ？話が逸れすぎて元が解らなくなっちまった」

「そもそも元、なんてありましたっけ？」

「いや、話が逸れるってことは、大本に話が存在するってことだろ」

「そういう意味ではありませんけど、もっと以前に遡った意味合いです」

「……つまりは？」

「つまりはですね…」

「……お前ら少し黙ってろ」

懲りずにまたもや話を脱線させようとした俺達を、萃香怒気という手段で止めた。

いやね、正直怖いのなんのって。すげえ、チビリそう。

「……えー……こほん」

一旦話を纏めようという意味合いを込めてか、萃香はコホンと咳払い。

なんというか、古典的だった。

お前も充分時代に取り残されそうじゃねえかという発言は、様々な意味で怒らせそうなので言わないでおいた。

「今後の九十九の方針は『幻想郷の女達を口説き落とし、自分の女にしていく』で良いね？」

「言い方が悪すぎる…」

「他に良い言い方はあるかい？」

「んー……エロゲー的展開を通して愛を学んでいく…？」

「言い方が駄目すぎる…」

「結局はヤることヤるんですね……」

「凄い今更なつっこみだな」

「異論は無し、と。じゃあ次に注意点だけど……」

「色々待て。俺達のさっきの問答の意味はなんだったんだ。それとなんでお前が参謀的な立ち位置になってるんだ」

「実際参謀みたいなもんだろ？不満？」

「……いや？」

正直、不満ではないが不安ではある。
いくら萃香が頭がまわるっても、鬼だという先入観が…。
乱暴で力任せな事になりそうだし、酒で餌付けとかされそうだ…。

「じゃあ注意点を。やるからには最後まで本気でやる事。向こうが愛想尽かすまで、あんたが降りるってのはナシだ」

「俺としては、お前が何時愛想尽かすのかが気が気でないね」

「ああ、基本私はもうあんたにつく愛想なんかないよ」

「それは好意が0って事でしょーか!?」

泣きそうだ!嫁に好きじゃないけど結婚したとか言われたのに等しい…ってか言われた!

昔ならともかく今は辛い!ちなみに昔の間柄ならともかくって意味合いと、昔の夫婦間の感情と現代の結婚に至るまでの感情の大多数に当てはめた場合っていう意味合いの、二つの意味が込められてるから!

「そうじゃないよ。素のままで接してるって事さ」

「むしろお前が愛想を言ってる方が想像できん…」

「ちょっと前…それこそ昨日までは言ってたんだけどねー」

「ああ、そういう事。……かーわーいーいー!」

「あれ?なんでしょうか。私が猫を被っていた事への反応と、萃香さんへの反応のこの差…」

思わず萃香に抱き付いてしまった俺は悪くない。

抱き付いた後に思いっきり撫で回すという事をしてしまったことについても、俺は悪くない。

だって萃香可愛いんだもの。何が可愛いかっていうと全部可愛いっていうぐらいに可愛いんだもの!

ちなみに萃香が言ってるのは、前回にちらっと話があった、言葉遣いの件である。多分。

あと鑑枷、それは気のせいだ。錯覚だよきっと。何も違わないさ。

「……って、また話が逸れてるー！」

俺の腕の中から、萃香は叫びながら飛び出してくる。
効果音をつけるなら……『にゃー！』だろうか。両腕を上に上げる格好といい、少し怒った様な顔といい。なんか頭の中でにゃーと流れた。
何が言いたいのかというと、萃香可愛い。

「……っと。危ない危ない。危うく逸れる所だった…」

「危うくも何も、話はもう逸れてるよ！」

「いや、俺の……なんていうんだろ？道？…まあいいや。続けてくれ」

考えたら色々な意味で止まりそうにないから、先を促す事にする。
ああ、その『駄目だこいつ』的な視線は止めてくれ。止まらなくなるから。

「あーもういいや。…えっと、肝心の対象はあんたに少しでも好意を持ってるやつ。ただし他にもっと好きな奴がいる場合は抜きで」

「……普通の魔法使いとかはあうとって事か？こーりん的な意味で」

「あれはそもそもあんたに好意を持ってるのかが謎だけどね…」

多分、持ってはいないだろう。

本気で考えると、多分『霊夢と一緒に居るのを時々見かける変人』程度にしか思われてないんじゃないだろうか。

変態ではなく、変人。ここ重要な。

「んー……その好意を持っているって、具体的にはどの程度？」

「そうだねー……恋愛フラグが立っている程度？」

「そりゃまた随分と俗っぽい回答で…」

そして曖昧だった。結局の所、曖昧だった。

「じゃあ、もっと良い方法…見分ける方法を教えようじゃないか」

「おお！そんな方法があるのか！」

「ああ。『好きだ』って言ってキスする。で、拒否されなかったらOK」

「すげえ力業だー！」

特攻だー！自爆だー！ズキューンという効果音が聞こえてきそうだー！

「…ちなみに落とそうとして、その注意点の項目に引っかかる奴…つまりは俺にたいして好意を持っていなかったりした場合は？」

無論、上記の力業を行い、拒否された場合のことである。…行った場合だよ？やるとは言ってないよ？

「……殺？」

「命がけ！？」

自爆っていう単語が戻ってきたわ！ますます特攻臭がぷんぷんするよ！

てかどんなるーるだ。いやまあ、恋は命がけとはよく聞きますけど、これはべくとる違うような気がしますよおじさんは。

「じゃあ、安全牌から行けばいいじゃないか」

「その言い方、なんか嫌だ…」

「あんたが嫌がろうと、私の認識は変わらないんだよ。えっと、ま

ず確実なのは先生と……」

「確かに確実だろうけどな。行為に対する感情とか、俺に待つ結末というか、俺に対する感情というか」

間違いなくでっどえーんど！これは安全牌っていうか死亡フラグだ、確実に。

「待つのは破滅…だけとは言えないと思うよ？あれの立場を考えると…あんたが最後って考えてるんじゃない？」

「…危機感がある、と言うか。それを突けと言うか」

「言い方はあれだけど、ね。後ろめたさは、絶対に幸せにしてみせるだとか、そういう適当な言い訳で覆い隠してしまえば問題なし」

「随分と辛辣な事で……」

「まあこれはあんたが本気で説得する、と。他のは……顕冴と鑑枷ぐらい？」

「それでいいのか参謀。ちっとは考えろよ参謀！あとその二人は駄目だ！」

それと安全牌……確実に俺に行為を持っている面子の数を考えると悲しくなるわ！

居るって事はまだ良いんだろうが、その内二人が家族ってのはなん

とかならんか！

「……うん、まあ、私もあんまり気は進まないけど……これ以上となないぐらいに『愛』については教えてくれそうだしねー…」

「顕冴はともかく鑑枷は納得した」

「どういう意味ですか、それ？」

勿論、ヤンデレという事を鑑みてのことである。
愛には、確かに詳しそうだ。

「あ、顕冴に関しては家族愛っていうのを学ぶって名目は？」

「名目とか、さっきからなんか俺の心を地味に抉っていく言い方ですね…」

「やることは変わらないしね」

「ヤらないよ！？流石にその二人に対してはヤらないよ！？」

「あんたがヤろうとしなくても、いずれは二人の方からにじり寄ってお終いさ」

「……」

「ごく自然な流れで無視ですか……しかしそれよりも…」

家族から性的関係を強要される父親の姿が、そこにはあった。
あくまで想像だけどな。こら鑑枷、その手があったかみたいな顔は止めなさい。
それと今寝ている筈の顕冴に反応があった気がするんだけど……気のせいだよな。
荒い息遣いが聞こえてくるのは空耳だよな。うん、そうに違いない。

「ああ、後スキマ妖怪だ。あれはもう回収していいでしょ」

「回収とか言うな。ますます言動が鬼畜じみてきてるぞ…」

「ふ。否定はしないあたり、あんたは自覚してるんだね。問題はあっちの方…まあ、少し突っつけば問題無いか」

おお、珍しく考え事してる、参謀っぽく作戦練ってる！
と、一瞬感心したものの、感心出来る内容では無かった。鬼畜だった。
感心してしまった俺はもう駄目かもしれんね。

「えっと、他には……安全牌はこれぐらいか。時点で博麗霊夢か」

「それは確実に無い」

「いや、現時点では霊夢って、あんたに対して顕冴よりもファザコンっぽいし……それをこじらせる事ができれば……」

「おおいなんか聞きたい事が一気に増えたんだけど？」

特定の人物に聞かせたくない事も出来たんですけど？
誰かと問われれば、この家の地下にだけは漏らされる事はないようにとだけ祈っておこう。

そう思っていた俺が見たのは、俺の言葉を聞いて「え？」という顔をした萃香だった。どういう意味だ。

「え？もしかして解って無かったの？」

あ、口に出した。

「ああ、解ってなかったんだな、これが」

「何言ってんの、あれはどうみても親父への子供の態度そのもの……ってそうか。あんたそういうのも解ってないんだっけ」

「この世界には子供が父親を殺す事が日常茶飯事な家庭なんてありません」

「そういうのも入れてだよ。霊夢の態度は、駄目親父に対する子供の態度にそっくりだ」

「なんだろう、駄目親父のところで妙に説得力が増した！」

だからといって親子関係の親しさ…というよりふぁざこんだとは断定できないだろう。
そこんところは解ってるんだろうかこのロリ鬼は。

「……私とあんたとでは、イマイチ事態に対する認識が違うみたいだね」

「違うんだろうが俺の方が正しいだろ。何故赤の他人に父親への想いを抱く」

「……霊夢の父親って、誰なんだろうね？」

「誰って……そりゃあ……誰だろうか」

今更かついきなりだが、博麗霊夢の家族の説明をしておこう。
博麗霊夢の母親、つまるところは先代の博麗の巫女は、名前を忘れられたという逸話を持っている。
理由はあまりにも博麗の巫女然としすぎていたという、何とも言えないものだ。しかし、それだけで名前まで忘れ去られてしまうだろうか。多分他の事情が絡んでるのだろう。
…という事はひとまずおいといて、だ。理由や事情は今はどうでもいいので、名前すら忘れられた先代、という事実にだけ触れておこう。

名前を忘れられ、役職でしか覚えられていない先代という、あんまりな話の影に隠れて目立たないが、それに付随してとある疑問が浮

かんでくる場合が多いのだ。

博麗霊夢の父親って、誰だ?という疑問である。

普段は何言ってんだこいつ、とは思うだろうが、まあ聞いてくれ。
前述の通り、先代の件に隠れて、というより先代の件に関連しているのだが。
先代は博麗の巫女として優秀であり、それによりそれ以外の、名前すら忘れられた。
名前すら、ということは、名前以外の事も忘れられているということである。

博麗の巫女として優秀だったから、という理由があるのは、見方を変えれば『博麗の巫女としてではなく、一人の人間としての先代』を、誰も覚えていないからだ。ちなみに俺はこの事に関しては少し例外だが、先代の名前は覚えていない。

巫女というのは元々そんなに人前に出る仕事でもなかったし、そういうぷらいべーとな部分が知られていないのは仕方無いとは言えるが、いくらなんでも全く認知されていないというのは異常だ。
その異常さは、何者かによる意図的なものだと俺は考えているが、それは今はどうでもいい。繰り返す様だが、先代に関する事実が今は問題だ。

先代の一人の人間としての事を誰も知らないということは、先代の人間関係を誰も知らないということでもある。
無論、子供がいるのでその父親もいるのだろうが、それは誰だ、という事になる。皆父親の事も覚えていないのだ。

それで影に隠れたという言い回しを使ったのだ。あまりにも『名前

すら忘れられた』という話の衝撃が大きすぎてよく考える事ができないことが多いが、よく考えるとこういった疑問が多々でてくる。
他にも先代は何故『博麗の巫女』ではなくなったのか、とか。何歳だったのか、とか。

……考えることが出来ないのは、もしかしたら人々は『先代』という存在すら忘れているからかもしれないな。もう過去の人間であると認識されているのかも知れない。
自分達が覚えていない、知らないのならば過去の人物だ。ならば考える必要はないという風に勘違いをしているのかもしれない。意識の外に締め出してしまっているのだろう。
名前を何故忘れられたかについての逸話を覚えているという事は、少なくとも実在したとは覚えているし、思っているんだろうが……。

……っと、話が逸れた。
言いたかったのは、子供は居る、けど父親は誰だ？という認識が皆にはあるということだ。
その『皆』とは、俺や博麗霊夢、そして先代の博麗の巫女も含めて、である。

人里の人間や妖怪など、こういってしまえばなんだが家族ではない部外者は、たとえ父親が誰だろうと究極的にはどうでもいいのである。
彼らには『博麗霊夢』という存在だけがいれば、それでいいのだ。
だから家族構成については誰も深く考えようとはしなかった。

けれどもその部外者ではない、当事者の博麗霊夢は？
普通ならば、誰だってふと思う事はあるだろう。自分はどのようにして生まれてきたのかを。
母はどんな思いを抱いて自分を産んでくれたのか。父は、他の人々

は？

そんな事をふと考えたときに、気付くのだ。自分の父親は誰だという事に。解らないという事に。

今迄当たり前のように、当たり前の事だったから考えては来なかったが、父親を自分は覚えていない。

何故覚えていないのかすら覚えていない。そういえば母の事もあまり覚えていない。

忘れたことに気付かなくて、忘れた事を忘れてしまっていたのだ。

そんなことに気が付いてしまえば、普通ならば人間不信になる可能性がある。少なくとも家族との関係はぎくしゃくしてしまうかもしれない。

けれども博麗霊夢は『普通』ではなかった。

自分は何故生まれたりしたのかは考えたりはした。父の事を忘れてしまっている事にも、母の事がよく解らない事にも気付いたりはした。

しかし、それだけだった。博麗霊夢はその普通ならば受け入れ難い事実を、純然たる事実として受け入れたのだ。

そうして受け入れた彼女は、普段と何ら変わらず母親と接し、普段と何ら変わらず日々を過ごしていった。まるで何事もなかったかのように。

事実、彼女には本当に何事もなかったのだろう。彼女は空を飛べるのだから。

飛べる鳥は、一人で生きていけるのだ。

まあ、そこまでは良かった。良い悪いはともかく、問題はなかった。

？？？と、ここまで考えた（もしくは妄想した）所で、一旦休憩。
覚醒したとも言う。おれはしょうきにもどった！

…いかんな、つい話を聞くと妄想してしまう。そしてそれを口に出して話がだんだん逸れていく、と。最早悪癖だ。
が、この一旦冷静になったのが良かったのか悪かったのか、俺はある事に気が付いた。
……『腐れ縁』、なのだ。

博麗霊夢と俺は、今となっては立派な『腐れ縁』なのだ。
空を飛べる？？？それは博麗霊夢の能力の１つであり、もっとちゃんと言えば『主に空を飛ぶ程度の能力』だ。
字面だけなら大したことはないが、この能力の真価は他にある。
地上に生きるものならば誰もが体感し、縛られている重力。それがあるのに、彼女は空を飛べる。
つまりは、彼女は重力を無視できるのだ。重力に縛られない。
更に、重力だけではない。他の何事にも彼女は縛られないのだ。
そう、何事にも何者にも縛られない。彼女は何があろうと、空を飛べるのだ。
さながら雲のように。まあ、流石に『全て』から逃れられるという訳ではないのだろうが。
そして『地に足着いてない』という訳ではないので、あしからず。

まあ何が言いたいのかというと、彼女には人間関係などには縛られないのだ。家族という関係にすらも。
だから自分の両親の事を考えても、平常でいられたのだ。
自分は自分、だと言うのが根底にあるのかもしれないな。博麗霊夢の内心は、俺は博麗霊夢ではないので解らないので、推測でしかないが。

まあ、散々語ったが、ここまでは皆周知の事実なのだ。人間関係において、博麗霊夢は平等であるという事は皆知っている。
誰に対しても平等で、誰に対しても基本は距離がある。それは人間関係というしがらみに『縛られない』為であるとも言えるし、縛られない事に縛られているとも言えるかもしれないが。…そこもまた今度なにか別の機会にでも語り合おう。日本語は面白いぞ！

が、そんな彼女と俺は『腐れ縁』なのだ。
切っても切れない、離れる事の出来ない関係。
まあ、俺と博麗霊夢の関係は、実際にはあまり接点が無く、薄弱すぎる縁なので切る必要もない…というか存在するのかも解らない程度の縁しかない、というだけかもしれないが。
それはともかく。
俺は、多分今の彼女の人格形成の一旦を担ってはいるのだろう。
俺が居なくても彼女はああだった可能性は高いが、今回はまず間違い無く俺が一枚噛んでいる。

まあ詳細は話が脱線してしまわないように省くが、俺は彼女にトラウマを植え付けたのではないかと思っている。
その理由も、また端折らせてもらうが、俺は基本他人の能力が利かないのだ。
これは俺の『能力』ではなく、ただの体質である。『幻想殺し』みたいなものだと思ってくれていい。大体それであってるから。
勿論厳密に言えば違うのだが、説明が面倒なのでそれでいい。

普段は俺は、この体質は意識してＯＦＦにしている。勘付かれて無駄なとらぶるを避ける為だ。
しかし、博麗霊夢と初めて遭遇した時には、それをしていなかった。
博麗霊夢がどんな能力を有しているのか知らなかったし、当時彼女はまだ１０にも満たない幼子…幼女だったから、その必要もないと

思っていたからだ。

幼女に警戒する必要は無い。そう、思っていた。俺は博麗霊夢を侮っていたのだ。

彼女は幼女の時点で既に、そこらの妖怪程度ならばあっさり倒せる実力を持っていたのである。

それに、彼女はとある約束を先代に言いつけられていた。その約束というのは、簡単に言うと『俺を見掛けたら殺せ』というものだった。

簡単に言ってくれるなって？それは先代に言ってやってくれ。まったく、あいつは子供になんて事教えているのやら…。

ともかく。普段博麗霊夢の修行態度等には殆ど口を出さなかった先代が、唯一口を酸っぱくして何回も言った事がその約束だったらしい。

そうまで言われたら何か理由があるのだろうと思って、その約束を守る事にしていたのだそうだ。

そこに、俺が博麗神社を訪ねてきた。

……もう解るな？

俺は出会い頭に、当時7歳の博麗霊夢に、あっさりと殺されたのだ。

驚く程にあっさりと。

俺の油断もあったのだろう。博麗霊夢の才能もあったのだろう。先代の言いつけた約束も原因の1つなのだろう。

ただ、一番の原因は、博麗霊夢に自覚が無かった事だろう。

当然と言えば当然だが、当時彼女の年齢は7歳である。実戦経験など、あろう筈もない。

だから、彼女は自分の実力がどれほどなのか、詳しく把握していなかった。

そして、『殺す』という行為がどんなものなのかも、当然ながら解っていなかったのだ。

彼女は、自分の力の大きさも、殺すという事がどれ程のものなのか

も、自覚できていなかった。

故に、当時彼女は全力で約束を守る為に、持てる力を手加減する事なく、俺に叩き込んだ。

先程も述べたが、当時の彼女はそこいらの妖怪程度なら『軽く』倒せた。その彼女の全力が、見た目はただの人間にぶつけられたのだ。結果は推して知るべし、である。１つだけ言うならば、その結果は大人でも下手すると一生心に残るものだった、とだけ。

そして、俺の体質は発揮されたままだった。彼女はその能力を封じられ、ただの幼女としてその結果を目の当たりにした。

大人でも心に残るかもしれない光景。それをただの幼女が目撃し、そしてそれは自分が作り出したのだと幼女は自覚し。

『殺す』事と自分の力を自覚してしまった彼女は、その時から何者も殺す事が出来なくなってしまったのである。

……というのが、俺と博麗霊夢の馴れ初めであり、遭遇した事の結果であり、現在まで続く『腐れ縁』の原因である。

で、このお話が先程までの話と何の関係があるのかというと、簡単に言ってしまえば、彼女は俺を意識してしまったのである。

意識の方向性がどんなものであれ、おそらく初めて彼女が意識した人間。それが俺という事になってしまったのだ。

そうして意識した彼女は、何故意識してしまったのかを考える。原因は俺の体質なのだが、彼女がそんな事を知る由もない。

考えた彼女は、１つの考えに至った。『もしかして、アレは自分の父親なんじゃないか』という考えに。

アレは何故だか母と親しいし（俺が先代と親しいのではなく、先代に親しい人物がいなかっただけである）、湯飲みも神社に置いてある（その湯飲みは、おそらく忘れられた本当の博麗霊夢の父親の物

だと思われる）し。
自分の父親だから、どこか自分は心の底であれの事を覚えていて、だから意識してしまうのだと。

馬鹿である。もしもそうだとしたら大馬鹿野郎である。野郎ではないが、馬鹿野郎だ。
どうしてそうなった！と言いたい。どこをどう曲解したらそんな事を考えるのだ、と。
しかし致し方ないのかもしれない。何故ならば彼女は生まれた時から巫女であり、空を飛べたのだから。

俺は他人の能力を受けないからこそ、能力によって他人の影響を受けない博麗霊夢に影響を与えてしまったのだ。
俺以外の奴が同じ行動…この場合は同じ目にあっても、だな。そうなった場合は、多少は心に残るのだろうが、ここ迄深刻にならなかった筈だ。他人に縛られないというのは、他人から影響を受けないという事でもある。
それが、そのいべんとに遭遇したのが、不幸にも俺だったというだけだ。それだけで、彼女は初めて他人から深く干渉を受けた。

……というのが、俺の『腐れ縁』という言葉を思い出し、博麗霊夢の身辺を冷静に解析し、過去の事実を交え、萃香の『顕冴よりもファザコン』という発言を受けた結果脳内で繰り広げられた妄想である。
なんだ、ただの妄想じゃねえか！と侮るなかれ。現実でも多分当たらずも遠からずだと思う。
俺は洞察力には自信があるし、何より萃香が言っている事でもあるのだ。嘘が大嫌いな萃香が。
……できればこれは、俺と萃香の思い違いで、あって欲しい。
ああそれと、俺の洞察力はこと『愛』に関すると途端に発揮されな

くなるという事は言っておこう。念のため。

さて、話を現実に戻そう。

つまるところは、萃香が博麗霊夢は他人の俺に対して『顕冴よりもファザコン』だと表したのは、多分俺の妄想の内容みたいな理由で、俺の事を父だと勘違いしてしまっているだろう博麗霊夢の日頃の態度等を自らで見て判断した結果なのであり。

そんな勘違いを正すついでに、『意識』の方向性を変えてしまおうと、萃香は言っているのだろう。

……。

とりあえずは、1つだけ。

「鬼畜か!?」

「鬼ですけど、何か?」

「いろんな意味でな!!もうお前なんだ、なんなんだ!?」

それなんて鬼畜陵辱ゲー。

完璧に悪人の所行である。そこは普通に穏便に、後腐れ無いように誤解を解こうぜ。

つーか俺の体質について説明すれば一発な件。まさしく瞬殺である。

俺の好感度や肉体的な意味でも。

「…いや、どうせあんたの事だから、意図せずして泥沼になっちゃ

う気がするし、それならいっそのこと組み込んじゃおうかなって」

「いやいやいや。しっかり狙えば俺だって出来ますよ？後腐れ無く誤解とけますよ？俺はやればできるこですよ？」

「射命丸」

「あれは……いや俺覚えてないし」

狙ったのか否か、覚えていないので判断できません。

「じゃ、先代」

「先代？先代の博麗の巫女？や、あれは後腐れ云々じゃなくて元々どうでもなかっただろ」

そういう色っぽい関係ではなかった。なんというか…殺伐としてたな、うん。

「スキマ妖怪」

「んー……誤解っていうか……気の迷い？」

若気の至り？血迷った結果？

ともかく、あいつはなんというか…そう、あれだ。暇つぶしってい

うか、何事も経験だ！って感じだな。
あ、無論これは向こう側の心情だから。相手の心の中を予想しているだけだから。
決して俺の心の中という訳ではない。俺はいつでも本気である。おふざけ半分とか言ったら殺すぞテメェ！…おっと失礼。

俺の迷い無い返答を聞いた萃香は、何故だか頭を抱えた。あるぇー？なんでしょうか、その「これだから…！」的な憤りの表情。俺何か悪い事言いました？

「だめだこいつはやくなんとかしないと…！」

「私がそう決心したのは、もう７００年程前になりますか…」

「え？じゃあ２００年もの間あれこれした結果がコレなの？」

「はい。…誠に遺憾ながら」

「……はぁ。じゃあますますこの計画成功させないと…」

「できれば、こういう事はしたくはありませんでしたけどね…」

何故だか二人して溜め息。完全に意気投合している二人。俺おいてけぼりである。
と、いうかだ。俺２００年も何かされてたのか？７００年前……そういや何か説教された気が…。
何だっけ……目に見えるものが全てではないとか、行動の端々までしっかりと感じろ、とかなんとか……駄目だ、今考えてもいまいち

よく解らん。どういうことなの…？

「……はぁ。もういい。解った。どれだけ九十九がアレなのかは充分に解った」

「おい、アレってなんだアレって。せめて変態と言え」

「せめて変態って…いやまあ今に始まった事じゃないけどさ……」

「…萃香さん、話、ズレてますよ」

「は…っ！くっ…解ってても脱力させられ逸らされる…！コレが九十九…！」

「いや、それは俺ではないから。それだけが俺って訳じゃないから。なんか誤解を招きそうな言い方止めろ」

俺が何かとんでもない強大な存在みたいになってんだけど。

「今のはメラゾーマではない、メラだ」みたいになってんだけど。

そんなの俺じゃないやい！

「もういい、解った！あんたがそんなに言うのなら、私にも考えがある！」

「おお？とうとうあんな鬼畜な所行を改めるか！」

「今から私、男と寝てくるから！」

「浮気宣言！」

夫婦になってわずか一日足らずで家庭崩壊の危機！
何コレかおす！嫁がいきなり浮気していい宣言したと思ったら今度は浮気するって宣言……あれ？これはっちゃけてるの嫁だけじゃね？一人空回ってね？ぐるぐる何か独走してるよね。主にてんしょんとか。
……ふむ、いやしかし何か意味があるはず…。考えがあるって言ってたし……。
ふむぅ……あ、そっか！解った！
あれだな！うん、流石萃香！そうかそういう事か！だから男と寝てくるってことか！
つまりはアレですね！自分で体験しても解らないのなら、他人のを見て学べってことですね、わかります！
だから萃香と俺は最早他人って訳ですね、よくわかります！……あれ？なんだろ、一気に寂しくなったぞ…？

同性の、どころか友人そのものが無きに等しいけど嫁が居るから良いやっていうさっき迄の思考が全否定！
嫁いなくなっちゃったよわーい。うははははは。何コレ死にてぇ。

「……その様子じゃ、解ったみたいだね？」

「……ああ、よくわかった……」

「…そうかい。そういう事さね。あんたが今思っｔ「次の旦那さんと幸せにな。あ、鑑枷、ちょっと出掛けてくるけど探さないでくだ

さい」解ってない！あんた全然解ってな？？？ああちょっと待って！ちゃんと説明するからちょっと待ってー！」

「ええい、放せ！放すんだ！俺は涅槃に帰るんだ！」

「なんか恐い事言い出した！？ちょっと鑑枷、手伝っ？？？」

「えっと……命蓮寺、命蓮寺…の場所は…先生に聞きましょう。…尼になるには……えっと、刀、刀…」

「止める気０！？何この子もう既に九十九の死後を準備してる！？しかも尼って、あんたどんだけ価値感古いんだよ！」

ていうか妻になった気でいるー！と、萃香は出て行こうとする俺に抱きついて止めながら、叫んで突っ込む。

あー…尼、ね。これは本来の僧侶といった意味のではなく、夫と死別したり離婚した女性が髪を切って、姿だけその尼さんになるという昔の日本の風習の方だろう。

…いや、まず俺と鑑枷は結婚してないからね？ああでも、むしろ未婚の女性の方が尼になるのは簡単か…。

…っと、話がズレた。

萃香が説明してくれるって言うんで、抱きつく萃香を抱き上げて居間に戻る。

いや、俺の勘違いっていう可能性もあるじゃない？ていうか萃香の言葉聞いたら勘違いっぽいし。

そのあまりにもあっさりとした身の翻し方に、萃香は若干混乱している様子。可愛いなぁ。

「よし、さあ聞かせて貰おうじゃないか。その理由ってやつを」

「え？ああ、うん……あれ？なにこの状況？あれ…？」

「あ、ちょっと待って下さい」

混乱している萃香が説明を始める前に、鑑枷が待ったをかけた。いや、待っても何もまだ始まってすらいねぇ。

「えっと、萃香さん。如何なる理由があろうとも、とりあえずは言わせて下さい。……この腐れビッチが」

「何か横文字で罵倒された！？ねえ九十九、私思いっきり英語使って罵倒されたよ！？」

「ははは、そうだな、おかしいよな。萃香は鬼だって。犬じゃないっての」

「いやそういう意味じゃなくてね！？」

「ああ、すっきりしました。では萃香さん、理由を」

「何事もなかったかのように先に進めようとしている！？」

「はっはっは」

「あんたもあんたで何笑ってるのかな！？」

ちなみに解説するまでもないと思うが、一応言っておこう。
ビッチとは英単語であり、日本語で言う所の雌犬である。転じて、尻軽女的な意味で使われる事がある…つーかそれが殆どだ。

「いや、ビッチはねーよと思ってな。別に普通なんじゃね？人間、もしくはそれに近い価値観を持つ妖怪なら。恋はうつろいゆくものだろ。色んな意味で」

「なんであんたが恋について熟知してるのかはおいといて、私のさっきの発言はアレだ。なんというか…ブラフだよ」

「例え嘘だろうが冗談だろうが、あなたが言うと洒落になりません。というか嘘だろうが言うな、殺すぞ」

「罵られたかと思ったら殺害予告までされた！？」

「ヤンデレここに極まれり…だな。はっはっは」

ヤンデレっつーか、価値観古いっつーか、童貞臭いっつーか生娘っつーか……。
良く言えば純粋無垢、悪く言えば世間知らずな発言…というか価値観な鑑枷だった。びっくりした。

「……あれ？でも九十九、特に反応はないね…安心するか怒るかするかと思ったけど…」

「何故？」

「いや何故って……。普通は自分の嫁が……ああいや、あんた普通じゃないんだっけ。ＮＴＲフェチってやつだから？」

「いえ、その割には欠片も興奮したり悦んだ素振りはありませんでしたし…」

「俺を何だと思ってやがる。俺は変態だがＮＴＲには興味ない。あれは嫌いだ」

「へぇ。独占欲強めなんだ」

にしし、と悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言う萃香。ただ、残念ながらそういう訳じゃない。

「いや、独占欲っつーか……なんか女性をまるで自分の物だって定義してるじゃないか。女性が何時何処で誰に惚れようがその女性の自由だろ？俺はＮＴＲのそういう身勝手が嫌いだ」

まずそもそもＮＴＲという言葉からして嫌いである。
あれは自分の彼女を、まるで自分だけの物かのように考えているので、何か癪に触る。
他人は他人、自分は自分だろ？相手に押し付けるのはいくない、うん。
こういうのも、価値観の押しつけなのかもしれないが。

「……じゃあ、結構本気でネガティブになってたのは？」

「友人殆ど０っていう現状に対する逃避手段である、嫁が居るから恥ずかしくないもん！というのが奪われてしまった為」

「……じゃあ、私があんた以外の男と寝てくるって言われた時、悲しかった？」

「いや、全然。さっきも言った通りそこいらは自由だろ。まして夫が俺じゃな」

多少の自嘲の念がある。そう、俺なら愛想尽かされても仕方無いし、むしろ当然というか。

と、そんな事を考えてたら、視界が移動していた。

玄関を背に立つ萃香の顔を見て喋っていたと思ったら、気が付けば寝室の顕冴が逆さまに見えていた……

な…なにを言っているのｋ（ｒｙ

察するに、どうやら俺は萃香に殴られたかどうかして、無様に部屋を転がったようである。

あまりの突然さに驚いて気が付かなかったが、結構腹が痛い。殴られたのは腹のようだ。……あれ？なんかスースーする…？

おかしいな、と思ってお腹の辺りを擦ってみた。……擦れなかった。お腹に触れなかった。腹に風穴が空いていた。びっくりした。

今は塞がりつつあるけど、傷口に手が当たって痛かった。

今度からは、萃香ちゃんは怒らせない方がいいとおもいました、ま

る。

……。

「な……なんじゃこりゃぁあああ!?」

とりあえず太陽にほえてみた。

いや死んでないけど。怪我どころか風穴だけども。これはやっておくべきだろ。

ていうか痛ぇよマジ痛ぇ。あれ?なんで俺こんなになってるんだっけ?

理由は解ってるけども。様式美ってやつだ。

「……あんた、自分が何言ってるのか解ってる…?」

「勿論さ。俺は最低で、他人の気持ちなんて解らないクズヤローだと宣言していると言っても過言ではないという事を…」

「そこまで解ってるなら!私の言いたい事も解ってるだろ!?」

「……」

うん、解ってますよ?

要するに、『自分をそこまで卑下するな。それは自分に惚れた私に対する侮辱だ』って事ですよね。言わなくても解ります。

ははは、あれだな。流石におふざけが過ぎたな。からかうと楽しい

んだけど、楽しすぎて止め時を逃しやすいのが難点だな。

ん？何時からふざけてたのかって？そんなもの決まってるじゃないか。

俺が「自殺するのと一緒だ」と言った所からである。少なくとも俺はそこからふざけてた。

まあ、言動をよく見ていれば気付いただろう。

複数人と交際する事を了承していた筈なのに、まるでそれが無かったかのような俺の発言とかで解っていたと思う。

ええ、真面目じゃないんです。博麗霊夢に関してはクソ真面目だけど。

それ以外は基本萃香をからかう為に適当に言った言葉です。

え？萃香は嘘嫌いだけどいいのかって？大丈夫だ、嘘は言っていない。

うん、俺の言った事は嘘ではない。

ただふざけているだけだ！冗談でもないぞ！冗談っぽくはあるがな！

……さて、どうしようか。

からかうのが楽しすぎて、からかい過ぎて萃香ちゃんマジ切れ寸前。

マジで切れる5分前である。秒じゃなくて分なところが現実感があって生々しいと思うんだが、どうだろう。

いやぁ、そんな萃香も可愛いなぁ。うん、凄い可愛い。食べちゃいたい。

それはともかく。

こうなった萃香さんの機嫌は、中々収まらない。機嫌と言うよりは感情だが。

どっちにしろ納めなければ大変である。主に俺に被害が及ぶ件で。

どうしよう。どのようにして宥めよう。

酒…か？酒飲ませてみようか？……ふむ、微妙だな。

酒飲めば気分が良くなって多少は機嫌も良くなるかも知れないが、理性のタガが外れて異常に執拗かつ鮮烈になる事も否定出来ない。かと言って今は何言っても駄目だろう。いや、真面目な事を真面目に話せばなんとかなるかもしれないが、それは無理。何故ならそんな真剣な話をしたら、鑑枷が若干おいてけぼりをくってしまうからである。おいてけぼりくらった鑑枷は、その鬱憤を晴らす為に何をするか解らん。危険だ。もの凄く危険だ。どのぐらい危険かと言うと、博麗神社に賽銭入れないで本殿の方に上がり込み、お茶とお菓子を喰らうだけ喰らってそのまま帰るという行為と同じくらいに危険である。

金に関して怒った博麗霊夢は、鬼である。最強かつ最凶で最狂に最恐の最嬌である。こんな風に厨二的表現を多様するぐらいにアレである。それと最後のなんかおかしいと思った諸君、心配するな。確かに対人関係が奔放すぎる割に金にはがっちがちに縛られちゃってる博麗霊夢は、お金の件で怒らせると怖い。怖いが、それと同じぐらいに可愛いし、美しいと評判だ。なんというか、どこか生命力に溢れているというか。生き生きしているのだ。普段のだらけている姿からは想像出来ないくらいに。…お金に関して怒っている時が生き生きしているってのはどうかと思うけど。

ちなみそんな評判は誰から出ているのかというと、それは無論俺から発信されているのであり。俺が博麗霊夢はお金に関しては生き生きしていると何故知っているのかというと、無論の事俺が彼女を怒らせた事があるからであり。

どのようにして怒らせたのかは、具体的に言うと危険度云々を語った時の例をそのまま実行したからだ。
いやぁ。面白かったなぁ。それに可愛かった。うん、ちょっと涙目だったのが高評価ですよ。

……あれ？話が逸れたぞ？
逸れた話は元に戻すに限る（ただし本日限定で）。なので話を戻そう。
如何にして萃香の機嫌を直すのか。
考えるのが面倒なんで酒を飲ませようと思う。
酒に酔って酔いつぶれて寝てしまうまでガンガン飲ませる事にした。
つまりは宴会二日目って事だ。よっし飲ませるぞ！

んん？俺の例の交際の件はどうなるのかって？知らんな。こまけぇこたぁいいんだよ！
そうと決まれば早速準備だ。準備っつっても鬼どもと顕冴を叩き起こして面子揃えて酒を持ってくるだけだが。
寝そべっていた俺は素早く起き上がって、その素早さに驚いている萃香をするーして玄関に隣接した部屋に…つまり鬼の野郎どもと顕冴が沈没している部屋に移動。
そうしてまずは顕冴を優しく抱き起こす。

「ほら、大丈夫か？顕冴」

「……ん…。…あ、頭が……」

「そうか、大丈夫か。ならちょっと起きてくれ」

「いや、全然大丈夫じゃな……」

「今すぐ起きれたら目覚めのキスをしてやる」

「おはようお父さん。グッドモーニング！良い朝だね、ハハッ！」

俺の言葉を聞くと、さっきまでの具合悪さが嘘みたいにすっきりとした表情で起き上がり、どこぞのネズミみたいな甲高い声を上げる顕冴だった。

「なんて現金な娘なんだろうな！そんないけない娘は地面とでもキスしてな！」

「そうすればお父さんは私にキスしてくれますか！？」

「ぷらいどは無いのかお前は！？」

「お父さんより優先すべき誇りなんて私は持ってない！」

「格好いいけど格好悪いなお前は！」

「そんなあなたの娘にキスを一つ！」

「お前はどんだけ飢えてんだ！？そこらの鬼とでもキスすればいいんじゃね？」

「……それは、無理。お父さん以外の存在とキスとか、無理」

「お前……それはちょっと……」

いきなり冷静になり、将来が心配になる事を暴露してくれる娘だった。
それはどうなんだ。それはどうなんですか顕冴さん。流石に引いたぞ。
俺は果てしなくお前の将来が心配ですよ。従順っていうか『すとーかー』っぽいぞお前。
将来とんでもなく粘着質な恋愛を繰り広げそうである。昼ドラれべるの。もしくは昼ドラ真っ青なれべるでの！

「じゃあ、あれだ。俺がお前に「そこの鬼にキスしたらお前にキスしてやる」って言ったらどうする？」

「無理矢理にでもお父さんの唇を奪う」

「俺の好感度下がる恐れを招く行為でも、俺以外とキスするぐらいなら、ためらいなく選ぶんですね……」

「勿論。私はお父さん絶対主義だけど、同時に自分の貞操も絶対だからね！」

「至上主義じゃなくて絶対主義なのな……。じゃあ、俺以外の奴と、キスまではなくとも、付き合ったら抱くって言われたら？」

「んー……。相手が女の子ならいいよ？」

「何気にお前も両刀宣言ですかそうですか……。じゃあ、相手が男の場合は？」

「無理矢理にでもお父さんの貞操を奪う」

「なんか悪化してる！そんなに嫌か！俺以外の男がそんなに嫌か！どんだけ嫌なんだよ！」

「触りたく無いし、触れないくらいに」

「それはもはや病気だから！」

男性恐怖症の域に入ってしまう程の、恐ろしさを覚える貞操観念だった。

こいつ、暴漢に襲われたら舌噛み切ってしまいそうで怖い。

そして自分の舌は噛み切らなくても、相手の舌とかナニとかを噛み切りそうで怖い。……想像したら、なんかヒュッってなった。

股間と口の中が一気にヒュッてなった。りあるに想像できたし、想像できてしまう事が怖いわ。

「おーけーお前とは今度しっかり話し合わないといけないという事は解った。それはともかくとして、だ。酒を持ってきてくれ」

「酒？良いけど……また飲むの？」

「俺は飲まないけどな。酒は風呂の裏手辺りに置いてあるから持ってきてくれ。両手に抱えられるだけ。俺は鬼の野郎ども起こすから」

「あれ？宴会二日目？ま、いいや。じゃあ取ってくるね」

特に疑問を持たず、口を挟まずに素直に取りに行く顕冴。…従順すぎるわ。
何あの娘従順すぎ。いや、少しは詰問してきたけど、答えをはぐらかされたらそれ以上は聞いてこない所とかが従順すぎると思う。
……さて。

「オラ起きろ野郎ども。何時まで寝てんだコラ。ケツに酒瓶突っ込むぞ？」

「「「「おはよう変態この野郎！いい朝だなコンチクショウめ！！」」」」

さっきまで死んだように動かなかった連中が一瞬で起き上がり、一斉に悪態をつく。
中々に訓練されているようだな。なんだこのちーむわーく。鬼ってこんなに仲良かったっけ？
つーか起きてやがったなお前ら。話を聞いて寝たふりしてやがっただろテメェら！

「よし、起きた早々に申し訳ないが。？？？お前ら、飲むぞ？」

「マジかよ…」「鬼畜だ…」「酒好きだからいいんだけどな」「よっしゃテンション上がってきた！」「酒の摘みマダー？」「姐さんと嬢ちゃんの酌マダー？」「まあ、昨日酌してもらってはないんだがな！」「ちくせうもげろ！変態もげろ！」「いや、俺は萃香タン

のワカメ酒が飲めればそれで……」

「「「「それはない」」」」

「っていうか昨日から最後の奴なんだ！？発言が色々危ないぞ！」

まず間違いなくロリコンだ！

え？俺？俺はロリもいけるだけだ！

「って、あれ？姐さんは？」

「萃香の姐さんならそこにいるんだがな……」

「ん？あれ、そういえば……」

言われてみれば、萃香は寝室で固まったままで居るのは解っているが、鑑枷の姿は見えなかった。気付かなかった。

思い返してみれば、寝室から移動する時にはもう既に見失っていた気がする。……ふむ？

ま、どっかいったのなら仕方無いか。どこいったか知らんが、心配はいらんだろ。

「お父さーん。お酒持ってきたよー！」

騒いだり探している間に、顕冴が酒を抱えて戻って来た。

うむ、指示通りに両手に抱えるだけ持ってきたな。胸の谷間に挟んだりはしていないな。
一安心である。そして準備完了だ。

「おつかれ。じゃ、後は勝手に飲んでてくれ」

持ってこさせた酒の中から一本だけ取って、俺はそう言って未だに固まっている萃香の元へ。
ていうかどんだけ固まってんだ。そんなにしょっくだったのか？…しょっくだったんだろうなぁ。

歩きながら手元の酒瓶開けて（無論素手でだ。俺の握力なめんな）、酒を口に含む。
うん。飲み込まなければ酔わないみたいだな。……匂いだけで結構フラフラするけど。
そうして背後から近付き、口を開けないので肩を叩く。
すると萃香はビクッと震えた後、振り向こうとする。
おそらく苦言を呈しようとしているのだろう。

「……あのねぇ九十九？いい加減に？？？ふぅ！？」

振り向きながら喋っていたので、正面にこっち向いた瞬間、俺は萃香の言葉を途中で遮った。
無論キスして、である。

「ふ……んんっ！？……んっ…」

ごくり、と。萃香は喉を鳴らした。
ちなみにそれは俺が口移しで酒を飲ませたからである。唾液を送りつけたからとかではない。
まあ、多少は唾液も含まれてはいるんだろうけど。

「？？？ぷはっ。……はい？」

「おーおー。たった一口で随分とまあ真っ赤になったなぁ」

「や、酒に酔ったって訳じゃ？？あれ？」

「おっと」

真っ赤になりながらも反論しようとした萃香の体が、ぐらりと揺れる。
それを抱えて支え、顔を近付けよく観察する。
萃香の顔は赤みが差し、形容詞的には『蕩ける』といった言葉がぴったりくるような表情。
しかし、それは羞恥だけではなく、酒が入った事も原因だろう。
萃香は、たった一口酒を飲むだけで、完全に出来上がっていた。

「な、なんだコレぇ……私がたった一口で…？！」

「……こうかはばつぐんだ！…だな」

「あんた、何飲ませ……」

「別に薬とか入れてねえよ。コレだけだが？」

萃香を支える手とは反対の手に持っていた、飲ませた酒の酒瓶を見せる。

俺は本当に酒を飲ませただけで、薬とか能力とか特別な事はしていない。

ならば何故、酒に強い萃香がたった一口で酔ってしまったのか。それは？？？

「…！？な……『鬼殺し』？？？！」

そう。『鬼殺し』を飲ませたからである。

以前普段はどれだけ飲んでも潰れない萃香が、酔いつぶれてしまったと語った噂の一品。

もはや『鬼を酔い潰す程度の能力』とかいう能力が概念が付加されているのではないかという、幻の一品である。

ちなみに人里にある酒屋にて、１本約１５００円から（外の日本の通貨に換算した場合）お求めできます。

補足すると『鬼ころし』ではないので、あしからず。

っていうか本当に利くのな。最早ギャグだろこれ。

いくらなんでも…ねぇ？

「マジで利いた……それでいいのか鬼」

「くっ…！私を酔わせて、どうするつもり？」

何を思ったのか、萃香は酔いで顔を赤くしながらもキッと睨み付けてくる。

どうするも何も……。

「普通に話すだけだが。あ、お前は飲みながらだけどな」

「……はぁ？」

わけがわからないよ。そんな声が聞こえてくるように眉間にしわ寄せる萃香。

いや、ちゃんとした理由はあるよ？

「……お前も、酔わなきゃやってられない。…だろ？」

「……ははっ。ああ、そうだね。……酔わなきゃこれ以上話を詰められないよ」

冗談っぽく、酒瓶を降りつつ言うと、萃香はポカンとした後薄く笑った。

話とは、まあ俺の『愛を知る』云々の事だ。

いくら萃香でも素面じゃこれ以上はキツいだろ、と判断したので飲

ませました。
ええ、俺だってそれぐらいは解りますよ？いくら何でもね。

「ほいじゃま、さっと合流しますかね」

「合流って……人前で話すような事？」

「笑い話になるぐらいが丁度いいんだよ」

じゃ、いこうか。
そう言って俺は、顕冴と鬼達のいる部屋の方へ振り返ると？？？

「へえ。私を放っておいて、随分と楽しそうな事してるじゃない」

「？？？せ、先代…？」

何故か正座している顕冴と、同じく何故か円を描くように並んで正座している鬼達と。
何故か円の中心で、満面の笑みを浮かべて正座している鑑枷と。

その鑑枷の隣に、何故だか満面の笑みを浮かべる先代の博麗の巫女が、腰に手を当て堂々と立っていた。……な、何故？

「？？？何故出てきたし」

出てこられたら面倒な事に……ああ、もう駄目だ、諦めよう。
出て来てしまったら、もうこいつ止められねぇ。俺は諦めた。

「そうね、まあ取り敢えずは一つだけ？？？」

責任取れ。

先代は満面の笑みのまま、そう言い放った。
ああ、こりゃまた面倒な事になりそうだ……。

俺はこれから起こるだろうと思っていた『幸せな事』が、想像していたよりもだいぶ早く起こってしまう事を悟り、頭を抱えるしかなかった。

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足（後書き）

続きます。質より量ですよ奥さん！
蛇足なのに長いぞ……おかしいな。

むかしばなし　1（前書き）

これは、今に繋がるような、繋がらないような。
どうでもいいような、どうでもよくはないような。
大切なようでいて、実はそうでもないような。
この出来事が起ころうが起こるまいが、何も変わらないような。
確かにあった、でも忘れられてしまった

割と、どーでもいいお話。

むかしばなし　1

広くて深い、森の中。
日の光がほんの少しだけ入ってくる、暗い暗い森の中。
そんな森の中に、一人の少女が座り込んでいた。

「……ひっく……っ……えぐっ……」

歳は十にも満たない様に思える。小さく縮こまり、小さな肩を震わせて、溢れそうになる涙と声を押さえ込もうと必死に堪えている。
怖いのだろう。この暗闇だ。目の前にあるものすら良く解らない。
近くに何があるのか、誰かが居るのか、何が居るのかも解らない。
森の中なのに、音がしない。何かが動く様な音も、動物の鳴き声も、葉が風に揺られて擦れる音すらも。

この森は『音無の森』と、一部の里の人達に呼ばれている。
木々が生い茂り、木の葉に遮られて、太陽の光は殆ど入ってこない。
そのせいか、花も咲かない。虫もあまり寄りつかない。動物も住んでいない。
音を奏でる物が何一つとして存在しない。だから音無の森。……もっとも、森の中に生き物が寄りつかないのには、別の理由があったりするのだが。
生き物が居ないのは、日の光が地に届かないからだけではない。風が奥深くまで届かないからという訳でもない。それらも要因としては勿論あるのだろうが、もっと直接的な、圧倒的な理由がある。
その理由はごく簡単だ。この森には、妖怪が住んでいるのだ。
妖怪というあまりにも異質なモノの気配は、動物を近寄らせず、植

物すらも生えさせない。
いくら妖怪といえど、ここまで自然に干渉するのも珍しいが、珍しいだけだ。有り得ない、という訳ではないらしい。

広い上に暗い、更に木々が多く入り組んでいる。
それだけでも人がこの森に入らない理由たり得るが、妖怪が住んでいる。
よくある噂話の類ではなく、本当に妖怪が此所を根城にしているというのだ。
そんな危険すぎる森には、誰も近付かない。

少女だって、「この森には近付かないように」と、親だけではなく、里中の大人から厳しく言い聞かされてきた。
近付いてはいけない理由は特に何も、誰も語らなかったが、それが逆に、何だかよく解らない、言いようのない説得力を持っていた。
ただ漠然と、絶対に近寄らない様にしようと、里の子供は皆、自然とそう思っていた。

この少女も、絶対に近付かないと決めていた。元来生真面目な性分であるし、こう言ってはなんだが結構恐がりなのだ。頼まれたって入ってやるもんか、とすら思っていた。

そんな少女が、何故こんな森に居るのだろうか。
何時からこの森に居たのかは解らない。
ただ、友達と一緒にこの森の近くに遊びに来ていたので、何かのはずみで迷い込んでしまったのだろうとは思う。
理由は多分それだろう。だが、理由が解ったとしても、それは今は何にもならない。

問題なのは、今少女がそんな危険な森に、一人で迷い込んでしまっ

ているという事だ。
妖怪に遭遇してしまえば、そこで終わりだ。
退治なんてとても出来ないし、逃げる事もままならないだろう。
この森に迷い込んでから、早く出ようとかなり歩き回ったのだ。疲労は結構溜まっていた。
今は歩いて移動するのがやっと。足が重く感じて、正直ちっとも走れる気がしない。
少女はただの人間の子供だ。生来の特別なもの等何もない。ただの普通の幼い少女でしかなかった。

だから、座り込んでいた。もう疲れたのだ。
ここに長く留まっているのは危険な事だと解ってはいるが、身体が動いてくれない。
それに、歩いたってこの森から出られる気がしない。今迄散々歩いたけれど、周りの景色は全然変わらない。
歩いても歩いても、見えるのは似たような木と地面だけの、似たような景色。
実は同じ場所をぐるぐる廻っているだけなのではないかという考えすら浮かんでくる。

だから、座り込んでいた。
自分は多分、ここで死んじゃうんだろうなと思いながら。
だって、この森には里の人間は誰も入ってこないから。入ってくるとしたら、物好きな妖怪ぐらい。
妖怪に見付かって食べられて死ぬのか、誰にも見つけられず何も食べられずに死ぬのかは、解らなかったけど。

この時少女には、休憩してまた出る方法を探すという考えは思い浮かばなかった。
疲れていたから。もう何もやる気が起きなかった。

精々出来る事と言えば、泣く事ぐらいか。
自分はここに居るという合図を送る事ぐらいしか、今の少女には出来なかった。
誰に、何に対して合図を送る事になるのかまでは、考えつかなかったけれど。
本能的に大声はまずいと思っているのか、小さなすすり泣きしか出なかったけど。

そうして既に諦めていた少女の傍で、何やら物音がした。
葉が揺れ、ぶつかり合って出る葉なりの音。それが、間違い無く少女の方に段々と近付いてくるのが解った。
少女は、どんどん大きくなるその音のする方向を黙って見つめる事しか出来なかった。
恐いのと疲れたので、身体が全然動いてくれない。こころなしか、ただでさえ小さかった泣き声が更に小さくなった気がする。

音がもうすぐそこまで近付いた時に、少女の耳に何かを叩くような、なんとも言えない音が聞こえてきた。
その音の出所はどこだろうと思って、その音の元を辿ってみると、どうやら身体に直接響いているようだった。
なんという事はない、緊張で自分の心臓の鼓動が大きく聞こえて来ているだけだ。
それでも、少女にとって初めてのその感覚は、先程まで麻痺していた恐怖を呼び起こした。
今近付いてくるのは妖怪で、見付かったら食べられてしまうかもしれない。
その事が、今更ながらに心の中を大きく締めはじめた。

恐い、恐くてたまらない。
自分には、なるべく見付からないように、身を更に小さく縮こまら

せる事ぐらいしかできない。
見付かりたくないのに、どうしてだか泣き声は一向に止められない。
どうしよう、どうしよう、どうしよう。

（……私、ここで死んじゃうのかな？）

そう考えると、尚更恐くなった。
さっきまで『ああ、死んじゃうのか』としか、現実感がいまいち持てない諦めしか浮かんでこなかったけど。
明確な死の予感が近付いてくる事で、実感が湧いてきてしまった。
……嫌だ。まだ死にたくない。生きていたい。
人として当たり前の感情を、少女は生まれて初めて強く抱いた。

しかし、それだけだった。
恐怖を自覚し、生きたいと自覚しても、それだけしかできなかった。
自分の心情を理解したところで、走れるだけの体力が戻る訳ではない。
気力は取り戻せたが、体が動かせないのでは意味が無い。
如何に強く願おうとも、力がなければどうにもできない。

それでも。
今の自分には、何もできないかもしれないけれど。
最後まで強く、生きようという意志だけは捨てないようにしよう。
さっきまでみたいに、諦めることは止めよう。
最後の最後まで、どんなことになっても、生きよう。
その思いだけは、絶対に捨てない。
自分には力は無いけれど、願う事くらいはできるから。

それは、少女ほどの年齢の人間が抱くには些か悲壮な決意だったけれど。
それが、今の少女にできる精一杯の事だった。

少女は決意を込めた瞳で、何かが近づいてくる、音がする方向を見詰めた。
決意を持ったと言っても、妖怪を見て泣かない自信はない。
多分泣いてしまうだろうとは思う。いや、絶対泣く。
それでも私にできる事は、これぐらいだから。

音は、とうとうすぐそこまで来てしまった。
少女は深呼吸をした。深く息を吸い、ゆっくりと吐く。
その後に、何時の間にか、自分の口から出ていたすすり泣きが止まっている事に気が付いた。
さっきまでずっと聞こえていた草を掻き分ける音も、ぴたりと止まっている事にも気が付いた。
泣き声も草の音も無くなり、少女の耳には自分の鼓動だけが響いていた。

……どうしたのだろうか。
泣き声が止まったのを不審げに思い、警戒しているのだろうか。
何を警戒しているのだろう。ここに居るのはただの幼子なのに。
そう考える事ができる程、少女の心に余裕はなかった。
自分の中の警戒心が、さっきよりも高くなった気がする。

その警戒心に従い、じっと動かしていなかった視点を右に逸らす。
次に左、次には元の位置に戻す。
近付いてきていた何かの姿を探すように、少女は視点を動かしていた。

「よう、お嬢ちゃん。こんな所に一人かい？」

「……っ！？」

不意打ちだった。

気配も警戒も、何もしていなかった自分の横からのいきなりの声。

驚きながらもその方向にとっさに体を向ける。声の主の姿を確認する為に。

「おおう、びっくりした。で、大丈夫か？怪我は無いか？」

少女の振り向く速度に多少驚いたのか、少しばかり目を丸くした真っ黒な大男が、そこに居た。

「……」

「…おーい？お嬢ちゃーん？」

反応がないことを不思議に思い、目の前で手をヒラヒラと振る真っ黒な大男。

その姿を見て、少女は更に驚いた。

当然ではある。

妖怪の住むと言われている、人の居ないはずの森の中に、真っ黒な

格好の大きな男が現れた。
黒い、大男。そう表現する他ない外見だった。
背丈は六尺はあるだろうか。しかし、がっしりとした体格ではない。
人間にしては随分と大きい。ここまで大きな人を、少女は生まれて初めて見る。
服装は真っ黒。着物も履き物も、何もかもが真っ黒だった。
真っ黒という形容詞が付くからには、当然髪の毛も真っ黒。
肌の色は普通だ。普通の人間と同じく、普通に肌色。
顔には少女を安心させる為か、優しい笑顔を浮かべている。

……ここで出会ったのが、もっと普通の格好をした普通の大人なら。
或いは、少女がもう少し大きかったなら。
特に何事もなく、助かったという想いを抱き、安堵する事だろう。

だが、暗くて怖い、化け物が出るという森の中に、一人迷い込んで恐慌状態にあった、いっそ幼いといってもいい少女。
その前に、いきなり現れた、見知らぬ大きな黒い男。
さて。……一体どうなるかは、想像に難くない。

「……っ……ぅ」

「……あれ？」

「……っ……う、うわぁぁあああああん！！！！！」

「何故！？え？な、何故！？」

当然、少女は先程よりも大声を出して泣き始めた。

元々あまり期待していなかったとはいえ、覚悟していたとはいえ、いざ目の前に大男、それも多分妖怪だろうと思われるモノが現れたら、恐い。
だからなのかどうなのかは少女にも解らなかったが、最後の足掻きと言わんばかりに大声で泣き散らした。

一方大変なのは男の方。
珍しく人間の気配がするなと思ったら、そこに居たのはまだ年端もいかない少女が一人。
迷い込んだのか。だったら助けようか。そう考えて、まずは安心させる為に笑顔、笑顔と。
優しく笑みを浮かべながら、純粋な善意で声をかけたら、泣かれてしまった。

…この男、根本的な子供の真理というものを理解していないらしい。
この時の子供の心理状況は、お化け屋敷で迷った子供とほぼ同じだ。
何か出てきたらそれは全部お化け。そう思い、考えている状況とほとんど変わらない。
というか、一緒である。実在していると確実に判明している状況な分、なおたちが悪い。

それに、自分の外見が見た人にどういう印象を与えるのかも解っていない様子。
全身真っ黒な六尺越えの大男。常人でもおそらく不審がる。
いくら顔や雰囲気が優しく見られがちだと言っても、不意打ちなら別だ。
恐い。子供ならまず間違い無くそう思う。大の大人でも、もしかしたらそう思うかもしれない。
少女が泣いたのは、男が妖怪だと思ったからではない。
妖怪か否かは、どうでもいいといってもいい。

ただ単純に恐いのだ。ひとりぼっちの時に、不安な所にやって来た、大きな黒い大男。
しかも不意打ちするように、いきなりに横から声をかけられたのだ。泣く。そりゃあ泣く。絶対泣く。少女じゃなくても泣く。誰でも解る事だろう。

しかし男は解っていなかった。
ええー!?とりあえず子供だから笑顔みせりゃ安心するんじゃないのか!?等と言いながら、泣き出した少女を前に慌てふためく男。
何故泣き出したのか、じっくり考えれば解りそうなものだが、生憎とそんな余裕はない。
今はどうにかしてこの少女を宥めなければ。その事で男の頭はいっぱいだった。

宥めようと近付けば更に泣かれ、一旦離れようとすれば泣きながら何故かこっちを捨て犬の様な目で見詰めてくる。
どうすればいいのか全く見当が付かず、どういう訳かも良く解らない。
少女を助けに来た筈の男は、今現在、最も少女を恐怖させる存在になってしまっていた。

どうしてこうなった。

男は頭を抱えて地面を転がりながら叫びだしたかった。割と切実に。

むかしばなし　1（後書き）

ラフ　は　こだし　に　する　こと　を　おぼえた　！！

短くてすいません。でも一度に纏めて投稿するより、少しずつ出した方が待たせなくて済むかな、と。
……はい、早く書けばいいですよね、済みません。

今回は予定を変更し、本編でも蛇足の続きでもなく、別の番外編です。

……色々とごめんね？今回の番外編は、終わったら今度纏めておくから、我慢してね？

むかしばなし　2（前書き）

結局。
かくなる上は恐怖で気絶させる、という覚悟で男は少女に近付き、近づいても気絶しなかったので、子供にしては逞しいな、と内心驚きつつ、頭をひたすら撫でながら、ひたすらに声をかけ続けて。
そんな男の言葉と態度に少しは安心したのか、少女は泣き止むと同時に眠りこけ。
まさか眠るとは思っていなかった男は再び悩み。
家に送り届けようにも解らないし、誰かに預けようにも人に見られる訳にはいかないし。
仕方がないので「……自分の家に連れて行くか」と呟き、眠る少女を抱きかかえて森の中を歩いていた。

これって犯罪になるのかな、と、つまらない疑問を抱きながら。

むかしばなし　2

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

少女が目を醒ますと、まず見えたものは天井だった。
正確には、天井と思われるものだった。
見た事のない天井。場所が、だけではなく、造りも、だ。
少女が知っている、木などで出来た天井ではないようだ。
白く、不思議な事につなぎ目などは見当たらない。一枚の何かで出来ているのだろうか。
自分は寝ている姿勢で、それでも視界に映っているということは、やはり天井なのだろうけど。

「……あれ…？」

そういえば、ここはどこなのだろうか。
自分は森の中に迷い込んで、そこで一人の大男に……

「おお、お嬢ちゃん。おはよう、元気か？どこか痛い所は？」

考えていると、金属音の後に甲高い音がして、その方向から声が掛けられた。
見ると、そこには真っ黒な大きな男の人が一人。

「……あ」

一瞬誰だか解らなかったが、すぐにその男が森で出会った男だと気付く。

部屋の色が白一色なので、尚更その黒い巨体が強調され、大きく見える。

けれど、怖くはなかった。不思議と怖いとは思えなかった。

自分を食べるつもりなら、気絶していた時に食べてしまえばいい。

今自分がこうして生きているという事は、少なくとも今すぐには食べられはしないのだろうと考えた事も理由ではある。

けれどそれよりも、男が安心させるような笑顔だったから。

男の顔にはとても人のいい笑顔が浮かんでいるから、不思議と安心出来るのだろうと、少女は思う。

森の中では緊張していて、男の体格と服装ばかりに目がいって、顔を見る事はなかった。

けれど落ち着いて見てみれば、なんともまあ……人のいい。

人畜無害そうな笑顔だ。よく見るまでもなく、お人好しの顔だった。

雰囲気まで綺麗だ。人間とはこんなにも澄んだ雰囲気を出せるのかと思ってしまうくらいに。

こうして冷静に見れば、この男を警戒する必要があったのか疑問に思うぐらいだ。

そして、あの時の自分を少し恥ずかしくも思う。

多分、この人は自分を助けに来てくれていたのだろう。

森の中に居た理由は解らないが、自分の泣き声を聞いて。

さっきの言葉からも、この人がここに自分を連れてきたのだと解る。

……なのに、自分は妖怪だと勘違いしてしまって、思いっきり泣いて。
駄目だ、恥ずかしい。…とりあえずは謝ろう。

「あの……ごめんなさい。助けにきてくれたのに、私、妖怪だと勘違いしちゃって……」

体を起こし、頭を下げながら謝罪する。
暫くしても、男の反応は無かった。
怒っているのだろうか、呆れているのだろうか。
不安に思い、頭を上げて男の顔を見てみると、彼はとても驚いているようだった。
…今の謝罪の言葉で何かおかしなところでもあったのだろうか？

「…あの、何かお気に障りました？」

「……いや、随分と礼儀正しいというか、聡明というか…聡明すぎるというか……」

「そーめい？」

「あ、そこは普通に解らないんだ」

状況判断がすばやいというか、幼い見た目に反してやたらと大人な対応だったので、最近の子供の成長の速さは恐ろしいな…！と、考えていたが。

意外と『聡明』の言葉の意味は知らないようだったので、どことなく安心する男。

そういった意味で良かった良かったと男は言うが、彼が何の事に対して安堵しているのかは少女にはよく解らなかった。
ただ、何か少し……釈然としない。

「……何がよかったんですか」

少女は少し拗ねたように、頬を膨らませながらそう言った。
男はその様子にますます笑顔になり、少女の頭を軽く撫でる。

「そんなにムスッとしなさんな。いや、見かけ通りの可愛い女の子で何よりってことだよ」

続けて「そのふくれっ面も可愛いが」と言われて、少女の頬に赤みが差す。

「か、可愛い……ですか」

「おう、可愛い可愛い。よく言われるんじゃないか？」

「…それは、まあ……」

親には何度も可愛いとは言われてきたし、近所の大人達にも言われたことはある。
ただ…こんな風に、名前も知らない大人の男の人に、頭を撫でられながら言われたのは初めてだった。
正直、照れくさい。

「ふむ……お嬢ちゃん、歳は幾つだ？」

「歳ですか？今年で１０になります」

「１０歳…だと？」

「…？ええ、そうですけど？」

少女の年齢を聞いた男は、かなり驚いた。
考えてみれば、この時代に学がある者など殆どいないのだ。
礼儀正しいが難しい言葉が解らない人間など、大勢いる。
だから少女の発言から、少し体の成長の遅い１５～６歳ぐらいだと考えていたのだが。
それが１０歳だったとは。
１０歳でこの状況を理解し、まずお礼ではなく謝罪が出るとは。
それにまだ甘いとは言え、言葉遣いもしっかりしている。到底１０歳とは思えなかった。
この歳でこれだけ人格が出来上がっているという事は、親が相当厳しいか、或いは家がお偉いさんか。
服装は質素なものなので、後者はないだろうが。
そこまで考えて、目の前の少女が不満げな顔をしている事に気付く。
どうやら少し考えすぎていたようだ。

苦笑し、少女の頭をもうひと撫ですると、少女はくすぐったそうに目を細める。

「すまん。お嬢ちゃんが思っていたより若くてな。驚いたんだ」

「……思ったよりって、何歳ぐらいだと考えてたんですか。私、そんなに老けて見えます？」

またもや拗ねたように聞いてくる少女に、男の笑みが深くなる。
判断に困るな、このお嬢ちゃん。大人びているのか年相応なのか、いまいち解らない。
いや、子供とはそんなものなのかも知れない。とても大人に見える事もあれば、とても幼く見える事もある。
それもまた、一つの子供らしさであるのだろう。

「いや、そうじゃないさ。お嬢ちゃんは頭が良いし、礼儀もそれなりだったからな。大人に見えたって事だよ」

「大人…ですか」

また機嫌を損ねてしまう前に、先程の言葉の補足をする。
大人と言われて嬉しそうにする姿は、やはり年相応の少女そのものだ。
最後に頭をもう一度撫でて、男は手を引っ込めた。
自分の頭から離れた感触が離れた事に寂しそうな顔をする少女は、やはり可愛らしかった。

「じゃあ、そろそろ話をしようか。お嬢ちゃんは、なんであんな所に？ここは危険だって、大人の人に言われなかったのかい？」

「…言われていましたけど、近くでお友だちと遊んでいたら、何時の間にか森の中にいて……」

「迷いこんだのか。お嬢ちゃんの他に、森の中に入った子は？」

「森の方に来たのは私だけでした。かくれんぼをしていたので」

「かくれんぼ、ね」

子供らしい遊びでなにより。

しかしその子供の遊びに、選んだ場所が大人でも恐れて近付かない森だとは。

なるほど、確かにこの森の方角なら、子供達は近付いてはこないだろうし、見つかる事はないだろう。

隠れるつもりが迷い込んでいたというのは、少し笑えないが。

少女の言葉が本当なら、この森には他に子供はいないのだろう。

ここに少女を運んで後、一応森の全域をざっと調べてみたが、異常は無かったし。

なら後は簡単だ。この少女をお友だちの所なり親の所なりに送り届ければいい。

もうじき日も暮れる。そろそろ戻らない少女を心配している頃だ。

ここに長く置いておく理由もない。もう体力はだいぶ回復しているようだし、たとえ疲れていたとしても自分が背負うなりなんなりし

て送ればいい。

「解った。じゃあ、そろそろ帰ろうか。お嬢ちゃん、家は森の近くの里かな？」

「え？…え、ええ。そうです」

「自分で歩けるか？」

「えっと……多分…」

自信なさげに言い、ベッドから起き上がり、床に立つ少女。
フラフラと体が揺れていて危なっかしい。今にも転んでしまいそうだ。
歩くのは無理か。そう考えていると、少女の体が大きく傾いた。

「…っと。歩くのは無理みたいだな。よし、前と後ろ、どっちがいい？」

「はぇ？……ま、前？」

「了解」

倒れそうになる少女を抱き留め、そのままおんぶかだっこかの選択を迫る。
質問の意味をよく解ってはいない少女だが、なんとなく前を選んだ。

もしかしたら、選んだ訳ではなく、質問の意味を込めておうむ返しに言っただけなのかもしれないが。
けれども男は、それが答えだと考えたのか、少女の腰に腕を回し、膝の下に腕を差し込んで、支えるように抱えた。
所謂、お姫様だっこと呼ばれる抱き方だった。

…この男、見た目に反して随分と愉快な性格をしているのかもしれない。
おそらく、最初からこうするつもりで問い掛けたのだろう。
わざと解りにくい聞き方をして、おうむ返しで聞き返してくるように。
その証拠に、男のお姫様だっこをする時の動きには、一切淀みがなかった。
少なくとも、今回初めてお姫様だっこをする動きではなかった。

ちなみにこの日本では横抱きとも言われる抱え方は、西欧諸国で新婚夫婦が新居に入る際に行われていた風習が元になっているとされている。
入り口から屋内までを新郎が新婦を抱えて運ぶという、特別な事はなにもしないものだが、花嫁が家の入り口でつまづく事が凶兆とされていた為に「いっそ転ばないように抱えればよくね?」的な発想で生まれた風習と所作である。

…もしもそういった意味合いを男が知った上でこの行為を行っているのならば、やはり愉快な性格であるという事は否定出来ない。
むしろ、自分はロリコンだと言っているようなものだった。

そういった『特殊な意味合い』を知らない少女は、ただいきなり抱えられた事に羞恥を感じて
顔を赤くする。

その様子に男は頬を緩ませながら、部屋を出ようと扉の方へ振り向く。

振り向いた瞬間、目を丸くしている女性と、目が合った。

「……あ」

「……え？」

「……これは…」

少女は別の人間が居る事に驚き、女性はどういう事か理解に苦しみ。
男は、色々な意味で驚き、汗を掻いていた。

「……久々に博麗の巫女の大仕事…だね」

「それはどういった意味合いなのでしょうかぁああ！？」

「無論、いたいけなょぅι〝ょに不埒な真似を行う変態討伐が近々行われるだろうという予言めいたお言葉さ」

「いたいけなょぅι〝ょって、言葉の意味が微妙に被っているからな！」

「ははは。そんな事は百も承知さ」

「それは皮肉か何かか？えぇ？」

「嫌だなぁ。勘繰りすぎだよ。特にそういう意味は込めてないよ。今回は」

「最後の一声があるから油断出来ないんだよ！」

頭上で繰り広げられる会話の応酬の意味が少女にはよく解らなかったが、いきなり現れた金色の髪の女性は、どうやら男と親しい間柄だという事が伺える。

（……『ょぅ　ι　ゞょ』って、なんだろ？）

文字上でしか表現出来ない発音で表される言葉に、少女は地味に興味を持った。

男に抱きかかえられる事に心地良さを覚える自分に、少し驚きながら。

むかしばなし　2（後書き）

クオリティ低くてごめんね！
ちなみに時代設定は現代から少なくとも１００年は昔です。

むかしばなし　3（前書き）

ょぅι゛ょを抱きかかえる大男の前に、パツキン女性が立ち塞がる。
彼女の目的とは何なのか？彼女は誰なのか？

そもそもこのお話って何なのか。次回に続く！

……いや、この後もちゃんとお話はあるよ？

むかしばなし　3

少女がょぅι゛ょという言葉に興味を持ち、それについて考え始めた頃。
少女を抱きかかえたまま言い合いをしていた男は、やっとあることに気付く。

こいつ、なんでここに居るんだ。

このふさけた笑みを浮かべる金髪の女性は、確か今日は『外』に用事があるとかで居なかったはず。
…だからそれを幸いと少女を家に連れ込んだ訳ではない。断じて違う。
ゆっくりと休ませる事ができるだろう場所のうち、最も近かったのがここだっただけであって。
そういうなんというか不埒な行為をする為に眠りこけた少女を連れ込んだ訳ではないのだ。
というか男はあまりそういう事に興味がないというか、必要がなかったのでそういう事は考えてもいなかったのだが。

それはともかく。
傍からこの状況を見た場合の男の立場の危うさは置いておくとして。
この金髪は、予定は決定という様な人種だ。
何があっても目標は達成するし、達成させようとする。
今回の目標は、『外での色々』。あっちの情勢だとかを観察し纏める為に、長い期間あっちに行く……為の下地作りやら準備の為、丸1日『外』に行ってくる、という予定だったはず。

昼前頃に出発したから、明日の昼ぐらいまでは戻ってこない筈なの

だが。性格的に。
やるべき事や、やらなければいけない事を早く終わらせても、予定の時間までやらなくてもいい事をやって時間を潰す様な奴だ。
そんな奴が、予定通りではない時間に戻って来た。
考えられる理由は？？？

「……何があった？」

緊急事態ってやつが起こった場合だ。それも、結構重大な。
そう考えた男は、今迄のふざけた様な表情を真剣な表情に直し、問い掛ける。

「何……ね。……まあ、簡潔に済ませようか」

その問いを受けた女性も、少女をちらりと見て、浮かべていた笑みを消し？？たりすることはなく。
その楽しそうな笑みのまま、男の質問に答えた。

「なにやら身内が幼児趣味者になりそうだと察知してね。君もかと思いつつ駆けつけたのさ」

「違えよ！ああ心配して損したわ！……ん？『君も』？」

どんな重大な問題が発生したのかと思えば、ただ女性が電波を受信しただけだった様子。
そして女性の言葉に男は疑問を持つ。『も』という事は、俺ではない誰かが、そういうおかしな趣味を持っているという事になるが……？

「いやなに。紫も子供に御執心でね。確か名は……ぱ、ぱちゅ……いや違うな。ぱ、ぱりっく……？」

「……パトリック？」

「そうそう、そういう発音だった。いや、西欧の名前は難しいね」

八雲紫が興味を持っているという子供の名前の発音に女性は手間取り、その発音しようとしていると思われる名前に心当たりがあった男は、女性より幾分しっかりとした発音でその名を発した。

男がその名前を知っていた理由は簡単だ。

「『妖怪博士』か……。そういや、もうそんな時期か…」

男は確かめるように呟く。
パトリック。フルネームは『パトリック・ラフカディオ・ハーン』。
記す必要はないとは思うが念の為彼について。
彼は後に日本を訪れ、有名な某大学に英語講師として勤め。
その傍らに本を書き、人々に『日本』を伝えようとした人物である。

その彼の、一部から呼ばれていた渾名が『妖怪博士』。日本の妖怪に造詣が深かった事が由来だ。

しかし。

「『妖怪博士』？随分と大層な称号だね。ただの赤子だよ？」

「あ、そっか」

女性の言うように、彼はまだ子供である。子供というより、赤ん坊だ。

後の、とは言ったものの、女性にとっては未来の話なので、そのことを女性が知るはずもない。

だから女性には、男が人違いをしている様にしか思えなかった。

名を聞いて呟いたという事は、同姓同名の誰かの事だとは思うが。

しかしそんな西欧人を女性は知らなかった。

このご時世、そんな渾名の人間など珍しいどころか垂涎ものなのだから、居たら耳に入ってくる筈。

という事は、だ。

「……また、『何時もの』かな？」

「…ん。まあ、『何時もの』だな」

溜息を吐きながら言う女性に、男は苦笑いを浮かべながら肯定する。
『何時もの』。それは当事者同士でしか伝わらない言葉ではあるが、二人にはしっかりと伝わっていた。
男には、時折先程の様なよく解らない発言や行動をする事が多々あるのだ。男が言うには『稀によくある』らしい。
理由は解らないが、男の特質上、何かしらの未来を知っていてあれこれしているのだろうとは思われているが、その理由を本人は語ろうとはしない。
どうやら八雲紫には話をしているらしいが、女性は聞いた事はなかった。
その事について、女性はちょっと…どころか大いに不平を感じている事は秘密だ。

自分は知らないのに他人が知っているという事への不平を感じて、女性の眉が寄せられる。
とは言っても、それは外見上では殆ど変化はなく、他人から見ると先程までと変わらない笑顔のままだった。
その事に男は気付いているのかいないのか、「気にしたら負けだ」と笑いながら言う。
何に負けるのかは男にもよく解ってはいなかったが、なんとなくそういうものだと思ったから言ったまでだ。その言葉に特に意味はなかった。
それを女性は「八雲紫は気にしなかった」という様な意味だと取ったらしく、頬を一瞬ピクリと痙攣させる。

なんというか、今日は気にくわない事が多い。
そう思った女性は、せめてこの会話を止めようと、何か話のネタになりそうなモノはないか頭の中と視界の中を探し始める。
そこで、目の前…のすぐ下、男の腕に抱えられたままの少女が目に入る。

正直な所、会話に夢中でこの少女の事を忘れていた。話題の起点は、この少女のはずだったのだが。
悪い癖だと思う。話がどんどんあらぬ方向に逸れていってしまう。元々どこから始まったのかが解らないくらいに、関係無い所へと飛び火させてしまう。
その原因の一端は、目の前の男にもあるとは思うが。

考えて、また話が逸れている事に気付く。
心の中で苦笑いし、女性は少女の事についての話をしようと思い、
「それはともかく、だ」
と前置きをしてから会話を再開させる事にした。

「話をしよう」

「あれは今から３６万……いや、１万４千年前だったか」

「……何を言っているのかな、君は？」

女性の言葉に反応し、すぐさま訳の解らない事を口走る男。
女性には意味の解らない言葉でしかなかったが、男と同じく女性の言葉と共に何故だかフィンガースナップの音が聞こえてきた人には解るだろう。

言葉の意味を男は説明するつもりはないらしく、笑みを浮かべるだけだった。

「まあいい。私にとってｈ…つい言っちゃうんだ☆」

「…もういいよ。それも『何時もの』だと判断させて貰うよ」

尚も意味不明な事を口走る男の態度に、女性は諦めたらしく溜息を吐く。

そして、先程からなにやら考え事をしているのか、自分の上で会話を繰り広げられているというのに全く反応がない少女の顔を覗き込む。

……うむ、可愛い。普通に、どころか普通以上に可愛い。充分イケる。

…イケるってなんだイケるって。何時からそんな趣味ができた。

今度は心で苦笑するどころではなく、頭を振ってその思考を振り払う。

その突然とも言える奇行に男が変な目で見つめてくる視線を感じたが、無視する。

「その少女、何時まで抱きかかえているつもりだい？話をするのだから降ろした方がいいと思うが。…まあ、君がそういう趣味があるというなら別だがね」

「んな趣味ねーよ。さっきも言ったが俺に幼児趣味はない！」

「何を言っているのかな？子供というそこそこの重みのあるものをその持ち方を継続させる事で筋力の増加を図る、自分の肉体に筋肉を無駄につける、または運動していないと気が済まないという趣味だか性格だかの話をしているつもりだったのだが」

「やかましいわ！」

言いながら、男は取り敢えず少女を降ろす事にした。
降ろそうと動かした腕の動きに、ようやく少女はびくりと反応する。
そして自分が男の腕の中から降ろされようとしているのだと気が付くと、なにやら寂しげな表情を浮かべる。
その表情は位置の関係で顔が見えない男には見えなかったが、女性はしっかりと見ていたし、気付いていた。

早いな。
何がとは言わないが、女性はそう思った。

思いつつ、まあいいかとも思い少女の様子を見守る事にした。
少女は降ろされると気付いた時から寂しげな表情をしていたが、実際に床に下ろされると、少女の様相は一変する。

「……っ」

「おっと？」

少女は息を呑み、全身の力が抜けていくような感覚を感じた。
ガクンと足がくずおれ、地面に座り込みそうになった所で男に再び抱き留められる。

「どうした嬢ちゃん？大丈夫か？…そりゃそうか。疲れてるんだしな」

「ち、違……」

そもそも男が少女を抱きかかえていたのは、少女が立つのも困難な程披露していたからで。
さほど時間が経ってないのに立てる訳はないかと男は考えたが、少女はそれを否定した。

自分がくずおれたのは疲れのせいではない。
立てない事については疲れのせいなのだろうが、全身の力が抜けたという事は違う原因だろうと思う。
その原因についても、少女は、そして女性もうっすらと勘付いていた。

男は少女を立たせるのではなくベッドに腰掛けさせようと移動する。
ベッドの前に立ち、少女をベッドに座らせ、手を放す。
男の腕が少女から離れたその瞬間に、少女は再び先程の全身から力が抜けていくような感覚に包まれた。
前のめりに倒れ込もうとする少女を、男は慌てて三度受け止める。
そうすると、少女は力が戻ってきたような、安心したように感じた。

「……おい、お嬢ちゃん？どうした？大丈夫か？」

「大丈夫ですけど…」

「……ふむ。そのまま少女の手を繋いだままでいたまえ」

男はどこか悪い所があるのに我慢していたのではないかと考えて少女に問い、少女はそれを否定する。
さきほどから一連の様子を見ていた女性は、男にそう言い、そのまま話を続ける事にした。

「そのままって……なんでだよ？」

「おそらく、気にあてられたのだろうよ」

「……ああ。そういえばそうか」

「……気、ですか…？」

女性の言葉に男は納得し、少女の手を握ったまま、少女の隣に腰掛ける。
少女は色々な意味で顔を赤くするが、女性の言葉に気になる所を見つけ、それを問う。

「そう、気だ。詳しい事は省くが、強い妖怪の前に立つと力が抜けるような、変な感覚を覚える事があるだろう？……っと、その歳ではまだ無いか」

妖怪に限らず、強大な力を持つ存在を普通の者が前にすると、先程の少女の様な状態になることがある。
その事を女性は言うが、少女の年齢からまだその様な経験をした事はないだろうと判断する。勿論、先程の事は外して。

少女は女性の話を聞いて、なんとなくだが内容を理解した。
だが、そう言う女性はその様な『妖怪』だとは思えなかった。
かといって、隣の男がそうだとも到底思えない。むしろ男と比べると女性の方が妖怪だと言われればまだ納得できるぐらいだ。

「いや、妖怪の様な悪い気にあてられる事もあるが、逆に度を超して清らか過ぎる気にあてられる事もあるのさ。人間は純粋すぎるのも苦手だからね」

「……？」

そう少女が考えている事に気が付いたのか、女性は少女の考えている事を訂正するように話す。
その話をいまいち少女が理解出来ないでいると、男が答え合わせの様に説明を補足する。

「あー……つまりは、だ。この女の人は、神様なんだよ」

「か、神様っ！？」

男の発言に、少女は飛び上がらんばかりに驚いた。
神様。実在するのだと周りからは言われていたが、今迄目にしたり、実感した事はなかったが。
まさかこんなところで、こんな形で出会うとは。
少女は神様が実在したことや、会合した場所と状況に驚きはしたが、

女性が神様だという事には驚きを覚え無かった。

あの、力が抜けていくような感覚を覚えた今、この女性が神様だと言われても驚きはしない。むしろ納得した。

あの感覚に包まれたとき、同時に何というか、形容するのが難しいが、なんとも言えない息苦しさも感じたような気がするのだ。

例えるなら、空気がなくなったような、強すぎる光を浴びたような。

そのなんともいえない圧力のようなものの正体が、清らか過ぎる気だと言われれば、なんとなくだが納得できた。

そもそも女性の見た目からして、普通の人間だとは思えなかったから。

金髪。おおよそ人間ではありえないだろう髪の色。

厳密にいえば金とは少し違う色だし、西欧ではむしろポピュラーな色なのだが、この地方では大抵の人間の髪の色は黒。

それ以外の色を持つ人など、少女は今まで見たことがなく、女性の髪には違和感を覚えていた。

だから、金髪の女性は人間ではなく神様だと言われれば、『なるほど』と特に疑問を持たずに理解できた。

しかし、女性については理解できたが、ならば男は一体何者なのだろう?という疑問を、少女は抱いた。

神様だという女性を前に色々な意味で平然としているし、何より男に触れていれば少女も気にあてられる事もなく平気だという事が不思議だった。

先程から述べている通り、男の見た目はとにかく真っ黒。

髪も目も服も見たことのない履き物も、全て真っ黒。肌は普通の肌色だが。

それと背が異様に高いくらいで、見た目に関しては『変』ではあるが、それ以上でも以下でもない。

雰囲気は、女性とは違い優しげで普通……いや、普通というより気配がない。

ないというよりも……感じられない？

清らか過ぎる訳でも邪悪な訳でもなく。

強いていうなら人間のような気配。

ような、という様に、人間だとは断定はできないが。善人そのものの雰囲気に、人間のような気配。

…こうして改めてじっくり考えてみると、男は充分不思議で訳の解らない存在だった。

それでも一切警戒心が働かないどころか、安心感すら覚えてしまう事も不思議だったが。

……うん。考えてみたがさっぱり解らない。

解らないことは素直に解らないと言って、周りの人に聞いてみるのが一番だよね。

そう思って、少女は周囲の中で比較的話し掛けやすいと思った男に、聞いてみることにした。

「ねえ、おじさん」

「お、おじさん！？」

「ぷっ！」

少女の言葉に男は驚き、女性は吹き出した。

おじさん。それが少女が男に抱いた印象だった。

男の外見は、おじさんと言うには少し若すぎたが、少女にとってはおじさんだ。

子供にとっては、相手の年齢が十代でも三十代でも、年上のおじさんおばさんでしかないのだ。

「お嬢ちゃん……おじさんはちょっと酷いんじゃないか…？」

「…？おじさんは、おじさんでしょ？」

「……あのな、お嬢ちゃん？」

「……違うの？」

「……いや。もういいよおじさんで。…よっしゃっ！こうなりゃ今度からおじさんと名乗ってやらぁ！」

「……？？」

「くっ……くくく……っ！」

訂正を求める男に、あくまで純粋な、子供ゆえの感性による結果なので気がつかない少女。

男はもう一度説明しようとするが、あくまで純粋な少女の上目遣い。
これがトドメになった。
男は諦めた。というか吹っ切れた。
これからの一人称は、俺の他におじさんというのも使っていこう。
と、心に決め、宣言する。
気分的には「もうどうにでもな～れ☆」であったが。

そんな男の内心など知るはずもなく、少女は男の様子に首を傾げ、
女性は二人のすれ違いっぷりに声を押し殺して笑った。

少女の態度と言葉遣いが早くも砕け始めてきたことは、少し笑えなかったが。

むかしばなし　3（後書き）

小出しにする時の目安は５０００文字程度。

皆様お久し振りです。

…さて、どうしましょう。

はやくもモチベーションが意地出来なくなってきました。

むかしばなし　４（前書き）

あらすじ

ロリにおっさんよばわりされたジジイは腹いせにこれからおっさんと高らかに名乗っていく事にしたとさ。めでたしめでたし。

むかしばなし　4

ふはははは と、どこぞの魔王のように高笑いをする男と、必至に声を押し殺し笑っている女性と、イマイチ状況が掴めていない少女という、何がなんだかよく解らない謎空間が出来上がってから1分後。

流石に我に返った男は溜息を吐きながらおじさんと言われた事に対して再び落胆し。

流石に落ち着いた女性は息を落ち着かせると同時に少女の男への懐き具合について黙考し始め。

少女は、笑ったかと思ったらいきなり黙り込む二人の姿に、状況の移り変わりの速さに、ついていけていなかった。自分の頭がおかしくなければ、さきほど女性が「話をしよう」と言って、二人は会話をしていたはず。

それが何故5分足らずで沈黙が訪れるのか。

普通会話というものは、ふっかけた側はいくつか会話の種を用意しておいて、会話を途切れさせないようにするものではないのか。

そうは思ったが自分がその事を女性に言っても更に状況がややこしくなるだけだし、女性は神様らしいのでなんだか話しかけづらかった。

なので。

「ねえ、おじさん。お話しするんじゃなかったの？」

「……え？ああ、そっか。うん、そうだね。……おじさんか…」

目下一番話しやすい男に問い掛ける事にする。

なにやら先程の焼き増しのように思える描写だが、先程と違う事は三つ。
一つは内容は勿論、男の反応が驚きから諦めに変わった事。
二つめは女性の反応。先程は笑っていたが、今度は心なしか頬を引き攣らせている…ように見える。心なしか。
そして三つめ。

（……あれ？私、何を聞こうとしていたんだっけ？）

少女が目的を忘れていた事である。
先程は男の正体について本人に問い掛けようとしていたのだが、今回は状況についていけずに呆然としてしまった時に、その事を忘れてしまったらしく。
自分は何かを聞こうとしていた事は覚えているが、何を聞こうとしていたのかまでは覚えていなかった。
何を忘れたのかを忘れたという、森のサンダースさんよりはマシだったが。

（あれ？そもそも私って、何か聞こうとしてたっけ？え？私って、さっきまで何考えてたっけ？え、あれ？あれえ？なんだっけ？）

訂正。
何かを忘れた事を忘れるどころか、もはや認知症一歩手前になってしまっていた。
サンダースさんの方が、幾分かマシだった。

少女が混乱している事に、おじさん発言に改めて傷付いている男は気付かずに、話を続けようと考え、早速話題を…と思ったのだが。

「……そういや、俺から話す事なんて何もないんだが」

ふと気付く。
話をしようと言ったのは、あくまで金髪女性であって。
自分には話すべき話題はないし、さっきの話だってしょっぱなから逸れたり中断したりで女性が何を話そうとしていたのかも、全く検討がつかないし。
…話が逸れたりした事には、少し責任を感じたり感じなかったりするけども。

それはともかくとして、話を提供する側の女性は、……うん、凄い形相をしているし。
少女は混乱しているし。…混乱？なんで混乱？
ふと横を見た時に、何故か少女は頭を抱えて混乱していた。
漫画的な表現を使うなら、目を回していた。理由は男には解らなかったが。

……それにしても、少女……。

（少女、少女。……そうだ）

その少女の様子を見ながら何やら考えていた男は、ふと話題についてひらめいた。

少女の名前、まだ聞いてなかったな。その事を思い出したのだ。
本来ならばあまり必要性を感じない行為だったので、名前は聞かず教えず、そのまま今日を忘れてくれる事を祈って、少女を家に送り届ける予定だったのだが。

（金髪女は、インパクト強すぎるよなぁ……）

自分の事は棚に上げて、今日はこの少女の心には多少なりとも残るんだろうなぁ気付いた。
金髪女性の事はなくとも、妖怪が住むという森に迷い込んで、そこで六尺を越える全身真っ黒な大男と遭遇するという出来事だけでも、少女にとっては普通に十分トラウマものであるという事には、ついぞ気付かなかったが。

多少心に残るならば、なるべく和やかな、忘れやすいように、普通の出会いの記憶を。
そう考え、出会いと言えば自己紹介。そういえば名前を知らないな、と思考が移り。

「なあお嬢ちゃん。お嬢ちゃんの名前はなんて言うのかな？」

「ふぇ？」

そういう訳だから、この質問については一切邪念がなかったという事を記す。
金髪女性は、「速くも唾をつけ始めたか…！」と地味に青筋を立て

ていたが、それは誤解だという事を理解しておいて欲しい。

とはいえ、その質問は男が頭の中で考えていた事であったから、当然脈絡もなく混乱している所に問いかけられた形になった少女は訳が解らずに、舌っ足らずな言葉を反射的に発してしまった。

しまった、と表すとどことなくマイナスな印象を受けるが、現実では何かしらの実害が出た、という様な事は決してなく、むしろその様子は男を和ませた。

強いて害があるとするならば、少女が発言を思い返し、幼子の様な事を口走ったという事に羞恥を覚えるぐらいか。

幸い、少女は問いかけられたと気付くと、男の発言を思い出し、そういえば名前を言って無かったなと思い出し、男の名前も聞いてないなと思い出し、自分の気が抜けた返事をした事は思い出せなかったようで。

「おじさん、人に名前を聞く時はまず自分からって、教わらなかった？」

「……」

「ぷふぅ！」

少女はとりあえず、常識だと思っている事を男に注意する事にした。

そうすれば当然、年端もいかぬ少女に説教されるいい歳した大男という、よくありがちな光景が出来上がる。

その光景に端から見ている形の女性は吹き出し、男は顔を引き攣らせる……という様な事はなく。

（そういえばそうだな、反省しよう）

と、素直に説教を受け入れていた。
男は案外、見た目通りの純朴な性格なのかもしれない。

「そっか。いやスマンかった。じゃあ俺から自己紹介をしようか。名前は……そうだな……」

反省した男は何故か自分の名前について暫し考えた後、小さく「これでいいか」と呟いた後に。

「森の妖精だ」

「……」

「……馬鹿か、君は」

「あれ？」

何を思ったか、明らかに嘘だと解る名前を口走った。
というより最早名前ですらなかった。ある意味では名称ではあるが、正しくないし、固有名詞ではないしで突っ込みどころが沢山あった。

少女は色々な意味で軽く呆然として言葉が出ず、女性は呆れて突っ

込みを入れる。
男は受けを狙ったのか、反応が辛辣な事に首を傾げた。
やはりこの男、いまいち人の心とか、所謂空気を読むことができない様だ。
純朴なのではなく、ただ鈍いだけなのかもしれない。

「君はあれだな。馬鹿だな。こんな小さな子供にそんな事を言えば……」

「森の妖精……うわぁ、妖精って始めて見た……！」

「信じちゃった!?」

「だから言っただろう？馬鹿か、と」

そして少女は思ったよりも少女だった。
男の妖精発言を何の疑いもなく信じ込み、始めて見る生き物に目を輝かせて感動している。
まさか信じるとは思っていなかった男は、自分の言葉を取り消そうとして、ふと気付く。

（……あれ？森の妖精って、あながち間違いでもなくね？）

無論アッー！な方の森の妖精的な意味ではなく。
自分を分類分けするとしたなら、妖怪と言うよりは妖精に近く、妖

精よりは神に近い微妙な存在だから、妖精でも間違ってはいない気もするし。
今現在自分は森に住んでいるし。『森に住む妖精らしきナニカ』、縮めて『森の妖精』、みたいな。

「馬鹿だな君は。全然違う。君は妖怪でも妖精でもないよ。それに妖怪という分類の中に妖精は含まれるから、妖怪と言うよりは妖精という表現には語弊がある」

いきなりの男の心を読んだとしか思えない女性の発言に、しかし男は驚かなかった。
もうなんだかなれっこなのだ、こういうのには。こいつはいつも俺の心の中を確実に読めているとしか思えない発言ばかりをかましてくるのだ。
時々、調子が悪いのか的外れな発言もする時もあるにはあるけれど。

「どーでもいいんだよんなこたぁ。あとお嬢ちゃん、俺が妖精って言うの、ありゃ嘘だ」

「えーっ!?嘘吐いたのおじさん!嘘は吐いちゃいけないんだよ!?」

「覚えておくと良いお嬢ちゃん。世の中はね、嘘で出来ているんだよ」

「それこそ嘘だぞお嬢ちゃん。世の中は素直な心で出来ているんだぜ」

「えっと……？」

一応補足しておくと、とても子供に言う言葉ではない事を言いやがったのは金髪女性であり、見た目には凄くらしいけれど中身的にはらしくない言葉を発したのは真っ黒男だ。
少女は立て続けに真逆の事を言われ、どちらを信じて良いのか解らなかったが。

「じゃあ、間を取って世の中は素直な心で支えられているけど、見た目には嘘が張り付いているっていうので良いかな？」

「……」

「……」

「……違った？」

「「お前（君）頭いいな」」

2つを纏めて、折衷案を出した。
その発言の中身は十歳の少女が言うものではなかったけれど、あながち間違いではないと、男性と女性は思った。
言われた事をそのまま2つに分けるのではなく、自分の解釈も交えて組み合わせる。
それは、この時代ではなかなか出来るような事では無い。
親の教育がしっかりしているか、少女が所謂『天才』なのか。多分、

後者なのだろう。

「そ、そうかな……」

「そうだ。その歳でこの世の心理を解っているなんて、中々いるもんじゃないぞ」

「いや、心理って……そういうものを理解して言ったのではないと思うが…」

「解ってるよ。流石にお嬢ちゃんでも？？？」

「心理っていうのはよく解らないけど、世の中は綺麗な事も汚い事も混じっているから楽しいっていう事は、知ってるよ？」

「頭がいいってレベルじゃねーぞ！」

「悟りを開いたような発言……！」

その言葉を発するには、十歳では少しばかり人生の重みが足りなかったが、ごく当たり前のように、当然だというように言い切る少女に、少しばかり戦慄する男と女性だった。

「よし、そんなお嬢ちゃんにご褒美と言っちゃあなんだが、俺の本当の名前を教えてやろう」

「えー」

「どうせなら食べ物がいいとでも言いたげだなお嬢ちゃん。素直でよろしい。後でお菓子をあげよう」

「わーい！」

「……餌付け…か」

その言動で、なんだか着々と少女との仲と、女性の誤解を深めていっている男だった。

そんな事には気付かず、無邪気に喜ぶ少女の頭を優しく撫でながら、男はこともなげに

「じゃあ、まずは俺の名前からだな。俺の名前はやたｎ？？？「？？？ッッッ馬鹿か君はッ！？」ふぐぉおおお！」

「っ！？」

あっさりと本当の名前を口に出そうとして、女性に怒鳴られながら、ベッドから蹴り落とされる。

真横に居た男が蹴り落とされるという光景に、少女は驚きを覚え、なんの前触れもなくいきなり怒鳴り声を上げ、男を蹴り倒した女性に、少し恐怖を覚えた。

「まさか本当に言うとは思ってもいなかったよ…！君は何度行ったらそれを止めるのかな！？」

「いいだろ別に。相手はただの女の子だ」

「それで何回利用されたと思っている！また海底を散歩したいのかな！」

「……そりゃ勘弁だ」

「なら、もう止めてくれ……」

「解った。俺が悪かった」

叫んだかと思えば俯いて肩を震わせる女性に、流石に気が咎められたのか男は素直に謝罪した。

傍から見ていた少女には、意味がよく解らない言葉がちらほらとあったが、どうやら男の本当の名前は、聞けそうにないという事は解り、ちょっとがっかりとしたけれど。

「ああ、そう気落ちしなさんな。本当の名前は訳あって言えないが、代わりに…と言ったらなんだが、秘密の名前を教えよう」

「……秘密の名前…？」

「そう、秘密の名前。俺とお嬢ちゃんだけしか知らない、特別な俺の名前だ。勿論、このお姉さんも知らない、な」

「秘密の名前……」

少女はその言葉を染みこませるように何度も呟き、次第に嬉しそうに笑う。
その様子に男は助かったと思いながらも、やはり子供だな、と再確認する。
こういう年頃かあるいはちょっと下ぐらいの子供は、やたらと『秘密の』とか『特別な』とか『〜だけしか』とか、そういった言葉が大好きだ。
だから少女の機嫌をなおす為に、碌に考えもせずにああいった事を言ったが、どうやらお気に召したようでなによりだ。

一方何時の間にか締め出される形になっていた女性は

（本気で落としにかかってるじゃないか……）

と、なかば呆れていた。
秘密のって。二人だけのって。なんだ、光源氏計画でも実行する気なのかこの男は、と、真面目に男の事を疑っていた。

「おじさん、その秘密の名前って、何か意味があるの？」

「意味…ねぇ……。そうだな、お嬢ちゃんが大きくなって、まだその言葉を覚えていたなら、大きな声で呼んでみろ。願い事を叶えてやろう」

「本当！？」

「ああ、本当だ。ただし、大きくなってからだぞ？」

「うん！大きくなったら、大声で呼ぶね！約束だよ！？」

「ああ、約束だ」

（間違いない、本気で落としにかかっている！）

笑顔の二人を眺める女性は、結構な危機感を覚えていた。

……男の発言は、落としにかかっているのではなく、少女に意味は？と聞かれてとっさに言い放っただけの言葉だという事を、知っておいて欲しい。

考えなしにそんな言葉が出るという事は、天然なのだろうが。

「……あ！名前！名前まだ聞いてないよおじさん！」

「ああ、そうだった。じゃあ、ちょっと耳を貸して」

大きくなったら願い事を叶えてくれるという事で喜んでいた少女だが、肝心の名前をまだ聞いていない事に気付く。

正直このまま忘れていればよかったのにと思わなくもない男だったが、一度言った事だ。本気で考えて、もしも本当に将来少女が覚えていて、大声で呼ぶような事があったら、自分のできる範囲でその願い事を叶えてあげよう。

そう決めて、名前を考える事にした。……とはいっても、即席で考える名前に大した意味は込められないが。それもいいか、と思い、結局2秒で考えたものを少女に伝える事にした。

名前に意味がある必要はない。その名前を覚えている事に意味があるのだから。
そう、殆ど開き直りといっていい乱暴な理由を心の中で付けて。
もう二度と会う事もないだろうと思っていた事も、理由の１つではあるけれど。

「八路谷顕正。それが俺と君との秘密だ」

「はじや、けんせい……？」

「そう、はじやけんせいだ。お嬢ちゃん、破邪顕正って言葉を知ってるか？」

「うん、私の好きな言葉の１つだから。……あ！ちょっと変えたらはじｙ「おっとお嬢ちゃん、大声で言っちゃいけないな。秘密を誰にも知られない事も、約束に入れようかな？」えー！？それ結構難しいよ！」

「当然だろ？願い事を叶えて貰うには、それ相応の努力が必要なんだから」

「……でも、願い事は、自分で叶えるものじゃないの？」

「ははは っ！そりゃそうだが、その為の約束だ。約束を守るように自分で頑張れば、願いが叶う。自分で叶えるのと同じだろ？」

「違うと思うなぁ…」

「気にするな、俺は気にしない」

「あはは！変なおじさん！」

「変なおじさんは酷いなぁ」

だから、まだ使っていない自分の名前リストから適当に選んだものを、少女に伝えた。

そこから何やら会話が続き、今となっては、あはは うふふと和やかに会話が進んでいく。

その様子に、女性は一層危機感を募らせる。

（普通短時間でこれ程までに馴染むかな……。本当に、これ将来が心配だな……）

色々な意味で。

ちなみに男と少女が割と親しくなったのは、少女の女性に対する恐怖心と、男へのある意味での信頼とが組み合わさった、いわば吊り橋効果によるものでもある。

例え少女の女性への恐怖心がなかろうと、男は少女と仲良くなりはしたであろうが。

少女を帰らせたら、教育しよう。この光景を見て、女性はそう決めた。

「じゃあお嬢ちゃん？お嬢ちゃんの名前を聞かせてくれ。俺の名前はさっき言っただろう？」

「あ、そっか。じゃあ、私の名前をおじさんにあげるね！」

「あげるって……物じゃねぇんだから…」

「……」

男は特に気にしていなかったが、女性は割と真剣に、かつてないほど危機感を覚えた。

名前をあげる、言い換えれば名前を預けるということは、とても重要な意味を持つ。

昔の中国に自分の名前を知られないように、普段は愛称で済ませて限られた人物にだけ本名を教えていたという文化があるぐらいだ。

名前を知るというのは様々な面で重要な意味を持つ。

だから男が本当の名前を少女に告げようとしたときは止めたのだ。

だがそれを少女は知ってか知らずか？？おそらく知らないのだとは思う？？、男に名前をあげると言った。

それは名前を教えてあげるという意味での言葉なのだろうが……待て。

少女は「おじさんに」と、言わなかったか……？

いや、少女に名前を教えたのは男だけだし、教えた名前に二人だけの、秘密の、という価値を付加してあったのだから、男にだけ名前を教えるというのは、まあ納得できる。

しかし少女は、本当に名前を相手に「あげる」という言葉の意味を、知らないのだろうか？

何しろ『破邪顕正』などという、あまり有名とは言い難い言葉を知っているぐらいだ。それにくらべれば名前の重要性の話は知ってい

る可能性は高い。

……考えるのを止めよう。

男は気付いていないようだし、少女も自分では解っていないのだろう。

ここは気付かぬふり、が一番だ。

そう、少女の男への好感度が、随分と高い値だという可能性などには、ついぞ気付かなかった。……そういう事にしておこう。

そうして女性は、沈んでいた精神を引き上げ、少女の声に耳を傾ける事にした。

…なに。少女は男にだけ名前をあげるつもりなのだろうが、物というのはすべからく盗まれる可能性があるものさ。という、言い訳じみた事を思いながら。

「忘れないでね？おじさんの名前は、私も忘れないから。だから、絶対に忘れないでね？」

「俺は忘れようとはしないよ。大丈夫だ、俺は約束は守るからな」

「本当に？」

「本当だ。じゃあもう1つ約束しよう。もしお嬢ちゃんが大きくなっても俺の名前を覚えていて、もし俺がお嬢ちゃんの名前を忘れていたら。その時はお嬢ちゃんに、願い事とは別にいいものをあげよう」

「いいもの？」

「敵のハリ……その時のお楽しみだよ。まあ、俺が忘れている訳ないから意味ないだろうけどな！お嬢ちゃんこそ忘れんなよ？」

「むうっ！私は絶対に忘れない！忘れてても思い出すもん！」

「それは反則…ではない、のか…？思い出せただけでも凄いか……」

しょうもない事を考える男に、女性は「いいから早く名前を聞き出せ」と声を大にして言いたかったが、盗み聞きしているという立場上、強く言い出す事はしなかった。
結局名前を言ってないと先に気付いた少女が、何故かおかしそうに笑う事によって、女性の願いは叶ったが。

「あはは。私の名前、まだ言ってないね」

「おおう、そういやそうだな」

「もう。おじさん、私の名前欲しくないの？」

「いらねえよ。名前は自分だけが持ってるもんだろ。大切にしろ」

「だからおじさんにあげるんだよ。おじさんなら、大切にしてくれそうだから」

「……わかったわかった。じゃあ、おじさんがお嬢ちゃんの名前、大切に覚えておいてやる」

「うんっ！じゃあ、しっかり覚えてね！私の名前は？？？」

「勿体振るなよお嬢ちゃん」

「もう！少しくらい格好つけたっていいでしょ！それとお嬢ちゃんじゃない！今から言う名前で呼んで！」

「はいはい。？？？で？」

「？？？慧音。上白沢慧音。それが私の名前だよ、おじさんっ！」

まるで太陽のように、綺麗で暖かで、眩しい笑顔で、少女は自らの名前を告げた。

その名を聞き、女性は「なんだか神獣に愛されそうな名前だな」と名字に関しての所感を抱き。

男は、少し困っていた。

（二度と合う事もないだろうとか思ってたが……前言撤回。何時かまた合いそうな気がする）

名前に、もの凄く聞き覚えがあったからだ。

気付かなかった。だって髪の色が普通に黒だったし。

この少女が上白沢慧音だと気付ける奴なんて、存在するのだろうか？

…言い訳はよそう。もう既に始まっちゃった事だ。……紫に人の事言えるの？とか言われそうだな…。

そう考えて、少し男はブルーになった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おまけ

「ところでおじょ…けいねちゃん？けいねって、漢字はどう書くんだ？経子？啓値？」

「ううん。そうじゃなくて、『智慧（ちえ）』の方の『慧』に、『おと』って書いて『けいね』」

「……難しい漢字知ってんなぁ」

やっぱり慧音は頭がよかった。

むかしばなし　４（後書き）

もう少しだけ続くんじゃよ。
あと一話、エピローグ的なもので番外編『むかしばなし』はお終いです。

なんという捏造設定。先生ファンにブチ殺されそう。

むかしばなし　5（前書き）

前回のおまけは全力でスルーの方向で！

むかしばなし　5

長く生きてきた者達の間には、いくつかの決まり事がある。
例えば、互いに争わないようにしたり、互いに関わりを持つ事を避けたり。
けれどその決まり事は、彼らが『楽しく生きる為に』決められたものであり、あくまでも暗黙の了解、口約束程度のものでしかない。
守らなかった場合の罰則が決められている訳ではないし、そもそも守る必要もない。
けれども彼らの多くは、大抵その決まり事を破らない。
破ってしまえば、『楽しみ』が無くなってしまうと知っているから。

そんな決まり事の中には、『未来への干渉禁止』というものがある。
なにやら小難しい気がするが、つまりは『黙って見てろ』というもの。
あるがままに、流れに逆らわずに生きていろ。余計な事はするな。
そういった意味合いを持った決まり事だ。

「これから先自分に危機が訪れるとしても、どんと構えて返り討て。討てなきゃそれまでハイさようなら。それもまた生きるということだ」

これがこの決まり事を発案した人物の言い分である。
普通ならば反論などの一つ二つは確実だが、その言い分は満場一致で認められた。
長く生きる者達にとって、なによりも大切なのは『どのように暇を潰すか』だ。
彼らの多くにとっては、退屈が最大の敵であり、大切なのは自分であり、それ以外は基本どうでもいい事なのだ。

自分が大切とはいったものの、どの程度大切に思っているかと言えば、少なくとも前述の刹那的とも言える提案を「いい暇潰しになりそうだ」という理由で即断即決できる程度にだが。

先程の男の「紫に人の事言えない」という発言は、この取り決めについてのもの。

将来妖怪に詳しくなる人物とはいえ、まだその段階ではない時期に接触する。

これを未来を知らない者は、ただの人間に接触したとしか思わないが、だからこそ不審がる。

『あの』八雲紫が、理由も無しにただの人間と接触などするのか？と。

接触する理由がなんであれ、『アレ』が自分の利益にならない行動をする筈がない。

利益の為、それはつまりは自分の未来の為なのでは？

そうなると決まり事を破った事になる。や、特に何もするつもりはないけど。

何もするつもりはないが、一応とは言え決まり事なのだから、守らないというのは少し快くない。

そんな風に、彼女に対して不満が募る可能性も無くはないのだ。

だからといって、彼女を心配している訳では無い。むしろ彼女以外を心配しているというか、周りの被害を心配しているというか。

長生きしているモノは例外なく巨大な力を持っている為、彼らが衝突すると甚大な被害が出るのだ。周りに。

だからその衝突の種になりかねない事態は極力なくしたいので、紫に今後そういった行動は控えるようにと、男は言うつもりだった。

けれども、自分も少女と？？それも一度限りではなく、何時か必ず再び会うであろう少女と接触した。

今は「また変な事を」で済むかもしれないが、将来どんな事態を巻き起こすか。
紫に文句を言えなくなったばかりか、むしろ隠蔽工作を依頼しなければならないかもしれない事態になってしまった。

「……そっか、慧音ちゃんか。……後で殴ろう」

「……ん？」

そんな気が重くなるというか気が遠くなるというか、厄介な事になったそもそもの原因である金髪女性？？例の『決まり事』を面白半分どころか面白全部で発案した人物？？を、男はとりえあず殴りたくなった。

「ところでお嬢ちゃん。もうそろそろ帰らなくていいのかな？君がここに迷い込んでから随分と時間が経っていると思うのだけど」

「……あ」

そんな男の心情など、未来の事など知りもしない女性は気付く筈もなく。
実に平然とした様子で、少女に帰宅を促した。

ここで話している時間はそう長くはないが、少女がここに迷い込んだ時からの時間は、正確には解らないがかなりの時間だ。
ここからでは、日の高さは解らないので今がどのくらいの時間帯な

のか解らないが、少女の体感としては、もう随分と長い事森の中にいたような気がする。

もしも今が夜で、未だに帰って来ない少女の事を心配した親や里の皆が探しに来たら。

嬉しいけれど、もしかしたらここに来るのかもしれない。

『妖怪が住む』という、この森に。

そう考え、少女の顔が青ざめる。

そうなってしまえば、みんな妖怪に食べられてしまう。

自分のせいで、みんなが死んでしまう。

頭が良く、少し大人びている所もある少女は、その可能性に思い当たってしまった。

「た、大変……！はやく帰らなくちゃ、みんなが妖怪に……！？」

「……妖怪？」

「だって、このままじゃみんな私を捜しにここに来ちゃうかもしれない！そうなったら、みんなここの妖怪に……」

少女の必死の説明を受けた女性は、それでも疑問顔だ。

まだ解ってくれないのかと、少女は更に言い募ろうとしたが。

「……お嬢ちゃん、『ここに妖怪が居る』って、誰に聞いた？」

「……え？」

突然の女性の言葉に、少女は「決まっている」と、返そうとした。
返そうとして、気付いた。

「……あれ？誰も、言ってない……？」

そうだ。
親も、子供も、里の人間の誰一人として、この森に『妖怪が居る』とは言っていない。
皆は『この森に近付いてはいけない』と言っていただけで、妖怪が居るから等という理由については誰も、何も言っていなかった。
少女がこの森に妖怪が居ると考えていたのは、里の皆の示し合わせた様なこの森に対する忌避と沈黙と、この森の尋常ではない静けさとが合わさって、『恐ろしい何か』を想像してしまったから。
つまるところ、『この森に妖怪が住んでいる』というのは、ただの少女の思い込みだったのだ。

「そっか……！よかった、私の思い込みだったんだ……」

何も知らなかった自分が、勝手にそう思い込んでいただけ。
それに気付いた少女は、安堵の溜息を吐く。

「ん？いや、妖怪は居るよ？ただ、そうか。お嬢ちゃんは誰にも言われずに、一人で気付いたのか……」

「……え」

しかし、その感情も、どこか感心した様子の女性に言葉によって吹き飛んだ。
発言の意味が、よく理解出来なかった。

「それって……」

「ああ。実は、この森は少し細工がしてあってね。誰も気付かないようにしていたのだが……」

「そうじゃなくて！妖怪が住んでるって本当！？それじゃあ、みんなが……！」

「大丈夫。心配はいらないよ」

妖怪に食べられちゃう。
少し訳の解らない事を話す女性に、少女はそう訴えようとすると。
女性は、ベッドに腰掛ける少女の目の前に立ち、安心させるように笑顔を浮かべ、頭を撫でようとしたのか手を伸ばしながら？？？

「誰も、君の事は探しに来ない。君は皆から？？？「おいッ！」」

？？？頭に手が置かれると思った次の瞬間には、男に抱き寄せられていた。

「……え？」

え……あれ？もしかして今、おじさんに抱きしめられてる……？
突然視界がふさがれた事、体全体が少し暖かみを感じている事、軽い圧迫感がある事。
それらから、多分今自分は、何故だか知らないけれど、おじさんの胸に抱かれてるのではないか。いや多分、絶対にそうだ。と考えて。
考えた瞬間、顔が真っ赤になっていくのが解った。

（え？でもなんで……？いや、それより今…、今私……！……
あ、あうあうあうあうあうあうあう……！）

『何故？』とか、『意外と心地良い』とか、『そんな、まだ早い！』とか、『あ。でも結構落ち着く』とか、『このままで…』等と、一部色々な意味で早すぎる事を考えたり考えなかったり、少女は激しく混乱していた。

混乱していて、抱き寄せられる直前の女性の言葉や、今現在繰り広げられている男と女性の会話の内容が、吹き飛び、頭に入ってこなかった。

そのまま少女はそんな風に延々と頭を沸騰させ続け。
その間に男と女性は会話を終わらせ。

少女がはっ、と我に返ると、男が自分の顔を覗き込んでいるのに気が付いた。

「……大丈夫か？」

「……あ、う……」

「……おい？」

「……ふにゃあ」

男の顔を間近で見る事になった少女は、色々と思い出して、情けない声を上げて、気絶した。

「おい、おい！？お嬢ちゃん！？……お前…」

「……その件に関しては、何もしていないと誓おう」

なにやら責める様な男の声と、女性の呆れ気味な声を聞きながら。

むかしばなし　5（後書き）

予定は未定（、・ω・´）キリッ

という訳で、前回から少し間が開いた事、キリが比較的いいことから、短いながらも今回のお話しを投稿しました。

パツキン、地味に本性が滲み出るの巻。

……多分、次で今回の番外編は終わります。…終わらせます。

むかしばなし　6

少女が目を覚ました時、最初に感じたのは暖かさだった。
暖かさ。人肌のぬくもり。つまりは人に、抱かれているのか背負われているのかは解らないが、人と密着しているのだろうという事に気付いた。

「……ん……？」

次いで、今現在自分の体は揺れているという事にも気が付いた。
人と密着し、なおかつ揺れているということは、歩いているんだろうなと、無垢な少女は考えた。
ちなみに少女の考えは正解で、何も少女が寝ている間に好き勝手にあんな事やこんな事をされていたというのが正解だ、という事は無い。

「……ここは……あれ？」

「ん？…おや、起きたかいお嬢ちゃん」

「……ひゃあぁあああああ！」

寝ぼけて零した言葉に、反応があった事で、少女は自分を抱えている人物を特定した。
返事をしたのは、男の声だった。

あの場には、男と言えばあの黒い大男しかいない。
自分が気を失う原因にもなった、あの男しか。
そうして、そう考えて、少女は遅まきながらに、男に抱えられているという事実に気付いた。

「な、なななななな……！」

「おーけー落ち着けお嬢ちゃん。まず今がどういう状況なのか説明しよう。お嬢ちゃんは今背負われていて、背負っている人物はお嬢ちゃんの家に向かっている。ここまではいいな？」

「……なんとかわかる」

抱えられているというのは、正確には背負われているという方が正確のようだが。
…なるほど、男の言葉通り現状は解った。現状しか解っていない。
なぜそんな事態になったのかが全く解らない。なぜよりによって『おんぶ』で運ぶのか。
いや、だからといって『だっこ』がいいという訳ではないけれど。
むしろおんぶは嬉しいけれど。いや今の嬉しいはそういう意味ではなくて…。
といった具合に、誰に向けてか解らない言い訳をしながら、少女は男の話の続きを待っていた。
できることなら、男の奇妙奇天烈な話を聞いて、今の自分の考えを吹き飛ばして欲しいと願いながら。

「で、その現状に到った訳なんだが……何、難しいことじゃない。

むしろ至極簡単だ。お嬢ちゃんが気を失っている間に、もう遅いから、お嬢ちゃんを家に帰そうという話が出てね。それで今に至る訳だ」

「……なんでおじさんが、背負っているの？」

「ん？何だい？金髪ねーちゃんの方が良かったかい？だがそれは出来ない相談だ。何故ならアレはまがりなりにも神様だからね。直接接触というのは正直いただけないし、お嬢ちゃんも怖がってた様だし、ね。だからこういう措置をとった訳さ」

「…ふぅん」

別に嫌な訳では無い、とは少女は言わなかった。単純に照れくさくて。

話を聞いていて、考えた事もある。

あの山吹色のかみの女性は神様だといい、確かに彼女は近寄りがたい、神聖すぎて、清らか過ぎて息が詰まるような雰囲気を持ってはいたけれど。

同時に、何故か自分に対して悪意を向けていた様な気がする。

悪意と言っても、そこまで猛烈に何かを感じた訳では無いが、神聖さとは別の『何か』を感じた事は事実だ。気のせいかも知れないけど。

気のせいかも知れないが、神様ともあろうものが、人に悪意を向けるというのはいかがなものだろうか。

あれって本当に神様なんだろうか。

そんな事をつらつら考えていた少女に、訝しんだのかどうなのかは解らないが、男が声をかけてきた。

「ふむ、その様子だと、アレが本当に神様なのか疑っているみたいだね」

「……なんで解ったの…？」

「頭の上でうんうん唸っていたら誰でも気付くさ。それも実物を見た後に神様だって言われても、納得出来ないだろうと言う事ぐらい解っているさ」

もしも両手が使えたならば、やれやれとでも言わんばかりのリアクションをしただろうと思うぐらいに、どこか呆れを含んだ言葉だった。
それに少しムッとしながらも、それをとやかくは言わなかった。まだ何か話す事がありそうな男の、話の続きが気になったからだ。

「だから、今からアレが神様だという事の証明…と言っちゃあなんだが、まあ、少しばかり話をしよう」

少女の気持ちを察したのか、男はそれ以上余計な事は言わずに話を続けた。
とは言っても、まだ前置きの部分をクドクドたれるだけだったけど。

「直接アレがどういうものかを話す前に、お嬢ちゃんは『神様』について、どんな知識を持っている？」

「え？……うーん、神様っていうのは、そこかしこに無数にいて、結構身近で、でもかなり遠い存在って事ぐらいかな？」

「…なるほど、存外正しい認識で何よりだ。正しすぎてびっくりするよ」

「あ、あと信じれば救われるって事もかな。？？？足下とか」

「……なるほど、正しい認識だ。できれば後もう１０年は先に知ってくれて欲しかったがね」

少女の達観したような認識に若干引きつつ、それなら話がはやいと男は続ける。

「そう、お嬢ちゃんの言う通り神様はそこらじゅうに居る。そこらじゅうに居るって事はいろんなものに宿っているという事で、それはつまり神様にはいろんな種類があるって事なんだが……ここまでは理解出来るかい？」

「できるよ？全然」

「……出来ないだろうと踏んで聞いたんだが。あれだね、君の頭の良さは正直引くね」

「失礼な。そういうおじさんの身長の高さも、正直引いたよ」

「ああ、それは解らんでもない」

自分の事だというのに、まるで他人の事のように同意する男の様子に、少女は少し毒気を抜かれた。
なんというか……掴み所のない、本当に目の前に居るのか妖しいような、そんな印象を受けた。

「さて、話を戻そう。神様にはいろんな種類がある。それはさっき言ったね？で、アレは所謂『つくもがみ』ってやつだ」

「『つくもがみ』？それって、物を大切に使い続ければ、１００年経つとそれに魂が宿るっていうあれ？…でもあれって、確か神様じゃなくて妖怪じゃなかったっけ？」

「良く知っているねお嬢ちゃん。そう、普通は『つくもがみ』は妖怪に分類される訳だけど、アレは少し特別でね。所謂御神体ってやつの『つくもがみ』なんだ。普通の『つくもがみ』は、物に霊とか、神様が宿って妖怪になるんだが、アレは何故だか『そのものが神様になっちゃって』ね」

「…神様になっちゃった？なんで？」

「さあね。理由は解らない。ただそうなったって事しか解ってない」

どこかしら皮肉気にそういった男の様子に違和感を覚えたが、それに追求することはなく、ただ少女は「ふぅん」と言うだけだった。

「で、それからは『つくもがみ』の前者の場合を『付喪神』と書い

て妖怪に分類して、後者の場合を『九十九神』と書いて神様に…って具合に、便宜上わけてるんだけど……理解は？」

「できてるよ」

「だろうと思ったよ。まあ元々神様だとか妖怪だとか、所詮ただの後付けでしかないから分類することが正しい事とは限らないんだけどね」

「…そうなの？」

「そうなんだ。例えるなら、バッタとセミを分けることと同じだね。確かにどちらも全く違うが、虫という観点では同じだ。妖怪と神様も、『人間ではない』という意味では同じなんだよ」

結構違うと思う。そう言おうとして、次いで出た男の言葉になるほど、と納得した。

確かに、妖怪も神様も、人間でない超常的な存在という事には変わりなく、同一と言える。

そうなれば、確かに『付喪神』と『九十九神』とを分けて考える必要も、あまり感じない。

元は同じ『物』で、少し違った形の存在。違いなんてないのかもしれない。

……もしかしたら、山吹色の女性の『妖怪はいる』という言葉の妖怪とは、神様だという彼女の事を指しているのかも。と、少女はそれってどうなの？と半ば呆れながら思った。

「とは言うものの、やっぱり妖怪と神様は別でね。まあ、その件に

関しては置いておくとしよう」

「……はい？」

「今話の中心はあくまでアレが神様だという事、であってね。今はそんな事を説明している訳ではないんだよ」

自分の言葉を自分で否定する物言いで少女を混乱させた挙げ句、説明をする気など全く無いという男の態度に、少女は流石にカチンときた。
きただけだったけど。

「今の君の顔は中々に面白いね。見せてあげようか？」

「……いい。それよりも、話の続き」

「おや、これは嫌われたかな？さて、話の続きだったね。そう、その『九十九神』のアレは？？？っと。残念ながら時間切れだ」

「え……？」

男の言葉に戸惑っていると、少女は地面に降ろされる。
そして今迄話に夢中で気が付かなかったが、自分達は今、森を抜けて、少女の家のある里のすぐそこまで来ていた。
時間切れ。それはつまり、男は移動中に少女を退屈させないように話をしていただけなのだという事だろう。
その事に、自分と話がしたかったから話をしたという訳ではない事

に、少女は不思議と残念だとは思わなかった。
純粋な好意ではあるけれど、求める好意の種類が違うというのは、かなりの落胆を覚える筈なのに。

そのことに特に疑問を覚えることもなく、ただ「ああ、終わりか」と、どこか諦めを含んだ感情を抱く少女の頭に、ぽんと手が置かれた。

……何故だろう。さっきはそれが、頭に置かれた手が。随分と優しく温かいと感じたのに。

「さあ、今日の事は忘れて帰りなさい」

今は、その手がとても冷たく感じて。その手が頭に触れているという事が、とても嫌だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「　ね　　い　　！　　ね！慧音！」

「……あれ？」

少女は、気が付いた。
気が付いた時には、自分は里に入ってすぐの所に立っていて、向こうから両親が呼びかけながら駆けてくるのが解った。

……気が付いた？気が付いたって、自分は、何かしていたのだろうか？
気絶していた？立ったまま？こんな所で？
そもそも私は、今迄どこで何をしていた？？？？
現状が整理出来ない少女の元に、走っていた両親が辿り着く。
辿り着くなり、二人とも少女を抱き締める。

「あなた、どこに行っての！？心配したのよ！」

「お友達からかくれんぼで見つからないと聞いて……遅くなっても帰って来ないから、もう少しで村のみんなで探しに行くところだったんだぞ？」

母は少し癇癪を起こしながら言うが、自分の体を強く抱き締める事に、かなり心配していたという事がありありと伝わってくる。
父はどこか冷静に、優しげに言うが、それでもやはり言動の端々から心配していた事が解る。
両親のその様子に、申し訳なく思いながらも覚えていない少女は何も言えずに？？？唐突に、かくれんぼしていたという事と、隠れた場所の近くに『森』があった事を思い出した。

「森に……音無の森に……」

「……入ったのか…」

「あれだけ入っちゃ駄目だって……いえ、何事もなかったのなら、それで……！」

少女の言葉に二人は一瞬呆然とし、それから少女を強く抱き締めた。しばらく抱き締めた後、二人は少女から離れ、肩を掴んで、少女の目を見る。

「いい？慧音。あの森にはね、妖怪が住んでいるの」

「昔あの森に何人かが採集に行ったが、誰一人として帰って来なかったという話が伝わっている。だから、あの森には絶対に入っちゃ駄目だ」

「妖怪……」

そうか。何故あの森に入ってはいけないのかと常々思っていたけれど、妖怪が住んでいるのか。

理由を今迄聞いた事は無かったけれど、それは自分がなまじ頭の良かったせいだろう。

言わなくても解る、と、両親は思っていたのかもしれない。

多分、それは事実だろう。現に、両親は今、何故理由を話さなかったのかと後悔しているみたいだし。

でも、悪いのは自分なのだ。

たまたま、気付かなかったとはいえ言いつけを破ったのは自分。

だから、両親が気に病む必要はない。

「……ごめんなさい。もうあそこには近付かない」

「…いいのよ、解ってくれればそれで。何もなかったんだから」

「ああ。…………けど、な。やっぱり言いつけを守らなかったのはいけない。だから？？？」

「…………ひっ」

……なにやら、父から不穏な気配を感じる。

心なしか、目から光線のようなものが出ているというか、全身が出ているというか。

正直言って、ものすごく怖い。喉から引き攣ったような声が出るくらいに怖い。

肩を掴んでいたのは母の筈だったのに、何時の間にか父が掴んでいるし。

さっきまでの空気はどこにいったんだろう。今はあの少し重苦しい空気が、少し恋しい。

…………お、おてやわらかにお願いします。

「？？？おしおきだ」

ゴチン！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「痛ぁあああああああ！」

がばっ！と、布団をはね除けて起き上がる。
頭突き…頭突きって。子供に対するお仕置きとしては正直どうなんだろうと？？？

「……夢…？」

そう。夢だ。昔の夢。
昔あった出来事を、夢に見たのだ。

「懐かしいな……そういえばそんな事もあったか」

あの後色々？？？そう、色々あって。
森に入って、それから出るまでの記憶がなくなった程度の事なんて、すぐに忘れて、吹き飛んでしまうような出来事が、色々あって。
今の今まで、夢を見るまで忘れていた。

「あれは、何年前の事だったか……」

自分がただの、普通の少女だった時だから……もう何百年かは昔。
そういえば、あの日がおしおきとして頭突きを貰った、初めての日

だっけ。

「そんな初めて嫌過ぎる……」

自分で言っておいてあれだが、頭突きを親から初めて貰った日というのは、全然嬉しくない。
おしおきはいい。まだいい。教育方法としては間違っていないと思う。繰り返さない為に痛みを与えるというのはまだ解る。
だが頭突きはないだろう頭突きは。せめて拳骨とか罰則とかそういう類にすべきだと思う。
頭というのは固く、それでいて案外脆い。砕けたらどうする。

「とはいえ、今となっては人の事を言えない訳だが……」

最も、そんな両親に対する文句も、言えなくなってしまったのだが。
……もう両親はいない事と、自分が子供に罰としてよく頭突きをしているという事実によって。
……今更ながら、なぜ両親は頭突きを選んだんだろうか。謎だ。
もしかしなくても、私が頭突きを選んだのは両親の影響だろう。まず間違いない。
……今度からは、少し自重しようと思わなくもない。
ただし九十九は別だ。あいつはああでもしないと懲りない。……ああしても全く懲りてないという現状に、頭が痛くなる。ちなみに頭突きのせいで痛くなったという訳では無い。

「はぁ……何で私は……」

あいつの事が好きなんだろうな。
そう考えて、恥ずかしくなった。

「～～～～っ！」

頭を抱える。顔が火照ってる。
好き。私は、あいつの事が好き。理由は解らない。だけど好き。
何時からなのかは解らない。けれど好き。どこが好きなのか解らない。なのに好き。
好き。好きなものは好き。好きだから好き。…だから好き？
好き、好き、好き。……大好き。

「……だいすき。　……～～～～～～～～っ！」

言って、もの凄く恥ずかしかった。
ああ、穴があったら入りたい！むしろ今からその穴を掘りたい！
なんだ、なんで今私は呟いた。乙女か！純情な乙女か！
頭を抱えてのたうち回る。恥ずかしい、自分の行動が恥ずかしい！

「？？？けど、大好きなんだ」

好きだと言ったり、表現する事は恥ずかしくてたまらない。
けれども、あいつの事が好き。それは、全然恥ずかしくはない。
……多分、それが答えなんだ。
何故好きなのか、何が好きなのか。動機も理由も、何も解っちゃいない。
だけど、あいつが好きだということに、恥ずかしい事はない。
恥ずべき事なんて、ない。
それでいいんだろう。
人を好きになるなんて、それだけでいいんだろう。
それだけあれば、充分。
それだけあれば、私は、胸を張っていける。

「……いや、待て」

あいつ。
真経津九十九。
私はあいつの事が好き。それに間違いはないだろうし、気恥ずかしくはあるが恥ずかしいことはない。
けれど。

「よくよく考えるまでもなく、あいつは変態だ」

変態って、恥ずべき事なんじゃないか？？？

「……おかしいな。恥ずかしい事のように思えてきたぞ…？」

なんだか馴染んでしまったけれど。
あいつが変態だという事は、ごく普通になってしまっているけれど。
それって、あいつが変態だってことは、世間的にはよくないことで。
そんなあいつを好きって事は、恥ずべき事なんじゃないか？

「……おかしいな。なんだか無性に頭突きたくなってきたぞ…？」

理由はない。
特に理由はないが、無性にあいつに頭突きを決めたい。
強いて理由を挙げるなら、あれだ。あいつがよく言っている「ムシャクシャして」という奴だ。

……今になって、両親の気持ちが少し解った気がする。
なぜあの時、父は頭突きを選んだのかが、解った気がする。
あまりに感情が高ぶると、何か無性に、頭突きがしたい衝動に駆られるのだ。
多分これは、遺伝的な何かだろうと思う。
今の自分がそうだったように、あの時の父も、無性に頭突きがしたかったに違いない。
心配していた子供が無事に帰ってきた。なるほど、それは感情が高ぶっても仕方無い。
……ああ、なるほど。確かにこれは抗い難い。つい、といって頭突きが出ても仕方無いと思えるぐらいの強い衝動だ。
……うん。我慢しすぎるのはいけないな。

「……よし、今日は九十九の家に行こう。？？？実に楽しみだ」

本当に、楽しみだ。

若干倒錯気味な感情を抱いて、男の家を目指す。

何故あの時記憶がなくなったのか、何故あの日の事を忘れていたのか、何故今になってあの日の事を思い出したのか、気付かないまま。

何もかも思い出せていないということに、気付かないまま、少女は家を出た。

むかしばなし　6（後書き）

一応、今回のお話しは終わりです。後味悪いな！

一応、裏側というか少女の気絶していた時のお話しもあるにはあるんですが……まあそれはまた後日。

……文才が欲しい。

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足2（前書き）

鬼が嫁で嫁が鬼で俺が畜生で変態が俺でよっぱらいで先代が認知を求めてきた。

……うん、最後はともかくだいたいあってる。……よな？

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足2

さて、頭を抱えているだけでは何も解決しない。解決を求めるならその理由を知らなければ。

と、言う訳でとりあえずは先代に話しかけてみよう。

「やあこんにちはご機嫌如何かな先代。ところで何故ここに出て来た。あと責任ってなんぞ」

「ここに居る理由は、昨夜上が騒がしかった事と、さっき鑑枷…だっけ？この子に呼ばれたから」

変わらずの満面の笑みで、隣に座っている鑑枷を指さし答える先代。っていうか鑑枷、どうして呼んできた。どうしてこいつの存在を知っていた。

面識ないよな？なら何故…ああ、面識無いなら尚更か。そしてどっか行ったと思ったら地下に行ってたのな。

地下にいったら誰だか知らないが女性がいた。そりゃあ連れ出すわな。

それよりも、まだ肝心の責任ってやつの説明を受けていないんだが……

「責任ってのはねぇ……私をこんな体にした責任よ」

「「ほぉう……」」「「「「なん…だと…？」」」」「なにそれうらやましい」

「……」

そう思っていたら、何やらあくどい笑顔を浮かべながらとんでもないことを抜かして下さりやがりました。

先代の言葉を受けての反応は人それぞれ。大体解ると思うが一応解説。

「ほぉう」なんて何かを納得したような声を上げ、空恐ろしい笑顔を受かべた二人は萃香と鑑枷。

どこぞの漫画のような驚き方をしたのは鬼の連中。

そして出来れば誰が言ったのかは解りたくない言葉を発したのは、顕冴だった。

ちなみに沈黙しているのは俺だ。あまりの出来事だったんで固まっちゃった。てへ。

……おーけー解った落ち着け諸君。話は最後まで聞こうじゃないか。

話の途中で判断するなんて、そんな落ち着きのない。ここは一つバーボンでもどうだろうか？

という訳で俺は黙って先代の説明の続きを聞く事にする。べ、別に図星って訳じゃないんだからねっ！本当なんだからっ！

「「その件、もっと詳しく聞こうじゃないか」」

「あら？…どこの誰だか知らないけれど、いいでしょう。語ってあげましょう」

おい、なんで自慢気なんだ。

「簡単に言うとね。今の私、あいつ無しじゃ生きていけないのよ」

「「ほほぉう……？」」

ズビシッ！っと俺を指さし、これまた誤解を招く物言いをする先代だった。

落ち着け諸君。誤解だ。それを証明する為にも、まずは状況をしっかりと把握しようじゃない……あれ？あながち誤解でもない…？

「あいつはね、私を無理矢理この家の地下室に連れ込んで、そこに閉じ込めてたのよ」

「「ほほぉーう…？」」

「「「なん…だと…？」」」

「監禁調教プレイか…胸が熱くなるな……」

落ち着け。誤解だ。

確かに俺は先代を地下室に閉じ込めた。だがそれは相手の同意があったからだ。

だってあの時、説得した時だって……あれ？おかし

いな、その時の記憶を思い出せないぞ…？
ま、まあとにかくだ！せ、説明を聞こうじゃないの…？

「閉じ込められてたから、食事はあいつが持ってきた物だけ。一番最初に出されたのは、なんだか白くてドロドロしたものだったわ」

「「……」」

「「「……な、…なんだと……っ！」」」」

「初日からせーいんとか……のっけから濃いな……ごくりっ」

あぁあああああぁぁあああああ！ややこしくなるからやめて！ちなみに白くてドロドロしたやつとはヨーグルトの事だ！栄養価高いし、食わせんのは別に構わんだろ！？邪心なんてねえんだしよ！……はい、ごめんなさい。嘘吐きました。
邪心ありまくりました。白いドロドロしたやつを食わせたかったんだ……。
「何コレ…にがっ…！」とか言わせたいが為に、甘くないやつ選びました…。
容器（平皿）だけ用意して、スプーンとか与えませんでした。ええ、犬食いさせたかったんです。
ええ、興奮しました。興奮しましたとも。美人さんが容器に入れられた白いものを犬食いで必死に食べたかと思うと、顔を顰めてどろりと口から吐き出したところなんか見ると…ね。

……悪いか！変態で悪いか！ええ、そりゃ俺は変態ですもの！？そんな事だってしますよ！

まあ先代は普通に器を持って、流し込みましたけどね！
だがそれでもエロかった。それだけでも充分エロかった。器が平皿なので、ヨーグルト流し込む時に若干零れるんだ。
襟元に白濁液を零して顔を顰める巫女さん……うん、エロかった。
ちなみに普通のご飯だってちゃんと出しました！誤解しないように！

「それは毎日出されたわ…。もう苦いのなんのって。最初は味がどうにも苦手で飲み込むのに苦労したけど、慣れると結構美味しく感じてきてね…」

「「……」」

「「「「ハァハァ……」」」」

「……ゴクリ」

おい、何興奮してんだ野郎ども。そりゃ食い物ですからね。食べられますよ。
幾ら何でも可哀想だったから、途中からヨーグルトに砂糖入れたりしたけどね。

あと沈黙が怖い。さっきから黙り込んでいる二人の沈黙が怖い…っ！

「運動もさせられたわね。嫌がる私に無理矢理。死ぬかと思ったわ…」

「「……」」

「「「「……」」」」

「う、うらやま……」

おい、なんで野郎どもは黙り込んでんだ。
ちなみに運動とは、文字通り運動である。ただし頭の。
いやぁ。勉強嫌いなんだよなぁ先代。もうね、やらないと飯抜きって言った時の必死さったらもう……！
可愛いなぁ。今思い出しても可愛い。若干涙目になるとかね。もうね、たまりません。

あ、ちなみに先代は二、三回熱出して寝込んだ。死にそうになったってのはそのせいだろう。

「それも慣れると気持ち良くなってきてね。もっともっとって、はしたなくも言っちゃったわ」

「「……」」

「「「「……うっ…」」」」

「ちょっとトイレ行ってくる」

おいィ？お前ら何て言ったの？
……聞こえてない。何か言ったの？俺の記憶には何もない！

先代はやれば出来る子。勉強だって慣れたらスラスラ解けるようになったし、数学とかもう問題を解くのが楽しそうで楽しそうで。
最初は嫌々始めていた筈なのに、終いには「終わったわよ！早く次を持ってきなさい！」とか言っちゃう始末ですよ。「もっともっと」ってのはそういう事。
……あれ？これって調教って言えなくもないような……。
勉強嫌いに無理矢理勉強させる事で勉強好きにさせた。飯抜きというある意味餌付けと言える手段も使って。……うん、これは立派な調きょ……いや、俺はただ勉強させてただけだ！調教じゃない！これは断じて調教ではない！

「日頃はそんな事を強要する癖に、時々全く地下に来ない事とかもあるのよ……。居ない方が楽なのに、何故か寂しいと思っちゃったりしてね……」

「「……」」

「「「「……ふぅ」」」」

「調教完了……いや…まだ、かな……」

いやだからお前らは人ん家でなにをやっているのかと。叩き出すぞテメエら。
それと顕冴、お前は何冷静に分析した気になってんだ。全然冷静になれてねえよ。

考えてもみろ。先代は地下室に篭もってるんだ。つまりは俺以外に

交流がない。
そりゃ俺がこなくなったら寂しくなるわな。人との交流ってのは、人格を形成する上で最も重要な要素の一つであり、生きるのに必要な事であるし。

あ、ちなみに放っておいたのは所用があったからです。泊まり込みとか。
誰にもばれないように地下に行くのって、結構大変なんだぜ？家には顕冴いたし。

「で、まあそんな感じで私は、そこの変態が居なければ生きていけなくなってしまったって訳よ」

「「……よし、九十九。正座だ」」

「「「「うらやまけしからん！実にうらやまけしからん！」」」」

「……いいなぁ。うらやましい…」

そういう訳もなにも、『地下にこもってる＝俺が飯を届けないと食い物がない』ってだけだがな！
さっきから黙って聞いてれば、好き勝手言ってくれるな！嘘は言ってないけど！
嘘は言ってない！間違ってもいない！でも違うんだよ！

あと顕冴、お前は後で俺とお話をしようか。

「……さて、そろそろ弁解させて貰おうか。まず第一に、先代は地下に監禁されていた。そこはある意味で間違ってない。だがそれは即ち俺が飯を持っていかないと食いっぱぐれて死んでしまうという事で、俺がいないと生きていけないってのはそういう事だ」

「「「「ちっ。なんだ」」」」

「ああ、そういう意味。……ちっ」

「……ふむ」

俺の弁解を聞いたら、鬼どもは舌打ちし、顕冴は納得した後舌打ち、鑑枷はなにやら考え込んだ。

……うん、ごめんね？もう解ってると思うけど、わざと話の途中で突っ込まなかったんだ。

だって面白そうだったし。皆の反応とか色々とな。

それと先程の説得では萃香は納得がいかなかったのか、俺に詰め寄ってくる。

「じゃあ、白くてドロドロしたやつってなんなのさ」

「ヨーグルトでござる。あまり美味しくないやつ」

「……運動って？」

「頭の運動、つまりは勉強だな」

「……もっともっと、は？」

「勉強好きになっちゃった、てへ。みたいな」

「……監禁？」

「そこは聞かないでおいてくれ。あながち間違いじゃない」

「というより、監禁そのものよね。もしくは軟禁」

「お前同意しただろうが。何言ってやがる」

「あの時はまさか地下に押しやられるとは思ってなかったのよ。精々人目に付かない所に行くのかと……」

「ああ、はいはいすいませんでした。説明不足でした」

「……ん？」

そういえば地下に閉じ込めるとか言ってなかったな。いや、失敗失敗。

ああ、もしかしてそれを根に持っててここで発散させた訳か？なら仕方無いな。

それと顕冴が何かに気が付いた様子。何に気が付いたのかは知らないけど。

「……ふむ、なにやら親近感が持てますね、あなたには」

「そいつは閉じ込められてた、もしくは閉じこもっていた仲間だからか、鑑枷」

「ええ、まあ。他にも理由はありますが」

その他の理由は、怖いから聞かないでおく。

……さっきから鬼どもが黙りっぱなしなのはまだいい。だが萃香が黙りっぱなしなのが怖いんだが。

ものっそい怖い。どのくらい怖いかっていうと、超怖い。

「……で、お前に聞きたい事があるんだけど」

「奇遇ね、私もよ」

かと思ったら、萃香は先代に問い掛けた。なんだ、今更聞きたい事？先代も萃香に聞きたい事があるらしい。

なんだ、一体。何を聞きたいんだ？心なしか二人とも真剣な表情だし。

二人は互いに真面目な顔で、互いを指さす。なんかもうちょっと指の位置を調整すればＥＴに……はい、不謹慎ですねスミマセン。

「「おたく、どちら様？」」

「今更ぁ！？」

「ああ、そう言えば名前を伺っていませんでしたね」

もっと早いたいみんぐで聞くべき事じゃないかそれ！
…こいつらなんで面識ないのかちょっと疑問に思ってたんだが、よくよく考えてみれば面識ないのは当たり前か。
最近まで鬼はどっか行っちゃってて、あまりにも目撃されない次期が長かったから人間には伝説の生き物と思われてたぐらいだし、萃香も確か最近になってここに戻って来たらしいし。よく知らないけど。鑑枷は言わずもがな。
つーわけで、先代と二人に面識はあろうはずもないのだ。先代も最近まで隠居してたし。
…隠居、で合ってるよな？

それと鑑枷はやっぱり若干天然入っているような気がする。名前聞いてないこと忘れるか？…俺も時々名前聞くの忘れる事あるけど。

「角があるし……もしかして鬼？うわ、鬼って実在したんだぁ～…」

「そんなにじろじろ見るモンじゃないと思うぞ。そしてその感想はそこの如何にも鬼！って感じの野郎どもの方を見て浮かべるのが正しい気がする」

「うっさいわね。ちっこくて可愛い存在が鬼って解った時の方が驚くでしょうよ」

「まあ、角が無ければただのちっこい可愛いロリでしかないからなぁ……」

「つるぺた言うな！」

「言ってねえよ」

体型の事を言われると癇癪を起こす可愛い萃香ちゃんだった。そしてどこぞの錬金術師みたいに言ってもない罵倒の声が聞こえてくるらしいロリ鬼だった。可愛いなぁ。

「そう言うお前は……巫女装束？って事はお前が先代の博麗の巫女ってやつか？」

「まあ、ね。そう呼ばれているらしいわね」

「らしい？…ああ、外聞は知らないか。それにお前がいなくなった時はお前が博麗の巫女だったんだろうし」

先代は暗にそう呼ばれた事はないと言い、当時は先代と呼ばれてなかったという事に気付き、納得する萃香。
巫女装束という言葉に疑問を覚えたのは、例の脇が露出し袴ではなくすかーとな巫女服のせいだろう。それにあんだーうぇあ着てるし。

「そっか…先代か。生きてたんだね。てっきり行方不明だと」

「行方は不明だったわよ。眩ませてたんですもの」

「何で行方を誰にも知らせなかった？」

「必要だったからよ。これ以上は答えるつもりは無いわ」

「ちっ。好き勝手だね」

あれ？なんでいきなりしりあすむーどなの？なんで萃香は睨んでるの？

先代もなんで重圧を出してるの？なんなのそのぷれっしゃー。怖いよ。

好き勝手…ね。もしそうだったとしたらどんなに普通の少女だったか……。

「まあ、いいさ。で？ここに居る理由は？」

「私がどこに居ようが関係ないでしょう？」

「おい、なんで喧嘩腰なんだ先代」

「「「……はぁ」」」

「おい、なんで三人揃って溜息を吐くんだ！？」

俺なにも悪くないよな！？どこもおかしくないよな！？

……さっきから顕冴と鬼どもが一言も喋らないんだが……あ、奥の方で飲んでる。

空気について行けなかったのかついていかなかったのか、俺の視界の奥の方、先代達の背後で酒を飲んでいた。少し会話を聞いてみよう。

「なあ、俺らやっぱ空気だよな」

「空気は空気らしく、隅っこで大人しくしてようぜ。……あ、嬢ちゃん一杯注いでくれ」

「私が酌をするのはお父さんだけだ。……というのもあれなので、はい」

「それでも酒瓶渡すだけで酌は無し…か」

「筋金入りのファザコンか……」

「やっぱあれだな、変態もげろ」

「そうそう、変態もげろ」

「そうだな、変態もげろ」

「やっぱし、変態もげろ」

「お父さんは一度くらいもげてもいいと思うんだ」

おい、なんで俺はもげろと口々に言われなければならんのだ。今回は最後の奴は変な事いわなかった事といい、お前ら俺に何の恨みが

あるの？

それと顕冴、やっぱり後でお話をしようか。

俺が顕冴達の会話に耳を傾けている間に、萃香と先代と鑑枷はなにやら意気投合したのか話込んでいた。俺をなちゅらるにするーですかそうですか。

いや、いきなり黙り込んだ俺も悪いとは思うけどさ。話しかけもしないで無視っていうのはどうなのさ。泣くよ俺？泣いちゃうよ俺？

「にしても、博麗の巫女の巫女装束って、なんで脇が開いてるんだい？」

「脇が開いているっていうよりは、袖を外して別途取り付けている って言った方が正確ね。袖がない方が関節部が動かしやすいから。外したの袖を態々つけなおしたのは変態のせい」

「九十九の？」

「いわく『なんか袖がないとえろいな…』とか」

「「ああ……」」

「そんな目で見るなよ興奮するだろ」

言ったけども。

確かに言ったけども。何納得しているのかなそこの二人。何に納得したのかな二人は。

だけど袖をつけている方がむしろえろすを感じるのは俺だけじゃない筈。絶対領域と同じ原理だな。興奮します。

「で、そのアンダーウェアはどうしたんだい？あからさまに時代錯誤じゃないか」

「あんだーうぇあ？…ああ、この伸びる変な服の事ね。変態に貰った」

「「……なん…だと…？詳しく」」

「少しは周りの目を気にしろ、とか何とか言ってきて渡された」

「「ふぅん……」」

「おい、なんだその目は。俺は今回の件に関しては悪くないだろ！？」

ちらっちら見えたんだよだいだらぼっちさんが！
脇開いてるっていうかそれに加えて肩から腰まで開いてるから見えるんだよ横から！
この件に関しては俺は悪くねぇ！そうだろ、兄弟！？

…余計な事はするな、だって？いいじゃないかあんだーうぇあ！
ぴっちぴちやで？ぼでぃらいんがくっきりするんやで？なのに大事な所は見えないんやで？
えろいじゃないか！見えるより見えない方がえろすを感じるじゃな

いか！そうだろう兄弟！

あとあんだーうぇあは消耗品なので一着目は俺が直接、二着目以降は香霖に渡して解析させ、作らせています。そしてそれを先代が買うというしすてむだ。…嘘だ。

先代は買いに行ってない。俺が香霖から受け取って渡していた。理由は知らん。先代が取りに行こうとしなかったんだ。

ちなみに香霖に渡したのは先代に渡した一着目とは別の新品なので、勘違いしないように。

……え？じゃあ一着目はどうしたのかって？……は、はははは！消耗品だから擦り切れて捨てられたに決まってるだろう！？

何を言ってるんだ、そんなの当たり前じゃないかははははは。

……断じて！断じて俺は持っていない！持っていたとしても使っていない！何事にも使っていないぞ俺は！

「……ふふん」

「「…っ！」」

何かに気が付き、勝ち誇るように胸を張り鼻で笑う先代に、何やら悔しがる萃香と鑑枷。

さっきからなんなんだ？何に勝ち負けがあるんだ？胸？それなら萃香はともかく鑑枷なら……あ、先代のが大きいな。

ちなみに目算だ。文字通り目で見て判断した結果だ。それ以上でもそれ以下でもない。

「九十九、今から人里に行きましょう！それときちんとお金は持って下さい！」

「……私は…っ……あ。

……私はいいや。正妻だし」

「っ！」

鑑柵はいきなり出掛けようと言いだし、さっきと違い今度は萃香が勝ち誇ったように笑い、先代が悔しげに顔を歪める。

いやだから状況が把握できない。何？なんの勝負なの？

何がしたいのお前ら。それと萃香、「一つ追加」ってボソッと言ったの聞こえたんだが、どういう意味だよ。何が何に追加されたんだよ。

でもなんか怖いので追求はしない。っていうか追求できる空気じゃない。

だってもの凄く刺々しい圧力が発せられてるもの。二人から凄いでてるもの！

ちなみに鑑柵は落ち込んでいる。「私とした事が……死のう」とか言ってる。なんでだろう。

俺を財布代わりにしようとした事だろうか。それぐらいもうどうってことないんだがな。それ以上の迷惑を多々掛けられてきた訳だし。

財布ぐらいで済むのなら喜んで差し出そうじゃないか。

「ふふん。まあ、人間程度が手を出そうとするのが間違いだったん

だ。潔く諦めなよ」

「……手を出したのは向こうだけどね」

「おぉい!?何を言ってやがりますか先代!」

ぼうっとしてたらなんかこっちに火の手が及んできた。
俺は手なんか出してないですよ!?ホントだよ!?
…いや、そりゃあまあ、変態だから胸を触った事ぐらいはありますけど?
ごめん嘘。触ったんじゃなくて揉んだ。その後殴り殺されたけど。
だが後悔はない!むしろ殴られた事も含めて御褒美だ!…嘘だ、当時はただ痛かっただけだ!

「そう、揉んだだけだよ!例えそれが手を出したという言葉に抵触したとしても、それ以上の行為はやってないよ!……記憶の確認できる範囲の限りでは」

「最後のやたらと不安になる言葉は何!?」

「……自分で言っておいてアレだけど、貞操が本当に無事なのか不安になってきたわ……」

「元人妻だから、無事ではないよな。子供もいるし」

「正直な話、あの娘本当に私がお腹を痛めて生んだ娘って実感あまりないのよねー」

「凄く深刻な事サラッと言わないでくれますか！？」

「記憶ないしねー」

けらけらと何がおかしいのか笑いながら先代は言うが、普通そこは笑うとこではないと思います！相変わらず突き抜けたトンでも巫女さんですね！

…ふむ、そうか。博麗霊夢の父、つまりは先代の夫だった人物に関する記憶がないという事は、当然チョメチョメな事をしたという記憶もなく、もしかしたら出産時の記憶もないかもしれないという可能性もある訳だな。

というか、先代の話を聞く限りその通りらしいし。もしかしたら俺達が勝手に『博麗霊夢は先代博麗の巫女の実子』と思っているだけで、本当は『養子』なのかもしれないしな。

『博麗の巫女』って、霊験あらたかな女であれば基本誰でもなれる可能性はあるらしいし。

ちょっとした事情で子供がつくれない巫女が、里の子供を養子にして巫女としたって前例もあるし。

ちなみに子供がつくれないちょっとした事情というのは、あまりにも強すぎて里中の男達から恐れられて、結婚できませんでした、テヘペロ☆みたいな事情である。

というより、ぶっちゃけ先代と言った方が解りやすいか。

男達が、恋愛の対象として見てくれないのだ。ああ、可哀想な過去の巫女達……。

ちなみに俺は、そんな巫女達の話し相手兼相談相手兼練習相手、みたいな事もやった事もある、という事実を、ここに記しておく。

加えて言うと練習相手というのは、男と話した事すらない生娘どもが里の男と交際できるように、ある程度免疫をつけておくという健

全極まりない建前のもと行なわれたものであり、あくまで生命の営み的なものは粘膜接触すらしていないということも、ここに記す。

そう言う訳で。

なにぶん誰にも記憶がない事と、前例がある事という二つの点で、俺の中で『博麗霊夢養子説』が成立しかけてしまっていた。

正確には、俺と先代の間で、成立しかかってしまっていた。

「まあ、嘘だけど」

「嘘かよ!?」

前言撤回。『博麗霊夢養子説』は母親当人の証言により消えました。

……博麗霊夢、俺が許す。こいつ殴って良いぞ。

駄目だ、どっと疲れた。なんか一気に疲れた。

先代があまりにあんまりで疲れた。俺もうついてけねえ。

…本音を言うと、こいつらの傍で話に加わっている事に嫌な悪寒しかしないから逃げる理由を作りたいだけなんだけどね!

疲れたとかもうこの際なんでもいいから、こいつらの話の輪から逃げ出す方法はないのか!?

俺は一縷の望みをかけて、さっきから酒を瓶ごとかっ喰らっている愛娘にあいこんたくと……ていうか酒瓶で一気!?それ結構度が強いヤツだぞ大丈夫かお前!?

女子がそんな飲み方で絵的にも大丈夫か!?

そんな俺の驚きには気付かず視線にのみ気付いたらしい娘は、こち

らに振り返るなり

「あ。そうだお父さん、後始末しようか？」

「……後始末？何のだ？」

「何って…決まってるじゃない。ナニをした後の後始末といえば、勿論お掃除ｆ？？？」

「ふん！」

速攻で口を閉じました。

なにやら乙女の口から出るようなものではない、オッサン臭い発言が出る予感がしたので塞ぎました。

口を塞ぐと言っても、萃香の時とは違って殴り飛ばして口が利けないようにして、だがな！

……とっさの事とはいえ、幾ら何でも殴り飛ばすってのは、我ながらどうなんだろうか。

流石にキスで、よりはマシだろうが、殴ってってのは、如何なものだろうか。

殴ってしまった娘の様態を少し気にしつつ、倒れ込んだ娘を見守る事にする。

……いや、別に虐めるつもりはないよ？ただなんとなく放っておきたい衝動に駆られたんだ。

「ふ、ふふふふふ……お父さんの鉄拳制裁……クセになりそ

う……」

「やっぱもう少し強く殴っておくべきだったか！？」

放っておいて正解でしたね！

ゆっくりと立ち上がりながらそう呟く娘の様子に、俺はそう思わざるを得なかった。

殴った事は悪いとは思っているが、それ以上に娘の様態が気持ち悪い…！

あれだ、前々から思っていたが顕冴の愛情表現がいきすぎていてちょっと気持ち悪い！

もうこれ違うだろ色々と！って思う事が多々あるもの！なんだ、どうしてこうなった！？

……よろしい、ならばＯＨＡＮＡＳＨＩだ。勿論高町式でな！

「よし顕冴、少し裏に行こうか。大丈夫だ、悪いようにはしない」

「これは……桃色展開の予感！…とか言いたい所だけど、どう見てもマジもんのＳＥＫＫＹＯです。本当にありがとうございました！」

なにやら喚く娘の襟首引っ掴んで、逃げるように裏手へ。

逃げるように、じゃないな。まさしく逃げる為に、だな。

正直ね、怖いんだよ。あの三人超怖いんだよ。

今は話に熱中して俺が離脱した事に気が付いていないが、何時気付かれるか解らない。

とりあえずの時間稼ぎとして、目に入らない場所に移って対策を立

てねば。
……対策も何も、なんであんなにそこそこ険悪なふいんき（何故か変換できない）になったのかが解らないのでどうしようもないといえばないのだが、逃げなきゃどうなるか解ったモンではないので、とりあえず逃げる。
ありがとう、お馬鹿な愛娘よ。俺が絞られるときはお前も一緒だぜ？

「……なーんか、寒気がしたんだけど…？」

「ははは。……」

「笑った後に黙り込むのやめて！？怖いよ、超怖い！」

言葉は軽くするーして、そろそろ～っと気配を殺して玄関へ。
いやね、別に気配殺す必要なんてないんだけどね？怖いじゃん？
万が一を考えると、ばれる可能性とかばれるまでの時間とか、なるべく低く、遅くしておきたいのよ。
……三人が三人とも、気配なんて探らなくても暗闇の中で的確に対象を破壊出来る程の化け物なのが、一番の問題点ではあるのだが。

そんな感じで恐怖にビクビク震えつつ、玄関の扉をそろーっと開けると。

「やあ。元気かい？」

「……」

ピシャン。
反射的に扉を閉めた。
……誰だ今の。

「誰だ今の金髪」

「え？金髪美女が来たの？！」

「お前はなんで微妙に嬉しそうなんだ」

「だって、金髪っていったら大抵おっぱいぷるんぷるんじゃん！」

「それは擬音であって胸部の大きさを表すものではないと思うんだが」

「マジな話、欧米のロリって可愛いんだよね」

「もしもし、おまわりさんですか？コイツです」

おっぱいが好きなのかロリが好きなのか、イマイチはっきりしない娘だった。
いや、どちらともどちらにしろはっきりと好きだと言われると反応に困るんだが。
それにしても、こいつ酔ったら途端にオッサンくさくなるな。体臭的な意味ではなくて、性格や言動的な意味で。
何というか……ウザい。正直てんしょんがウザい。
ざ・酔っぱらいとでも言うのだろうかコレは。真面目な話、面倒臭

くすらある。
……面倒、という単語で思い出してしまった。
玄関の前に立ってた金髪、あれ誰だよ。
俺は知らないぞあんなヤツ。でも何故か向こうはにこやかに挨拶してきたな。
顕冴の知り合いなのだろうか？いや、だったらその知り合いが誰とも知れない野郎に襟首引っ掴まれてたら、挨拶はしないだろう。
というか、あいつは俺に向かって挨拶をしてきていたような気がする。
だったらやっぱり俺絡みなのだろうが……まったく覚えが無い。
覚えが無い俺絡みの出来事というのは良くある事だが、大半が…というよりその全てが面倒な出来事だった。……正直鬱になりそう。

さてさて。現実逃避はここまでにして。そろそろ扉の向こうの現実と向き合わなければ。
扉を開いて現実と向き合うか、現実逃避して3匹の鬼（あながち間違いでは無いと思う）に喰われるか。……前者の方が圧倒的に楽な気がする。少なくとも今現在は。
ちなみにコレは楽だからそちらを選ぶという、所謂逃げではないと、一応言っておく。
いやまあ、現状そのものが逃げているという事には変わりないが。

「？？？な訳で、１３歳以上をティーンズ、それ以下を幼女と表した方が正しいと思うんだよ。故に私は１０歳から１２歳をティーンズとは呼ばない。ＯＫ？」

「別にどうでもいいって意味でＯＫだが、お前はフサさんと仲良くできそうな気がするな」

気が付いたら娘がなにやら語っていた様だ。それもおそらく気持ち悪い事を。

つーかそれなら１０歳から１２歳の男子はどうなるのかと小一時間問い詰め…たくはないな。もうこの件に関しては突っ込むのは止めよう。

「ちなみに１０歳～１２歳の男子に関してはティーンでもいいっていうかぶっちゃけどーでもいいって言うか。私、お父さん以外の男に興味ないし。究極的にはオスガキでもいいと思うんだよね」

「聞いてもいないのに聞きたくなかったクソありがたい事をどうもありがとうございました！ちなみに来ている金髪はロリではない！」

「え？じゃあボインのねーちゃんだったの！？」

「お前の金髪欧米人の認識ではロリかぐらまらすのどちらかしかいないのか。……ふむ、残念ながらそこまで大きくは無かったな」

「ふーん。ま、どーでもいいんだけど」

「胸に差程興味がなくてやたらと女子に煩いって事は、つまりはそういう事だっていう認識でいいんでしょーか！？」

「違うね、間違っているよ！私が興味あるのはロリでもボインでもつるぺたでもない、お父さんただ一人！」

「ようしさっさとＯＨＡＮＡＳＨＩだ！徹底的にその根性叩き直してやる！」

「そんな……いやらしい！」

「お前にさっきの言葉はどう聞こえたのかが激しく気になるんだけど！」

そしてまんざらでもなさそうなその態度も気になるんですけど！

あんまりな娘の性癖に辟易していると、背後で扉が開く。

「さっきから失礼だな君達は。……とりあえず、つるぺたではないと言わせて貰おう」

振り向こうとする前に額を掴まれ、首を後ろ向きに曲げられる。視界に移る金髪女の顔と、後頭部にあたる感触。……ふむ。

「なるほど、つるぺたではないな。……大きくもないが」

「んー？」

「……結構なお点前で」

「よろしい」

「あ、ちょっとずるい！私を？？？あれ？」

「…ん？……ほう…」

俺の反応に気をよくしたらしい金髪女と、下から顕冴が、怪訝そうな声を出す。
金髪女は顕冴を見た後、俺を見て、次に家の中の方を見て、何やら納得したように頷いた。

「まあ、何はともあれ、だ。外で少しばかり話をしよう」

「頑張ってねーおとーさん！」

「君もだよ、白い鴉」

「……はぇ？」

「コレと、君と。二人と話があるんだ」

どうやら金髪女は、俺と顕冴の二人と話がしたいらしい。
丁度い…ゲフンゲフン。事情は知らないが、聞くだけ聞いてやろうじゃないか。

で、俺達三人は家の裏へ。
本来ならば場面転換を表す記号なんかが出ているだろう所だが、諸事情により省略する。
説明する必要はないと思うが、俺達三人は各々歩いて裏まで来た。
金髪女も俺も、顕冴も自分の足で歩いて来ている。
襟首掴まれ引き摺られて来た訳でも、後頭部に胸を当てられたまま引き摺られて来た訳でもない。

そこの所は、理解しておいて欲しい。俺だって空気は読むし、好みはあるのだ。

「……さて。話の前に、だ。君、先日誰かと寝たね？」

「あん？」

金髪女は裏に回るなり、俺を指さしながらそう聞いてきた。
寝た……昨日……ああ、アレね。確かに寝たな。
……いや、何で知ってるんだこいつ。聞いてきた口調も、どちらかと言えば確認するようだし。
明らかに俺の事情を知っていて、あくまでも一応の確認として、という様な感じだ。

「寝たって……そりゃあ生きてるんだし誰でも寝るでしょ？というよりも、ほぼ毎日お父さんは私と一緒に寝てるんだけど」

「……」

「オイ違うぞ今のはそういう意味合いを含んでいないからなマジふざけんなよ顕冴テメェいや間違ってはいないがああ頼むからそんな怖い目で見るなよ金髪！」

顕冴がややこしいこと言うから！間違ってないって事もややこしくなる要因の一つだけど！
ああ＞●＜＞●＜みたいな目で見ないで！凄い怖いから！

「……まあ冗談はこのぐらいにして。君が寝たのは多分あの三人の中の誰かだとは思うのだけど……」

「ああ、それなら鬼の萃香……あ～…角生えてて一番ちっこいヤツだ」

「……」

「おまわりさん、こいつです」

「やかましいわ！」

俺の答えに、金髪女は呆然としてしまった。普通はそうなりますよね。

たがしかし！だがしかし俺は間違ってなどいないと断言させて貰う！……いや、今朝からの言動を鑑みると何か決定的に間違った様な気がするし、そもそも寝た、という事が一種の間違いとも言えなくも無い事もないし。

勢いっつーか後悔はないけど、なんというか罪悪感はある、みたいな。よく解りませんよねスミマセン。

「……本当に彼女と寝たのかい？にしては……」

「…身体的特徴は割と本人は気にしている様だから、目の前では言わないでくれよ？」

「…ん？いや、そういう訳では無いよ。ただ疑問に思ってね」

「疑問って……何をだ？」

金髪女は、萃香の身体的特徴に関する事以外に、何か疑問があるらしい。

……なんだか、さっきから俺達……むしろ俺の事をよく知っている、という様な印象を受けるんだが、こいつ……

「見た所、どこにも怪我はみられなかったからね。もしも君と寝た、というのならば、手足の1本は無くなっていると思ったのだが……」

「……は？」

俺の疑問を、一瞬にして吹き飛ばしてくれやがりました。

手足がなくなる……？どういうことなの……。

「……金髪。それ、どういう事？」

「他人を身体的特徴で呼称するのは如何なものかな、白い鴉？」

「そっちこそ。さっきから私の事そう呼んでるけど、『白い鴉』って何さ。白はまだ解るけど、鴉って何？」

「おや…？そうか、まだ思い出せていないか……」

「……何か言った？」

「独り言だ。気にしない方がいい。鴉と言うのは……まあ、どうでもいいじゃないか。君が本当に聞きたいのは、君の父親の事についての方だろう？」

「む……まあ、そうだけど……」

何気に顕冴の扱いが上手い。

ていうかそろそろ手足の1本云々について説明していただけないでしょうか。

「それなら、さっさと説明させて貰おう。……まず始めに、そこの変態に三大欲求は一応備わっているという事を認識して貰いたい」

「いやまあ、じゃなかったら俺がここまで変態と呼ばれてはいなかっただろうな」

「…え？お父さん、睡眠欲あったの？！」

「……あれ？そういや俺には睡眠なんて必要無いぞ？」

「一応、と言っただろう？確かに必要ないが、一応欲そのものはあるんだ。取らなくても何の支障もないから、眠気とかは体の方で勝手に遮断しているんだろうね」

勿論、食欲もない。と、金髪は言う。

なるほど、確かに物を食うというのは、正直地味に苦痛だったりしたんだが…それが原因か。
必要がないのなら、そうなるわな。
食べたい、眠りたいという欲求はあっても、体の方がそれを必要としていないのであれば、それらは無かったように見える……って事か？

それよりも、だ。何で見ず知らずのこの金髪が、俺でも良く知らない俺の体の事を知っている？
俺が忘れているだけで、こいつは俺とかなり親しいやつなのか…？

「……ん？でもお父さん、性欲はあるよ？溢れんばかりに…っていうか、溢れ出る程に」

「その『できればこっちに向けてくれないかなー』みたいな目を向けるのを止めなさい。だが一理ある。俺にはちゃんと性欲あるよ？必要もないのに！！」

神様にはね、性欲は必要ないんだよ？
その気になっちゃえば顔を洗うだけで子供とかできるんだ。
そう、神様は一人で子作りができるんだよ！『一人でできるもん！』だ！
いわば自家発電ですよ！むしろ自家発電すると子供ができるんだよ！
ホラ、あれだ。ゴミ箱を孕ませたっていういめーじだ。それでだいたいあってる。

地味に熱意を込めた俺の質問を金髪は「まあおいといて」と軽くするーして、説明を続けやがった。

「それは追々。物事には順序があるのさ。…三大欲求が備わっているとは言っても、あくまで一応だし、備わったのはつい最近だ。それまでは『ちゃんと』は備わっていなかった。まがりなりにも神様だったからね」

「……その口振りだと、お父さんは神様じゃなくなったから欲求が備わってきた、って聞こえるんだけど？」

「そう、ご名答だ白い鴉。中々頭が回るじゃないか。正確には、神様から人間に近付いていて、その結果三大欲求が備わってきた、だけど」

「何気に衝撃の告白！？」

俺もう神様じゃないってサラリと言われた！？
腐っても神様ってーか、腐った神様だった！

「勘違いするなよ。あくまで近付いただけだ。完全な人間ではないし、一応神様のまま」

「……続きは？」

「おっと。続き…と言われてもね。この話はこれ以上続けられないんだけどなぁ」

「じゃあ、『何故お父さんは人間に近付いたのか』とか、『結局三

大欲求ってどうなってるの？』とか、『お父さんの今後』とか」

「おやおや、父親の事になると目の色が変わるね。そんな君の情熱に答えて、順番に、一つずつ答えていこう。じゃあまず、『三大欲求』についてだけど？？？」

なんていうか、俺の話なのに俺が話についていけてない。
本人不在でどんどん進んでいってる。俺ここにいる必要なくね？
……俺の今後、か。

「？？？今は性欲だけ機能している。それでも正常には機能していない。厳密に言うと『機能はするけど発散する術がない』…かな？」

「……それって問題じゃない？要するに、一晩中ヤり続けるってことでしょ？……ご愁傷様……」

「だから、代わりに残りの二つの欲求で満たそうとするのさ。代替行為ってやつだね」

「そうか、手足の1本ってのは、そういう訳か……」

顕冴の若干の下ネタ発言には触れずに、先程の金髪の「手足の1本」と「代替行為」という言葉を聞いて、理解した。

「そうだ。性欲はあるし、機能はするけれど、終われない。だったら手近なもので埋め合わせをしよう、という訳だ」

「睡眠は、行為の最中だからアドレナリンその他分泌中でとても寝ていられない……」

「だったら、残るは一つ。食欲だ。そして手近なものと言えば？？？」

「行為の相手……か」

成る程な。金髪が俺の相手について疑問を持ったのは、容姿ではあっても、年齢についてではなかったのか。

俺がそんな変な生態をしているという事を知っているのなら、行為相手の身体の欠損がない事を不思議に思うのも、むしろ当たり前と言えるな。

……ふむ。

……うん……てゆーか……え？

「それ、神様っていうよりなんかもう妖怪じゃん」

発散出来ない性欲を、本能に任せて相手を貪る事で、発散させたつもりになっていた、という事だろうか。

まったく、これじゃあどう考えても神様じゃなくて妖怪だ。どうみても妖怪そのものです、本当にありがとうございました。

「……人を食べる神様というのも、居るには居るんだがね。生け贄

要求したりだとか」

「そういう輩はすべからく邪神だと思います」

「でも神だろう？一応」

「うんまあ一応」

…なんか俺の思っていた方向とは違った意味での『一応神様』だなぁ。

ていうかこの金髪が誰なのか俺とどんな関係なのかひとまず置いといて、そういう事を知っているという事は、誰かが過去に俺に食われたって事か……！

誰だ、誰が食われた？見た所金髪は五体満足そうだし違うだろうが……。

俺ならいきずりの適当なヤツ食っちまってんじゃねえかと想像できるのが色んな意味で恐ろしい……！

…まあ、過去の事はいつでも後悔とか思い出せたりはするので、今の事…ひいては未来の為の事を考えようか。

俺がそういう行為をすると、文字通り相手を食べてしまうという事を、一応事実として受け止めよう。

今回それがなかったという事は……金髪の「人間に近付いて」発言で大体解る。

つまりは割と正常に三大欲求が働く程度には人間に近付いているって事ですね、わかります。

……いや、それは解ったが、何故人間に近付いているのかが解らん…！

大体なんだ、人間に近付くって。一旦神様になったら他には二度と

自然にはなれない筈……。
想像できるのは、誰かが何らかの意志を持って俺を人間に近づけさせようとしているのか、または誰かが意図せずして俺を人間に近付けさせてしまったのか。
もしくは、俺の行動の偶然の産物か……。うん、最後のは多分ないな。どんな奇跡だ。
で、誰かが意志を持って、と仮定した場合に、一番怪しいのはこの金髪女か。
俺の知らない俺の事を知っているし。『一応神様』を人間にしちゃえるって事は結構な力の持ち主だろう。例えば俺の記憶を消せたりする程度の力は持ってたりとか。
ちなみに、二番目に怪しいのは、言わずもがな紫である。さっすがゆかりん、何考えてんのか想像もつかねえや！だがそれでいい！

……ふむ。人間化、か……。
うむ、まったく問題ないな。困る事は何一つとしてないな。
我ながらキリッ、とかつけてしまいたくなる程の言い切りっぷりだが、実際に困る事はないのだ。
そりゃあ、一回死んだらあうとになっちまうし、寿命も出来ちまうだろうけど。
ぶっちゃけ、その辺はどうだっていいんだよね。俺の目的は生きる事ではないし。

「成る程、つまりは俺はそのうち人間になるか消えるかって事ですね、よく解りました」

「……君は、それで良いのかい？持って後2年程、最悪の場合明日には消えているかもしれないという事に、納得しているのかい？」

「うわぉい、適当に言ったでまかせがまさかの正解のようですよおくさん。どうしましょうね」

思ってはいたけれど、考えなかったうるとらcですよ。ビックリした。

まあ、消えるかもって思ったのは簡単な事だ。俺が人間に近付いているのが、この金髪女に俺の記憶を消す程度の大した事ない能力しか持ち得ず、俺の行動の偶然の産物でもなかった場合。

即ち、必然的に訪れたその時。神様が死ぬとき。それが近付いてきている場合だ。

これはまあ、言わなくても解るだろう。神様は誰からも信仰されなくなった時、死んでしまうのだ。

まあそもそも俺に信仰なんてあるとは思えないし、俺の場合『一応』神様なので、正規の神様の消滅の手順をそのまま踏むとは思ってはいなかったけど。

いや、まさか人間みたいになってそれから消えるってのは予想外だわ。なにその面倒な手順。

いや、『神様』は死ぬとはいっても命を失う訳ではないから、業界用語的に『神様』が死ぬとき『消える』って言い表す事もあるにはあるが……つまりはそういう事か？

俺は人間もどきになって、人間のように『穢れ』で死ぬ可能性もあるってことか……？

「ちゃかすなよ。真面目に答えてくれ」

「……ふむ、流石に明日消えるってのは、勘弁してほしいな」

「ほう……人並みには未練はあるらしいね」

「そりゃああありますよ。人でなしだし碌でなしだけれども、未練ぐらいはあります。というか昨日できました」

そう、つい昨日に出来てしまった。
多分俺が、初めてやりたいと強く願った事が。
俺にできるかどうかは解らないけど、やりたいことができてしまった。

「昨日……？そんなに浅い理由しかないのかい？」

「浅い？そんな事いっちゃあいけないぜ？なにしろ俺が初めて自発的にやりたいって思った事だからな。はじめてってのは重いんだぜ？」

「軽い重いではなく、浅い深いについて話していたと思うんだが…」

「あれ？まあいいや。とりあえずさぁ、大事な事なのよ」

「……一応、聞かせて貰うよ？その、やりたい事というものを……」

「……あー……いやあ、本人の手前恥ずかしくて言えなかったんだが、な」

「……その『本人』がいない此所でなら言えるのではないのかい？というよりさっさと言いたまえ」

「……恩返しがしたかったんだ。言わせんなよ恥ずかしい」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

…………

…………………………

「ぜぇ………ぜぇ………」

「ふーっ…！ふーっっ！！」

「…………い、…一抜けました……。無理です、私にはもう無理です………」

「はっ！お前、その程度でこの私と張り合おうとしてたのか？まあ、その意気は認めようじゃないか」

「ふっ………そのままそこで指をくわえて見ていることね、負け犬……！」

「なんなんでしょうね、このそこはかとなく湧き上がってくる激情……。ああいやもういいですよ、お二人で勝手にやってやがれ下さい」

「後半化けの皮剥がれてるよ…？」

「九十九居ませんしぃーんですよ」

「……ていうか、その当人はどこに？」

「あ」

「あら…？これは……？」

「「よし、後でシメよう」」

「……っと。まあそれはそれとして、さっきまでのもさっきまでとして。アンタ……えーっと、萃香だっけ？」

「そーだけど……あー駄目だ疲れたぁ……」

「オッサン臭い言動ね……もう、寝転がらないの」

「お母さんか。あーっと、で、お前の事はなんて呼べばいいの？先代？」

「んー……それでいいわ。……あ、『奥さん』でもいいわよ？」

「絶対に渡さんぞ？……で、何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

「そーだった。……えっと、私の事見て『アンパイか……』って言って、その後『1つ追加か…』とか言ってたけど、あれどういう事？」

「げぇ、聞こえてたの？……んーまあ、話すと長いんだけど……かくかくしかじか」

「ふむ……なんだっけ、アンタそれってＮＴＲ属性ってヤツ？」

「どこでそんな言葉を知った。そーじゃないよ。普通に嫌だし」

「じゃあなんで？」

「いや……ね。ただ、さ。アイツ、あれでも結構良いヤツなんだよ。だから、さ。……老い先短いんだ。最後くらい良い思いさせてやりたいじゃない？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「恩返し……か」

「おう。……あ、お前今馬鹿にしてないか？『文字通り本能で生きてる分際で』とか」

「していないよ。その本能というのが対象を食べる、という事なら少し違うけど。代償行動っていうのは、本能を抑える為のそこそこ理性的なものだと思っているがね」

「つまりは？」

「人間になれてよかったね」

「わけがわからないよ」

いやまあ、うん。人間になるってのはまあ、悪い事ではないけど。

おめでとうって言われるのも、少し違うと思うんだが……。

「っていうかあれか？人間に近付いたから酒に酔ったのか？」

「……お酒を、飲んだのかい？」

「ええ、飲みましたよ？それが何か？」

ちょっと、そんなに驚くような事ですか？
そりゃ飲みますよ？以前までは何の意味もなかったからあんまり飲まなかったけど、儀式的にとか儀礼的な意味合いでなら飲んでましたよ？

「……神様っていうのは人間より上の存在だと思われているけれど、実は身体に備わっている機能でいえば人間の方が上なんだ。神様はただ『怪我をしない』だけだからね」

「……ふむ、例えるなら『すてーたす異常無効化がついてるから、異常耐性値低くしてもいいよね！』みたいな考えで育成されたきゃらが装備品効果無効の場所に行って、状態異常攻撃喰らったとき、みたいなものか。俺の現状」

装備品に頼り切ってきゃら育成を怠っていた典型的なぱたーんですね、わかります。

「……例えがよく解らないけど、多分それで合っていると思うよ？」

「……で、つまりはどういうことだってばよ？」

「…神様から人間へ『なりかけ』ているっていう事はつまり、人間みたいになるけれど身体的には神様って事だ。それが普通になるっていう事だ」

「だから、つまりどういうことなの？」

「……身体的には神様っていう事は、免疫が全く無くて、酵素とかもないって事だよ？」

「？？？つまりそれはアレか。酒を飲んだって事は……」

「アルコール分解されないから、脳みそ溶けるね」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

もしかしてあれか、昨日酒飲んだ途端気を失ったのも、酔ったんじゃなくて脳みそ溶けたからか！？

……え？ていうか俺今どうなってんの？現在進行形で脳みそ溶けてんの？マジかよいやだよそれぇえええええ！

まあ、ぶっちゃけ溶けてもまだ神様だから治るんですけどね！

「っていうか、免疫０なら人間生きてないんじゃね？」

「だから、君は現状死んでるんだよ。常に」

「……常に？」

「常に」

「それなんとかなりませんか？俺の何かがごっそりもってかれてる気がするんだけど」

「気がするんじゃなくて、事実だと思うなぁ……」

「ん？何か言ったか？」

「なに、気にする事はない。まあ、本当の所は免疫が全く無いのかどうかも、アルコールで脳が本当に溶けるのかどうかも、二日酔いしないのかも、専門外だから解らないんだけどね」

「憶測でお前はそんな恐ろしい事言ったのか……」

「憶測でもいいから未来を展望する事と、考え無しに今を続ける事。どっちがマシだろうね」

「そんな事を話した覚えはないぞ……まあ、いい。解った。お前が人体に関しては専門外だってのは解った。人間の心についても疎いってのも解った」

脳みそ溶けるね、って言った時、笑顔だったからな。まず間違い無くドS。少なくともドS。

…いや、それだったら人の心解ってるのか？じゃああれか、常日頃から笑顔かこいつは。
何時如何なる時も笑顔なのか。

「ふむ、言葉にされると少し心が痛むね」

「……にこにこしながら言うってことは、つまりはお前には心はないって事ですか？」

「失礼な。心はあるよ。ただ、少し痛んだ程度は痛くも痒くもないって事さ」

「さいですか……」

神経図太いって事じゃねーかとは、何だか恐いので言えなかった。
……結局の所、この金髪なんなんだろうな。
人体については専門外って事は、人間じゃないんだろうし、俺の事については知っているし……。
そういや顔も、どっかで見た事あるんだよなぁ……どこだっけなぁ……。

「……ところでしばらく前から心此所にあらずな、その……娘？はどうしたんだい？」

「え？……ああホントだ。そういやさっきから一言も言葉を発してないな」

一杯一杯だったから気付かなかった。……うん。ごめんね？すっかり忘れてたんだ。
にしても……なんだこいつ、なんで微妙に嬉しそうな表情なんだ。
何考えてやがんだ。
こっちの声に気付かない程、何を考えて没頭してるんだ。頼むから俺以外の事であって下さい御願いします！

……声かけるのめっちゃ恐ぇー……。

「も、もしもーし？顕冴ちゃーん？元気かなー……？」

「……はっ。……うへへぇ…」

声をかけると、一瞬はっとして、すぐさまにへらっと表情を崩して笑う娘。
正直アレだね。関わりたくないね。
いきなりニヤニヤしだす輩とは、普通関わりたくないよね？

「……オンナノコ的には、致命的だね」

「女の子って歳じゃあないと思う……ああ、だからオンナノコなのな」

「……あれ？お父さん……？あれ？」

「うん、お前が何を考えてたのかは恐いから聞かないぞ？」

「……よろしく御願いします…」

何時もならせくはら発言かましてくる所でこの態度って事は、よっぽどの事考えてたんだろうなぁ……。恐いなぁ、知りたくないなぁ……。

「……さて。そろそろ退場したいところなんだけど……何か他に聞きたい事は？」

「いや、聞きたい事っていうか、お前から話し始めたんだと思うが？」

「あれ？そうだっけ？顕冴ちゃん、どっちだったっけ？」

「ごめん、聞いてなかった」

「だろうね。まあともかく、何か疑問点はあるかい？別に今の話とは関係のないことでも構わないよ？」

「うん、じゃあ1つ。……お前誰だよ」

「おっと、これはこれは。自己紹介なんてものはしたことがなかったからね。すっかり忘れていたよ」

言葉の割には「よくぞ聞いてくれた」みたいな表情をして、やれやれとやたらとあめりかんな仕草でかぶりを振る金髪。

正直、なんか痛いなーと顕冴共々生暖かい目で見る以外のりあくしょんができない。ていうかしたくない。

「名前は、……朝影日(あさかげひるめ)?、とでも名乗っておこうか」

「……なーんか、後に夜鶴(やかく)とでも付きそうな名前だね」

「おお、良く解ったね。名付けた人は韻を踏んでそう付けたがってたみたいだけど、母性とは程遠い性分だからね。辞退させてもらったよ。まあ、結局名付けた人は夜鶴と呼ぶんだけどね。まったく、ただでさえ日?ですら重いというのに……」

「まあ、重いねぇ……お父さん?どうしたの?」

「……いや、なんでもない」

……そうか。そういう事か。思い出した。……いや、思い出させられた、か……。

俺の様子に顕冴は怪訝そうに、金髪……夜鶴はどこか申し訳なさそうにしている。

……はぁ。何を申し訳なさそうにしてるんだか。

……どっかで見た顔だと思ったが、そりゃ当たり前だったか。……いや、そういえば顕冴と顔似てるなぁ。まあ当たり前だが。

「ああそうだ顕冴。俺その内死ぬと思うから」

「はぁ！？ちょ、死ぬとか……え？マジ？」

「おうよ、マジマジ。で、その時にお前にもなんかあると思うけど、覚悟しとけ」

「……私の事はともかく、お父さんはそれでいいの…？」

「いいんだよ。人の想いってのは、それがどんな形だろうと無下にするのはいかんと思うからな」

「……私のおも「時と場合によるが」……ふんっ！いいもん！もう心配してあげない！」

頬を膨らませてそっぽを向く顕冴の表情は、心無しか、どこか寂しそうだった。

……こいつは未だによく解らないが、悪い事したなぁ……。

「……九十九。言い訳をするわけではないけれど、これだけは伝えておこう。？？？君の幸せを、願っているよ」

「……やっぱりお前には、夜鶴っていうのがぴったりなんだよ」

人は、折り合いをつけないといけない。事柄だとか、色んなものに。心にだって、どこか納得できる所を自分で見付けて、上手く納得させていかなくてはならないんだろう。

不満があっても、それを呑み込まないといけないことだって、多々

ある。
やらない方がいいこと、やりたくない事をやらなければいけない事だって、往々にしてあるものだ。
だからそれは、自分だけじゃないという事を頭に入れておかなきゃいけないんだ。
そう悩んで、折り合いをつけているのは、自分だけではなくて、誰もがそうだという事を知っておかなくてはいけない。
納得がいってないのは、相手だってそうなのだという事を、忘れてはいけない。

「……さて。じゃあ飲むか。よし、戻るぞ」

「……君は、さっきの話をもう忘れたのかな？酒を飲むと良い事はないと思うよ？」

「えーまだ飲むのー……よし、お父さんの酌係、一番私ね！」

「……君たち、昨日から飲んでるんじゃないのか？よくもまあ、まだ飲む気になれるね……まあ、頑張りたまえよ」

「なに他人事みたいに言ってるんだ。お前もだよ」

「？？？え？いや、わ……そろそろおいとましたいなぁ、と。思うんだけど…なぁ」

「駄目だ、飲んでけ。紹介するから」

「……鬼娘には、紹介はいらないんだけどなぁ…」

「その他にするんだよばかやろう」

「……あ、そうだお父さん。いつか、でいいからさ。皆には何かあげた方が良いと思うよ？」

「皆って誰だ？」

「あの三人……だけじゃないと思うけど、今はあのお父さんの妾三人」

「妾じゃなくて一人本妻な。ていうか俺には妾とかいねえ」

「まあその辺りどーでもいいんだけど。とりあえず、さ。公平を期すためにも、それぞれにプレゼントとかあげた方が良いと思うよ？」

「ぷれぜんとねぇ……なんでまた。ていうか何あげればいいのか解らんぞ」

「……相も変わらず、女心の解らない変態だね」

「うるせえよ。あとお前いい加減に一人称使えよな」

「……考えておくよ」

「あー……もういい？」

「ああ、すまん顕冴。で、何あげればいいと思う？」

「娘にそれ聞くかなぁ……。うん、先代にはあれだね。首輪でもあげればいいと思うよ。名前付きのやつ」

「首輪……」

「おい、違うぞ？俺の趣味じゃないぞ？」

「いや、だって先代ってさあ……なんかこう、犬っぽいじゃん」

「まったくわからん。……名前入りってのは、ちょっとあれだなぁ」

「首輪購入して贈ることを肯定している……！？」

「いやいや、だからそれがいいんだよ。お父さんが考えた名前入りの首輪が、先代一番悦ぶと思うよ？」

「喜ぶのにゅあんすがイマイチ違うと思うんだが」

「……ふむ、鬼嫁に犬巫女に偽妹か……なかなかに変な集まりだね」

「……お父さん、朝影の言う義妹のニュアンス、何か違くない？」

「いや、合ってるんだよ。後で話す」

「ふーん。で、その多分義妹の鑑枷にあげるのは……なんだろう、子種？」

「下ネタ厳禁な。それと俺にはそんなもんない」

「……いや、人間に近付いているというのなら、もしかしたらあ

るかもしれないよ？」

「よし、それでいいや」

「鑑枷の扱いがぞんざいだ…………」

「で、萃香だけど…………う～ん…………なんかあるかなぁ……妥当な所では、指輪……？」

「ああいや、それについては考えてあるんだ。萃香に渡すものは決めてある」

「…………この愛妻家め。どうせなら家族丸ごと愛してよ」

「ん？愛してるぞ？」

「…………臆面なく言われるとあれだね、照れくさいね」

「家族どころか、人類纏めて愛していると言っても過言ではないんだけどね。この男の場合」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「………老い先短い？え？何？あいつそんな歳なの？」

「歳っていうか………なんとなく解るんだよね、ああいう集合体の事。もうすぐ消えるなぁ、とか」

「ふうん………そう、あいつ消えるの」

「まあ、少なくとも1年は持つと思うけど、ね。前見た時はそうでもなかったんだけど……」

「そう……それは老い先短いわね……」

「ま、本人気付いているかどうか怪しいけど。……どうしたの鑑枷？」

「…………………いえ。少し心に折り合いを」

「……そう。……ところで先代、ホントの所、なんで地下にいたの？」

「……うーん……何となく？」

「いや、なんとなくって……まあいいや。そういえば、鑑枷も今迄どこにいたの？」

「……何となく地下に居ました」

「つまりは教えるつもりはないってことだね、二人して……」

「……うん、まあそうなんだけど……」

「それよりもですね、ちょっと気になった事があるんですけど……」

……」

「ん？何？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「つーかさ、結局の所俺の身体ってどうなってるんだろうな。三大欲求しかりあるこーるしかり」

「……うーん……多分、三大欲求はあと一週間もすれば正常に働くと思うよ？今はどうなのか解らないけれど」

「え、なにそれ超気になる。アルコールって…お酒？お酒飲んだらお父さんどうなるの？」

「さっきは脳みそ溶けるだとか適当な事言ってたけど、その辺りの所は正直全然解らないんだよね。所謂ハッタリってヤツ」

「……あ～……多分酔う…んだけどなぁ……さっき少なからず飲んだ筈なのに、全然酔いがこない……」

「……いや、君は間違い無く酔ってる」

「……うん、そうだね」

「え？そうか？全然そんな気はしないんだけどなぁ……」

「……ちょっと聞きたい事があるんだが」

「……質問してもいいよね？」

『なんで、裸なの？』

『あ。……いや、なんか熱いなー…と、思っ……て…』

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足２（後書き）

『蛇足』って、付けると色々台無しになるものって意味ですよね。

…まだ一本だけ付くんだぜ？

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足3（前書き）

『……』

『その……なんだ。？？？ごめんなさい』

視線に耐えきれず、家の入り口に向かって二人はそれぞれ走り出す。
すると当然、互いが入り口でかち合うことになり。
開いていた扉越しに、裸の二人が向き合った。

「……」

「……」

「……服を、着ようか」

「……あんたもね…」

向けられる視線にいたたまらなくなりながら、二人仲良脱衣所に行って、二人仲良く服を着ましたとさ。

「……なんで俺、裸で外に出たんだろう……」

「……なんで私、裸で争ってたんだろう……」

「「……鬱だ…」」

『……』

「……ホント仲良いよね、あの二人」

「いや、それはちょっと違うと思うわ」

「要はアホですね」

「それもちょっと違うんじゃないかなぁ」

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足3

さてと。
ちゃんと服も着たことだし、さっさと家の中に戻るとするかね。
脱衣所に居ても何も始まらないし。何か今は無性に飲みたい。
……うん。だから、ね？

「うぅ……駄目だ。恥ずかしい。裸で色々やってたとか恥ずかしすぎる……」

「よし、そんな過去を忘れる為にも飲もうぜ？な？」

萃香ちゃん、恥ずかしがってないで一緒に行こうぜ？
ていうか裸見られたことに恥ずかしがるんだ。意外だな。
……なんで俺、裸云々で萃香をいじってたり楽しんでたりしたのに、
俺も裸だってこと忘れてたんだろう……。

「……鬱だ、死のう」

「あれ、さっき私に飲んで忘れようとか言ってなかったっけ？！当人がその気力をなくしてどうするの！？」

「いや、だってよー……俺裸で微妙に説教臭い事言ったんだぜ？しかも外で。やべえ、超死にたい……」

「……うん。それは、死にたくなっても仕方無いね。……私だって、

裸なのにちょっとしたキャットファイトを繰り広げたよ……」

「……裸で？」

「裸で」

「……あー……ちょっと待て」

いめーじだ……いめーじしろ。
きゃっとふぁいとという事はつまり、あの三人で争ったと考えられる。
それに加えて萃香は裸。もういっそあの三人とも裸で、と考えてしまってもいいかもしんない！
そう、萃香と先代と鑑枷が裸で！きゃっとふぁいと！
英語を使わなければ三人がニャンニャンニャンニャン！
くんずほぐれつの絡み合いですね、解ります！
……いめーじしろ。いめーじするものは、常に最高の状況？？？！

「？？？？投影、完了」

空想を現実に重ねる、みたいな意味合いで。
するとどうだろう？今すぐに家の中に戻りたくなってこないか？
もしかしたら、息が上がって、頬に赤みがさした先代が寝転がっているかもしれない。
その様子は、あたかも事後の如く？？？！
ちなみにアレだからね。『事後』って言ってもきゃっとふぁいとの後って意味だからね。

深い意味はないからね？ウソジャナイヨホントダヨ？

……ふむ、この想像をしたあとでは、酒に酔って若干赤みがさした萃香の顔が、なんかやたらと色っぽく見えるな。艶やか、と言ってもいい気すらする。

見た目幼女に艶やかさを垣間みるとは、俺はもう駄目かもしれんね。つい昨日ヤった、という事実があるので、今更感が半端じゃないが。

「……駄目だ、興奮してきた」

「なんで！？何かを呟いたと思ったら、いきなり発情宣言！？さっきまであんなに死にたがってたのに！？」

「人ってのは、生命の危機に瀕する時に、一番興奮するらしいぜ？」

「伝え聞いただけなんだね！あとあんたは人間じゃないし、それは興奮している訳ではないと思う！」

「興奮ではあると思うんだが…じゃあアレだ、いきりたつ」

「いやまあそうだけど！そもそも生命の危機に瀕してはなかったよね！？ただ死にたくなってただけだよね！？」

「その通りなんだけどね。…あれ、なんだろう。抑えられなくなってきた」

おかしいな、前までなら抑えはきいてたんだけどな…？

…あ、今嘘だと思ったろ？抑えきれてねぇじゃねえかとか思っただ

ろ！

確かに俺は美人さんを襲う事は多々あるけど、あれ実は抑える事が出来てるんだよ。襲ってるのはノリだ。

興奮とか本能とか抑えられるけど、楽しいから襲ってるだけだ。

そう、俺は理性で人を襲ってるんだよ！……それはそれで最低だな。

まあ、俺が最低だってのは今更なので放っておくとして。

今は何故興奮とかが抑えられなくなっているのかが問題だ――――が、なんかそれも別に放っておいても良いような気がしてきた。

やることは変わらないんだし。変わるのは俺の心構えだけだろうし。

……さて。ここまで言えば、俺が何でこんな事を考えているのか、解ると思う。

こんな事を考えるということが、どんな事なのか、大体解ると思う。

「……マジでダメだわ。我慢できそうにない」

「つ、九十九……？」

肩を掴まれて困惑する萃香。

冗談ではないと薄々察しているのか、その表情には少し怯えの色すらみえる。

……かわいいなぁ。

「……ごめん」

「……つく……っ！」

目を瞑る萃香に、多い被さろうとしたその時？？？

「遅ぉおおおおおおい！服着るのにどんだけ時間かかってんのよこの変態がぁ！」

「ごふぁ！」

「服着てんじゃない！さあさっさと立つ！顕冴って娘がアンタが来ないと酒飲ませないとか言うから来てやったのよ！？」

「えぇー……それだけ？それだけなの？」

「他に何かある！？」

？？？飛び込んで来た先代に、蹴り飛ばされました。

…ええ、解っていましたよ。今回も途中で邪魔されるんだろうなぁとは何となく察していましたよ。

でもねぇ！？流石にそろそろいいんじゃないでしょうか！？そういう場面も入れておいていいんじゃないでしょうか！？

何なの毎度毎度！意識してそういう行為をしようと思ったら絶対に邪魔が入って出来なくなるって！

何コレ呪いかなにか！？今回はぶっちゃけ助かったけれども！というか毎回助かってるけども！

俺もいい目をみてもいいんじゃないでしょーか！？

……何？『もういい目はみてんじゃねーか』、だって？
……うん、まあ…そうなんだけどね？
ほら、誰しも次が欲しくなるじゃない？手に入れたら次のすてっぷ求めるじゃない？
それだよそれ。
……すいませんでした。全面的に俺が悪かったという事は自覚している。
というか、毎度の事ながら先代ぶっ飛び過ぎだろ。酒が飲みたかったから何があってるのか解らない所に飛び込んで憂さ晴らしに蹴り飛ばすって……。
ていうかまだ精々１０分経ったか経ってないかぐらいしか過ぎてないぞ……時間感覚までトンでんじゃねーのこいつ。

「んー？なぁにやってるのかなぁー萃香ちゃん？」

「……え？？？うわぁ！？九十九！？」

「無視された……ですって…？」

「だ、大丈夫！？九十九、なんでそんなにボロボロなの！？」

「どーでもいいから早く起きなさい、この変態！酒呑めねーのよ！」

「酒だって！？起きろ九十九、酒呑めないじゃないか！？」

「なにこのかおす」

倒れこんだ俺をガクガク揺する先代の言葉を聞いて、直前まで心配

してた萃香まで一緒になって起こそうとしてくる。
かおすってーか。
なんというか……仕方無いとはいえ、理不尽な扱いなような気がする……。
そんな事しなくても、もう起きてるししょうきにもどった！……おえっぷ。

「揺らすな！きもちわるく……おぇ」

「ギャー！耐えろ、九十九耐えるんだ！」

「どーでもいいから早く起きなさい！」

「だったら揺らすのをやめっ？？？あ、駄目だコレ」

「うわっ、危ないわねこのフニャチン野郎！誰に向かって吐きかけてるのよ！？」

「理不尽すぎる……しかも言葉遣いがもの凄く悪い……ああ、あの綺麗な先代はどこへ……」

「私が綺麗じゃないとでも？」

「勿論綺麗だがさっきのは言葉遣い的な意味なので、吐いた直後のヤツに拳を振り上げるのは止めて貰えるだろうか」

そして萃香は何気にぎゃらりーにまわらずに先代を止めてくれると嬉しい。

先代は「あっそう」と心底どうでもよさそうに吐き捨てた後に、大人しく俺を解放する。
解放するといっても、俺のアレを避ける為に既に手は離していたので、振り上げていた拳を下げた、と言った方が正しい。
四つん這いで見上げていた俺は、安心して立ち上がって？？？

「お父さんの体液が放出された気配を感じて！！？？？ってうわ、ゲロだコレ！」

『どんな気配感じてんの！？』

「うわ……流石の私もこれは……いや待てよ……？？？？？いけるか？」

「オイ、何言ってんd？？？うわオイやめろ来るな屈むな嗅ぐな吸うなぁあああぁあぁあああああ！」

いきなり飛び込んで来て、聞きたくない言葉を発した後、行動する顕冴。
何をしたのか、あるいはしようとしたのかは、色々な意味で嫌なので描写しない。
ただ結論から言うと、ギリギリで阻止できた、とだけ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

で、そんなこんなで。

あの後家の中に戻って、逃げ出さずに居た夜鶴の姿を見つけて安堵して。
酒のつまみはすでに用意されていて、鬼どもは机を囲んで座っていた。
野郎どもはいまかいまかと俺???先代や萃香もまだ座っていないというのに、何故か俺だけ???の着席を、睨みながら待っている。
苦笑いして、酒瓶を持って座り、満面の笑みで待ち構えている鑑枷の隣に座る。
だってなんか恐いんだもん。座らないと殺されそうだったんだもん。

「「……」」

「……」

「よっと。……何してるの?二人とも、早く座りなよ」

「「……」」

「……さっきから何故俺を睨む」

座った瞬間に、背後から萃香と先代の視線を感じた。
不思議に思っていると、鑑枷とは反対側の空いていた俺の隣に顕冴が座る。
その瞬間、二人の視線が強くなった???気がする。
気のせいかもしれないし、気のせいだろうとも思うが。
いつまでたっても座らない二人に、顕冴が声をかける。
かけられた二人といえば、顕冴を睨んで???二人は背後にいるので様子は確認できないが

、顕冴がビクっと震えたので、睨んだんだなぁと思う???俺の正面に座った。
ちなみに俺の両隣に鑑枷と顕冴、向かって正面が夜鶴で、その両隣が萃香と先代。後は鬼の野郎どもという席順である。
……気持ちは解るが、鬼の連中は睨むのはやめて貰えないだろうか。

「……なに?二人とも恐いんだけど……ま、まあいいや」

未だに視線を感じるらしい顕冴は、声を震わせながらも放置しておく事に決めたらしい。
それを横目で見て、同情するが俺は何もできなかった。恐いんだもん。
そんな俺たちの様子を知ってか知らずか、鑑枷は酒をぐらす（俺がつくった）に注いで、今しがた座った皆に配って廻っていた。
顕冴はそれを受け取り、上に掲げて???

「えーっと。気を取り直して。……それじゃあ改めまして、乾杯ー！」

「「「「乾杯ー！」」」」

???何故か音頭を取った顕冴に合わせて、屈強な鬼どもの雄叫びが上がった。その中には萃香や鑑枷も含まれている。

まあ、つまりは、だ。

『回想終了』、だ。
前話どころかそのもう1つ前の話から続いていた回想は。
話を丸々一話と少しを使った回想は、やっとの事終了した。なげえなオイ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて。
長い長い回想も終了したので、話を現実に戻そうと思う。
現実といっても、回想のほんの１０分程度後の話だけれど。
……「それだったら、むしろ回想開始してから微妙に未来の話になってんじゃね？」っていう突っ込みは無しの方向で。
気が付いたら１０分経ってたんだから仕方無い。
乾杯してから１０分も経たずに、男のぐるーぷと女のぐるーぷに別れていた理由が解らないのも、気が付かなかったから仕方無いってことで。

あ、さっきちょっと言ったけれど、今現在俺の隣には顕冴も鑑枷居なかったりする。
男と女とで別れて酒を飲んでいて、二人はそっちにいっている。
１０分も経たずに別れてたんじゃ、なんの為に席を決めたのか解らないって？
……うん。まあ、なんだ。……二人とも拉致されたんだ。萃香と先代とに。
乾杯した後、「じゃあ飲もっか」と顕冴が言って座ったと思ったら、気が付けばいつの間にか正面から萃香と先代…どころか夜鶴の姿までが消えていて、ふと横を向けば顕冴と鑑枷の姿もなかった。
そんな怪奇現象に若干ビビリつつも、背後を見ると、萃香と先代に、それぞれ肩に担がれて運ばれる二人の姿と、その様子を見て微笑みながらついていく夜鶴の姿を見た訳だ。

当然の事ながら俺は冷や汗浮かべて苦笑いしつつ、見なかった事にした。触らぬ神に、祟り無し。

そういう訳で、「男女に別れて酒を飲んでいる」とは言ったが、女連中は外に出て行ったので果たして本当に飲んでいるのかは定かではない。むしろ制裁を受けていてそれどころじゃないだろうとは思う。誰が誰に何をしているのかは流石に解らないし、例え解ったとしても言いたくないが。

野郎どもは俺を除いてじゃんじゃん酒飲んでるがな！

「あーっ！うめェ！なんだこの酒超美味え！」

豪快に瓶の中身を一気に飲み干し、オッサン臭く言う一人の鬼。一人っつーか……一頭？

よく酒豪と言われる鬼をして唸らせるその酒といえば……あ。

「あ、それ『鬼殺し』」

「？？？俺はもう駄目だ……。後はまかせ…た……ぜ……」

『うぉおおぉぉおおおおお！？えーっと……鬼吉ーッ！』

「鬼吉！？そいつそんな安直通り越して奇抜な名前なの！？」

物騒な銘を聞いた瞬間に、その鬼は倒れ込んだ。酒を吐き出しなが

ら。

周りを良く見れば、他の何人か？？？何頭か？……ややこしいので以下『人』に統一する？？？も、吐き出しつつ倒れ込んでいた。飲んだんだろうなぁ。

人の家にゲロっちまうってどうなんだとは思ったが、それ以上にイッキした後倒れた鬼の名前のせいでその考えは吹っ飛んでいた。

おにきちって。いくらなんでも酷すぎるだろ常識的に考えて……。

……今何か「常識に囚われてはいけないのですよ！」という声が聞こえたような……空耳だな、うん。

『いや、正直名前覚えてないから適当に呼んだだけだが？』

「可哀想過ぎる！仲間だろお前ら！？」

よかったと言えばいいのか、鬼吉は本名ではなかった。

だがそれはそれで、仲間の誰一人として名前を覚えている奴がいない悲しい存在って事に……ブワッ。

「あ、ちなみにソイツ、さっきまで最後に発言していた奴だぞ？」

「当然の報いだな。えっと……クマ吉」

『変わり身はえぇなオイ！それとせめて鬼吉って呼んでやれや！』

前言撤回。コイツなんて鬼吉どころかクマ吉で充分だ。

しかも元祖クマ吉君とは違って『変態紳士』から『紳士』を取った

存在？？？つまりはただの変態って事でふぁいなるあんさー！
まあ、俺の変態度には遠く及ばないがな！……言ってて嫌になってきたな。時期も時期だし、変態きゃら止めようかな……。

「……み、みんな……色々言いたいことはあるがコレだけは言わせてくれ……？？？幼女、バンザーイ！」

『あばよクマ吉、テメエの事は2秒で忘れてやる！』

「流石にそれはないんじゃねえか！？」

『あん？……お前、誰だっけ？』

変態に人権はねぇんだよ！何故なら変態だからだ！
人から変態へと変態し変態という生物になったからにはそれはもう人ではなく変態なんだよ！

「変態まで混じって息ぴったりに言うとか酷すぎじゃね？！俺は鬼吉だよ！！」

『本名だったんだ！？』

まさかの鬼吉が本名だったでござる。どういうことなの……。
もうそれイジメとかじゃね？愛着ぜろなんじゃね？

まあ、どうでもいいから話題を変えるけどな。

「ところでさ、お前ら鬼ってどっか遠い所に行ってたんだろ？１０年単位に一度とはいえ、なんで人里に来るんだ？しかも豆投げられに」

どう考えたってドMって結論になるんだけど。出て行ったのに態々豆を投げつけられる為に戻ってくるとか……どうみてもドMです。本当にありがとうございました。

「ああ、それな。節分って、要するに人間が俺達の事を恐れているから行う行事だろ？それに本物の鬼（俺達）が参加することで、恐怖を思い出させて忘れられないようにする為だ」

「意外とセコい……っつーかなんかアレだな、回りくどいな」

随分と回りくどい……鬼には少し似合わないんじゃないだろうか。そんな事は当人達が一番思っている様で、不満そうに顔を顰めながら続けて言った。

「仕方ねえよ。ちょっくら前に『極力人を襲うな』なんて指示出しやがったヤツのせいで直接食ったり攫ったりどころか、勝負を挑む事すら難しくなっちまったんだ」

「え？マジ？そんなに厳しく制限されてんの？」

「おう。あっちから向かって来ない限り、どんな形であれ『勝負』は駄目なんだと。しかも向こうから仕掛けてきても『弾幕ごっこ』しかできねえし」

それが嫌だったんで、出て行ったんだ。と。

そうか……そんな事情で。納得した。いや似合わないなと思うが。

……ん？『弾幕ごっこ』って、確か考案したのは博麗霊夢で、鬼が居なくなったのはもう１００年以上前だった気が……。

なんだ、この齟齬。どういう事だ……？

「？？？ってな感じの理由だと、格好ついたんだろうがなぁ……」

「って嘘なのかよ！？」

どこか遠い目をしながら、ぽつりと悲しそうに愚痴る。

……本当の理由ってどんなのだ。鬼がそんなになっちまうってどんな理由だったんだ。

愚痴った後、鬼は「酒の席にしみったれた話は無しだ！」と言って無理矢理に話題を打ち切った。……しみったれた話なのか。

鬼が居なくなった本当の理由が気になりながらも、俺は結局『何故節分にわざわざ来るのか』についての答えを聞いていない事に気が付いた。

ちっくしょう、アレだな。自分がやると気が付かないが、やられると腹立つな。話を逸らされるっての。

「……で？結局の所、なんでお前ら態々節分に人里に行ってるんだ？」

「おっと。結局言ってなかったっけか？……人に鬼の恐怖を植え付ける為ってのもあるんだが、そんなまだるっこしいモンよりも、もっと単純な理由がある」

「単純？」

「おうよ。ひどく単純な理由だ。？？？そうだよなお前ら！」

「「「「「おうよ！！」」」」」

理由は単純だと言って、そいつは他の鬼にも同意を求めた。結果は満場一致で『いえす』。

……なんだ？鬼が態々戻ってくるような、それでいて単純な理由って……？

「勿体振らずに教えてくれ。結局何なんだ？」

「ああ、それはな？？？」

地味にワクワクしながら、俺は直球で聞いてみた。

勿体振らずにと言ったはずなんだが、その鬼は勿体振る様に溜めて？？？

「「「「「「？？？豆うめぇ」」」」」」

「謝れ！ワクワクしていた俺とビクビクしていた人間達に謝れ！」

？？？ある意味驚愕の事実を言い放った。しかも他の鬼も一緒に。
酒飲んで倒れていた奴らまで一緒になって！
『魔を滅する』との語呂合わせで縁起がいいと思われていた豆は、
その実鬼達の大好物らしかった。
なんかアレだな。人間には聞かせられないなコレ。知らなければ良い方がある事って、本当にあるんですね。初めて知りました。

まあ、そんな感じのてんしょん高いやりとりをしばらくの間していたんだ。
しばらく経った時、ふと女組は何やってんだろうなーと考えたその瞬間、『ドサッ』という何かが落ちたような物音が真横から聞こえて来た。
見ると、無惨な姿になった顕冴と鑑枷が、そこにいた。……どういうことなの……。
まるでボロ雑巾の様な姿でボロ雑巾の様な服を着ている。つまりはボロ雑巾みたいになっている。
何なの？投げられたの？ズタボロにされた挙げ句放り投げられたの？

二人をここまで追いやった奴らに、地味に、どころか結構戦慄していると、三人分の足音が背後から聞こえてくる。
そして、その内１つは俺の真後ろで止まり、２つは真横に？？？つまりはボロ雑巾になった二人の所？？？で止まり。

「「よいしょ……っと」」

座りました。
ボロ雑巾が居た場所に、二人とも座りました。
……端的に言うと、萃香と先代はそれぞれ顕冴と鑑枷の上に、座りました。……えー…。
上に乗られたというのに、文句どころかうめき声すら上げない二人。
…生きてるんだろうなコレ。
座った外道の方はと言うと、口がつけられていないぐらすを手に取り？？？うわっ、こっち向いた！恐っ！超恐っ！

色々な意味でのあまりの恐怖に、俺は逃げ出そうと立ち上が？？？ろうとした時、背後に居た夜鶴が抱きついて来た？？？もの凄い圧力をかけて。

「まあまあ。？？？座って座って？」

「……」

耳元で囁くな頼むから。両隣からの圧力が凄い事になるんだ。
振りほどこうと腕を動かそうとしたり身体を動かそうとするが、ウンともスンとも言いません。どんだけ力入れてんですか。ていうか共犯ですか。逃がすつもりはないんですかそうですか。
……積んだな。

「「「さあ、飲むぞ？」」」

「………ハイ、私めが酌を努めさせて頂きます」

萃香と先代が、俺にしなだれかかってきてそう言った。
嬉しいんだが嬉しくねえ。素直に喜べねえ。なんだコレ。俺どこで間違った？………最初からですねスミマセン。
今此所に、1らうんど目が始まってすらいないにも関わらず、更に辛い2らうんどめが始まろうとしていた。
果たして俺は、この先生きのこる事ができるんだろうか………？
オイ、鬼の野郎ども、逃げるんじゃねえ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おーい、九十九ー？飲んでるかー？………って駄目だ、もう潰れてる」

「早いわね……前はこんなもんじゃなかった筈だけど……」

「人と言うのは、時間が経てば変わるものですよ？」

「いや、そいつ人間じゃないでしょ。つい最近知ったけど」

「え？先代気付いてなかったの？お父さん外見変わらないのに？」

「スキマ妖怪とか見てれば外見変わらないのとか不思議でも何でもなくなるでしょーが」

「言ってて気付いたけど、先代もずっと見た目変わってないよね」

「アレなんじゃないの？あんた鏡見ても？？？見てたから気付かなかったんじゃないの？色んな意味で」

「「ああ、ありえる」」

「否定はしないんだね……色々な意味で。……あれ？鑑枷と朝影は？」

「さあ、さっきどこかに行ったのは見てたけど……ん？萃香って朝影と知り合いなの？名前聞いてないし言ってないよね？」

「知り合い……うん、まあ。腐れ縁……って程じゃないけど。知り合いの知り合いって所かな？」

「その二つには結構な差があると思いマス。……もしかして、忘れてた？」

「……不思議な事にね。ついさっき、ほんの少し前まで忘れてたんだよ。なんでか知らないけどね」

「……ふうん」

「ねーねー？もういい～？私と関係無い話して貰うの止めて貰っていいー？」

「「子供かっ！」」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……お久し振り……になるんでしょうか？」

「そうだね……実に５００年程……かな？」

「白々しい……」

「ははは」

「……まあ、良いです。色々と言いたい事はありますが、既に折り合いはつけてあります。？？？何よりも、私は九十九が幸せならばそれでいい」

「？？？そうだったね。全く、なんでそんな簡単な事を忘れていたんだか。目的はそれだった筈なのに……ね。何時の間にやら、ひどく回り道をしていたようだ」

「ざまあみろ、です。……少しばかりスッキリしました。貴女も迷惑掛ける事の申し訳なさと快感を噛み締めればいいのですよ」

「前者はともかくとして、後者はどうかと思うけどねえ……」

「いいんですよ、相手は九十九です。沢山迷惑掛けて、その有り難みを実感して？？？幸せに死なせてあげてやればいいのです」

「言われなくても。……しかし意外だね。君もアレの『死』については、どちらかと言わずとも反対ではなかったかい？」

「……終わりのない事程、虚しく恐ろしい事はないのだと、最近思うようになりました」

「……一応、謝っておいた方がいいのかな？」

「いいのです。御陰でその事に気がつけましたから。……ただ、あの娘には謝っておいた方がよろしいかと」

「……やっぱり？……解っちゃいるんだが、気が進まないなぁ……」

「……あの娘、私と九十九の娘みたいですものね」

「その口引き裂くぞ小娘？」

「おお、こわいこわい。……それで、何故にそうもあの娘を邪険に？」

「いや、ね。あの娘に直接どうこうって訳じゃ無いんだ」

「……それは、何故？」

「……九十九の子供だって考えると、腹が立つ」

「……子供ですか。弟離れ出来ない姉ですか。私もですが、貴女も大概ですね」

「まあ、そんな理由であんな事するなんて、我ながらどうかしてると思うがね」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……で、三人共通の話題と言えば……」

「弾幕ごっこか、スキマ妖怪か、霊夢の事か……」

「……変態の事か、ね」

「……」

「……」

「……」

「最後で！」「3番目ッ！」「霊夢の話っ！」

「よしっ！多数決で霊夢の話にしましょう！変態の話はナシの方向で！」

「えーっ！？」

「このファザコン娘は……あ、そうそう。ファザコンと言えば。えーっと、先代って霊夢の母親って事でいいんだよね？」

「いいわよ？それが何か？」

「あんたの娘がファザコン気味かもしれないって話、知ってる？」

「え？なにそれ初耳なんだけど。……ふぁざこんって何？」

「父親に恋しちゃう病気の事だよ」

「ファザーコンプライアンスの略だねっ！」

「違うよ、ファザーコンプレックスだ」

「横文字むかつくから止めて。……父親？誰？」

「……九十九の事だよ」

「…なんでよ」

「色々あって、もしかしたら九十九の事父親みたいに思ってるんじゃないかって話」

「いやだからなんでよ？」

「物心つく頃……からちょっと経った時から、九十九って博麗神社に入り浸ってたんでしょ？」

「正確には、あの娘が生まれた前後に入り浸ってなかったっていうのが正しいわね」

「……え？つまりは入り浸ってなかったって事の方が珍しいの？」

「そうなるわよ？ちなみにコレは先々代から聞いた話ね」

「……腐れ縁ってレベルじゃねーぞ」

「なんだろう。まさかあの神社、九十九を奉ってたりしないだろうね…？」

「……違うと確証を持って言えない所が辛いわ……」

「……話が逸れてるよ？」

「あーっと。……で、ともかく、だ。幼い頃から自分の家に男が出入りしていて、家にはその男以外に男はいない、訪れる事に母親もまんざらではない」

「まんざらではない訳じゃねーわよ！？ちゃんと来たら殺すように言ってました！！」

「それはそれでどうなんだろうね！？」

「……なんかアレなんだけど。余計にフラグ建てた様な気しかしないんだけど」

「フラグって……どんな風に？」

「『私を殺した責任、取って貰うわよ？』みたいな」

「なにそれ」

「何故に女言葉？」

「これだから幻想郷は。……よし、輝夜も巻き込もう」

「その話は後で聞くとして。……で？どうすんの先代？娘の件」

「……うーん…」

「アレなんだね。結局色々否定はしないんだね。というか結局お父さんの話になっちゃってる件」

「黙りなさい。………いっそのこと、本当に父親って事にしてしまえば………」

「よぉぉおし！かかってこいや小娘がぁっ！」

「臨む所よコンチクショウ！今度こそ渡して貰うわ！」

「うわぉい修羅場？………さてカメラカメラ………後でおとーさんと見よっ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「………………」

「………………」

「………………」

「………………」

「………え？もう話は終わり？」

「ええ。終わりましたけど、それが何か？」

番外　節分編　～正直、すまんかった～　蛇足３（後書き）

よし、勝ったッ！番外節分編完ッ！

番外　節分編（前書き）

あの後家の中に戻った鑑枷と金髪は、遅れながらも宴会に参加した。

そして時は経ち、宴も酣。流石の鬼達にも酒が回り、眠りこけるのも出始めた頃。

べろべろに酔った先代は、眠っている九十九に絡み続け。

その様を萃香は楽しそうに、しかし据わった目で見ながら酒を飲み。

そんな萃香に溜め息を吐きつつ、それでも何処か楽しげに――むしろ安心しているようにみえる――時折危ない光を目に宿す萃香を宥めながら、酌をする鑑枷。

残った二人、顕冴と金髪と言えば。

「……ねえ、朝影。――何か用？」

「いや、用という用はないんだが……」

「……だったら目の前で唸るの止めてくれるかな。お酒が飲み辛いんだけど」

「待った。……ああいや、やっぱり待たなくていい……」

「……だからなんなのさ」

「…君はアレだね。父親以外には意外と冷たいというか……絡みづらいね」

「お前が言うな」

どことなく、険悪なふいんき（なぜか変換できない）を醸し出していた。

（――ああ、あそこに居るのが私ではなくて本当に良かった）

「……鑑枷？どこを見て――ああ、アレ。……ほうっておこう。触らぬ神に祟りなし、だよ」

「ええ、そうですね」

言われなくとも、何かをする気はなかった。

あんな空気の場所をなんとか出来る人物は何人か居るだろうが、なんとかしようと思えるのは九十九ぐらいだろう。

…本当に、あそこに私が居なくてよかった……。

これは、主人公不在で行なわれる、物語の蛇足とも呼べない『なにか』である。

番外　節分編

「……ところで君は、思いの外冷静だね。……九十九が死ぬと聞けば、君は何が何でも何とかしようとするのかと思っていたよ」

「……それって別に、その通りだったとしても態度には出ないよね？」

「失敬、順番を間違えていた。てっきり君は、そう思考する前に喚き散らすものだと」

「……やっぱり朝影ってさ、私のこと嫌いだよね？」

笑顔で毒を吐いてくるこの金髪は、やっぱり自分の事が嫌いなのだろう。

思い当たる理由はない。けれどそうだという確信はある。

この人は、たぶん私のことを快く思っていないのなと、なんとなく確信してる。

確信なのになんとなくというのも、なんだか矛盾しているけど、その通りなのだからそれ以外に表し様はない。

だからというか、たぶんそれが理由で自分も彼女の事を邪険にしてしまっているのだろう。……嫌いな訳でも、好きじゃないという訳でもないんだけどなぁ……。

…それにしても、喚き散らす……ね。そういえばそうだ。自分でも不思議なくらいに冷静だ。

普通ならば、動揺くらいはしているべきだけど。…何故だろう。

お父さんの死が遠くないとを聞いても、そんな事を考えられるくら

い、思いの外私は冷静なようだった。

死。

お父さんが死ぬ。

本当の意味で、死んでしまう。

そんな事考えた事なかったし、考えたくなかった。考えないようにしていたのだろう。

それ程迄に避けていた事の筈なのに、いざそれが近いという事を知らされても、私は思ったよりも冷静だ。

喚き散らす程の悲しみも、当たり散らす程の苛立ちも、目の前が真っ暗になる程の絶望も、何とかしたいと思う程の希望も。

まったくないという訳ではない。むしろ全てある。けれどそのどれもが思っていた程ではなくて、激情と呼ぶには程遠かった。

お父さんの死を知って、その程度で済ませてしまう自分に対しての怒りすら、湧いていない。

そんな事を考えられるぐらいには、私は冷静だった。

何故冷静でいられるのか。私はそんなにお父さんの事を好きではなかったから？

――それは違うと断言できる。絶対に、だ。

だったら何故？……それは多分、一人で考えてもずっと解らない事だろう。

感情とは、最初に自分で気付かなければ、他者から指摘されなければ気付かないものだ。

考えても多分、解らない。

「……君が直接嫌いな訳じゃないよ。…ただ、認めたくないだけだ」

「だからそれが私を嫌いだって事でしょ？…まあいいや」

「……随分とあっさりした返答だね？君は好きじゃないと面と向かって言われたのに？」

「やっぱりそういう意図があったんだ……いいよ、折り合い付けてるから」

「折り合い？」

「そ、折り合い。……私もなんでか、朝影の事苦手だし。おあいこってやつ？」

「おあいこ、か」

ふっと、どこか皮肉気に笑う金髪。その笑みの理由は聞かない。解ってるから。

「……お父さんは」

「…ん？」

「お父さんは、さ。どう思ったんだろうね？自分が死ぬって解った時」

ともかく。私の事はおいておくとして。――そんな事はどうでもいいのだから。

当のお父さんは、何を想い、考えたのだろう。
怒り？悲しみ？嘆き？それとも――――喜び？
……私はお父さんじゃないから解らないし、その時が訪れてないので自分に当てはめて想像する事もできない。
ただ、お父さんはそのどれにも当て嵌まらないと思う。あくまで自分の想像したお父さんだけど。
怒りも悲しみも嘆きも喜びもせず、「ふぅん」と言って終わらせてしまう様な気がする。
何事もなかったかのように、また何か別に面白そうな事をしはじめそう。
実際に、何事もないのだろう。何事にも思っていないのだろう。そんな無頓着さがお父さんらしい。

そんなお父さんを、大好きだと思う。
そんなお父さんでなくとも、大好きだけれど。
私はお父さんがお父さんである限り、例えお父さんでなくなっても、大好きだ。
……こんな事を迷いなく言い切れるあたり、私は間違い無く……。

「……何にも考えないんじゃないかな？……今も昔も、変わらずにね」

「え？最後の方聞こえなかった。ごめん、もう一回言って？」

「聞こえないように言っているんだよ。……そういう空気を読まない所は、父娘揃って似ているね」

「父娘って言っても、義理だけどね。……えへへ」

「言っておくけど、それは喜ぶべき事でも誇るべき事でも、ましてや羨む事でもないからね？」

「そう？だって嬉しいじゃない。似てるって言われると」

似てるって事は、どこかしらが同じって事。
お父さんと同じだという事程、嬉しい事はないと思うんだけど。

「羨ましいね。……羨ましすぎて引いてしまったよ」

「ふふん」

「だからそれは誇るべきものでは……いいよ。良かったね、血縁関係がなくて」

「……なんで？」

「なんでって……そりゃあ実の父娘関係にあったら、そんな事も言ってられないだろう？」

「……だからなんで？」

「なんでって――はぁ？」

「……どうしたの？」

なんでそんなに素っ頓狂な声をあげるんだろうか？私何かおかしなこと言ったっけ？
血縁関係っていいじゃん。あったらそれだけで興ふ……満足感が得られるじゃん。

「……もしも実の父娘関係だとしたら、どうするつもりだい？」

「どうするつもりって……何も変わらないよ？」

「……何も？」

「何も」

「変わらずに愛情を持ってそれを注ぎ続けると？」

「多分ね」

「実の父娘関係だとしても？」

「絶対に」

「ライク的な意味で？ラブ的な意味で？」

「どちらも含めてね」

「…肉親の情的な意味で？」

「肉欲の情的な意味も含めてね！」

「……つまり、纏めると？」

「私は変わらずにお父さんが大好きで、愛しているよ？性的な意味も含めてね！」

「……解った、認めよう。君は九十九の娘だ。むしろ娘以外であってたまるか」

朝影は心底嫌そうに吐き捨てる。

何が嫌なのかはよく解らないけど、認められた。私を認めると、言われたのかな。

……少し嬉しい。なんでかは解らないけど。

「……」

「……なんだい？」

「……いや？もう私には何も無いよ。話したい事も話すべき事も」

「……実は君にはなくとも、言わなくてはいけない事があるんだ」

そう言って、金髪は真顔になってこちらを正面から見据えてくる。

なんだろうと、少しばかり身構えていると――

「……すまなかった」

言って、綺麗な土下座をしてきた。

「うぇ？……えっ？……えぇ？」

いきなりの謝罪…しかも土下座付きをされ、思い当たるフシがなくて混乱する。
そしてこっちが混乱している間に、向こうは3秒程そのままの姿勢を留めたあと、すぐさま普通に酒を飲み始めた。……ええー……。

「……え？何今の？ていうか私まだ何も言って無いよ？」

「気持ちだよ。そもそも君は何も言えないだろうからね。勝手に謝っただけさ」

「わけがわからないよ」

「解らなくていいんだよ」

「……余計に訳が解らないよ……」

土下座で謝っていたわりには全く悪びれていないその態度に、少しばかり困惑する。
いや、意味が解らないよ。勝手に謝るって何…？

「まあ減るものではなしに、素直に受け取っていればいいさ」

「だから素直も何も……いいよ。よく解んないけど、解った」

未だに意味が解らないけど、とりあえずそう言っておく。
受け取るっていうか、受け流すって言った方がいいような気がするけどね。

そんな意味不明なやりとりを交わした後は、またしばらく沈黙が続く。
目の前で静かに酒を飲み続けて、時折お父さんの方をちらりと見る以外はなにもしない朝影。
こっちも特に話す事もないので、話しかけもしない。
静かなのは少し寂しいけど、こういう風にお酒を飲むのもいいかなって思い始めてきた。

「あっはっはっは！ほれほれ飲みなさい！飲んじゃいなさい！」

「楽しそうだねぇ。眠ってる馬鹿にそれに飲ませようとする馬鹿。……ちょっと殴ってこようかな」

「まあまあ。意識がないのなら別に放っておいてもいいんじゃないですか？……起きてたら起きてたでも九十九なら喜びそうな状況ですし」

「それじゃー二十三番！脱ぎマース！」

「野郎の裸なんて見たくねーんだよ！」「引っ込めコラァ！」

……静かに……。

「ああん！？ンだとオラぁ！脱ぐぞおらぁ！」

「おい、誰かアイツ止めろ！」「うわ、マジで脱ぎ始めたぞ！」「目が、目が腐る！」

「心に焼き付けろ！この俺の肉体美を！」

「黙れデブ！何が肉体美だ！」

「ああん！？俺のどこがデブだって！？解らんのか、これは脂肪の鎧！」

「自分で脂肪って言ってんじゃねえかてめえ！」

「脂肪で悪いか！だが俺はデブじゃない！」

「もう支離滅裂だ！」

……静……か……に……。

「ああ？尻が見たい？……仕方ねえな……」

「いや誰も言ってねえよ！？」

「よし、それじゃ二十三番！更に下も脱ぎｍフゴァ！」

「何見苦しいもの見せようとしてんのよ！」

「おおう、酒瓶が頭にクリーンヒット！よくやった巫女さん！」

「アンタらも！なんで誰も止めようとしないの！」

「……いや、だって……なあ？」

「おお。……なあ？」

「そうだな……うん」

「あんたらだけで通じ合ってないで説明しなさい！」

「「「正直滑稽で面白かったんで、芸としてはいいかな、と思って」」」

「そこになおれ貴様らぁああ！全員地獄を見せてやるわ！」

「ふっ……さすが元博麗の巫女……って所かね。野郎どもを相手に物怖じしないとは」

「いやあの、そんなに冷静になってないで止めないでいいんですか？……なんでちょっと楽しそうなんですか…」

「九十九が起きた時に『先代は他の男達と激しくヤッてたよ？』っ

て言う事を考えるとね……」

「鬼らしからぬ陰気くささ！」

……うん。うるさいギャラリーは無視しよう。

この空間だけ。この半径2メートル以内の空間が静かならもうそれでいいよ。

そんなに騒ぐとせっかく眠ったお父さんが起きちゃうじゃないかと心の中で考えながら、黙ってグラスに酒を注ぐ。だって止める自信ないし。先代とかマジ無理だし。

……なんで幻想郷に、グラスなんて代物が存在しているんだろうか。地下にある、あのゲームとかでよくあるような図書室といい……不思議だ。

まあどうせ『お父さんの仕業』の一言で片付くんだろうけど。

「……君は」

「……なにさ」

さっきまで静かに飲んでいた金髪が、前触れなく話しかけてくる。あっちは頃合いを見計らって話しかけてきたのかもしれないから、前触れなくってのは正しくないかもしれないけど……頃合いをはかり間違えてるよ。

なんでいざ酒を飲むっ！って時に話しかけてくるのかな。せめてもう少し待とうよ。もしくはもう少し早くしてよ。

寸止め食らわされたみたいで機嫌が悪くなってしまって、つい柄の

悪い返答をしてしまった。

「君は、自分ならばもしかしたら、なんとか出来るかもしれない。……そうは考えなかったのかい？」

「……何の話？」

「九十九の事さ。父親が死ぬと聞いて、何故何かをしようと思わなかった？愛しているのだろう？」

「……わからない」

私の態度の悪さを気にせずに、朝影は酒を口にしながら話を進める。何故、私は何かをしようとはしなかったのか。

それは、本当に解らない。

一つ言えるのは、『気分がのらないから』ということか。

「解らない？何が解らない？父の死の原因？解決法？君の心の動き？」

「……わからない」

本当に。

全部が解らない。まるで、頭が考えるのを拒んでいるかの様だ。

何も、解らない。

「……君はどうやら、君の今の心情すら解っていない様だ。ならば教えよう。教えるついでに教えてくれ」

「……なにを――」

「何故、諦めた？」

心臓が、跳ねた気がした。
私の言葉を遮り訪ねてきた言葉に、私は気付かされた。

――そうか。私は諦めたのか。

お父さんの死の理由について考えるのも、お父さんの死を回避する方法を考えるのも、お父さんが死なないように行動するのも。
お父さんが生きるようにするのも、お父さんと生きようとするのも、何もかも。
私は、諦めたのか。

自分がお父さんの死について聞いても感情があまり動かなかった理由が、やっと解った。
諦めているのならば、もうそれ以外に感情は抱きようがない。
感情は、次に繋げるためのものだ。
怒りも悲しみも喜びも。全て次に繋げることができるし、そのための心の動き。
けど諦めは違う。何にも繋がらない。何にもならない。
そもそも感情と言っていいのかも微妙な、空虚な状況の事を諦めるというのだと思う。
…諦めた時点で、私の何かは終わってしまったのだろう。

「……そっか。私、諦めちゃってたんだ」

自覚すると、自分の声が酷く空虚な響きを持っているような気さえしてくる。
まるで心に届かない、何も混もっていない声。
ただの空気の振動、そう呼んだ方がいいとすら思えてくる。

「……君は、それでいいのか？何もやらず、やろうともせず。そうやって父を死なせてしまった後、君は自分を許せるのか？」

私の呟きを聞いた朝影は、痛ましいものを見るような目で、声で問いかけてくる。
……多分、ずっとその調子で話しかけていたのだろう。私が気付かなかっただけで。
ずっと。それこそ、こうやって話しかけてくる前から。

「……許すも何もないよ。私は多分、そういう感情は抱けないと思う」

「……いいかい？君は、生きていかなくちゃいけないんだ。九十九のいない世界で、九十九のいない人生を――」

「多分」

「……」

朝影の言葉を遮って、私は言葉を口に出す。
許すとか許せないとか、そういう問題じゃないんだ。
そもそもが、問題すらないんだ。
私は諦めた。
お父さんを死なせないことも、お父さんを生かすことも、お父さんと生きることも。

「お父さんが死んだ時には、多分私も、生きてはいないだろうから」

「――――！」

――――私が生きることも。
お父さんがいない世界を生きることも、お父さんがいない世界も、お父さんのいない私も。

全部、諦めてしまっているから。
だから、許すとか許せないとかじゃないんだ。
怒りとか悲しみとかでもないんだ。

だから私は――――やっぱり、壊れているんだろう。

「……君は…」

「……あーっ！お、お父さんっ！大丈夫！？――――誰だ！？お父さんをこんな目にあわせたやつ！！」

ふと目を離していたら、お父さんが大変な事になっていた。
具体的に言うなら、液体の入った桶に顔を突っ込まれて眠っていた。
……誰だ、やったやつ。
お父さんは酔い潰れて眠っていたし、先代にあんなに色々されても全く反応がなかったことから考えて、まず自分からやったとは考えられない。
だからこれは誰かがやった事。悪意をもってか悪ノリでやったのかは解らないしどうでもいい。

ただ――――

「殺す。見つけ出して殺してやる。散々苦しませながら殺してやる。
……そうだ。何かの漫画で見たな、体の骨を端の方から順番に砕いていくっていうやつ。アレにしよう」

「「「「……」」」」

なんか一気に静かになったな。けど私の心は全く穏やかじゃないんだよ…！

「それにアレンジを加えよう。……そうだね。砕いていった端から肉を切り取っていこう。それを犯人に食べさせてみるんだ。……楽しみだなぁ」

「「「「「「……」」」」」」

「……んー？なんでみんなして震えてるの？」

え？だってこれぐらい当然でしょ？お父さんにあんなことやったんだよ？

とりあえずこの程度は普通だよね。常識だよ。

ああ、楽しみだなぁ。自分のやった事の罪の重さを知って、必死に謝る姿を見て、困惑するお父さんの姿。

可愛いんだろうなぁ。だってなんでこんな事になってるのか解らないんだしね。眠ってたんだもん。

なんでその人に謝られてるのかも、なんでその人がそんな事になってるのかも、何も解らないんだから、そりゃ困惑するよね。

あ、でもだったら犯人はお父さんに謝るとは限らないんだよね。実行してるの私なんだし。……いや、流石に解るよね？何で自分がそんな目にあってるのか。

だったら解ってるよね？謝るべき対象が誰なのか。

まさかとは思うけど、そんな事も解らないなんて――自分がどんな事をしたのかすら解らないなんて、あるわけないよね？

「もしそうだったら……そうだなぁ。はぐらかしながら最後までやっちゃおうかな？……あぁ。想像しただけでゾクゾクしてきた。必死になって止めようとするお父さんもいいなぁ……」

お父さんは優しいから、犯人（クズ）の為にも怒るんだろうなぁ。
いいなぁ。怒ったお父さんもかっこいいなぁ……興奮してきたぁ……。

「んー……でもなぁ……なんか物足りない……？？？ん？待てよ？
これ犯人楯にすればイけるんじゃね？」

お父さん、犯人の為に自分を差し出して来そうな気がするし。
だったら……うん、イけるんじゃね？最後迄イけるんじゃね？ヤれるんじゃね！？

「……顕冴ちゃん。？？？声に出てるわよ」

「……え？」

「だから、声に出しちゃってるわよ？？？多分全部」

「おおう」

恥ずかしいッ！……いやうん、お父さんが聞いてないから別にどうって事ないんだけど。
そっか…思ってた事口に出してたかー……お父さんとの新たな共通点発見！やったね！

「？？？で、やったの誰？」

『いやあの、あんな事言われた後じゃ誰も白状しないと思います……』

皆して何故だか正座で一斉に答える。

……ふむ。もしかして……

「グル？皆グルなの？……ふぅん」

「わ、私は違うわよ！？」

「私も違う！」

「同じく違います！」

『俺らも違うぜ！？』

「……直前まで君と話してたから、出来る訳がないだろう？」

即答した三人と鬼達に、冷静にアリバイを語った朝影。……ふむ、自白はしてこないつもりか……。

「そっか……自白はないのか……。今なら少し怒った程度で済ませようと思ってたんだけど……犯人は全然悪いとは思ってないって事で、いいんだよね？」

『……（うわ）』

「反省してる様ならお父さんに免じて許したけど……そんな事すらしてない犯人を、許す必要はないよね…？」

『……（うわぁあああぁあぁあああああ！？）』

本当に。

お父さんが許しても、私が許す訳にはいかないんだよ。

……残念だよ。まさか盃を交わした人が『減る』なんて……。

残念だ、本当に。

（コレは本気でまずい！正直に言え、誰がやった！？）

（私じゃないわよ！……多分）

（少なくとも、私と萃香さんは違いますね）

（となると……先代か鬼達か……）

（……ちょっと、誰か適当に一人見繕いなさいよ）

（なにぃ！？馬鹿言うな！んな仲間を売るような真似……！）

（そうだ！いくらあの変態が憎くてやったとはいえ、まだ死にたくはねえぞ！？）

（……）

（……）

（……あ、やべ）

『お前かぁあああぁあああああああ！』

何やらひそひそと話していた皆が、一人を除いて一斉に叫び。
叫ばなかった鬼は、他の二人の鬼に腕を掴まれて私の方に運ばれて来た。
……コイツか……いい度胸だ。

『こやつめの仕業だと判明しました、マム！』

「うわっ……や、やめろぉおおおおお！」

「……ほぉう……貴様、名前は何だ？言え」

「お、鬼吉であります！」

引きずられて来た鬼の名前はそういうらしい。……ふむ、なんといったっけ。
いいや。コイツの名前なんて憶える価値もない。

「そうか。ではクソ虫、１つ尋ねる」

「名前聞いた意味は！？……あ、ハイ。スミマセン……」

威勢よく食いかかって来たクソ虫君は、何故だか謝って黙ってしまった。

ふむ。黙るまでは元気がよかったな。……とても喜ばしい。

（……ねえ、なんであの娘あんなにキャラ変わってんのさ？）

（目覚めたんじゃないんでしょうか。強い怒りで）

（いくらなんでも沸点低すぎない？強い怒りって……）

外野がなにやら騒がしいが……無視をしよう。構っている暇はない。

「貴様、右腕と左腕……どちらが大切だ？」

「……は？いやどっちってーかどっちも……」

「そうか、どちらも大切か。自分の身体を与えてくれた親への感謝を大事にしているな、関心だ」

「……はあ」

「？？？そして親に深く謝罪しろ。『貴方がたの親不孝な息子は、自ら両腕を捨ててしまいました』とな」

「……はい？……ってその刀どこから……！」

（ちょ、あの娘なにやってんの……！それにあの刀……）

（……鑑枷、あんたあの娘に刀貸した？）

（いえ、ちゃんと自分で持ってますよ？）

（なんだこの急展開……って固まってる場合じゃない！）

私が不届き者の両腕を斬り落とそうと刀を振り下ろす？？？寸前に、後ろから腕を掴まれて止められた。……あ。

「なにこの状況？どういうことなのこの状況」

「？？？おはよ、お父さんっ！」

「おおう、おはよう。……で、どういうことなの？」

何時の間にか起きていたお父さんが、私の腕を掴んでいた。
起きたばかりのお父さんは、現状がよく解らないのか、腕を掴んだまま私に聞いてくる。
……私の目をじっと見たまま、真剣な表情で。……ぁ。

「なんでもないよ、おとーさん。ただの余興だよ？」

「いや余興にしちゃえらく物騒な得物を……あれ？お前さっき持ってた刀はどうした？」

「刀？ははは、やだなぁお父さん。私がそんなもの持ってる訳ないじゃない」

「……うん。まあそういう事にしておこう」

何処か疲れた様子で、溜め息を吐くように呟くお父さん。どうしたんだろ？

あ、そうだ。お父さん起きたんだし、一緒にお酒を飲もうかな。

「ねえお父さん、お酒飲も？」

「断る。酒とか正直飲んでらんねー」

「わかめ酒する？」

「人の話を聞こうか。そしてんなもんする訳ないだろ」

「……なんか、結構ドライだね。反応が」

「湿った土よりも乾いた土の方が踏みつぶすと音が出るだろ？」

「……つまりは？」

「打てば響くがまだ力が足りんぞ小娘！」

「むしろ私が打たれたい！」

「断固拒否する！」

「そこをなんとか！」

「さっきまで何やってたかを言うなら考えてやらん事もない」

「イライラしたんで誰か縊ろうとしてた」

「何があった」

「や、別に？」

「……なんか怖いから聞かない様にしよう…」

中々にチキンなお父さんも素敵です！

でも、さっきはなんで樽に首突っ込まれてたんだろう……そしてなんで顔が全く赤くなってなんだろう？

アルコールって、人肌につけたら赤く変色させる効果あったよね？

……まあ、いいか。お父さんだし。考えるだけ無駄になると思うし。

ていうかそんな事考えてる場合じゃないし。

「じゃあさ、お酒飲むのが駄目なら一緒に食べようよ！」

「ううむ……なんだかこう、喉に小骨が刺さったような違和感を感じるが……まあいいや。そういや何も食べてねえし」

「よーし！」

小腹がすいたなーと言いながら料理の置いてある机に向かうお父さんの後ろ姿を眺めていら、すっかり忘れていた用事を思い出した。

幸いというかなんというか、お父さんの向かい側に皆は正座している。

だから私は、皆に向かって笑みを浮かべたんだ。満面の笑みを。

「…………………………」

『…………！！』

それを見たらしい皆は、何故か特定の一匹を除いて何に向かってか敬礼をして。

残りは泡を吹きながら気絶した。何故か。

「…………オイ。俺今から物食おうとしてるんだが」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そんな発言をした割に、次の瞬間には何を食べようかと箸を彷徨わせている九十九の姿がそこにあった。

まあ、腹を満たそうにもいかんせんつまみとしての側面が強いので向いてないだろうけど。

小腹が空いたと言っていたので、それを満たす分にはそれで間に合

うか。
間に合いそうになくても、作る気満々な輩が少なくとも一名居るので困る事はない。

……さて。
今更ながらにそれぞれの現在位置を述べておく。
机を挟んで？？？わ、私？？？の対面に九十九と顕冴ちゃん、私の背後に皆。以上。
……やはりあれだな。一人称を使うのはどうにも気が引ける。というか単純に嫌だ。
それはともかく。
呑気にひょいひょいとつまみを口に入れていく九十九の姿を、『私達』は呆然と見ている。むしろ、呆然と見ているしかなかった。
理由は言う迄もあるまい。九十九の背後の娘の『笑み』が異常に恐かったからだ。
非常にでも過剰にでもなく、異常に。
『常識からかなり逸脱した笑みとも言えない何か』という意味ならば、それら全てを含むのだろうが。
まあとにかく恐ろしかったということだけは解ってほしい。……
目も口も、顔の部分のどれもが笑っていなかったのに、何故アレが『笑み』だと認識出来てしまったのか。
言っておくと他の連中とは違って私は敬礼などしていない？？？つもりだったのだが……。

顕冴ちゃんの『笑み』で見ているしか出来なかったとは言ったが、実際に彼女がソレを浮かべていたのは多分数秒にも満たない。
気が付いた時には、彼女は九十九の横に座ってべったりとくっついていた。
その様を見て、ようやっと私達に先程の表情を冷静に分析する余裕が生まれた訳だ。

……『笑み』を冷静になって思い返してみれば、どうなるかは想像がつくだろう。
まあ、つまりは皆の背筋にようやっと怖気が走り、それによって殆どがへたり込んでしまった訳。……言っておくが、かくいう私は最初から座り込んでいただけだからな？

九十九は何の前触れもないのに（九十九には見えなかったから当然である）崩れ落ちた皆を見て訝しげな表情を一瞬浮かべるが（顕冴ちゃんも同じ表情を浮かべているのはどういう訳か）、何事もなかったかのようにまた黙々とつまみを食べる作業を再開した。
その態度にせめて一言ぐらいかけてあげたらどうなんだと思うが、今に始まった事ではないので諦めて溜め息を吐く事で思考を終わらせる。
何時まで経っても変な所で鈍感な『変態』さんだ？？？あるいは勘がいいのかもしれないと思う。

……それにしても。

「……何が『計算できない』だ、話が違うぞ。むしろ打算だけで動いているじゃないか」

聞いていた情報とまったく違うな。
人質楯にすれば～の件など、欲望全開で計算に全力だったじゃないか。
それも倫理とか人徳とか跡形もなく吹き飛ばした上での。
材料が正しく考慮されていない計算しかできないというのならば、結果として計算できないと言えるのかもしれないが……まさか『既に頭の中が特定の計算でいっぱいなので、それ以外の事は深く考

えられない』等という笑えないオチじゃないだろうな。
馬鹿な考えだと笑って情報源を思い返？？？そうとしたが……駄目だ、全然笑えない。余計にこの考えが正しいような気さえしてきた。

何しろ情報源が情報源だし、対象が対象だ。
父親が死ぬと聞けば、自分の命を含めた一切合切を諦めてしまうようなやつだ。
頭の中が既に『それ』で一杯だと言われるても、むしろ納得以外何の感情も浮かばない。
正直驚きを通り越して気持ち悪いの域に達しているが……言わぬが花だろう。…ちょっと違うか。

……生きてはいない、ね。
『その時』の事を考えてみれば……成る程、確かに『生きてはいない』だろうね。

「……なんか微妙な味だな。今ひとつ足りないような……なんといえばいいんだろうか」

「……あ、それ残りカスっていうか食べ終わった後っていうか……」

「？？？この席、誰が座ってた…？」

「えっと……確か先代？？？って皿ごといったぁあああ！？」

「（ガリボリゴックン）……ふう。余は満足じゃ」

「いやなにさその口調。そして微妙な味じゃなかったの？」

「何をおっしゃいますやら。たっぷりと染み込んだえきすその他がまことに味わい深い、大変美味な一品でしたよ？まさに魅惑のはーもにーでありました。？？？さて、では少し席を外しますね」

「ひらがなで書かれた字面で見ると『エキス』周辺の部分に『唾液』と『エキス』と『キス』と『裾』っていう単語をそれぞれ別に見る事ができるね！流石！」

「いや、流石にそこまで意図したつもりはないんだが？？？最初の二つは否定しない」

「否定しないんだ……ところで此所に某博麗神社の巫女装束がある訳だけど……いっとく？」

「……普段ならツッコミをかまして断る所だが、しかし困った事に今の俺には抗う術がない」

「お父さんに足りないのはそれだけじゃないと思うんだ……」

「ほう、例えば？」

「情熱思想理念……じゃなくて。まあぶっちゃけ理性が足りないよね。足りないってか存在してるの？」

「こんなアホみたいな会話しつつもさっきの事とか今お前の手元にある物をみているだけで息子が元気百倍になる程度には存在しているな」

「つまりは申し訳程度にはあるってことですね？」

「あるいは人並みにはあるがえろすには勝てなかったよ……という事だな」

……そのあまりの内容に口を挟む事すら憚られた変態共の会話は、そこで一旦落ち着いた。

そこで安心できるかといえばそうではなく、会話は落ち着いたが態度や内面はどう見ても落ち着いた様子ではなく、なんとなく嫌な予感がした。

「……さて」

「……うん、解ってるよ」

「そうか……ここで言うべき事はただ1つだな…」

抱いた嫌な予感が当たったのかなんなのか、よく解らないが表面上は冷静に何かを解り合っている二人。

互いの相手の目を見て頷き、一拍置いて開かれた口から出て来た言葉は？？？

「「？？？『速さ』は美徳ですよね！」」

そんな、色々と不安な感情を抱かせる言葉だった。

そして言い終わった瞬間、二人は揃って外へ出て行った。……ふむ。

「……緒三方。止めなくていいのかな？」

「……止めたいのはやまやまなんだけど……」

「果たして止めていいものやら……」

「いや、止めなくちゃいけないんじゃないかい？」

「……そういえば、顕冴『博麗神社の巫女装束』って言ってたような……アレ誰の？」

「さあ……そこの地味に嬉しそうな表情を隠せていない先代の……という訳ではないでしょうね。微妙に意匠が違いましたし」

「じゃあアレは霊夢のかね。……いいのかな先だ？？？もう行ったか……」

鬼娘が振り向いた時には、すでにそこに巫女服女の姿はなかった。ずっと眺めていたこちらの目でも見逃してしまう程の素早い動きだったと、巫女服女の軌跡について補足しておく。

……つっこむのが遅れたが、それでも今更ながらにつっこませて貰おう？？？気持ち悪いよ。

何なんだろうかあの父娘。なんであんなに性的な面で息ぴったりなんだろうか。躊躇いなどは存在しないんだろうか。気持ち悪いな。

「自分のじゃないと知った時の表情の変わりようが凄かったですね……」

「そもそも嬉しそうにするっていうのはどうなんだろうね？着るの多分顕冴ちゃんだよ？」

「あー……冷静に考えて見るとなんで私も『気持ちは解らなくもない』とか考えてたんだろう……？普通に気持ち悪いよ……」

「言っておきますけど、私は別に雰囲気に呑まれていたという訳ではありませんからね。？？？ただ九十九が平常運転でしたから止める必要もないかと考えていただけでして……」

「駄目だこいつらもうどうにもできない……」

鬼娘の言う通り、もう矯正できない所まで浸食されてしまっている鑑枷だった。

……かくいう私も、当の鬼娘も、どうにもできない所まできてしまっているんだろうなぁと思う。

何時ものことだと諦めてしまっているあたり、言い訳できない程に染まってしまっているのだろう。

そこは自覚している。ああ、しているとも。……あまり忌避感を感じていないという事実には、認めたくないものがあるが。

……忌避感。

そういえば、話によると顕冴ちゃんは『ここの』ではないにしろ、九十九の実娘らしい。

確か記憶を失っていて、本人はその自覚はないのだとも。

……いや、だからと言ってアレは……胸に秘めておこう。
思い出さなければ問題ないさ。……似たようなものだし。
まあ、こちらはむしろあっちが息子というか弟というか、そんな関係なんだけれど。
どっちみち近いということには変わりないし。？？？ぶっちゃけこちら側は何の問題もないという事が救いと言えば救いで、問題といえば問題だ。
だからまあ、彼女の気持ちは解らなくはない。解らなくはないが……まあ、いいか。
彼女がそれでいいのならば、いいのではないだろうか。
真実を知るのは片手で数えられるだけの数しか居ないし？？？彼女は多分『前』からそうだたのだろうと思うし。
ちなみにそうだったという確証はないが、確信はある。
そうでなければ愛する人に「お父さん」等とは言わないだろう。

……そういえば彼女は以前口調が違っていて、九十九の事も「お父さん」ではなく「九十九」と名前で呼んでいたな。
男の様な口調で？？？というよりはむしろ、九十九の様な口調と言った方が何故だかしっくりくるのは、つまりはそういう事だからだろうか？？？九十九をお父さんとは呼ばなかった。
何が切っ掛けで、彼女は今の様になったのか？？？ああ、そうだ。
何でも何も原因は私だったか。
自分のしでかした事なのに、すっかり忘れてしまっていた事に苦笑を浮かべる。
今迄ならばともかく、これからはしっかりと憶えていかないと支障が出るか…。反省しよう。

「……これから、か……」

「どうしたの？そんなに憂鬱そうな顔をして……らしくないな。ええと……」

「……なんでもいいよ。夜鶴以外ならばね」

「じゃあ夜鶴で」

「君は本当に変わったな……昔はもっと素直だったのに」

「昔って何時の話なのさ。？？？アンタも変わったよ。昔は本当に、傍若無人ってのがピッタリなやつだったのにさ」

「傍若無人とは酷いなあ。流石にそこまで人でなしじゃないよ」

「私が具体例を挙げてないのに『そこまで』等と言うって事は、自覚はあるって事なんじゃないか？」

「本当に素直じゃないね君は……否定はしないよ」

「そういうと思ったよ」

けらけらと楽しそうに笑う鬼娘。それに釣られて薄く笑みを浮かべる。

伊吹萃香。

彼女とこうやって正面から話すのは、何年振りになるだろうか。……というより、正面から話した事なんてあっただろうか。

あの頃はまだ彼女は『子供』だったし……初めてという事になるのかな？

そう思えば感慨深い……様な気がする。気がするだけだけど。

「……何時の間にやら、随分と時間が経っているものだね…」

「うわ、年寄りくさっ！いや本当に年寄りなんだろうけどさ」

「失礼だな、君は。そういう所は変わってないね」

「性分でね。嘘は嫌いなんだ」

「私も嘘は嫌いだが、たまには取り繕ったりしたらどうだい？」

「わぁ！おねーちゃんきれー！わたしもおねーちゃんみたいになりたーい！」

「……変なキャラになれという訳ではないよ。……結構似合ってたから、それでいけばいいんじゃないかな？」

「断る。誰が好きこのんで幼稚な言動なんかとるか」

「……昨夜『コト』の最中に『おとうさ…』とか言いかけた奴とは思えないな」

「んなっ！？なんで知って……じゃなくて何を言ってるのかなこいつは！そんな訳ないじゃないか！」

「全く、九十九は地味に女運がないな。寄ってくるのは近親上等や束縛願望持ちとは……変態ばかりじゃないか」

「誰が近親上等か！」

「まだ君が近親上等だとは言ってないのだがね……。類は友を呼ぶというのか、朱に染まるというのか……」

「人の話を聞いて！」

「なんということでしょうか。あの萃香さんが子供扱いです。…そして私はまた空気扱いです。ああ悲しい！」

いそいそと九十九の分のつまみをにこにこして確保しながら言っても、全然悲しんでいる様には見えないよ。

……鑑枷、ね…。

彼女ともまた、久々に会って話をしたな。本当に。

随分と丸くなったようだ。人の目を見て話さないのは相変わらずだが。

……九十九が大好きなのも相変わらずか。いやはや、九十九は本当にアレだな。

……この子がここにいるのは、『もう一人のアレ』の計画かな？

何を考えて隠して、今こうして晒したのかは知らないが、用心しておく必要は……もう、ないな。

今回は仲良く出来るようになればいいかな。

「……初めてこうして二人が並んでるのを見たけど……本当にそっくりだね。髪の色――と胸の大きさ以外」

「……言っておくが、こちらが普通なのだからね？あちらが盛ってるだけだから」

「盛るとか誤解を招く様な言い方は止めてくださいな。これは正真正銘の天然モノです。……ああ、僻みですか。相変わらず気にな さっているのですね――本当に小さいですね、色々」

ニヤリ、と蔑むような視線を向けてくる。

……前言撤回だ、やはり仲良く出来る訳がない。

「言ってくれるじゃないか偽妹め。変わらず性格が悪いな――そんな性格だから、いつまでも九十九に好かれないんだよ」

「性格の事をあなたに言われたくはありません！それにあなたも九十九に好かれていないじゃありませんか！好かれないどころかドン引きされているじゃありませんか、この貧乳！」

「貧乳は関係無いだろう？……さっきから胸、胸としつこいな。……まあ、自分が勝っている部分がそれだけなのだから、拘るのも無理はないか」

「なんとでも言いなさい。そのたった1つで充分なのですよ――知っていましたか？九十九って、胸が大きい方が好みなのですよ？……まあ、今更言うまでもありませんけど」

「……言う必要がないのなら、何故言ったのかな…？」

勝ち誇るように突き出された、その胸部を抉り取ってやろうか。

そう思ったが、人前なので堪える事にする。

え？人前じゃなかったらどうするつもりだったのか？やだなぁ、冗

談に決まっているだろう？
そんな事本当にする訳ないじゃないか。まったく。

「それこそ言う必要はないでしょう？解っている筈ですもの？？？
九十九と親しい人物は８割方巨乳ですしね」

……事実だ。
何故だか知らないけれど、九十九の周りには胸の大きいモノが多い。
九十九と割と縁が深いということは必然的に歳もかなり重ねているということなのだが……そういう輩は殆ど決まってと言っていい程巨乳だ。
一体何度千切り取ろうかと思った事か……ああ腹立たしい。
大体だな、アレは本来生物としては必要ない進化を遂げた部分であり、まったく必要のないものだと思うんだ。
動きを制限しかねないモノをぶら下げるなんて、明らかに生存競争から逆方向に向かっているじゃないか。
……いや、個として考えた場合ではなくて種として考えた場合は、方向性は間違ってはいないのか…？

「じゃなくてだな！！？？？ああ、その『何いきなり叫んでるの？馬鹿なの？死ぬの？』な目をするのは止めてくれ。脈絡無く叫んだ事は反省してるんだ」

「……さて、では九十九の周りが巨乳に囲まれている事に対しての反論がないと言う事は、つまりは負けを認めるという事ですね？」

「うぐぅ……！」

負けって何だ。何に対しての負けだ。
言っておくぞ。別に胸が小さいからって負けたとは思っていないぞ。
大きい奴を見るともぎ取ってやろうとか千切ろうとかなら幾度も考えた…むしろ考えなかった事はないが、悔しいと思った事は無いぞ？……嘘じゃないよホントだよ？

悔しいが、確かに九十九の周りの女どもは胸が大きい輩が多いのは事実……！何か、何か反撃の糸口はないか！？
そう思って周りを見渡すが、目に入るものはこちらを変な目で見てくる輩と酒を滅茶苦茶に飲んでいる鬼娘？？？鬼娘…？

これだ！

「ふふふ……確かに九十九の周りは巨乳ばかり。それは事実だ、認めよう」

「やっと認めましたね……そう、あなたの負けなのですよ？」

「何を言っているんだい？認める？何を？……むしろ君の方こそ認めるべきなんじゃないかな？」

「……何を……」

困惑して眉を顰める偽妹に返事をせず、その横に座って酒を飲んでいる鬼娘の肩を抱き寄せる。
それに驚きじたばたと鬼娘は暴れるが、構っていられない。

そんな事より、目の前のこいつに示してやらなければな…！

「忘れたのかい？？？？彼女こそが、九十九の正妻（いちばん）だと言う事を…！」

「……！」

「ははは！確かに九十九の周りに巨乳の女性は多い！だがそれだけだ…！結局アレの心を射止めたのは巨乳では無く、貧乳（われわれ）なのだよ？？？！」

「ク……ッ！何であなたが誇っているのか解りませんが、確かに事実です……！」

「アハハハハ！そうさ！負けを認めるのは、君たちの方さ……！」

愉快！実に愉快だ！
地に膝をつき、目の前で屈したこいつの姿を見る事がこうも気持ち良いものだとは！

「ふ、ふふ……アハハハハハ！」

「く……くぅ……ッ！許して下さい……私は、私は……勝てなかった……ッ！」

「……ねえ、お父さん。なんだかお父さんがロリコンみたいになってるんだけど」

「否定出来ない事が辛いが……別に体の一部で好きだとか決めた訳では無いぞ？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

騒がしい宴の様子を眺めて、溜息を吐く。

「諦められると、困るのよねぇ」

彼女の暢気に酒を飲むその姿には、まるで罪の意識というものが感じられない。
今迄の自分の所行を、全て無かった事にしたかのような態度。
別にその所行も、その態度も、責めるつもりはない。
ただ、そこで止められると困る。

「解っているのかしら？彼女が諦めるという事が、どんな結果を生むのか」

父の死で『全て』を諦めた彼女は、おそらくは自ら命を絶とうとする。
絶とうとして、どうなるのかが問題だ。

「まず死のうにも死ねないでしょうね。それが『アレが死ぬ』という事だもの」

本来ならば他の何かが引き継ぐ等という事はなく、全てに均等に割り振られて終わるはず。
が、彼女がそこに居るのなら。手順を踏んで存在するのならともかく、イレギュラーな形でここに現れた彼女が存在した場合は。
死ねないと解った、何もかもを諦めた彼女は、一体何をするのか。

「諦念の果てに見た景色は、果たして色を持つのやら」

解ったものではない。
一番怖いのは邪心を持つ者でも、諦めを持った者でもない。
何も持たない者が、一番怖いのだ。
諦めすら捨てるだろう彼女は、一体何を壊すのか。
指向性を持たない力は、ただの天災と変わりない。ならば、予期出来る天災は未然に防ぐに限る。

「……諦められると、困るのよねぇ……」

先程と同じだが、重さの違う言葉を吐く。
諦めさせない為にも、この茶番劇を続けて貰わなくては。

決めていた事を陰鬱な気分で確認しなおした彼女は、溜息を吐いた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

胸の大きさでからかってきた輩を、胸の話で撃退した事に少しどころの達成感を覚えて。
ついでだから鬼娘が飲んでいた酒をひったくって飲み干し。
それを咎めてくる鬼娘の言葉を聞き流しながら、九十九とその娘が仲睦まじく飲んでいる光景を見つめる。

「………まったく」

これで、いいのだろう。
結局の所、今迄やってきた行動の全て、それらを起こそうとした根幹となった『想い』は。
『彼を生かす』事ではなく、『彼を幸せにする』事なのだから。
何時の間にやら目的が手段と入れ替わっていたが………多分、終わりはこれでいいのだろう。

傍らに座る、一人の女の姿を見る。
彼女は、私に出来ない事をやってのけた。例えそれが何人目か（・・・）の事だったとしても、私に出来なかった事には変わりない。
それに、今回は良いものを見せて貰った。
今迄は「私だけを～」だとか、そういう普通の結末しか見た事がなかったが。
今回ばかりは、毛色が違った。
何人も娶る事を、黙認どころか推奨するだなんて……聞いた事もな

い。
だからこそ。
聞いた事もない結果だからこそ、相応しいのかどうかは別として、
これでいいのだと思う。
一応、彼女には礼を言わなければなるまい。

（……諦められると、困るのよねぇ……）

「……！」

そう思って、傍らで酒をせびってくる女に礼を告げようとした時だった。
頭の中に、重苦しい声が聞こえたのは。
……この声は？？？スキマか。……考えるまでもなくこんな事出来るのはスキマぐらいか。

（困るのよ、そこで止められると）

（人の頭の中に話しかけないでもらえるかな？）

（あら？人に聞かれても良いと言うのなら直接話してもよろしくてよ？）

（良いと言ってもどうせ「もう直接頭に話しかけてるじゃない」とか言うんだろう？）

（解ってるじゃない）

（……もう良いかな？で、何の話だい？）

頭の中に直接響いてくる声に返しながら、まさかと浮かんだ焦りを隠す。

頭の中に直接と言う事は、考えるだけで伝わるが、考えてしまうと伝わってしまうということでもある。

まあ、気付いているから声をかけてきたのだろうから、隠しても無駄だと思って諦めたが。

……だが、どうして気付かれた？対処はしてきた筈。向こうからは入れない様にしっかりと線引きをしたし……。

（スキマと言うモノは、どこにでもあるし、どこにでもないモノなのよ。あるからスキマと言うし、無いからこそスキマと呼べると言えるわ）

（……相変わらずの反則っぷりだ。対策は無意味だったと言う事か……）

予想通りに知っていたらしく、言及する事はなく、また予想通りに考えていた事に返答をしてきた。

だが、それならば何故今更なのだろうか。……止められると困る……。

（無意味ではないのでしょうけど、私に意味は成さなかった。それだけよ）

（…自慢話はいいから、本題に入ってくれないか？……処罰は甘んじて受けよう）

（処罰？何に対してかしら？貴女のやってきた事を、私は咎めるつもりはないわ？？？ただ、ここで止められると困るのよ）

（……何が狙いだ）

（嫌ね、そんな解りきった事を聞かないでくれるかしら？私が動く理由はただ一つ）

（……そうだった。君は、そんな奴だったね）

（解ったのならば続けなさい。さもなければ？？？壊すわよ？）

凍えるような冷たさを持った声が示す対象は、言うまでもない。解りきっている。

……ならば、私がやるべき事は決まっている。

（……続ければいいんだね？）

（そうよ。今迄やってきた事を、今迄と変わらずに、今迄通りに）

（何時まで続ければいいのかな？）

（それは貴女が決める事でしょう？）

実に痛烈な皮肉だ。
終わらせない為に起こした行動は、何時終わらせるかはこちらが一方的に決める事ができ、また止める事が出来る。
そして、それを決めるのはスキマだろう。
言葉に反して、私に決めさせる気など毛頭無いのだ。この胡散臭い妖怪は。

「……残念だな。今回は、特に気に入っていたのに」

「……？何を言って……」

頭の中にでは無く、声に出して傍らの存在に告げる。
……せめて次は、普通に、変わらずに生きてくれ。

今迄何度も考えた事を心の中に反芻させながら、行動に移す。
必ずしも行う必要はないが、負担が少ないので周りを眠らせる事にする。
まずは隣の鬼娘を眠らせて、次に眠らせる対象を探して九十九の方に振り返ると？？？こちらを睨み付ける顕冴ちゃんと、目が合った。

「……裏切るのか」

「……裏切り？何の事かな？」

「お前はそうやって、裏切ってきたのか。何度も何度も」

「……君は」

「そうやって何度も、信じてくれた九十九の気持ちを、踏み躙ってきたのか！」

彼女は九十九を抱き締め、私を睨んで叫ぶ。

激昂して叫ぶ顕冴ちゃんを、驚いて確認する者はいない。もう既に、他は眠らせてある。

……やはり、君は九十九の為に怒るんだね。自分では無く、他の大勢の人々の為でもなく。

私のやろうとしている事……やってきた事を知っても、やはり君は九十九の為だけに怒るのだ。

「……知った所で、何も変わりはしないさ」

「知りたくもない！お前のやってきた事なんて、お前の気持ちなんて、考えたくもない！」

「……そうさ、それでいい。結局の所行き着くのは『相手を理解するなんて事は不可能だ』という事実だけ」

「……それが、お前の答えか」

「ああ、そうさ」

「理解されないからと、理解させる事を止めた。それが、お前の答え」

彼女は九十九を優しく横たえ、どこからか刀を取り出して構える。
そのどこまでも九十九優先な姿に苦笑しながらも、彼女に告げる。

「……残念、時間切れだ」

「……待てっ！俺はまだ？？？？？！」

告げると共に溢れ出す光の奔流は、彼女の言葉も掻き消して全てを飲み込む。
その瞬間に思ったのは、何という事は無い。またしても忘れてしまっていた事だ。

「？？？そういえば」

そういえば彼女が自分の事を『俺』と呼び、九十九の事をお父さんと呼ばないのは。
何時も決まって（・・・・・・・）、最初の頃だけ（・・・・・）だったな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

気が付けば、自分は九十九と将棋を指していた。
……いや、気が付けばって何だよ気が付けばって。……集中切れち

ゃったのかな……？
改めて盤上を見る。
こちらの駒は玉に歩が二つ。それだけ。相手は確認するのが面倒臭くなるほど沢山。
……無理！

いやいやいや、そう始めから諦めていては駄目だぞ自分！諦めは何にもならない！

「はぁ…何で俺まで…。近くっつっても結構離れてただろ」

そう言いながら、九十九が一手打ってきた。……まだこれ以上追い詰めるつもりか…！
思いつつも、九十九の言葉の意味を考える。
言っている事は解る。自分だけがゆうかりんに追いかけられていた筈なのに、何故関係の無い九十九まで巻き込まれてこんな所で将棋なんぞやっているのかという事だろう。
……関係無いと考えている所は少しアレだが、実際今回は九十九は直接関与はしてない。
逃走劇に偶々巻き込まれたにしては、九十九は離れた場所にいたし。
……まあ、そこまで意図して走ったのは自分だけど！

「ああ、それはあれだ。つい俺がお前の近くに行って、お前を引っ張って来たからだろう」

一応九十九のぼやきに対する答えは持っていたので、一応返事はし

ておく。
辛い事は二人なら半分さ！だから巻き込んだ、悪いか！……悪いよねスミマセン。

俺の言葉を受けても九十九は怒るという事はなく、しばらくは駒を動かす音だけが響いていた。
そうやって次の一手に頭を悩ませ……いやうん。ぶっちゃけそれよりも九十九の反応の無さの方に意識が行っていたときに。

「テメェのせいじゃねぇか！」

不意に、九十九が怒鳴り声を上げた。……今更か。

「気にするな。俺は気にしない」

「気にするわッ！何で俺まで巻き添え喰わなきゃなんないんだ?!」

なんでって……九十九だけ知らんぷりってのは悲しいじゃないか。
九十九が予想とは遅れて反応した事に、それでも若干安心して、将棋の一手を考える作業に入る。
……いやでもコレどうするんだ……？どうやったら勝てる…？

「つかお前、それからはどうやっても勝てねぇだろ、ｊｋ」

「いや、俺は勝ってみせるっ！」

「王と歩だけでか」

心底可哀想なモノを見る目で見てくる九十九に、意地だけで言葉を返す。

盤上の自分の駒は玉と歩二つ。手持ちの駒は歩一つ……。

……駄目だ！どうやっても無理だろコレ！い、いや！諦めるな！まだ諦めるのは……！

大体何なの？なんで歩だけが三個残されてるの？どことなく作為があるような気がするのは気のせい？

「ほれ、そんなもんいいから、見つかる前に言い訳考えなさい」

「嫌だ。勝負つくまで考えない」

「じぁあほら、早く打ちなさい。待っててあげるから」

「お前はお母さんか」

……仕方無い、駄目で元々。こうなったら起死回生の一手を！

盤上に駒がないなら増やせば良いじゃない！いや歩だけど！

そう言って自分の繰り出した、自分の最後の一手は。

「お前、それ二歩な」

「あ」

残念ながら、反則らしかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

これは、蛇足では無い。
主人公の意志を全く介在させない、物語とも呼べない何か。
敢えて言うのであれば。物語と物語の合間の、取るに足らない幕間の余興。
もしくは、節を分かつ幕引きである。

番外　節分編（後書き）

シリアス（笑）
助けて九十九さん！馬鹿どもが止まらないよ！
後のせサクサクおいしいです（＾ｑ＾）

さて、『王』と『玉』と『歩』。
それぞれは何を指しているんでしょうね。
反則は、何故行われると罰せられるのか。それは多分有効過ぎるからだと思うのです。
効果が良い方か悪い方かは解りませんが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1774l/

gdgd東方鏡想曲

2011年11月16日22時26分発行